

太閤転生伝

ミッツ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

かつて戦乱の世に生まれ、日ノ本の頂点まで駆け抜けた男がいた。その魂は死して天に昇ること無く、もう一つの戦国へと転生する。これは夢を越え、夢から覚めた男が、再び夢を追いかける物語である。

目次

夢のまた夢	1
尾張のうつけ姫	15
心配御無用	37
調略せし者	50
始まりの戦い	64
汚れなき手	73
愚か者の末路	86
蝮の国	100
駿河の鬼	115
奇襲	127
うつけ者ども	138
戦場に石雨降りて	152
序章の終わり	167
些事たる仇	185
臨濟寺の会談	198
木下家の人々	211
美濃はいまだ遠く	227
近江喜太郎	240
運命の名	261
戦支度	276
浅井長政の苦難	289
浅井家の現状と武士の本質	300
汚れた掌で奪いし心	310
龍の父子	324

蛇を越えし龍	336
読み合い	348
愚将の生まれた日	361
夢でさえ見れぬ国	375
天下布武	397
閑話 犬と雲の子	415
閑話 今川の生きる術	431
閑話 とある姫武将から見た天下人	444
新たなる使命と新たなる出会い	451
伊勢の攻略法	467
伊勢志摩大文化祭	479
獅子の王と良晴の野望	494
虎の侵軍	503
生きるため	521
囲まれた虎	537
真田家と徳川家の場合	552
浅井家と北条家の場合	565
野望を継ぐもの	578
湘南から来た男	585
城攻めの極意	599
箕作城の戦い	611
上洛前夜	625
閑話 毛利家の日常	641
真の合理主義者	651

夢のまた夢

時は慶長三年八月の十八日。

日ノ本の政の中心地は京の伏見に聳える城の一室で、一人の男がその命を終えようとしていた。

男の名は豊臣秀吉。

百姓の倅から天下人にまで登り詰めた自他共に認める日本一の出世男である。

だがそれも今は昔。

かつて全身から溢れんばかりだった活力は見るともなく、今は布団に仰向けとなり虚ろな表情で天井を眺めている。

横では北政所をはじめとした親族や、治部少を筆頭とした家臣達が必死に話しかけてくるが、その声さえ満足に聞き取れなかった。

（ああ、口惜しや。我が命運もこれまでとは…せめて、拾が元服するまで生きたかった。）

まだ幼い我が子を思うと死んでも死に切れぬというのに、もはやそれは叶わぬと悟れるほど病魔は秀吉の体を蝕んでいた。

そう思った時、ふと自虐的な気持ちが芽生えた。

（可笑しきことだ。百姓の倅から、この国の誰もが首を垂れる立場となったというのに、死期を悟って思うことが我が子の生末とは。）

国を、経済を、万人を動かせる位置にまで上り詰めた男の最後の願いは国家の安寧等ではなく、市井の凡夫が末期に思うことと大して変わらぬものであった。

（いや、所詮儂はその程度だったのかもしれない。元が百姓の子倅じゃ。天の頂を預かるには少々荷が重かったのかもしれない。）

思い返せば実に数奇な人生だった。

百姓の長男として生まれるも継父に嫌われ寺に預けられ、寺を飛び出し職を転々とし明日も知れなかった瘦せっぼっちの醜男が、この国の頂点に立つ事が出来た。

これ程までの波乱万丈の人生は、この国の歴史上類を見ないだろう。

無論ここに至れたのは己に才覚があつたからだと自負しているが、同時に類希なる幸運に恵まれたのは本人も認めるところだ。

そして、その最初の幸運は一人の人物との出会いであると秀吉は確信している。

(思えば儂の人生は信長様に会つたからこそ始まった。あのお方と出会えたからこそ儂は夢を持つことができ、その夢を叶えるために必死になれた。だからあの方がいなくなった時、儂の夢は終わったんじゃない。)

夢が終わつた後、新しい夢を持つとうと思ひ、それまでの夢を忘れようとするかのように奔走してきた。

だが所詮それは仮初めの夢だった。

生涯唯一の主君と定めた人が見れなかつた夢の続きを自らが背負うのだと意気込んだにも関わらず、結局夢は中途半端なところで立ち止まつたままである。

この事をあの方に知られば叱責だけでは済まされぬだろうなあ、と思ひながらも、男の心にはそれをどこか楽しみにする気持ちが生まれていた。

(ああそうか。あの世に行けばまた顔を合わせなければならぬのじゃなあ。まこと恐ろしきことよ。)

心でそう呟きながらも、胸中にあつた死への恐ろしさは薄れていった。自然と死を受け入れる心持になつたともいえる。

(人間人生五十年、そう思えば十分生きた。信長様、あの世で猿を存分にお叱りください！)

その日、一つの巨星が地に落ちた。

誰からも見向きもされない身分から誰もが仰ぎ見る頂まで駆け抜けた男は、多くの人から見送られ静かに息を引き取った。

そして日輪のように地から天に上り、地に沈み行くが如し人生を送つた男の死を切つ掛けに、日ノ本の国の歴史は大きな変革期を迎える。

されどそれはまた別の話。

これより始まるは、一人の男の夢の続き。いや、夢のやり直しの物

語。

天に上り詰めた男は再び始まりの地に舞い戻り、改めて夢に向けて駆けて行く。

しかし、男はほどなく知ることになるだろう。

やり直しの人生が、これまで歩んできた世情とは少し違う世情であることを。

そして、本来の歴史では存在しないはずの、いくらかのイレギュラーがあることを。

ふと、背中に冷たさを感じ秀吉は目を覚ました。

目の前に曇天が広がり、鼻腔に土と草の匂いが入ってくる。

ゆっくりと体を起き上がらせると、周囲は草木の生い茂る森であった。無論、このような場所で寝ていた記憶などない。

(どうということじゃ。儂は確かに伏見城にいたはずじゃ。もしやここがああの世なのか。)

最後の記憶が正しければ自分は死んでいたとしてもおかしくない。だが、どうにも秀吉にはこの場所がああの世とは思えなかった。

単純にあの世というにはあまりにも現世と代り映えしないというものもあるが、どこか懐かしさを覚えさせるものが風景から感じられたからだ。

「あつーよかった、おっさん目を覚ましたんだ。」

周囲を探ろうと立ち上がった秀吉の背後からそのような声が聞こえた。

振り返れば珍妙な格好をした少年が、絞った手ぬぐいを手に立っていた。

南蛮風とでも言うべきだろうか。上下ともに黒で合わせた上衣と下履きは利休あたりならば好みそうな組み合わせではあるが、羽織の正面を開き白地に南蛮文字が書かれた着物が見えるようにした着こなしなど初めて見た。

前田何某も顔負けの傾奇っぷりである。

「小僧、お主何者であるか？」

「ああ、俺は相良良晴ってんだ。なんか気が付いたら知らない場所にいてさ、人がいないか探していたらおっさんが倒れてるのを見つけたんだ。全然起きないから心配したんだぜ。ほら、これで顔でも拭きなよ。」

「…うむ、忝ない。」

秀吉は良晴という少年が差し出した手拭いを受け取り顔を拭いた。適度に水気を含んだ布は思いのほか柔らかく、顔と首筋を拭えば涼けさが秀吉の混乱を僅かばかり落ち着かせた。

そうして改めて良晴を見る。

先程からの話しぶりは親し気、ともすれば馴れ馴れしく思われかねないものであったが、不思議と悪くは感じなかった。

少なくとも気を失った見知らぬ人間から身ぐるみを剥ぐどころか、気遣うだけの善性があることは確かである。

加えて珍妙だが仕立ての良さが傍目にもわかる服装や、質の良い手ぬぐいを遠慮なく手渡す気質などから、かなり裕福な上に人の良い人間性が窺えた。

おおかた豪商の次男か三男か、と見立て秀吉は手拭いを返した。

「その方、相良殿と申したか。重々なる気遣い感謝する。この恩ははずれ。」

「いいってことよ、別にそんな気にしなくても。それにしてもおっさん変わった格好してるな。映画の撮影か何か？」

「変わった格好じゃと…」

お前が言うのか、と怪訝に思いつつ自身の体を改めた秀吉であったが、すぐに驚きの声をあげる。

「なんじゃこれはっ！何ゆえ儂は足軽装束などしておる。」

「いや、何でって聞かれても…」

困惑気味に良晴は答えるが、秀吉はそれ処では無い。

服装の次に今度は体の変化に気が付いた。

末期の座において体を起こす事すら叶わなかったのが、今は何の苦も無く立ち上がる事が出来ている。

四肢は痩せつぽうちであるものの、枯れ枝の如く衰えた病床のそれ

と比べれば活力に溢れており、顔に触れば多少のかさつきはあれど若き特有の張りを感じられた。

「…相良殿、儂の歳はいかほどに見える。」

「おっさんの歳？うーん、40まではいつて無いと思うし30から40の間くらいかな？つてか、何でいきなり会ったばかりのおっさんの年齢を予想しなきゃいけないんだよ。」

至極当然のツツコミする良晴であったが、秀吉は無表情となり己の思考に没頭していた。

（この小僧が嘘を申しでないとなると、儂の体が若返っていると云うことになる。これに足軽装束と妙に見覚えのある風景を合わせて考えると、もしか、儂は…）

秀吉が一つの結論にたどり着こうとしていたその時、何かが爆ぜる乾いた音が森の奥より聞こえた。

二人の注意が音の聞こえた方へと注がれる。

「…今の音って。」

「…恐らく種子島じやろう。」

「種子島って、もしかして鉄砲!？」

「それ以外になかろう。兎も角、確かめる他あるまい。」

「あつ！待ってくれよおっさん!」

秀吉が音の聞こえた森に入って行くと、慌てた様子で良晴が後を付いて来る。

歩を進めて行くと先程と同様の破裂音に加えて、人の怒号と金属のぶつかり合う音が聞こえ、胸の鼓動を早くさせる。

程なく森を抜けるとそこは小高い丘となっており、眼下には平野が広がっている。

そして、その平野で二人の目に飛び込んできた光景は、

「…なんともはや。」

「これってまさか、本物の戦…」

平野において二つの軍勢が激しく争っていた。

槍が振るわれ、弓が飛び交い、火縄銃の轟音が響く。

至るところで命のやり取りが行われ、無数の物言わぬ軀が倒れ付し

ている。

そんなリアルな戦場を初めて目にした良晴は言葉を失い、目の前の光景に釘付けとなった。

一方で秀吉の方は、良晴とは別の理由で戦場を凝視していた。

(あれに見えるは今川の家紋。それに対するは…織田の木瓜紋で間違いない！やはり体が若返っただけでは無い。儂は過去に…)

「漸く見つけましたぞ、わが主君よ。」

秀吉の予想が確信に変わろうとした時、二人の背後から幼子の声が聞こえた。

「何奴っ！」

「なんと！拙者をお忘れですか!？」

森から現れたのは、これまた珍妙な女であった。

歳は十を漸く越えたばかりか。一見すれば忍装束と言えなくは無装束であるが、えらく丈の短い下履きを履いており、色白な足が剥き出しとなっている服を着た背の低い女な子である。

顔は口許を隠しているためよくわからぬが、ゾツとするほど赤い目と長い睫毛が印象的である。

女は男の言葉にシヨックを受けた様子であったが、気を取り直すように咳払いをした。

「拙者は川並衆棟梁にして木下藤吉郎氏が家来、はちしゆかぎよえもんでありますゆる！」

「…いや、お主のような珍妙なおなごとは初めて会うんじやが。」

「なんですとっ！」

秀吉がきつぱりと言い放つと、女は先程以上に驚愕し涙目になる。

「いや、ちよつと待って！木下藤吉郎って、おっさんもしかして豊臣秀吉かよ！」

その一方で先程からおっさん呼ばわりしていた男の正体を察した良晴もまた、驚愕の声をあげる事となった。

「話を纏めるとじゃ、相良殿はこれより四百年後の世の人間であり、それ故にこの時代の儂が将来関白となり豊臣姓を名乗る事を知っている。」

「そんでおっさん…じゃなかった。ええと、秀吉さんは天下を統一して伏見城で死んだはずが、気付けば若返ってここにいたって訳か…」
そう言うのと良晴とおっさん、もとい秀吉は押し黙る。

あの後、互いに現状の認識を共有する事が急務だと考え、先ずは忍装束の少女に現在の年月日を聞いたところ秀吉が死んだ頃より四十年近く過去であった。

その上で良晴が豊臣秀吉の名を知っていた事から、自身と同じく良晴にも未来の知識があるのでは、と考えた秀吉は自身に天下人としての記憶があることを話したところ、予想通り良晴も未来から来たとの事であった。

「しかし四百年も先の世とは…俄には信じられん事じゃが、己の身に起きた事を思えば信じる他ないのお。」

「俺だつて信じられねえよ。タイムスリップしただけならまだしも、出会ったばかりのおっさんが豊臣秀吉で、しかも前世の記憶持ちだなんて。」

まるでラノベじゃねえか、と秀吉にはよくわからない言葉を話す良晴であったが、取り敢えずはこの場にいるもう一人の人物に意識を向ける。

「それでそつちの子が、ええと…はちしゆかぎよえもんちゃんだったっけ？」

「蜂須賀五右衛門でござる。先程は囁んでしまいました。」

長台詞は苦手ですゆえ、と言う五右衛門であるが名前に反しその容姿は明らかな女子である。

その事を不審に思いながらも秀吉は尋ねる。

「蜂須賀殿、その方は川並衆の頭領と申しておったが、蜂須賀正勝殿の縁戚の者か？」

「?いえ、蜂須賀正勝という者には心あたりはございません。」

「では儂の家来と申しておったが、如何なる縁にしてその様に？」

「木下氏は一時川並衆に身を寄せていたではありませぬか。そのしやい我が父に気に入られ、きのしちやどのが武家に士官したしやいは我がむしゆめぎよえもんをしよばに仕えしやせ、共ににやらび立って立身出世ちていくよう…」

「あい待たれよ蜂須賀殿。兎にも角にも、蜂須賀殿と儂は臣下の関係にあるというのだな。それと、焦らずともよいからもつとゆつくり、はつきりと話すがい。」

途中から噛みすぎて何を言ってるか非常に判り難い五右衛門の話の中断させ、落ち着いて話すように諭すと五右衛門は顔を赤くさせ俯いた。

その後、詳しく話を聞いてみると秀吉は初め今川家に仕える松下氏に仕官し、その時に五右衛門と主従の関係を結んだらしい。

秀吉は仕官先で一生懸命働き主人の覚えもめでたかったそうだ。

しかし、生まれの良くない秀吉が主人から可愛がられるのを妬んだ同僚からイジメを受けるようになり、松下家では居場所を無くしてしまった。

それを見かねた松下氏は秀吉に他家に仕えたほうが良いと諭し、幾ばくかの仕度金と足軽用の武器を与え暇を出したのだという。

「まっこと奇妙な状況ではあるが、儂が正勝と知り合った経緯や松下氏の下りに微妙に差異があるのお。」

五右衛門の云う通り、織田家に仕官する以前に秀吉は川並衆に一時身を寄せていた時期があった。

そこで頭領であった蜂須賀小六こと蜂須賀正勝と縁を結び、後に正勝は秀吉に仕え豊臣家の重臣となった。

だがその時、正勝には目の前にいるような娘はいなかった筈である。

もしや、自分が知るものとはこの世情の流れは違っているのでは？ その様な考えが秀吉の脳裏をよぎった。

「何やら戦場に動きがあったようですぞ。声が慌ただしくなりもうした。」

戦場からの音に注意を向けていた五右衛門がそう知らせ、秀吉達は

一旦話を止め繁みから顔を出し様子を伺った。

戦況は織田軍が前線を押し、有利に戦いを進めていた。

しかし、前線に気を取られすぎ本陣の守りが薄くなっている。

「前がかりになりすぎじゃ。あれでは別動隊に回り込まれた際、すぐに対応できぬではないか。」

秀吉が憂いた通り、織田本陣の守りが薄い事に気づいた今川の騎馬隊が虚を付くべく打って出る。

前線の指揮官もそれを察し必死に指示を出す、前線はすでに乱戦の様相を呈しており行動が遅れてしまう。

「いかん、このままではっ！」

「あっ!?ちよつと待つてよ秀吉さんっ！」

気付けば秀吉は繁みから飛び出し、戦場に向かって丘を駆け降りていた。

戦場に降りると事切れた足軽から槍を拝借し、それを振り回しながら織田本陣に向かって駆けて行く。

「おのれらあっ!さがれ、さがれえええっ！」

猿叫にも似た秀吉の叫びが戦場に響く。

その小さな体とは不釣り合いな大声を発し、凄まじい形相で槍を無茶苦茶に振り回す秀吉に今川軍のみならず織田軍の兵までも怯み道を開けた。

秀吉はその間を猛然と突っ走る。

その後ろを良晴と五右衛門の二人も必死に着いてきていた。

「うおおおおお!やべえ、もう少して矢が頭に当たるとこだった!」

「ほうほう。良晴殿、中々軽快な身のこなしでござります。」

「へへん!これでもドツチボールじゃ一度も当てられた事が無くて『弾除けのヨシ』と、つてあぶねえ!いま火縄銃で撃たれかけたぞ!」

やたら騒がしい三人組は秀吉を先頭に戦場を突っ切って行き、遂に織田本陣が目前となる。

既に今川軍は本陣に取り付いており、織田軍は近衛衆が何とか守勢を保っている状態であった。

秀吉は今まさに織田の兵を組伏せ首を取ろうとしていた今川兵を

横合いから叩き付け気絶させると、倒されていた織田の兵を助け起す。

「助太刀に参った！大殿は何処に！」

「忝ない。それならば彼処に。」

兵は本陣の奥を指差し自らもそこへ向かおうするが、組伏せられた時に足を負傷したのか苦悶の表情を浮かべその場に蹲る。

「助けには儂が向かう。そなたは此処で味方の救援を待たれよ。」

「すまぬ。お主は織田の者なのか？」

旗印を持たぬ秀吉に兵が尋ねると、秀吉は人好きする笑みを浮かべて答える。

「これより織田の家臣となる者よ！」

それだけ言うと秀吉は再び駆け出す。

暫く進むと漸く目的の場所にたどり着いた。

「見えた。彼処じゃ！」

本陣の中心に織田の足軽が多く集まる場所がある。

その中に彼らが守るべき主君があると見た秀吉は、足軽達に向かって大声を張り上げた。

「皆の者、近くににいる者と組んで複数で敵に当たるのじゃ！間も無く前線の者達が救援に参る。それまで御屋形様を御守りするぞ！」

この時の秀吉の精神状態はタイムスリップという超常現象による興奮と混乱、かつての主君と再びまみえられるかもしれないという期待、そして一兵卒として臨む久々の戦場の高揚により完全に舞い上がり、所謂ハイな状態に陥っていた。

それでも天下人の成せる業か、はたまた戦場の熱気が上手く作用したのか、秀吉の激によって守勢の織田軍の士気が俄に上がった。

織田軍は複数の槍持ちが集まり、組となって今川の騎馬隊を押し止める。

秀吉もそれに混じり、周囲の兵を叱咤激励しながら槍を振るった。

このまま行けば何とか守りきれぬ。

秀吉がそう考えたその一瞬である。

組と組の間に出来た僅かな隙間、その間を一騎の今川兵が駆け抜け

る。

「しまったー！」

秀吉がそれに気付き追いかけるが既に時遅し。

足軽組を抜けた騎馬武者は最後の守りである側衆を騎馬の突進を以て蹴散らした。

残されたのは守りを失い裸にされた大将のみである。

南蛮人が羽織るコートを身に付け、兜を目深に被った織田の大将は、素早く立ち上がり火縄銃を構え迎撃の姿勢を見せる。

だが騎馬武者が一瞬早く刀を振り上げ、敵将の脳天に向かって刃を落とした。

織田の将は火縄銃の銃身で刀を受け止め、何とか一撃目を防いだ。しかし、その衝撃で銃を取り落とし今度こそ丸腰となってしまう。

そこへ容赦無く騎馬武者が二撃目を繰り出した。

「御逃げ下さいー！信長様っー！」

秀吉が叫ぶも万事休す。

あわや大将討ち取りとあいならんとしたその時である。

「うおおおおお！信長を死なせてたまるかあああああー！」

大将の前に良晴が躍り出て、ぎりぎりで斬撃を槍で弾き返した。

「はあはあ、死ぬかと思っただぜ。でもこんなところで信長を死なせる訳にはいかねえ。歴史が変わっちまう。」

震えそうな足に濁を入れ、槍を構えて良晴は目の前の騎馬武者に對峙する。

虚を突かれた騎馬武者であったが、駆け付けたのが良晴一人だとわかると先ずは邪魔なものから排除するとばかりに良晴に向かって斬撃を繰り出す。

良晴もそれを何とか凌ごうとするが、腕が痺れんばかりの強烈な連撃を何度も受け止めるには叶わず、遂に腰を着いてしまう。

それを見て騎馬武者が止めを差そうとした時である。

良晴のポケットから四角い板のような物がこぼれ落ち、大音量で戦国時代には似つかわしくないテクノポップが鳴り響いた。

「な、なんだこれは!? 妖術かっ!？」

流石の今川兵もこれには肝を潰し、思わず後退りをしてしまう。

その背後から近づいて来ていた秀吉は、槍を振り上げ騎馬武者の脳天に渾身の力で振り下ろした。

不意を突かれた騎馬武者は強かに頭を打ち付けられ、ぐらりと力が抜け落馬しそのまま動かなくなった。

「無事か、良晴？」

「あ、ああ、何とか。」

秀吉が良晴の手を取り引つ張ると、ふらつきながらもどうにか立ち上がった。

すると周囲から勝鬨の声上がり始める。

「どうやら騎馬隊の強襲が失敗したと察し、今川は兵を引くようじゃ。」

「ええと、つまり勝ったって事だよな。」

「その通り。御味方大勝利じゃ。」

「そうかあ…ふう、助かった。ありがとう秀吉さん。お陰で信長を守りきれたよ。」

「…信長様がそこに。」

近くに信長がいる。

それを自覚した秀吉は急に居心地の悪さを感じ目を伏せる。

ここまで信長を救わなければという一心で助けに駆けつけた秀吉だったが、いざ顔を合わせるとなると前世において信長亡き後、信長の子息を始めとした織田家に対して行った数々の不義を思い出し、今更ながら尻込みをしまっていた。

果たして今の自分に忠臣面をして御尊顔を拝する資格などあるのだろうか…

秀吉の胸中を複雑な感情が渦巻く中、秀吉と良晴の背後から馬の足音が聞こえてくる。

「お前達、よくぞ主君を御守りした！特にそこの二人は身を呈して主君を救ったと聞いたぞ！」

馬上からの声に顔を上げれば、甲冑を着た女が目の前にいた。

意志の強そうな眉と目が印象的な美少女である。

(何故このような戦場におなごが?というより何じやあの胸はっ!!)
騎乗の美女の胸にぶら下がりし二つの果実は、それはそれは豊満な
双球であった。

これ程の双子山は前世において多くの色を味わった秀吉をしても
記憶に無い。

(着衣の上からでもわかる大きさ、そして見事な形!是非とも寝所に
招きたいものじゃ。じゃが、何故じゃ。このおなごから感じる奇妙な
既視感は…)

初めて会った筈にも関わらず、どうにも馴染みのある佇まいに違和
感を感じ秀吉は馬上の美女をまじまじと見つめる。

一方で良晴の目も美女の胸に釘付けになっていた。

「な、なんだお前達。さつきから人の事をじろじろ見て。」

「いや、こんな巨乳リアルじゃ初めて見たからつい。」

「なっ!?!」

良晴の一言に美女は顔を真っ赤にさせ、恥辱で体を震わせると刀を
抜いて切っ先を良晴へ向ける。

「ぶ、無礼者!貴様ら、手討ちにしてやる!」

「ヒイツ、悪かった!」

「なっ!?!儂もかっ!」

「お前もじつと見ていただろうが!」

まさか良晴の失言が自分にまで飛び火するとは思わず流石に秀吉
も焦る。

「やめなさい六!一応そいつらは私の命を救い、功を挙げたのだから。
それに報いなければ道理が通らないわ。」

そんな声が秀吉達の背後から聞こえてくる。

それは明らかに女の声であった。

「あんだ達、見事な戦働きだったわ。旗印を着けていないということ
は織田家に仕官希望の素浪人といったところかしら?もしそうなら
雇ってあげてもいいけど。色々聞きたい事もあるし。」

そう言いつつ、興味深げに良晴が落とす四角い板―スマホを火縄
銃で突つくのは、南蛮渡来のコートを羽織った織田の大将である。

兜の隙間から見える髪は茶色がかかり、顔は煤で黒く汚れてはいるが生命力溢れる目が爛々と輝いていた。

これと同じ目をした人物を秀吉は知っている。ただ、その性別は秀吉が知るものと大きく違っていた。

「…あの、失礼を承知で伺いまするが貴女様は？」

「なに？仕官しようとしている家の当主さえしらないの？顔が猿そつくりだけど、あんた達頭も猿並みなのかしら。」

「ぐ、御当主？」

「そう、私が清洲織田家当主、織田信奈よ。」

秀吉の問いに堂々と応えたその少女、信奈が纏いし覇気と言うべき存在感はかつて秀吉が仕えた男のそれと全く同じ物であった。

ゆえに秀吉の受けた衝撃は甚だ大きかった。

「な、な、な…」

「な？」

「なんじゃそれはあああああああああ！！！！」

この日一番の叫びが戦場に響き渡った。

斯くして始まるは天下を取った男のやり直し夢物語。

知り合いの大部分が女となってしまった世界で、天下人秀吉は如何なる出世街道を歩むのか？

今宵はここまでに致しとう御座りまする。

尾張のうつけ姫

今川との戦を終え、陣を引き払った織田軍は本城である清洲城に帰還した。その評定の間において、秀吉と良晴は城の主、織田信奈に對面していた。

城に戻った信奈はコートを脱ぎ、湯帷子を片袖脱ぎにし、腰には虎の毛皮を袴の上から巻いており、髪はでたらめな茶筌に結っている。(懐かしいのお、信長様も若い頃はよくこのような格好をしておった。しかし、あの胸当てはなんじゃ?)

信奈の胸には黒い布製の乳袋―現代人の言うところのブラジャー―が着けられているのだが、戦国の世においてそのような物は本来存在せず、秀吉にとつては完全に未知の着物であった。

おそらく胸の先端を衆目に晒さぬようにするものであると秀吉は推察するが、それならば着物をちゃんと思えば良いものを、と思わずにはいらなかった。

「つまり、あんた達は未来から来たと言うわけね。ホラだとしてもそこそこ面白いじゃない。」

秀吉が乳袋に対し思いを馳せていると、信奈がニンマリと笑いながらそう言った。その口調はどこか楽しそうでもある。

自分たちの身の上について、秀吉は自分と良晴が別の時代から来たことを包み隠さず打ち明けていた。

己の知る信長と、この信奈という女大名が同じ気質を持つのであれば嘘や取り繕いを嫌い、寧ろ未来から来たという話に興味を示すと考えたからである。どうやらその目論見は上手くいったようだ。

「お待ち下さい姫様! そのような妄言を信じてはなりません! この者達は適当な事を言って姫様をたぶらかそうとしているに違いありません!」

「妄言も何も、こつち本当の事しか言つて無いんだから仕方ないじゃんか。」

「なんだその無礼な口のきき方は!」

「無礼なのはそつちも同じだろ!」

売り言葉に買い言葉。

信奈に六と呼ばれた美女、本名 柴田勝家と良晴は周りが見ている前で口論を始める。

その様子を眺めつつ、秀吉は心の中で溜め息をつく。

(まさか、あの鬼柴田が女になっておるとは…)

秀吉の知る柴田勝家と言えば、織田家における武闘派の筆頭であり、秀吉にとっては越えるべき大きな壁の一つであった。

それがまさかの巨乳美少女化である。ある意味信長が信奈になっていた事より衝撃的であった。

「二人ともそれまでです。主君の面前で言い争いをするなど家臣としてあるまじき行い。一点です。」

「うっ！だ、だけど万千代っ！」

「それに確かに信じ難い話ですが、その二人の話を真実だと証明する証拠がないのだとすれば、虚偽と証明する証拠ありません。現状では五十点といったところででしょうか。」

そう言つて勝家を諫めたのは、優しげな雰囲気を持つ落ち着いた女性である。

通称万千代、またの名を丹羽長秀と言う。

彼女もまた秀吉の知る世では、織田家の宿老の一人として内外に活躍し、豊臣政権下でも重鎮としてその辣腕を振るつた大名のほずである。

信長のみならず、自身が羽柴と名乗る切っ掛けになるはずの二人までもが女になってしまっている現実に、流石の秀吉も疲弊していた。「ちよつと、さつきから黙っているけどちゃんと話聞いているの？」

知らず知らずのうちに床を見詰めていた秀吉を、信奈が苛ついた様子で注意する。

「ややつ、これは失礼致しました。少々疲れが出てしまったようです。」

「ふんっ、まあ戦の直後だし今回は見逃すわ。それよりも、あんた達が未来から来たという証拠はあるのかしら？」

「証拠でありますか？」

「ええ、そうよ。此方のあんたが持ってた『すまほ』とか言うカラクリは確かに目新しいものではあるけれど、これだけであんた達の話を用するには足りないわ。もっと直接的に、私があんた達を未来の人間であると認めれる物があれば出しなさい。」

信奈の命令に、秀吉と良晴は思わず見合わせる。

その様子を信奈はニヤニヤと楽しげに眺めていた。

(ああ、こりや完全に遊んでおられる。)

秀吉は信奈の表情から信長の悪癖を思い出していた。

時に信長は、人を困惑させ慌てさせるような難題を命じ、それに右往左往する人の顔を見て楽しむという悪趣味があった。

(そういうえば、バテレンの宣教師とどこぞの坊主を戯れで論争させた時も今のような顔をしておられたか。最終的に答えに窮した坊主が激怒し相手に掴みかかろうとしたのを、横から飛び蹴りを喰らわせたんじゃないか。おっと、今はそんな事思い出しとる場合じゃなかったわ。はてさて何と答えたものか…)

「どうしたの、自分達が未来人と証明出来る方法がないの？だとしたらあんた達の話は全くの出鱈目だと…」

「いや、あるぞ！俺達が未来から来たって証拠は！」

答えを返さない秀吉達に信奈が挑発的な物言いをすると、良晴が勢いよく立ち上がって啖呵を切った。

「織田信長、いや、織田信奈！俺はお前が描く今後の展望を知っている！お前は尾張を掌握した後、美濃を攻略するつもりだ！」

「美濃を？」

「美濃は豊かな土地なだけでなく、京の都と関東を結ぶ交通の要所だ。尾張と美濃、この二つを取る事で京へ上洛する道筋が出来る。」

「…ふーん、続けて。」

「上洛し、京での実権を握り、その威光を利用し近畿での影響力を強める。そうして力を付け、天下に号令をかけ、各地の大名を従わせ、天下を統一する。そして…」

良晴はゴクリと唾を飲み込む。

「世界へ、討って出る。」

その瞬間、余裕の笑みを浮かべていた信奈の表情が変わった。

口元からは笑みが消え、目は獲物を狙う鷹の如く鋭く光る。

どこか緩んだ空気が流れていた評定の間、それだけで緊張が走った。

「…あんだ、いったいどこでそれを。」

「歴史マンガと歴史ゲームさ。その中じや、織田信長は若い頃から世界に目を向け、いずれ天下を統一したあかつきには海に出て世界に進出するのを夢見ているのが定番だからな。なあ信奈、お前はこの国じや誰よりも先の未来を見据えてるかもしれない。だけど俺は、お前が見据えるさらに先の未来から来たんだ。」

それでも良晴は信奈の威圧に屈せず、真つ直ぐに相手の目を見て話す。その態度はどこか不遜でもあった。

「おい貴様、さつきから聞いてれば姫様に対してなんとという口のきき方を！」

「控えなさい、六。」

「しかし姫様！」

「私は控えろと言っているわ！」

叩きつけるかのような叱責に、勝家は顔を青くし下がる。

そちらには目もくれず、信奈は良晴の目を見据えたままゆつくりと近付いていく。

その目は一切の誤魔化しや虚偽を許さぬ、強くも冷たい輝きを放っていた。

秀吉も今は二人の邪魔をしてはならぬと瞬時に察し、口をつぐみ存在感を消した。

「…奇妙な感覚ね。いまだ誰にも話してはいない私の大望を、未来から来たという男が知っているなんて。未来人は過去の人間の心さえ読めるのかしら。」

「いや、多分これからお前が起こす行動だったり、発言だったりで想像した部分もあると思うけど…」

「…デアルカ。」

そう言ったとき、信奈は黙りこくって良晴の顔を見詰める。じつと

見られる良晴は、どぎまぎしつつも視線を逸らさない。誰も言葉を発せぬまま、ただ時が過ぎる。

息詰まる空間を裂いたのは、やはり信奈であった。

脈絡もなく良晴に背中を向けると、ずかずかと上座に戻り胡座を掻いた。

「いいわ。あんた達の身、うちで預かってあげる。」

「本当か!」

「ただし!今後未来について話すことは一切許さないわ。」

「えっ、どうしてだよ?俺達の知識があれば天下を取るのも楽になると思うけど。」

信長の性格を知る秀吉は、信長様と同じ考えならそう言うだろう、とある程度予想していたが、そうではない良晴が疑問を口にする。

「この世は先が見えないからこそ楽しいのよ。人から聞いた己の人生を歩んだところで、それはもはや自分の人生では無いの。だから私の前で未来の知識を語ることが禁じるわ。あんたもよ、秀サル。」

「ひ、秀サル?それはもしかや、儂の事でしょうか?」

「そうよ。だってあんた、どこからどうみても猿顔なんだもん。ついでにあんたは良サルね。」

「はあっ!?俺まで猿扱いかよっ!」

「別にいいでしょ、あんたも猿顔なんだし。それに語感もなんかちようどいいし、秀でたサルと良いサル、ちゃんと誉めてるじゃない。」

「結局サルじゃねえか!俺達は人間だ!」

「ああ、もう煩いわね。犬千代、さっさとこの二人を長屋に連れてって。」

「…はい、姫様。」

信奈はうんざりした様子で自分の隣に控える女の小姓に命じる。

信奈から命を受けた小柄な小姓は、いまだぎやいぎやいと信奈に食って掛かろうとする良晴の襟首を掴むと、引きずるようにして評定の間を出ていく。見た目に反した剛腕である。

秀吉も上座に頭を下げ、二人を追って出て行く。

「あがつ!ちよっ、待って苦しいっ!くびっ!首が絞まってるからっ

！」

「…姫様の決定に逆らってはダメ。長屋まで一緒に行く。」

「わかった、わかったから！ちゃんと着いていくから手を放し、あだっ！」

女が良晴の懇願通りに手を放すと、良晴の頭部は重力に従い廊下の板に激突し、良晴は苦悶の表情を浮かべる。

「痛てて、あークソ、酷い目にあつた。」

「大丈夫か、相良殿？」

「うん、まあなんとか。それにしてもなんだあの女！人を雑に扱いやがつて！」

「…お主の気持ちも判らぬでは無いが、相良殿もこれから主君となられるお方に対する言葉遣いと言うのを気を付けられよ。正直見えて胆が冷えたぞ。ところで…」

良晴を諫めた秀吉は、自分達を連れ出した小姓の方を向く。

年の方は十を幾つか越えた頃。

無表情で愛想は無いが目麗しい、されど何処かで会った事のあるような、というか信奈が呼んだ犬千代という名にはおもいつきり心当たりがあつた。

「先程信奈様より犬千代と呼ばれておつたが、もしやそなたは前田又左衛門殿ではありませんか？」

「…うん。犬千代は前田又左衛門利家。犬千代は幼名。よく知って…どうしたの？」

なぜか質問に答えた瞬間にガツクリと肩を落とす秀吉に、犬千代が訝しげに尋ねる。

「いえ、少しばかり世の無情というのを感じ入ってしまっただけです。お構い無く。」

勝家や長秀といった家臣までもが女であつた時点で覚悟はしていた。

それでも足軽の頃より苦楽を共にした親友の女性化は、信奈や勝家達とは別の意味で心に来るものがある。

というか犬千代まで女になつてしまつたら、まつ殿はどうなるのだ

ろう？

「それじゃあ早く、日が暮れる前に長屋町に行く。」

友人の今世のあり方に思い悩む秀吉を気にする様子も無く、犬千代は二人を急かし城の外へと出る。

犬千代の案内で城下へ出た秀吉一行は、程なくして下級武士の居住区、通称うこぎ長屋に到着した。

「こ、ここが武家の住む場所なのか。もっと豪華な武家屋敷を想像してたぜ。」

「足輕に住居を与えるだけ慈悲深いというものよ。戦がなければ大分の足輕はタダ飯喰らいだからの。」

「そ、そうなのか。くうく、戦国時代は厳しいぜ。」

そんな事を言いつつ三人は空部屋に入っていく。

因みに秀吉の部屋は犬千代の右隣にあり、良晴の部屋はさらにその右側、要するに犬千代と良晴に挟まれた形となっている。

「ボロつちい上にすきま風が余裕で入ってくる。でも、秀吉さんが言う通り雨風が凌げるだけマシか。て言うか腹が減ったな。なあ犬千代、食料はあるのか？」

「ある。でもその前に浅野様のところに行く。」

「浅野様？」

「うこぎ長屋の主みたいな爺様。長屋の侍では一番偉い。」

再び犬千代に連れられ外に出た秀吉達は、すぐ向かいの部屋に案内される。

長屋で一番偉いと言っても内装は秀吉達の部屋とは大して変わらず、非常に質素なものであった。そして、その部屋の主である浅野翁たる人物は朗らかな笑みの似合う好々翁である。

「これはこれは信奈様、ずいぶんと大きくなられた。」

「ちがう、犬千代。」

「おうおう犬千代じゃったか。この前は柴犬じゃったが、ずいぶんと立派人間に化けたものじゃ。」

「…元から人間。」

「なあ秀吉さん、このじいさん完全にボケて…」

「いや、あれは犬千代をからかっただけじゃ。」

言葉が支離滅裂な上に目の焦点が定まっていな。にも関わらず、瞳の輝きは失つておらず時折樂しげに細くなるのを見て、秀吉はこの老人がボケた振りをして面白がっていると判断する。

いい加減話が進まないので指摘してやろうかと秀吉が思っていると、玄関の戸が開かれる音がした。

「ただいまーあれ？お客さんが来てるの？って、犬千代ちゃんじゃない！」

「おお、帰ったか。」

秀吉達が振り返ると、そこには勝ち気でありながら目に理知的な光を宿した少女がいた。

年は犬千代と同じくらいか、来客に気付くと人懐っこい笑みで秀吉達に会釈する。

「紹介いたそう。これは僕の孫娘の「ねね…」寧々と、おや？」

浅野が紹介するより早く、秀吉は思わず少女の名を呼んでしまう。

それどころか先程とは打って変わって呆けた様子で寧々の事を見詰めている。目の前に現れた少女。彼女は紛れもなく秀吉にとっての生涯の女房の若い頃そのものであった。

「…あの、私の顔に何かついてますか？」

「えっ！ああ、これは失礼！お美しい御顔でしたので、つつい見とれておりました。」

「まあ、お上手。ところで、私の名前をご存知のようでしたけど、何処かでお会いしたことが御座いましたか？」

「いえいえ。ただ拙者は美女と名高い浅野の寧々殿の噂を風の便りで聞いてました。この通り、耳は大きいので斯様な噂はよく入ってきます。」

自分の両耳を摘まみ戯けた仕草で変顔を作ると、耐えきれぬ様子で寧々が吹き出す。

「ふっ、面白いお方。そう言えば、姫様が戦場で猿を二匹拾ってきたと風の噂を聞いたのですが、そのお噂はご存知で？」

「はて？どうだったのですか？齊天大聖もかくやとされる者を得たと

言う話はお聞きしましたが。」

秀吉の返答に寧々はけらけらと笑い出す。

その様子を浅野翁は興味深げに見ていた。

「ほうほう、初対面にも関わらず二人とも随分と仲が良さげだのう。」

「…うん、まるで長年連れ添った夫婦みたいに相性が良い。」

「というか秀吉さんのあの変わり様。あの子、寧々って言っただけでもしかして…」

一同がわいわいと陽気に騒ぎ、そろそろ夕粥の時間なればせつかなので皆で食事にしよう、という寧々の発案により秀吉達がその好意に甘えようとしていたところ、表から若者の乱暴な声が聴こえてくる。

「なんだ騒がしいな。ちよつと見てこよう。」

そう言っただけで立ち上がった良晴を先頭に、秀吉と犬千代がそれに続いて表へ出る。

足の悪い浅野翁と寧々は部屋に残された。

表へ出ると騎乗した若侍の集団が長屋を囲んでいた。

「我らは織田信勝様の家臣団よ！浅野寧々よ、表に出てくるがよい！」

「信勝？…って、誰だ？」

「姫様の弟。末森城の城主をしている。」

「ああ、そう言えばその様なお方もおったのお。儂は会った事はなかったが。それで、信奈様の弟君が如何様な要件で寧々殿に？」

秀吉が尋ねると若侍は尊大な態度を崩す事無く、嘲笑を浮かべ鼻を鳴らす。

「なんだお前らは？名を名乗れ！」

「俺は信奈の家来！相良良晴だ！」

「同じく、木下藤吉郎秀吉に御座います。」

「ふんっ！知らぬな。雑兵無勢に答える義理は無いわ！」

「…犬千代も雑兵？」

「なっ!?又左もおったのか…」

秀吉と良晴には高圧的に接していたにも関わらず、信奈の側近である犬千代を見つけると萎縮し声が小さくなる。

それだけでこの若侍の底が見えた。

気を取り直すように咳払いをしているが、既に秀吉はこの男にまともな対応をする気を失っていた。

「我が若君、信勝様がここにいる寧々をご所望だ。即刻差し出せ！」
「差し出せと申されましても、寧々殿は我らの所有物でありませぬ故、勝手な事は出来ませぬ。」

「ならばそこをどけっ！俺が直接話をつける。」

「衰えた老人と年若い孫娘、その二人が慎ましく暮らす家に道理を知らぬ男共が大挙して押し寄せる。その様な真似は無作法と心得まする。」

「なにっ！貴様、我らを愚弄するか!？」

「拙者は見たままの事を申したまです。」

「小癩なっ！そこに直れっ！」

秀吉との問答に逆上した若侍が刀に手を掛け、場に一触即発の空気が流れる。

「双方共、お止め下さい！」

両者の間に割って入ったのは渦中の寧々であった。

寧々は凜とした態度で信勝陣営の前に進み出ると、恭しく礼をとる。

「漸く参ったか。さあ行くぞ！信勝様がお待ちだ。」

「以前より何度も申しましたが、私は既に清洲城にて女中として御奉公している身。急に末森に参れと命じられましても、応じる事は出来ません。」

「知れたことよ！お主は黙って我らの言う事を聞けば良いのだ！」

「ぎゃっ!？」

自分の求めに応じぬ寧々に痺れを切らし、無理矢理連れて行こうと寧々の手首を掴む若侍。

これには流石の秀吉も我慢の限界だった。

気付けば寧々の手首を握る、若侍の手を取っていた。

「なんだ貴様この手は？」

「寧々殿が嫌がっておろう。即刻この手を放せ！」

「なにをつ！雑兵無勢がこの俺を信勝様が臣、林通具と知つての狼藉か！」

「やめないか、君達つ！」

再び緊迫した空気が流れんとしたとき、争いを止めたのは涼しげな青年の声であった。一同が動きを止める中、若侍衆の間を割つて白馬に乗った色白の貴公子然とした青年が柴田勝家を伴つて現れる。

その顔には信奈に似た面影があった。

「林君、女性に乱暴な行いはいけないよ。手を離してあげて。そつちの君も林君の手を放すんだ。」

「しかし若様、この者は…」

「良いから、早く。」

「…ははっ。」

青年の命に林と呼ばれた男は洩々といつた様子で引き下がる。

秀吉も相手を睨み付けつつもその手を放す。

それに満足した様子の子青年は、騎乗したまま寧々に近寄つた。

「林君が失礼したね。彼は少し僕の為に役立つとうと張り切り過ぎるところがあるんだ。許してあげてくれないか？」

「…わかりました。信勝様がそう仰るなら。」

「ありがとう。では改めて、寧々ちゃん、僕らと末森に来ないかい？」

「…先程も申しましたように、私は既に清洲で御奉公しております。

そもそも、なぜ私を召し上げようとなさるのですか？」

「君のように器量が良く、しかも女中の間でも優秀と評判の子を欲しがらない人はいないよ。あんなうつけの姉上に仕えるよりも、僕のところに来た方が君のためにも良い。」

「うつけ？それって信奈の事かよ。」

信勝の言い草にカチンときた様子の子の良晴が物申すと、信勝は良晴と秀吉を見て眉を潜める。

「えっと、君たちは…」

「信勝様、こやつらは今日から信奈様の元に仕える事になった☒達です。」

「ああ、そう言えば姉上が戦場で二匹の猿を拾つたと聞いたが君たち

の事か。まったく、相変わらず姉上のうつけぶりには困ったものだ。」
良晴達を見る信勝の目に蔑みの色が入る。

それによって良晴の視線の険しさが強くなった。

「おい、うつけってどう言うことだよ！」

「言葉の通りさ。姉上は君たちみたいに禄に身分も分からぬような☒達を集め近習にしたり、南蛮の宣教師と親しくなって影響を受けたり、うつけな格好で城下に出て鉄砲なんて物の演練をしたり、織田家の当主として目に余る事ばかりしてるんだ。」

呆れ顔で信勝が話す内容に、勝家を除いた彼の取り巻きが下世話な笑い声をあげる。

それに言い返そうとする良晴の袖を、犬千代がチョイチョイと引いていた。

(いま姫様と信勝様の関係はあまり良くない。ここで家来の犬千代達が問題を起こしたら戦になるかもしれない。)

(うう、でもよお…)

犬千代から諫められ言葉を紡げなくなる良晴。

秀吉もまた、黙って信勝の話聞いてる。

その様子に気分を良くしたのか、信勝の舌の回りが増す。

「礼儀作法をまったく身に付けない。なのに父上は姉上を甘やかしてたから、ますます付け上がるようになった。その上、父上の葬儀の席に遅れて現れるばかりか、いつものうつけの格好で父上の位牌に抹香を投げつけたんだ！」

「そうじゃそうじゃ、姫様には呆れて物も言えん。あの一件で俺は姫様を見限ったんじゃ。」

「姫様のうつけっぷりには御母堂様も嘆いてらしたからのお。先代も何故あの姫に家督を譲ったのか。」

「あのうつけが続くようでは織田家の未来は暗いままじゃ。」

信勝の言葉を切っ掛けに彼の家来が口々に信奈の悪し様を罵る。

良晴は奥歯を噛みしめ、グツと我慢する。

単純に犬千代から受けた忠告が効いていた事もある。

だがそれ以上に、ここまで目立った反応を示さず、機を窺うように

黙した秀吉が妙に気になったからでもあった。

何か考えがあつて好き勝手言わせてるのではないか？

その様な予想が良晴の中にあつた。

「まったく、信奈様ではなく、信勝様が御当主なれば良いものを！」

斯くして良晴の予想は当たつた。

「いま何と申された？」

「はあ？」

「いま何と申したかと聞いておるのじゃっ!!」

突然雷鳴のごとき怒声が秀吉を中心に響き渡る。

戦場でのものを超える大声は、近くにいた☒達の脳をビリビリと揺らし、あまりの音量に馬が驚き暴れ、背の上から振り落とされる☒もいた。

その一人には先の発言をした林某がおり、秀吉は彼に憤怒の表情を向けている。

「な、なんじやいきなり、無礼であろう！」

「無礼は承知！されど織田家を陥れんとするそなたの言葉は赦し難し！」

「お、俺が御家を陥れるだと！」

「然り！主の不明を嘆き、改められんと口にするは真に御家を想う忠臣なれば当然の事！寧ろ主人の顔色を窺い、その場凌ぎに耳障りの良いことばかり申す☒こそ恥とすべし！しかしっ！」

秀吉が大きく一歩進み出る。

その動きに林の肩がビクリツと跳ねた。

「いま織田家は東の今川の脅威を受け、一致団結しこれに立ち向かわなければ為らぬ時期。にも拘らず、往來の場で現当主より相応しい☒があると申すは家中に無用な混乱を招き、和を乱さん失言になりましょう。これ即ち織田家を害し、今川に利を与えんとするに等しき行いなれば、織田家の臣として今の御言葉、聞き捨てなりませぬ!!」

秀吉の言葉に誰しもがすぐには反応出来ない。

激昂しているようであり理路整然と通具の失言を糾弾する様に、周囲の人間は完全に吞まれてしまっていた。

特に信奈の家臣としてではなく、織田家の臣として意見を述べているため下手に反論することが出来ない。

寧ろ、信奈の行いに不満を述べる事の意義を理を以て説いた上で、安易に当主の立場を説く事の危うさを示した秀吉の論説に感心する
☒もいた。

しかしながら、主君の面前で己の失態を晒された通具は黙ってられない。顔を真っ赤に紅潮させ、今にも刀を抜かんとばかりに立ち上がった。

「雑兵が過ぎた事を！叩き切ってくれるっ！」

「止めろっ、林っ！」

「柴田殿っ！」

「こいつの言い草は言葉が過ぎるものかもしれないが、元はと言えばお前の失言。怒りを抑え、ここは収めよ。信勝様、それで宜しいですか。」

「えっ!? ああ、うん。確かに林君も言い過ぎだったかな？ 姉上には直して貰わないといけない所もあるけど、いきなり当主を代わるつてもね……」

急に勝家から話を振られ狼狽えるが、それでも一応は自身の考えを信勝が述べた事でもはや通具がこれ以上の事は出来ない。屈辱に耐えながら柄から手を放し、拳を握り締める他なかった。

「信勝様、間も無く夕飯の時間となります。御母堂様も待つておられますし、今日はこのくらいで。」

「うん？ ああ、そうだね。母上を心配させてはならない。それじゃあ寧々ちゃん、僕はいつでも待つてるから好きな時に末森に来てね。じゃあね！」

勝家に促されると、寧々にのみ挨拶をして信勝は馬の踵を返した。

去り際に林通具が恨めしげに秀吉達を睨み付けるが、良晴が腕を組んで渾身のドヤ顔を見せ付けると射殺さんばかりの形相となつて去つていった。

「へへん、ざまあねえぜ！ 見たかよ林って奴のあの顔。滅茶苦茶悔しそだったな。流石太閤秀吉だぜ。」

「ふんっ！口の巧さと勢いで乗り切る事に関しては儂の右に出るものはおらんわ。」

良晴の言葉を受け得意気に秀吉が鼻を鳴らしていると、その袖を引くものがいた。

目を向けると、寧々が顔を赤らめ秀吉を見ていた。

「あの、木下様、先程は助けていただき本当にありがとうございます。ありがとうございました。」

「いやいや、お構い無く。大した助けにはなりませんでした。それよりも寧々殿、お怪我は御座いませぬか？」

「はい！私は大丈夫です。これも木下様が間に入ってくれたお陰で……」

「おい、兄ちゃん達、ちよいといいいか？」

寧々の言葉を野太い男性の声が欠き消す。

周囲を見渡せば、至る所で長屋の扉が開かれ、中からぞろぞろと人相の悪い男達が出てきていた。

次から次へと今度はなんだ、と秀吉が思っていると男達の頭目とおぼしき額に刀傷を付けた大男が秀吉の前に仁王立ちした。

「…おい、貴様。」

「…なんじゃ。」

「……………よくぞ言ってくれた！」

そう叫ぶと大男は秀吉の肩を強く叩き、周りの男達は一斉に歓声を上げた。

これには秀吉や良晴も困惑する他ない。

「な、なんだなんだ。あんたら急に何を……」

「いやあ、俺達も前からあいつらにはムカついてたのよ。これ見よがしに俺達の前で姫さんの悪し様を口にしておつてのお。良いきみじゃー！」

「ほんに！特に林の糞垂れは弟君の側近であるのをいい事に好き勝手やっておつたからのお。」

秀吉達を囲み大声で笑う男達に、取り敢えずは自分達へ害意が無いことが分かり一息つく。

すると犬千代が顔に傷のある男の側に寄る。

「：新介、二人が驚いてる。ちゃんと自己紹介する。」

「ん？おおっと、これは失敬。俺は姫さんの馬廻衆を務めとる毛利新介じゃ。いちおう馬廻衆のまとめ役をしちよる。」

「俺は服部小平太じゃ！お主ら今日の合戦で姫さんをお助けした二人じゃろ。奇特的な☒がおるとは思ったがこれほど弁が立つとはのお。」

感心した様子で秀吉を見る小平太に、秀吉は顔の前で手を振り頭を下げる。

「いやいや、弁が立つなどと。結局、姫様の悪し様の謗りに何一つ言い返せませんでしたので。」

「謙遜するな！姫様の振る舞いを良く思わん☒が多いことは俺達も知つとるし、そう思う理由も理解しとる。勿論、姫さんなりに考えがあつての振る舞いなんだが、あの方は肝心な所を言葉にするのに不器用だからのお。中々相手に伝わらんし、姫さんも姫さんで理解出来る奴だけ理解すれば良い、と突き放しておるから難儀するんじゃ。」

「そんなことは今はええ！折角この長屋に新しい仲間が来たんじゃ！歓迎の酒盛りをするぞ！」

小平太の号令に再び男衆の歓声があがる。

そのままあれよあれよという間に近くの空き地に酒席が用意され、秀吉と良晴を中心とした酒盛りが始まった。

飲食類は各々が部屋から持ち込んだものであり、秀吉達を囲んで次々と酒を振る舞おうとする。

当初良晴は未成年が故に酒の薦めに戸惑っていたが、ここが戦国の世であり未成年飲酒など関係ないと開き直るとあとは酒精に委ねるがまま、もとより人懐っこく陽気な性格もあつて早々に長屋の住人達に溶け込んだ。

秀吉も同様である。

天性の人たらしの才を遺憾なく発揮し、瞬く間に数多の心を掴んでいった。

そうして好きなように飲み、笑い、唄い、踊り、騒がしさが更なる人を呼び、結局長屋の住人全てが参加した歓迎の酒盛りは夜が耽るま

で続けられた。

良晴が目を覚ますと、そこは見知った自宅の自室ではなく、粗末な板張りの殺風景なあばら屋であった。

少しずつ覚醒していく意識の中で、良晴はここが夢の中ではないことを自覚する。

「そうか、俺本当に戦国時代に来ちゃったんだな…」

弱々しい声色で呟き再び寝ようと体を横たえるが、どうしようもない現実を目の前にし、今更ながら不安と寂漠が胸中を駆ける。

結局寝るのを諦め、体を起こし部屋の外へと出た。

戸を開くとヒヤリとする風が頬を撫でる。

つい数時間前まで長屋の住人達が賑やかに騒いでいた場所も今は人の気配さえなく、灯り一つ無い路地を今まで見たことの無いほど大きく明るい月が照らしていた。

「どうした、眠れぬのか?」

不意に頭上から問いが降ってきた。

見上げれば長屋の屋根に秀吉が腰掛け酒を嗜んでいる。

「どうじゃ、眠れぬのならここに来て少し相手をせぬか?」

「…別にいいけど、どうやって登れば?」

「そこに木があるではないか。それとも、四百年先の世には木に上れる☒はおらぬのか?」

近くの柿の木を示しながらからかい笑う秀吉にムツとしつつも、良晴は木の幹に手をかける。

慣れぬ動作の為か多少手間取りはしたものの、元来の身軽さもあって程なく秀吉の元へと辿り着く。

「へ、へへん、どんなもんだい!」

「ほう、これは見事な身のこなし。さきつ、まずは一杯。」

「あつ、いや、酒はちよつと…」

この時代の酒は現代人たる良晴にとって飲み慣れぬ事を差し引い

ても喜んで飲める物ではなく、思わず固辞してしまう。

秀吉も気を悪くした様子はなく、「そうか。」と一言呟いた後に自分で杯に酒を満たし口に運んだ。

「…時を遡り、人さえ変わってしまった世に来てしまったと思うたが、懐かしき地酒の味と月の姿だけは相変わらずであったのう。」

「…俺が知ってる月はもう少し暗くて、多分秀吉さんが飲んでる酒もきつと飲めなくなってると思う。」

「…そうか、四百年の時の流れは月の輝きさえくすませるか。」

また一杯、秀吉は杯を満たす。

その姿に良晴は自身の胸中にある疑問をぶつけたくなった。

「なあ、秀吉さん。俺達は何のためにこの時代に来たんだろう?」

「うん? どうしたのだ急に?」

「いや、なんか色々考えちゃまってさ。俺がこの時代に来た意味とか…」

ポツリと漏らされた良晴の胸中に、秀吉は四百年先の未来人の孤独を感じた。

思えば元服をしている年齢とはいえ、突然見知らぬ場所に一人飛ばされたのだ。おまけに既知の人間は一人もいない。その心細さはとてつもないものだろう。

「…相良殿、天が如何なる差配を以て儂らをこの地に呼んだかまでは、流石に儂にもわからん。」

「…そう、だよな。」

「…じゃがのう、この地にて何をするか決めるのは儂ら以外におらんとと思うとる。」

杯を満たす酒に映し出された月を眺めながら、秀吉は語る。

所詮自分もこの若者から見ればこの時代の者達とそう変わらなない。四十年と四百年。同じ時代を遡った者同士とはいえ、その隔たりはあまりにも大きい。

ならば下手な慰めよりも、己が決めた今世の在り方を示し、この若者の一つの指針とならん。

「儂はのう、この地に来て悟った。」

「…何を?」

「儂には天下人の器はなかった。」

秀吉の答えに良晴は言葉を窮する。

まさか戦国三英傑に名を連ね、天下一の出世男として現代でなお讃えられる本人が、自身が天下人の器に無いと語るのはあまりにも予想外過ぎた。

「そんな事無いと思うけど。だって秀吉さんは天下を統一して、関白にもなったって……」

「なら聞くがのう相良殿、儂が死んだあと豊臣はどのくらいもった？」その問いに今度こそ良晴は言葉を無くしてしまう。

『どうなった？』かではなく『どのくらいもった？』と尋ねる。

その意味を良晴は正しく察していた。

そして秀吉もまた、良晴の反応から自分が予想した通りの運命を豊臣家が歩んだ事を察した。

「…答えずとも良い。全て己が撒いた種じゃ。」

「秀吉さん……」

「体が若返ったお陰か、頭まで妙に冴えてのお。今更ながら過去の所業というのを落ち着いて振り返る事が出来ておる。なんと愚かな事をしたものか。要らぬ戦を起こし、奪わなくてよい命を奪い、買わなくてもよい怨みを買ったものよ。その因果をそのまま次代に引き継がせてしまった。」

「……………」

「おそらく天下を狙うは内府殿、あるいは官兵衛。大穴で伊達の小僧あたりか。佐吉、虎、市松が合力すれば何とかなつたかも知れぬが、おそらくそれも……」

そこにあつたのは歴史に名を刻んだ英傑ではなく、過去の行いを悔やむ小さな男の背であつた。

歴史知識として豊臣の運命を知る良晴であっても、胸を痛めずにはいられない男の哀愁が其処にあつた。

「…それに儂は初めから天下など望んでおらんじやつた。儂にあつたのは、信長様に喜んで欲しい、そればかりかじやつた。」

信長と初めて会った時の光景が、いまだ秀吉には昨日の事のように

思いだせる。

どこに行つても容姿と出自で馬鹿にされ、一生懸命に働いても小賢しいと無下にされ続けた秀吉にとつて、信長は初めて己の働きを正當に認め、評価してくれた主人であった。

『でかしたつ、猿っ！』

初めてその言葉をかけて貰った時の喜びを思い出せば、今でも涙が出そうになる。

信長との出会いを境に秀吉の天運は開けた。

「信長様には返しても返しきれん御恩がある。あの方は儂を人にくれた。あの方が喜んでくれるなら、儂は信長様の猿でええ、と思えた。あの方が夢を叶える事が儂の夢じゃった。」

だがその夢は唐突に終わった。

目標を失い、空っぽになった心を埋めるが如く、信長の描いた夢を追おうとしたが、それも上手くいかなかった。

夢は終わったはずだった。

「相良殿よ、儂がこの地に呼ばれたのは、天があの時叶わなかった夢の続きを描いてみよ、と言っているのだと思うことにした。」

夢を見た、夢を追いかけた、夢破れた、夢を追いつ越した、夢から覚めた。

「ならば此度は夢を叶えよう。たとえ性別が違おうとも、あの方の魂をどこかに宿しているのなら、儂は信奈様の野望を支える礎とならん！それが儂のこの地に来た理由じゃ。」

そう言つて満面の笑みを浮かべ月に杯を差し出す秀吉に、良晴は視線を外せずにいた。

「…秀吉さん、俺も秀吉の夢を手伝わせて貰つてもいいかな？」

「相良殿…」

「俺はまだ、自分が何のためにこの時代に来たのかが分からねえ。何をしたらいいのかも。でも今日信奈と会つて、秀吉さんの話を聞いて、やっぱり歴史に名を刻む人ってすごいなって思った。そんな人達と一緒に俺も肩を並べて何かをやってみたいと思つたんだ！なあ秀吉さん、俺の事は良晴と呼んでくれ。それで俺を秀吉さん達が描く夢

に混ぜてくれ！」

己に向かつて正対し、拳をついて頭を下げる良晴を秀吉はまじまじと見つめる。

そして杯を一気に煽ると、空いた杯に酒を満たしおもむろに口を開いた。

「…儂の夢はあくまでも儂の夢。人の夢を追いかけたところで所詮は仮初めよ。」

「……………」

「だがもし、仮初めの夢の先に己の夢を見定めん覚悟があるのなら…」

良晴の鼻先に月の映る杯が差し出される。

「共に励もうではないか！良晴っ！」

「…おうっ！」

杯を受け取って一気に煽り、笑顔で力強く応える良晴。

平和な世から四百年の時を遡り戦国の世へと降り立った少年と、一度は見失った夢をもう一度追う機会を得た嘗ての天下人。

この二人の出会いが彼らの知る史実とは異なる歴史を辿る世界に大きなうねりを生むことになるのは、今はまだ誰も知らなかった。

「時に良晴よ、酒盛りの途中で犬千代がいなくなったのには気づいておったか？」

「ん？ああ、そう言えば信奈に用事があるとか…」

「儂が一介の足軽であった時にも似たような事があってのう、その時も大殿に呼ばれて酒席を外すと申しておった。後に大殿が家臣を集め酒席を設けた際に、大殿が犬千代を側に呼んで髭を撫でながらこう

言ったんじゃ。」

『寢所で可愛かった犬千代が、立派な武士になったものよ。』

「……………えーと、それってつまり。」

「まあ、要するに犬千代は大殿のお気に入りのお相手だったという話じゃ。儂には衆道の何が良いのか分からぬが、他の☒達は羨ましがってたのう。」

どうせ入れるなら女の方が良い、と言う秀吉に良晴は何と返しているのか分からない。

そもそも現代人としてノーマルな感性を持つ良晴に、戦国時代の衆道事情は少しハードルが高く、興味を持つに至らなかった。

だが、どうして秀吉が唐突にこんな話を始めたのかと考えた時、この話の切っ掛けを思い出した。

「…夜遅くに犬千代が信奈に呼ばれた。」

「うむ。」

「秀吉の知る犬千代と信長は、そういう関係だった。」

「うむ。」

「……………深夜に寢床に年頃の女の子が二人きり。何も起こらない筈がなく。」

「……………衆道には興味は無かったが、この地の事情には興味が沸いてきたわ。」

その後、月夜に夢を語りあった二人は、暫し夜の神秘について語りあった。

いつの世も、男同士で盛り上がれる話題というのは決まっていることが分かったところで、今宵はここまでにしとう御座りまする。

心配御無用

秀吉達が織田家に仕官して一月が経とうとしていたある日、清洲城の石垣を信奈が視察していた。

その側には秀吉と小姓の利家が控えている。

信奈は石垣の隅々まで自身の目であらため、時折手で触りながら丹念に点検していき、やがて満足気に頷いた。

「うん、確かに期限内に石垣の修繕、不足無く行えたようね。秀サル、よくやったわ。誉めてあげる。」

「ははっ！有り難き幸せに御座りまする！」

「それにしても、職人達を其々の持ち場に組分けし、早く修繕を終わらせた処から追加で報酬を上乗せすると言つて競わせるとは考えたわね。しかも、城下の酒屋や飯屋に作業場の近くで出張販売するのを許可し、その場所代から追加分の報酬を出してるから予算の負担もそれほど増えて無いのね。」

「ははっ！職人達は一生懸命働き報酬が増え、商人達は懐が温かくなった職人相手の商いが捗り、信奈様におかれましては城の防備を万全に出来ると共に、気前の良い領主と評判になりましたよ。」

人はただ命じられただけでは中々動かない。利を示し、欲を掻き立てる事で動かし易くなる。秀吉が前世で何度となく使った手法である。

ついでに言うとうごぎ長屋では何処の組が一番に修繕を終えるかの賭けが行われていた。胴元は当然秀吉であり、そこでの収益も追加分の報酬の補填に充てられているため実質的な損益はプラスになっている。

景氣の良い秀吉の言葉に信奈の機嫌も悪くない。

「此れで取敢えずは城を攻められてもすぐに落城という事は無くなつたわ。 맘シとも同盟が組めたし、あとは信勝達が変な真似をしないように手を打たないと。」

先日、尾張と美濃の国境にある聖徳寺にて織田信奈と『美濃の蝮』と齋藤道三の会見が行われ、そこで道三の娘『帰蝶』を信奈の妹に迎

え同盟関係が結ばれる運びとなった。

女が名家の跡を継ぐ姫大名なるものが罷り通る今世において、婚姻関係では無いものの己が知る歴史を辿っていることに一先ずは安心するも、この同盟関係の行く末を知るだけに秀吉の心中は複雑である。

ちなみに会見の場において良晴が重大な役割を果たしたそうだが、普請を指揮していた秀吉の知るところでは無い。

「そういえば、良サルの方も今日が兵糧の買い出しの期日なのだけど、ちやんとやつてるのかしら？」

何気無い口調で信奈がそう呟く。

聖徳寺での会見が終わった後、良晴は信奈より兵糧の買い出しを命じられていた。

しかし、支給された予算では清洲の相場で目標とする量の半分ほどしか賄えず、そこを如何にして遣り繰りするかで良晴の力量を見極めんとする信奈の思惑が見てとれた。

「…良晴には何やら考えがある様子で御座いました。然らばこの藤吉郎、進捗具合を確かめに参りとう御座いますが如何でしょうか？」

「…別にあたしはあんな奴の事はどうでもいいけど。出来なかつたら切り捨てるだけだし。でも、秀サルが気にしてるようなら許可するわ。良サルがちやんと仕事をしているか確かめて来なさい。」

素直では無い言い方に微笑ましくも思うが、それを顔に出さず神妙な面持ちで御意を示す。

信奈のもとを辞し、秀吉は良晴の様子を確かめるべく長屋に向かった。

その横には先程まで信奈の側にいた利家がいる。信奈がお目付け役として一緒に行くように命じたのだ。

「…けど本当に良晴は大丈夫？主命を遂げなければ打ち首もあり得る。」

「ん？ああ、まあ大丈夫ではなからうか。何せあやつは儂から五右衛

門を借り受けとるのだからの。」

「五右衛門を？」

「うむ。おそらく、清洲近隣の相場を調べさせておるのじゃろう。」

その様に言ってみたがイマイチ反応が良くない利家の様子に、秀吉は詳しく説明してみせる事にした。

「つまりじゃ、始めに津島で塩を仕入れる。それを美濃の井ノ口で売ればどうなる？」

「……美濃は海に面していないから塩は貴重。清洲で売るより高く売れる。」

「その通りじゃ。逆に美濃で売るより清洲で売った方が高くなる物も有ろう。土地によって必要とされる物の価値は変わる。それを知るために忍びである五右衛門を使って相場を調べさせておるのよ。あとはその情報を基に商いを行い元手を増やしていけば、十分な兵糧を買えるだけ銭が集まるといふ訳じゃ。」

「…なるほど。秀吉達は頭が良い。」

利家は感心した様子ではあるが、秀吉は「この程度、大した事では無い。」と言う。

「相場というのをもっと大きく動かせるようになれば、それこそ戦になる前に戦に勝てよう。」

「戦になる前に戦に勝つ？ いったいどうやって？」

「それを知るには、銭という物をもっと知る必要がある。まあ今後織田家が大きくなるに連れ、嫌でも知らなければならぬ事じゃ。」

二人がその様な話をしながら歩いていると、程なく長屋に到着した。

秀吉は良晴の部屋の前に立つと戸を叩く。

「良晴、おるか？ 入るぞ。」

そう声を掛け、戸を開くと予想外の光景が秀吉の目に写った。

「おおっ!? 良晴、これはまたどうした!」

「あつ、秀吉さん! へへん、どうだい。俺、結構商才があるみたいだぜ。」

部屋の中はゼニ銭で敷き詰められており、床を見ることすら叶わな

かった。

その中心で良晴は自慢気に胡座を掻いている。

秀吉が利家に説明した通り、良晴は五右衛門の情報網を使い各地の物価を調べ、川並衆を通じて特産品の取引を行う事で元手を大幅に増やすことに成功していた。

それでも、ここまでの大成功は秀吉をしても予想外であった。

「いやはや、これは恐れ入った。まさかこの短期間でこれ程の稼ぎを出すとは。」

「…うん、素直にすごい。良晴には商人の才がある。」

「やっぱり！いや、マジでこれモテモテになるんじゃないかね？こんだけ金がありや、贅沢し放題だぜ！」

「うむうむ、良き事かな。ところで良晴よ、米はどうした？」

「へ、米？」

「何を呆けておる。お主は信奈様から兵糧を買い出して来るよう命ぜられ金を稼いでおったのじゃろ。その米は何処に…」

すつとぼけた良晴の表情に、途中まで話しておいて秀吉の脳裏に嫌な予感がよぎる。

「良晴、おまさか…」

良晴の顔を見れば、みるみるうちに血の気が引き細かく震え始めた。

予感が確信に変わる。

「やべえ、稼ぐのに夢中で米買うの忘れてた…」

「お主は馬鹿か!?!それとも阿呆か!?!」

「…多分両方。」

「うぐつ、返す言葉も無え。」

あまりにも初歩的な失態に秀吉と利家の両名から叱責され、先程までの威勢は何処へやら、ガツクリと肩を落としてしまう。

期限は今日の夕刻まで。既に日は中天を過ぎており、一刻の猶予もない。

「とにかく今ここにある銭で米を買い取るだけ買うしかあるまい。儂も手伝う故、気を保て。」

「…犬千代も手伝う。」

「うう、二人とも有り難う。恩に着る。」

三人は床に散らばった銭を手早く分けると、長屋を飛び出し其々別の米問屋へと向かった。この際値切り交渉などは一切せず、全て商人の言い値で仕入れ米に換える。

仕入れた米は五右衛門が急遽召集した川並衆に長屋の前に集積させ、夕刻前には何とか指定された分の兵糧を揃えることが出来た。

「ふう、何とかなったのう。良晴、お主は先に城へ行け。信奈様に此度の失態を詫び、間も無く兵糧が届くと申し開きをするのじゃ。さすれば流石に命までは勘弁して下さるじやろう。」

「最後まですまない秀吉さん。先に城で待つてる。」

「おう、またすぐ会おう。」

城に向かって走り去った良晴の背を見送ると、秀吉は集められた米俵を見やる。

「よしっ、では数を確認次第、我らも出るとしよう。」

「…うん。これで数が足りなかつたら何のために清洲中を走り回ったかわからない。」

「かっかつかつ、良晴のやつには何か旨いもんでも食わせて貰わねばのお！」

秀吉と犬千代は手早く米俵の数を確かめると、台車を引いて清洲城へ向かう。

その最中、秀吉は良晴について思いを巡らせていた。

（四百年先の世の者とは如何なものとは思ったが、中々やるではないか。多少抜けた所もあるが、同じ条件で佐吉に同じ事をやらせても同等の成果を出せるかどうか…。それが果たして本人の気質によるものか、はたまた四百年の積み重ねがもたらしたものか…。）

此度の良晴の働きは、米の買い忘れという失態はあれど、十分にその役目を果たしたと言えるものである。

更には、予定の兵糧を買い揃えてもなお銭は大量に残っており、これを武器や常備兵を揃える予算に回せると考えれば失態を挽回し余りある手柄だ。

「…前世であれば妬ましくも思ったであろうが、今世の我が夢を思えば、誠に喜ばしきことよ。」

「……なんの話？」

「ふふっ、いや、きつとこれだけの兵糧を見れば信奈様もお喜びになれるだろうと思っただのじゃ。」

不意に笑みを浮かべた秀吉を訝しむ犬千代に応え、秀吉は力強く台車を引く。

そうしている間に城の門が見えてきた。日はまだ沈んでおらず、夕日が城の屋根を赤く染めていた。

なんとか間に合った。

その思いから秀吉達の足取りも自然と軽くなる。

だがそんな秀吉達の目の前に、突如として人影が立ち塞がった。

「これはこれは、猿が車を引いておると思っただけで見てみれば、いつぞやの雑兵ではないか。」

現れたのは先日長屋で騒ぎを起こした、林通具をはじめとした信勝の取り巻き達である。

蔑んだ様相を隠すことなく、露骨なまでに絡んで来る様に秀吉は内心で強く舌打ちをした。

「これは林様、御久しゅう御座います。信勝様の臣たるあなた様が如何様にしてこの清洲まで？」

「ふんっ、なに、最近織田家中で猿が二匹調子に乗っておると聞いてのお。織田家の臣として、家中の風紀を保つため躰に参ったのよ。」

その様に言いつつ通具と他の取り巻き達は台車を囲むように移動する。ようは以前恥を搔かされたお礼参りに来たのだ。

「…いま犬千代達は姫様の命を受けて城に向かっている。急いでいるから退いて。」

このままでは不味いと思っただか、犬千代が通具達の前へ出る。実際には命を受けたのは良晴であり、秀吉達は手伝っているに過ぎないのだが、ここで余計な時間を食えば日の入りに間に合わなくなると考えた犬千代の咄嗟の判断であった。

しかし、それに対し具通は侮蔑の表情と共に吐き捨てるように言っ

た。

「何を言うかと思えば。父兄を蔑ろにし家督を篡奪した不孝者が、随分と偉そうな事を申す。」

その一言に犬千代の顔が一瞬にして朱に染まる。

口元は引き吊るあまりに痙攣し、右手は腰に差した刀の柄の付近で震えていた。

普段無表情の事が多い犬千代からは信じれない様相である。

「…違う。犬千代は篡奪なんてしていない!」

「はんっ!どの口がほごくのか。兄が病弱な事に付け入り、主君に取り入って家督を己がものにした事など皆知っておるぞ。なんともおぞましき事よ。」

「あ、あれは、姫様が命じられた事で、決して篡奪なんかじゃ…」

「ほう、では御教授願えぬか?主の心さえを意のままにする夜の手慰みというのを。今宵、俺の屋敷でよいか?明日は予定がないから、朝まで相手出来るぞ。」

見え透いた挑発に、他の取り巻き達から下衆な笑い声がおきる。

秀吉が不味いと思つた時には既に遅かつた。

犬千代の腰から抜かれた刃は具通の胸元を横一線に切りつけ、着物には血が滲み出していた。

「あがつ!ま、又佐っ!貴様やりよつたなっ!」

「去ね…今すぐここから居なくなれっ!!」

幸い軽く皮膚を割いただけに止まったからか、道具は顔を青くしながらも悪態をつく。

だが抜き身の刀を手に、鬼気迫る形相で迫る犬千代の様に完全に萎縮してしまう。

取り巻き達に囲まれ後ろに下がりながらも、睨み付けるのが精一杯であつた。

「又佐よ、覚えておれ。この始末は必ず着けさせる故な!」

捨て台詞を残し、道具達は秀吉達のもとを離れていった。

その姿が見えなくなるまで刀を手に睨み付けていた犬千代であつたが、完全に姿が見えなくなると刀を落とし、崩れ落ちるように膝を

ついた。

慌てて秀吉が近くに寄る。

「犬千代殿っ！大事ないかつ!？」

「…やっちゃった…折角姫様が信勝様と争わないように手を尽くしていたのに。」

信奈の小性が信勝の家臣を切りつける。

この一件広まれば、尾張を揺るがす大きな火種になることは必定だろう。

無論、事の重大性は犬千代も理解しており、先程とは一転して真つ青となり体を震えさせた。

「…とにかく今は信奈様の元へ急ごう。申し開きはその時に。」

憔悴した犬千代は秀吉に言葉を返す事すら出来ず、言われるがままに刀を拾って台車に着く。

その様子を、秀吉は黙って見つめる他なかった。

前田犬千代を放逐とする。

それが信奈より下された、犬千代に対する沙汰であった。

当初事の次第を信奈に報告した犬千代は、己の首を刎ねるように進言した。

それに異を唱えたのが良晴である。彼は犬千代に一時的に出奔し事が落ち着いた後に帰参すれば良いと信奈に提案した。

信奈は良晴の案を取り上げ犬千代を放逐し、犬千代はその日の内に清洲から姿を消した。

「そうか、そんなことが。まあ、犬千代は実家といろいろあったからなあ。それに姫さんを絡めて侮辱されたのが我慢ならなかったのだろう。」

騒動のあった翌日、秀吉の部屋には良晴、新介、小平太の四人が集まり食事を囲んでいた。

その席で犬千代について話題となると、新介は眉間に皺を寄せながらため息を吐いた。

「実家といういろいろあったって、それって犬千代が林の野郎を切りつけた事に関係あるのか？」

良晴が気になった事を素直に口にする。

「ううむ、そうさな。犬千代には年の離れた兄がおつてのう。名を利久殿と言うのだが、前田家の家督と荒子の城は元々利久殿が継いでおつた。しかし利久殿は病弱で、今まで一度も戦に出た事が無い。一方犬千代はあの通り生まれつき精強で、戦働きも目覚ましい。それを鑑みた姫さんは、前田家の家督と城を犬千代に譲るよう利久殿に命じたのさ。」

「あれ？じゃあ何で犬千代はこんな長屋に住んでるんだ？城があるならそつちに住めばいいじゃんか。まさか、犬千代の兄貴が妹に家督を譲るのを拒否したのか？」

「いや、利久殿は素直に主命に従つた。反発したのは家臣団と領民だ。利久殿は確かに病弱で戦働きは出来なかつたが、穏やかな人柄と堅実な領地経営で多くの者達から慕われておる。姫さんの強引なやり方は、利久殿を慕っていた者達にとって受け入れ難い事だったのだ。」

「…ああ、そうか。犬千代の奴、家に居づらかつたんだな。」

短い付き合いながら、それなりに犬千代の性格を知る良晴は納得したように呟く。

いくら信奈の命令とはいえ、兄から家督を奪ってしまった事に負い目があつたのだろう。加えて周囲の人間の反発は、その負い目をより重いものにした。

結果信奈の近くで仕えるためと言い訳に、城を出ざるを得なかつた。

その辺りの事情は犬千代にとって非常にデリケートなもの、所謂地雷であることは良晴でも容易に想像がつく。

「それよりも藤吉郎、お前さんさつきから黙りこくつておるが、何か考え事か？」

「ん？ああ、少々気になる事があつてな。」

「気になる事？なんぞ、申してみよ。」

「昨日の林共の態度なんじゃが、どうにも不自然でう。以前は犬千代を前にしただけで萎縮しておったのに、昨日は露骨なまでに挑発しておった。いったい奴等に何の心変わりがあったのか…」

さらに言えば、今回の一件は秀吉にとつて既知の出来事であったにも関わらず、防ぎ得なかったものであった。

前世において、前田利家も刃傷沙汰を起こし織田家を出奔していた時期がある。

ただその時の原因は、元より利家と折り合いの悪かった茶坊主が利家の妻を侮辱した事であり、その時利家は相手を切り殺している。

今世において秀吉はそれとなく犬千代の周囲を探っていたが、件の茶坊主はおろか、そもそも利家の性別が女になっていたため、どこかで刃傷沙汰は起こらないと油断していた。

(その結果がこの様じゃ。事の経緯は違えど、犬千代が織田家を逐われる羽目になってしもうた。この世界、元の世界と似ているよう所で所々異なる部分があるだけに、知識だけで判断しようとする足元を揃われかねんぞ。)

秀吉が腕を組唸っていると、戸が叩かれる音がして思考を中断させる。

入るよう許可を出すと、戸が開かれ色白の少年が現れた。

「御免、こちらに木下藤吉郎殿と相良良晴殿はおられますか？」

「いかにも。儂が藤吉郎じゃが、お主は？」

「信奈様の使いとして参りました、堀秀政と申します。信奈様が至急登城せよと御命令です。」

「…あい分かった。急ぎ準備する故、暫しお待ち頂くようお伝え願う。」

「承知致しました。では、某はこれにて。」

そう言い残し、秀政は戸を閉める。外からは走り去る足音が聞こえた。

「そういう訳じゃ。良晴、急ぎ支度をするぞ。」

「ああ。でもいったい何の用件だろう？」

「おそらく、昨日の事の次第を詳しく知りたいのではなからうか。いずれにせよ、急いで向かう他あるまい。」

手早く食膳を片付け、新介達が辞するのを見送ると、秀吉と良晴は軽く身なりを整え城に向かった。

既に門番には事情が伝わっていたのか、大した取り次ぎもなく信奈の執務室まで通された。

部屋には信奈の他に、長秀と秀政が控えていた。

「来たわね。昨日何があったのか話さない。」

秀吉達が部屋に入って早々、有無を言わせぬ口調で信奈が命じれば、当時その場にいた秀吉が昨日の出来事について事細かに説明する。

その間、信奈は口を挟むことなく黙って秀吉の話に耳を傾け、他の者達もそれに倣って終始無言であった。

秀吉が喉の渴きを覚える頃に話を終えると、信奈は膝の上で頬杖を着く。その表情はどこか物憂げであった。

「…平和な世であれば利久が当主でも問題なかったわ。でも戦乱の世において、必要とされるのは犬千代のような武人よ。だからこそ、私は合理的に判断してあの子に家督を継がせたのに…」

「…如何に理に叶い、道理として正しいと分かっているにも、時に人は理に合わぬ事で思い悩むものであります。それが情であり、人の心というものです。」

「私は人の心を蔑ろにしていたのかしら？」

「どちらかといえば、急ぎ過ぎていたのではと察します。」

「…デアルカ。」

秀吉の答えに一言呟き、暫しの間目を瞑って思案すると、信奈は皆の面前に一枚の書状を投げ捨てた。

「信勝から詰問状が届いたわ。内容は昨日の犬千代の所業に対して、厳罰を以て処するよう求めている。」

「厳罰って…」

「要するに犬千代の首を刎ねろって言うてんのよ。」

信奈の言葉に良晴が絶句する。

「なっ!? そんな事出来るわけ無いだろっ!」

「当然よ。これは単に私の心情に由るものだけではないわ。ここで信勝の言われるままにすれば、いま私に付いている国人達は私を頼り無い主君と見放すでしょうね。」

「かといつて、このまま相手の主張を無視していれば、今回の一件を大義名分に蜂起しかねません。現在の姫様派と信勝様派の支持は信勝様に大きく傾いている上に、信勝様には六さんが守役として付いています。今のままでは分が悪すぎます。十点です。」

「…ああ、なるほど。そういう次第じゃったか。」

信長と長秀の会話を聞き、秀吉が納得したように呟く。その様子を良晴は不思議に思う。

「秀吉さん、そういう次第って、どういう事なんだ?」

「全て向こうの筋書き通りという事じゃ。昨日のあやつ等の態度がどうにも腑に落ちんかったが、最初から犬千代に刀を抜かせるつもりじゃったのだろう。それを理由に信奈様を詰問し、要求を受け入れなければ蜂起する大義名分とし、要求を飲めば信奈様の評判を大きく落とす事ができる。自分がケガをする事に目を瞑れば、損は少なく利の大きい策じゃ。」

「恐らく秀サルの言う通りでしょうね。信勝は兎も角、周りの奴等は私よりも従順な信勝が当主になって欲しいと思ってるわ。だからって、いつ今川が攻めて来てもおかしくないこの時期に行動に移すことはないじゃない!」

「姫様の心中はお察しします。けれど、今はとにかく対策を練ることが急務です。相手方は戦になる事を見据え、既に準備を始めているかもしれません。私達も早急に戦仕度をする必要があります。」

「…わかつてるわ。私だって分かつてるのよ!」
信奈の表情からは怒りや焦燥、そして苦悩と悲しみの感情が読み取れた。

信奈にとって、信勝は決して憎い存在ではない。寧ろ、子供の頃は姉弟仲良く遊び、おやつのいろいろな分けあつた仲である。

それが何時からか、立場や環境の変化から隔たりが生まれ、今では

お互いに刃を向け合わんとする所まで行き着いてしまった。

このような状況、信奈は望んではない。

それでも織田家当主として、そして己の野望と同じ夢を見る者達のため、望まぬ戦をせねばならぬ事は理解していた。

それが余計に信奈の顔を歪ませた。

そんな思い悩み信奈の前に、秀吉は思索する。

(信奈様が苦しんでおられる。ならば儂はどうするか？決まっておるではないか。)

忠誠を誓った主君が思い悩み、笑顔を失っている。

だったら、主人を笑わせる猿である事を望む男がやるべき事は一つである。

「信奈様、僭越ながら、この秀サルに策がございます。上手くいけば信勝様との争いを避け、少なくとも衝突を遅らせる事が出来ます。」

正座で信奈の前に進み出て、頭を深々と下げたまま秀吉は信奈に申し出る。

周囲の視線が秀吉に集まる中、信奈は僅かに目を見開き秀吉の頭を見下ろす。

「策ってあんた、本当にそんな物があるの？」

疑心と期待が混ぜ合わせた言葉を聞きながら、秀吉はゆっくりと面を上げる。

そして、あらゆる不安を吹き飛ばすような大輪の笑顔で、堂々と言い放った。

「心・配・御・無・用!!!この秀サルめにお任せ下さいませっ!!」

今宵はここまでに致しとう御座ります。

調略せし者

「信勝様方が我らとの戦を望む理由は、戦に勝利する事で多大な益が得られる故。そして、戦力差により戦を有利に進め易いが為にございます。然らば、先ずは相手方の有利を潰し、容易に攻めかかれ無い状況を作り出すが良策でありましょう。即ち、我らが成すべきは『敵を滅らし、味方を増やす』策にございます。」

「敵を滅らし、味方を増やす。なるほど、調略を用いるという訳ね。」
「如何にもっ！その通りにございます。」

いち早く秀吉がやろうとする事を察した信奈に秀吉が首肯すると、周囲の者達も強く興味を示した。

「確かに調略というのはこの場合間違っていないですね。八十点をあげられます。ですが重要なのは誰を調略するかです。信勝様陣営から寝返ってくれるような人に心当たりがあるのですか？」

「いえ、生憎。そもそも敵方の多くは信奈様に反発してか、信勝様方有利と見てその馬尻に乗った者達ばかり。わざわざ劣勢の我々に鞍替えする者は望み薄であります。」

実のところ、利を示さずとも相手方から寝返させる方法は幾つかある。それこそ、弱味を握って言いなりにさせたり、流言を用いて敵陣営を内部崩壊させる等である。

しかしながら、それらの方法は時間と労力が掛かるため今回は除外している。

「ではいったい誰を？」

「我らが引き込むは、この状況において未だ静観し、どちらに付くか明らかになっていない中立派、その中であって織田家へ多大な影響力を持つお方です。」

「それは…」

信奈の問い掛けに、秀吉はスツと背筋を伸ばし答える。

「…村井貞勝様にございます。」

「村井様を…」

「確かに村井様ならば。しかし…」

「あの『地蔵』を味方にねえ…」

万千代、久太郎、信奈の三者がそれぞれ反応を示すが、どうにも微妙な反応である。

それを不思議に思った良晴が口を開く。

「なあ、その村井つて人はどんな奴なんだ。」

「…村井様は先代信秀様の頃より織田家に仕えている宿老です。主に内政や外交を担っていて、その分野では間違いない最も織田家に貢献されてます。」

「父上の信任も厚く、津島の港の開発を一手に任されていたわ。人当たりも良く商人や農民達からも信頼され、おまけに父上の使いで御所にも出向いていたから京の公家とも繋がりがある。いつも穏やかな笑みを絶やさず物静かで、それでいて任された仕事はいつの間にか不足無く終わらせているから、付いた渾名が『地蔵の貞勝』。あいつを味方に引き込めれば、日和見をしている者達も一気に引き込む事が可能ね。」

「おおっ！すげえ人じゃねえか。すぐにも味方になってくれるよう説得に…」

「したわよ、とつくの昔に。けれど断られたの。」

「はあっ!?!どうしてだよっ!」

「地蔵は父上に対し今でも忠義を尽くしてるのよ。父上の子である私か信勝のどちらかに加担し、もう一方に敵対するのは父上から受けた恩に反する行いだと言ってるの。だから信勝からも誘いはあつたみたいだけど、そっちも断つたそうよ。」

良晴に貞勝との関係を説明をする信奈であつたが、その表情は複雑そのものである。

父の葬儀の場において、位牌に抹香を投げつけるといふ暴挙を為した信奈であつたが、その信念にあるのは父に対する深い敬愛であつた。

それ故に貞勝を味方にする事の有効性を認めながらも、いまだに信秀へ忠義を尽くしている貞勝の心を無下にするのは僥び無いとする心境にあつた。

そんな信奈の心の内を知ってか、秀吉は優しく語りかける。

「ご安心下さいませ。この秀サル、決して無理矢理村井様を従わせようとは考えておりません。心に語りかけ、そのお心を信奈様へ向けて頂くよう、言葉を尽くす所存にございます。」

「…わかつたわ秀サル。あんたの思う通りにやってみなさい。」

「ははっ！有り難き幸せに御座います。然らば、村井様の説得にあたり、信奈様をお願いしたき事が御座います。」

「ん、なに？言ってみなさい。」

「はっ、お願いというのは…」

そうして秀吉が申し出た願いは、信奈の目を丸くさせたが最終的には認められる事となった。

その翌日、秀吉は早速村井貞勝の屋敷を訪問していた。

前日に信奈の元を辞した後、秀吉はすぐに貞勝宛に翌日訪問したい旨を記した手紙をしたため、五右衛門を使い貞勝邸に届けさせた。いた。

五右衛門には返事を受け取るように申し付けていた為、その日の夕刻には訪問を是とする返事を受け取ることが出来た。

秀吉が護衛として忍装束の者を連れて家人に名を告げると、すぐに屋敷に入れられ奥座敷へと通される。そこには既に屋敷の主人が茶の準備をしつつ待ち構えていた。

まず目に着くのは噂通りの穏やかな表情。所々に白髪が見えるが背筋はピンと伸び、実年齢よりも若く見える。

秀吉と供の者が部屋に入ると席へ案内し、秀吉が貞勝の対面に、供の忍が秀吉の後ろに座ると、貞勝は深々と頭を下げた。

「お初にお目にかかります。織田家宿老、村井吉兵衛貞勝に御座います。」

「木下藤吉郎秀吉に御座ります。此方は道中の護衛として供をさせました忍びの者です。」

「遠路はるばるぐ足労頂き、誠に有り難き事にて。まずは茶でも。」

そう言うと、貞勝は慣れた手つきで茶を仕立てていく。

目の前に出された茶碗を、秀吉は静かに両手で持った。

「お手前、頂戴致します。」

茶碗を左手に載せ右手を添えるように持つと、左手に二度少しずらし口を着ける。

先ずは一口飲み、続けて最後まで飲んで行き、飲み終わりに「ずずつ」と音を鳴らすと親指と人差し指で軽く飲み口をなぞり、予め用意しておいた懐紙で指を拭く。

そうして茶碗の正面を貞勝に向けると、畳に手を着き深々と頭を下げた。

「結構なお手前に御座います。大変美味しゅう御座いました。」

「…いやいや、私こそ、見事な作法を拜見させて頂きました。木下殿、以前どなたかに師事されていた経験でも？」

「…ほんの手習い程度ですが、堺の商人より少々。」

この当時、茶の湯の道は最先端の流行であり、流行の中心は公家や京を活動の拠点とする武家、あるいは豪商達であった。そのため、茶の湯の作法を修めているという事は文化人としての証であり、一種のステータスとなり得る。

御所に対する織田家の窓口を勤めてきた貞勝は、目の前に座る秀吉が少なくとも茶の湯において京の文化人に劣らぬ教養を身に付けていることを察し、同時に秀吉が単なる信奈の使いっ走りでは無いことを見抜いた。

「なるほど、そういう事でしたか。よほど良い師に恵まれたそうでした。ところで、本日はどのような用向きでしょうか？まさか、お茶を飲みに来ただけでは有りませぬ。」

「お察しの通り。某は信奈様の名代として参りました。昨今の尾張を取り巻く情勢不穏を慮り、信奈様は貞勝様の御力添えを所望しております。本日はその御心を御伝えすると共に、我が主君への御助力を御願いしとう御座います。」

「…やはり、そういう次第でしたか。」

用件を聞いた貞勝は口元の笑みは湛えつつも、少し困ったように目を伏せた。

「せっかくのお誘いですが、辞退させて頂きとう御座います。」

「…それは先代への義理立て故にでしょうか？」

「はい。元は在野にあつたこの身が、こうしてこの場にあるは他ならぬ信秀様のお引き立て有つてこそに御座います。例え如何なる理由が有ろうと、恩ある人の血を引きし方に刃を向けるは不忠の極み。この貞勝、日和見者の謗りは受けようとも、不忠者の謗りを受けるは耐え難き事にて、どうか御容赦頂ければ幸いです。」

「…なるほど、聞きしに勝る忠節ぶりに御座います。」

きつぱりと申し出を断つた貞勝に対し、秀吉の口から感嘆の声が漏れる。

「御理解頂けたでしょうか？」

「無論！己の損得よりも、亡き主君への忠義を大事にし、その恩を報いようとする村井様の有り様は、正しく忠臣の鑑に御座います。きつと信奈様も、村井様の御心を尊重して頂く事でしょう。」

笑顔でそう語る秀吉に、貞勝の表情にも柔さが戻った。

「とでも言うと思いませんか？」

「……は？」

朗らかな空気から一変。秀吉から出た唐突な一言に、貞勝は呆けた反応を示してしまう。

秀吉の顔を窺えば、先程までとは一転し不遜な態度が表情から滲み

出ており、目には蔑みの色さえ見てとれた。

あまりの変貌に貞勝は己の心にさざ波が立つのを感じていた。「どうにも得心成らぬ事が有りましてのう。先程から村井様は先代への忠義を口にされてますが、織田家への忠義には一言も申されてませぬなあ。」

「…何を言うかと思えば。主家あればこそその我が身にて、御家への忠節も先代様への物と変わり無く。」

「ならば何故火急に座しておられる。いま織田家は東の今川の脅威に晒されながら、二つに別れ内紛の危機にあります。村井様ほど家中に影響力を持たれる御方なら、両者の仲を取り持ち、対今川へ一致団結させることも可能な筈。御家の大事を思うのなら、何故それを為さりませぬ!？」

「それは…」

「考えられる理由は二つ。一つは先代への忠節ばかりに目が向き、御家の危機への意識が疎かになったが為。もう一つは…」

秀吉の目がスツと細くなる。

「織田家など滅びてしまえと、思っている為。」

貞勝の顔から笑顔が消えた。

「…木下殿、無礼が過ぎまするぞ。」

「無礼は百も承知。然れど、何の根拠も無しに申しているわけでは御座いません。此方を拝見させて頂きました。」

そう言つて秀吉は懐から書類の束を取り出す。それが何なのか直ぐに察し、貞勝の眉がピクリと動く。

「これは貞勝様が先代が亡くなって以降に上奏された策案に御座います。田畑の開墾、港の拡大、国人との会合、御所への寄進。いずれも織田家の行く末を案じ、発展を願ひし施策でありましょう。しかし、いずれの策も実行されておりませぬ。理由は信奈様と信勝様の後継争いで、施策に掛かる余裕が無い為に。」

ちらりと秀吉が貞勝の顔を窺えば、先程に比べ眉間の皺が深くなっている以外大きな変化は無い。

「…御家を想い考えた策が、跡目争い等という理由で打ち捨てられるというのは無念極まり無い事でしょうなあ。それに村井様には信奈様への怨みもありましょう。」

「…何の怨みがあると申されるか？」

「先代の葬儀にて。」

ギリツという音が貞勝の口元から漏れるが、秀吉は何も聞こえぬかの如く涼しい表情で膝を撫でる。

「件の葬儀で本来喪主を務めるは後継者である信奈様だったところを、信奈様がその任を放棄したが為に弟君の信勝が喪主代理を務めたとか。その上で実質的に葬儀の手配を任されたのが村井様だったそうで。」

「……………」

「村井様は急に喪主を務める事になった信勝様に代わり、祭場の準備から弔問客の相手まで随所に気配りを成されたそうですね。大恩ある人との、大切な別れの席。きちんと滞り無く葬儀を行い、先代に安心して旅立って頂きたかったです。それを信奈様が台無しにしてしまわれた。」

葬儀の場に遅れて現れた信奈は、狼狽える家臣達を尻目に父の位牌へ抹香を投げつけた。信奈がうつつけの異名を確固たるものとし、多くの家臣の信を失った事件である。

信奈を擁護するならば、自身の才を誰よりも理解し愛してくれた父の急死、そして祭場で目の当たりした、葬儀に託つけ弟にすり寄ろうとする家臣の姿に激しく心を乱した末の突発的な振る舞いと言う他無いだろう。

それでも、信奈はもう少し周囲を見渡すべきであった。祭場には織田信秀の死を心より悲しみ、悼んでいた者がいた。信奈の振る舞いは、その者の心を踏みにじる行いであった。

「私ならとても耐えられぬでしょう。己の生涯の主君と定めた御方の後継者が、一人は父の籍離の場を荒らし、もう一人は己の力量も弁えず家臣の言われるがままに謀叛を起こそうとする。まさしく先代の築いてきた功績を崩さんとする行いなれば、いつそ潔く滅んでくれた

方が先代の名に要らぬ傷が付かなくて良いと。」

ふと、秀吉の目が遠く見るように視線が上を向く。まるで、過去を思い返すが如く。

だがそれも一瞬の事であり、直ぐに貞勝を見据える。

「故に村井様は何もしない。このまま姉弟で争いどちらが勝とうと、大國今川の侵攻を前に内紛で疲弊した織田家に抗う術は無い。そして、そこから村井様にとって本番でありましょう。」

秀吉は身を乗り出し、挑発的な笑みを貞勝に向ける。

貞勝は無表情のまま、膝の上で拳を固く握り締め秀吉を睨み返す。

「尾張が今川に飲み込まれた時、この地に明るい者を今川は欲しましようなあ。裏方に通じておれば尚良し。そこにおいて村井様はぴったりな御仁。戦場に出る事も少なく、怨みを抱く者も今川には居らぬでしょう。即ち、例え織田が今川に滅ぼされようと、村井様が今川で立身する芽は十分にあるという事。寧ろ下手な抗いこそ無用。村井様ほどの器量の持ち主なれば、今川にあっても尾張一國の采配を任せられる事も叶いましょう。しかし…」

これまで以上の蔑みと卑しさを込め、嘲笑と共に秀吉は言う。

「なんとまあ、小賢しい考えで御座いますなあ。このような御方を重用するとは、信秀公も案外底が浅い。」

次の瞬間、秀吉は咄嗟に腕を顔の前に翳す。

右手に鈍い感覚が走り膝の上に何かが落ちた。それは秀吉が飲み干し、貞勝へ返した茶碗である。

目の前には怒りのあまり顔を赤らめ、肩で大きく息をつく貞勝がいた。どうやら秀吉に茶碗を投げつけたようだ。

「ほぎぎよったなっ！貴様、ごときになんか分かるっ！どのような気持ちでこれまで御仕えしてきたか。いったい何が「くくくっ」？」

不意に押し殺したような笑い声が聞こえる。

声の出所を探れば、秀吉の護衛である忍が肩を細かく震わせていた。

「くくくくっ、あはははははははははははははははっ!!」

遂には耐えきれなくなり口を大きく開き大笑し始めた忍に、貞勝は

虚をつかれ呆然とするが、直ぐに顔を引き吊らせた。

「あははっ、地蔵、あんたとは物心ついた頃からの付き合いだけど、そういう顔は初めて見たわ。普段の薄ら笑いよりずっと人間らしいじゃない！」

その声を貞勝は知っている。何より自分の事を面と向かって地蔵と呼び捨てにするのは、先代亡きあと一人しかいない。

秀吉が苦笑いを浮かべながら立ち上がると、代わって護衛が秀吉の座っていた場所にどかりと座った。そして、顔を隠していた布を取り払い素顔を露にする。

「考えてみれば、こうやって面を付き合わせて喋るのは初めてね、地蔵。」

織田家現当主 織田信奈がそこにいた。

「ひ、姫様これはいったい…」

「秀サルがあんたの心を間近で確かめないと、信を得ることが出来ないって言うから、一芝居打ってみたのよ。予想以上に面白かったわ。それよりも、私はあんたに言わなきゃならない事があるわ。」

いまだ動揺を静められぬ貞勝であったが、信奈の言葉に先程までの秀吉とのやり取りを思い出し身を固くする。

そんな貞勝に信奈は真っ直ぐな視線を向け、口を開く。

「本当にごめんなさい。地蔵がそこまで父上の事を思っていた事を、私は考えてもいなかったわ。謝っても許してもらえないなら、気が済むまで罵ってくれても構わない。」

「…姫様。」

「それでも、もし心に父上では無く、私への忠心が一片でもあるのなら、どうか私に力を貸して欲しいの。都合が良い話とは自分でも思うけど、私の夢の為には地蔵の力がどうしても必要よ。」

「……………その夢とは？」

「武を以て、天下を統一。そして海の外へと打って出て、この世の果て

にまで私の名を響かせる。」

堂々と胸を張り、まるでそれが天命であるかのように信奈は己の夢を宣言する。

いまだ尾張一国さえ纏めきれて無い小娘の大言壮語にも関わらず、この娘ならやりかねないという覇気が信奈から放たれていた。

「…その夢において、私の役目は？」

「日ノ本の政の全て。」

「……………はい？」

「私は日ノ本の外に行くのよ。その間の政は信頼できる人間に任せないと。その点、地蔵なら問題なく任せられるわ。」

「……………くくくっ、くははははははははははははっ!!」

今度は貞勝が大笑する番であった。

よもや一国のみならず、日ノ本の全てを任せられるとは。このような口説き文句を言われた者は、日本広しと言えど他に無いだろう。

「くくくっ、なるほど。先代が何故あなたを後継に定めたか、いま漸く分かりました。」

涙さえ浮かべながらも、貞勝は目の前の主従を見る。

いったい今日一日でどれ程この二人に心を揺さぶられた事か。

心の内を見透かされ肝を冷やし、浅ましさを罵られ怒りを燃やし、虚を突かれたあまり狼狽えおののき、今は涙が出るほど笑っている。

こんなもの、あの人が後継に示さぬ筈が無い。これ程のうつけを知って、誰が背中を押さずにいられようか。

信奈にとつて日ノ本全てを手にすることさえ、更なる夢の手段でしか無いのだ。

なんとという強欲。なんとという馬鹿馬鹿しさ。然れど、なんと面白き夢だろうか。その夢物語を共に語れるのなら、今までの全てを捨てても良いとさえ貞勝は思ってしまった。

「くくくっ、尾張一国でさえ多分と思っていたのが、よもやこの年にして日ノ本の全てを望む事になるとは。」

「何言ってるのよ。私の力になるのだから、それくらい望んで当然でしょう。」

「くははっ、然りにて。」

存分に笑ったお陰か、最初の頃よりスッキリとした表情になった貞勝は、一旦笑みを消し畳に拳を着けた。

「この村井貞勝、織田信奈様にお力添えしとう御座います。これよりこの身全てを信奈様の夢に捧げ、命尽きるまでお仕え致します。」

「ふふっ、存分に励みなさい。」

貞勝の言葉に、信奈は満足気に微笑む。

ここに、後に『京の総督』と宣教師から称される天下の行政官が信奈の元に馳せ参じた。

貞勝の働きは、信奈の夢の実現に大きく寄与することとなる。

「じゃあ早速だけど、地蔵にやつて欲しい事があるわ。」

「はっ！何なりと。」

勇ましく返事をする貞勝に、信奈は畳の上に転がった茶碗を拾い差し出す。

「茶席を一つ、手配しなさい。」

それから数日後、清洲の城下にある御触れが出された。

内容は信奈主宰の茶会を清洲城の庭園で開催するというものであったが、当初は冷ややかな反応しか得られなかった。

国内で勢力を二分にする争いが起こらんとしている時期に何を呑気に、と多くの者達は思ったのだ。しかし、その茶会の手配を貞勝が行うという噂が拡がると状況は一変する。

尾張の商人達にとって、村井貞勝の名は単なる織田家の一家老に止まらない。先代の頃より世話になった商家は多く、その手腕と人脈の広さは織田家の者以上に知っていた。

無論、織田家においても貞勝が信奈に付く意味は大きく、日和見に徹していた者達の殆どが茶会への参加を打診し、信勝派とされていた者からも様子見なのか参加しようとする者が現れた。

こうした中で茶会当日、晴天にも恵まれ信奈主宰の茶会は盛大に幕

を開けた。

この茶会に参加した者達の目的は、本当に貞勝が信奈派に付いたのかを確かめるのが殆どであった。つまり彼らの本命は貞勝であり、主催者である信奈の方はオマケである。

しかし、貞勝に伴われ姿を現した信奈を見て、彼らは目を剥く事となる。

信奈が着こなすは普段のうつけの装いではなく、越後上衣の艶やかなる着物姿である。髪を解かし、薄く白粉をして唇に紅を差した相貌は、紛れもなく織田家の姫であった。

「待たせたわね。それじゃ始めましょう。」

小さく笑みを浮かべ客人に語りかける信奈の姿に、見惚れるなどいう方が無理であった。

それから信奈は客人達の間を行き来し歓待の言葉を交わし、自らもお茶を立て客人達に振る舞った。その所作も実に見事なものであり、伝え聞きでしか茶の湯を知らない者には新鮮な驚きと感動を与えた。

また、常に側に控えた貞勝は良く信奈を補佐し、客人に主従の親密さを印象づけた。

こうして盛況の内に茶会が終わると、最後に謝辞を述べ遠く無いうちにまた茶会を開く事を約束し、信奈と貞勝は奥に下がった。

そうして二人の姿が見えなくなると、客人の一人がふと漏らした。

「いったい何処の誰だ？あれをうつけと申した馬鹿者は。」

その言葉を否定する者は一人もいなかった。

茶会の反響は直ぐに現れた。

翌日にはこれまで態度を保留していた中立派がこぞつて清洲城に参内し、信奈の支持を約束した。

これに合わせ多くの商人が信奈とのお目通りを願い、武器の手配や軍資金の援助を申し出る。

こうして、一時は信勝派が多勢を占めていた尾張の勢力図は、両者が拮抗するまでに押し返し、両者の戦を声高に叫んでいた者達も消沈

せざるを得なくなった。

「漸くここまで持つてこれたわ。けど大切なのはここからよ。今の勢いがある内に信勝派を切り崩して尾張をまとめ、今川への備えを万全にしないと。」

最悪の状況を脱したとはいえ、いまだ織田家は内患を孕み、外敵に対処せねばならぬ。

それを心に刻み、信奈は前を見据え己の夢に向け歩まんとしていた。

しかし、それを阻まんとする者達もまた既に動き出していた。

駿河の国は今川館で一人の青年が縁側で書状を眺めている。中には尾張に潜ませた草が集めた、織田家周辺の動きが記されていた。

中身を読み終えると丁寧に畳み、青年は小さく息を吐いた。

「村井貞勝は信奈に付いたか。あの男は日和見に終始すると思っていたが。」

まあ良い、と呟き青年は近くにいた小姓を呼び寄せ、口許に耳を寄せさせる。

「例の件、予定通り進めるよう服部に伝えよ。あれにはそれで伝える。」

小姓は頷き、素早くその場を後にする。その姿を見送り、青年は瞼を閉じ今後の展望を黙想しようとする。

しかし、ほど無くしてパタパタという足音によって中断する事となった。

「あら、泰朝さんこんなところにいましたの。探してましたのよ。」

「これは姫様、如何なる用向きで？」

「蹴鞠の相手をして下さらない？元康さんに相手をしてもらったのですが、へばってしまいましたの。」

そう言つてホホホと笑う主君に苦笑いを浮かべるも、泰朝と呼ばれた青年は腰を上げ、尻に付いた埃を払う。

「そうですね。丁度仕事も一区切り付いた所ですし、私で良ければ御相手いたしましたでしょう。」

「そうですね。あなたは普段から働き過ぎなのですから、偶には息抜きも必要ですよ。」

「はははっ、そう言う姫様は普段から息抜きをし過ぎに思いますか?」

「うっ!?わ、私だってやる時にはやりますわ。それに、お仕事は一区切り付いたのでしょう?」

「ええ。万事抜かり無く、問題なく事は進んでおります。」

青年、朝比奈泰朝の目が怪しく光った。

「尾張を攻め、織田を潰す策は既に完了いたしています。」

今宵はこれまでに致しとう御座りまする。

始まりの戦い

その凶報は突如として清洲を襲った。

いつものように信奈が朝食の湯漬けを片手に、秀政から本日の執務の予定を聞かされていた時、慌ただしい足取りで万千代が参上した。

額に汗をかき、息に荒らさを残したまま、万千代は挨拶もそこそこに信奈へ告げる。

「火急の知らせにて御容赦を。信勝様御謀反。末森にて兵を集めています。」

「…陣触れを出しなさい。久太郎、主だった将は登城せよと連絡をつ！」

「御意っ！」

弟による謀反の知らせに信奈は冷静かつ迅速に対処する。元より、全く予想していなかった訳では無い。

秀吉の策によって勢力を拮抗させる事は出来てもそれに安心する事無く、いつ事を構えるに至っても良いように警戒を怠らず準備をしてきた。

故に信奈を心底焦らせたのは、別の伝令によってもたらされた次の報であった。

「ひっ、姫様！急事に御座りまする！」

「信勝の事なら既に聞いてるわよっ！」

「左に非ず！鳴海城主山口教継返り忠！城ごと今川に寝返りました！」

「なんですって!?!」

鳴海城は尾張と三河の国境にある城である。ここを今川に取られるのは、織田にとって首もとに刃を突き付けられるに等しい。

「…蝮よ。美濃に使者を送りなさい！鳴海城が敵方に付いた以上、今川の侵攻は時間の問題よ。蝮に何時でも救援に来れるよう、援軍の準備を要請しなさい！」

「畏まりました！」

踵を返し慌ただしく出ていく伝令の背を見送り、信奈は拳を膝に打

ち据える。まだ、現状を打開する術は残されている。今はただ、出来ることを全てやりきる他無い。

そうしている内に評定の間が続々と家臣が参上してくる。末席には良晴と秀吉もいた。

他の者達が一様に顔を強ばらせる中、良晴は物珍しげにキョロキョロと周囲を眺め、秀吉は悠然と構えたまま真つ直ぐに前を見つめている。

そんな場違いな二人の様子に、僅かばかり信奈の緊張が解れる。

そうして主だった者が揃い、いよいよ評議が始まろうとしたその時、美濃に救援を依頼しに行った筈の伝令が先程より更に顔を青くし部屋に飛び込んできた。

「美濃にて変事に御座りまするっ！」

「変事？ いったい何があつたの!？」

「斎藤道三が嫡男、義龍が謀反の咎で弟君二人を誅殺！これに反発する道三に対して挙兵し、美濃は内乱に陥りました！」

「なっ!？」

流石の信奈も、この報には言葉を失ってしまう。

美濃で内乱が起きた以上、道三からの援軍は絶望的。つまり、信奈達は信勝による謀反、そして後に控える今川の侵攻に対して単独で当たらねばならぬ公算が高くなった事を意味した。

家臣達の間にも動揺が走り、如何に為すかと主君の方を向き、すぐに視線を反らした。

「おのれ義龍。殺らいでか…」

上座に座る主君の目は怒りに燃えていた。

その怒りは濃密な殺意となって全身から漏れだし、部屋の空気を一気に底冷えさせる。

下手に目を合わせれば義龍よりも先に己の首が跳びかねないと思わせる程の殺気に、多くの者は視線を下に向け体が震えぬよう耐える他なかった。

そんな信奈の怒りを静めるのは、この場で誰よりも長く仕えてきた万千代である。

「姫様のお怒りはごもつともですが、その怒りを向ける相手はここにはいません。怒りに飲まれ、為すべき事を見失うのは零点以下です。」
万千代の忌憚無き言い草に一瞬は信奈からの圧が重くなるが、すぐに部屋を満たさんとしていた殺気が引いていき、信奈が大きく息を吐くと同時に霧散した。

「そうね。今ここで当たっても何にもならないわ。ありがとう万千代。頭が冷えたわ。」

「いえいえ、私の方こそ無礼な物言いをしてしまい申し訳ありません。」

主従の穏やかなやり取りに家臣達もホッと一息をつく。

しかし、次に貞勝の口から出た言葉に評定の間は再び揺れ動く。

「随分と都合が良いすぎますな。」

「都合が良い？地蔵、今のこの状況の何処が都合が良いと言うの？」

「都合が良いと言うのは今川にとつての事。信勝様の謀反、鳴海城の寝返り、美濃の内乱、一つ二つが立て続けに起こる事は御座いまいしよ
うが、三つ全てほぼ同時にと言うのは偶然と片付けるには出来すぎでありましょう。」

「つまり地蔵は、いずれの事象も誰かが狙って同時期に起こしたものだと言いたいよね。けど、そんなこと出来る人間がいるのかしら？」
「少なくとも二人、心当たりが御座います。一人は信奈様の義父殿である斎藤道三様。もう一人は今川家軍師、太原雪斎で御座ります。」

貞勝の告げた名に家臣団が一斉にざわめく。特に信秀の頃より老臣ほど反応は顕著であり、その筆頭である佐久間信盛に至ってはその場に立ち上がってしまうほどであった。

「さ、貞勝殿、それは考えすぎには御座いませぬか？雪斎は既に鬼籍に入っておりますぞ。」

「佐久間殿、貴方も小豆坂の戦を経験しているのなら知っていますよ。あの僧の知略はまさに鬼謀。死に際し、我らを滅ぼす策を残していたとしても、何ら不思議では在りませぬ。」

貞勝の言葉に信盛は閉口する。

小豆坂の戦は信奈の父、信秀が三河の支配権を確立するために松平

家の領地に侵攻して起きた戦であり、今川家は松平家への援軍として参戦していた。

その時の今川軍の総大将こそ、僧籍にありながら今川の軍師として今川義元に仕えていた太原雪斎である。

この戦、当初は織田が有利に進めていたが、伏兵を用いた雪斎の巧みな采配に翻弄され、織田軍は敢えなく総崩れとなり敗北した。

勢いに乗った今川軍は織田家の三河侵攻拠点であった安生城を攻め落とし、城主であった信奈の兄、信広を捕らえる事に成功。

その身柄を引き換えに織田家の人質にあつた松平家嫡子、竹千代の身を奪還し、逆に三河における今川の支配を磐石なものとしたのであつた。

この一連の出来事は織田家にとって非常に手痛い敗戦であり、ある種のトラウマともなつていた。

故に貞勝の述べる事は有り得ると思ひながらも、信じたくないと現実逃避する者も少なからずいた。

そうした者達の心を知つてか知らずか、貞勝の話を聞いた信奈は、この日初めて笑みを浮かべた。

「なるほど、黒衣の宰相が一連の凶事に関わっているかもしれないのね。ふふつ、漸く面白くなつてきたじゃない！」

「お、面白いですと!? 姫様、状況が解つておいでですか! もし本当に雪斎が画いた通りに事が進んでいるのであれば、間違いなく最悪の事態ですぞー！」

「もちろん解つているわ、信盛。だけどこれは最悪であると同時に、父上の受けた恥辱を晴らす絶好の好機よ。織田信秀の娘である私が雪斎の策を破り、今川の野望を挫く。これ程までに父上の名に着いた傷を治す方法がある? これは織田家の存亡と同時に、父上の名誉を掛けた戦いよ。」

信奈の言葉に、はっ! と家臣達が目を見開かせる。

彼らもまた、器用な御仁としてその名を知られ、尾張の発展に多大な貢献をした信秀に大なり小なり恩を受けた者達。信秀の名に誉れを取り戻す戦いとなれば、それは命を掛けるに値する理由となつた。

何より、如何に弱兵と罵られる事の多い尾張兵といえど、その根底には御恩と奉公、利より名を惜しまんとする武士の魂を眠らせている。

信奈の言葉は、彼らの闘志に火を着けた。

「やりましょうぞ。昔日の敗戦によつて傷付いた信秀様の名を、今こそ取り戻しましょうぞ！」

「然り…このまま今川の好き勝手にさせるは口惜しい。東海一の弓取りなどと煽てられ伸びきった鼻を叩き折ってやるのじゃ！」

「ちよつと、まだ今川と事を構えるより先に信勝をどうにかしなきゃいけないのよ。みんな気が早いわね。」

一転して血気盛んになる家臣達を呆れた様子で諫めながらも、その口調はどこか楽しげであり、傍目にも機嫌の良さが信奈の表情から窺えた。

「そうですね。とにかく先ずは、信勝様達をどうするかです。後の事を考えれば、短時間かつ敵味方双方の損失が少なくあれば上等。ただ勝つだけでは二十点です。」

万千代の懸念は信勝との戦で互いの兵力を消耗し、今川に漁夫の利を取られる事である。

現在、信奈と信勝の兵力は拮抗しているが、信勝方には織田家武勇筆頭の柴田勝家がいる。これに対抗しうる武将は信奈方にはいない。

そうした中で被害を最小限に止めつつ勝ちに行くならば、策を講じる必要がある。

「それについてなんだけど、私に考えがあるわ。上手くいけば迅速に、かつ消耗無く戦に勝てるの。」

そう言つて信奈が語つて見せた策に、家臣達は一部の者を除いて驚嘆する。

「確かにその策が上手くいけば、被害少なく勝ちを得られましょう。」

「問題は柴田に誰を当てるかに御座るな。並大抵の者では、あの姫武者は止められまい。」

「ああ、それなら丁度良いのが一人いるわ。」

「その者とは？」

問い尋ねて来る家臣から視線を外すと、信奈は自分から最も離れた末席に座る者を見る。

「良サル、あんたに六の相手を任せるわ。」

「…お、俺があゝ。」

主だった者達の注目が集まる中、評定の間は良晴の間の抜けた声が響いた。

一方同じ頃、信奈に対する信勝の居城、末森城でも決戦に向けての軍議が行われており、信勝の守役を務める勝家が神妙な面持ちで主君に相對していた。

「信勝様、御再考願えませぬか。信奈様はこの短期間で同士を集め、戦準備を万全としてしていると聞きます。しかも国境では城が寝返り、いつ今川が攻めて来ても可笑しくない状況。信奈様との戦、負けずとも相応の被害は必定なれば、ここは一時的に和を結び、今川に対応するが上策です。」

言い終えると勝家は伏して主の反応を待つ。

戦場での武勇から猪武者と揶揄される事もある勝家だが、決して脳筋なだけではなく、武人として優れた戦略の才を持ち得ている。

故に織田家が危機的状況に在る事を正しく認識し、家督を奪わんと挙兵した信勝を何とか思い止まらせようと嘆願する。

しかし、信勝の傍らから望まぬ横槍が入る。

「これは異なことを申される。織田随一の武勇を誇る柴田殿ともあるう御方が臆されたか？信奈様に助力する村井達は所詮勘定侍。戦では何の武功も在りませぬ。数ばかり揃えただけのカカシならば、柴田殿にとって物の数では御座いますまい。」

薄ら笑いを浮かべ意見する林通具に、余計な事を言うなという感情を込めて勝家は睨み付ける。

それに気付いているのかいないのか、通具は勝家を無視して主に物申す。

「さあ、信勝様、今こそ織田家を正道に戻す時に御座います。織田家を

率いるに相応しきは、信勝様のような礼儀を弁え、心穏やかなる御方。御母堂様もそれを望んでおり、天におわします先代信秀様も数々の醜態を御覧じられば考えを変えておられるでしょう。」

「…うん、そうだ。これは織田家を正しき方向へ導く為なんだ。姉上では織田家を纏めきれない。だから僕が姉上に代わり、織田家の棟梁にならなきゃいけないんだ！」

「御立派な志に御座いますー！」

調子の良い事ばかりを述べ主人を増長させ、己の意のままに操る通具に勝家は苦虫を噛み潰した表情になるが、弁舌に劣る勝家には主に考えを変えさせる論説が思い浮かばなかった。

「それじゃあ戦の仔細については勝家に任せるよ。僕はあまり戦が得意では無いからね。出来ない事を部下に任せる事も主君の度量だからね。」

「……御意に御座います。」

言葉少なに主命を受諾する勝家。その胸中には先任者の急死により突如信勝の守役に着かねばならなくなった己の不幸と、織田家の将来への暗鬱たる思いが渦巻いていた。

そして遂に決戦の時に至る。

舞台は尾張国春日井郡は庄内川に程近い稲生の地。

俗に云う、稲生の戦いの火蓋が切って落とされた。

信勝軍の大將を務める勝家は、陣内から相手方の陣容を窺っていた。

「信奈様達の数はおよそ千二百。此方とほぼ同数で全軍を率いて来たようだな。しかし何だあの陣形は？」

勝家が不審に思うは信奈軍の構えである。

信奈軍の陣形は守勢の構えであり、普段の信奈であればあまり好まないものである。

そんな信奈軍の様相を、勝家の隣で通具が嘲笑う。

「ふむ、どうやら敵方は柴田殿の武勇を恐れるあまり、殻に籠る亀に

なつた様子。柴田殿、貴殿にはあの守りを撃ち破れますかな？」

「…………ただ守るばかりであれば他愛なく。だが首を引つ込めていても、いつ噛み付いてやろうかと機を窺う亀もいるぞ。」

「ふん…敵方にそのような気概のある者が残っておるものか。」

何を根拠にと言おうとも思ったが、下手に言葉を続けたところで空気を悪くするだけだと勝家は黙する。

それを納得したと受け取ったのか、具通は満足そうに腕を組む。

「さて、敵が攻めて来ぬと云うのなら、此方から出向くしかありませんまい。柴田殿、我らは本陣を守る故、先方の誉れ見事に務めて参らるよ。」

「…………ああ、任された。」

それだけ言うと、勝家は馬に跨がり陣内をあとにする。

配下を率い敵陣と相対すれば、相手方の重厚な守りが目に着く。

「思っていた以上に固そうだな。これは気を引き締めねば、跳ね返されかねないぞ。」

己の心と違えど、敵味方となつた以上は信勝の将として全霊を尽くすのが武士である勝家の志である。

その一方で、織田家の将として御家の今後の為に一刻でも早く、この無益な戦を終わらせたいとする思いが勝家にはあつた。

故に狙うは敵陣全力突破による本陣強襲。

騎馬兵の突進力にて守兵を蹴散らし、本陣にいる信奈の元へ行き降伏を迫るのが勝家の策である。

「凡そ策とは呼べぬが、これが私の出来る精一杯。信奈様、悪く思いませんな。これも乱世の作法にて、勝家いざ参りまする！」

織田家最強の武将が、信奈軍へ向けあい駆けた。

「どうやら、相手方が動き出したようじゃのう。信奈様の予想の通り、柴田の騎馬兵じゃ。」

信奈軍の本陣にて、秀吉は傍らの良晴に声を掛ける。しかし、良晴からの返事は無い。

視線を向ければ、引き吊った笑みを浮かべながら体を震えさせる良晴がいた。

「な、なあ秀吉さん、さつきからなんかおかしいんだ。ビビりまくって今すぐ逃げ出したい気持ちなのに、興奮して体がすっげえ熱くなってるんだけど、これって大丈夫なのか!？」

「かっかっかっ! そういうえば、お主にとってはこれが初陣であったのう。なに、珍しい事では無い。初戦ではよく在ることじゃっ! 寧ろ恐れながらも笑っておられるというのは、武将としての素養のある証拠じゃ。」

「そ、そうなのか?」

「おうともっ! 太閤にまでなった儂の言葉を信じよっ! お主は初陣にて主より大命を授かった。故に心が昂っておるのよ。あとは全力で主の期待に応えるのみじゃっ!」

秀吉は良晴の背を強く叩いた。

「さあ、歴史に残ろうぞ。」

ここに、二人の異端者にとって歴史を変える最初の戦いが始まった。

今宵はこれまでに致しとう御座ります。

汚れなき手

織田信奈の祐筆として側に仕えた太田牛一が記した書物に、『信奈公記』という物がある。

その名の通り、織田信奈の幼少期からその死までを記した一代記であり、当時の織田家中の様子を知る上で貴重な資料とされている。

その中には当然、稲生の戦いについても記されており、戦序盤の様子について以下のような記述がある。

『柴田勢甚だ猛勢にして佐久間勢にあい掛からん。されど佐久間勢よく能わず、相良良晴これを迎えんと立ち塞がりけり。』

これが後に『織田の二猿』と呼ばれる事になる片割れが、歴史上初めてその名を現した場面である。

本陣を出立した勝家は配下の騎馬兵を従えながら、悠々と信奈の陣へ進軍する。後続からは林通具が率いる本隊が追従していた。

「六様、余計な忠言と心得ますが、敵方守勢なれど努々油断召されぬよう。」

先頭に行く勝家に、年若い侍が側に馬を寄せ話しかける。

彼の名は毛受勝照。若くして勝家も認める勇猛さと忠義心の高さから側近に抜擢され、猪突猛進が過ぎる勝家の参謀という名のブレーキ役を担っていた。

「わかつているさ勝照。あの姫様が考え無しに守勢に転じる筈がない。必ず何か仕掛けてくる。」

「でありましょう。しかし、先程本隊の様子見しましたが酷い有り様でした。一様に士気が低く、此度の戦の意義を見出だせていない様子。」

「仕方無いだろう。本来なら味方同士による内輪揉めだ。血気盛んなのは林達くらいだろう。」

「それを知っていながら先陣を切らねばならぬのだから、なんとも齒

痒い物ですな。」

「…それが武門の習いならば、我らは自分達が最善と信じたやり方を全力でやりきるしか無い。さあ、話はこれまでだ。」

柴田勢の目の前に構えるは織田家筆頭家老、佐久間信盛の軍勢である。

「見たところ鉄砲は無さそうだ。だが、相手にとって不足は無し。皆の者、いざかかれえっ！」

勝家の号令に柴田勢約三百が一気に攻め掛かった。

「信盛様、柴田勢が来ます！」

「うむ、姫様の予想通りであるな。弓兵、構え！」

信盛の号令に弓兵達が一齐に己の武器を引き絞った。

「さあ、よく狙うのじゃぞ…今じゃっ、放てっ！」

信盛が采配を振るうと同時に、数多の矢が放物線を描き柴田勢に降り注ぐ。それによつて軍勢の足並みが僅かに鈍るが、先頭を行く勝家の騎馬兵の猛勢を止めるには至らない。

「柴田勢ぶつかりますっ！」

「慌てるで無いっ！十分に引き付けよ。」

浮き足立ちかける兵を諫め、信盛はじつと攻め寄せる柴田勢を凝視する。

「まだぞ…まだ…まだ…」

ジリジリと米神から汗を滴らせながら、信盛はその時を待ち続けた。そして、時は至った。

「今じゃっ！避けよっ！」

その言葉と共に佐久間勢の兵達が重厚な構えを解き、勝家の目の前で海を割るかの如く両脇に掃けた。

「なにっ!？」

咄嗟に勝家は手綱を引くが、馬の勢いそのままに陣中へと吸い込まれてしまう。

後ろを向けば、勝家達と後続との間にできた間隙に避けた守兵が殺

到し、再び堅守の構えを作っていた。

「しまった!?分断の策かつ!」

勝家は信奈の狙いを理解し齒噛みする。

らしく無い守勢の構えも、全てはこれの為。頑強な陣構えを前にすれば、徒に戦を長引かせたくは無い勝家は自ら先陣を率い、前掛かりになって突撃を仕掛けてくると読んでいたのだろう。

加えて先程の散発的な弓矢も、思い返せば勝家の周りだけ矢の雨が薄かった。恐らく、それも勝家の騎馬隊を先行させ周囲との足並みを乱す目的があつたのだろう。

その結果、勝家と周りの二十騎ばかりが突出する形となり、誘い込まれるかのように分断されてしまっていた。

敵中孤立の危機に、毛受勝照も血相を変える。

「六様つ!このままでは危おう御座います!すぐに反転し後続と合流を!」

「:致し方ない。一旦退却し、態勢を立て直すぞ!」

部下に指示を出し、馬の頭を変えようと手綱を引こうとする勝家。しかし、それを阻まんとする者が現れた。

「待ちやがれつ、柴田勝家つ!」

突如として自分の名を呼ばれ、勝家は声のした方を振り向く。

そこには、黒い南蛮風の衣服を上下に着こなし、槍を地面に突き立て勝家を睨む若い男がいた。いつか見た、未来人を名乗る男である。

「俺の名は織田信奈の家臣、相良良晴!同じ信奈の家臣でありながら、信奈を裏切つて信勝とか言う馬鹿野郎に付きやがったためえの事が許せねえつ!一対一で俺と勝負しやがれつ!」

「な、なんだとつ!?!」

まさかの一騎討ちの誘いである。

これには勇猛で知られる勝家配下達でさえ啞然としてしまう。織田家随一の武刃者にこの場で挑むとは、あやつもしや実はかなりの実力者なのかと、良晴の事を見てしまっていた。

そんな勝家達を尻目に、今度は良晴の影から痩せた小男が現れた。秀吉である。

「やややつ！あの猛将柴田様に挑むとは、大した心意気を持つ若武者がいた者じゃ！さあ柴田様、如何なさりますか!?まさかこれ程まで熱烈に誘われて、逃げるというのは為さりますまい。」

「……………六様、これは。」

「ああ、間違い無く罠だな。」

「ここまでの信奈方の戦法を見る限り、信奈は勝家達を孤立させる事に拘っている。」

となれば、ここで一騎討ちを挑むのも勝家達をここに釘付けにし続ける為にはならない。

であれば、誘いを無視するのが得策である。

「どうした勝家！返事が無いぞビビってんのか？」

「はははっ、まさかそんな事は無かるうて。あの織田家随一の武勇の持ち主が一騎討ちを恐れて名乗りを返さぬなど、有り得ぬ話じゃっ！」

「…六様。」

「わかっている。露骨な挑発だ。あいつらに付き合っつてやる理由等無い。」

「ハイハイへ？イ、マジでビビってんのかよ!?うつわあ？こんな奴が織田家一番の武将を名乗るとか有り得ねえだろっ！」

「なんとっ！本当に臆されてしまいましたのかっ!?あの柴田勝家がつ！あのかかれ柴田と勇名馳せられる柴田勝家がつ！」

「……………六様？」

「案ずるな勝照。あの程度の罵声、大したものでは無い。この私があやつらの挑発で釣られる訳が…」

「つうかさつきから馬を走らせる度に巨乳がバインバイン揺れてんだよ！なんだ誘ってんのか？誘ってんだろ！誘ってんだな!?じゃあ一回揉ませて下さいお願いしますー！」

「何っ!?ずるいぞ良晴！儂だってあの宝玉を揉みたいし、吸いたいし、挟みたいのじゃぞー柴田様っ、どうか儂も一戦御願ひ致しますー！」

「よし、あの二人殺そう。」

「六様っ!？」

勝照が止めようとするも、時既に遅し。勝家の目は殺る気マンマンになってしまっていた。

勝家は馬を降り、肩を怒らせ良晴の前に進み出る。

「貴様、私に一騎討ちを挑む気概だけは認めてやる。だが、その口から垂れた誇りは後悔させてやる故に覚悟せよ。」

「へ、へへんだ！やれるもんならやってみな！」

勝家から発せられる怒気に圧されながらも、良晴も何とか口上を返す。

お互いに槍を構えれば、不思議な静けさが周囲に流れる。だが、それも一瞬の事であった。

「いくぞ相良良晴。我が槍の錆びとなれっ！」

「来やがれ！柴田勝家っ！」

二人の槍が、いま交差した。

勝家と良晴が一騎討ちを始めた頃、信奈は万千代と共に本陣にてその様子を眺めていた。

「サル達は上手いこと六を吊り上げたみたいね。最後はなんか本音が混じってそうだったけど。」

「まあまあ姫様、そのおかげで予定通りに事が進んでるのですから、六十点はあげても良いかと。」

「なんか釈然としないけど、まあいいわ。他はどんな感じかしら？」

「佐久間様の方は何の問題もありません。完全に相手の勢いを殺しています。」

万千代の説明の通り、佐久間信盛は陣外に残された柴田勢、並びに林通具に率いられた信勝軍本隊の攻勢を見事に防いでいた。

これを成せたのは柴田勢を率いる勝家が不在の上、信勝軍の士気が著しく低かったのもあるが、それを抜きにしても信盛の采配の妙が冴えたのがあった。

「信盛のやつ、あまりうだつの上がらない凡将かと思っていたけど、こういう戦だと中々見るべきところがあるわね。」

「我が軍は若い武将が多いだけに、攻勢に長けてても守勢になると脆い部分がありますから。佐久間様のような方は貴重です。」

勢いがものをいう攻勢に対し、経験と冷静な判断力が肝となる守勢において、先代信秀の頃から従軍経験のある信盛は守りに関しては織田家全体で見ても最も適した武将と言えた。

「やっぱり、実際に戦場に出てみないと分からない事は多いわね。信勝はそれを理解していない。」

信奈は複雑な表情をしながら弟のいない敵陣を見る。

きつと信勝は知らないのだろう。大将の有無が部隊の士気にどれ程影響を与えるのかを…

「途にも角にも、この戦を終わらせる事が先決ね。」

「はい。ここまででは上手くいっています。あとは皆様の頑張り次第です。」

万千代の言葉に頷き、信奈は祈るような気持ちで戦況を見守り続けた。

良晴と秀吉の挑発に勝家が乗るよる形で始まった一騎討ちは、ある意味で膠着状態、別の言い方をすれば勝負になっていなかった。

「このつ、貴様いい加減に突かれろっ！」

「そんな事言われたって、誰がやられるかっての！」

勝家は勝負が始まってから何度目かの必殺の突きを繰り出すが、良晴はそれをギリギリで避ける。

このやり取りも既に十数回にも及んでいた。

「くそっ！貴様から挑んだ勝負だろうが！なぜ一向に攻めて来ない!?!」

「攻める気はあるさ。ただ、勝家の攻めが激しすぎて攻めたくても攻めれないのさ。そんなに胸を揉まれるのが嫌か？」

「当たり前だああああー！」

良晴の言葉に激昂し勝家が攻めを激するが、それすらも良晴は避け続けた。

事実、これまで良晴が勝家に対して攻めに転じた事は一度もない。というのも、良晴はそもそも勝家に一騎討ちで勝つつもりなど一切無い。

あの日、良晴が信奈から命ぜられた役目は、勝家に一騎討ちを臨み出来る限り勝負を長引かせる事であった。

(しかし、ただ相手の攻撃を避け続けるだけとはいえ、あれほどの刺突を何度も避けることなど並みの武将では不可能じゃ。その上で、良晴を当てるのは流石信奈様じゃの。)

傍らで二人の勝負を見守る秀吉は主の采配に感嘆する。

信奈の家来となって以降、良晴は時折犬千代に教えを乞い槍の演練を行っていた。

その際、犬千代は良晴に槍の才は無いとしていたが、攻撃を避ける事だけに関しては槍の名手である犬千代をしても捉えられぬ才を見出だしていた。

その事を犬千代から聞いていた信奈は、勝家を釘付けにする大役を良晴に与えたのであった。

「はあ、はあ、いい加減、私に突かれる。」

「はあ、はあ、さつきから、同じ事ばかり言ってるぞ。」

攻め疲れ肩で息をする勝家であったが、避け続けた良晴も疲労の色が濃い。この勝負、どちらの体力が長く持つかの勝負となっていた。

「六様、相手は既に限界です。このまま休まず攻め続けて下さい。」

「ああ、分かっている。」

「良晴、あともう少しだけ無理をしてくれ。そうすれば奴ならきつとやってくれる筈じゃ。」

「はあ、はあ、了解!」

何とか良晴を仕留めようとする勝家達に対し、良晴と秀吉はずっと待っていた。

勝家達にとって早期に信奈に降伏を迫る事が勝利ならば、秀吉達にとっては事が済むまで耐え続ける事が勝利である。その知らせが届くまで、良晴は何度も耐え続けた。

死を覚悟するほどの刺突を避け、頭部を掠める風ぎ払いに肝を冷や

しながらも、心を折らずにその時を待った。

そして、蒼天に一筋の白煙が登った時、秀吉は自分達の勝利を悟り、良晴と勝家の間に割って入った。

「双方それまでじゃー！」

「何っ!? 貴様、一騎討ちに割って入るとは何事だ！」

「最早この一騎討ちに意味は無し! あれを見よっ！」

勝負を止められた勝家が秀吉に詰め寄るが、秀吉は勝家を押し退け天を指す。

秀吉が指差す先には、信勝の居城である末森城から立ち上る白煙があった。

「なんだ、あの煙は……」

「あれは我らが別動隊がそなたらの城を落とした合図よ。城を落とされ、主君を押しさえられた以上、貴様らの負けじゃー！」

「そんな馬鹿なっ!? 姫様は全軍を以てこの決戦に臨んだのではなかったのか!？」

「ほぼ全軍ではある。お主らに悟られぬよう五十人ばかりで強襲隊を作り、戦が始まったと同時に攻めさせたのよ。」

「だ、だけど、城に兵が少ないとはいえ、そんな少数で城攻めを成功させる将がどこに……」

「いるのだそれが。いや、この場合は呼び戻したと言うべきか。」

「呼び戻した？」

「ああ、武勇凄まじき忠犬をのう。」

少し時間を巻き戻すと、末森城は混乱の極致にあった。

勇ましく戦場へ向かった主力を見送り、城に残ったのは城主信勝の取り巻きの女達が百名と、五十人ばかりの守備兵、そして信勝本人のみであった。

彼らは此度の戦の当事者にありながら、どこか遠い世界の事のように捉え、ただただ勝利の吉報を待つばかりであった。

故に、別動隊による強襲に完全に虚を突かれ、あっさりと門を抜か

れてしまう。

そのまま碌な反撃も出来ず、守備兵達は我先にへと城を逃げ出した。

「い、いったい何が起きているんだ!? どうして姉上の軍勢がここに!」
信勝は事態を把握仕切れず、自身の私室で右往左往するばかりである。

それでも、なお城を抜け出さなかったのは、肩を寄せあい体を震えさせる自身の取り巻き達を見捨てられなかったからかもしれない。

だが、終局の足音は容赦なく信勝の元へとたどり着く。

「…いた、信勝様。どうか御覚悟を。」

「そ、その声は!？」

襖を開けられる音と共に信勝の耳に届いたのは、先日放逐された筈の犬千代の声である。

なぜここに彼女が、と驚愕する信勝であるが、振り向いた先にいる犬千代を見て絶叫した。

「ど、ど、ど、どうしたんだ犬千代っ!? その怪我わあっ!？」

犬千代の右目の下には矢が刺さっており、そこから涙の如く赤い血が滴り落ちていた。

あまりの痛々しさに信勝は顔面蒼白となり、取り巻きの女は悲鳴を上げて気を失った。一方で犬千代本人はいたって平常通りであった。

「…門を攻めた時やられた。ただの怪我、大したこと無い。」

「大したこと無い訳無いだろうっ! 女の子が顔に傷を付けるなんて…」

「…信勝様、これは戦。命を落とす事もあり得る中で、怪我はマシ。」

この言葉に信勝は絶句し、腰を抜かしてしまう。そんな信勝に犬千代は膝を折って視線を合わせると、両目で真っ直ぐに見つめる。

「…戦場はいつ誰が命を落としても不思議じゃ無い。そんな場所でも姫様は常に出向いて皆を率いている。だから姫様は戦が終わったあと、いつも血と泥に汚れている。そんな姫様だから犬千代達も力の限り戦う。ねえ信勝様。」

犬千代の目尻から落ちた血が、真新しい畳にシミを作る。

「信勝様の手は、どうしてそんなに白いのですか?」

その問いに、信勝は答える言葉を持っていなかった。

その後、戦場にて末森城が落ちた事が伝わると、信勝軍の動揺は凄まじく、完全に統制を失ってしまふ。

そこに信奈が現れると、大声で次のように告げた。

「あんた達の主君、信勝は降伏したわ。これからあんた達が選べる道は二つ。一つは私に詫びを入れ、今後は私の下に付くこと。もう一つは、なおも私の首をねらうことよ。」

二つ目に示された選択肢に、信勝軍のみならず自軍からもどよめきが起こる。

「二つ目の道を選ぶなら良し。今回の一件を忘れ、これまで通り家来として遇するわ。二つ目を選ぶなら、それもまた良し！刀、槍、弓、鉄砲、いかなる武器であろうと私自ら相手をするわ。存分に掛かって来なさいっ！」

啖呵を切つて獯猛な笑みを浮かべる信奈に対し、なおも戦いを挑もうとする者はおらず、ほとんどの兵が武器を捨て、膝を屈した。

こうして稲生の戦いは信奈軍大勝利に終わり、名実共に織田信奈は尾張における支配権を確かなものとした。

その一方で、敗者である信勝は決断の時を迎えていた。

戦に負け、敗戦の帰路についた信勝軍の足取りは一様に重いものであった。武器を捨てる事を条件に城へ戻る事を許された勝家は、敗軍の将として信勝に目通りを願っていた。

「信勝様、此度の敗戦の咎は敵の術中に嵌まった私にあります。如何なる沙汰も受ける覚悟にあります故、どうか配下の者達には寛大な処置を…」

だが主君に向かって土下座をし、切実な声色で願い出る勝家に返ってきたのは、まったく予想だにしない言葉であった。

「いや、勝家達はよくやってくれたよ。無事に帰って来てくれただけ

でも嬉しいよ。」

「は？」

主の言葉に驚愕し、思わず頭を上げた勝家の目に写ったのは、思い詰めた様子の信勝であった。その様子に勝家は信勝の変化を感じ取った。

「ねえ勝家、この戦で死んだ者はいる？」

「え？それはまあ、少なくともありますが……」

「その者達は今どこに？」

「ええと、身元を確かめる為、門の前に並べられて……」

勝家が言葉を終えるよりも早く、信勝は立ち上がると門へ向かって歩を進めた。

「信勝様、どちらへ？」

「会いに行く。この戦で死んだ者達のもとへ。」

「しかし、それは……」

「頼む勝家！ここで僕は会わなきゃいけないんだ！」

どこか必死めいた信勝の有り様に勝家は言葉を失ってしまふ。それでも、ここが主の分水嶺であることを感じ取り、真剣な面持ちとなり視線を合わせた。

「……分かりました。では私が案内しますので、着いてきてください。」

「ああ。」

信勝は勝家に導かれ、城の外へと出る。

そして普段は演練に使われている広場へと連れて行かれると、そこには筵に寝かされた物言わぬ骸が二十体ばかり並べられていた。

「こんなに、死んだのか？」

「ここにあるのは末森近辺の兵で編成された軍より出た死者のみです。なので、全体ではもつと多いです。」

それでも通常の戦よりかは大分少ないですが、と続ける勝家の声は聞こえていないのか、信勝は呆然としたまま並べられた死体を眺めるばかりであった。

「もし、あなた様は末森の城主様では御座いませぬか？」

呆然とし続ける信勝に声をかけたのは、顔の皺の深い老父であつ

た。

突然声を掛けられ信勝は我に返ると同時に困惑する。

「あ、うん。僕が末森の城主だけど。」

「ああ、なんと有難い事か！城主様自ら弔いに来て頂けるとは。これで娘も浮かばれます。」

「えっ？娘？」

「はい。これに御座います。」

老父が示す所には、筵によって姿を隠された骸がある。その形から、骸が女であることが窺えた。

「…見ても、よいか？」

「は、はあ、城主様が望まれるのであれば。」

老父の許可を得て信勝は筵を捲った。

そこには真つ白な顔をした若い女武士が眠っていた。蠟のように肌が白い事と、首もとに刺さった矢さえ無ければ、本当にただ眠っているだけに見えただろう。

「娘にとってこれが初陣でした。必ずや手柄を立て、城主様に喜んで頂くのだと意気込んでおりましたが、天運悪くこのような事に…」

「…天運だって？」

「はい。ですがこうして城主様から弔いを受け、娘も喜んでおるでしょう。ああ、有難や有難や。」

手のひらを合わせ感涙する老父の声を背に、信勝はもう一度女の骸を見る。

よく見れば手は泥に汚れ、武具を強く握り締めたせいか爪の先は割れている。足元も同様だ。本来なら清く美しくあるべき女の体は、戦によって傷と汚れにまみれていた。

信勝は己の体を見返す。何処にも傷は無く、清潔に卸された綺麗な衣服に纏われた体。

眼前に手をやれば、日に焼けて無い、白く汚れなき手がそこにあった。

「何が…何が天運が悪かっただっ！」

突如として絶叫し、信勝は拳を地面に叩き付けた。

「じよ、城主様!?!」

「何をやっておられるのですか信勝様っ!」

老父と勝家が慌て止めるが、信勝は何度も拳を振り上げ地面を殴る。

皮膚が裂け、血が地面を濡らそうと、信勝は拳を振るうのを止めなかった。

「何が、何が天運が悪いだ!悪いのは…僕じゃないか…!」

血で濡れた大地に涙が零れ落ちた時、信勝の手は漸く止まった。白かった手は血と泥に汚れている。

今宵はこれまでに致しとう御座います。

愚か者の末路

末森城の評定の間には、重苦しい空気が流れていた。

上座に座るのは城主である織田信勝、その横には信勝と信奈の生母である土田御前。

その二人の対面には勝家が神妙な面持ちで座していた。

他には誰も居らず、普段は信勝の周りを固める御付きの侍女達も、三人を慮り席を辞している。

「…先程、清洲より使者が参りました。明朝、清洲城へ参上せよとの事。その際、供の者は一人のみ認めるとも。」

一言一言噛み締めるように勝家が言葉を紡ぐと、土田御前はギュツと口を一字に引き絞り、信勝は黙したまま静かに目を瞑った。

「…勘十郎、母に木曾への伝手があります。今日中に尾張を逃れ、事が収まるまで身を潜めよ。」

「大奥方様、しかしそれでは…」

「二度ならまだしも、勘十郎が謀反を起こすは二度目。助命を嘆願したところで、信奈が簡単に慈悲を与えるとは思えぬ。口惜しくはあるが、今は雌伏の時。ほとぼりが冷めるまで、大人しくするのがよからう。」

織田家の前当主、信秀が娘の信奈を寵愛したのに対し、二人の母である土田御前は昔から信勝のほうを可愛がっていた。

幼い頃から突飛な行動で周りを振り回し、当主に指名されてからも行動を改めるところか、父の葬儀の場で暴挙に至った信奈の事を土田御前は許しておらず、冷淡な対応に終始していた。

一方で、聞き分けの良く礼儀作法に通じた信勝には殊更寵愛を向けしており、この度の謀反にも口添えをしていたほどである。

そんな母の愛情を一身に受けきた信勝は、この時初めて母の意思に反する行いをとった。

「勝家、明日の供をお願いしても良いかな?」

「…勘十郎っ!何を言っているのです。信奈はお前を殺すつもりかもしれぬのですよ。そのような場に行くなど、母は許しませぬ!」

姉の命に従おうとする勝信を叱責する土田御前であるが、勝信は黙って首を振った。

「母上の御忠言、誠有難き事にござります。されど勘十郎は、敗軍の將の務めを果たしとうござります。」

「勘十郎…」

「僕はこれまで、武家に生まれながら戦が何たるかを何一つ理解していませんでした。戦に携わる者たちの気持ちも、將が負うべき責任も、何一つ、何一つ分かっておりませんでした。今はそれが、恥ずかしくて恥ずかしくてたまりませぬ。」

そう語る信勝は瞳にうつつすらと涙が浮かべながらも、己に向けての怒りで眉間には深々と皺が刻まれていた。

信勝が見せる初めての表情に、土田御前のみならず勝家も言葉を失ってしまう。

「その恥を知りながら、尚も自らの責に背を見せては、もはや僕は武士の子を名乗る資格を失いましょう。それほどまでの恥の上塗りを、僕はしたくは有りません！例え白扇を与えられることになろうとも、姉上のもとに参り、此度の所業の申し開きをしよう御座います。」

白扇とは辞世の句を記すための扇の事である。即ち、白扇を与えられる事は切腹を申し付けれるのと同義である。

信勝の覚悟を知り、勝家は居ずまいを改めた。

「…信勝様、私の如き愚将でよろしければ、明日の道中の御供をさせて頂きますでしょうか？」

「ああ、もちろんだ。勝家のような勇將が側にいてくれるなら、これ以上心強い事は無い。」

「…勿体無きお言葉にござります。」

頭を下げながら、勝家は己の思い違いを後悔した。

勝家にとって信勝は、前任の守役が急死したことで代わりに守役を務める事になった仮の主である。

表向きは従順に其の命に従い、此度の戦でも信勝側の將として参戦しながらも、心の奥底では常に本来の主である信奈と比べ、嘆息していた。

はた目から見ても、大名としての信勝の気構えは信奈より遙かに劣っており、態度にこそ出していなかったが信勝に仕えることになった自分は不幸だと嘆いていた。

それがどれ程の見当違いであったかを勝家は痛感する。

信勝は己の失態を認め、その責を果たさんとする気概を眠らせていた。それは紛れもなく、人々の上に立つものとしての将器である。

まだ未熟で、生まれたてのそれであるが、武将として大成するためにも必要とされる上に立つ者として才を、織田信勝という若武者は確かに持っていたのだ。

それに気づくどころか、勝手に見定め、諦めてしまっていた自分は何たる不忠者であろうか！

勝家は奥歯を噛みしめ、己を諫める。せめて明日の供だけは務めを果たさねばならぬ、と心に誓うことしか今の勝家には出来ない。

「…勘十郎、もう心に決めているのですね？」

「はい、母上。こればかりは誰であろうと心変わりさせられる者は御座いませぬ。」

「そうですね。私も武家の女房。我が子が決死を心した以上、異論を述べる所存は有りません。」

「…ありがとうございます。」

「されど、もし信奈がそなたの命を奪おうならば、母は一生、あの子を呪いますっ！」

そう言い切ると、土田御前は目元を抑え早足で部屋を出ていく。

苦し気にその後姿を見送った信勝と勝家は、暫しその場を動くことができなかった。

翌日の朝、信勝は城に残った者たちを広場に集めると、次のように語った。

「この後、何があろうと姉上の命に従ってほしい。如何なる沙汰があろうと可能な限り皆に責が及ばぬように取り計らうから、決して自棄

を起こさず、冷静に判断するように。そして、これからは姉上のもとで誠心誠意仕えてくれると嬉しく思う。」

既に主だった者たちは城を去り、残されたのは侍女たちばかりであったが、信勝の言葉を聞くと彼女らはハラハラと涙を流し、主との別れを惜しんだ。

それに一抹の後ろめたさを感じながらも、信勝は勝家と共に門前へ向かう。

門の外に出て少し歩くと、ふと後ろを振り返る。振り返った先では、信勝を見送りに来た者たちが集まっており、その奥に信勝は母を見つけた。

「すまない勝家、少し待っていてくれ。」

勝家をその場に残し、信勝は来た道を駆け戻る。そのまま真っすぐに母のもとへ向かうと、少し言葉に迷いながらも口を開いた。

「母上、一つだけお願いしたき事があります。」

「…なんぞ？申してみよ。」

「……来世でも、勘十郎の母になってください。」

その言葉に土田御前の目がハツと見開かれる。やがてワナワナと全身が震えだすと、崩れ落ちるように信勝に縋り付いた。

「……行ってまいります、母上。」

その肩を抱き、耳元で別れの言葉を呟くと、声無き啜り泣きをあげながら尚も縋ろうとする母の手を振り切り、勝家の元へ戻る。

「待たせたな勝家。さあ、行こう。」

「…はっ！」

母子の別れの場面に胸を打たれていた勝家は鼻を啜り上げ返事を
する。

前を向いた二人は後ろを振り返ることなく、ただ真っすぐに清州へ
続く道に行く。

後ろから自分の名を呼ぶ声が聞こえぬようにただひたすら前のみ
を見つめ、唇を噛み締めながら信勝は歩を進め続けた。

大きな障害にぶつかることも無く、一刻の歩みにより二人は清州城
に到着した。

城の門番に参上した旨を伝えると、門番も承知していたようですぐに門が開かれた。その際、腰に帯びた刀は預けられ信勝と勝家は丸腰のまま城に案内された。

先導役の導きにより、かつて慣れ親しんだ城内を進んでいけば、評定の間の扉の前に堀秀政が座していた。

「良くぞお出で下さいました。中で姫様がお待ちです。」

信勝たちに頭を下げると、秀政は扉の向こうへ声をかける。

「姫様、信勝様並びに柴田勝家様がお出でに成られました。」

『…通しなさい。』

「はっ。」

扉が開かれると、その向こうには湯帷子を片袖脱ぎにした信奈が、片膝を立てた胡坐姿で上座に待ち構えていた。手には指揮棒を持ち、その背後には太刀が置かれている。その表情は普段より一層厳しい物であった。

その様子に信勝は息を飲むが、大きく深呼吸を行い心を落ち着かせ部屋に入る。

続いて勝家が部屋に入ると、揃ってその場に跪き頭を垂れた。

「織田勘十郎信勝並びに柴田勝家、ただいま参上しました。」

「……面をあげなさい。」

「はっ。」

信奈の指示に従い信勝が姉を見る。

その相貌をじっと見つめた信奈は、無言のまま自分の前方の床を指揮棒で叩いた。

それを受け信勝は半立ちになると素早く信奈の前へ進み出る。

「勝家、あんたはここにいなさい。」

信勝が続いて前に出ようとした勝家を信奈は言い留める。

結果として信勝が一人、信奈に相對する形となった。

久方ぶりに面を合わせた姉弟の間に、暫し沈黙が流れた。

「……………取り敢えずは参上(ご)苦勞と言つとくわ。色々言いたいことは有るけど、先ずは此度の件について、あんたの思うところを言いなさい。」

「はっ。此度の一件、全ては僕の不徳の致すところ。姉上に置かれましては、多大なご苦勞をお掛けしてしまつた事、伏してお詫び申し上げます。」

「……随分と殊勲な態度ね。何か心変わりすることでもあつたのかしら？」

「……自分自身の浅ましさに、ほとほと嫌氣が差した次第です。思えば僕はずっと姉上に嫉妬してました。父上から寵愛を受ける姉上を、その才を、心の内で敵わぬと思ひながらも常にいづれ勝りたいと思つていました。」

此度の一件もそれが高じたものに御座います。そんな浅ましき虚栄心と自尊心に突き動かされ謀反に至つた次第に御座いますが、肝心の武人としての心構えは何一つ出来ておりませんでした。

そのせいで御家の要たる多くの忠臣を死なせたるは痛恨の極み！これに報い、敗軍の將の務めを果たすべく、姉上の面前に参りました。」

「……デアルカ。如何なる沙汰も受け入れるという訳ね。」

「はい。去れど、どうか此度の戦で僕に付いた者たちには寛大な処置をお願い申し上げます。この信勝、一生の願いに御座りますれば、何卒。」

「……良い心掛けね。いいわ。そこに直りなさいっ！」

鋭い声で信勝を指さすと、後ろに置かれた太刀を手に取り信勝の後ろに回る。

勝家は思わず立ち上がりそうになるのをグツと堪えた。信勝もいよいよその時が来たのだと悟り、腹の胆に力を入れた。

「勘十郎、私たちはもつと早くにこうして話し合わなければならなかつたわね。」

そう言つて信奈は太刀を抜き、その切っ先を信勝の首筋に当てる。信勝の呼吸が一気に乱れるが、それでもその場から動こうとはしなかつた。

背後で信奈が刀を振り上げ、刃を返すのを感じ取ると信勝は強く瞼を閉じた。

「…南無三つ！」

生涯最後の言葉を口にし、震える体を押し止めるがため強く拳を握り、信勝はその時を待った。

しかし、信勝が覚悟したような斬撃は訪れず、代わりに軽い打撃が首筋を叩いた。

「今をもって、これまでの織田信勝は死んだわ。これからは心を入れ替え、私に仕えなさい。」

「……………は？」

太刀を鞘に仕舞い、言いたい事だけ言って上座に戻っていく信奈。

その後姿を呆けた様子で見っていた信勝は、自分が刀の峰で首を叩かれたのだと理解した。

「…姉上、これはどういう事ですか？」

「言ったでしょう。これからは心を入れ替え私に仕えるようにと。何度も同じ事を言わせるんじゃないわよ。」

「…僕を赦すと言うのですか？」

「赦すとは言って無いわ。それは今後のあんたの働き次第よ。もしまた今回の様に謀反を起こす兆候が少しでもあったり、織田家の武将として満足な働きが出来なければ、その時は容赦しないわ。」

「しかし、それではっ！」

「なに？私の沙汰に不満があるの？」

信勝の言葉に機嫌を悪くした様子の子の信奈はギロリと信勝を睨む。それに一瞬威圧されそうになるが、信勝は姉から視線を逸らさず口を開く。

「御言葉ですが、此度の一戦で命を落とした者達が御座います。いずれもが織田家の未来を支え得る若武者達です。その命を徒に奪ったのは、他でも無い僕の愚かな考えに依るものです。」

「戯け。戦に参陣した以上、誰しもが死ぬ可能性が有り、それを覚悟しなきゃならないわ。戦場での死者の責を一人で背負い込もうとする事こそ、傲慢よ。」

「それでも、僕は自分が赦せません！多くの者を死に向かわせる失態を犯しながら、おめおめと一人生き続けたところで、どうやって死んだ者達に報いれば良いのですか！」

「ならばこそ生きなさいっ！」

信勝の悲痛な叫びに、信奈は毅然として言葉を叩きつける。その瞳には激情にも似た強い意志が宿っていた。

「失態をしたから責任をとって死ぬ？甘ったれた事言っつてんじゃ無いわよっ！腹を切ったところで死んだ者は甦らないし、失態も取り返せない。ただの自己満足でしか無いわ！」

死んだ者達の分まで生きてっ、生きてっ、生き抜いてっ、犯した失態以上の手柄をあげる。それで初めて、死んだ者達に報いる事が出来るのよっ！」

「あ、姉上……」

「私だっつてそうよ。戦場での決断を後悔したことは一度や二度じゃないわ。父上の葬儀に限らず、どうしようも無い失態をしてしまった事もある。」

それでも私の夢を信じ、共に戦ってくれる者達の為に、失敗を乗り越え、私は必ず夢を実現させてみせると誓っているの。」

そう言っつて信奈は、信勝に向かって優しげな笑みを浮かべる。

「此度の私の失態は、あんたとキチンと話し合っつて来なかつた事。だからこの戦の責は、私達姉弟二人で背負わねばならないの。そして二度とこのような戦を起こさない為に、これまで以上に言葉を交わしましょう、勘十郎。」

「……は、はいっ！姉上っ、勘十郎の心は漸く晴れましたっ！これより天に日輪が有る限り、命を懸けて姉上にお仕え致しますっ！」

「ふふっ、そう、せいせい励みなさい。っつて、どうしたのよ六っ!？」

信奈が目を見開き見つめる先では、勝家が涙と鼻水で顔をグシャグシャにしながら肩を震わせていた。

「ぐふっ、よがっつだ、本当によがっつだ！わだじがちゃんどじでれば、ごんなごどにはならながつだのにおぼっつでだがら！」

「だからっつてそんなに泣くこと無いでしょう。」

呆れたように信奈が笑えば、それに釣られて信勝と勝家にも笑みが生まれる。

なんとも締まらぬ様相を呈してしまうが、それこそが織田家の新たな船出を予感させた。

そんな三人の様子を、良晴と貞勝の二人が襖の影から覗いていた。

「本当によかったな、信奈。弟と仲直り出来て。」

「うむ。あの様子では信勝様が再び謀反を起こす事はなかろう。これで漸く織田家が纏まると言うものよ。」

そう言つて満足気に頷く貞勝であったが、不意に真面目な表情を作る。

「しかしながら、もし仮に信勝様が少しでも言い逃れや誤魔化しをするようであれば、姫様は自ら弟君を討ち取られる所存にあったのであろう。」

「…ああ、昨日秀吉さんと話しに行った時、そう言つた。信勝が以前と変わり無いようであれば、自分がその首を取るつて。それが織田家当主としての務めだつて。」

前日の晩、信長が弟を切る運命にある事を知る良晴と秀吉は、信奈の真意を知るべく彼女のもとを訪れていた。

その時点では、信奈は信勝の処遇を決め予ており、当主としての務めと肉親としての情に揺れ動いていた。

そこで秀吉の提案により、当日の信勝の立ち振舞いにより処遇を決定する運びとなったのであった。

「でもまあ、それで信奈が信勝を殺そうとした時は、力づくでも止めるつもりでいたけどな。」

「……………相良殿、お主は命が惜しくは無いのか?」

「そりゃあ死ぬのは嫌だよ。でも弟を殺したりしたら、絶対にあいつは心に大きな傷を作る。それを止める為なら、いくらでも命を張れるさ。」

「…お主、姫様に惚れておるのか?」

「なっ!? そんなわけねえよっ! 誰があんな奴の事なんか!?! つていうか、秀吉さんはどこ行つたのかなあ? 今朝から姿を見ないけど。」

貞勝の指摘に狼狽し、露骨に話題を変えようとする良晴であったが、秀吉を気にする素振りに貞勝の顔が僅かに陰る。

「木下殿か…あの方なら別の仕事に行っておる。」

「別の仕事？それっていったい…」

含みを持たせた言い方に良晴が疑問を覚えるが、結局貞勝はそれ以上の事を言わず、良晴が秀吉が何をしていたかを知るのはかなり先の事となった。

同じ頃、清洲城外の演練場に信勝に与した武将達が集められていた。

彼らは末森城落城後、信奈の言葉により降伏を選択し、信勝と同様に謝罪へと参上していた。

ところが案内されたのは城の外であり、周囲には武装をした兵達が物々しい様子で取り囲んでいた。

集められた者達は不安を隠す事も出来ず、落ち着き無く周りを見渡していた。

すると、兵達の体で隠された先から怒鳴り声が響いてくる。

「離せっ！離さぬかっ！いったい如何なる所存があつてこのような真似をする!?降伏したものは無下に扱わぬのでは無かったのか！」

現れたのは林通具をはじめとした五名の家臣である。全員が今回の一件で拳兵を声高に叫んだ者達であり、その両手と腰には縄が打たれていた。

そのまま五人は演練場の中心に連れて行かれると、地面の上に膝を着かされる。

通具は自分達とは別に集められた者達を目にすると、より一層顔を歪めた。

「これはどういう事じゃっ！謀反を働いたのはこやつ等も同じ。なぜ我らばかりがこのような仕打ちを受けるのじゃっ!?!」

「それは貴様らにそうされる理由があるからじゃ。」

その言葉が聞こえた瞬間、通具は体の奥に氷を差し込まれるような錯覚に襲われた。

振り向けばそこには、見知った猿顔の小男が腰に刀を差し立っていた。

「き、貴様は…」

「お久しゅう御座います。木下藤吉郎秀吉にございます。」

恭しく礼を取る秀吉であったが、通具は彼に視線を合わせる事が出来ず、自分の足下に目を落としていた。

秀吉はただただ無表情である。そこには、怒りのような激情は一切感じられ無い。

だが、その何も無い表情がとてつもなく恐ろしかった。

何か、自分ではとても考え付かない企みをしているようであり、自分の心の奥底を全て見透かされているような気分になる。

通具には自分の知る秀吉が、いま目の前に立つ男と同一人物とは思えなかった。

「林殿、本日はあなた様に申し開きして頂く事が御座います。」

「も、申し開きだと？そんなものする覚えが…」

動揺しながらも、しらを切ろうとした通具であったが、秀吉はその面前に一枚の書状を突き付けた。

それがいったい何なのかを察し、通具の顔から血の気が引く。

「この書状、覚えがあろう。お主の館から見つかったもので。内容は本領安堵並びに加増の約束である。そして記されておる花押は、今川のものじゃ。」

それは紛れもなく、裏切りの証拠であった。

「ど、どういう事に御座いますか林殿っ!？」

「お主ら、今川と通じておったのかっ!？」

集められた者達から怒声が飛ぶ。彼らもまた、林達の裏切りを初めて知ったのであった。

「こ、これはその、何かの」

「間違いであるとは申されますまいな？これはお主の私室で見つかったものである。それと、お主らの館に尾張の者では無い商人が出入り

していた事も調べがついておる。」

「っ!?!」

秀吉の指摘に通具は二の句を続けられ無くなる。

沈黙する他なくなった通具に、秀吉は書状を下げると顔を近づけた。

「さて、もう一度聞こう。なんぞ、申し開きはあるか?」

「……………こ、これはその、考えがあつての事じゃ。」

「…ほう?」

「今川は大国。如何に姫様が才氣溢れる方であっても、これに敵う筈がない。」

「ふむ。」

「い、今の俺には今川との渡しがつく!上手く言い含めて、御家の存続を願ひ出る事も可能なはずじゃ!」

僅かに残った生存の可能性を模索し、かつて蔑んでいた秀吉に対し媚びるかの如く言い寄る通具。

そんな裏切り者に対し、秀吉は深々と溜め息を吐くと腰に差した刀を抜いた。

「の、のう、待つてくれ!決して無理な話では無い!俺には今川家中に繋がりが!」

秀吉は通具に向かって一歩近づいた。

「誠心誠意織田家に仕えるっ!心を入れ替え、御家を第一につ!」

秀吉は刀の切っ先を通具の首筋に当てた。

「て、寺に入りまするっ!俗世を棄て、仏門に入りますから、何卒命ばかりはっ、命ばかりはっ!」

そのまま押し込む様に刃を首に差し込んだ。

血吹雪が飛び、秀吉の手元を赤く染める。

通具は白目を剥き、口から血泡を吐くと、秀吉が刀を抜くのに合わせて後ろに倒れた。そのままビクン、ビクンと全身を痙攣させたが間もなく動かなくなった。

「……………死に時を誤った愚か者の末路とは、何時の世も憐れなものよ。」

そう呟くと、秀吉は他の四人に対しても同様の処置を行う。

悲鳴と命乞いが辺りに木霊するが、それもすぐに収まった。

血の海の中心に暫しの間佇んだ秀吉は、その視線を別に集められた者達へ向ける。

そして抜き身の刀を手に近づいて行けば、信勝に付いた者達の顔が恐怖に染まる。

だが秀吉は、何でも無い様に彼らの面前で刀に付いた血を拭うと、満面の笑みを彼らに向けた。

「これより間も無く、今川との間で戦が起きよう。そうなった時、皆々様方の御力が必ず必要となつて来ます。その時はどうぞ、信奈様に御力添えを。よろしいですか？」

一同は秀吉の問い掛けに、コクコクと頷く他なかった。

それに満足気な様子を見せると、秀吉は彼らに背を向けその場を後にする。

「……あれは鬼じゃ。」

誰かがそう口にした。

「ご苦労様でした、秀吉さん。」

秀吉が演練場から程近い井戸端で血を洗い流していると、万千代が声を掛けてきた。

その顔はどこか青ざめて見える。

「これは丹羽様、不快なところを御見せしました。」

「いえ、その様な事は。誰かがやらねばならぬ仕事でしたし、そもそも本来なら姫様の側近である私が……」

「はははっ！御夫人にあの様な真似はさせられませぬよ。」

「……木下さん、一つお聞きしても？」

「何で御座いますよう？」

「以前、いえ、これより先の世で、木下さんは似たような事を？」

その問いに、秀吉の動きが止まる。だがそれも一瞬の事であり、すぐに困ったような笑みを浮かべる。

「申し訳ありません。信奈様より、未来について語るのは禁じられています故。では、某はこれで。」

粗方の汚れを落とすと、秀吉は城に向かって歩いて行く。

その後ろ姿を見送る万千代の胸中には、秀吉に対する怖れが芽生えていた。

今宵はこれまでに致しとう御座りまする。

蝮の国

時は信奈と道三が聖徳寺会談を終えて暫くした頃に巻き戻る。

斎藤道三の次男、孫四郎は稲葉山城外にある自身の別宅に客人を招き、歓待の酒盛りを行っていた。

「いやはや使者殿、此度も素晴らしき土産、まことに忝ない。信奈殿には宜しく伝えてくれ。」

「お喜び頂き恐悦至極に御座います。我が主もその御言葉耳にすれば、御機嫌麗しくに相違無いかと。」

「良い良い。信奈殿は我が父道三の義理の娘。即ち、儂にとっては可愛い義妹よ。その妹がこうも甲斐甲斐しく進物奉つるのだ。礼の一つも言わせて貰えねば、兄の立つ瀬が無いと言うものよ。」

「ああ、有り難き御言葉に御座ります。ささつ、もう一杯。」

孫四郎は喜色満面に使者の男から酌を受ける。

彼の元にこの織田からの使者を名乗る男が現れたのは、聖徳寺の会談から暫くした頃である。

道三が信奈に美濃の譲り状を与えたという噂に国人衆が大いに動じる中、生駒某と名乗った男は信奈の名代を謳い多分な贈り物を孫四郎に進呈した。

「これなるは我が主よりの心付けになります。孫四郎様には是非とも心穏やかならざる国衆の皆様への御取り次ぎを御願いしたく御座います。」

孫四郎自身、父道三がうつけと名高い隣国の小娘に国を譲ろうとするのには思うところがあつた。普段仲の悪い兄義龍が激怒する様は小気味いいが、それでも自分以外の者が美濃の国主となるのは面白くない。

生駒はそんな孫四郎を慰め、大量の贈り物でその気を紛らわせた。

「聞けば孫四郎様は元服して間も無く、残念ながら武人としての功績に乏しく存じ上げます。なれど、此度の美濃尾張の同盟を国衆たちに認めさせ、より強固なものときせられれば御父上の覚えも大変目出度い

ものと相成られましょう。」

そう言う生駒の言葉に背を押され、斎藤家の有力家臣である稲葉一徹のもとに説得に向かえば、稲葉は孫四郎の話に聞き入りその言に同意した。

稲葉は他にも孫四郎に説得して欲しい者たちの名を上げれば、孫四郎はその者たちのもとへ行き説得し、彼らに承服させていった。孫四郎は自分が手柄を上げていくのを実感し、その切っ掛けとなった生駒に信頼を寄せるようになる。

「いやはや、あの時生駒殿の言葉に従っておってよかったわ。改めて儂からも礼を言う。」

「いえいえ、過分な言葉に御座います。されど、少し気がかりなことが御座います。」

「ん？なんだ？」

「義龍様の事に御座います。」

生駒が挙げた名に、孫四郎の顔が憎々し気に歪む。

孫四郎の兄である斎藤義龍は数年前に父道三より家督を受け継ぎ、斎藤家の当主となっている。

しかし、国の重大事である尾張との同盟には一切関与出来ずにいた。おまけに信奈に美濃を譲る旨の書状を渡したというのだから、当主としての面子を潰された義龍と道三の関係は過去に無い程悪化している。

「兄上には本当に困ったものだ。自分の面子ばかりを気にして、此度の同盟の利から目を逸らしておられる。」

「まことに御座います。もし仮に、義龍様が短慮を犯され同盟が反故となれば、道三様も御嘆きになるでしょうなあ。」

そう言って生駒は大きくため息をついた。

「…いつそのこと、孫四郎様が御当主に成られればよいものを。」

「っ!? 使者殿っ、いったい何をっ!？」

「いえ、案外悪くない話だと思えます。義龍様を廃し、孫四郎様が御当主に成られる。道三様も反対されませんまい。」

「……………」

「その折には、我が織田家も全力で孫四郎様を擁立させていただきませぬ。」

「…本当に、儂を推してくれるのか？」

孫四郎の問いかけに、生駒は深い笑みを浮かべる。

「はい。それに、我が主は姫大名。いずれどなたかを婿にしてお世継ぎを生まねばなりません。」

生駒は孫四郎にすり寄り、耳元に口を近づけた。

「ここだけの話、我が主は孫四郎様を憎からず思っております。正式に両国の同盟が相成りますれば、ご婚姻の話も出てきましょう。主は尾張一の美女と名高いお方。きっと、孫四郎様もご満足いただけるかと。」

別宅を出た生駒はしばらく道なりに歩き、不意に道を外れ木々の生い茂った脇道に入る。

人気もなく、明かりのない暗闇の中で生駒は頭巾を被り、三河松平家御庭番衆、服部半蔵へと姿を変えた。するといつの間にか、すぐ側に配下の忍びが現れた。

「お頭、道三の三男、斎藤喜平次、こちらの話に乗ってきました。」

「よくやった。こちらも同様。自分の都合の良い事ばかりを信じる哀れなお方だ。斎藤道三は一流の謀略家だが、我が子の教育には失敗したらしい。」

半蔵は懐から孫四郎に書かせた書状を部下に渡し、手筈通りに目的の場所に届けるよう指示した。

闇に消えた部下を見送ると、半蔵は小さくため息をつく。

「はてさて、これでいよいよ織田は厳しくなろう。まあ、他家を心配する余裕など我らにはないのだが。全く、何時になれば我が御当主は今川の使いぱっしりを抜け出せるのやら。」

疲れ気味の半蔵の愚痴は、月なき闇夜に溶けて消えた。

その翌日、斎藤家当主、斎藤義龍のもとに配下の稲葉一鉄より二枚の書状が届けられる。それは、昨夜半蔵が部下に預けたものであった。

二枚の書状を丹念に改めた義龍は、その強面を顰めながら書状を投げ捨てた。

「孫四郎と喜平次は儂を追い落とし、織田の助けを借りて当主に納まるつもりらしい。まったくもって気に食わん。」

「…心中お察しします。まさかあの二人が殿に謀反をしようとしていたとは。」

「…一鉄、儂が気に食わぬのは、我らを利用し利を得ようとする者たちだ。あの二人の事などどうでもよい。それが分かっているながら、その策に乗ってやらんといかんこの状況も気に食わん。そうは思わぬか、一鉄?」

弟二人がほぼ同時に謀反を企て、その証拠が同日のうちに自分の手元に送られる。どう考えても誰かの意思があつての事である。

疑わしい目で一徹を見るが、当の本人は気にした素振りを見せない。

「…成れど、遣るべき事は遣らねば成りませぬ。」

「…ふんつ、分かつておるわ。一鉄、孫四郎と喜平次を呼べ。始末は弘就につけさせる。」

「はっ!」

主命に応えるべく一鉄は短く返答し部屋を出ようとする。

「さてっ、一鉄。」

その間際、義龍は一鉄を呼び止めた。

「これだけは言っておくぞ。儂を裏切るなよ、一鉄。」

「…ははっ。」

再び短く返答すると、一鉄は今度こそ部屋を後にした。

その後、義龍が急病により床に臥せたという知らせを受けた孫四郎と喜平次の二人は稲葉山城に登城し、稲葉一徹より歓待を受けた。そ

して酒も入り、二人に酔いが回った頃を見計らい、義龍の寵臣である日根野弘就が強襲し二人を斬殺した。

道三がそれを知ったのは二人の遺体が城より運び出されたときである。

遺体を目の当たりにした道三は大いに取り乱し、二人の遺体に縋り付くとその血を自身の顔に塗り稲葉山城の天主に向け吠えた。

「義龍っ！この血を見よっ！この血の匂いを嗅げっ！これが血を分けた弟になす仕打ちかっ!?儂は貴様を許さぬっ、許さぬぞっ！」

その叫びに義龍が答えず、背後に並び立つ重臣たちにも聞こえる声で呟いた。

「我が殺したるは美濃に仇なす謀反人。害虫である。これを庇うは肉親に非ず。道三はわが父に非ず！」

こうして親子の絆は別たれ、美濃の国は二つに別れた。

道三は稲葉山城を去ると大桑城に逃れ、そこで挙兵。対する義龍も陣触れを出し、同調する家臣団を招集した。

両軍は長良川を挟んで対陣し、ここに史実における長良川の合戦が始まろうとしていた。

一方で稲生の戦いが終わり、織田家中が信奈のもとで一つにまとまったことで尾張の混乱は急速に収まりつつあった。

それでも戦死者たちの遺族への補償と並行し、敗者である信勝に付いた家臣たちへの安堵状を発行したりと、信奈は相変わらず忙しい様子である。

そんな最中である。美濃より落ち延びてきた齋藤家の姫が清州城の門前に現れたのは。

齋藤家の姫、帰蝶を織田家に送り届けた使者は信奈に対して道三より託された一枚の書状を渡した。その中身を改めた信奈は目を見開き震えると、眉間に深いしわを作り側衆の秀政に秀吉と良晴を呼んでくるよう命じたのであった。

「よう信奈、来たぜ。」

「これ良晴、毎度の事じゃが信奈様に対する言葉使いというものをなあ…」

いつも通りのやり取りをしながら秀吉と良晴は評定の間に入ってくる。しかし、予想していた信奈からの叱責は無く、代わりに重苦しい沈黙が二人を出迎えた。

異常を察し素早く信奈の前に進み出ると、二人並んで床に坐した。

「…さつき、美濃からマムシの娘が来たわ。」

「マムシのおっさんの?」

「ええ、美濃の情勢が悪くなったから尾張に落ち延びてきたのよ。マムシの遺言を携えてね。」

「なっ!?遺言ってどういうことだよっ!」

良晴の問いかけに信奈は使者が持ってきた書状を二人の前に差し出す。この時代の文書に不慣れな良晴に代わり、秀吉が中身を確かめる。

「…なるほど、美濃の国衆はほとんどが道三様では無く義龍に付いた様子。戦力差は五倍以上、万に一つも道三様が勝利する目は御座いませぬなあ。しかも、援軍は無用と有りまする。」

「なんだって!すぐに援軍に行かねえと!」

「待て、良晴。信奈様、恐れながら申し上げます。此度の斎藤道三入道の危機、お救いに向かうは危険多くは利少なき事に御座ります。」

「ちよつと待ってくれよ。秀吉さん、何でそんな事を…」

「織田はいま、今川との一戦を目の前に控えております。ここで美濃に兵を向けるは今川に付け入る隙を与えるに等しき事じゃ。」

「た、確かにそうかも知れないけど、でもマムシのおっさんが死んだら…。」

「むしろ義龍が道三様を討ち取られれば、信奈様は義父殿の仇討ちという大義名分を得られましょう。つまり、今後で美濃攻略を見据えるうえで、道三様には死んでもらった方が都合は…」

「秀吉さんっ！」

秀吉の言葉を遮り、良晴は厳しい表情で秀吉の横顔を睨む。それを気にした様子を見せず、秀吉は真剣な面持ちで主君を伺っていた。

秀吉の言を聞いても信奈は取り乱す事は無く、じっと目を瞑り己の思考に没頭していた。

「…………私の事を最初に認めてくれたのは父上だったわ。そして世界について教えてくれて、私の夢を形作らせてくれたのは南蛮の宣教師よ。二人の事が私は大好きだった。けれど二人とも死んで、私の前から姿を消したわ。」

その言葉は織田家当主としては無く、織田信奈という一人の少女の偽り無き本心よりの言葉だった。

信奈の語りを秀吉と良晴は黙って聞き入る。

「مامシは私の大望を認めてくれた。そしてその夢を応援してくれるとも。もしかしたら、美濃の動乱の原因も私の夢を後押ししようとしたからかもしれないわ。」

「…………故にお助けしたいと?」

「もつと単純よ。私はمامシが好きなの。私は私が好きになった人にこれ以上死んで欲しくない。それだけよ。」

秀吉の問いに答えると、信奈は上座を降り二人のもとへ近づき腰を折って視線を合わせた。

黒耀の瞳に二人の姿が写し出される。

「織田家当主として正しく無いのは承知してるわ。それでもمامシを救う術があるなら、たとえそれが水に浮かぶ藁であっても、私は掴みたい。」

「…………秀吉さん。」

良晴が再び秀吉の横顔を見詰める。

秀吉の顔からは表情が消え、思案の海に思考を漂わせていた。

暫しの沈黙の後、秀吉の口がおもむろに動いた。

「兵を動かすのが無理として、他に出来ぬ事はありますでしょうか。」
「よほど常識外の事であれば特には。مامシを救うためなら、私に出来る事なら何でも。」

「…それで御座いますか。それならば何とかありませんよ。」
「それじゃあつ！」

ここにきて信奈は初めて表情を緩ませ、それに応える様に秀吉も白い歯を見せる。

「信奈様、心配御無用に御座います。この秀サルに秘策が有りますれば、必ずや道三殿の御命をお救い致しまする。」

「デアルカ！よく言ってくれたわ。その言葉が嘘にならぬ様に励みなさい。」

「ははっ！然らば、時間もありません故、すぐにでも準備を致しまする。」

「あつ、ちよつと待ちなさい。」

部屋を飛び出そうとした秀吉を、信奈は呼び止めた。

「今回は美濃に行くことになるでしょうから、その地に明るい者をあんな達に付けるわ。入って来なさい。」

信奈の呼び掛けにより戸が開かれ、評定の間一人の少女が入ってくる。

背中まで長く伸ばした髪に金柑の飾りを付け、広いでこが理知的な魅力を引き出している美少女である。

しかし、その少女を目の当たりにした瞬間、秀吉の背に悪寒が走った。

「この子は帰蝶を連れてきてくれた斎藤の使者、明智十兵衛よ。ママシの救出にも賛同してくれてるから、存分に使ってあげて。」

「明智十兵衛光秀ですう。どうぞよろしくお願いします！」

秀吉にとって、決して許すことの出来ぬ宿敵の名を少女は名乗った。

その翌日、秀吉達は斎藤道三を救出すべく、川並衆の操る船で長良

川を昇っていた。しかし、船内の雰囲気は最悪であった！

「あの、相良さん。冷たいお茶を用意しましたが、如何でしょうか？」

「おっ、ありがとう。ちょうど喉が乾いた所だったんだ。」

「木下様も……」

「いらぬ。」

「で、でも日が昇って暑くなってきましたし、日負けせぬよう少しでも水を……」

「お構い無く。後で勝手に飲みますので適当に置いて下され。」

「ううう、承知しました。」

にべもなく申し出を断る秀吉に取り付く島も無く、光秀はとぼとぼと元の場所に戻る。見事なまでの塩対応である。

昨日から何度と無く似たやり取りを見てきた良晴が溜め息を吐くと、その袖を引く者がいた。

「……良晴、あの斎藤の使者と秀吉、何かあったの？秀吉があんな態度をとるなんて珍しい。」

そう問いかけるのは、先日織田家への帰参が認められた犬千代であった。

稲生の戦いが終わり、戦の後始末を行っていた本陣の武将達は、目の下に矢を生やしたまま帰ってきた犬千代を見て驚愕した。

そんな中、信奈は傷を受けた犬千代の顔を見て大笑し、大いに喜んだ。

「犬千代っ、随分と良い顔になったじゃないっ！見事な向かい傷よっ！」

そう叫んで立ち上がると、犬千代を皆の前に立たせ肩を叩いた。

「皆のもの、犬千代の顔を見なさい！この傷は死を恐れず敵に立ち向かった証拠、武門にとってこれ以上無き誉れよっ！この傷と此度の手柄を以て犬千代の帰参を認めるわ。武人たらしとする者は犬千代を手本とし精進なさい！」

信奈の言葉に歓声と犬千代を称える声があがり、犬千代は少し照れたような表情をしながらも堂々と称賛を受けたのであった。

閑話休題

あれから暫くたち、幸いにして犬千代の右目に後遺症は見られず、傷も大分癒えてきたということで今回の美濃行きに護衛として参加している。

「いや、なんとというか、別に喧嘩したとかそういうわけじゃ、いやでもある意味喧嘩以上の事はしてるわけだし…」

「……………結局何があったの？」

「まあ、一言で言うなら、昔色々あったって言うしか無いなあ。」

流石に本当の事を言う訳にもいかず、適当に誤魔化すしか無かった。犬千代も何か深い事情があることを察してか、それ以上深く追及してこない。

「おーい、見えてきたぞ。」

船頭の声に意識を向ければ、どうやら目的地に到着したようである。

川岸に船を付け荷物を下ろすと、ここからは徒歩での旅路となる。

「それでは良晴、マムシ殿の事はよろしく頼むぞ。」

「ああ、わかった。そっちも気を付けて。」

互いに準備を整え終わると、道三の陣には良晴、光秀、犬千代の三人。そして義龍方の陣には秀吉で向かう。

良晴達は光秀の案内のもと、道三が陣を構える鶴山に到着すると早速道三との面会を求めた。

光秀の取り成しもあり面会はあっさりと認められ、良晴達は道三のいる本陣中央に招かれる。

「十兵衛っ！何故御主は戻って参った!?!」

陣内に入った良晴達を最初に出迎えたのは、でこの広い口髭を蓄えた中年の鎧武者である。彼の名は明智光安、光秀の叔父にあたる斎藤家家老である。

光秀は叔父の前に進み出ると頭を垂れた。

「叔父上、こちらに戻ってきたるは信奈様の願いを聞き届けたる為。信奈様は道三様が生き永らえるを、ご所望ならば、不肖光秀その片棒を担ぎに参りました。」

「な、なんじゃと!?!」

光秀の言葉に光安は狼狽える。すると後ろに控えていた道三が、光安の前に進み出る。

「そこにおけるのは、以前聖徳寺で儂に物申した小僧であるな？」

「ああ、久しぶりだなマムシのおっさん。あんたの命、助けに来たぜ。」
「それは信奈ちゃんの名じゃな。ならば帰って信奈ちゃんに伝えよ。義龍の暴挙を許したるは我が不徳の成すところ。臯者と呼ばれようと儂も武士の端くれ。己の責は自ら精算するゆえ、余計な気遣いは無用であると。」

「いいや、おっさんを助けるまで俺は帰らねえ。そんな自己満足でおっさんを死なせた日には、俺は信奈に顔向け出来ねえ。」

「黙れ小童っ!! 大殿の覚悟を愚弄するかっ!!」

「ああ、馬鹿馬鹿しいね! 死んだところで失敗したことは取り返せない。信奈もそう言った。あんたらは自分達の失態から目を反らし、形ばかりを取り繕うとしてるだけだっ! たとえ生き汚いと罵られようと、生きてもらわなきゃ俺が困るんだっ!」

「何故貴様が困るっ!？」

「信奈が泣くからだよっ!」

声を大にして良晴が叫べば、道三達は言葉を詰まらせる。その合間に良晴は言葉を畳み掛けた。

「あいつはよお、これまで自分が好きになった人はみんな死んでいったって、すげえ悲しそうな顔で言うんだ。いつもはすぐに癩癩を起こす気性の激しい奴だけど、心は年相応の女の子なんだ。そんな奴がマムシのおっさんの事を好きだって言ってるんだ。」

「なんと、信奈ちゃんが…」

「ああ、おっさんが死んだら信奈は泣く。そして凄く傷付く。だから俺は何が何でも生きておっさんをあいつのところ連れていく。あいつが傷付くところなんて見たく無いから。」

良晴の言葉に道三は心を掻き乱された様子であった。ふらふらと足元がおぼつかず、やがてその場に腰を落とした。

「…儂はのう、この国を手にするに当たって随分と悪い真似をしてきたものじゃ。全ては美濃を起点に、日ノ本の全てを、天下を手に入

れるためじゃった。だが、人生の大半を費やし手に入れたるは美濃一
国のみ。所詮天下など夢のまた夢であつた。」

「大殿……」

「だが儂と夢を同じにし、更にその先を目指さんとする娘と出会えた。
儂はその娘に己の夢を託す事が天命に思えた！じゃが、その末路がこ
のざまよ。息子達を殺し合わせ、大半の臣の忠節を失い、もはや死を
飾るしかなくなつた哀れな老人。それが儂じゃ。」

「おっさん……」

「そんな儂でも死んだら悲しんでくれる女子がいるというのなら……」

道三がゆつくりと立ち上がる。その目にはそれまで見られなかつ
た光があつた。

「儂は悪い大名、悪い父親であつた。されど、女を泣かす悪い男にはな
りとう無い。」

「大殿、ではっ！」

「小僧、儂を信奈ちゃんのもとへ連れて行ってはくれぬか？」

「ああ、御安い御用さ！」

道三から差し出された手を握り、良晴は力強く頷いた。

一方その頃、良晴達と別れた秀吉は单身義龍の陣中を訪れていた。
突然訪問してきた織田の使者を名乗る秀吉に陣中の者達は色めき
立ち、濃厚な殺気を秀吉に向けるが、当の秀吉はまるでそよ風を受け
るかの如く方々から向けられる敵意を受け流していた。その脇には
なぜか木製の盆を抱えている。

そんな秀吉を正面から忌々しく見詰めるのは、他ならぬ斎藤義龍本
人であつた。

「それで、織田の使者が今さら何の用だ？」

「何と申されますれば、それは勿論義龍殿に良い話を持ってきた次第
に御座います。」

「良い話じゃと?」

「左様。昨今美濃を巡る一連の凶事。その落とし所を一つ持って参りました。」

含みのある秀吉の物言いに義龍は不審げに眉を潜ませる。

「此度の凶事の元凶たる斎藤道三の御身、我ら織田家で預かりとう御座います。」

その言葉に同席した義龍の家臣達は騒然となり、義龍も秀吉に向けて視線を強くした。

「…主君がうつけなら、配下の者もうつけよな。」

「おや、お気に召されませぬか?」

「笑止、我らは既に一戦交える覚悟にある。その様な話は無用じゃ。わかつたならさっさと帰れ!」

「お待ちを。仮に一戦交えるとなれば義龍様の勝利は間違い無いでしょう。然れど戦の最中、道三様の御命が失われる恐れがあります。親殺しの悪名は少々高くつくのでは?」

秀吉の指摘に義龍の顔が歪む。

あらゆる悪逆非道が罷り通る戦乱の世に置いても、越えてはならぬ一線というものがある。その一つにして代表的なのが親殺しである。

これまでに奥羽の最上義光や、甲斐の武田晴信など親から家督を奪い国から追放した者は少なからずいる。

そんな彼らでも命まで奪おうとは考えもしなかった。それだけこの時代において親を殺す事は禁忌であり、犯そうものなら多大なる悪名を背負う事となった。

「如何に命を奪わずその身を捕らえようと努めても、抵抗激しければ絶対は有りませぬ。その事を考えるなら戦をせずに追い出してしまいうのも良案かと。」

「……そうして御主らは、この地に精通した知恵者を家中に迎えるのか?」

「無論、タダとは申しませぬ。」

そう言つて秀吉は自身の前に盆を置き、懐から小袋を取り出すと口紐を解く。そして袋を逆さにすれば、中から黄金の粒が盆に溢れた。

「なっ!?」

義龍達が驚愕するなか、秀吉は二つ目三つ目と袋を取りだし、中身を盆に落としていく。そうして積み上がった砂金の小山を、快活な笑みと共に義龍に差し出す。

「どうぞ、お納めください。」

「…貴様、この金で道三を売れと申すか?」

「いいえ、我らが差し出したるは義龍様が最も欲される物。この金はそれを得るための手付け金に御座います。」

そう言つて今度は懐から書状を取り出すと義龍に差し出す。

乱暴にそれを受け取つた義龍は中身を確認し、悔しげな様子で秀吉を睨む。

「如何でしょうか?お気に召して頂けるかと存じ上げますが?」

長良川を臨む小高い丘、そこから義龍は遠く川を下つていく一隻の船を眺めていた。あの船の上に道三がいる。

「まんまとやられましたな。このような物を提示されれば我らは飛び付く他有りませぬ。」

そう言つて背後から現れたのは稲葉一鉄である。その手には秀吉から渡された書状が握られていた。

「…気に食わぬ。このような形で大義を手にする事になろうとは。これでは我らは道化ではないか!」

「まあまあ、落ち着かれなさいませ。あの者が言う通り、これは我らが今最も欲するもの。それが道三一人の身で手に入るのですから、乗らぬ手は無いかと。」

一鉄の言葉に義龍は拗ねた様子で鼻を鳴らす。

秀吉が提示した書状、その中身は村井貞勝に用意してもらつた京の公卿への紹介状である。

現状、義龍が美濃を治めるにあたり、その名声が圧倒的に不足していた。

そもそも親殺しに至らずとも、親を国から追放すること事態十分な悪徳であり、それを成した義龍が周囲から向けられる視線は非常に厳しい。

更に言うなら、親である道三からして主君を廃し国を乗っ取る下克上の体現者。既存の権力者からすれば息子である義龍もまた、自分達の立場を脅かしかねない非常に信用ならぬ存在だ。

「故にこの紹介状、そして金に御座いますなあ。これを使って公卿達の歡心を得て、官位を頂き美濃を治める正統性を得る。国を治める上で最も手っ取り早い方法でありましょう。」

「ああ、おまけにこちらは厄介者を追い出せる上に懐が痛まずに済む。何から何まで我らに有利だ。だからこそ気に食わぬ。」

「はて、それはまた何故？」

「：織田は美濃を諦めておらぬ。今川を打ち倒し、次は必ずその矛先を我らに向ける。」

義龍の言葉に一鉄は目を見開いた。

「まさかそんな、織田は今川に勝つつもりでおるのですか？」

「そのまさかじゃ。あの使者、然り気無く我らが陣容や周囲の地形を確認しておったわ。何か秘策があるのかは知らぬが、少なくともあの男は今川との戦の先を睨んでおる。そんな男を従える者が、簡単に敗けを認めるものである筈がない。」

義龍は豆粒のように小さくなった船の行き先、尾張を睨む。

「我らに利を与えようとも美濃を落とす自信があるのか？そう思うなら勝手に思っておるが良い。慢心した貴様達がこの地に足を踏み入れるとき、そこが貴様達の死に場所じゃ！」

その日、蛇の血を継ぎし一匹の龍が、明確に己の敵を見定めた。

今宵はこれまでに致しとう御座ります。

駿河の鬼

美濃の動乱を終息させ、道三を救出した秀吉一行は長良川を船で下り尾張へと帰還していた。

しかし、その船中の空気は来た時と同様に最悪なものであった。

その原因は言うまでもなく秀吉と光秀であった。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………あ、あの、木下さん。」

「…なんじゃ?」

「ええと、この度は義龍様を説得して頂き、本当にありがとうございます。お陰で道三様のお命を救うことができ、叔父上たちも喜んでいました。」

「別にお主らを喜ばせるために道三様をお救いしたのではない。我らはあくまでも信奈様の願いを叶えるために働いたのじゃ。」

文字だけ見ればツンデレ発言とも読み取れなくもない秀吉の返事だが、それを言う当の本人の表情は苦虫を噛んだようであり、光秀と話すのも嫌というのを隠そうとしていなかった。

それでも健気に光秀は秀吉の関心を得ようとする。

「それでも感謝の言葉だけは言わせて下さい。木下様の秘策、まさに見事でした。経済力と御所のつながり、この二つを持つ織田家だからこそ出来た策であり、私などでは中々思い付かないものです。今回は本当に勉強をさせて頂いて…」

「失礼、少々疲れていますので尾張に着くまで休ませていただきますい。」

そう言つて光秀との会話を無理やり打ち切ると、光秀から離れた場所には腰を下ろし瞼を閉じる。こうなった以上、流石に光秀も話しかけることは出来ず落ち込んだ様子で膝を抱えた。

その様子を見ていた道三は横にいる良晴に耳打ちする。

「のう、あれはいったいどういうことじゃ? 何故あの男は、ああも露骨

に光秀ちゃんを避けておるのじゃ？」

「ええと、話せば長くなるし色々と話せないところもあるんだけど、簡単に言うとな前世の因縁というか、なんというか、光秀は悪くないんだけど秀吉さんがああいう態度をとるのも仕方ないんと思うし…。」

「ううむ、複雑な事情があるということか。そういうのは得てして部外者が安易に関わろうとするのもいかんしのお。本人たちで折り合いをつけるか、時間が解決するのを待つしかないじゃろ。」

事情が事情だけに良晴も曖昧な説明しか出来ないが、道三も込み入った事情を察しそつとしておいた方が良いと判断する。

実際問題、秀吉が光秀に向ける感情の根源を知る者は今後の歴史を知る良晴しかない。

そんな良晴だからこそ、今後の事を考え少しでも光秀に対する秀吉の態度は軟化させておいたほうが良いと思い、秀吉の隣に座る。

「なあ、秀吉さん、前世の事を考えれば秀吉さんが明智光秀と仲良くするなんてすごく難しいことだとは思うけど、歴史通りに進むとしたら明智光秀は織田家の家臣になるわけだし、少しくらい心を開いてもいいんじゃないかな？」

「…此度の世では必ずしも以前と同じようにあやつが織田の家臣になるとは限らん。」

「だったら、本能寺の変だって起きるとも限らないだろ。」

そう言い返され秀吉は良晴を不機嫌そうに睨むが、良晴も動じずにその視線を見つめ返す。すると根負けしたのか秀吉が小さくため息を漏らす。

「儂だつてわかつておる。女子となった明智が以前のやつとは全くの別人である。あやつが信奈様に謀反を起こすのを回避する方法も、何度も検討しておる。だがのお、儂にとって明智光秀の名はそう簡単に割り切れるものではない。」

織田信長に仕え、その天下取りを大いに助け、最後には殺した男。秀吉はその背中に憧れ、尊敬し、嫉妬もしていた。そして、光秀が信長を殺したからこそ、秀吉が天下人に至る道が開けたのだ。

決して感謝など出来ないし、許すことなど到底不可能であるが、単

なる憎き敵とするには余りにも言葉が足りない人物、それが秀吉にとっての明智光秀であった。

「単に恨みをぶつけるだけの相手だったらどんなに良かったことか。明智光秀は間違いなく織田の天下取りの助けとなる。だからといって、信奈様の側にあやつを置くのは不安なのじゃ。」

「だからこそ、俺たちがこの時代にいる意味があるんだろ。明智光秀に裏切らせずに信奈に仕えさせる。未来を知る俺たちだからこそ出来る事だろ。」

「…なるほど、明智を裏切らせぬ道を探るというわけか。すまんの良晴。少し心の霧が晴れた。」

小さく笑って感謝の言葉を告げると、秀吉は立ち上がって光秀のもとへ近づく。

目の前に立たれた光秀はビクリと肩を跳ねさせた。

「明智殿、道三様を送り届けた後は如何する?」

「え? あつ、ええと、一先ずは叔父上達が近縁を頼って越前に行くそうなのでそれに着いて行こうと思います。主君と敵対した以上、美濃に居続ける事も出来ませんし。」

「ほう。では、間も無く明智殿とはお別れとなってしまうな。」

「はい。散々助けて頂いて、録なお礼も出来ず申し訳ないですう。」

「いえ、構いませぬ。越前での明智一族の御武運、お祈り申し上げます。然れど、もし向かい先の家風が合わず、難儀されましたら…」

秀吉は膝を着き、光秀と視線を合わせる。

「遠慮なく織田を御頼り下され。その際には拙者からも口添えさせて頂きます。」

秀吉の言葉に光秀は驚き、慌てて居ずまいを正す。

「は、はいっ! ありがとうございます! 御座います! その暁には、改めて私も木下様にお礼申し上げますう!」

その言葉に秀吉は苦笑いをしつつも頷く。

完全に胸中の蟠りが無くなった訳ではないし、警戒をしなくなった訳でもない。

それでも、秀吉は今世の明智光秀に対し、一つの落とし所を見つけ

られた。

明智光秀が織田信奈に謀反しない道を探す。それは信奈の天下を目指す上で、未来を知る者にしかなし得ない事であった。

秀吉が光秀への対応を変えたからか、船中の雰囲気は僅かに和らいだ。

そうして間も無く船は織田家領内に入り、船着き場に到着する。

親戚のもとに戻らなければならぬ光秀とは、ここで別れる事となる。

「道三様、今まで本当にお世話になりました。十兵衛はこの御恩、一生忘れません。」

「これこれ、今生の別れと言うわけでもあるまいに。まあ、お互い生きておれば、いずれ再び見える事もあろう。その時まで、元氣でのお。」
「はいっ！道三様もお元氣でっ！それと、木下様、相良様、今川は手強いでしようが、お二人の御武運をお祈り申し上げます。」

「ああ、任せとけ！今川なんか軽く捻ってやるからさ。なっ、秀吉さん。」

「うむ。我らが織田は、これより天に飛び立つ。今川との戦は、その第一歩じゃ。全てが終わった時には信奈様の名は日ノ本中に響き渡るであろう。」

「ふふっ、吉報お待ちしてますう。それでは。」

光秀は再び昇りの船に乗り込むと、秀吉達に向け深々と頭を下げた。その姿は船に連れられ小さくなり、やがて見えなくなった。

「よしーじゃあ清洲に戻るか。」

「…待った。そこに誰か居る。」

号令をかけた良晴に犬千代が指摘し、素早く近くの藪に向かって槍を構える。

秀吉達も瞬時に身構えた。

「お待ち下されっ！五右衛門に御座いますっ！」

慌てた様子で藪から姿を表したのは、忍装束の小柄な少女、蜂須賀五右衛門であった。

「あれ、五右衛門？お前どうしてこんなところ？てか、ここ最近ずっ

と姿を見なかつたけど、どこに行つてたんだ？」

「主の命に従い、色々をやつておりました。家中のうりやぎり者の屋敷に忍びきよみ、うりやぎりの証拠をにゆすんだり、おきやじやきとのくにじやかいで敵のうぎよきをしゃぐつたりと…」

「うん、まあ何となく五右衛門は五右衛門で忙しかつた事はわかつた。」

「それで五右衛門、儂の前に現れたという事は、何か今川に動きがあつたのだな？」

五右衛門に命を授けていた秀吉が鋭い視線を向け尋ねると、五右衛門は神妙な面持ちで頷いた。

「今川が動き出しました。駿河に兵を集め侵攻の構え。しよの数、二万五しえんに御座いますりゆ！」

運命の決戦が、いま始まろうとしていた。

今川義元という姫大名の人生は、決して順風満帆とは言えなかつた。

駿河の名門、今川家当主、今川氏親の娘として生まれるも、その時既に上には母を同じにする兄が二人おり、義元には姫武将としてよりも武家の妻としての役目を求められた。

その為、幼くして礼儀作法や文化教養を修めるために寺へ預けられた。

そのまま行けば外交の道具として他大名に嫁ぐか、家中の結束を高めるために家臣の妻になるか、いずれにせよ義元が戦国武将として世に出る機会は訪れぬはずであつた。

転機となつたのは、義元が髪結いの義を終えて暫くした頃である。名君として知られた氏親の死後、家督を継いでいた兄の氏輝が急死した。

更にその葬儀の翌日には、次兄の彦五郎が変死する。

相次ぐ後継者の早逝に家中が混乱する中、新たな当主として名乗りを上げたのは氏親の側室の子であり、義元と同様に寺に預けられていた義兄の玄広恵深であった。

恵深は還俗し今川良真と名を改めると、祖父である今川家家臣、福島正成の後押しを受け今川家の新たな当主になると宣言した。

これに猛然と反対したのが、氏親の正室であり、氏輝と彦五郎の母であった寿桂尼である。

予てより息子達の死を不審に思い、その死から間髪入れずに家督を得ようとした良真達の振る舞いに策謀の匂いを感じ取った寿桂尼は、我が子を手にかけてたかもしれぬ良真の家督相続を頑として認めず、寺から義元を呼び戻し当主に担ぎ出した。

こうして始まったのが家督を巡って駿河を二分した今川家の御家騒動、俗に言う『花倉の乱』である。

この内乱において、女である上に武将として何一つ教育を受けていない義元は不利と見られていた。

そんな義元を補佐したのが、義元の教育係である一人の禅僧であった。

その僧侶、僧籍にありながら軍事に通じ、策謀の限りを尽くして福島正成を討ち取ると、良真の逃げ込んだ館を包囲し自害に追い込んだ。

そうして瞬く間に敵対者を排除し、今川家の正当な後継者となった義元を、僧侶は軍師として支え続ける事になる。

その僧侶こそ、後北条家を初代の頃より外交面で支えた『相模の妖女』こと北条幻庵、築城と軍略の才で信玄の片腕となった『隻眼の軍師』こと山本勘助、この二人と共に関東三軍師に並び称された『今川の黒い宰相』、太原雪斎である。

「のう、泰朝。お主、儂と初めて会った時の事を覚えておるか？」

まだ冬名残の寒さが身を冷やす縁側にて、雪斎は庭に咲く梅を眺めながら隣に座る朝比奈泰朝に話し掛ける。

問われた泰朝は暫し顎に手を当て考え込むと、やがて苦笑いを浮かべた。

「和尚様と初めて会ったのは、確か墓場ではなかったでしょうか？」
「その通りじゃ。氏親公の求めに応じ、姫様を教育するため京より国に戻ったところ、宛がわれた部屋の真ん中に『夜半寺の墓場に来い』と書かれた紙が置いてあつてのう。無視するのも芸が無いと思ひ行つてみれば、幼い姫様が一人でおつてこう言うのじゃ。」

『私の養育係となるからには、相応の方でなければ認めませんわ。とりあえず、この地に眠る亡者を成仏させなさい。』

「すると人魂やら死装束の亡者やらがぞろぞろ現れてのう。最初は驚いたが、一人一人喝を入れてやって馬脚を現させたがの。」

「あの時は申し訳ありませんでした。ただ、我ながら姫様はよくやつたものだと思います。」

「うむ。儂もそう思う。何せ、五つそこらの幼女が、『一緒に遊びましょう。』の一言で、大人子供合わせ五十人も集め肝試しの用意をしたのだから。」

あの時、大名の娘とは言え義元は家督を継ぐ権利さえ持たない娘である。遊びの誘いを断つたところで主君の覚えが悪くなる訳でも無い。

にも関わらず、義元は銭や家の権威を使う訳でもなく、雪斎をからかう為だけに老若男女問わず五十人も人間を集めたのだ。

彼らが義元の求めに応じたのは、たった一つの理由からだつた。

「面白そうだと思つたんです、姫様と遊ぶのが。いきなり幽霊ごっこをするから夜半に墓地に来なさいと言われた時には、なぜ？と思ひましたが、なんだかとても心引かれたんです。」

「儂もじゃ。部屋に置かれた手紙を読んだ時、馬鹿らしいと思ひながらも妙に心がざわつてのう。思えばあの時既に、姫様に心を捕まれておつたのかもしれない。そういう不思議な魅力を姫様は持つておられる。」

昔を思い出して、二人は互いに笑う。

出会つた場所こそ場所だが、あの出会いが雪斎の運命を大きく変え

たのは間違いない。

「姫様には武将としての才は無い。それこそ、武田晴信や北条氏康に比べるべくも無く。然れど、あの二人には持ち得ぬ才を秘めておられる。即ち、周りから支えられる才じゃ。」

「皆を導くのでは無く、皆から支えられて国を造る才。まるで漢の高祖のようですね。」

「まさにそれよ。きつと、姫様の元でなら築けると思ったのだ。上に立つ者に武才無くとも、民と共に笑える国が。仮名目録の再編もその為よ。」

今川家仮名目録は氏親の代に制定された三十三条からなる今川家独自の分国法であり、東国最古の分国法として周辺諸国の分国法にも影響を与え、今川家の戦国大名としての立場を他家に先駆け明確にしたものとされている。

雪斎はこれに二十一か条を追加し、現在の社会保障制度にも通じるシステムを今川領内に行き届かせていた。

「あともう少し、そう遠く無い内に上洛を果たし、今川の御旗を京に立てれる筈であった。しかし、儂はそれを見ることは叶わぬようだ。」

「和尚様……」

「故に泰朝、御主にこれを託す。」

雪斎は懐から真新しい書物を取り出すと、それを泰朝に差し出した。

「これには、今川が天下へ至る為の道筋が記されておる。無論全てが思い通りになるとは思っておらぬが、きつと御主達の助けとなろう。」

「……はっ！有り難く頂戴致します。」

書物を受け取り頭を下げる泰朝に雪斎は満足そうに頷く。

だが、その表情が突如として冷たく、そして鋭いものに変わった。

「それともう一つ、御主に言わねばならぬ事がある。尾張の織田信奈、あれは確実に殺せ。」

「えっ！うつけ姫と呼ばれる、あの織田信奈をですか？」

「うつけの姿に惑わされてはならぬっ！儂は一度だけ、戦場であの女を見た。あれは虎じゃ。とても誰かの下に付く事を良しとする者で

は無い。今はまだ爪は短く、牙も生え揃って無いが、いずれ姫様の喉元に届きうる力を得よう。故に殺せ。」

「…降伏して来てもですか？」

姫武将に対しては、降伏を選んだ場合その身の安全を保証するのだが、この戦国での習いであった。

戦が終わった後、解放するか剃髪させ寺に入れるか等は個人の裁量によったが、基本的には姫武将は必要以上に傷物にしないのが暗黙の了解である。

しかし、雪斎は泰朝の問いに躊躇無く頷いた。

「無論じゃ。よいか泰朝、人の上に立つ者は、心に一匹の鬼を飼わねばならぬ。だが、姫様の気性ではそれは難しい。故に御主が鬼と成れ。今川を守る、護国の鬼と。」

「今川の鬼に…」

「そうじゃ。それが儂から御主への最後の願いじゃ。」

雪斎から向けられる切実なまでの言葉と眼差しに、泰朝の覚悟が決まった。

脇差しを鞘ごと自分の前に立てると、僅かに刃を抜いた。

「これより拙者は鬼になります。今川と姫様を守る鬼へと…。」

そう誓って泰朝は脇差しで金打する。

ここに一つ、決して破られぬ誓いがたてられた。

「あら、師匠に泰朝さん。こんなところにいらしたのですね。」

不意に気の抜けたような声が出たかと思えば、今しがた守ると誓った主君が木の影から顔を覗かせていた。

泰朝は慌てて脇差しを直そうとするが、雪斎は何事も無かったように頭を下げる。

「これは姫様、如何なる用向きでしょうか？」

「何を寝惚けてらっしゃるのです。もうすぐ会談の時間でしてよ。」

「おやつ！もうそんな時間でしたか。これは失敬、すぐに向かいましょう。おっとつと…。」

義元から促され雪斎が立ち上がろうとするが、バランスを崩しよろ

めいてしまう。

慌てて泰朝が体を支えようとするが、それよりも早く義元が側に行き、倒れそうになった雪斎の体を支えた。

「師匠、急がずとも大丈夫です。私の手をとって下さいまし。」

「……………忝のう御座います。」

義元は雪斎に手を取らせると、歩調を合わせ目的の場所へと向かった。

まるで実の親子のような二人の後ろ姿を眺め、泰朝は胸の前で脇差しを強く握り締めていた。

この後、駿河の今川義元、甲斐の武田晴信、相模の北条氏康という東国の三か国の主が一同に会し、三国間で血縁を交わす盟約が結ばれるに至る。

世に言う、甲相駿三国同盟である。

これによって、今川は背後を憂う事無く西に注力できるようになった。

太原雪斎がこの世を去ったのは、それから間も無くの事であった。

「おーい、泰朝！そろそろ評定が始まるぞ。」

その声に泰朝は瞑想を止め、ゆっくりと瞼を開く。

目の前にいたのは主君を同じとする同年代の武将、岡部元信であった。

泰朝は座禅を解くと、肩を鳴らして服装を整える。

「もうそんな時間か。すまんな元信。手間を掛けさせた。」

「構わねえよ。それにしても、そうやってお前さんが座禅を組んでるのを見ると、和尚様に似てきたと思うぞ。」

「……………それは誉めておるのか？」

「おや？そう聞こえなかったか？」

からかうような元信の言い種に泰朝は口を歪ませるが、それすらも面白い様子で元信はクスクスと笑う。

「そう言えば聞いたぞ。我らに寝返った鳴海城の山口親子、実は最初から織田と通じておったそうだな？」

「…ああ、その様な噂が流れておったのは事実だ。故に先日、誅した次第だ。」

「そうか。まあ、あの裏切り者がどうなろうと知ったこっちゃないが、果たしてその噂、どこから流れたものだろうな？」

「……それが何か気になるのか？」

「まあな。真偽はともかく、一体どこの誰がそんな事を言い出したのかと。尾張の人間か、それとも駿河の人間か…。」

「……俺が思うに、山口は己を賢いと思っておる魚だ。」

「己を賢いと思っておる魚だと？」

泰朝の例えに元信は頭を捻る。

「ああ。目の前に落ちて来た餌に何の疑いも無く食い付く。そうやって腹を肥やし、自分は生き賢いと思い込んでいる魚だ。」

泰朝は蔑んだように鼻を鳴らした。

「そういう魚は別の餌を前にしたらまた食い付く。故に、釣り易かった魚は早々に捌くに限るのだ。」

「……改めて言うが、最近のお前はますます和尚様に似てきたな。」

「…そうか。」

「ああ。故に言わせてくれ。あまり一人で背負い過ぎるな。少しは俺達にも、背負わせろ。」

「………忝ない。」

小さく感謝の言葉を告げる泰朝に元信は言葉を返さず、ただ口許に笑みを浮かべると軽く肩を叩いた。

そうして二人は無言のまま肩を並べ、評定の間に入る。

そこには既に、具足を着けた戦武者達が揃っていた。

泰朝達も彼らに倣って所定の場所に付くと、間も無く彼らの主君、東海一の弓取り、今川義元が姿を現した。

「皆々様、準備はよろしいですね。泰朝さん？」

「はっ、兵の支度、万事抜き無く。」

「よろしくてよ。では皆様、命じます。」

口許に扇子を当て、義元は楽しげに命じた。
「天下に至る、戦を致しましょう。」

今宵はこれまでに致しとう御座りまする。

奇襲

清洲城の評定の間には、織田家の家臣達が一同に集まり、尾張を侵攻する今川軍の対抗策が論じられていた。

「今川軍は二日前に岡崎を出立し、鳴海城、あるいは大高城を目指し進軍中とのこと。総大将に今川義元、総勢二万五千の大軍にございませぬ。」

「二万五千だど!?今川のほぼ総兵力ではないかっ!」

「今川は北の武田、東の北条と同盟を結んでいます。後方の憂いが無く、西に全力を投じられるでしょう。」

今川軍の総数を聞き驚愕する佐久間信盛に丹羽長秀が冷静に返すと、場に重苦しい沈黙が流れる。

そんな中で信奈はじつと尾張の地図を睨み付けていた。

「いま我らに用意出来る兵数は多くて五千。他に隣接する国への備えを考えるなら、出せるのは三千が限界です。」

「三千で二万五千を相手にせよというのか。いったいどうすれば…。」

「…我々の前には今、二つの道が存在します。一つは敵を倒すか、倒されるまで断固として戦い続ける道。もう一つは、潔く敗けを認め、今川の軍門に降る道です。」

「今川に降るっ!?!丹羽様は姫様に大義を捨て、生き恥を晒せと申されるのですかっ!?!」

「でしやばるな久太郎っ!何様のつもりだっ!」

万千代に対して食って掛かるように堀秀政が物申せば、信盛が厳しく咎める。小姓である秀政には評定で意見を述べる事が許されておらず、それ故の叱責だった。

しかし、それでも秀政は後ろに下がらず、睨み付けるように鋭い視線を万千代に向ける。

「我らは御家を二分する危機を乗り越え、今川であろうと何であろうと存分に戦う気構えにあります。なのに何故、丹羽様は戦わずして敗北する道を示されるのですかっ!?!」

「…戦をして勝てる見込みがあるならばそれも良いでしょう。されど

現時点では、まともに戦って勝てる見込みはありません。それならば一時の屈辱を飲み込み、今川のもとで再起を窺うのも道です。」

「ですが、せめて一戦交えてからでも……」

「その一戦が御家を滅ぼす一戦になり得ます。命あつての大義。寧ろ力量差を認められず、一時の激情に飲み込まれ、御家の血を絶やす事こそ武門の恥、零点以下に御座います。」

「なれどっ！」

「出すぎじゃ、久太郎っ！」

万千代の言い分に尚も言い返そうとする秀政であったが、信盛がそれ以上は許さぬとでも言うように名を呼べば、口を閉じ下がるしか無かった。

そんな家臣達のやり取りを無言で見っていた信奈は、秀政が後ろに下がったのを見届け、重々しく口を開いた。

「確かに、万千代の言うことは尤もね。だけど私は、それでもなお、今川と一戦交える道こそ織田が歩むべき道だと思うわ。」

「……姫様、その意をお教え頂けますか？」

「万千代の言う通り、今川は強敵よ。だからといって、これに立ち向かわずして恭順すれば、武家としての威を失うわ。そうなれば、命を拾ったとしても、天下を窺うという私の野望に挑むことさえ出来なくなる。そんな事になるくらいなら、私は例え家を潰した愚将の諍りを受けようと、戦の末に血反吐にまみれ野垂れ死ぬのが本望よっ！」

力強く言い放たれた信奈の覚悟に多くの家臣が息を飲む中、万千代は初めから信奈がそう言うのと分かってたかのように静かに頷いた。

「然らば、策を練らねばなりません。二万五千の大軍と戦う策を。」

「それなら多少なりとも考えたわ。今川軍二万五千。その数は脅威だけど、同時に弱点にもなり得るのよ。」

信奈は床に敷かれた大地図に、次々と駒を並べていく。

「黒い駒が今川軍。赤く印を付けたのは尾張領内にある今川の拠点、鳴海城と大高城よ。偵察によれば、今川義元は今日にも両城に最も近い水掛城に入るらしいわ。」

信奈は地図上の尾張と三河の国境に黒い大駒を置く。

「鳴海城と大高城から清洲までは平野が広がっていて、間に大きな障害はないわ。一方で水掛城から両城の間は、川や沼地の多い森が広がっていて、大軍が動かし辛い。即ち、私達が仕掛けるべきはここ以外にないのよ。」

次に信奈は赤い印の近くに、それぞれ二つずつ黒い印を付けていく。

「鳴海城と大高城の近くには、それぞれに二つの砦を築いているわ。今川からすれば進路から外れているから本来なら相手にしなくてもよい砦だけど、ここを拠点に後から来る荷駄隊を強襲すれば、大軍の今川にはかなりの痛手になる。当然今川もそれは分かっている筈よ。だからこそ、砦を無視することができず、幾分か兵を割くでしょうね。そこが私たちの狙い目よ。兵を分散させ、手薄となった今川の先遣隊を奇襲をもって撃退する。全滅にさせる必要はないわ。出足をくじき、進軍を停滞させ、兵糧を消費させる。そうすれば農兵中心の今川軍は疲弊し、士気は否応なく下がるわ。そこを全軍をもって強襲し、敵を尾張から一掃する。其れが我らが今川に勝つ唯一の策よ。」

「おおっ！確かにそれならば、いけるかもしれないな！」

信奈が語る対今川の戦略に家臣団から感嘆の声が上がった。

二万五千の大軍は、その数ゆえに兵糧の消費が早く、戦が長引けば食料不足で今川を苦しませる要因になりかねない。

しかも今は田植えが終わったばかりで、市場の米の値段が一番高くなる時期であり、現地調達すらままならないだろう。

加えて兵の多くが農民であるが故に、戦の長期化は彼らの士気を容易に低下させる。農兵にとって大事なのは領主の大義ではなく、故郷の田畑であるからだ。夏が過ぎれば稲刈りの季節となり、彼らの望郷の念も強くなる。

その思いは農兵たちの間で伝播し、今川軍の士気崩壊にも繋がる。「つまり我らの目標は時間を稼ぐことよ。其の為には奇襲部隊を編成し、今川軍の先遣隊を不意打ちするのが最良ね。」

「姉上っ！その奇襲部隊の役目、この僕にお命じ下さい！」

「信勝、いや、信澄か。」

信奈の前に進み出たのは、織田信勝改め、津田信澄であった。

稲生の戦いの後に恭順を許された信澄であったが、姉に反旗を翻した事に対するケジメとして分家の津田姓を名乗る事とし、併せて信勝から信澄と改名した。

これによつて、津田信澄は正式に織田家の家督の継承を放棄したことに相成った。

「もとはといえば、今川を領内に招き入れたるは、僕が林通具の言に乗せられたが故。然らばこの信澄、先鋒の役目を果たし、これまでの汚名を濯ぎとう御座いますれば、何卒っ！」

強い決意のこもった眼で信澄が懇願すれば、信奈は暫しの間思案するようにじつと弟の顔を注視する。そして、ゆっくりと口を開いた。

「……ダメよ。」

「なっ! どうしてですか!？」

「此度の奇襲は今後の戦を左右する重要な役割。これまでまともに戦に出たことも無いあなたには、荷が重いわ。」

一切取り繕うことなく、率直に信澄の願いを退ける理由を述べれば、信澄は悔し気に俯き、膝の上で真新しい傷の残る拳を固く握りしめた。

そんな弟に、姉は一転して優しく語り掛ける。

「安心なさい。あなたが汚名を返上する場合は、いずれ用意してあげるから、今日のところは控えなさい。」

「……御意に御座います。」

信澄が後ろに下がると、信奈は古参の家臣団の方に鋭い視線を向ける。

「千秋四郎、あんたに奇襲の役目を任せるわ。」

信奈がそう命じたのは、先代より織田家に使える千秋四郎こと、千秋季忠である。

長年に渡り戦場に身を置くと同時に、熱田神宮の大宮司でもある歴戦の古強者は、主君の命に力強く応えた。

「はっ! 姫様の策、必ずや成してみせます。」

「頼んだわよ。」

千秋四郎が奇襲部隊の役目を任じられた事で評定は一先ず解散となり、各々はそれぞれの役割を果たすべく慌ただしく部屋を出ていく。

その中に紛れて良晴は秀吉に近づくと、顔を近づけ耳打ちをする。「なあ、秀吉さん。これから始まる戦って、多分桶狭間の戦いの事だよな。」

「…後世ではその様に呼ばれておるのか。儂らは田楽狭間の戦と呼んでおったが、恐らくそれで間違いないじやろう。」

「だったら、この後どんな風に戦が進んでいくか分かるんじゃないのか？今川がどの辺りを通って進軍してくるとかさ。」

良晴は期待を込めて秀吉に尋ねる。

織田と今川を巡り、強いては戦国一有名な戦となる戦いの結末を知る者として、詳細な情報を事前に共有する事は、織田家の勝利をより確かなものにすると考えた為であった。

しかし、秀吉は良晴にとって予想外の言葉を返した。

「しらん。」

「えっ?」

「田楽狭間に関しては、儂もあまり詳しい事は知らんのじゃ。」

「ど、どうしてだよ!?秀吉さんはその頃には織田家に仕えてたんじやないのかよっ!?!」

「無茶を言うでない。四十年近く前の戦いじゃぞ。細かいところまで覚えておらぬわ。それに、あの頃の儂はただの一兵卒じゃ。上から命じられるままに必死に戦場を走り回ったつたら、いつの間にか織田が勝利していた戦じゃった。」

「そ、そうだったのか…。」

「じゃがのう、儂もいつたいどの様にして今川の大軍に勝利したのか気になって、信長様に聞いてみたことがあった。すると信長様は、苦笑いの浮かべてこう仰ったのよ。」

『あれはまぐれだ。もう一度やれと言われても出来るものでは無い。二度とやりたくない戦だ。』

千秋四郎は三百の兵を連れ、息を潜めて水掛城の近くの森に進軍した。

目的は水掛城を出たばかりの先遣隊を撃退し、戦序盤の氣勢を制する事である。

副官の佐々隼人の放った偵察によれば、先遣隊は間も無く奇襲部隊が潜む森を通過するはずである。

四郎達は水無月の茹だるような暑さの中、誰一人息を飲む音さえ漏らさぬようにし、その時を待った。

やがて、忍の報告の通り先遣隊とおぼしき軍列が見えてきた。

四郎は無言のまま手で合図をすると、配下の武将達が同じように組の兵達に合図をし、臨戦態勢を取らせる。

そして、戦列の真ん中が晒されたのを見計らい、千秋四郎は勢いよく采配を振るった。

その瞬間、太鼓が乱れ打ちされる音が鳴り響き、それと共に三百の兵が一斉に無防備に晒された戦列の横腹に食らい付いた。

「敵襲っ！敵襲っ！」

「慌てないで下さい！敵は寡兵です。落ち着いて対処すれば大丈夫です！」

事態にいち早く気が付いた今川の姫武将は、部隊の混乱を押さえようと檄を飛ばすが、完璧に決まった奇襲により上手く収束出来ずにいた。

「やむを得ません。一旦退却しましょう。」

「退却っ！退却だあ！」

姫武将の指示を隣の副官が大声で叫ぶと、今川の先遣隊はもと来た道を我先にと後退していく。

「四郎様、如何なさいますか？」

「当初の目的は果たした。深追いはせずに、我らもこの場を脱する

ぞ。」

背を向けた相手を目で追いながらも、四郎は素早く配下の将に兵達を纏めるように指示を出す。

不意打ちを受けて逃げる相手に欲を見せず、冷静に己の役割を全うしようとする千秋四郎は、幾多の戦いの中で磨いた経験則に裏打ちされた、優れた戦術眼と統率力を持つ、優秀な指揮官と言えただろう。寡兵による奇襲という難事を任せる上で、信奈が千秋四郎に奇襲部隊を任せたのは間違いでは無かった。

しかし、いかに間違いを犯さなかったとはいえ、万事想定通りに進まないのが戦場である。

ドスツ

撤退のため兵達を纏めていた佐々隼人の隣から、米俵に勢いよく刃を刺した時に似た音がする。

振り替えれば、目を見開いた千秋四郎の側頭部に一本の矢が刺さっていた。

「し、四郎様?」

佐々の呼び掛けに口を開いて何かを伝えようとするが、言葉が紡げぬまま四郎は落馬し動かなくなった。

「て、敵襲じゃっ!」

地に臥せる四郎に駆け寄りたい衝動に駆られながらも、瞬時に周囲へ警戒の声を響かせた隼人も一介の武人であった。

しかし、部隊は既に混乱の渦中にあり、そこに容赦なく四方から矢がいかけられた。

「ど、どういう事だ!? いつの間にか我らは包囲されておる!?!」

不意打ちを仕掛けたはずの自分達が、不意打ちをされている。

考えが追い付かぬ内に次々と矢を放たれた奇襲部隊は恐慌状態に陥り、組織的な行動は不可能になっていた。

更にそこに、先程撤退したはずの先遣隊が引き返し、猛然と奇襲部隊に殺到する。

「やんぬるかなっ! 全て奴等の手の上であったか!」

自分達が計られていたことに気付き、憤怒の表情で隼人は刀を抜

く。

せめて奮戦し時間を稼ぎ、一人でも味方を逃がす所存であった。だが、その願いも虚しく、織田の奇襲部隊三百は今川軍先遣隊の勢いに呑まれ、壊滅した。

「元康殿、よくやってくれた。見事な戦働きである。」

「いいえ。泰朝さんが予め敵の奇襲を予期していたからこそです。それに私がやった事なんて殆どありません。実質的に指揮をしてくれた忠次さん。木の上に潜んで矢を射って敵軍を混乱させた伊賀衆の皆さん。そして何より、命を張って戦ってくれた兵達の皆さんの手柄です。」

朝比奈泰朝から労いの言葉を受けながらも、謙遜し部下達の称賛するのは、先遣隊を率いていた今川の姫武将、松平元康である。

彼女は織田の奇襲を見破った泰朝の指示を受け、わざと奇襲された上で一旦撤退し、反撃に転ずる策を用いていた。

その結果、奇襲が成功したと思つて一息入れた敵軍は、前もって元康が木の上に控えさせた忍達に矢を射かけられ混乱し、逆襲してきた先遣隊により撃滅された。

「けれど泰朝さん、どうして織田が奇襲してくると分かったんですか？」

「簡単な事だ。我らは此度の遠征に際し、織田家を調べあげた。元康殿、御主は織田信奈という武人が、大人しく降伏したり、援軍の無い籠城をしたりする人物と思うか？」

「…いえ。私の知る吉姉様は、たとえ如何に相手が強敵であろうとも、自分の手で現状を打開しようとする筈です。」

元康は信奈の性格を思い出しながら、苦笑いを浮かべそう述べる。

松平元康は幼少期の数年を尾張で過ごしたのだが、その経緯は実に戦国らしい策謀にまみれていた。

西の織田、東の今川という二国に挟まれた三河の松平家は、長年両国の圧力に晒され続けていた。

そうした中で、今川の支援を受けて松平家当主に納まった元康の父、広忠は、今川との関係を重視した政策を行っていた。

それを良しとしない織田信秀は、軍を率いて三河に侵攻し、広忠の居城を脅かした。

そこで広忠は旧知の今川に援軍を要請すると、当主についたばかりの今川義元と軍師の雪斎は、援軍の質として広忠の子、当時竹千代と名乗っていた元康の身柄を求め、広忠は苦渋の末にこれを了承する。

こうして竹千代は一旦母方の祖父に預けられ、船で今川に連れていかれる筈であった。

ところが、なんと織田信秀は竹千代の祖父、広忠にとつては義理の父親を調略し、竹千代の身柄を尾張に送らせ、三河に対する人質にする鬼手を繰り出し、広忠と今川を見事に出し抜いたのであった。

因みにこの謀略戦、義元と雪斎が揃いながらも完敗した数少ない戦いでもある。

その後、小豆坂の戦いで織田が今川に敗北するまでの数年間を元康は織田家で過ごし、今川に引き渡されてから今日までに至る。

閑話休題

元康が信奈の人なりを語ると、泰朝は黙って頷く。

「その通り。では劣勢の織田が現状を打開するために出来る事は何かと考えれば、奇襲しかあるまい。あとは予め奇襲に適した場所を調べ、そこに罠を仕掛ければ良い。」

「敵にとつての狩り場を、逆に利用したわけですね。実に見事です。」

「これも全て、元康殿を初めとした三河衆の働きがあつてこそだ。時に元康殿、その者達は捕虜か？」

泰朝は松平の兵に連れられた、傷ついた体に縄を打たれた者達を見る。

その中には女兵の姿も見受けられた。

「はい。降伏を勧告し、それに従った織田軍の皆様です。つきま

しては戦が終わるまでの間、後方で預かって頂けないかと思ひまして。」

「…そうであつたか。だが、無用である。即刻その者達の首を跳ねよ。」

「……………へ？」

「聞こえなかつたか？その捕虜達は殺せ。」

「…っ!?お、お待ちください！戦において捕らえた敵の将兵、特に女の兵は戦が終わるまで後方で困うのが戦の作法。何故、その様な無体な事をつ!？」

一抹の慈悲さえ無き命令に、焦つた様子で元康がその真意を問えば、泰朝は冷たい視線を捕虜達に向け告げる。

「この者達の首を織田に送れば、良い見せしめとなろう。下手な抵抗は無意味と分からせ、その代償が死しか有り得ぬと知らしめれば、士気を挫きて降伏させるも容易となる。」

「た、確かにその言は一理あります。然れど、義に背きし行いは、巡りめぐつて己に反つて参ります。無力な捕虜を無慈悲に殺したと広まれば、今川の悪評となるは必定ですつ!」

「悪評を被つたとて得る利があるというもの。京へいたる道を作るうえで、尾張攻略は早急に済まさねばならぬ。」

「朝比奈殿つ！それはあまりに慘う御座いますつ!」

泰朝の言い草に我慢ならぬ様子で酒井忠次が物申せば、泰朝はギロリと厳しい視線を忠次に向ける。

その視線から側近を守るように元康は前へ出ると、深く頭を下げた。

「部下が出すぎた真似をして申し訳ありません。けれど、どうか我らの意を汲んでいただけないでしょうか？義を尊び、情を厚く遇すれば、義元様の慈悲深さの噂は京にも届き、必ずや今川の天下取りの後押しとなります。」

「…過ぎたる情は味方を殺すと心得よ。お主への言葉は変わらぬ。」

「ですがっ!」

「元康。お主、偉くなつたな。」

泰朝の一言に、元康はそれ以上言葉を紡げなくなった。

もとより、元康の立場は今川に恭順する領主の一人。義元の側近である泰朝とは立ち位置に差があった。

捕虜に向けていたのと同じ視線を元康に向け、泰朝はジワリと近づき静かに命ずる。

「もう一度言う。この者たちの首を跳ね、織田に届けよ。」

「……はっ、承知いたしました。ただどうか、私たちの陣内に場を整える事だけでもお許しできないでしょうか？このような道端で最期を迎えさせるのは、如何に敵兵とはいえ心苦しいですう。」

「……好きにせよ。」

目の端に涙を浮かべながら懇願する元康に、短く答えると泰朝は背を向け本陣へと帰っていった。

その後姿に深々と頭を下げ続けた元康だったが、泰朝が見えなくなると、絶望にうなだれる捕虜たちを横目に忠次を近くに呼んだ。

「では忠次さん、この人たちを私たちの陣内まで連れて行ってください。それからのことは任せます。」

「……御意。」

主君の命を受け、それを了承すると、忠次は部下たちに命じ捕虜たちを陣へと連れていく。

それを見送りながら、元康は泰朝が去っていった方向に目を向けた。

「……泰朝さん、吉姉さまはこのようなことで闘志を萎ませる方ではありません。むしろこれは……」

それ以上は言葉に出さず、元康は不安げな表情で水掛城の方を見ていたが、配下から名を呼ばれると、兜を目深にかぶり直し、黙ってその場を後にした。

後に残ったのは、物言わぬ織田兵の軀と、その死肉を狙うカラスの群れのみであった。

今宵はこれまでに致しとう御座ります。

うつつけ者ども

奇襲部隊の壊滅の知らせは、夕刻には清州城に伝えられた。

その知らせは、奇襲の成功を待ち望んでいた織田の將たちにとってあまりにも無情なものとなった。

「全滅、ですって…。」

「はっ！投降した者たちも悉く首を跳ねられ、その首が門前に届けられております。」

「…抵抗するなら容赦しないという訳ね。」

伝令より知らせを聞いた信奈は激情を覚えながらも、辛うじて冷静さを保っていた。

だが、自分の命令で奇襲を実行した將兵たちが一人も生きて帰ってこなかった事実には、顔は青くなり、語尾はわずかに震えている。

「ま、まだ初戦を取られただけに御座います！諦めず、攻撃を繰り返せば…。」

「いや、待て。こうも完璧に奇襲が防がれたということは、完全にこちらの動きが読まれていたに相違ない。であるなら、ここで何度同じ手を使おうが通じるはずがなからう。」

「では座して敗北を受け入れるというのかっ！貴様らに織田の武將としての気概は無いのかっ！」

「二つの策に固執し無駄に犠牲を増やしてはならぬと言っておるのだっ！それとも、次は貴公らが成功の望みの薄い奇襲をやってくれるのか？」

「おい、貴様っ！姫様が考案した策にケチをつけるかっ！」

「誰もそのようなこと申しておらぬわっ！」

奇襲部隊が全滅した報に動揺しているのは家臣たちも同様だ。評定は紛糾し、收拾がつかなくなりつつあった。

それを収めるべく一喝しようと思奈が立ち上がったその時、顔面蒼白となった伝令が評定の間に転がり込んできた。

「急報っ！急報に御座りまするっ！」

「何があったのっ!?!」

「今川軍の猛攻により丸根砦並びに鷲津砦陥落っ！佐久間盛重様、飯尾定宗様、そして織田秀敏様がお討ち死に致しましたっ！」

「そんなんっ！叔父上達がっ！」

「盛重もかっ！」

伝令の知らせに信奈と佐久間信盛は悲痛な叫びをあげた。

丸根砦と鷲津砦は、それぞれ大高城と鳴海城への備えとして建設された付城であり、今川軍の戦力を分散させるという信奈の戦略の起点となる砦である。

しかし、砦の陥落以上に衝撃が大きかったのは、それぞれの城を守備していた武将の死であった。

織田秀敏は信奈の父、信秀の叔父にあたる織田家の長老である。

飯尾定宗は飯尾家に養子に入った秀敏の息子であり、二人とも信秀亡き後、一貫して信奈を支持し続け、信奈も親族の中で特に二人を篤く信頼していた。

佐久間盛重はその名が示す通り信盛の弟であり、稻生の戦いの折に多くの親族が反信奈を掲げる中、兄と供に最初から信奈についてきた。

信奈にとって、今川撃退の要所である砦の失墜もさることながら、家督を継いだ頃よりの忠臣を失うのは、戦略的にも精神的にも非常に大きなショックを与えるものであった。

「どうすればいいの…奇襲は失敗した…大叔父上も死んだ…砦も失った…敵は目の前…私はいったいどうすればいいのっ!？」

「お、おい。大丈夫かよ、信奈？」

立て続けの凶報に打ちのめされ、信奈は顔面蒼白となり、目を虚ろにフラフラと足取りも怪しく柱に寄り掛かる。

今まで見たことのない弱弱しい様に思わず良晴が立ち上がるが、控えていた万千代と久太郎が素早く主君の側によると、その体を支えた。

「姫様、お気を確かに。」

「…少し休むわ。」

そう言うのが精一杯だったのか、信奈は二人に肩を支えられ奥へと

下がっていく。

その様を見送った家臣団の間には、重苦しい沈黙が流れる。

「…もはや、これまでか。姫様があのようになってしまわれるとは。」
そんな言葉が家臣から漏れながらも、それを咎める声はない。それほどまでに織田は追い詰められていた。

「…こうしていても埒があきませぬ。皆様方、我々も暫し休憩をいたしましょう。隣室に飲み物と軽い食事を用意させますので、どうぞそちらへ。」

「…そうじゃな。少し頭を冷やす必要があるやもしれん。」

村井貞勝の呼びかけに信盛が応じて立ち上がると、後に続くように他の者たちも腰を上げ、部屋を出ていく。

部屋に残るのは少数で、彼らは地図の周りに集まり今後の動きについて小声で意見を交わしていた。

それを尻目に良晴は秀吉の袖を引くと、休憩所となった隣室とは反対側の部屋に入り戸を閉めた。

「どうしたのじゃ良晴？…このような場所に連れてきて。」

「…秀吉さん、秀吉さんは桶狭間の戦いの時、まだ下っ端だったから戦がどのように進んだのかよく知らないんだよな？」

「…ああ、そのように申したはずだが。」

「…本当にそうなのか？」

「…何が言いたい？」

「…確かに桶狭間の時の秀吉さんには、当時の状況はよくわからなかったのかもしれない。けれど、秀吉さんが織田信長の人生で最も重要な一戦と言っている桶狭間の戦いについて、何も調べず本人に話を聞いただけなんて思えないんだ。」

あの豊臣秀吉が、織田信長に仕え、その才を認められ、後に天下の頂にまで上り詰めた男が、織田家どころか東海地方の勢力図を大きく書き換えた、戦国一著名な一戦について何も調べなかった筈が無い。

そんな歴史知識というには余りにも不正確な予想であったが、仏頂面のままにじつと見つめてくる秀吉に良晴は確信を強める。

暫しの間、沈黙を保った秀吉であったが、やがてため息を一つ着く

と、やれやれと言うかの如く頭を掻いた。

「まったく、下手に後世に名が伝わるのも中々に厄介であるのう。まあ、お主になら別段隠し立てすることでもないが。」

「やっぱり。秀吉さんはどれ位のことを知ってるんだ？」

「戦の経過は勿論。今川軍の侵攻経路、部隊の配置、戦後の被害状況、並びに戦が周辺国に与える影響、ざっと思いつく限りではそんなところかの。」

「えっ、そんなに？」

「ああ。そもそも儂が信長様に召し上げられたのは、田楽狭間の戦についての詳細な報告を上げたからじゃ。」

「そうだったのか。草履を懐で温めた話が印象深いけど、あれは確か創作の可能性が高かったんだよなあ。って、そんなことよりも、どうしてその話を信奈にしてやらなかったんだよ。その情報があれば奇襲が失敗することも、砦が落とされることも無かったかもしれないじゃないかっ!？」

秀吉の返答に良晴は強く詰め寄るが、秀吉は動じた様子は見せず、じつと良晴の視線を受け止める。

「…良晴よ、この戦は織田の行く末を決する戦であると同時に、信奈様が天運を開くための戦ぞ。故に儂は、此度は必要以上に手を出さぬと決めた。信奈様の運命を定めるのは信奈様自身じゃ。」

「…信奈自身の手で、この苦境を乗り切ることの意味がある。そういうことなのか？」

「いかにも。信奈様にあの方と同じものがあるなら、それができると信じておる。」

桶狭間の戦いはただの戦ではない。

まさしく、織田家の運命を変え、日本の歴史さえ変えてしまった戦である。

秀吉が思うに、あの戦があったからこそ織田家の武将たちは織田信長という人物の底知れなさを認識するに至った。

そしてそれは、信長自身の成長にも繋がったのだと考えている。

秀吉にとって金ヶ崎の引き口が武将としての己と周囲の目を大き

く変えたのと同様に、織田信奈という姫が武将として大きく成長し、周囲に力を認めさせるには、桶狭間という苦境を己の手で乗り越えねばならない。

「儂らの知識で織田を楽に勝たせるのは容易い。然れど、それは真に織田信奈という戦国武将が選んだ道ではない。例え一つ間違えれば奈落へと落ちる道であろうと、己で選んだ道を進まねば武運は開けぬ。戦国大名とは、そういうものじゃ。」

己の才で道を開き、この国で最も高い場所まで上り詰めた男の言葉に、相良良晴は強い衝撃を受けた。

ふと、主君の下がった部屋の方に目を向ければ、ちようど薄明かりが襖に差す。

「…信奈は、大丈夫だよな?」

「ああ。そうであつてもらわねば困る。」

逢魔が時に日の光が溶けていく中で、織田家の夜は静かに過ぎていった。

この時代を生きる人間の一日の生活は、日が昇るとともに始まり、日が沈むと共に終わる。

日が完全に沈み切つての起きている人間はごく僅か。貴重な油や蠟燭を使用できる人間に限られた。

その限られた人間の一人にあたる朝比奈泰朝は、水掛城の個室で地図を睨みながら、何度もその上に置かれた駒を動かしては顎に手を当て思案していた。

すると、廊下側の襖が不意に開かれた。

「あら、泰朝さん。まだ起きてらしたの?」

「これは姫様。こんな夜更けに如何なされましたか?」

「ちよつと喉が渴きましたので、水でも貰おうと思つたんです。」

「それならば誰か人をお呼びください。家中の者しかおらぬとはい

え、年頃の女性が夜分に出歩くものでは御座いません。少しお待ちを。」

そう言つて泰朝は部屋に義元を残して外に出ると、井戸から水を汲んで帰ってくる。

「これをお飲みになられたら、すぐにお部屋にお戻りください。明日も早う御座います。」

「あら、ありがとうございます。…ふう、冷たくておいしい。それにしても、明日には尾張に入るのですわね?」

「ははっ!万事上手くいっておりますれば、明日の日中には鳴海城に入ることが叶います。鳴海城への先遣隊には元信、大高城には松平元康が援軍に入りますれば、抜かりは無いかと。」

「それは素晴らしいですわ。あとは織田信奈さんがどのように振舞われるかですわね。まったく、潔く負けを認め軍門に降るといふのなら、同じ姫武將の誼で無碍には扱ひませぬのに。」

ため息交じりの義元の言葉に、泰朝の肩が僅かに跳ねる。

「…まこと慈悲深きお考えに御座います。されど、相手方にも武家の矜持があるのでしよう。」

泰朝は信奈が降伏してきた場合、密かに謀殺するつもりであることを目の前の主君に伝えていない。事が済んだ後も、己の胸の内に秘し続けるつもりであった。

「いずれにせよ、義元様は本陣にてどっしりと構えていて下さればよろしいかと。あとは全て、我らにお任せください。」

朝比奈泰朝は死んだ後、極楽に行こうなどと考えていない。

例え地獄に落ちようとも、今川義元という姫武將が笑顔で世を照らし、争いの無き太平の世を作れるのであれば、その陰で生み出される闇は全てこの身に引き受け地獄へ落ちよう。

それが、朝比奈泰朝という武人の矜持であった。

「ありがとうございます、泰朝さん。師匠亡き今、あなたたち今川家臣団こそ、私の頼るべき依木ですわ。」

そう言つて無垢な笑顔を向ける主君に、ほんの少し泰朝は胸に痛みを感じるのであった。

そんな泰朝に気づいていないのか、義元はのんびりと縁側に出ると雲の掛かった月を見上げる。

「尾張を治めれば都への道が開けますわ。伊勢の北畠家、近江の六角家、そして御所の方々へは名門の誼により根回し済み。応仁よりの乱を治められず將軍が都を逃亡した今、今川が音頭を取り新たに幕府を開き、国の政を正道に戻す。それこそが、天におわします師匠への手向けですわ。」

縁側の淵まで足を進めた義元は、白い手を月へ向けて伸ばすと強く拳を握った。

「見ていてくださいまし、師匠。必ずや今川の御旗を京に。」

今川もまた、明日が運命の日になることを予感していた。

夜雲が流れ、月は完全に夜闇消えた。

信奈が目を覚ましたのは、まだ日も登らぬ夜更けであった。

体を起こすと、すぐに昨日のことが思い出される。寝覚めの良さは彼女の利点の一つであった。

「結局、何一つ打開策が思いつかなかったわ。」

あの後、信奈は評定の間に戻る事は無かった。

万千代たちが心配して何度か声をかけてきたが、碌な返事もせず部屋に閉じこもっていた。

家臣たちはその後も話し合いを続け、ほとんどの者が城に泊まったそうだ。

立ち上がってみれば、妙に頭がフラフラする。自分でも気落ちしていることが自覚できた。

だが、気持ちとは裏腹に、体は自然と動き出す。

寝巻のままに廊下に出ると、そのまま庭へと続く戸を開く。

人気がない闇夜の中、暗がりにポツンと井戸が目に入った。

信奈は素足のまま庭に降りると、覚束ない足取りで井戸に近づく。そして、備え付けられた桶を井戸の中に落とすと、縄を引いて水をくみ上げた。

水に満たされた桶を覗くと、見るからに寝不足といった具合の酷い顔をした己が映っていた。

それが妙に可笑しく感じられ、口元から歌が紡がれる。

人間人生五十年

下天の内をくらぶれば

夢幻の如くなり

幸若舞の演目の一つ、敦盛の一節である。

源平合戦の一の谷の合戦において、己の子供と同年代の若武者を殺した武士の苦悩を歌ったものであり、『人間の五十年は天界の最下層の下天の一日に過ぎず、一睡の夢のように儂いものだ。』という意味である。

信奈はこの一節が好きではなかった。

まるで人がどんなに必死に世を変えようと足掻いたところで、天の差配に比べれば細やかな抵抗にしか成り得ないと言われているようであり、己の夢を否定されているような気分になる。

だから本当はとも口遊みたくなる様な歌では無い筈なのに、自然と口から零れてしまった。

水面に映る己の顔が醜く歪み、信奈はそれをかき消すように頭の上で桶を逆さにした。

冷たい水が全身を濡らし、前髪の手前から水滴が滴り下りる奥で、信奈の目に怒りにも似た光が宿る。

踵を返した信奈は強い足取りで私室に戻ると、体にへばり付いた寝巻を脱ぎ捨て、裸体を晒す。

信奈の私室には一如何なる時でも戦に出れるよう、戦装束が常に準備されている。

体の露を払った信奈は、それを手早く着込んでいく。

幼少の頃より戦ごっこに明け暮れた信奈にとって、介添え無しに着

付けるのも慣れた作業である。

ほどなく着付けを終えた信奈は、再び庭先に降りると外を回って馬屋に向かった。

そこには明確に誰の目に触れないようにしようとする意図があった。

馬屋から自分のお手馬を連れ出すと、馬の面を優しく撫でる。

それに応えるように馬が嘶けば、信奈は小さく笑みを浮かべた。

「ごめんなさい、こんな早くから。少しだけ付き合っで。」

そう言っで鞍を掛けると、馬の背に跨がった。

手綱を僅かに操れば、馬は主人の意図を汲み取ったのか軽い足取りで裏口へと歩みを進める。

普段はあまり使われない裏口の門を出ると、信奈は颯爽と馬を走らせた。

東の夜空が白み始めた天の下を、信奈が操る馬が駆けていく。

ただ真っ直ぐに、脇目もふらず馬を走らせる信奈の様子は、まるで誰かに追われているようでもあった。

やがて辿り着いたのは、年季の入った鳥居の前である。

その奥には苔のむした石畳が、鬱蒼とした林の奥まで続いていた。

信奈は馬を繋いで鳥居を潜ると、じつと林の奥を見詰める。

そして、意を決したように一步一步、ゆっくりと石畳を歩き始めた。

足元だけを確かめるように進んでいけば、ほどなくして視界が開ける場所に出る。

そこに鎮座するは、三種の神器の一つ、草薙神剣を神体とする熱田大神を祀りし、熱田神宮の拜殿である。

信奈は拜殿の側に歩み寄ると、大きく息を吐き、頭を下げて手を合わせた。

「…意外だな。お前が神様に祈るだなんて。」

不意に背後から掛けられた声に驚き信奈が振り返ると、寝癖頭の良晴が眠気眼を擦りながら現れた。

「良サルっ！どうしてあんたがここにっ!？」

「俺の知る歴史じゃ、織田信長は桶狭間の戦いを前に熱田神宮を参拝

したって伝承があつたから、ここで待つてたらお前が来るんじゃないかと思つてさ。」

「…あんだ、私の前で未来の知識を喋るなつて命じた事、忘れたのかしら？」

「細かいこと言うなつて。それに、俺が知つてるのは織田信長の未来で、織田信奈の未来じゃない。織田信長と織田信奈は別人だろ。」

「……そうね。私は織田信長つて奴のことなんか、まったく知らないわ。」

信奈は再び拜殿の方を向き、良晴に背中を見せる。

良晴は信奈の方へ近づいていき、肩を並べた。

「けどさ、こうして見ると中々感慨深いもんがあるよな。この場所で信長が戦勝を祈願して、桶狭間の合戦に臨んだつて思うと。」

「……信長も今川と戦つたの？」

「ああ。」

「勝つた？」

「ああ。そしてそこから、信長という戦国武将の快進撃が始まつたんだ。」

「そうなんだ。じゃあ、信長は自分の夢を叶えられたのね。」

「……いや、叶えられなかつた。信長は自分の夢を叶える前に、命を落とした。」

「………そう。」

二人の間に僅かな沈黙の間が生まれた。

「………なあ、信奈。いま俺がいるこの世界は、俺が歴史で学んだものとは違う過去だ。だから、お前が今川義元に勝てるだなんて、自信をもつていえねえ。」

「………。」

「それでも俺は、お前に着いていきたいっ！」

「…どうして？答えなさい。」

良晴の言葉に、信奈に驚いた様子は無かつた。

しかし、瞳には剣呑な光が帯び、いつかのような嘘偽りは一切許さぬ、とでも言うような濃密な殺気を全身から醸し出していた。

そんな信奈に、良晴は少し照れ臭そうに笑顔を浮かべながら答える。

「なんつうか、惚れちまっただよ、お前に。」

「……………は？」

良晴が発した言葉の意味が判らぬ、とでもいうように呆けた様子を見せる信奈。

しかし次の瞬間には顔を真っ赤にし、なんと言葉を発して良いのか分からず口を開閉する。

それを不審げに見ていた良晴だったが、すぐに自分が言った言葉を自覚し、こちらも顔を赤くした。

「い、いや、変な意味じゃないぞっ！武将として惚れたって事だっ！お前の夢や戦国武将としての生き方に憧れてるんだ。だから俺は、お前と一緒にこの時代を駆け抜けたい。」

「っ！ま、紛らわしい言い方してんじゃないわよっ！」

良晴に怒鳴り付けると、信奈は顔を反らし火照りを収めるかの如く深呼吸をする。

そうして先程とはまた違った意味で気まずい沈黙が流れるが、気を取り直すように良晴は咳払いをする。

「兎に角だ、俺は何が何でもお前に着いていくと決めた。史実と違うとか、未来が変わったとかは、もう気にしない。俺は伝承でしか知らない織田信長じゃなくて、目の前にいる織田信奈を信じる。」

「……………こんな滅ぼされる寸前の家の当主を信じるなんて、あんた相当な馬鹿、いや、うつけ者ね。」

「……………かもな。少なくとも、賢いって言われるよりかは、そう言われる方が多い気がする。でもな…」

良晴は信奈の顔を真っ直ぐに見詰めて言う。

「そんなうつけ者も、案外多いのかもしれないぜ。」

それはどういう意味か、そう問いかけようとした信奈の耳に人が走り寄る足音が聞こえてきた。

振り向けばそこに、戦装束を纏った秀吉と犬千代がいた。

「秀サルっ！それに犬千代っ！？あんた達、良サルから聞いてここに…」

「左に非ず。姫様が立ち上がられる事、我ら一同固く信じ、いつでも戦に出れるよう準備をしておりますれば、姫様が出陣されし気配を知る由にて、馬の足跡を追ってここに参った所存に御座います。」

「…犬千代は姫様のお陰で織田家に復帰できた。どんな相手だろうと、姫様が命じるままに、犬千代は戦う。」

自分を信じ、参上した二人に何と言葉を掛けて良いか分からず、信奈は視線を迷わせる。

そんな信奈の肩を良晴が叩く。

「俺達だけじゃないぜ。ほら、あれ。」

良晴が指したのは、境内の入り口の方である。

丁度その時、鳥居の方へ続く石畳の参道を、日の出の光が照らす。

そこを歩き近付いて来るのは、鎧で身を固め、木瓜紋の旗を掲げた兵の一団である。

目を見開いた信奈の前に立った一団の先頭は、織田家筆頭家老の佐久間信盛だ。

「姫様、遅参しました事、お詫び申し上げます。この始末は戦場にて取り返します故、何卒ご容赦を。」

「信盛、あんたも私と戦ってくれるの?」

「筆頭家老を任される以上、当然に御座います。何より、今川は我が弟を殺した仇。どうして戦わずして軍門に降れましようや。」

そう言つて正座をする信盛の隣に、村井貞勝が立つ。

その装いは普段は事務方の貞勝がめつたに見せない、戦装束であった。

「姫様、この貞勝、微力なれど御力になりとう御座います。」

「地藏、あんたも…」

「私は姫様に夢を見ております。その夢のため、この身を如何様にも御使い下さいませ。」

貞勝は信盛に倣うように正座をする。

すると今度は、万千代が信奈の前に進み出た。

「この万千代、六さんや犬千代さんのような武勇は無く、木下様のような知略も御座いません。されど、姫様の事は誰よりも近くで見続け、

その心情慮りますれば、どうか最後までお供遣わし下さいませ。」
「万千代…」

それに並ぶように二つの人影が進み出る。

「姉上っ…この信澄、御家存亡の危機を前にして、留守役に身を甘んじるは耐え難く、勝手を承知で馳せ参じました。お叱りは後程受けます故、何卒戦列に加わる事お許し下さいっ！」

「この勝家も右に同じ！一度は刃向かった不忠者に御座いまするが、命をとして働きます！」

「勘十郎、六…」

つい先日争ったばかりの二人が、決意を新たに進み出れば、信奈の言葉にも熱が籠った。

その後も続々と織田の兵共が参列する。

森可成、川尻秀隆、佐々成政、池田恒興、長谷川橋介、金森長近、佐藤藤八、毛利秀頼、岩室重休…

代々織田家に仕えてきた者。

信奈や信秀から才を買われ召し上がられた者。

農家や商家の次男三男ゆえに家を継げず、武家で一旗揚げようと仕官した者。

信奈の幼少の頃よりの悪ガキ仲間。

生まれも育ちも多種多様ながら、見詰め見上げる先は皆一様に同じ。

熱田神宮の境内から参道にかけて、約三千以上の兵が信奈の元に馳せ参じていた。

「我ら一同、信奈様が御命じなされるならば、如何なる戦いであろうと身を投じる所存に御座いまする。」

強者に媚びへつらい、恩を忘れ、我が身可愛さに尻尾を振れば、それは最早武士では無い。

武士とは即ち、武を重んじ、損得の先に己の生き様を定め、主君の恩に命をかけて報いる者達である。

然らば、熱田神宮に集いし三千の兵共は、紛れもなく真の強者たる武士であった。

「どうか姫様、目に見えぬ神では無く、目の前の我らを御頼り下さいませっ！」

信盛の言葉と共に、織田の兵達が一斉に頭を垂れる。

その光景に信奈は身を震わせ、暫し言葉を失う。

「…この、うつけ者どもめ。」

漸くそう口にした信奈であったが、それ以上は言葉に出来なかった。

このままでは色々柄でも無いことが口から溢れると悟った信奈は、空を見上げると何度か大きく息を吐く。

それでも喜色を抑えきれず、正面を見据えた口許は上を向いていた。

「皆の者、よくぞ覚悟を決めてくれたわ。その命、存分に使わせて貰うわよ。」

腰から刀を抜き、天を突いた織田信奈は高らかに命ずる。

「いざ行かん、尾張の戦子達よ。」

その号令に、織田兵より鬨の声が上がれば、今川の覇道を阻まんとする『うつけの強者共』が今ここに誕生した。

運命の一戦はもう間も無く。

戦国のみならず、日本史上最も有名な合戦の火蓋が切って落とされようとしていた。

今宵はこれまでに致しとう御座りまする。

戦場に石雨降りて

熱田神宮にて決起した織田軍は、場所を近く空き地に移して簡易な陣立てを行うと、主だった武將を集めて軍議を開始した。

「ではまず、現状をお浸しします。昨日奇襲部隊を壊滅させた今川の先遣隊は、そのまま鳴海城に向かうのではなく、付城へと向かいこれを攻略しました。その後、鳴海城にも大高城にも向かった様子は有りません。」

万千代がその場を仕切って解説すると、各將は真剣な面持ちで地図を見下ろす。それを確認し、万千代は再び口を開く。

「恐らく、今日にも今川軍本体は鳴海城に向け出発するでしょう。鳴海城に入られてしまえば、これを止める手立ては私達にはありません。」

今は兵力が分散し、自然の地形や前もって用意していた付城により足並みが揃っていないが、鳴海に兵を集結され一気に攻め込まれれば、寡兵の織田軍に抗う術は無い。

「結局昨日話した事と大きな違いは無いわね。つまりこの戦の要は、如何に今川軍本隊を鳴海まで進攻させないかよ。そして私たちにできる策は、先行してきた敵軍に奇襲を仕掛け、これを撃退して時間を稼ぐくらいしかないわ。それを向こうも予想していたからこそ、私の考案した奇襲は防がれた訳ね。」

自嘲するような口調で述べながらも、信奈の目は鋭くなっている。もはや過ぎたことで悩んでも仕方がない。それよりも、自分を信じて集結した三千の味方に報いらんとする気持ちだが、信奈の思考をより先鋭化させていた。

「ならばいっそのこと、盤上をひっくり返すくらいの気概をもって序盤の劣勢を取り返すしかないわ。策はこうよ。まずは昨日と同様に鳴海城へ先行する敵部隊を今度は私達全員で奇襲するわ。ただ追い返すだけじゃダメよ。背を向けて逃げる敵に散々食らいつき、容易に立て直せないだけの被害を与える。そしてその後、私達は反転し、鳴海城に向かうの。」

信奈は地図上の鳴海城を指揮棒で指し示すと各將を見渡す。彼女の発言に口を挟む者は誰一人としていない。

「忍びの知らせによれば、城に詰める兵は少数であり、城主だった山口親子が肅清された混乱がまだ抜けきっていないそうよ。当然山口の旧家臣団には今川に不満を持つている者たちも多い。三千の兵であつても早期に落とせる可能性は十分にあるわ。」

今回の今川の侵攻において、最重要拠点の一つが鳴海城である。

織田領内の国境に建てられたこの城が今川の手の内に有る限り、織田は常に今川の侵攻の危険に曝され続けると言つて等しい。

逆に鳴海城を取り戻す事が出来れば、此度の今川の侵攻を頓挫させる事にもなる。

「…簡単には言つてくれますが、なかなか難儀な策に御座いますなあ。奇襲を警戒しているであろう敵に完勝し、そのうえで城攻めを行いこれを早々に攻略させねばならぬとは。連戦であることに加え、もし城攻めに手間取り先行隊を迎合した敵本隊に攻め掛かられば、我らは城方と今川本隊の挟み撃ちに成ります。そうなれば恐らく、全滅は避けられないものかと。」

「あら、どうしたの信盛、ビビった?」

「いやまさか。これほどの難事を成し遂げた時のことを思えば、自然と闘志が沸き立つというものです。」

そう言つて豪快に笑い飛ばして見せる信盛の姿に、他の將兵からも笑みが漏れる。

部隊の士気が十分に高まっていることを感じ取り、信奈も獰猛な笑みを浮かべた。

最早ここに至つて迷いなし。

ここに集いし三千の戦子達は、既に死の恐怖を乗り越えた死兵と成らんとしていた。

「覚悟が決まつた?と聞くのは愚問のようね。皆の者つ!出陣よつ!!」

「!!」

信奈率いる織田兵三千は血氣盛んに出立した。

同じ頃、水掛城の今川軍本隊も出立の準備を整えつつあった。

その陣中で、朝比奈泰朝は配下から『清洲城を出た織田の軍が熱田神宮に集結しつつある。』という報告に耳を傾けている。

「そうか。織田は最後まで我らと戦う決断をしたか。それで、敵の総数は？」

「はっ！凡そ三千といったところであり、主だった武将は全員参戦していると思われます。」

「ふむ。三千か……」

尾張の国力と周辺国への備えを考えるならば、恐らく今織田が出せる兵力のほぼ全力。

つまり、織田は今日の一戦に勝負をかけて来たのだと泰朝は思い至る。

「よくぞ知らせてくれた。この情報、すぐに先行しておる元信達に伝えよ。ただし、敵は我らより少数なれど、窮鼠と成得る。決して油断召されるな、とも。」

「ははっ！畏まりましたっ！」

配下の兵は頭を下げると、すぐに泰朝の言葉を伝えるため陣中をあとにした。

泰朝はそれを見送ると、じつと西に広がる森を睥む。

この森の先で織田信奈が逆転の一手を狙い、待ち構えている。

その事実には戦を前にして気持ちが高ぶると同時に、信奈が降伏してこなかった事に僅かな安堵を泰朝は覚えた。

これで主君に慮る事無く、戦場にて織田信奈を殺せると。

「いかん、何を既に勝ったつもりでおるのだ。」

泰朝は己の心に慢心があるのを感じ、叱咤する。

相手は雪斎和尚が虎と認めた武将。一分のスキも許してはいけな

い。

味方に油断するなど言っておいて、この様とは。

まだまだ自分も修行が足りぬと己を戒め、泰朝は立ち上がると主君

の元へ向かう。

今川軍は既に戦仕度を終わらせていた。

将兵の目は爛々と輝き、まるで獲物を目の前にし主人の命令を待つ
猟犬のようであった。

その中心にあつて、義元の様子は普段と変わらない。

豪華な十二単を身に纏い、代々幕府より乗る事を許可された輿に身
を預ける姿は神々しささえ感じられ、泰朝を見つけて笑みを浮かべれ
ば、日輪の日が差したかのように泰朝の心を暖かくした。

「どうしたんです、泰朝さん？ぼうとして。私の美しさに見惚れまし
たか？」

立ち竦む泰朝をからかうように義元が尋ねれば、少し恥じ入る風に
泰朝も笑う。

「ええ、見惚れました。姫様の美しさは正しく天より遣わされた女人
の如くかと。」

「ほほほっ！まあ、泰朝さんだったら。相変わらずお口の御上手です事。
然らば、天よりの命を伝えましょう。」

義元は輿の上で立ち上がると、周囲の今川兵を見渡す。

彼らが一心に己の主君を見上げれば、義元は優雅な所作で懐から扇
子を取り出し、西を指し示した。

「いざ皆の衆、前へ。」

五千の兵から成る今川軍本隊から関の声が上がり、東海一の弓取り
の進撃が始まった。

さて、桶狭間の合戦において広く知られる風説に、織田軍は今川軍
を奇襲するべく密かに迂回して今川軍を強襲。

数の有利に油断した上に前哨戦の勝利で浮かれきっていた今川軍
は、迂回してきた織田軍に側面から襲撃を受けてしまったというもの
がある。

しかしながら、この説は後世で書かれた読み物語で描写されたものであり、脚色も多く現代の歴史家からは否定的な意見が多い。

一方で織田信奈に仕えた太田牛一の記した『信奈公記』によれば、信奈は出陣に際して将兵に今川の先行してくる敵先遣隊を襲撃すると宣言した上で出立したという。

しかも織田軍は今川軍本隊の側面では無く、正面から突撃したとも記されている。

また、松平家の兵として参戦した大久保某が記した記録によると、今川本隊が信奈が出立したという情報を手に入れたので奇襲を警戒すべし、という指示を受けたという。

つまり、当事者達が残した記録を纏めると、織田信奈は今川軍先遣隊を強襲するべく出陣したはずが、何故か後方にいるはずの今川本隊を真正面から攻撃し、今川も警戒していたにも関わらず正面からの強襲を許した事に成る。

どうしてこんなことになってしまったのか？

その原因は信奈達が出陣して半刻ほどたった頃に発生した。

配下を率いて熱田神宮を出発し、先遣隊を討つべく東に進軍していた信奈だが、不意に鼻先に冷たい感覚が走る。

「ん？」

見上げれば曇天の空からポツリ、ポツリと雨粒が落ちてきて、そう時間が経たず本格的に雨脚を強めた。

「これは運が良いわね。雨粒が私達の姿を隠し、雨音が兵馬の足音をかき消してくれるわ。文字通り恵みの雨ね。」

信奈の言うとおり、奇襲を仕掛けようとする織田軍にとってこの雨は大変幸先の良いものである。

家臣達の中にも、主君の強運に感嘆する者がいた。

「目に見えない神なんて頼りにしないなんて心に決めた直後だけど、こういうのがあると神を頼りたくなる気持ちも解るわね。」

そう軽口を叩く信奈に将兵からも笑い声が起こる。

しかし、すぐにそうも言ってられない様相となった。

本降りには間も無くどしや降りとなり、桶を引つくり返したような豪雨が織田軍に降り注いだ。

さらには嵐のような強風が吹きすさび、遂には雹まじりの雨が信奈達の顔を叩くまでになった。

最早顔を上げて前を向くことさえ難しい状態である。

「ああもうっ！いくらなんでも降りすぎよっ！やっぱり神なんて頼るもんじゃないわっ！」

「どうします姫様？一旦木の陰にでも入って雨宿りをなさった方が。」

「そんな暇はないわ。こうしている間にも今川は進軍してきてるんだから、とにかく今は前に進むしかないのよ。」

「…あまり焦りすぎるのもよくありません。体を冷やし身を震わせる兵が、戦場で何の役に立ちましょう。」

「…わかったわ。一度森に入って休憩しましょ。ただし、斥候として十人ばかり放って敵軍の所在を偵察させるわ。その間、他の者たちは各々で雨露を凌いで体を冷やさないようにさせなさい。」

「はっ…皆さん、聞きましたね。暫しの間、森に入ってこの雨を凌ぎます。佐久間様と六さんは偵察に行く者を選抜して下さい。」

万千代からの命令に対し、部隊からは心なしかほつと息をつく者が多いように信奈は感じた。

よく見れば、カチカチと奥歯を震わせる者もあり、少し気持ちを逸らせすぎていたと反省する。

行軍を中断した織田軍は、木の陰に入ると防具の上からびしょ濡れになった衣服を拭いたり、着衣したまま服を絞ったりして体が冷えるのを防ごうとする。中には持ち合わせの布で皮膚をこすり、乾布摩擦を行う者もいた。

信奈達女武将も、簡易的な幕を張って人目を憚り、その中で体と着衣の手入れをする。

こうして織田軍が暴風雨を凌いでいたころ、今川軍もまた雹まじりの雨に曝されていた。

「ひどい雨ですわね。泰朝さん、どこかでこの雨を凌げませんか?」
輿の上で傘を差し、空模様を窺いながら顔を覗かせた義元が尋ねると、輿の横で馬に乗る泰朝は少し渋い表情をしながら答える。

「確かに雨はひどいですが、まだ城を出てそう時間もたっておりません。あまり先行している部隊と間隔が開くのもどうかと思います。が。」

「ですけどこの雨ですわよ。前に行く部隊も歩みを緩めるか、適当な場所で雨宿りをしているかもしれませんわ。それなら、こちらに進軍を強行するよりは、雨が止むまで無理をしない方が良くてよ。焦りは禁物。余裕をもって優雅に突き進む。それが王者の兵法ですわ。」

義元の話聞き、泰朝はふむと顎を撫でる。

荒事を嫌い、戦を苦手とするため軍事については基本配下に丸投げする義元からすれば、珍しく筋の通った意見である。

思えば此度の侵攻は、雪斎和尚がこの世を去って以来初めての大規模な軍事行動。戦嫌いの義元といえど気持ちが高ぶり、普段は口を出さぬ軍事に意見するのも無理からぬ事である。

だとすれば、せつかくやる気になった主君を無下にするのも憊びない。

泰朝は口角が上がりそうになるのを抑えつつ、脳内に叩き込んだ周辺地図を思い出しながら答える。

「それならば、ここより少し先に行った場所に小高い丘があります。そこで陣を立て、雨が止むまで一旦進軍を止めるというのはいかがでしょう?」

「ええ、それでよろしくてよ。万事うまくいってるのですから急ぐ必要はありませんわ。」

満足げに頷く義元に頭を下げ、泰朝はすぐに各将に義元の命令を伝えた。

無論警戒は怠らず、陣の側面には見張りを着けることを厳命している。

しかしそれでも、泰朝の心には、いや今川軍全体に一分の隙があったのかもしれない。

彼らは心なしか、織田と当たるのは先遣隊であると思ひ込んでいた。

実際のところ、普通であれば先に織田軍とぶつかるのは先遣隊のはずだったし、信奈をはじめとした織田の兵達もそう思っていた。

この時は両軍とも思いも至らなかったのだ。

岡部元信率いる今川の先遣隊が、長時間兵が雨に打たれ疲弊するのを恐れ行軍速度を上げていた事に。

さらに思わぬ悪天候と慣れぬ道のせいで予定していた侵攻ルートから外れていたうえに、豪雨の影響で忍達の警戒網に穴が生まれた事に。

それらが重なりあった結果、織田強襲部隊と今川先遣隊が互いの存在を認知しないまま素通りしてしまっていたなんて、予想出来る者は未来から来た一人を除いて、誰一人いなかった。

「この先の丘で、今川の部隊が陣を構築しているですって？」

「はっ！この者が言うには左様の如く。」

勝家は信奈に向かって頭を垂れながら報告する。

その隣には頭頂部の禿げた小男が勝家に倣って頭を下げていた。

休憩の前に斥候に赴いた者の一人である。

「確かあんた、梁田政綱って言ったわね。間違はなく、今川の部隊がこの先の丘にいるのね？」

鋭い眼光と共に尋ねられた政綱はビクリと肩を跳ね上げながらも、唾を飲み込み顔を上げる。

「は、ははっ！間違いないじゃないっ！あの旗印は今川のものに相違なしかと。この先は盆地に御座いますが、中心は小高い丘となっております。どうやら相手方は我らと同じく、雨を凌ぐようとそこに陣を築こうとしているようで御座いましたっ！」

政綱の言葉を最後まで聞いた信奈は、ふと空を見上げた。雨脚は相変わらず強く、小さな氷の粒が信奈の顔を叩いた。暫しそのまま佇んでいた信奈であったが、不意に政綱の方を向くと、強くその肩を叩いた。

「良い情報を持って帰って来てくれたわ。大義よ。」

そう言つて干してあつたマントを翻して身に付けると、体を休める兵達に向かつて声をあげる。

「皆の者っ！今川の先遣隊はこの先で雨避けをしている。これより私達は風雨に紛れ強襲をしかけ、敵を撃滅するわ。すぐに準備なさいっ！」

信奈の激に兵達は慌ただしく動き始め、程なく戦仕度を済ませる。

そして、織田軍は今川軍本隊を先遣隊と思ひ込んだまま、これに向かつて進軍を始めるのであつた。

「そういうえば、今川が休んでいるという丘は何て言う名前なの？」

信奈が何気なしに近くにいた政綱に尋ねると、政綱は少し考えるような素振りを見せる。

「ええと、確か昔は田楽狭間等と呼んでおりましたが、地元の者達は桶の底のような形をしておるので桶狭間、その丘の事は桶狭間山等と呼んでおります。」

「そう、桶狭間ね。」

信奈は吟味するかの如く桶狭間の名を口にすると、自ら先頭に立ち自軍を率いて雨中を行く。

相変わらず冷たい雨が兵達の体を打ち、暴風は容赦なく吹き付けて来るが、織田の兵達はいよいよ間近になつた戦の気配に心を燃やし、寒さを忘れた。

「……あつた、あそこね。」

そしてついに、信奈はその目に前方で陣立てをしている今川軍を捉えた。

それに合わせるかのように、雨脚が俄に弱まり始めていた。

「……………ねえ、万千代。」

「……………はい、姫様。」

「なんか思ってたより相手の数が多いんだけど。」

「…奇遇ですね。私も先遣隊というからには、千か二千くらいのも
と思っただけですが、軽く見るだけでも私達と同数か、それ以上のよう
に見えますね。」

「……………ていうかあれ、敵の本隊なんじゃないの?」

「……………多分そうだと思います。」

「……………いやいやいや!? 流石にこれは予想してないわよっ!? えっ
!?なんで先遣隊を奇襲する筈が後方の敵本隊を見つけてんのっ!?」

「もしかすると、どこかで見逃してしまったのかもしれない。とも
かく、一旦この場は引いて、策を練り直すのが良いかと…あつ。」

「どうしたの万千代?」

「なんだか、向こうにいる人影が人を呼んでいるような素振りを。」

「何ですって!」

信奈が慌てて前方に目を凝らすと、雨のせいで視界がぼやけるが、
確かに大きく手を振って人を呼んでいるような鎧武者の姿が見えた。

それを目にした瞬間、信奈の中で何かが切れた。

「……………突撃するわよ。」

「…ひ、姫様。本気ですか?」

「最早ここに至って逃れるのは適わないわ。然らばただ前に行くの
み。目の前の死に背を向けるのではなく、目の前の死に立ち向かい乗
り越える他無いのよ。」

その言葉に、背後にいる兵達から息を呑む音が聞こえる。

だが、彼らも熱田神宮に集いし時に覚悟は決めていた。主の言葉
は、織田兵たちの心の闘志を最高潮にまで高めた。

実際のところ、信奈をはじめとした織田の兵達の精神状態はかなり
おかしな所まで至っていた。

ここ数日に及ぶ軍議と不安による寝不足、もう後がないという焦燥
感、信奈の檄による高揚、そしていきなり敵の総大将が率いる本隊を
目の前にするという急展開に、彼らはテンション爆上げガンギマリ狂
乱状態となってしまうている。

ゆえに、次に信奈が命じた指示に何の戸惑いもなく従った。

「全軍、敵中に相駆けよ。」

一方で、陣立てをしている今川軍の見張りを任された兵は、手のひらを眉に当て前方を注視していた。

そこに別の見張りの兵が声をかける。

「おい、どうした。何か見えるのか？」

「ああ、何か向こうに人影のような物がな。」

声をかけた兵が隣に倣って目を凝らすと、確かに豪雨に紛れる馬上の人影があった。

「ありやあ多分、先遣隊の伝令ではないか？あのような場所に立つて、大方こちらの陣を見失っておるのだろう。」

「ああ、なるほど。おおいっ！こつちだ！そんな雨の中で突っ立つておらんで、早うこつちに来い！」

大きく手を振り大声で呼び掛ければ、やがてそれに気が付いたのか、人影は馬を走らせ陣に近づいて来る。

やはり伝令であったかと、見張りの兵は安心するが、すぐに違和感を覚える。

人影の後ろに黒い波が見えた。

それは近づくにつれ人波の形となり、さらに近づけば雨音に紛れ人の怒声が聴こえてくる。

見張りの思考が止まる中、不意に風雨が弱まり、近づく人波が掲げる木瓜紋の旗が姿を表した。

「て、敵襲っ！敵襲ううううっ！」

見張りの兵は漸く事態を把握し、急事を味方に伝える。

しかし、それをするには余りにも遅すぎた。

「ん？」

幕を張った陣中で行軍の進路を手帳に記していた泰朝は、筆を手にしたまま不意に手帳から顔を上げると、不審げに外を窺う。

そこにお付きの小性が声をかけた。

「如何なされましたか、泰朝様？」

「いや、何やら人の叫び声のようなものが聞こえたのでな。」

「もしかすると、誰か喧嘩でもしているのやも知れませぬ。注意してきましようか？」

「ああ、頼む。戦を前に気が高ぶるのは致し方ないが、無益な私闘は嚴に慎むべしとな。」

そう言つて再び手帳に目を落とそうとしたその時、泰朝の陣中に勢いよく伝令が転がり込んで来る。

「なんだ貴様はっ!? 無礼であろうっ！」

小性がそう叱責するが、すぐに伝令の様子がただならぬ事に気が付く。

全身を泥に汚し、言葉を出せないほど激しく呼吸をしながらも、顔だけは真っ青に血の気が失せていた。

「おい、お前、いったい何があつた!？」

尋常ならざる様子に胸騒ぎを覚えた泰朝が問い質すと、伝令は数回の深呼吸の末に漸く言葉を紡いだ。

「て、敵襲に、御座いますっ! お、織田の軍勢が、正面よりっ！」

「なんだとっ!？」

知らせを聞いた泰朝は筆と手帳を投げ捨て、幕の外に出る。

泰朝が陣を張るのは丘の中腹、丁度背後にある義元の陣を守る場所にある。

そこから丘を見下ろせば、津波が如き織田軍の勢いに突き崩され、今川兵が散々に追い散らされていた。

既に前衛は総崩れの様相である。

「なぜここに至るまで気付かなかつた!？」

「わかりませぬっ! 突如雨の中から敵影が現れ、対処する間も無く攻

撃を受けたとしかっ！」

泰朝が伝令に怒鳴り付けるが、彼にしても狼狽えながらそう答えるしかなかった。

泰朝は苦虫を噛み潰した表情で戦況を改めると、絞り出すような声で命じた。

「……くっ！撤退の準備だ。」

「て、撤退に御座いますか？」

「いまこの場で敵の勢いは止められぬ。せめて姫様だけでも、水掛城に引いて頂くのだっ！それと、元信と元康に早馬を送れっ！」

「ははっ！」

素早く小性に命を伝えると、息つく間も無く泰朝は丘を駆け上がり、取り次ぎの側衆を押し退け義元の陣中に入る。

血相を変えた泰朝の登場に、義元は目を丸くする。

「どうしましたの、泰朝さん？」

「姫様、すぐに撤退のご準備を。織田より奇襲を受けました。我々が時間を稼ぎますゆえ、水掛城までお引き下さい！」

「ちよ、ちよっと待ってくださいまし！泰朝さん、織田の方々が奇襲を？……いっただいどうして?！」

「お恥ずかしながら、我らの警戒を掻い潜ったとしか。前衛は既に総崩れとなりますれば、最早一刻の猶予は無し。一旦水掛城で形勢を建て直す他ありません。」

「……いまここにいらっしゃる方々だけでは迎え撃てませぬの？」

「……敵の勢いは極めて猛勢のうえ、我が軍は陣形を解いた所を突かれたゆえ、混乱甚だしく、この場で形勢を建て直すは難しいかと。」

「……わかりました。口惜しくはありますが致し方ありませんわ。皆さん、撤退の準備を！」

義元の指示に側衆達が慌ただしく動き始める。

だがそこは東海覇者、今川義元に最も近い場所に仕える精鋭達。

手早く撤退の準備を整えると、輿に主君を乗せる。

「それでは、水掛城に向かいます。泰朝さん達もすぐにあとを追ってきて下さい。」

「……姫様、私達は暫しここに残りまする。」

「……何を言ってますの、泰朝さん？」

予想外の返答に呆けたように義元が聞き返せば、泰朝はいつも自分に見せる優しげな笑みをしている。だけど今日のそれは、どこか無理に笑っているように見えた。

「我らの使命は姫様をお守りし、天下の頂きにお連れする事。その使命、いまここに果たしとう御座います。」

そう言つて頭を下げる泰朝。

それに倣うように、いつの間にか彼の背後に控えていた他の家臣達も頭を下げる。

「あなた達、まさか……」

「さあつ、時間が無い。姫様をこの場よりお連れするのだつ！」

「「「応っ!!」」」

顔を上げた泰朝の号令に輿を担ぐ者達が力強く応えると、全速力で走り出した。

「待つてくださいましっ！泰朝さんっ、泰朝さんっ!!」

義元は名を叫びながら手を伸ばすが、それが届くことはなく、やがて名を呼ぶ声も雨音に紛れ聞こえなくなった。

泰朝は輿が走り去った方向へもう一度深々と頭を下げると、ゆっくりと顔を上げる。

その表情に激しい感情は無い。

だが、その瞳は強く冷たい火を爛々と宿した、護国の鬼の目となっていた。

「……さあ、皆の衆、今こそ今川家積年の恩を返す時ぞ。」

そう言くと、泰朝は桶狭間山の頂上より戦場を見下ろす。

織田軍の勢いは止まることを知らず、既に山の麓にまで突き進んでいた。

だがそれでも、泰朝達の心は萎える事無く、寧ろ主君の命を守る戦に闘志を熱く燃えたぎらせる。

それは紛れもなく、彼らが戦国の世に生きる武士である証左であった。

「織田信奈っ！我らの前に屍を晒す覚悟があらば、存分に掛かってくるがよいっ！」

泰朝の咆哮が桶狭間に木霊し、長きにわたる戦いはいよいよ佳境を迎える。

今宵はこれまでに致しとう御座りまする。

序章の終わり

今川軍に突撃を仕掛けた織田軍勢。

その先陣に立つのは他ならぬ大将、織田信奈本人であった。

「いけいけいけっー!!立ち止まらず真っ直ぐに敵本陣に向かいなさいっ!落ち首を拾っているような奴がいたら叩き斬るわよっ!」

半ば脅迫じみた檄であったが、戦意高揚甚だしい将兵達は雄叫びを上げながら今川の兵を追いたてていく。

何より、大将が率先して先陣を斬るのだから織田兵の士気は嫌が応にも高まっていた。

一方完全に虚を突かれた今川兵は氣勢を征され、恐慌に陥り逃げ惑う。

中には焦るあまり泥濘に足を取られ転倒し、後ろから来た味方から立て続けに踏みつけられ、哀れ水溜まりで溺死する者も数多に上った。

そんな渦中にあつて、織田信勝改め津田信澄は両手で槍を待ち自軍先団の後を追っていた。

「前へ、もっと前へ……ここで手柄を上げて僕は!」

戦前より並々ならぬ覚悟でこの戦に臨んでいた信澄は、己に言い聞かせるように呟きながら、必死に足と視線を動かしていた。

そうして戦場を駆け回っていた信澄だったが、不意に横合いから飛び出してきた人影とぶつかり尻餅を着いてしまう。

「あいたた、ごめん。よそ見をして…」

ぶつかった部分を擦りながら相手を確認すると、それは今川の兵だった。

信澄と同じくらいの年齢の若い男兵である。

織田軍の奇襲に慌てていたのか、キチンと紐を締めていなかった兜は脱げ落ち、鎧の右肩の紐も取れかけていた。

顔を顰め頭を擦っていた今川兵は、ぶつかった信澄が織田兵だと気が付くと焦った様子で立ち上がり腰の刀を抜く。

それを見て信澄もようやく自分が敵前にいるのだと把握し、慌てて

立ち上がると槍を構えた。

そうして信澄と今川兵はお互いに武器を持ったまま暫し硬直する。目の前に敵がいる。すぐに戦いを挑み討ち果たさねばならない。

信澄とて頭ではそう分かっているが、槍を握る手は震え、足は竦んで踏み出せない。

今川兵も同様だ。

「あ、あっあああああああ！あああああつー！」

刃を信澄に向け、腹の奥底から威嚇めいた怒声を放ってくるが、信澄との間の距離は変わらない。

雨に濡れたその顔は、どこか泣き出しそうでもあった。

それでも何とか覚悟を決めたのか、今川兵は刀を振り上げ信澄に切り掛かった

「う、うわああああああああつ!!!」

「ひいつ!?!」

ヤケクソ気味の絶叫と共に踏み込んでくる今川兵に対して、信澄は思わず目を瞑ったまま槍を突き出す。

中途半端な刺突が急所を捉えられる訳もない。だが、狙いの逸れた槍の穂先は鎧の外れた今川兵の右肩を掠る。

それによって手が狂ったか、今川兵の斬撃も信澄を捉えられず空振りする。

さらに空振った勢いのままに地面を叩き、その衝撃と雨の滑りによって刀はスルリと今川兵の手元を離れ、信澄の足元に落とされた。

「あ…」

呆気にとられた声が、どちらの口から洩れたかは分からない。

だがそれも一瞬。

「ひっ、ひひひひひっ!」

武器を亡くした今川の兵は、情けない悲鳴を上げると這いずるように背を見せる。

そこからは信澄も必死だった。

気付けば今川兵を追い掛け、その背中にもう一度槍を放った。

今度は穂先がぶれることも無く、槍の先端は吸い込まれるように今

川兵の背中に突き刺さる。

体のほぼ中心を突かれた今川兵は、ビクリツと体を強張らせると一歩二歩フラフラと歩いたのちに膝から崩れ落ちた。槍は刺さったままである。

そこで初めて、信澄は自分が武器を手放してしまっていることに気が付く。

それでもなお、呆然と倒れ伏した今川兵を見るばかりで、戦場の真ん中で佇むばかりであった。

「おいっ！大丈夫か!？」

「信澄様っ！大事御座いませぬかつ!？」

戦場の真ん中で棒立ちとなる信澄に駆け寄ってきたのは、良晴と勝家の二人であった。

「あつ、勝家、それに良サル君…」

気の抜けた返事をする信澄。その体は泥で汚れているが、目立ったケガは見当たらないことに良晴たちは安心した。

しかし、そのすぐ側に今川兵が倒れ伏せているのを発見した良晴は息を呑む。

「信澄、こいつはお前が?」

「えっ!?あつ、その。」

良晴の言葉によくやく正気に戻った様子で目を見開く信澄であったが、すぐに顔を青くさせ口元に手をやろうとする。

だが、それを止めるかのように勝家は信澄の両肩を強く掴んだ。

「信澄様、初陣にて手柄首、見事な誉に御座いますっ!」

「か、勝家。」

「されど今は戦中。先程姫様が伝えていたように首を取る暇は御座いません!然らば、今はひたすら前に進み下さませっ!」

そう言つて信澄の後ろに回った勝家は、強引に背中を押し足を進ませる。

信澄の足取りはいまだ覚束ないままであったが、意識を前線に向けたお陰で僅かに血色が戻っていた。

そうして前を行く二人に遅れそうになった良晴も慌てて付いて行

こうとした、その時であった。

「ははうえ…」

足元から掠れた若い男の声があった。

良晴の足が止まり、視線が泥地に倒れた今川兵に向きそうになる。

しかし、それをグツと堪えると、振りきるように勝家達の後を追って走り出した。

倒れた今川兵の涙が、雨に混じって泥に染みたのを誰も知らない。

一方別の場所では、奮戦する今川の将の姿があった。

「狼狽えるなっ！敵は我らより少数。しかも尾張の弱兵共だっ！」

そう言って味方を叱咤した今川の将は、横風ぎに槍を振るうと、向かって来た織田兵の首をへし折った。

「ふんっ！所詮尾張兵などこの程度。この由比正信の相手ではないわっ！」

そう高らかに吼えるともう一振り、今度は上段の一撃を織田兵の脳天に叩き込み地に這わせる。

その武勇に周囲の今川兵が俄に活気づき、勢いに乗っていた織田兵の足が止まった。

味方の顔に生気が戻った事を確認すると、由比正信は顔には出さず内心でホッと息を吐きながら決死を覚悟する。

最早戦線の崩壊は止めようが無く、如何に正信が味方を叱咤しようと局地的なものに過ぎず、いずれ織田軍の勢いに飲まれ果てるだろう。

それでも、ここで正信達が踏みとどまり時間を稼げば、それだけ義元が戦場を離脱するのが容易になる。

負け戦が今川家積年の恩に報いる場になるのは少々残念ではあるが、己の武勇で当主を無事に生還させれば、これに勝る誉れは無いと心を奮い立たせ、正信は誰一人としてここを通さぬとでも言うような気迫を込めて、織田兵を睨み付ける。

織田兵達は鬼気迫る正信の様相に完全に飲まれ、前に進めなくなる。

だがそんな時、長槍を携えた小柄な女武将が織田兵の中から現れると、槍の穂先を正信へ向け構えた。

「…織田家赤母衣衆が一人、前田又左衛門利家見参。お相手願う。」

「前田又左衛門…ほう、ではお主が弱兵揃いの織田にあってその人あり、と言われる『槍の又左』か。よもや、このような幼な子であったとはな。」

「…犬千代を侮ってる?」

そう問いかける犬千代の眉間には深い皺ができ、それを見た正信は静かに笑う。

「おっと、その様に思わせてしまったか。だが安心せい、お主の事は侮っておらぬ。儂が侮るのは、こんな幼な子を頼らざるを得ない織田兵と、その主君である織田信奈よ。」

正信の言葉に犬千代の皺が益々深くなる。

それを見て正信は笑みを濃くする。

己に対する謗りより、味方と主君への侮りに怒り、それを顕にする。

見た目通り青い。然れどその青さ、正信は嫌いではない。

今川家にあつて根っからの武人である正信にとって、武勇ある血気盛んな若武者は敵であれ好ましい存在であつた。

しかし、今は戦の最中。

血気盛ん故の青さを利用すべく挑発すれば、犬千代は容易にそれに乗った。

挑発罵声も戦の手段。

正信は内心で、この小さな体に大なる鬨気を秘めた若武者を死なせるは惜しいという気持ちを押さえつつ、出来うる手段は全てこうじ犬千代を討ち取る所存にあつた。

「…犬千代への誹りはまだ許せる。けれど、姫様とみんなへの誹りは絶対に許さないっ!」

正信の挑発に耐えられなくなった犬千代は激昂し、凄まじい勢いで正信に迫る。

だがそれは、正信の望む処であった。激すればそれだけ刺突は直線的となり、動きも単調となり、隙も生まれる。

正信の狙いは最初の一撃をいなし、体勢の崩れたところを刺し貫く事である。

その為に最も肝心なのは間合いの見極めだ。

己と犬千代との距離、得物の長さ、犬千代が迫りくる速度。

それらを長年戦場に身を置いて磨き続けた感により、正信は瞬時に犬千代の殺し間を導きだした。

迫り来る犬千代の刺突。

それが正信の間合いに入る一歩手前で正信は動き出す。

正信の首を狙った一撃を己の槍で擦り上げる様に逸らそうと、左腕を持ち上げ槍の穂先を跳ね上げる。

しかし、互いの槍がかち合おうとしたその瞬間、犬千代の槍が突如上を向き正信の槍は空を切る。

「なにっ!？」

予想外の動きに正信は思わず犬千代の槍の動きを目で追ってしまふ。

その失態に正信が気がついたのは、槍が引き戻され視界から消えた瞬間である。

しまった、そう口にする暇もなかった。

慌てて視線を戻すも殺し間と見極めた場所に犬千代はおらず、代わりに左脇から背中にかけて強い衝撃が走った。

視線を向けなくても分かる。脇の下から串刺しにされ、止めどなく血が流れるのを正信は感じた。

一つ分らないのは何故間合いを見切られたかであったが、泥地に出来た細い線によって正信は理解した。

「そうか、槍の尻を地に立て、己の勢いを殺したか。激したのも、演技であったか……」

犬千代は正信の間合いに入る寸前、己の槍を地面に立てブレーキにしてタイミングを外すと、横っ飛びで正信の死角に入り刺し貫いたの

だ。

正信の狙いを見抜いたうえで、その策を利用した妙技である。

「…犬千代は一度挑発に乗って痛い目を見た。姫様や仲間達にも沢山迷惑をかけた。だから、犬千代はもう二度と安い挑発には乗らない。」

正信の左側から抑揚ない、されど強い決意を感じられる言葉が聞こえる。

槍が抜かれると、傷口から出血の勢いが増す。

正信は槍を取り落とし、崩れ落ちながらも犬千代の方を見る。

そこには、油断なく武器を構える小さな武人の姿があった。

「…前田殿よ、敵ながら見事な武勇である…お主の主君らに向けた侮辱…謝罪いたそう。だからという訳では…ないが…死人の願いと思い…一つ…聞いてはくれぬか？」

「……なに？」

犬千代の返事に正信は壮絶な笑みを浮かべた。

「我が首をもって…手柄とせよ……」

そう言い終えると、正信は顔から倒れ伏せた。

犬千代はチラリと信奈がいる方向に顔を向けるが、すぐに槍をその場に突き立てると、脇差しを抜いて切っ先を正信のうなじに立てた。

「織田家赤母衣衆前田又左衛門利家っ！今川家が優将、由比正信の首とったあああっ！」

その名乗りは雨中の戦場にあって、敵味方問わず大きく響き渡った。

「おおっ！犬千代の奴、やりよったなっ！此度の田楽狭間でも手柄首を上げるとは流石じゃ！」

織田勢後方にいた秀吉は、犬千代の名乗りを耳にして膝を叩く。

前世での桶狭間においても前田利家は複数の首を取る手柄を上げている。しかし、その時の利家は出奔中の身であり、戦にも無断でこっそりと参戦していた為にその手柄が評価されることは無かった。

「しかし此度は正真正銘織田家の臣。きつと信奈様は犬千代の手柄をお認め下さる筈じゃ。それにしても、こうして見ると二度としたくない戦と信長様が評した訳がよく分かるのお。」

秀吉は戦場の様相を眺めながら苦笑いを浮かべた。

桶狭間の戦いは、結果的にあらゆる条件が今川の不利に働いた戦である。

少なくとも直前までで今川軍に大きな失策は無く、戦略的にも戦術的にも織田家に対して優位に事を進めていた。

それが、突然の大雨で盤上がひっくり返ったのだ。

逆に織田軍にとっては最後の最後までとてつもない幸運に恵まれたに等しい。

ただそれは運任せ、勢い任せのままに手にした勝利と言うにも等しかった。

「思えばあれ以来、信長様も戦で何をするかより、戦に至る前に何をするかに熱心になられておったわ。」

信長で無くても二度としたくない戦と言っただろう。これほどまでの薄氷の上で勝利を拾った戦は日ノ本の歴史を紐解いても、そうあるものではない。

戦の形勢はすでに決した。あとは敵大将を捕れるかだけだが、と秀吉が思案していると、東の空に向かって空気を割くような甲高い笛音が飛んでいく。

それは、桶狭間の戦いが最終幕に移ったのを知らせる音色であった。

「くっ！今の音はっ!？」

織田勢の攻勢を手勢と共に何とか凌ごうと奮闘していた朝比奈泰朝は、自軍左後方に向けて飛んで行く笛の音に顔を青ざめさせる。

今のは織田軍が放った鏑矢の音。

それが今川軍側の空に向けて放たれる理由はただ一つである。

「姫様が、見つかった！」

義元が敵軍に捕捉される。泰朝が最も恐れていた事態が起こってしまった。

戦場を見下ろせば、味方の合図を聞いた織田軍勢が今川の左翼に向けて殺到している。

泰朝は近くで共に戦っていた国人衆のまとめ役、井伊直盛を見つけると肩を掴んで自分の方を向かせる。

「井伊殿、姫様が敵に見つかった。某は十ばかり手勢を率いて助太刀に参るゆえ、この場の指揮は井伊殿にお任せする。」

「こ、心得た！」

直盛の返事を確認すると、近衆に指示を出しながら泰朝は素早く陣を出る。

そのまま槍を片手に馬へ飛び乗ると、義元を乗せた輿が逃れた方向へ走らせる。

「あつてはならぬ。こんなところで終わるなど、あつてはならぬのだっ！」

誰に聞かせるでもない、心からあふれた言葉を泰朝は叫ぶ。

主君は望んだ。この国の頂に立ち、暗雲濃い現世を正道なる政で再興させるのだと。

師匠より託された。主君を頂まで導く道を。

それが今、音を立て崩れ去ろうとしている。

「そのようなこと、認めてなるものかあつ！」

雨に打たれ、脳裏を過る最悪の光景を振り払いながら、泰朝は必死になって馬を走らせる。

そうしているうちに、ようやく目的のものを見つける。

輿は道端に打ち捨てられ、担い手の男衆の三人がそれを背に五人の織田兵相手に防戦していた。

その後ろには、足を押さえ苦悶の表情を浮かべる担い手と、泣きべそをかきながらオロオロと狼狽える義元がいた。

泰朝は馬の勢いそのままに、死角から一人を槍で打ち叩くと、馬から降りて更にもう一人を刺し貫く。

泰朝の乱入に混乱しながらも、数の有利がなくなった織田兵は慌ててその場から逃れようとするが、遅れて走ってきた泰朝の近衆達がこれを手早く仕留めた。

そうして一先ず周囲の安全を確保すると、泰朝は義元へ駆け寄った。

「姫様、お助けが遅れましたこと御詫び申し上げます！どこぞお怪我は？」

「わ、私は大丈夫です！ありがとう御座います泰朝さん！」

「さあ、姫様。今はこの地を離れるのが大事。手綱は某が後ろから持ちます故、早く。」

泰朝は無礼と思いながらも強引に義元の手を引き、愛馬の元へ連れていく。

そして先に騎乗し義元をを引き上げようとしたその時、突如愛馬が嘶き後ろ足で立ち上がった。

「なっ!？」

「泰朝さんっ!」

突然のことに対処できず、馬から振り落とされた泰朝に義元が駆け寄る。

心配させぬように顔をしかめながらも義元へ頷いて無事を示す泰朝だったが、すぐに硬直する。

目に写るのは足を引き摺りながら旋回する愛馬。その右後足には痛々しいまでに深く矢が突き刺さっていた。

人に乗せて走らせることは適わないだろう。

「…この、クソツタレがあああああつ!!」

側に義元がいるにも関わらず、泰朝は天に向かって咆哮する。

「何故だっ!?!何故天は義元様に味方しないっ!?!義元様こそ天下を統べし御方っ!暗き世に光を差さんと誓われた御仁なのにつ!」

「や、泰朝さん。」

狂乱し、地を叩いて天を呪う泰朝に、義元はかけるべき言葉を見つけない。

だが、そうしている間にも織田軍の追撃隊が迫り来る。

彼らの足音は泰朝の耳にも確りと聞こえていた。

故に、泰朝は歯を食い縛り苦悶に満ちた顔を上げる。

「…皆の者、しかと聞け。」

「…はっ！」

「俺は姫様を駿河へお連れする。お主らは…お主らは、ここに留まれ。」

「…っ！」

それは義元と自分が逃れる時間を稼げという命令、自分たちの為に死ねという命令であった。

近衆は息を呑み、一瞬言葉に詰まる。

しかし、すぐに全員の顔が覚悟を決めた武人のものになる。

「あい分かりました。姫様のこと、よろしくお願い致します。」

「…武運を、祈る。」

辛うじてそう告げると、泰朝は状況に頭が追い付かず呆然とする義元の手を引いて駆け出した。

その後姿を見送ると、泰朝の近衆たちは武器を構え織田軍が殺到してくる方角を睨む。

「…どうぞご無事で、泰朝様。お側にお仕え出来、幸せでした。」

やがて彼らの前に織田の追撃隊が現れる。彼らもまた主君の為に目を血走らせ、必死に己の役目を果たそうとしていた。

後続を含めれば、その数およそ50ほど。対する近衆達は神輿の担い手を含めても14人。織田軍圧倒的有利である。

それでも泰朝の近衆達は奮闘し、最後の一人が討ち取られるまで泰朝達が逃げる時間を稼いだのであった。

泰朝は己の主君の手を取り走り続ける。

息苦しく、体は疲労によって重くなろうとも、足を止めるわけにはいかなかった。

「はあはあ、申し訳ありません義元様。もう少し御辛抱くださいませ。」

主君を気遣い声をかけるが、返事は帰ってこない。代わりに少しだけ強く手が握られる。

その感触に泰朝は少し安心する。

部下達と別れてからどれだけ時が経っただろうか？

どれ程の道を走っただろうか？

あとどれくらいで城に着くだろうか？

部下達はもう全員死んだだろうか？

次々と疑問が浮かび上がるが、それを深く考える余裕は無く、ただ走り続けるしかなかった。

しかし、それも長くは続かなかった。

不意に左手に握る義元の手が重くなり、するりと拳から抜け落ちる。

振り向けば、荒い呼吸を繰り返す義元がへたり込んでいた。

「大丈夫ですか、姫さまっ!？」

「も…申し訳ありません、少し…休憩を…。」

普段は自信に満ち溢れた義元の表情も、今は疲労の色が濃い。

十二単の着物の殆どはとうに脱げ落ち、足元は泥に塗れている。

出陣の際、あれほど煌びやかで美しかった主君の有様が、今では見る影もなく見すばらしいものになっている。

それを思うと、泰朝は思わず涙が出そうであった。

「今しばらく、どうか御辛抱を…。」

それでも今は先程と同じ言葉を繰り返す他ない。

泰朝は担ぎ上げるように肩を貸して義元を立ち上がらせると、再び歩みだそうとする。

「いたぞっ…こっちだっ!」

しかし、それよりも早く敵兵の声が響いた。

振り向けば、織田家の旗を差した槍兵が穂先を泰朝達に向けていた。

「織田家馬廻衆服部小平太一忠っ!その方、今川家大将今川義元殿と

お見受けする！いざっ！」

「くっ！姫様お下がりでください！」

槍を持って突っ込んで小平太から義元を離れさせようと後ろに突き飛ばしながら、突き出された一撃目を何とか避ける。

泰朝は小平太が槍が引き戻す隙に腰の刀を抜こうとするが、予想に反し小平太は槍を取り落とし泰朝に体当たりを仕掛けた。

不意を突かれた泰朝は背中から地面に倒され、その上に小平太は馬乗りする。

「おのれ、貴様っ！」

「その首もらったっ！」

小平太は体重をかけ泰朝の身動きを封じながら、右手で泰朝の顔を押さえ、左手で脇差を抜くとその切っ先を首に突き立てようと振りかぶった。

「泰朝さんっ！」

義元の悲痛な叫びが木霊し、鮮血が地を濡らすかと思えたその時だった。

「っんぐ！」

突如小平太の顔が苦痛に歪み体勢が崩れる。

その瞬間、泰朝は上半身を跳ね上げ小平太を突き飛ばすと、素早く刀を抜き小平太の膝を切りつける。

今度は小平太の悲鳴が木霊した。

小平太を払いのけ立ち上がった泰朝の口から何かが吐き出される。噛み千切られた小平太の親指だった。

「馬鹿が。貴様らにこの方を触れさせるものか。」

幽鬼の如く目を血走らせ、口元から血を滴らせる泰朝は、なおも立ち上がるうとする小平太の顔面を蹴り飛ばし動きを止める

そして仰向けに倒れた小平太の胸元を踏みつけ、自分がされたのと同じように今度は小平太に対して刀を突き立てようとする。

「うおおおおおおおっ！小平太あああああっ！」

だがそれよりも早く、第三者が二人の間に割り込んできた。毛利新介である。

新介は飛び上がるようにして槍を振り上げると、すさまじい勢いで泰朝に向かって叩き付ける。

避けるには適わぬ。そう判断した泰朝は左手を頭の上に掲げると、新介の一撃を受け止める。

メキリっ、という骨が折れた音が泰朝の左手首から聞こえた。

しかし、泰朝は事無げに左腕で巻き込むように新介の槍を掴むと、脇に挟んで確りと固定する。

「なんじゃとー！」

新介が驚愕する間に泰朝は体を捻って槍ごと新介を引き寄せると、前のめりにつんのめった新介に向かって刀の切っ先を突き立てようとする。

「させるかあああああつー！」

だが寸前で小平太が飛び上がるようにして立ち上がり、泰朝の右腕に縋り付く。

「くそっ、死にぞこないがつー！」

「でかしたつ、小平太！」

小平太によつて動きを阻害された泰朝に向かって、新介は槍を捨てて飛び掛かる。

そして再び泰朝を叩き伏せると、今度は二人掛で動きを封じる。

「おのれ、放せつー！たわけ共がつ、ぐつ!？」

暴れ逃れようとする泰朝であったが、その顔面に手甲を纏わせた新介の鉄槌が叩き付けられる。

一発目で鼻が潰れ、二発目で前歯が折れ、三発目を振り下ろした後には泰朝の顔面は血に塗れていた。

それでも、新介は油断することなく何度も、何度も、拳を振るい続けた。

そうしているうちに泰朝の抵抗も弱まっていき、ついに四肢の力が失われる。

辛うじて息があることは分かるが、もはや面影さえ感じられぬほど顔の形が変形してしまっていた。

「はあ、はあ…」

それを見て漸く新介の手が止まる。

荒い息を吐きながら上体を起こすと、腰から脇差を抜く。

泰朝の左目が、腫れあがった瞼の隙間から刃の反射を捉えた。それにより泰朝は己の死際を悟る。

「…………お逃げください…姫様…」

その一言が漏れると同時に、新介の右手が振り上げられた。

「おやめくださいっ！」

不意に泰朝の視界が塞がれる。頬に感じるのは冷たく震える人の手の感触。鼻を擽るのは己の主人が気に入っている白梅粉の香りだった。

「私達の負けです！この身は如何様にしても構いません！だからどうかっ、これ以上、皆さまを傷つけないで下さいましっ…」

涙ながらに義元が嘆願する声が聞こえる。

それによつて、泰朝は義元が自分の上に覆いかぶさっていることを悟った。

もう限界だったのだ。

多くの者が自分の為に犠牲となり、心底自分を支えてくれた人が目の前でボロボロにされ、今にも命を刈り取られようとしている。

それがどうしても我慢できなかった。これ以上親しき者たちを失うには、義元の心は耐えられなかったのだ。それが今川義元という姫武将の限界だった。

愕然とし言葉を失う泰朝をよそに、新介はゆつくりと立ち上がつて義元の後ろに回る。

そして、左手で義元の長髪を束ねると、そのちょうど真ん中に刃を入れた。

「ああ…」

絹が引き裂かれるかのような音、それと同時に後頭部が軽くなる感覚に義元の口から小さな悲鳴が漏れる。

そして、新介の手には切り落とされたばかりの黒く艶々しい髪房が

握られていた。

「…織田家馬廻衆筆頭毛利新介良勝っ！今川家大将今川義元殿の御身捕らえたりっ！その証左として、かの御仁の御髪を頂戴したあっ！」

高らかにそう叫び、新介は力強く手にした勝利の証を掲げていた。

呆然とその姿を見上げていた義元だったが、やがて顔を歪ませると手で顔を覆いシクシクと啜り泣き始めた。

そんな主君に手を伸ばそうとし、泰朝の意識は急速に失われていった。

「姫さまっ！やりましたっ！毛利新介がやりましたっ！今川義元を捕らえたとの由！」

「新介がっ！それは本当なのっ!？」

「ははっ！間違いありません！今川本隊は壊滅っ！すでに何人もが捕らえられた義元を確認しております！」

「デアアルカ…デアアルカっ!!」

伝令からの知らせに驚愕の色を浮かばせるも、すぐにその知らせが信憑性に足るものと確認すると信奈の顔が喜色に染まる。

「万千代、今川義元を捕らえたそうよ。これは私達の勝利よねっ!？」

「はいっ！間違いなく！」

「本当に勝ったのよねっ!?!織田家を、尾張の国を守り抜いたのよねっ!！」

「はいっ！二百点満点の御味方大勝利に御座いますっ!！」

信奈は興奮した様子で何度もそばに控える万千代に尋ねれば、万千代も涙ながらに味方の勝利を肯定する。

すでに戦場の至る所で織田兵の歓喜の声と、敗走する今川兵の悲鳴が聞こえる。

遂に信奈も我慢できなくなり、万千代を置き去りにして自軍の右翼前方へと駆け出す。

後ろから万千代の呼び止める声も、すれ違いざまに織田兵が驚き振り向く様も気にしない。

ただ夢中になって走り続けていると、前方に黒い人だかりを見つけた。

彼らが背中に差すは織田家の旗。そしてその中心で担がれているのは、信奈がよく知る昔なじみの顔であった。

その顔は戦を終えたばかりの上に、仲間たちの手荒い祝福のせいで泥だらけの傷だらけであったが、歓喜と誇りに満ちた朱色が差している。周りの仲間たちも同様であった。

信奈は大きくその場で息を吸い込んだ。

「新介えっ！」

人だかりの中心にいる人物の名を叫べば、一気に注目が信奈に集まる。

信奈の姿を目した者たちは、新介も含めて一様に慌てて居住まいを正しひれ伏そうとする。

しかし、信奈は彼らが地に膝を着けるよりも早く駆け寄ると、新介の頭を胸に抱きよせた。

「ひ、姫さんっ!?!」

「新介っ！おみやーほんとよーやった！どえりや大手柄だぎやあ！」

興奮のあまり普段は出ない訛りまじりに新介を褒め称える様に周囲の者たちは一瞬ポカンとするが、次第に口元に笑みを浮かべ始め、ついにはクスクス、やがてワハハと声に出し笑い始める。

それによつて漸く信奈も自分の行動に気づいたのか、ハッと顔を赤らめるとコホンと咳払いをする。

「んんっ！毛利新介、敵大将を捕らえるは見事な働き！追つて褒美を与えるわ！」

「は、ははあっ！有難き幸せに御座います！」

「よしっ！じゃあみんな、勝鬨を上げるわよ！」

「」「」「おうっ！」」

信奈の号令に織田の兵たちが一斉に信奈を囲み始める。

その中心に立った信奈はぐるりと回りの者たちの顔を見渡し、天に

向かって刀を掲げた。

「それじゃあいくわよ！エイ、エイ！」

「「「オオー！」「「「」」」」

「エイ、エイ！」

「「「オオー！」「「「」」」」

戦場の中心で信奈を中心に織田兵たちの歓喜の音があがる。

誰もが胸を張り、その存在を天に見せつけるかの如く高らかに叫んでいた。

その輪の端に秀吉はいた。

口は勝鬨の声を上げながらも、その眼は笑わず、どこか別の場所を睨んでいた。

（とりあえずは一安心というところじゃな。本当の戦いはこれからじゃ。）

先の世を知る未来の天下人は、次の戦いを見据えていた。

ここから先は、以前の自分が辿らなかつた道を進むがゆえに。

今宵はここまでに致しとう御座ります。

些事たる仇

織田軍が桶狭間にて今川の大軍を打ち破ったという知らせは、一兩日中に地元清州の町にも届いた。

当初は半信半疑であった人々も、次々届く吉報の知らせによりよもやと感じ始め、引き上げてきた織田兵たちの姿を目にし織田家の勝利を確信した。

帰還した織田兵たちは皆一様に胸を張り、堂々とした行進を清州の人々に披露した。

その姿に清州の民は驚きながらも狂喜する。

まさか本当に、あのうつけ姫と呼ばれた信奈様が、滅亡の淵に立たされていた織田家が、東海一の大大名家である今川を見事に討ち果たしたとは。

清州に生きる者たちにとって、誰しもが少なからず領主である織田家に愛着がある中で、奇跡的な大勝利を果たしたのだ。

誇らしくない筈がなかった。

町の男衆は、流石信秀様の子！と馬上の信奈を褒め称え、町娘たちは勇壮な若兵達に黄色い歓声を上げ、子供たちは訳は分からずとも周りの大人たちに倣って囃し立てる。

そんな領民たちの温かい声に微笑みを称えながら応えつつ、信奈は既に今後の事を思案していた。

今川義元を捕らえたとはいえ、今川家が滅んだわけではない。今すぐ軍事行動に移る事は無いだろうが、領地を削ったわけでもなく、国力では今川家が上回っている。

何より問題なのは、国境の鳴海城がいまだ今川の手の内にあることだ。

桶狭間の戦いの後、信奈は早急に兵を纏め鳴海城の奪取に向かおうとした。

しかし、鳴海城に入った岡部元信は本隊との連絡が途絶えたことを不審を覚え、すぐさま城の防備を固める事を指示し、早馬によって本隊壊滅を知ると完全に籠城の構えをとったのである。

これを短期間で攻め落とすには現在の兵数では心許なく、さらに他所に今川軍が存在する状況で攻城戦に手間取り挟み撃ちにされる危険性を鑑みて、信奈は清州への撤収を命じたのであった。

しかしながら、鳴海城奪還は国防上必須であり、外交的な攻略を含め解決策を練る必要がある。

「姫様、顔が固くなってしまってますよ。せつかく戦勝を祝われていくのですから、もっと華やか御顔をしなければ五十点です。」

「ん？ああ、ちよつと考え事をしてたわ。でもたしかに、祝いの場ですかめつ面は相応しくなかつたわね。うーん、そうねえ…」

万千代の言葉に今度はまた別の事を考え始めた信奈であったが、その顔には直ぐにニヤリと企み顔が浮かぶ。

あつ、また何か思いついたな、と万千代が感づいたのとほぼ同時に、信奈は突如として愛馬を走らせ隊列から抜け出すと列の先頭に躍り出る。そして周囲の視線を一身に集めると、近くにあった家屋の屋根に飛び移った。

「尾張の領民たちよ！知つての通りこの地を踏み荒らそうとした今川の者たちは、この私が叩き潰してやったわ！だけどこれは私一人の力じゃない！織田家を支える勇猛な家臣団！そしてこの地に住まう尾張を愛する皆の力添えがあつてこそ！即ちこの戦は尾張の民の勝利よ！」

腹から響く声で信奈がそう叫べば、町中に響かんほどの歓声が上がる。

それを信奈は嬉しそうに眺めていた。

「さあつ！今日は祭りよ！兵共は食い、飲み、歌い、踊り、戦の疲れを癒しなさい！商人たちは稼ぎ時よ！この祭りでたんまり稼いで、我が家に矢銭を納めなさい！」

「ワハハ！なんとも商売意欲が削がれる言葉で御座いますなあつ！まあ本日は戦勝祝い！しっかりと姫様の軍資金を稼がせてもらいます！」

「フッフ、許しなさい！その銭で今度の戦も勝つてやるわ！」

商人たちと軽口を叩きながら信奈が宴の開始を号令すれば、待つて

ましたとばかりに兵も領民も盛り上がる。

こうして始まった宴は三日三晩続き、清州の町は大いに盛況となった。

そこは清洲城の土牢であった。

朝比奈泰朝の意識を覚醒させたのは、城内に響く祭囃子の太鼓の音色であった。

陽気な歌声と共に耳に入ってくるその音色に瞼を開ければ、半分だけ開いた視界から土気色の天井が見えた。

視界の悪さを不審に思い瞼を触れば、鋭い痛みが走る。

それと同時に、朦朧とした意識が一気に鮮明となった。

「……………(っ)は？」

「気が付きましたのねっ！泰朝さん！」

「姫様…」

声のした方に顔を向ければ、義元がすぐ側に膝を着いていた。

その目は泣き晴らしたように真っ赤であったが、泰朝の名を呼ぶ声には喜色が籠っていた。

いったい何があったのか？

そう尋ねようとした泰朝であったが、その視線が義元の頭部で固まった。

義元の髪は黒く美しい見事な長髪であり、本人のみならず家臣達にとっても今川義元の美しさを象徴する自慢の美髪である。

それが今や、肩口で無造作に刈り取られ、古の平安貴族を想わせる美髪の面影は失われていた。

それを目にした泰朝は愕然とし、そして全てを思い出すと、痛む体を無理矢理引き起こした。

「泰朝さん!?無理を成されてはっ！」

義元が止める言葉すら無視し、激痛に襲われながらも正座を作った

泰朝は、両手と頭を地面に投げ打った。

「申し訳御座いませぬっ！」

絶叫とも言える泰朝の謝罪に、義元も泰朝の肩に置こうとした手を止めた。

「此度の戦、御家にとつて、京に上り、天下に武威を示し、姫様の御威光をあまねく全国に知らせ賜らん大事！にも拘らず、この泰朝っ！姫様より大軍を預かりながら、これを敗北せしたるは、臣下として、あるまじき失態っ！ああ、あああ！御前にて、恐懼して、謝辞奉りますっ！」

満身創痍に土下座する泰朝から、悲痛な言葉が紡がれる。

勝てる戦であった。勝たなければならぬ戦であった。

それを負け戦にするばかりか、主君を囚われの身にさせてしまった。

何故もつと警戒しなかった。悪天候に紛れての奇襲などいくらでも予想出来たはずである。

雪斎和尚より何を学んだというのか！

泰朝の胸中に止めどない後悔と羞恥心が溢れかえる。

その顔からは穏やかながら勇ましい表情は掻き消え、赤子のように目元から大粒の涙を流れ落ちていた。

義元はそんな泰朝の姿に目を見開き言葉を失うも、やがて顔を引き締め真剣な面持ちで背筋を伸ばした。

「…顔を上げてください、泰朝さん。」

そう声をかけるが、泰朝は平伏したまま肩を震わせるばかりであった。

「……………面を上げよっ！朝比奈備中守っ！」

すると今度は普段の義元からは想像できぬほどの鋭い声が発せられる。

その言葉に泰朝は肩を跳ね上げると、恐る恐るゆっくりと顔を上げた。

その姿は、どこか親に叱られるのを恐れる子供のようにであった。

「…此度の敗戦、今川家にとって大きな痛手となりましょう。私で

あつても、それくらいは理解できます。これを立て直すは、容易ではないでしょう。」

「…ははあ、おつしやる通りに御座います。」

「……………わが父、氏親は幼少のころに父親を失い、家中の争いに巻き込まれ、お婆様と共に身を隠したと聞きます。」

義元は唐突に、噛み締めるようにゆつくりと言葉を紡ぐ。

泰朝は黙してそれを聞き入った。

「何とか命を拾う事はなれど、その後も臣下や一族の者に家督を篡奪されそうになるなど、それは大変な苦勞をし、今川家の血脈は何度も滅亡の危機に陥ったそうです。そこに手を差しのべたのは、叔父である伊勢新九郎盛時公であつたと聞きます。」

伊勢新九郎盛時、またの名を北条早雲。

一代にして相模に一大勢力圏を築いた後北条家の初代である。

「父上は盛時公より戦と政を学び、時には直接手を借り一族との家督争いに勝利し駿河を平定すると、その後も武田や上杉といった外敵と戦い、国を守り、盛立てました。今川の血には、苦難にあつてこれに立ち向かい、決して折れることの無い強き血が流れています。」

義元は泰朝と目を会わせ、その手を強く握った。

「今川の血は決して途絶えません！如何なる逆境にあらうと何度でも立ち上がり、御家を再興出来ます。だからどうかその時まで、生きて私を支えてください。」

「姫様っ!?それは…」

「お願いです、泰朝さん。死なないで下さいまし。生きて私の盛時公となつて下さい。」

懇願する義元に、泰朝は己が死を覚悟している事を悟られていると知った。

そして義元は、それを決して許さない。

例えどれ程戦犯と後ろ指を指され、生き恥を晒していると罵られようと、生きて自分を助け続けよと命じる。

なんと我が儘で、得難き主君だろうか。

泰朝は嬉しさと同時に申し訳なさを感じ入ると、手を握られたまま

再び平伏する。

「この泰朝、姫様や和尚様より期待を受けながら、それに応えられぬ不孝者に御座います。」

「ええ。」

「そればかりか、取り返しのつかぬ失態を犯しながら、姫様の慈悲にすがり付きたいと思うてしまう恥知らずに御座います。」

「ええ。」

「その様な、取るに足らぬ愚か者に御座いますが、苦境の姫様を支えとなれるのであれば、どうか力添えする事を御許しくださいます。」

「勿論ですわ。何度でも立ち上がり、今川家を盛立てましよう。」

「……この身に有り余る、誠に有り難き御言葉。この泰朝、微力ながら改めて姫様に全霊をもって御仕え致します。然れど、どうか今日ばかりは……」

そう言つて再び頭を地面に着けると、泰朝は地面に向かって慟哭を上げる。

悲しき、悔しき、嬉しき、申し訳なき、誇らしき、恥ずかしき、腹立たしき。

希望も、絶望も、あらゆる感情が籠められたありったけの咆哮が腹の底から喉を通つて溢れ出る。

泰朝はもはや、自分が何を思い絶叫しているのか分からず、ただただ大粒の涙を流し泣き叫んでいた。

そんな泰朝の側によると、義元はそつと肩を擦り慈愛の眼差しで見つめ続けた。

桶狭間の勝利から一月ばかり経った頃、清洲城に來客があつた。

この頃になると奇跡的な勝利の余韻は多少はあれど、多くの者達は

戦後処理を始めとする慌ただしい日常に回帰しており、当主である信奈自身も鳴海城を始めとする各所の問題に対する本格的な対処に取り掛かっていた。

三河から訪問の取り次ぎを求める書状が届いたのは、それを見計らったようなタイミングだった。

信奈は松平家の要望を快諾し、本日の会談の場には信奈をはじめとして秀吉や良晴を含めた織田家臣団が同席している。

また、元康の背後には家臣の酒井忠次及び石川数正が供として控えていた。

会談の場で信奈の正面に座した元康は、作法に則り頭を下げる。

「この度は、突然の訪問の申し出を認めていただき、誠に有り難き事に御座います。三河松平家当主として謝辞奉ります。織田上総介信長様におかれましては御機嫌麗しく存じ上げます。」

「…うん。苦しくないわ。」

それだけ言うと、信奈はじつと元康を見つめ、元康もまた黙ってその視線を受ける。

暫しの間、無言が場を支配するが、不意に信奈が表情を緩め肩から力をぬいた。

「必要な事とは理解できるけど、やっぱり形式通り挨拶と言うのはどうにも肩が凝るわ。ともかく久し振りね、竹千代。」

「はい〜！お久しぶりです、吉姉さま。」

顔を綻ばせた信奈に対し、元康はほっとした様子で笑顔を返す。そこには昔馴染みの気安さがある一方で、どこか緊張感が感じられた。

そんな松平元康を家臣団の末席から窺う秀吉の表情はなんとも言い難いものであった。

女である事に文句は無い。もう諦めた。

ただ、頭に着けた獣のそれを模した耳と、腰からひよつこりと顔を覗かせる丸みを帯びた尻尾は何だと激しく突っ込みたい。

隣に座る犬千代に聞けば、松平家は狸を始祖として崇めており、当主は狸の飾り物を身に付けるのが伝統なのだと言う。

最早どこから突っ込めば良いか分からなかった。

「こうして話すのはあんたが今川に引き渡されて以来ね。このまま昔話に花を咲かせるのもいいけど、ひとまず私からあんたに言つとかなきゃいけない事があるわね。」

そう言うと言奈は顔を引き締め、先ほど元康がやったように頭を下げた。

「この度は先の戦で捕らえられた配下の兵を国許に返してくれた事、本当に感謝するわ。聞けば今川より処刑するよう命じられながら、密かに匿っていたそうね。」

桶狭間の戦いに先んじて信奈が命じた奇襲策は、それを予期した泰朝により破られ、捕らえられた女兵達も見せしめとして処刑されるはずであった。

しかし、処刑を命じられた元康はそれに従わず、捕虜達を自軍の陣内に連れていくと密かに匿っていたのであった。

今回の会談の目的の一つには、彼女らの身柄の引き渡しが含まれている。

「…顔を上げてください、吉姉さま。私も弱小とはいええ大名の端くれです。土道に背く行いで父祖の名を汚すわけには参りません。ただそれだけの事でしたので。」

「でも、そのあとの撤退は大変だったんじゃないの？」

「それはまあ、本当に大変でした。ええ。」

途端に元康の目から光が消える。

本当に、本当に大変だったのだ。

あらゆる種類の戦において、最も困難で過酷なのが撤退戦である。特に敵勢力圏からの脱出になると、その難易度は跳ね上がる。

背後から迫り来る追撃隊も脅威だが、何より恐ろしいのはその地を知り尽くした地侍や農民達の落武者狩りだ。

彼らは肉体的にも精神的にも疲弊した敗残兵を襲い、金目の物は勿論、武具や防具、更には姫武將の身を略奪する。

武家においては、敵兵であろうと姫武將を無闇に傷物にしないのが戦の作法とされているが、それはあくまでも武家同士での慣例。

農民や野盗にとっては関係なく、容赦なく姫武將も略奪品の対象と

なる。

名のある姫武将であれば領主の元に連れて行き報償金に変えるのだが、足軽や無名の姫武将は良くて地元有力者の情婦、大抵は奴隷に身を落とされ売られるか、村の共有品にされる。

故に姫武将達は何よりも落武者狩りを恐れる。

捕まれば最後、その身と記憶に一生消えぬキズを着けられる事になるからだ。

その為敗戦の折りに、落武者狩りに捕まるくらいならと自害する姫武将も少なくない。

元康もまた、大高城で今川軍敗戦の知らせを聞くと大いに取り乱し、その場で腹を切ろうとして家臣から止められた。

何とか切腹を思い止まり、地元の岡崎城を目指し撤退を開始した元康一向であったが、その道中で今川敗戦を知った落武者狩りに何度も襲われた。

元康達は恐怖やあまり漏らしそうになりながらも必死に逃げ回り、幾度となく落命の危機に陥りながらも命からがら岡崎城に帰還した。

岡崎城に辿り着いた時、元康はこう思った。

いつかあの逃避行を思い出してきたと泣いてしまおう、と。

実際に今思い出しても涙目になっていた。

「そ、そう：大分難儀したみたいね。まあ、でも今日はそんな苦労話をしに来た訳じゃないでしょ？」

元康の経験した苦労に気遣ってか、信奈は強引に話題を変える。

元康も頭を振って気を取り直した。

「はい。戦に大敗し、当主の身柄まで押さえられた今川家は三河に構う余裕は無くなり、今は駿河で新体制の構築に必死です。そこで松平家は三河を守護するべく独立した次第です。つきましては、三河の国と民の安寧の為に織田家と同盟を結びたいと思ってまして。」

岡崎城に帰還した元康は、今川家の混乱に乗じ父代からの悲願であった独立を果たす。

然れど、相変わらず弱小大名であることには変わりなく、一方的に独立したので今川家とは敵対し、国内においては今川の影響下では大

人しかつた宗教勢力が不審な動きを見せている。

それらに対処するためにも背後の安全を確保するのは必須であり、織田家との同盟は最重要事項と言つてよかつた。

「なるほど、あなたの事情は分かつたわ。うちとしても、今後は美濃の斎藤を相手にするつもりだから、後ろを任せられる同盟相手は欲しかつたところよ。」

「それではー。」

「ただ、同盟を結ぶにあたって一つ聞いて起きたい事があるのだけど、いいかしら？」

「はい、何なりと。」

同盟が現実味を帯びた事に元康の顔に喜色が浮かぶ。

しかし、次の瞬間信奈の顔から表情が消えた。

「あなたの父親、松平広忠を殺したのは、私の父上よ。」

「……………はい？」

突然の信奈の宣言に、元康は呆気にとられ間の抜けた返事をする。それを気にもせず、信奈は鋭い眼光で元康を見据えながら言葉を続ける。

「それだけじゃないわね。一族の者に賄賂を送つてあなたの祖父、清康を暗殺させ、家督を篡奪させたのも父上ね。結局広忠が今川と結んで家督を取り戻しちやつただけど、それが無ければ三河はうちの属国になつてたかも知れないわ。」

「き、吉姉さま、何を…」

「父上は海上輸送による貿易路の拡大に熱心だったから、関東方面への航路として三河の港は何としても欲しかつたの。あなたを誘拐したのも三河を傀儡化するためだったみたいだけど、広忠はそれに応じなかつた。だから殺した。その混乱に乗じて一気に攻め入り三河を手に入れる。それが父上の狙いだつたわ。まさか、一度も思い至らなかつたなんて言わないわよね？」

信奈の問いに元康は答える事が出来ず、冷や汗をかきながら視線を逸らす。

そんな元康に信奈は黙つて近づくと、中腰になって無理矢理視線を

合わせる。

「ねえ、竹千代。あんたは私と同盟を結びたいと言ったわね。父親と祖父の仇の娘である、この私に。その言葉の裏に私への怨みは一切無いと誓えるの?」

「吉姉さま、私はっ!」

「答えなさいっ、竹千代っ!己の本心を、この私に。」

元康を詰問する信奈の瞳には、元康の心の奥底を見極めんとする冷たい殺気を纏った危うい光が輝いていた。

元康は知っている。

この昔馴染みの少女が、嘘や誤魔化しを何より嫌っている事を。

もし、下手な言い繕いをしようならば、最悪この場で切り捨てられてもおかしくない。

背後で忠次と数正が腰を浮かすのを感じた。

二人とも刀を預け丸腰であるが、必要ならば主君を守るため信奈と元康の間に割って入らん構えであった。

それを見て、織田の家臣団も殺気立つ。勝家など既に刀の鏢に指を掛けていた。

元康は目線で忠次達に控えるよう伝えようと、静かに目を閉じた。

そして再び目を開くとき、元康の覚悟は決まった。

「怨みなら、あります。」

元康の言葉に周囲がざわめき、勝家は柄に手を置き膝立ちになる。

「されどっ!私の怨みなど、我が大義に比べれば些事に御座います!」

「…些事ですって。肉親の仇討ちを些事とする大義とはいったい?」

「…父上は私が織田に誘拐された時、織田から従属せよという要求されましたが、これを拒みました。もし我が子の命惜しさに今川を裏切れば、怒った今川に攻め込まれてしまうと危惧したからです。そうなれば傷つくのは三河の民。父上は三河の民を守るため、苦慮の末に私を見捨てる決心を致しました。」

「…我が子の命と、名も知らぬ領民の天秤に乗せ、領民を選んだのね。」

「…人あつての国。国あつての国主。しからば、大名の役割とは国と領民を守る事に御座います。父上の決断は当然の事。お爺様もそう

です。世の乱れにより領民が苦しむのを見逃せず、武によって一族を纏め上げ、領民のための施策に努めました。我が松平家は何時の世も三河の民と共にあり。それが子々孫々の教えです。」

そう言う元康は大きく息を吸い込んだ。

「もし私が私怨により吉姉さまと一戦交えれば、国が乱れるは必定。それ即ち父祖の教えに反する行いなれば、私の怨みなど取るに足りない些事で御座います！仇であろうが魔王であろうが、いくらでもその手を握ります！」

「…なるほどね。じゃあ例えば、私があんたに『伴侶と我が子を殺せ。さもなければ三河を攻め滅ぼすわよ。』と命じたならば、あんたはどうするの？」

「……若輩者ですので、夫も子も持たぬ身。なので想像する他無いですが…」

元康は自ら信奈と視線を合わせた。

「その時は殺します。己の手で夫と我が子を殺します。それが、三河の民の安寧に繋がるのでしたら。」

迷いなく言い放たれたその言葉には、この女であれば間違いなくそうするであろうと思わせる強い意思が込められていた。

秀吉はそこに、かつて己に手痛い敗北を刻み付けた男の面影を垣間見る。

姿形は全く異なれど、このタヌキ娘は間違いなく松平元康、後の『関東の霸王』、徳川家康その人であった。

「…まったく、普段は人の顔色ばかり気にしている癖に、肝心なところで実直なのよね、あんたは。」

どこか呆れを含んだ言葉と共に信奈は立ち上がると、大股で元の席へと戻って行った。

そして何時ものように勢い良く腰を下ろすと、元康に向かって笑みを浮かべた。

「あんたの民を思う心、良く理解したわ。その心が有る限り、あんたに背後を任せられる。」

「ではっ!？」

「松平元康、尾張と三河の末長い付き合いを願いましよ。」

この瞬間、戦国史上最も長く、強い結び付きとなる同盟関係が生まれた。

信奈の言葉に元康はほっと大きく息を吐き、広間にも弛緩した空気が流れた。

「じゃあ早速、無事同盟が結ばれたと言うことで、竹千代？」

「はい、何ですか？」

「ちよつと駿河に行つてちようだい。」

信奈の頼みに、元康の顔が再び凍る。

彼女の苦難は始まったばかりであった。

今宵はこれまでに致しとう御座ります。

臨濟寺の会談

駿河の国は富士山麓にある臨濟寺。

元は今川氏親が義元の教育係として太原雪斎を招くため、母である北川殿の別邸跡に建立した善得院を前身とし、花倉の乱で義元が家督を相続した後に兄である氏輝を祀った事で、現在は今川家の菩提寺として今川家の一族をはじめ、地元の民の篤い信仰を受けている。

そんな臨濟寺の大書院には現在七人の人影が集まっていた。

その内の一人である松平元康は、側近の石川数正を背後に置き、胃を庇うように前のめりになりながら座している。

その原因は、目の前にいる品の良い尼僧にあった。

「久方ぶりですね、元康殿。お変わりありませんか？」

「ご、ご無沙汰しております、大方様。幸い体の不調なく健やかなる日々を過ごせています。」

「それは行幸です。しかしながら元康殿、私は貴方に言わねばならぬ事があります。」

そう言うとお大方様と呼ばれた尼僧は、形の良い眉をキツと吊り上げた。

「武將たる者、配下の前では胸を張りなさいっ!!」

「ひゃっ、ひゃいっ!」

建物を揺さぶらんばかりの鋭い大喝に、元康は飛び上がるようにして背筋を伸ばす。

それを見て、尼僧は尚も厳しい視線を元康に向ける。

「そうです、その姿勢です。配下の者は常に主君の顔色を伺うもの。仮に上の者が不安や後ろめたさを表に出せば、それを見た兵達も不安を覚えます。そうなれば家中全体に動揺が広がるは必定。上に立つ者は、常に威厳ある振る舞いに気を配るよう心得なさい。良いですね？」

「は、はいっ!肝に命じましたっ!」

念押しされた元康が勢い良く頭を下げると、漸く尼僧は眉を下げ、物憂げな表情となる。

「……元康殿、今は乱世。つい先日まで飛ぶ鳥を落とす勢いであった今川も、今は国を纏めようとするにも苦心する有り様。そこにあつて松平家が独立を果たすは、戦国の世の習いとして当然の事です。元康殿、己の選択に自信と責任を持ちなさい。そうでなければ、雪斎和尚の教えが意味をなしません。」

「……はい。有り難き言葉に御座います。」

元康は神妙な面持ちで再び深く頭を下げた。

それを見やると、尼僧は他の立席者へと向かつて頭を下げる。

「申し訳ありません。公的な場において、内々の諸事にかまかけてしまいました。何卒、老体の世迷い事とお目こぼし頂ければ幸いで御座います。」

「……いえ、お気になさらず。むしろ、上に立つ者の心構えとして良き説法を耳にする事が出来ました。流石、尼御台様に御座います。」

立席者の一人である村井貞勝は、笑みを浮かべながら尼僧に応える。

その様子を、貞勝の後ろに座する秀吉がじつと伺っていた。

(なるほど、あれが今川義元の御母堂、寿桂尼殿か。儂がいた世では賢母として知られていたが、こちらでも同じらしい。)

寿桂尼

その名は夫を亡くし出家した後の名であり、彼女の本名は後世に残っていない。

権大納言中御門宣胤を父に持ち、京を訪れていた今川氏親がその聡明さを気に入り我が妻にと所望し、宣胤も氏親に英雄の気質を見出し快く娘を送り出したと言われている。

今川家では専ら大方様と呼ばれ、義元をはじめ氏親との間に六人の子を儲ける一方で、夫を政務で補佐し『今川仮名目録』の作成に大きく貢献した。

また、夫が死去した際には年若い我が子に代わり二年に渡つて国政を取り仕切り、花倉の乱では出家していた義元を還俗させ当主に担ぎ出し、実家の伝手を最大限活用し御所に義元の正統性を認めさせた。

さらに、花倉の乱の混乱に乗じ隣国の甲斐武田家が駿河との国境へ

進軍した時には、自ら兵を率いてこれと対峙し撤退させたという、とても公家生まれの女とは思えぬ逸話まである。

加えて、東国武士の気風が強かった今川家中に京文化を伝え発展させる等、国内の文化的な功績も無視できない。

総じて言えば、歴戦の武将にも劣らぬ才能と胆力を持ち、史実においても正真正銘の女大名として名を知られた今川家の誇る烈女である。

そして、元康にとっては今川に引き渡されてから今日に至るまで駿河での生活面で非常に世話になった人物であり、太原雪斎とはまた違った形の恩を受けた人である。

つまり、今川を見限った立場的に非常に面を会わせ辛い相手であった。

そんな元康を慮ってか、寿桂尼に隣に座る青年が明るい口調で声をかける。

「竹千代、母上もこう言っているし、あんま深く思い悩む必要はないぞ。俺もお前とは共に和尚に学んだ仲だ。幼なじみとは争いたくない。それに、今川は家臣団が大勢死んだせいでも三河に関わっている余裕は無い。なんだったら遠江の西半分位までなら獲つてもいいぞ。」

「龍王丸、余計な事まで言わなくてよろしい。」

寿桂尼が隣から口を挟んだ青年に叱責すれば、青年はまったく堪えた様子もなく「へいへい。」と軽く返す。げんこつが落ちた。

(龍王丸、つまりこの小僧が今川氏真。義元の嫡男は、こちらの世では義元の末弟か。)

桶狭間で当主を捕らえられるという大敗を喫し、有力家臣が悉く討ち死にするか捕虜になった上に、三河勢が独立するという混乱の極致にあった今川家であったが、寿桂尼が主導となって建て直しに奔走している。

その一つに、義元の弟である今川氏真の当主就任があった。

今川氏真

彼もまた戦国の世に少なからず名を残した人物である。

史実において、公家文化に傾倒し大名としての今川を滅ぼした暗愚と言われる一方で、関東の覇権を競った今川、武田、北条の三家で唯一、戦国の荒波を乗り越え血脈を後世に残したのは紛れもない事実である。

風貌は色白で覇気に乏しく、武家の男子というより公家のお坊ちゃんを思わせる雰囲気を纏わせていた。

ただ、武家としての教育をまるで受けていなかった姉に比べると、細身の割には確りと筋肉がついていることが服の上からでも分かる。

加えて、先ほど手勢の問題から三河に手を伸ばす余裕が無いと申したように、自家の現状を正しく認識出来る位には頭が回るなど、最低限は大名の子としての教育を受けていることが伺えた。

秀吉は氏真から目を離し、改めて出席者を見渡した。

今回の会談は織田が今川に申し出て実現したものであり、一名を除いて桶狭間の合戦の当事者達である織田、今川、そして松平の家の者達が集まっている。

「では、あまり悠長をする理由もありませんので、早速ですが始めさせて頂きましょう。此度の戦の始末について。」

貞勝が音頭を取り、会談が始まった。議題は当然、桶狭間の戦後処理についてである。

「当家といたしましたは、先日都合戦を持ちまして今川とは手打ちとしたい所存に御座います。条件としては鳴海城はじめ、今川が持ちうる尾張の城の返還。代わりに当家にて療養中の前今川当主、義元様の不足無い生活をお約束致します。」

「その条件、当方としても異存ない。欲を言えばさつさと菊姉に帰って来てもらって当主なんて地位は返上したいんだが、それは望み過ぎか。」

貞勝の言葉に了承を示しながらも軽口を叩く氏真を寿桂尼が肘で小突く。

なんとも言えぬ空気になりかけるが、貞勝が軽く咳払いをして仕切り直す。

「次に松平家の独立についてですが、こちらについても今川家として

は認める方針に御座いますか？」

「ああ。さつきも言ったように、今の当家に三河まで手を回す余裕は無い。遠江の維持でさえ厳しいくらいだ。竹千代には西遠江を獲つても良いと言ったが、半分くらいは本気だぞ。ただなあ…」

一旦は貞勝の言葉を肯定した氏真だったが、少し困ったように眉を下げると頭を搔く。

「俺としてはそれで問題無いんだが、あんまり簡単に独立や切り取りを認めると、国人達が黙っちゃいない。下手すりや、俺の首が落ちる。」

「わ、私達としても、急に遠江を半分やると言われても困るというか：まだ三河の掌握すら出来てませんし…」

桶狭間で大敗したとはいえ今川は名門。三河を失ったとしても、二国を治める大大名には変わり無い。

だが流石に独立を許しながら何もしないとすると、権威の失墜は免れない。いくら手を回す余裕が無いと言ってもだ。

これを放置し続ければ国人衆はいざというとき今川は頼りに為らぬと見限り、他家に流れるか最悪の場合は主家を排除しようとするだろう。

そして、今川がその様な状況に陥るのが松平にとって都合が良いかというと、そうでは無い。

松平はついこの間独立を果たしたばかり。元康もその家臣達も領地経営の経験値が圧倒的に不足していた。

しかもどさくさ紛れの独立であった為に、引き継ぎなど出来てる筈もない。

結果、現在松平家の首脳部は内政に忙殺されている。

戦なんてやってる暇はない。領土拡大なんてもつての他。戦で死ぬ前に緒業務に殺される。

もう少し落ち着いてから動き出したいというのが、松平家の偽らざる本音であった。

そんな中で隣国が情勢不穏というのは、松平家としてはあまり宜しくない。

「というわけで竹千代、うちとしては適当に国境で戦をする事を提案したいのだが、どうだ？」

「まあ、それが妥当ですわね。」

元康と氏真の間で、自然とその様な結論が下された。

さて、ここで言う適当な戦とはどう言う事か、少し解説しよう。

戦国武将というのは武力でもって土地を支配する者である。故に土地を巡って争いとなれば、先陣を切って戦わねばならない。

しかし、彼らとてトラブルがある度に戦っているわけではない。

戦いなれば貴重な労働力である領民を駆り出さねば為らぬし、下手に被害を出せば領地経営に大きな影響を及ぼす。

その為、戦国の世であっても争い事は可能であるなら話し合いで解決するのが基本であった。

それでも武門としての立場上、周囲へのアピールとして武力活動が必要となる場合がある。

そうした際に行われるのが、予め決着を着けないことを前提とした戦である。

具体的な例としては以下の流れである。

- ① 予め示し会わせた場所に両軍布陣する。
- ② 代表者同士による口合戦。
- ③ 適当に弓と石で牽制。
- ④ 槍兵を前進させ、適当に打ち合う。
- ⑤ 日没に合わせて両軍撤退。帰り際に互いに「カッタ、カッタ、エイイオー。」と勝鬨を挙げながら帰宅。

以上を行った上で、事前の話し合いで決めていた通りに国境線や利権について定めたのである。

因みにこの戦のやり方、親戚関係や血筋が非常に複雑な東北地方の武家では常態化していたのだが、どこぞの空気を読まない事に定評のある独眼竜が「そんなの関係ねえっ!!」とばかりにガチンコを仕掛けていって、周辺の大名が多大な迷惑を被る事になる。

閑話休題

「まあ、具体的なやり方や時期については追々煮詰めるとして、次の議

題に移ろうか。そろそろ、鞍打の婆様も待ちくたびれてるだろうし。」
「カアッー！誰が婆様じゃ小童っ!？」

「いや、今この場に婆はあんたしかいないだろ。」

そう氏真が指摘するのは、僧衣を纏った老女である。

髪はほとんど白くなり、顔に刻まれた皺は生きてきた月日を感じさせたが、端正な顔立ちと気品のある佇まいは若き日の美貌を想起させた。

また、氏真とのやり取りにはどこか気安さを感じさせ、一見すれば親しき親戚同士のじゃれあいに見える。

一方で、その両眼に宿る光には確かな知性が認められ、更にその奥には深淵の闇を思わせる冷たさがあった。

(これは、女郎蜘蛛の類いの女じゃな。)

秀吉にはこうした目をする女に心当たりがあった。

己の美貌と人当たりの良さを利用し異性へと近づき、何重にも張り巡らせた罫により身動きをとれないようにし、最後には骨の髄まで吸い尽くしてしまう強かなる女人。

この老女、とうの昔に全盛期の美しさは失ってしまったているが、長年戦国の世の最前線に立ち続けた経験と知識は秀吉にも匹敵しうる乱世の賢者であった。

間違いなく、この場所に集まった者達の中で最も警戒せねばならぬ人物である。

「まったく、礼儀を知らぬ若造の相手は疲れるわい。おっと、お初にお目にかかる方々もいましたな。これは失礼。」

そう言つて老女は床に三指を着いた。

「北条家で相談役を務めております。北条幻庵宗哲と申します。」

関東三軍師が一人、『相模の妖女』がそう名乗った。

北条幻庵、またの名を長綱。

幼き頃に箱根権現社別当寺金剛王院入寺し僧籍となり修行を積むと、近江の三井寺に留学する。

帰国後、箱根権現の四十世別当に就任する一方で、北条家の外交僧として各方面で活躍した。

また、馬術や弓術にも優れ、僧籍でありながら一軍を率いては武田や上杉と渡り合った。

現在は高齢を理由に表向きには隠居したとしているが、いまだその影響力は北条家内はもとより周辺国にも及ぼしている。

(そんな大物が此方から呼んだとはいえ態々他国の会談に現れると言うのは、北条家にとっても今川の敗退は手痛いものであつた証左じゃ。)

駿河今川、甲斐武田、そして相模北条の三家による三国同盟の目的は、互いに背後を守り合う事にある。

関東の緒大名を平伏させ、広大な関東平野を掌握するのに力を注いでいた北条からすれば、背後の今川が弱体化するのは国の方針を根本から転換させかねぬ大事であつた。

(おそらく北条家では、今川を助けるか、切り捨てるかで家中の意見が分かれとるんじゃない。故に重鎮である幻庵和尚を派遣し、西方の動向を探りつつ国の方針を決定するつもりじゃ。)

秀吉が幻庵を注視しつつ思案に暮れていると、貞勝が懐から地図を取りだし床に広げた。

「さて、此度の会合に北条家の御方に来ていただくは、今後東海の平和と益々の発展を目指さんが為に御座います。その第一歩として、織田家は尾張から相模へと連なる商易海路の整備を御提案させて頂きたく存じ上げます。」

「ふむ、商易海路に御座いますか。」

この提案は信奈の父である信秀が目指した尾張と三河に股がる経済海路構想を更に発展したものであり、信奈の肝いりで発案されたものである。

「ほう、それは良い案だな。今川は乗ろう。儲かりそうだ。」

「松平としても異存はありません。尾張の津島からの商船が多く来航するとなれば、三河の商人達も喜びましょう。」

氏真と元康はすぐに賛成の意を示した。

彼らの言う通り、交易の活発化は国を潤す重要な要素である。

だが幻庵は一瞬目を細めると、困ったような笑顔を見せた。

「なるほど、確かに良いお話に御座いますなあ。然れど一旦、国許に持ち返らせて頂きとう御座います。なにぶん国の行く末を左右する大事に御座いますゆえ、主に判断を仰ぎ、その上で判断させて頂きます。関銭や船の往来数についても追って。」

そう言つて頭を下げる幻庵に、秀吉はこの案に含まれる毒に彼女が気付いている事を察した。

この商易海路構想、単に東海地方の経済活動を活発化させるだけの物ではない。

尾張から相模にかけての海路が整備され、無制限に人や物の動きが活性化されれば、確かに相模の国はより豊かになるだろう。

しかし、海路による商易が相模の経済で大きな比重を占めるようになった時、突如この商易海路から相模が閉め出されたらどうなるか？

現代風に言うなら、バブル崩壊に近い状況に相模は陥るだろう。

織田、松平、今川の三家が一斉に北条との取引をやめた時、地理的に言えば東の端にある北条は海路による交易が出来なくなり大混乱となる。

松平家が織田家に臣従に近い同盟関係にあり、今川家が義元を人質同然にされている現状で、織田家に追従するのは先ほどやり取りから見ても解りきっている。

もしあそこで安易に提案に乗っていれば、北条は経済という名の首輪を織田に着けられるに等しかった。

これに気付けたのは幻庵が若い頃近江に留学し、その地で財を為す近江商人達と交流があったからに他ならない。

自分以外の者がここにいたらどうなっていたことか。

幻庵はそれを想像し、表情に出さぬよう内心で冷や汗をかく。

一方で、北条から色好い返事を得られなかった貞勝であったが、気にした素振りを見せることなく柔らかな笑みを浮かべて頷いた。

「なるほど、確かに今この場で早急に決める事でもありませんでしたなあ。では、この件については日を改めるとして、実はもう一点御提

案させて頂きたい策が御座います。」

そう言つて貞勝は周囲の視線を集めながら、本命の策を語りはじめた。

その策、元は信奈が考え出した策に秀吉が一手間加え発展させたものであり、織田家を天下に押し上げ、そしてその途上にある障害を排除せしめる策である。

貞勝の話が進むにつれ、今川母子と幻庵の目が見開かれていく。

元康や数正の表情に変化は無いが、それは先んじて策の内容を知らされているからであり、初めて策について信奈から教えられた時には空いた口を塞げずにいた事は記憶に新しい。

一通り策について語り終えた貞勝は、一息吐いた後に再度口を開く。

「策の実行には今しばらく時を要しますが、実行するにあたり、織田は松平、今川、北条それぞれの助力を必要と考えます。策の名は『虎囲いの計』。その最終目標は、」

貞勝は懐から小刀を取り出し、その切っ先を地図上の甲斐の国に突き立てた。

「甲斐武田家の滅亡に御座います。」

その日の晩、今川氏真は今川屋敷の庭に佇み、じつと月を見上げていた。

夜空に雲は少なく、風も無く、虫達の無く声もほとんど無い、とても澄んだ夜であった。

五感でそれを感じていた氏真は、背後からの足音に気が付く。

振り返れば、色白の少女が心配げに氏真を見ていた。

氏真の妻、早川殿である。

「旦那様、まだお休みにならないのですか？」

「ああ、うん。どうにも眠れなくてな。俺の事は気にしなくていいか

ら、先に休んでいてくれ。」

「ですが…」

「いいから。君の体はもう、君一人の体ではないのだから。」

氏真は早川殿に近づくと、愛しげに彼女の腹部に手を当てる。それに早川殿は少し顔を赤らめた。

「ほら、早く部屋へ。暖かいとはいえ、夜の気に体を晒すと冷えてしまう。俺もすぐに戻るから。」

「…分かりました。では旦那様、お先に失礼いたします。」

小さく頭を下げ、早川殿は屋敷へと戻っていく。

その姿が建物の中に消えるまで、氏真は口許に笑みを浮かべ見送った。

「良き奥方に御座いますな。」

突然氏真の背後から声がある。

驚いて振り返れば、背の低い猿顔の男がいた。

氏真の記憶が確かなら、屋敷の客間に泊まっている村井貞勝の従者である。

「君は確か、織田の…」

「木下藤吉郎秀吉と申します。私も今日の事が頭から離れず、眠れぬ夜に散歩に出たところ、斯様な場所に来てしまった次第でありまして。決して覗き見をしようとした訳ではありません。どうかご容赦を。」

「…いや、別に構わないさ。あのような会談、当分頭から消えるようなものではない。ふふつ、あの鞍打の婆様が血相を変えたんだ。あんな姿、初めて見た。」

会談後、北条幻庵は挨拶もそこそこに慌ただしく相模へと帰っていった。

恐らく早急に一族を召集し、此度の会談について話し合うのだろうと、容易に想像がついた。

「…少し、俺の話に付き合ってはくれぬか？」

「私のような者で良ければ、是非とも。」

「…俺はな、今川はもう滅びると思っておった。」

あつさりとは、何でも無いかのように氏真は言った。

その顔に思い詰めた様子は無く、ただ涼やかに淡々と事実を告げる口振りだった。

秀吉は無言で続きを促す。

「菊姉、ああ、義元の姉上は大名として決して優れた人物では無い。だけど、皆に好かれる御方だ。どうにか力になってあげたい。不思議とそう思わせる魅力のある人だ。俺には無いものを持っている人だ。」

「…なるほど。だから多くの方が義元様の元を集ったのですな。」

「ああ、そして誰も帰って来なかった。別に織田を恨んではいけない。先に手を出したのはこちら。織田は戦国の作法に則っただけだ。すべて今川がやらかした事。それを背負いきるには、俺には荷が重い。」

自嘲を含んだ笑いを氏真はもらす。
僅かな間、沈黙が流れる。

「…きつと、晴信の姉上は攻めてくる。弱った今川を見逃すほど、あの人は甘くない。氏康の姉上もそうだ。露骨に攻めて来ることは無いだろうが、情に流され利を捨てる人では無い。二人に抗う力は俺には無く、遠くないうちに今川は滅びる。その時は竹千代の所にでも転がり込もうか、なんて思っておったのだがなあ…」

氏真は胸元に手をやると、ぎゅつと拳を強く握った。

その目には、ギラリツとした強い光が宿っていた。

「貞勝殿の話聞いてから、胸のぎわめきが止まらぬのだ。もしあの策が実れば、今川は生き残れるどころか、晴信の姉上にも勝てる。そう思い至ってから、心の内から熱がドンドン沸き上がる。こんな事、初めてだ。」

「…恐れながら申し上げまするに、それは恐らく、氏真様が内に秘めし、生きたいという欲に御座いましょう。」

「生きたいという、欲？」

「はっ。私がかつて仕えた主君は、常々このように申しておりました。

『戦わぬ戦国大名など、いつそ滅ぶべし。』と。」

「…随分と手厳しい主だな。」

「ですがそれこそ、乱世における真理に御座います。戦国大名である

以上、戦いからは逃れられぬさだめ。戦い、勝ち、生き残るこそ武士の本分。氏真様、これまであなた様の前には滅びの道しか見えていなかった。しかし今日、我らの策により、今川が大名として生き残る道を見つけられた。生存への希望が、あなた様の心の奥底に眠る戦国大名の魂に火を着けた。氏真様っ！」

話している内に秀吉の言葉に熱が籠り、爛々と光る目で氏真を見定めた。

「あなた様は今、戦い、勝ち、生き残りたいという欲を持たれた。今日というこの日が、今川氏真という戦国大名が生まれた日に御座います。」

その言葉に氏真は息をのみ、口を閉じた。

それからどれほど経っただろうか。再び沈黙が支配する空間において、漸く氏真の口から深い溜め息が漏れた。

「そうか、俺は生きてたかったのか……」

それだけ言うと、氏真は月を見上げる。

相変わらず雲ひとつ無い空に半月は浮かんでいる。

ただ、その輝きは先ほどよりも少しばかり明るくなっているように感じられた。

「そういえば幼少の頃、俺も父上から教えられたな。『大名が為すべきは、ただ生きることのみ』と。元は父上が伊勢盛時公より授けられた教えだったそうだが、すっかり忘れていた。」

「……良き教えかと存じ上げます。」

「ああ、今ならそう思える。確かこうも教えられたな。」

『乱世とは、命燃やし尽くす遊び場である。』

「ならば楽しまねば、損であろうなあ。」

氏真の顔に、これまでとは全く違った獰猛な笑みが浮かんだ。

今宵はこれまでに致しとう御座ります。

木下家の人々

桶狭間の合戦から暫く経った頃、蟬の声が喧しく鳴り響く畦道を二人の男が歩いている。

その内の一人は現代から遡る事四百年、突如として戦国の乱世に放り込まれた一般人こと相良良晴。

そしてもう一人は、これまた四十年先の世から死に戻った天下人、後の豊臣秀吉こと木下藤吉郎秀吉である。

彼らは夏の日射しがカンカンと照りつける中、黙々と歩を進めているが、時折秀吉の口から小さな溜め息が何度も漏れていた。

「どうしたんだよ秀吉さん？どこか体調でも悪いのか？」

そんな秀吉を慮って良晴が声をかける。その表情からは本気で秀吉を心配しているのが伺えた。

「ん？いや、別に具合が悪いという訳ではないんじゃないが…」

「じゃあどうしてさつきから溜め息ばかりしてんだよ？折角久しぶりに里帰りするんだから、元気な姿を見せないと。」

そう言って良晴は秀吉の背中を叩き元気づけようとする。

里帰り、即ち秀吉の生まれ故郷である中村が二人の目的地である。

事の経緯は数日前。お盆も近くなり、そろそろ実家に一度顔を出さねばならぬ、と独り言を呟いていた秀吉に良晴が興味を示したところ、同行する運びとなったのであった。

良晴としては気の合う仲間としては勿論、歴史もので秀吉を語るうえで欠かす事の出来ない、彼の家族らに会ってみたいところであるのだが、当の本人は今日になってどうにも気後れしているように見受けられた。

「…まあ、なんじゃ。なんちゅーか言葉にはし難いんじゃないが。」

秀吉は再び溜め息を吐くと、頭を掻きながら視線を足元に向ける。

「どの面を下げて皆に会えば良いのかと思ってしまっただけのう…」

「どの面って、普通に久しぶりとか言っただけで笑えば…」

そう言いかけて良晴はハツとする。

秀吉は晩年、甥の羽柴秀次をはじめとした自身の親族に対して、非

情な振る舞いを行い、それが結果として豊臣家の崩壊へと繋がった。

その事を思い出した良晴の表情を見て、秀吉は力無く笑う。

「どうやら儂が皆にした仕打ちは、四百年後にもよく伝わっているようじゃの。」

「えっと、それは、その…」

「お主が気にする必要はない。すべては前世の儂の負い目。此度は二度とあのような事は起こさぬと誓い、既に気持ちの面では切り替えておったつもりじゃったが、やはりどうにもな…」

哀愁の表情を浮かべる秀吉に、良晴は何にも言えなくなってしまう。

少なくとも良晴には、秀吉の後悔と負い目がよく理解出来た。

「…なあ、秀吉さん。秀吉さんにとつて、秀次って人はどんな人だったんだ？」

「…可愛い甥子じゃ。あまり出来が良いとは言えぬが、何事にも一生懸命でう。その一生懸命さが愛らしく思えておったわ。死なせたくなかった…」

最後の方は消えかけるような小声であつたが、秀吉は確かにそう言った。

そのまま暫く無言が続いたが、突然秀吉は自分の頬を叩くと大声を上げた。

「だあああああつ!!やめじややめじや!たくつ、儂としたことが、何を辛気臭くしとるんじや!前世を引き摺り過ぎじやつ!」

「ひ、秀吉さん!?!」

「すまんの良晴。色々と難しく考え過ぎておったわ。此度の世では信奈様に天下を獲って頂く。さすれば秀次達が死ぬ運命など最初から存在せぬわ。」

どこか開き直った様子の秀吉に暫し呆気にとられた良晴であつたが、先程よりもスッキリとした秀吉の表情に安堵する。

「もう大丈夫なのか?」

「ああ、もう吹っ切れた!まったく、下手に歳を重ねるとどうにも女々しくなってしまうわ。もうこの世には太閤秀吉はおらん。ここにお

るのは、信奈様を支える木下藤吉郎秀吉じゃ！よしつ、良晴、走るぞつ！」

「ちよつ!?ちよつと待つてくれよ、秀吉さーん！」

叫ぶやいなや、凄まじい勢いで駆け出した秀吉を良晴は慌てて追いかける。

先程とは打って変わって喧しく道中を行く二人を、夏の日射しは相変わらず燦々と降り注いでいた。

そうして間も無く、二人は秀吉の故郷、中村の入り口へとたどり着いた。

「ここが秀吉さんのふるさと…」

「ああ、何処にでもある、なんの変哲もない小さな村じゃ。」

中村は現在の名古屋市中村区中村公園駅周辺にあつたとされる。

明治時代に名古屋駅を中心とした商工地区と、中村遊廓と呼ばれる愛知県随一の風俗街として発展し、現代では超高層ビルが乱立する名古屋のみならず中部日本屈指の大都市である。

だが、この頃はまだ湿地帯に面した小さな集落でしかない。

秀吉は昔懐かしい故郷の姿に、感慨深げに息を吐く。

「…本当に何もかも変わらぬ。さて、良晴。儂の実家はこの道を真っ直ぐ行つた先のでかい木の下にある所の「あれまつ!?日吉じゃにやーか!急に帰つてきてどうしたんでやー!」

早速良晴を案内しようと秀吉にすつとんきような声が掛かる。

声のした方を見れば、山雉の首を掴んだ小柄な中年女性が藪の奥から現れた。

山に入っていたからか衣服は泥に汚れ、手足も同様に泥塗れ。顔は日に焼け、鼻筋に沿って深いシワが刻まれているが、背筋はシヤンと真っ直ぐに伸びている。

そしてその瞳は、秀吉によく似た丸く大きな瞳であつた。

「おつかあ…」

現れたのは秀吉の母、『なか』であつた。

惚けたように秀吉が呟くと、なかは不思議そうに首をかしげる。

「おみやー本当に大丈夫だぎやー?幽霊でも見たみてやーな顔して。」

そう言つて、なかは心配げに秀吉の顔を撫でる。次の瞬間、秀吉は堪らずなかに飛び付き、その体を強く抱き締めていた。

「おつがああああつ!!」

「お、おつとつと!?!ど、どうしたんだおみゃーつ!?!」

「おつかあじやつ!おつかあじやつ!おつかあじやああああ!!」

その様はまさに狂乱、涙と鼻水をボロボロと流し、口の端から涎が垂れるがままに秀吉は絶叫する。

「生きとるつ!あああ、おつかあが生きとるつ!ずっと会いたかつたあ。ずっと、ずっと、もう一度会いたいと…」

そして腕に抱えた母の感触を確かめるように、秀吉は顔をなかの胸元に擦り付けた。

そんな息子の奇行に目を白黒させるなかであつたが、やがて優しい笑顔を浮かべると、赤子をあやすかの様に秀吉の頭をポンポンと撫でた。

「はいはい、おみゃーのおつかあはここにおるがね。まったく、体ばかり大きくなつて、いつまでたつても子供のまんま。」

そう言つて秀吉の体を離すと、いまだ泣きじやくる秀吉の顔を着物の袖で拭った。

「よう帰つて来た。腹空いとるだがね?おまんま用意するでよ。」

なかの言葉に、秀吉は嗚咽をあげながら頷く他なかった。

「はい、どうぞ相良様。熱いで気を付けて食べてちょう。」

「あつ、どうも。いただきます。」

なかが差し出したお椀を受け取り、良晴は礼を言う。

お椀の中には、山雉の肉団子と野菜の切れ端が浮かんでいる。

一口飲んでみれば、塩気は薄いがしっかりとした素材の旨味が感じられた。

「うんっ!すつげえ旨いつすよ、これ!」

「そうだぎや、そうだぎや!おつかあの作る飯は尾張一っ!いや、日ノ

本一だぎやあ！」

「まったくこの子は調子のええことばつか。それにしても、日吉が織田様の家来になつとるなんてねえ。」

騒ぐ秀吉を嗜めつつ、なかは感心した様子で頬に手を当てる。

元々、秀吉の母、なかは美濃の鍛冶職人の娘であり、織田家の足輕であつた木下弥右衛門に嫁いで秀吉を出産。

その後、弥右衛門が戦で討ち死にしたため、織田信秀の同朋衆であつた竹阿弥と再婚し、二人の子を産んで今にいたっている。

そんな木下家の間取りはと言うと、十畳一間に竈付きの土間という、良晴の感覚からすると家族で住むに些か手狭だが、この時代の農家としては中々に恵まれた住宅である。

実際のところ、木下家は働きのなかの存在や、織田家に仕えていた竹阿弥の伝手もあり、幼い頃の秀吉を金を払って寺に預けるくらいには余裕のある、比較的裕福な部類の百姓だったと言われている。

そんな木下家の中を興味深げに良晴が見渡していると、なかの横から痩せ気味の少女が前に出てきた。

「ねえねえ相良様！兄やと相良様は信奈様に仕えとるんじやろ？じゃったら、毛利様とは会ったことある？」

「毛利様って、新介のことか？会ったことっていうか長屋の向かいに住んでるけど。」

「ご近所さんなの!?!じゃあじゃあ、どんな人？背が高くて、凄く逞しいお人だつてみんな噂してるけど。」

「これっ、あさ！お客様相手にみつともない！すんません相良様。この子、日吉に似てどうも調子乗りな所があつて。」

「いやいや、別にかまいませんよ。」

良晴は苦笑しながら少女の方を見る。

なかから注意され不貞腐れた様子を見せるのは、秀吉の妹の『あさ』である。

秀吉とは歳が十近く離れているが、兄妹仲は良く、先ほどからも積極的に織田家での話を兄にせがんでいた。

因みに秀吉には『とも』という姉もいるが、現在は乙の子村の弥助

という馬丁の男の元に嫁いでおり、不在であった。

「それにしても、百姓の間でも新介は人気なのか？」

「そりゃそうだわ！毛利良勝様といえ、あの今川の大將を捕らえた、織田家奇跡の勝利の立役者って尾張中で噂の勇將だぎゃ！村の姉さん達も、一度でいいから毛利様みたいな強いお人に夜這いされたい、って言ってたがね。」

「えっ、まじかよ。新介の奴、そんなに……」

あさの言葉に、良晴は強面の顔を思いだし驚きを隠せない。

この時代、モテる男の条件として、腕つぶしの強さは欠かせない要素である。

そこで言うと、元より馬廻衆の纏め役であった新介は、今川義元捕縛という大手柄をもって織田家随一の武將と尾張中にその名を知られる事となり、『尾張の娘達が選ぶ、抱かれない男ランキング』で、堂々の一位に躍り出た。

「因みに、俺たちの事とかは噂になってなかった？」

「うーん、相良様や兄やの事は聞いたことにやーわ。」

「そ、そうなのか。一応手柄は認められて足輕大将になれたんだけどなあ。」

「まあまあ、そんな落ち込まんで。儂らみてやーな百姓からせやあ、足輕大将に取り上げられるんだって、夢みてやーな事なんです。」

あさの返答に肩を落とす良晴を、なかは慰める。

先の戦のあと、稲生の戦いで功をもって、良晴と秀吉は揃って足輕大将への昇進を信奈本人から伝えられていた。

これにより、給金が多少上がったのに加え、対外的な箔付けがなされていた。

とはいえ、大將捕縛の大手柄と比べると、調略と敵武將の足止めでは、些か世間へのウケで分が悪いのは仕方無いだろう。

すると、団欒とした和やかな席に、不機嫌さを隠す素振りもない舌打ちが響いた。

「ふんっ、運良く勝ち馬に乗れたくらいで調子に乗りよって！藤吉郎、お前みたいなチビが戦で何の役に立つ？どうせ詰まらぬ小競り合い

で野垂れ死ぬのが見えておるわ。」

「ちよつと、アンタ。そんなこと言わんで。」

不意に、部屋の隅で黙っていた初老の男が、蔑みの混じりに吐き捨てる。

彼はなかの夫で、秀吉の継父、あさの実父にあたる、竹阿弥という男である。

そんな夫をなかは嗜めるが、竹阿弥はもう一度鼻をならす。

「大体、今の織田の御当主様はうつけといふ噂じゃ。この前の戦だつて、運が良かっただけではないか？先代の信秀公はそれは良く出来た御人じゃった。信秀公じゃたら、あんな危ない橋を渡らずとも、上手く事を納めておるはずじゃ。」

「おい、おっさん。あんた信奈の事をバカにしてんのか？」

竹阿弥の物言いに良晴が前のめりになる。その顔には主君を悪く言われたことに対する明確な怒りがあった。

しかし、竹阿弥に食って掛かろうとする良晴の前に、秀吉が素早く体を滑り込ませた。

「いや、すまん良晴！気を悪くさせてしまったが、年寄りの戯言と思つてくれんかの？」

「秀吉さん、でもこいつ…」

「わかちよる、わかちよる。お前さんが姫様の悪し様を言われた怒り、儂にもようく分かる。じゃが、今日ばかりは抑えてはくれぬか？久しぶりの故郷なんじゃ。おつかあに諍いは見せとうない。」

「…わかつたよ。秀吉さんがそこまで言うなら。」

「忝ない。竹阿弥殿、この通り相良殿は信奈様を心底慕うておる。信秀公に仕えておつた御前さんにとつちや、最近巷で『信奈様は信秀公を越える器』と噂されよるのは面白くないかもしれぬが、末端とはいえ儂らも信奈様に仕えとる身。せめて儂らのおらぬ所で愚痴つてはくれぬかのう？」

「お、おう…」

秀吉に間に入られた竹阿弥は、戸惑いつつも自分の否を自覚していたからか、バツが悪そうに頷いた。

そんな秀吉の姿を見た母と妹は、驚いた様子で秀吉を見ていた。

「どうしたんじや、二人して目丸くして?」

「日吉、おみやー大人なったなあ。おっとうを宥めるなんて。」

「うん? そうか?」

「そうだぎや。前だったら兄やも怒って、おっとうと喧嘩になつたがね。」

「…そうだったかもしれんのう。まつ、儂も色々あつたのでな。」

六十年も生きていれば、ひねくれた老人のあしらい方も多少の心得は出来るというもの。

そう思うと、今世の自分と前世の自分は、明確に違った道を歩んでいるのだと自覚し、自嘲じみた笑みが秀吉に浮かんだ。

「それはそうと、小竹の奴はまだ帰らんのか?」

「村の寄合に行つとるがね。多分そろそろ帰ってくるちゆうー思うけど。」

なかが答えた丁度その時、家の扉が開かれ、背の高い細目の青年が入ってきた。

「ただいまあ、って兄者じゃねえか?! 帰って来とつたんか?!」

「おおおおっ?! 小竹うううっ!」

青年の姿を目の当たりにした秀吉は、母にしたのと同様に喜び勇んで青年に抱きついた。

この青年こそ、秀吉の種違いの弟である『小竹』こと、小一郎長秀である。

秀吉は背中に回した手で小一郎の存在を確かめると、心底安心した様子で大きく息を吐いた。

「本当に、本当によかった!」

「ど、どうしたんじや、兄者?」

「小竹、儂はお前が妹になっておらんで本当に安心したつ!」

「本当にどうしたんじや兄者?!」

この時代に来てから、前世の知り合いが悉く女になる謎の現象に戸惑いつつも、何とか折り合いを付けてきた秀吉だったが、肉親の性別逆転までは受け止める自信が無かつたらしい。

「うん、まあ色々あったんじや。そこところはあまり話せぬが、先程おつかあ達にもした儂の近況を教える。御主にも相談したい事があるしのう。」

「…わかった。教えてくれんか、兄者の事。」

言葉の端に真剣味を感じた小一郎は、素直に話を聞く態勢に入つた。

「おおうつ！そうか！兄者はいま信奈様のところに。しかも足軽大将たあ、大したものねえか！」

秀吉から織田家に仕え今日までの事を聞かされた小一郎は、秀吉が一武将として活躍している事に大変感激し、嬉し涙さえ流し兄の出世を喜んでいた。

「ああ、よかった！兄者が元気にやっついていてくれて。儂は兄者が酷く苦労しているのでは無いかと心配しておつたんじや。相良様も兄者を支えてくれて有り難う御座います！」

「いやいやつ！寧ろ俺の方が助けられてるばかりだし、感謝しなきゃいけないのは俺だよ。」

「それでも、今日兄者が相良様をこの家に招いたのは、兄者がそれだけ相良様を信頼している証左。信頼されるに至る事があつたというだけで、相良様に感謝する理由となり得ます。」

そう言うと、小一郎は床に手を着き深々とお辞儀をする。

その様に良晴は面食らいながらも、小一郎の義理堅く誠実な性格と、のちに『天下の補佐官』として絶大な信頼を勝ち得る、兄に負けず劣らずの『人垂らし』っぷりを垣間見た。

「うむ、その通りじや小竹よ。御主の言うとおり、儂は感謝してもしきれぬ恩が良晴にある。」

「秀吉さんまで…」

「しかしじや、足軽大将になったからには、仕事の量も質も、より難題になる筈じや。今まで通りと言うのは難しくなろう。そこでじや。」

秀吉は膝を着いたまま小一郎にじり寄った。

「小竹、儂の家来になつてはくれんか？」

「兄者の家来、侍になれつてことか？」

「ああ、そうじゃ。これからますます信奈様のお役にたつには、御主の助けが必要なんじゃ。どうか頼む、小竹！」

そう言つて、秀吉は弟に対して頭を下げる。

そんな兄の姿を前に小一郎が思案していると、乱暴に床を踏み鳴らし立ち上がる者がいた。

竹阿弥である。

「戯けたこと言つてんじゃねえつ！小竹はお前と違つて真面目に田畑の世話をし、村の皆からも頼りにされとるんだ。小竹、侍になつてなるもんじゃねえぞ。運が悪けりや簡単に死んじまうし、手柄をあげるなんざ方に一つだ。」

憤怒の表情で秀吉を怒鳴つた竹阿弥であつたが、小一郎の方を向くと、どこか懇願にも似た様相で諭した。

「今までにも一旗上げる、と言つて村を出ていった奴等はいたが、どいつもこいつも碌な死に方をしておらん。小竹、馬鹿に付き合つておみやーまで馬鹿見ることはねえ！この村にいりや、十分幸せに暮らせるだぎやあ。」

「……………いや、おつとう、儂は兄者に付いていく。」

「小竹っ!？」

小一郎が出した結論に竹阿弥は驚愕するが、父に対して小一郎は申し訳なさそうに微笑む。

「おつとう、儂は兄者が頼つてくれるんが嬉しいんじゃ。子供の頃は、いっつも兄者について回つて助けて貰つてばっかじゃつたで。いつか兄者の助けになりてやーて、ずつと思つとつた。それに…」

小一郎は改めて秀吉の方を見る。その顔は、どこか興奮気味に朱が差していた。

「儂は兄者に天運があると思つとる。兄者ならいずれ、天下に比類無い大出世ができる。なんとこのう、そう思うんじゃ。」

「小竹、そんなおみやー…」

小一郎の言葉にシヨックを隠せない様子の竹阿弥。そんな彼の肩を、妻のなかが支える。

「おつとう、行かせるしかねえだぎゃあ。」

「なか、おみやーまで。」

「男が一度決めた以上、親でも簡単には変えらんねえ。それに、前にも話したで。儂が日吉を身籠ったとき、御天道様が儂の腹ん中に入ってくる夢みてやーて話。きつと日吉は日輪の子。武家様でも必ず成功するで、小竹もついて行かせてあげてちよう。」

「し、しかし、うちの畑はどうするだぎゃあ!?小竹がおらんくなったら、儂ら三人で世話せねばならんのじゃぞ!」

「それなんじゃが、今日の寄合で近い内にあさの嫁ぎ先を決めねば、という話になってのう。隣村の甚兵衛という農夫の三男坊がおるで、そいつと見合いする事になったでよ。」

「えっ、本当!?大変、急いでまわしせな。」

急に自身の見合い話になった割には、あさは冷静に受け止め、準備について想いを巡らせる。

他の家族も特段驚いた様子も無く、戦国時代の農村における婚礼の常識的には、普通であることが窺い知れた。

ただ一人、良晴のみは自分より年下のあさが、あつさりど人生の大決断をして、周りもそれを受け入れてる現状に衝撃を受けていた。「噂では真面目な働き者らしいで、婿入りも問題ないという話じゃ。儂が出ていったあとは、甚兵衛に面倒見て貰えばええじやろ。」

「そりゃあ、ええ話だがね!あさ、よかつたのう!」

「うん!ありがとう、竹兄や!」

小一郎が持ち帰った縁談の話に、なかとあさは既に乗り気である。ここに至って、蚊帳の外は竹阿弥一人となってしまった。

「ええいっ!どいつもこいつも。そんなに死に急ぎたいなら、勝手にどこへでも行って、くたばっちまえっ!」

「アンタっ!言いすぎだぎゃあ。」

「煩いっ!儂は気分が悪い!寝るっ!」

そう言って竹阿弥は部屋の隅に行くと、皆に背を向けゴロリと横に

なつた。

なかは申し訳なさそうに良晴へ頭を下げる。

「すみません。うちのおつとう、ご覧の通りへそ曲がりでした。根は悪い人じゃにやーんですけど。」

「うん、別に大丈夫つすよ。それよりも小一郎さん、これからよろしくな！」

「はいっ！相良様、百姓の小倅の分際で御座いますが、兄共々、何卒よろしくお願いいたします。」

こうして、後に『天下の補佐官』として兄の覇業を一身に支える希代の調整役が仲間に加わり、秀吉、そして良晴の躍進に大いに寄与する事となつていくのだった。

その日、木下家で一夜を明かした秀吉と良晴は、日が昇つてすぐに清須へ向け出発した。

小一郎は妹の見合いと婚禮の準備のため村に残り、妹婿へ諸々の引き継ぎが終わり次第、清須に来るはこびとなつている。

「相良様、日吉が無茶せんよう、よく見ておいてちょう。あとこの瓜、うちの畑で一番大きく育つたんで、ご近所さん達と分けて食べてちょう。」

大人の頭ほどの瓜を手渡しながら、なかは良晴に頼んだ。見送りに小一郎とあさの姿もあったが、竹阿弥はついで現れなかった。

「なんとというか、ほんと良い人ばかりだったな。」

帰りの道中、良晴は貰った瓜を両手の上で転がしながら秀吉に言う。

「ああ、しかし竹阿弥の事はすまんかったな。」

「別に良いよ。何となく、悪い人じゃ無さそうだったし。」

ほんの少し接しただけであったが、良晴は竹阿弥の不器用な人柄を垣間見ていた。

思い返してみれば、小一郎が侍になるのを反対したのも息子の身を案じてからであり、言葉は乱暴でも親としての確かな情を感じられた。

「あの男も、中々の苦勞人でな。一時は城仕えをしておったが、低い身分故に大変な苦勞をしたらしい。おまけに戦で生死に関わる怪我をしてな、そういった事が積み重なり役目を辞したそうじゃ。」

「そっか。じゃあやっぱり、秀吉さんや小一郎に危ない道を進んで欲しくなかつたから、あんな風に言つてたのかな?」

「恐らくそうじゃろ。尤も、儂がそれに気づいたのは、前世で阿奴と最後に言葉を交わした時じゃった。」

前世で竹阿弥と和解した日、酒を酌み交わし秀吉は初めて竹阿弥の心の内を知ることが出来た。

そしてそれが、二人が親子として語り合つた最後の機会でもあつた。

「頑固で、不器用で、へそ曲がりだが、人並み以上の情け深さを持つておるが、それを表に出すのが苦手な男。それが阿奴だ。」

「ふーん、なんかそう言うのと、信奈に似てるよな。」

「おぞましい事を言うでないっ！竹阿弥が信奈様に似ているなど、万に一つも無いわっ!」

良晴の感想を秀吉は全力で否定する。

その慌て様がらしくなかつたので良晴が思わず笑ってしまうと、秀吉は拗ねた様子でフンツと鼻を鳴らす。

その姿はどこか竹阿弥に似ていた。

「けれど良かったよな、小一郎が仲間になってくれて。」

「…まあもう。小竹はあれで中々器用な奴じゃ。人の話を聞くのも得意じゃし、下の者達を纏めるのも上手い。奴がおるからこそ、儂も自由になれるというものじゃ。」

「へえー、結構優秀な人だつて伝わってるけど、本当だったんだな。」

「儂の自慢の弟ならば、当たり前じゃっ！小竹が家来になつてくれたからには、儂も安心して寧々を嫁に迎えられるしもう。」

「……………は?」

秀吉が放つた一言に、良晴の思考が停止する。

数瞬の間、言葉を失つた良晴だったが、脳が秀吉の発言を理解する

と、血相を変えて秀吉に掴み掛かる。

「秀吉さん寧々と結婚するのかよっ!?!」

「おおっ! そう言えばまだ言って無かったのう。実は先日、寧々に嫁に来てくれんかと言ってな。浅野の爺様からは嫁にやっつては良いが、せめて一人は家来を持つようになって欲しいと言われておったんじゃ。」

「話が早すぎんだろっ!?! つか、おめでとうっ! でも、どういいう流れでそうなったんだよ!?!」

急な結婚の報告に驚いた良晴であったが、元より秀吉と寧々が夫婦になることは知識としてあったので、素直に祝福の言葉を口にした。

これが秀吉以外であれば、血涙を流し「リア充爆発しろ!」と叫んでいただろう。

一方で秀吉がどの様にして想い人を射止めたのか、青少年らしい興味から尋ねると、秀吉は顎に手を当て頷いた。

「ふむ、今川との戦に勝ったあと、祭りがあったじゃろ? そこで、一緒に出店でも回リませぬか? と誘ったんじゃ。」

「あつ、なんか割りと普通にデートに誘ったんだな。で、それから?」
「快く誘いを受けて貰った。当日は出店で買い食いしたり、戦の報償金で髪飾りを買ったりしてな。そうして一通り楽しんだあと、螢が飛び交う名所があるのでそこで休もう、と言って寺の裏にある螢池に向かったんじゃ。」

「おおっ、いいじゃん。で、それから?」

「闇を照らす螢の光を眺めながら暫し語り合った。すると、近くの茂みから物音がしてのう。」

「物音?」

「気になって寧々と確かめに行くことにしたんじゃ。すると…」

「すると?」

「新介が近所の町娘とまぐわっておったわ。」

「おいこら。」

「見渡せば、他にも物陰で腰を振る男女が結構おつてのう。まあ、戦時は男も女も気が高ぶっておるし、戦が終わった解放感から人肌を求め

るもの。割りとよく見る光景じゃ。かつかつ!」

「いや、この話の流れで戦国時代の性事情は聞きたくなかったよ。」

「まあ、儂もそう言う場所だと知ってて誘ったのじゃがな。」

「確信犯かよっ!てかつ、それって最初から何かするつもりで…」

「無論じゃ!寧々も皆が何をしてるか直ぐに理解したようだな。暗がりでも分かるくらい、顔を真っ赤にしておったわ。しかし、目線だけは新介達から離せず、足をもじもじと擦り合わせてな。もうそれで堪らんくなつて、儂は寧々の口に吸い付くと、乳房に手を…」

「アウトおとおおおおおつ!!!あんた何やってんだよっ!?!犯罪だろうがっ!」

因みにこの時、秀吉は二十五歳。寧々は十四歳。現代であれば完璧に犯罪である。

「なにが罪なものか。寧々の歳なら子は産める。それに、寧々も最初は驚いておったが、やがて目を閉じ、儂の背に腕を回してきたのう。」

「えっ、それってつまり…」

「ふっ。今世でも、儂が寧々を、娘から女にしてやった。」

「マジかよっ!畜生、展開が早すぎて脳が追い付かねえ。つか、浅野の爺さんがそれ知ったら、ぶちギレるんじゃないか?」

「心配御無用っ!キチンと傷物にしたことを言った上で、嫁に迎えるのを認めて貰ったぞ。ついでに、爺様が死ぬ前に孫の顔を見せてくれと頼まれたのう。」

「うわあ、戦国の性風俗すげえな。」

秀吉と寧々は、戦国時代では珍しい恋愛結婚だったと言われているが、戦国の恋愛など大体こんなもんである。

現代の感覚からすれば、ロマンチックの欠片もない。

「しかし、体が若返ったせいかな、少し調子にノリ過ぎてしまったのう。つい、寧々の気が失するまで達させてしまったわ。因みに、寧々はうなじの部分が感じやすくてな。後ろから突きながら舌を這わせると、キュツと奥が締め付けて…」

「止める止めろっ!知り合いの夜の営みの話なんて聞きたくねえよ!気まずくなるだろうがっ!」

「本当に聞きたくないのか？」

「……………」

「本当に興味がないのか？」

「……………後学の為に、御教授下さい。」

「儂は己に正直な男は好きじゃぞ。」

それから清須に着くまでの道中、秀吉から寧々との仲睦まじさを丁寧説明された良晴は、暫くの間、まともに寧々の顔を見れなくなつたのは言うまでもない。

それから数日がたった頃、清洲城の大広間には、主だった家臣たちが一同に会していた。

彼らは一様に真剣な面持ちで、主が現れるのを待っていた。

すると、板張りを大股で歩く音と共に彼らの主君、織田信奈が現れ、家臣たちは一斉に頭を下げる。

信奈は鋭い視線で家臣達をぐるりと見渡し、己の座に腰を落とし、

「皆のもの、面を上げなさい。」

その言葉に従い、家臣達は素早く頭を上げ、主君を注視する。

その先には、片膝を立て、爛々と瞳に野心の火を灯す、若き戦国大名がいた。

「今川との戦が終わわり、後患の憂いが無くなり、準備が整ったわ。」

口角が持ち上がり、肉食獣めいた凄惨な笑みを作り、信奈は宣誓する。

「さあ、美濃を獲るわよ。」

これより、美濃攻略編開幕。

今宵はここまでにしとう御座ります。

美濃はいまだ遠く

それは、ありし日の一時であった。

「むむむ、くうーっ！参った！儂の負けじゃ！相変わらず御主は強い
のう。」

碁盤を前に唸り声を挙げていた秀吉は、頭を掻きむしりながら己の
敗北を宣言する。

しかし、そこに敗北を悲観する面影は全く無く、むしろ勝利者を称
えんとする爽やかさがあつた。

それを受けて、対戦相手であつた色白な男は静かに微笑んだ。

「ありがとうございます。誠に良い碁を打てました。」

「そうは言うがのう、結局今回も勝てなんだ。やれやれ、何時になれば
御主に勝てる日が来るのか。」

「藤吉郎様も以前に比べれば、格段に上手くなりましたよ。私を越
える日もそう遠くは無いかと。」

「儂だつてこのまま勝ち逃げさせる気は無いわ。その時まで首を長く
して待つておれ。」

「ふふ、楽しみにしています。ただ、あまり時は無いかもしれません。」

色白な男が漏らした一言に、秀吉の顔に影が射す。

しかし、すぐにニイツと口元を吊り上げると、重くなつた空気を笑
い飛ばそうとする。

「はははっ！辛気臭いことを言うでない。そうじゃっ！良い知らせが
あつたのを忘れておつた。調略を進めておる播磨なんじゃが、有馬と
言う場所に良い温泉が沸くそうじゃ。万病にも効くという噂もあつ
てのう、きつとそこに浸かれば御主の病もたちまち良くなるじやろう
！」

努めて明るく話す秀吉に、色白な男は相変わらずニコニコと笑みを
向ける。

その顔に秀吉は胸を締め付けられる感覚を覚え、やがて力無く顔を
伏せ言葉を途切れさせてしまう。

「……………どうにも、ならんのか？」

唐突に溢れた、秀吉らしくない弱気な言葉に、色白な男は張り付いた笑みのまま、静かに首を振った。

「はい、もう長くは。」

「……………すまん。」

「…なぜ、藤吉郎様が謝られるのですか？」

「思えば僕は御主に無理をさせ過ぎておった。もっと早く、僕が御主の体を気遣っておれば……………のう、もう策を練れとは言わん。僕の隣に立たずとも良い。故郷に帰り養生し、元気になってくれ。そしてまた、碁を打とう。頼むっ！半兵衛っ！」

瞳に涙を浮かべ懇願する秀吉に、色白の男、竹中半兵衛は初めて笑顔を崩し、物悲しそうな顔をする。

「…運命とは誰にも判らぬもの。この半兵衛は己の意志で藤吉郎様のもとで才を振るい、天命に殉じ己の生を全うした次第に御座います。そこに一片の悔いはなく、今は穏やかな心で最後の時を待ちたい所存です。藤吉郎様、」

そう言つて秀吉を見つめる眼差しは、とても澄んでいた。

「今までありがとうございます御座いました。お側に仕えられ幸せでした。」

その日が、羽柴秀吉と希代の天才軍師、竹中半兵衛が言葉を交わした最後の日であった。

桶狭間の戦いに勝利し、三河松平家と強固な同盟関係を築いて後患の憂いを無くした織田信奈は、満を持して義父である斎藤道三の『美濃国譲り状』を根拠に、美濃侵攻を開始した。

そして、惨敗した。

「なんでよっ!？」

先日侵攻を宣言した清洲城の評定の間で、信奈は癩癩を起こし叫ぶと、手に持った指揮棒を床に叩きつけた。

その容貌は泥にまみれ、着たままになっている甲冑も傷や欠け落ちが目立つ。

見事なまでの負け装束である。

はじめは順調だったのだ。

尾張を出立した織田軍は美濃との国境を越え、西美濃安八郡に侵攻し、周辺の砦を落とす制圧した。

その勢いに乗り、一気に稲葉山城下へと向けて軍を進めたところで、流れが変わった。

美濃の奥に進むにしたがい、険しい山道の登り降りが多くなり、進軍速度が大幅に遅くなったのである。

そうした状況下で兵達の疲労を考慮しなければならなくなった頃、織田軍は両側面を崖に挟まれた谷間で突如深い霧に包まれ身動きが取れなくなってしまった。

そこに至って、一部の将は不味い事になったと勘づいたが、時既に遅し。

霧の奥から怒号と悲鳴が木霊した。

信奈は即座に撤退を指示し、織田兵はもと来た道を一目散に戻り、必死の思いで尾張に逃げ帰って来たのであった。

幸い、即時撤退が上手くいったお陰で兵の被害は少ないが、それでも完膚なきまでの敗北に言い訳のしようは無く、信奈の機嫌の悪さも致し方無いだろう。

一方で主の荒ぶりように、家臣たちは沈痛な面持ちで頭を下げる他無い。

そんな中、万千代は溜め息混じりに指揮棒を拾うと、信奈の元に歩み寄る。

「姫様、落ち着いて下さい。」

「私は落ち着いてるわ!」

「いや、それは流石に無理があるかと。物に当たって敗けが無くなるのであれば良いですが、そうで無いなら今後の事を検討するのが有意

義です。」

そう万千代が諭すと、信奈は万千代をギロリと睨むが、口を曲げたまま指揮棒を引ったくった。

取り敢えずは話が出る状態になった事に万千代は安堵するが、それを見計らったように場にそぐわぬ緩やかな足音が響いた。

「ほうほう。これは随分と手酷くやられたようじゃな。結構、結構。」

足音と同じくのんびりとした口調で現れたのは、信奈の義父にして美濃齋藤家前当主、齋藤道三その人である。

そんな道三に対し、信奈は大きく舌打ちを鳴らし睨み付けた。

「 मामシ、いま私は機嫌が良くないの。無駄口を叩くなら視界から消えてくれないかしら。」

「これは失敬したな、信奈ちゃん。果たしてどのような負けっぷりをしたか気になってのう。思っておったより被害は軽いようなので、つい口が軽くなってしまったようじゃ。」

「……………何それ？まるで私が負けるのが分かってたみたい言い方ね。」

「如何にも。よほどの事がない限り、信奈ちゃんは惨敗するじやろうと、儂は戦が始まる前から…」

そう道三が語っていた途中、信奈は指揮棒を道三に向かって投げつけ、道三の言葉を無理矢理止める。

そして、空いた手で刀を抜くと、その切っ先を道三の首元に突きつけた。

「姫様っ!?!お止めくださいっ!」

「 मामシ、私はあんたの事を気に入っているわ。それはあんたの事だから分かってると思うけど、だからって、まさか何を言っても命までは取られ無いだろうとは、思っではいないでしょうね?」

信奈の凶行を何とか止めようと万千代が叫ぶが、信奈はその声を一切無視した。

その目は完全に据わっており、道三の姿しか写っていない。

信奈が醸したす濃密な殺気は、家臣団に呼吸さえ忘れさせた。

しかし、そんな状況にあっても、道三は穏やかな笑みを絶やさず、ま

るで愚図る幼子を見守る翁の如き視線を信奈に向ける。

それが益々、信奈を苛立たせるが道三は気にしない。

「そうじゃのう。そもそも儂の命はとつくの昔に潰えていた筈じゃ。それを拾ったのは他でもない信奈ちゃん。然らば、この首を信奈ちゃんに跳ねられたところで、何の文句も有りはせんよ。」

「……………何で私達が敗けると思ったの?」

「逆に聞こう。何故、お主たちは勝てると思った?」

質問に質問を返され、信奈は眉をひそめる。

しかし、何かを口にしようにとしたところで、ハツと目を見開いた。

それを見て、道三は満足そうに頷いた。

「西から攻められる心配が無くなった。国内をほぼ統一した。以前と同じだけの戦力に回復できた。評判が高まった。まあ、主だった理由はこの辺りじやろう。おおうつ!重要な部分を忘れておったわ。」

そう言うとき道三は刃の先を手で逸らし、一步信奈に近付き言った。

「あの今川に勝った我らには、天運が味方している。そう思い込んだかのう。ん?」

ほんの僅かに、道三が醸し出す雰囲気が変わった。

それだけで、先程とは違った冷たい緊張感が評定の間を覆う。

前の方に座る家臣達からは、信奈の首筋に汗が浮かんでいるのが見えた。

「カツカツカッ!まあ、勝利というのは極上の美酒じゃ!しかも、あの様な鮮烈な勝利を味わってしまったては、ついつい酔いすぎてしまうというもの。しかしのう、その程度の根拠で戦を仕掛けるとは…」

不意に道三が目を細め、信奈を見据える。

その眼光はどこか毒蛇を想起させ、信奈を無意識に後退させた。

そんな信奈に対し、道三は拳を振り上げる。

「戦を、美濃を舐めすぎじゃっ!小娘がつ!」

手加減無しの強烈な拳骨が、信奈の脳天に炸裂した。

あまりの威力に信奈は言葉すら失い、刀を取り落として、その場に蹲り悶絶する。

「戦の本番は平時の積み重ね。実戦はその答え合わせに過ぎぬ。それ

を忘れた者に領主の資格はないわ。少し頭を冷やすが良い。」

道三は拳を握ったまま、憤怒の表情で信奈を見下ろし言い放つ。

家臣達は道三の剣幕に圧倒されっぱなしだったが、いち早く我に返った万千代と勝家の二人が、いまだに頭を押さえる信奈に駆け寄った。

「大丈夫ですか、姫様？」

「ああつ、たん瘤が出来てます。おのれママシめ！いくら何でもやりすぎだ！成敗してくれる！」

「その必要は無いわ、六。」

今にも刀を手に駆け出しそうな勝家を、信奈は痛みに顔をしかめながらも手で制する。

「あー、イタタ。拳骨を喰らうなんて父上以来ね。いや、平手の爺やにも一度やられたかしら。」

どこか昔を懐かしむような口調で独り言を言う信奈に、先程までの剣呑さは無い。

立ち上がり、床に落ちた刀を拾うと何事も無かったかのように鞘に納める。

そして、床に膝と手を着くと道三に向かって頭を下げた。

「ママシ、先ほどの無礼を謝罪するわ。己の力量も計れず無様な戦をし、見るに耐えぬ醜態を晒した私を諫めてくれた事の感謝も。」

「……………客将の身に有りながら、主君に手を上げた事は不問かのか？」

「客将であると同時に、ママシは私の義父よ。馬鹿な行いをした子を折檻するのは、親として当然でしょ。」

「…寛大な御言葉、感謝つかまつる。」

信奈の謝罪を受け取った道三は、主君に倣って膝と手を着くと謝辞を奉る。

それにより、漸くホツとした空気が広間に流れる。

道三から醸し出されていた冷たい雰囲気も霧散した。

しかし、信奈を見据える瞳の奥には、尚も冷徹な光が宿ったままである。

「して、信奈ちゃん。此度の敗戦の原因は何と心得る？」

「…主因は私の油断慢心。けれど、冷静に振り返ってみると、私たちは敵に誘い込まれていた気がするわ。久太郎、地図を。」

「ははっ！」

信奈を指示を受け、小姓の堀久太郎が信奈と道三の間に美濃の地図を広げる。

信奈は筆を取ると、地図上に印を付けていった。

「これが私たちが侵攻に際して攻略した砦よ。今思えば柵が妙に小綺麗で、急添えで作ったような真新しい感じがしたわ。そして、攻め落とすのも容易かった。たぶん、最初から落とされる事を前提で用意したんだわ。」

「恐らくそうじやろう。敢えて容易に砦を落とさせる事で油断を誘い、敵の動きを誘導する。件の谷で奇襲を受けた際も、その先に砦があると報告があつたのじやろ？」

「…ママシの言う通りよ。無視して背後を突かれるのも嫌だったし、全軍で当たれば早々に落とせると思ってたわ。道中に奇襲がしやすい谷が有る事も、知らぬ間に無視してしまって、その全てが敵の狙い通りなら、かなりの知恵者がいるわね。」

「むむむ、しかしこれ程の策を寸分狂わず成功させるとなると、並大抵の者では無いぞ。出きるとすれば儂以外では十兵衛くらいしか居らぬし、あやつも今は越前に居るしのお。義龍には意外にも戦の才はあつたが、策略という面では…」

相手の動きを読み、罠を張り、そこへ誘導する。

言葉にするのは簡単だが、それを為すには必要な情報を収集し、何万と有る選択肢の中から敵の動きを予測し、自分達にとって最適な方法を取捨選択しなければならぬ。

道三、光秀といった知恵者が去った美濃に、それだけの軍師働きが出来る人材がいたかどうかと一同が思案していると、不意に手を上げる者がいた。

良晴である。

「なあ、それってもしかして竹中半兵衛がやったんじゃないか？」

「竹中半兵衛？ママシ、聞き覚えは？」

「うむむ。そういえば、先的美濃の変事の際に儂に味方した竹中重元の子がその様な名であったのう。儂が去った後に重元は義龍に帰順した筈じゃ。その子は大層な知恵者という噂もあったが、戦に出たことが無ければ無名なのも致し方ない。」

「良サル、あんたはその竹中半兵衛が今回の戦で私達を嵌めたって言いたいよね。」

「ああつ！竹中半兵衛の別名は今孔明。今後間違ひなく戦国屈指の天才軍師として知られる超有名人さ！なつ、秀吉さん。」

秀吉は半兵衛と関わりが深い武将として、真つ先に名前が上がる内の一人である。

それを知る良晴からすれば気を利かせて話を振ったのだが、当の秀吉は何故か渋い顔をしていた。

「…うむ。確かに竹中半兵衛は今は無名なれど、将来には全国に名を轟かせる知将なれば、軍略を以て我らを撃退せしめるは容易き事でしょう。」

「…へえ。秀サルもそこまで言うのね。面白そうね。その竹中半兵衛という武将。」

信奈の瞳に肉食獣めいた光が宿る。

戦国大名の性と言うべきか、優秀な人材を手元に置きたいという欲が沸いてきていた。

「うん。今後の方針が大分見えてきたわね。万千代、美濃の地理についてマムシと詰めてちょうだい。今回の侵攻における兵糧の消費や、行軍速度の見直しも合わせて実施して！」

「御意にございます！」

「地蔵は此度の損失を計算して、補填にどれくらい掛かるか見積もりなさい。それと、美濃に伝手の有る商人に渡りを付けて国人衆の内情に探りも！」

「はっ！」

「六と犬千代は兵の教練よ！浮かれ者がいないよう、徹底的にやって頂戴！」

「はいっ！お任せください！」

「うん。犬千代も一から鍛え直す。」

「信盛は国境の防備を固めなさい。万が一にもこの機に乗じて攻め込まれないよう、警戒を怠らない様に各砦に伝えてるのよ！」

「ははあ！ 畏まりました。」

「それと、良サル、秀サル！」

矢継ぎ早に配下へ指示を出していた信奈は、最後に末席に座る二人へと目を向けた。

その視線に二人は居ずまいを正す。

「あんたたちは美濃に行きなさい。実際に美濃の内情を探ると共に、竹中半兵衛について調べてくるのよ。」

「半兵衛をですか？」

「そう。今回の敗戦に半兵衛が関わっているなら、嫌でも美濃侵攻の壁となる武将よ。その人格を知り、弱点を探り、調略を仕掛け…」

信奈の顔に、思わず背筋に寒気が走るような凄惨な笑みが浮かんだ。

「私の前に連れてきなさい。」

「そうですか。では、明日には美濃へ出発されるのですね？」

「うむ。役割上長く国元を離れねばならぬ。もし、困った事があれば小一郎か犬千代に言ってくれ。あやつらにも伝えてある。ああ、気持ちええのう。」

そう言つて秀吉はうつ伏せのまま、幸せそうに表情を蕩けさせる。その腰の上には寧々が乗っかり、秀吉の背を指圧し揉みほぐしていた。

「いや、まさに天に昇るかのごとき心地よさじや。寧々のような女房を持てて儂は幸せもんじゃあ。」

「はいはい。私もお前様のような旦那様に娶って頂き、幸せですよ。」

でも、敵国に潜入するなんて、危ないで御座いましょう?。」

「そりゃあそうだな。じゃが、その様な危険を犯してでも為さねばならぬ大切なお役目じゃ。それだけ期待をして頂いてるわけじゃし、張り切つて務めを果たせねばのお!。」

「……その割には、気が向いて無さそうですが?。」

「…何故そう思った?。」

「何となく、女の勘というやつで御座います。」

秀吉が後ろに顔を向けると、寧々の澄まし顔があつた。

世が変わつてもこの女房にだけは敵わぬと思い、秀吉の口許に笑みが浮かぶ。

「なるほど女の勘か。そりゃあ、バレても仕方ないわにゃあ。」

「……何か気がかりな事でも有るのですか?。」

「…うんにゃ、なんにも。せつかく寧々と夫婦となれたのに、こうも早々と家を開けることになり、少々信奈様を恨めしく思うてしまっただけじゃ。」

どこか誤魔化したような物言いであつたが、秀吉があまり話を続けたく無さそうなのを察し、寧々はそれ以上追及しなかつた。

その事を秀吉も察し、改めて自分には勿体なさすぎる女房を得たと感じ入つた。

「ああ、ええ具合じゃつた。よしつ!今度は儂が寧々の苦勞を揉みほぐしてやろう。」

「いえ、旦那様にそんな…」

「構わぬ構わぬ。儂が居らぬ間この家を守るのは寧々じゃや。その労に報いさせてくりゃあ。」

「もう、分かりました。それではお願い致します。」

そう言つて寧々がうつ伏せになると、秀吉は横に付き優しく背中を揉みほぐして行く。

「どうじゃ具合の方は?。」

「ええ。とても気持ち良いで御座います。それにしても、姫様は随分と美濃にご熱心なので御座いますね。」

「うむ。美濃は東西南北に広がる陸路の交差点じゃからのう。ここを

押さえられるかどうかで、天下の動静が大きく変わるんじゃない。」

「そうなのですね。でもそれなら、何故マムシ殿は全国の要所を押さえながら天下に挑まれなかったのでしょうか？」

「マムシ殿は美濃一国を手にするのに大分時間を掛けてしまったから。一平民の難しさというやつじゃ。あとは要所を押さえても、それを生かす伝手や財力が足らなかった。」

「それらは既に姫様はお持ちになられている。だから天下を目指すにはあとは美濃が必要。だから御執着されているというわけですね。」

「うむ、その通りじゃ。」

道三はその生涯の大半を美濃一国を手に入れるのに費やした。無論、その功績は一浪人が成し遂げた事としては破格だが、当初目指していた天下の夢には到底届かなかった。

その点で言えば、守護代の分家とはいえ先代から国内有数の貿易港を継承した信奈は、スタート地点から道三の先を行っていた。

秀吉としては必ずしも絶対ではないと言いたいが、天下を望むには生まれの良し悪しは欠かせぬ要素である。

「そう聞くと、庶民にはなんとも世知辛い話で御座いますね。って、お前様！さつきから何処を揉んでるのですか!？」

秀吉の手は寧々の腰の下、丁度臀部の部分の肉を掴んでいた。

「ん？いや、なに。明日から暫く御無沙汰になるのでな。今日はじつくりと寧々のココをほぐしておこうと思ってる。」

「だからってこんな昼間から。せめて日が落ちてから…ヒヤンツ！」

寧々の言葉を無視し、秀吉は着物の裾を目繰り上げる。

この時代、女性は基本的に下着を身に付けない。

故に、発展途上の若き白桃が頭となった。

秀吉はゴクリと唾を飲む。だが、焦ってはならない。

最初は擦る様に。そして徐々に力を入れて揉み下していけば、若き白桃はホンノリと赤みを帯び、持ち主の口からは幼さを残しながらも甘く、僅かに艶を含んだ声が漏れ始める。

そうして己の指を押し返そうとする白桃の張りや弾力を楽しんだ秀吉は、頃合いを見計らい桃の割れ目に手を伸ばす。

その奥に潜む不揃いの茂みを擦ってみれば、甘い悲鳴と共に粘り気の有る蜜が秀吉の指を濡らす。

頃合いじやの。

指に着いた蜜を舐めると、秀吉はおもむろに己の金時様を取り出した。

「…………お前様は助兵衛に御座います。」

「うん？寧々は助兵衛な儂は嫌いかの？」

「…嫌いではありません。もう諦めました。だから、一つだけ寧々の願い叶えて下さい。」

「なんじゃ？何でも申してみよ。」

うつ伏せになった寧々の口許に耳を寄せれば、寧々は熱っぽい視線と共に囁いた。

「寧々に、お前様の赤ちゃんを産ませて下さい。」

瞬間、秀吉の全身にゾクゾクとした快感が走る。

ああ、これだから。幾つもの色を味わおうと、どれ程世が移り変わろうと、紛れもなく天下一女房はこの女なのだ。

「…ああ、勿論じや。で、何人じゃ？」

「え？」

「だから、寧々は何人儂の赤子を産みたいのじゃ？」

秀吉の問いに恥じらい顔をした寧々であったが、14歳の若妻は大して時間をかけずに答えを口にした。

「…いっぱい。」

「…そうか。ならば、いっぱい愛してやらねばのうっ!!」

「あんっ!？」

その日、若き劣情に任せた新婚夫婦の営みは夜分遅くまで続き、互いがどれ程相手を愛しているか存分に確かめ合ったのであった。

なお、夜遅くまで隣夫婦の睦言の声を聞かされた隣人が、翌日完全な寝不足顔で現れる事は流石の秀吉も予想だにしていなかった。

西美濃は菩提山の頂上に築かれた菩提山城。

その離れに作られた小さな庵に二人の人物がいた。

一人は長身の若侍で、縁側に寝そべり酒を嗜んでいる。

もう一人は、青みがかった銀髪を左右で結んだ小柄な少女である。

彼女は縁側の若侍を気にした素振りもせず、黙々と手元の軍法書に目を走らせていた。

二人の間に会話はなく、然れど不思議と気まずさのない独特の空気が流れていた。

そうしている内に、不意に少女は書から顔を上げると、ゆっくりと立ち上がりフラフラと縁側に出てきた。

「どうした、なにかあったか？」

「…………誰かから呼ばれた気がしました。」

少女に若侍が尋ねると、心あらずといった様子で少女は答える。

「誰かとは、誰だ？」

「…解りません。でも、どうしてか懐かしく、昔から知ってる人のような気がするんです。」

少女が見つめる先は南。その先には尾張の国があった。

「あなたはいつたい、誰なんですか？」

少女の声に答える者が現れるのは、もう間も無くである。

今宵はこれまでに致しとう御座ります。

近江喜太郎

美濃の国は稲葉山城。

建仁元年、鎌倉幕府の文官にして十三人の合議衆が一人、二階堂行政が現在の岐阜県岐阜市金華山の山頂に砦を築いたのが始まりとされるこの城は、一度廃城された後に十五世紀中頃、美濃守護代の斎藤利永によって修復され居城とした。

その後、長井利政こと後の斎藤道三が主君に謀反し奪い取って以来、美濃齋藤家の拠点として今に至る。

その稲葉山城下、井之口の町に信奈の命を受けた秀吉と良晴はいた。

「ふう、ようやく着いたのう。さて、早速御勤めを果たさねばならぬのじやが、大丈夫か良晴?」

「…ああ、なんとか。おえ。」

妙に肌艶の良い秀吉が心配そうに尋ねるが、反対に良晴は顔色悪く、時折気持ち悪そうに嘔吐していた。

美濃を目指して長良川を遡上していた船上で、完全に舟揺れにやられてしまったのだ。

良晴は別段、乗り物に酔いやすいという訳では無いし、何なら以前舟で美濃にきた際も特段体調を崩す事は無かった。

ただ今回は、前夜に隣部屋から聞こえて来る男女の営みの音色に付き合わされ、睡眠不足になった事が諸に影響してしまっていたのだ。「本当に大丈夫で御座いますか、相良殿?無理なようでしたらしやきに宿をとってえやしゅんでいただいても。」

語尾を噛みまくりながら気遣うのは、秀吉配下の蜂須賀五右衛門である。

彼女は今回、秀吉達の護衛として同行している。

格好も普段の忍装束ではなく、周りに合わせて町娘の装いである。

そしてもう一人、よく日に焼けた屈強な大男が三人の後ろに控えている。

「うおおおっ!親分の舌っ足らずマジ最高うっ!!」

訂正。日に焼けた屈強なロリコン、もとい露瀉魂であった。

男の名は前野長康。

長良川を拠点に水運や船舶の護衛を担う川賊、『川並衆』、その頭領である五右衛門に次ぐ地位にある男である。

見た目の厳つさに比例し腕っぷしは強く、五右衛門に代わって実質的に川並衆の実務を纏めあげる統率力もある。

そしてその本質は、人の心さえ荒みきった戦国の世に、一時の潤いと暖かみを与える純真可憐な幼女を愛でんとする、露瀉魂だ。

念のために言っておくと、長康は幼気な少女に直接的に手を出すことは無い。

彼ら露瀉魂にとって幼女はあくまでも慈しむ存在であり、それに手を出すことは露瀉魂と言う名の紳士の風上にも置けぬと嫌悪する行為である。

なお、某サルが言うには、『股から血が流れて子供が作れるように成ったなら、さっさと嫁いでバンバン子供作りするべきじやろに。』との事。

18歳以下は子供だと見なし、子供の権利等で少児婚を規制する動きは近代の先進国の流行りである。

女は若くて元気な内に沢山子供を作っておくのが戦国というか、割りりと最近までの世界的な常識であった。

なので子宝に苦労した秀吉からすれば、信奈をはじめとした織田家の姫武将達が子供作りどころか婚姻さえ結んでいないのは、結構本気で心配している事柄なのである。

閑話休題

「良晴がこの調子じゃと、本格的に動くのは明日からが良いじやろ。五右衛門、良晴を連れてどこか適当な宿を取っちくれ。儂は長康と先に確認せねばならぬ事があるでな。」

「承知いたしました。相良殿、歩けますか?」

「ああ、何とか。」

「よし、では昼過ぎになったらまたここで落ち合おう。良晴も、それまでに体調を治すが良い。では長康、行くかの。」

「おう。おい小僧、親分に変なまねしたら許さねえからな。」
顔を青くする良晴に凄むと、長康は秀吉と共にその場をあとにした。

「さて、それでは相良殿、我々も行きましょう。」

「ああ、とにかく今は早く宿を取って横になりてえ。」

フラフラとした足取りながら、良晴は何とか歩み始めた。

井之口の町に入ると、そこは良晴が想像していたよりも遙かに賑やかだった。

商店の店子達は声を張り上げ呼び込みをし、行商と思しき者達は盛んに往来を行き来し、街角の広場では旅芸人達が観客を相手に芸を披露して喝采を浴びていた。

つい最近まで、国を二分する争いが起きていたとは思えぬ盛況ぶりである。

「なんか、思ってたよりも栄えてんな。ママシのおっさんがいなくなっただうなっただろうって、気にしてたけど。」

「そうでございますな。往来を歩く人の顔が明るい。そういう国は良い国でやと、父も言っただけおれやましゆてや。」

「これなら、すぐに宿も見つかりそう「うわっ!!」ぐほっ!」

「相良殿?!」

町の様子を見渡しながら歩いて良晴に、路地裏から走って出て来た長身の男が激突する。

男は衝突を避けようと咄嗟に体を捻ったが、そのせいで肘が良晴の鳩尾に突き刺さり、余計にダメージを与える結果となってしまう。

「す、すまねえ兄ちゃん!大丈夫か?」

「相良殿、しつかり!」

「うぐぐぐ…」

悶絶する良晴を男と五右衛門が介抱するが、良晴には返事をする余裕さえなくなっていた。

「おいてめえっ! やつと追い付いたぞ。」

そうしていると、また新たな乱入者が路地裏から現れた。姿を見せたのは、見るからに人相の悪い破落戸風の男。

その後ろには、似たような容姿の男達が三人続いていた。

「げえ、太郎丸の旦那。」

「おいこら、てめえ今回の件どう落とし前着ける気だ？おおうっ！」

「いや、少し落ち着けて。そうカッカせず酒でも飲みながらゆっくり話でも。なっ？」

「ふざけてんじゃねえぞ！この野郎っ！」

宥めようとした結果、余計に相手を怒らせてしまった長身の男は、ジリジリと後ろに後ずさる。

すると、破落戸風の男達の目が良晴と五右衛門に向けられた。

「何だこいつら？てめえの連れか？」

「いや、違うー！そいつらは…！」

長身の男が釈明するよりも早く、破落戸は脂汗をかく良晴の襟首を掴み無理やり立ち上がらせると、己の眼前で揺さぶった。

「なんだあつ！このガキ、顔青くしてやがる。ビビって返事も出来ねえのかあ？」

「やめてくれ、旦那！そいつらは本当に何も関係無い。ただ俺とぶつかっちまっただけなんだ！」

良晴を嘲笑う破落戸を長身の男は必死に止めようとするが、破落戸どもは完全に良晴達をいたぶる対象と見ており、五右衛門にも下卑た視線を向けていた。

それを受け、五右衛門は密かに俵させた忍具に手を伸ばす。

さて、ここで一つ想像して欲しい。

この時、良晴は船酔いで気分を悪くしている。

陸に降りて多少回復したとはいえ、完全に体調を取り戻したとは言い難い。

そんな状態で腹部に肘鉄を入れられ、悶えているところを無理矢理立ち上がらされ、首元を掴まれ揺さぶられる。

果たして、この後どうなるだろうか？

「お、お、お…」

「あん？」

当然こうなる。

「…ああ、俺も問題無い。」

「決まりだな。おっと、自己紹介がまだだったな。」

そういうと長身の男は、どこか芝居がかった所作で胸を張り、己の名を名乗った。

「俺の名は近江喜太郎。しがない地侍だ。よろしくな。」

これが相良良晴にとって、長きに渡る因縁を結ぶ事になる男との出会いであった。

「へえ、良晴達は行商人なのか。尾張からは舟でか？」

「ああ。川並衆に護衛をしてもらったんだ。」

「なるほど。あいつらは金さえ払えば大抵の事は請け負ってくれるからな。って事は、お前ら結構稼いでんだろ？」

「い、いやあ、ぼちぼちな？」

良晴達一行は、喜太郎が紹介する店へと来ていた。

店は飯屋と宿屋を兼業しており、店内のいたるところから注文が飛んでいる。

そうしていると、店員の娘が良晴達の前に皿を出す。

「はい、こちら鮎の塩焼きです。」

「おおっ！来た来た。美濃に来たなら、長良川で獲れた鮎を食わなきゃな。さあ、俺の奢りだ。遠慮無く味わってくれ。」

「お、おう。そんじや頂きます。」

喜太郎から促され、良晴は鮎の身にかぶり付く。

最初を感じるのにはパリツとした皮の食感。そして、ホロホロと崩れる柔らかな身。

噛めば噛むほど溢れ出る旨味。そして、鼻を抜ける川魚とは思えぬ爽やかな香り。

水質汚染とは無縁の清流に生える苔を食べて成長した鮎は、良晴が食べたあらゆる魚とも別物の一品であった。

「何だこれっ！マジでうめえなっ！」

「だろ、だろ！そんでこいつよ。」

喜太郎の手元には、いつ注文したのか、冷やの酒が注がれている。

喜太郎は鮎にかぶり付くと、しばし味わったあとに酒を口に運んだ。

「くううう、うめえ！長良川で獲れた鮎を肴に、美濃の蔵元で造られた酒を流し込む。これ以上の贅沢ありやしねえぜ。どうだ？良晴も一杯やらねえか。」

「ああ、悪い。ちよつと体調も回復しきれてないし、今日は遠慮しとくよ。」

「おつと、そうだったな。んじゃ、また次の機会に楽しもうぜ。」

申し出を断られたのにも関わらず、喜太郎は気を悪くした様子も見せず再び旨そうに酒を飲む。

その様子を五右衛門は、鮎を口にしながらも注意深く観察していた。

歳は良晴と同じくらいか。

背は良晴よりも一回り高く、細身ではあるが良晴を肩に担ぎながら疾走出来るだけの体力がある。

目元も涼やかながら野性的な雰囲気のある顔立ちは、年頃の娘から視線を集めるには十分であろう。

軽薄で能天気な部分はあるが、所作には気品が見え隠れしている。本人はしがない地侍と言っていたが、もしかすると古くから美濃に

土着した武家の倅かもしれぬと五右衛門は予想した。

「ところで、喜太郎はなんであいつらから逃げてたんだ？」

「ああ、いや大した話じゃない。あの時お前がゲロ吹っ掛けた男、ありや太郎丸つつう商人崩れの破落戸なんだがな、なんつうか……」

苦笑いを浮かべながら、喜太郎は酒を煽って質問に応える。

「あいつの嫁さんに手を出したのがバレちまったんだ。」

「いや、そりや完全にてめえが悪いだろうが！」

「でも、マジで良い女だったんだぜ。あんな旦那にや勿体無いって思っちまってよ。まあ、男の性ってやつだ。」

「しかも全然反省してねえ！」

まさかの告白に良晴は絶叫する。

五右衛門が喜太郎に向ける目も、一瞬でゴミムシを見るようなものになっていた。

「畜生う、危うくNTR野郎に心を許すところだったぜ。喜太郎！てめえは俺の敵だ！」

「まあまあ、そう言うなって。こうして巡りあったのも何かの縁だ。仲良くやろうぜ。ほら、お前ら行商人なんだろう。この辺の土地柄について、美濃生まれの俺が色々教えてやるって。そういうの、商売するなら結構重要だろ？」

喜太郎の申し出に良晴と五右衛門は顔を見合わせる。

今回、信奈から申し付けられたのは竹中半兵衛の調略。

そこで言うのと、半兵衛の所在地さえ分からぬ現状で、美濃に精通した情報提供者というのは非常に有益な存在だ。

いきなり半兵衛に繋がる事は無理でも、喜太郎から縁を辿って半兵衛に行き着ける可能性は十分にある。

「…そういう事なら、分かった。じゃあ、幾つか聞いてもいいか？」

「えらく聞き分けがいいなあ。まあ、いいや。何でも聞いてくれ！」

「さつき町を歩いてる時も思ったけど、結構賑わってるよな。つい最近戦が起こりそうになってたって聞いたけど。」

「まあ、そうだな。戦が未然に防がれたのと、御領主様が御所から一色家を名乗るのが許されたのが大きいな。」

「一色家？」

「なんだ知らねえのか。美濃の地は元々、土岐家が代々守護に任じられてきたんだが、齋藤家先代の道三が主君であった土岐頼芸を追放して、実質的に美濃での実権を握ったってのは知ってるよな？」

「ああ、それは聞いたことがある。たしか、そのせいで周辺国から警戒されて、京の公家からの評判も良く無かったんだよな。」

「そう。齋藤家は実質的に美濃を治めながらも、正式に守護職を任せられて無かった。けどちよっと前、齋藤家は有力な公家に多額の寄進を行い、幕府の名門『一色』の姓を名乗る許しを得た。要するに、金

で権威を買ったんだ。」

喜太郎の話す内容について、良晴は覚えがあった。

良晴と秀吉が道三の救出に動いた際、秀吉は多額の資金と京の公家との伝手を提供することで、道三の身柄を齋藤義龍から貰い受けた。

義龍はその時の資金と伝手を上手く使い、美濃を治める正統性を確保したのである。

「でも、幕府の権威なんて意味あるのか？ 將軍は京から追い出されて、実権なんて何も無いんだろ？」

「畿内から離れた田舎じや案外馬鹿には出来ないぜ。それに今回、一色家を名乗ることを許可するよう動いたのは、御所に在られるこの国で最も尊き身分の御方の周辺だ。歴史と権威しか無いハリボテと言う奴らもいるが、そのハリボテがとんでもなくデカイ。幕府の名門がどうかより、そういった御方の働き掛けがあつたって方が今回の場合は大きいんだよ。」

名目上とはいえ、この国の頂点として積み上げてきた歴史が重い、と言つて喜太郎は再び酒を口に運ぶ。

「あとはそうだな、道三が始めた『樂市樂座』を廃止したおかげもあるな。あれで大分景気が良くなったぜ。」

「はあ!? 樂市樂座を廃止い!? しかもそれで景気が良くなったって、どういう事だよ!」

良晴は思わず大声を上げてしまう。

樂市樂座といえば、織田信長が行った代表的な政策として義務教育で必ず習うものである。

実際には南近江の六角氏が信長より百年も前に実施しており、他にも似た政策は全国でも散見されている。

つまり『樂市樂座』自体は信長が考案した革新的な政策というわけではなく、齋藤道三も信長に先駆けて商人による独占的な商売形態である『座』を廃止し、関所を撤廃による物流の活性化を狙った政策を実施していたとされている。

現代知識として樂市樂座の概要を知っている良晴からすれば、自由な商売を促し経済を活性化させる政策を廃止して、それが景気回復に

繋がるのには理解が及ばなかった。

「まあ、簡単に言えば、楽市楽座のせいで粗悪品を売る輩が増えた。他国から来た奴らの中には、偽物やら盗品やらを我が物顔で売りやがる輩がいたんだ。座があった時はそういう輩が幅を利かせないよう、商人の間で取り締まりをしてたが…」

「座が解散させられたから悪徳商人が大手を振って商売をするようになった？」

「その通りだ。」

座というのは、特定の物品の商売を一部の商人達で独占する事で経済競争が妨げられるという一面があるものの、同業種間における相互協力組織として、最低限の品質の保証及び職種内の秩序維持という自警組織としての顔も持つ。

そこを廃するという事は、公正な経済競争を促せる一方で、未熟な市場では商品の品質低下や需要と供給の不均衡による価格崩壊を招き、市場の混乱に繋がる恐れがある。

「加えて関所を撤廃したせいで、木曾や越前方面から盗賊どもが入ってくるようになった。あいつら、国境の村を襲うと領主が兵を向ける前に国境を超えて逃げちまうんだ。」

「なるほど。国を超えてまで兵を送れぬと盗賊どもも理解してるのでごじやいますな。へちやをすればしよのままいくしゃになってしまいましゅ。」

「オマケに想定していたよりも有力な商人を集めることが出来ず、道三が期待していたような経済の活性化も出来なかった。」

「それはまたどうして？」

「単純に言えば、道三は信用されて無かったんだ。元々他国の出身、しかも家中で出世するために同僚の悪評を主君に吹込み失脚させたり、敵対者に和解がしたいと呼び寄せた挙げ句に毒茶を飲ませ暗殺したり、守護家の相続問題をかき回しまくって国を二分する争いを引き起こしたり、悪どい事をやりすぎてんだよ。特に、土岐頼芸を追放したときの顛末は城下にも知れ渡ってる。」

「土岐頼芸って、たしか先代の守護だった人だよな。」

「ああ、さつきも言ったが、美濃は代々土岐家が治めてきてな、名君は現れないが大きな失政も無いって感じで、無難に守護の役目をこなしてた。頼芸は土岐家の次男坊だったんだが、道三の策に利用され実の兄と家督争いをする事になり、それに勝って当主となった。しかし、実権は道三に奪われ、傀儡の身に甘んじていたんだ。」

「あれ？でもそれじゃ、道三はわざわざ頼芸を追放しなくてもよかつたんじゃない？」

「頼芸が良くても、周りが許さなかつたんだ。家中の反道三派は、水面下で頼芸を立てて道三を排斥する機会を窺っていた。道三も頼芸が美濃にいる限り、己の立場を脅かされ続けると考えたんだろ。だからと言って、強引に追い出したんじゃない、自分に靡いている国人達も流石に反発する。そこで道三は、頼芸が自発的に美濃を出ていくように仕向けたんだ。」

「…一体、どんな方法をとつたんだよ？」

「…頼芸が大切に飼っていた鷹、それを道三は八つ裂きにして、死体を頼芸の部屋に晒したんだ。」

「なっ！」

道三が仕出かした所業に良晴は絶句し、五右衛門も僅かに眉を潜めた。

「卵から孵し、自ら手塩をかけて育てた鷹を頼芸は我が子のように可愛がっていた。それを無残な姿にされ、頼芸は心の均衡を失い、逃げるかのように美濃から出ていった。だが、その姿が美濃の人々にある思いを抱かせたんだ。あまりにも、可哀想だと。」

「可哀想か…」

そう思うのも無理は無いと、良晴は思った。

良晴にとつて齋藤道三とは、信奈の義父であり、助平などころはあるが気さくで、芯の通った一流の策略家であり、後世にも名を残す優秀な戦国武将であった。

だが、道三と同じ時代を生きた人々にとっては、必ずしも尊敬すべき人物とは限らない。

むしろ、同じ時代を生きたが故に闇を垣間見た者や、直接的な被害

者達にとつては、憎くておぞましい悪人こそ、道三の真の姿であつた。「道三みたくない悪人には手を貸せない。そう思われたんだな…」

「そうだ。そもそも楽市楽座自体、家臣や領民には反対されたが強行した挙げ句にこの様だったからな。とどめとなつたのが織田信奈への国譲りだ。戦に負けたのならともかく、一戦も交えずしてうつけ姫に美濃の地を明け渡すと言つた。これによつて、道三は美濃の人々から完全に見限られた。その結果、今度は自分が追放されたつて訳さ。」
「虚しい話だな。ところで今の領主、義龍はどうなんだ？」

「ん？評判はいいぜ。道三時代の悪政は廃止し、それまで道三に反発していた国人や商人達とも詫びを入れて和解し、合議制を取り入れる事で家臣団の意見を積極的に採用するようになってな。それで、この前起きた織田との合戦で完勝し、国内外に武威を示した事で領民達の支持も磐石なものにしたわけさ。」

「ツ！なあ、その戦、齋藤は軍師の策を使つて織田を撃退したんだろ？」

「あ？軍師？」

「ああ、聞いた噂じゃ、竹中半兵衛つて軍師が齋藤家にはいるそうだけど、そいつが織田を撃退する策を考えたんじゃないかって…」

竹中半兵衛の名を出したその一瞬、喜太郎の目がキラリと光つた。そこに込められた僅かな殺気を感じとつた五右衛門は身を固くするが、すぐに喜太郎は先程と同じ機嫌良い笑顔を見せていた。

「へえ、思ひのほか半兵衛の奴も有名になつちまつたんだな。お前らみたいな商人にも名が知られるとは。」

「知つてんのか!?半兵衛のこと！」

「ああ、あいつと俺は昔馴染みだよ。興味があるのか？半兵衛に…」

「え？あ、ああ。まあ、今川に勝つて勢いのある織田に完勝したんだ。いったいどんな人なのかつて興味が「おいつ！居やがつたぞ！」っ！あいつら!!」

不意に外から聞こえた叫びに何事かと視線を向ければ、そこには喜太郎を追つていた破落戸の一人がいた。

「やつべー！おい、裏から逃げるぞー！」

言うが早いか、喜太郎は机に銭を置くと店の裏口に向かつて駆け出し、良晴と五右衛門も慌ててそれに付いていく。

店の人間が驚く顔を尻目に裏口から出ると、路地裏へと続く道は荷物で塞がれ、袋小路となっている。

喜太郎は舌打ちをすると残された道、表通りへと続く道へと走る。しかし：

「よう。ようやく会えたな、この野郎。」

「ぐつ、太郎丸の旦那…」

路地から出た先には、太郎丸とその取り巻き達が待ち構えていた。

太郎丸は喜太郎の首に手を回し路地から引きずり出すと、挨拶代わりに鳩尾に一発喰らわせる。

「まったく、手を掛けさせやがって。ちいとばかり痛め付けるだけにするつもりだったが、もうそれだけじゃ気が済まなくねえなあ。」

「旦那！奥にこいつの連れがいやしたぜ！」

「おう、そいつらにもゲロぶっかけられた礼をしなくちやいけねえからな。ちゃんと見張つとけ。」

明らかに先程とは違う剣呑な雰囲気、破落戸どもに、良晴の脳内の警鐘が激しく鳴り響く。

下手な対応をすれば、喜太郎のみならず自分達も不味い事になるのが目に見えていた。

「わ、悪かったよ、さつきは。この通り謝るし、汚した服も弁償するからさ。ほら、喜太郎も謝れって。」

良晴としては、人妻に手を出した喜太郎が全面的に悪いのは言うに及ばずだが、先程まで親切に美濃の内情を教えてくれた件で少なからず情というのも沸いている。

なので、痛い目を見るのは仕方ないにしても、せめて命くらいは助けてやりたいと、喜太郎に助け船を出した。

それを見た太郎丸は、嫌らしい笑みを作った

「良い連れを持ってんじゃねえか。良いぜ。てめえが誠心誠意謝罪して、俺の女の居場所を吐くんなら、命だけは勘弁してやんよ。」

「女の居場所？」

太郎丸の言葉に良晴が疑問を覚える。

すると、腹を押さえ据っていた喜太郎が太郎丸を見上げた。

「それ聞いて、女房を見つけたら、あんたどうすんだ？」

「決まってるんだろ。躰なおすんだよ。今度は俺以外の男に股開かないように徹底的にな。」

「…一応、まだ挿れては無いんだけどな。なあ、旦那、あんた以前から女房を外で必死に稼いできた金を、勝手に賭場で使ってたそうじゃねえか。しかも少しでも抵抗したら、手を上げてたとか。」

「それがどうした？自分の女が稼いだ金をどうしようが俺の勝手だろうが。」

「…申し訳ないとは思わねえのか？」

「あん？なんでそんな事を思わなきゃならねえんだ。こっちは身寄りの無いのを女房にしてやってんだ。女郎に落とさねえだけ有難いと思つて欲しい位だ。」

この時代、女が一人で身を立てるのは非常に難しい。

姫武将という存在はあるが、それになるのは武家の血筋を引いているか、男以上の武威と才を示せる女に限られた。

「まったく、折角俺が情けをかけてやってるのに、こんなガキに絆されるなんてよ。アイツには自分の立場つてのをキチンと教えてやらねえとな。さあ、アイツの居場所を吐け！」

「断る！」

太郎丸の恫喝に、喜太郎は即答する。

そして気合いを入れて立ち上がると、正面から太郎丸を睨み付ける。

その威容は先程までとは打って代わり、太郎丸の後に控える破落戸共を後退りさせる程であった。

「俺は良い女と旨い酒を愛してるんだ。だからそれが粗末に扱われてるのは我慢ならねえ。いいかこの野郎。あの女はお前には勿体無さすぎるほど良い女なんだ。たとえこの身が長良川に浮かべられようが、お前だけには渡してやるもんかつ！」

力強く足を踏み締め、腹の底から響く声で啖呵を切る喜太郎に、先

程までの軽薄な雰囲気は無い。

そこにあるのは、己の譲れぬものの為に命を張ろうとする漢の生き様であった。

「…そうかよ。折角慈悲を与えてやったつてのに無為にしやがって。そんなに死にてえのなら、望み通りてめえの死体を長良川に流してやらあつ！」

喜太郎の気迫に一度は気圧された太郎丸だったが、すぐに怒りの形相を浮かべ喜太郎に詰め寄ろうとする。

しかし、掴み掛かろうとした喜太郎の隣に人影が並んだのを見て動きを止める。

良晴であった。

「おい、良晴。なんの真似だ？」

「うるせえ。言っとくけど、俺はモテるイケメンは嫌いだし、NTR野郎なんて滅んじまえて思ってる。けどよ…」

困惑する喜太郎の問いに不機嫌そうに答えながらも、良晴は拳を構えた。

「好きなものを護るために命を張ろうとする奴は、まあ嫌いじゃない。それに約束しちまったもんな。」

「約束？」

「言っただろ。酒は次の機会だつて。ちゃんと覚えとけよ。」

良晴の答えに一瞬呆気にとられた様子の子の喜太郎だったが、すぐに端正な口元に笑みを作り、快闊な笑い声を上げた。

「ああつ、任せとけ！美濃で一番上等な酒を味あわせてやんよ。」

「てめえら、人を馬鹿にしやがって！」

良晴と喜太郎のやり取りに我慢の限界が訪れたのか、太郎丸は俗にドスと呼ばれる小刀を抜き、その切っ先を良晴達に向ける。

他の手下達も各々手持ちの武器を良晴達へ向けた。

「もう許さねえ！てめえら二人とも望み通り長良川に軀を浮かべてやらあー！」

「ん？俺たち二人つてことは五右衛門は見逃してくれるのか？」

「はんつ！そっちの小娘は人買いに売るに決まってるだろ。見てくれ

は良いからな。まあその前に、俺たちでたつぷりと味見させてもらうがな。」

そう言つて下卑た視線を五右衛門に向ける太郎丸に、五右衛門のみならず良晴や喜太郎までも嫌悪感を顕にする。

「おいおい、まだ月のモノも来てるか分からない小娘をどうこうするのは流石にどうなんだい、旦那。」

「ふん、そういう物好きは案外多いんでな。安心しな、まずは俺達がたつぷり可愛がつて具合を確かめ「おい。」あん、なんだ？引つ込んで…」

言葉の途中に割り込まれた太郎丸は、不機嫌そうに声の主の方を向いて怒鳴り付けようとするが、相手を確認めると途端に顔を青くした。

「何やら騒ぎが起きてると報せを受けて駆け付けてみれば、御主ら此処が一色家の御膝下である事を知つての狼藉か？」

「いや、ええと、それは…」

現れたのは上り藤の家紋が入った正装を身に纏った老父である。老父と言えど、その肉体は服の上からでも分かるくらいに筋肉で盛り上がり、破落戸共を睨みつける視線には殺気すら感じる迫力があつた。

また、その後ろには配下の者が二十ばかりいる。

すると喜太郎は、待つてましたとばかりに大声を上げた。

「うわああああ!!助けてくださいえっ!こいつら、俺たちを殺して女を攫うつて。」

「なっ?!てめえ!」

現れた武士団に対し、喜太郎は情けない声色で助けを求めると太郎丸は慌ててそれを止めようとする。

だがそれよりも早く、武士団の男衆が手際よく太郎丸とその配下を拘束していった。

「くそ、放しやがれ!」

「お主ら、楽市があつた頃に入り込んだ他国の行商の崩れであろう?それがこのような場所で騒ぎを起こして逃れられると思つたか?神

妙にお縄に付け！」

「ち、ちげえ！俺たちは…」

太郎丸が言葉が続けるより早く、老父の拳が太郎丸の鼻っ面を抉った。

とても老人が放ったそれとは思えぬほどの重い一撃は、容易に太郎丸の鼻骨をへし折り、吹き出た鼻血が顔面を真っ赤に染め上げる。

その光景に手下たちは抵抗する氣力を失い、項垂れるようにして手を縛られていく。

その様子を手に着いた血を拭きとりながら眺めていた老父は、鋭い視線をそのままに喜太郎達の方を向けた。

「さて、それではどのような顛末があつたのかお聞かせ願えますかな？」

その問い掛けに一瞬ビクリと身を跳ねさせた喜太郎であつたが、老父に近づくと耳に口を寄せ何やら囁き始める。

それを聞いて老父は眉にしわを寄せ不審げに良晴たちを見つめるが、再び喜太郎が囁くと、最後には大きくため息をついた。

「分かりました。では、お主たちもうよい。もう騒ぎを起こすではないぞ。」

そう言い残すと、老父は配下達と縄を打たれた破落戸共を従え、稲葉山城の方へと去つていった。

それを唾然として見送つていた良晴に、喜太郎が明るい声で話しかける。

「いやー、何とかうまいこといったな！」

「えっ!?! いったい何が?」

「ん? ああ、大通りから外れているとはいえ、こちら辺もそれなりに人の出入りがあるからな。大声で騒ぎ立てれば警邏が寄ってくるだろうとは思つたのだが、まさか伊賀守殿直々に現れるとは…」

くつくつと笑う太郎丸を見て、良晴もようやく合点がいった。

要するに、喜太郎が太郎丸たちに対して行った口上は、騒動が起きていることを大声で周りに知らせ、警邏兵が駆け付けるまでの時間を稼ぐための策だつたのだ。

それに気づいた良晴は、全身がどつと疲れるのを感じた。

「なんだよ、そうだったのか。俺はてつきり覚悟決めて戦うもんだと…」

「はっはっは、あいにく俺の剣筋は鈍らでな。人なんて切れるわけがない。その分、小賢しく頭を使っただけよ。」

あっけからんな喜太郎の笑顔に、良晴の口の端にも笑みができる。軟派で軽薄さを隠そうともしない楽天家な男であるが、陽気でいて妙に誠実ながら抜け目無いところは秀吉とも通じる部分があり、良晴に親近感を覚えさせていた。

すると、良晴たちに向かつて歩み寄る影があった。

「おーい良晴。なんぞ騒ぎに巻き込まれたのか？」

「あつ、秀吉さん。」

現れたのは街の入り口で別れた秀吉である。

どうやら喜太郎たちが起こした騒ぎを聞きつけ様子を覗い参ったようだが、その中心に良晴たちがいたことに驚いた様子である。

一方で良晴は、秀吉に同行していたはずの前野長康の姿が無いことに疑問を覚えるが、それを口に出すより早く秀吉の目がぎよろりと喜太郎を捕らえた。

「良晴、この御仁は？」

「ああ、近江喜太郎って言ってさつき知り合っただ。」

「お初にお目にかかる。近江喜太郎と申す。しがな地侍の倅にてよしな。」

「…ふむ。木下秀吉と申します。我が同行人が御迷惑をおかけしたようで、何卒お許しを。」

「いやいや、むしろ俺が迷惑をかけた方で助けられたくらいだ。何か礼をせねばと思ってるのだが…そうだ！良晴、お前竹中半兵衛に会いたがつっていたな。会わせてやろう。」

「えっ、マジでっ?!出来るのか!?!」

「ふふん。言っただろ。家同士の付き合いで俺も半兵衛とは旧知の仲だ。どうする?」

喜太郎からの問いかけに良晴は秀吉を見る。秀吉は暫し思案した

のち、黙って良晴に頷いて見せた。

「分かった。竹中半兵衛に会わせてくれ。」

「よっしゃ。そんじゃ、明日の朝、さっきの飯屋の前に来てくれ。半兵衛の庵に案内してやるよ。俺はこれから、この旨を半兵衛に伝えてくる。また明日な！」

そう言つて背を向けた喜太郎は、陽気な足取りで人波に消えていった。

「…良晴、喜太郎殿についてだが、一応警戒しておいた方が良いでしょう。…やっぱそうだよな。いくら古くからの地侍だからって、いきなり半兵衛に人を紹介できる奴が只者のわけが無いよな。」

「いかにも。しかし、近江喜太郎か…」

「ん？何か心当たりでも？」

「多少な。だがもしそうだとすると、あの御仁は少々厄介なお方かもしれないぞ。」

そう言つと、秀吉は喜太郎が消えていった雑多をじつと見つめた。その先には、稲葉山の山麓に山城が聳えている。

稲葉山城の台所の勝手口が、音を立てぬようゆっくりと開かれる。裏手門に通じる裏道に面した戸を開けて入ってきたのは、先程良晴たちと別れたばかりの喜太郎である。

喜太郎は頭だけ戸口から出し、キョロキョロと辺りを見渡す。

丁度昼餉が終わつて暫くした時間であり、台所番達は休憩の為姿が見えない。

誰もいないことを確認した喜太郎は、しめしめと忍び足で台所へと入つていった。

「お帰りなさいませ、若様。」

忍び込んだ喜太郎の死角から、唐突に彼を呼ぶ声が聞こえた。

ぶわりと汗が噴き出る感覚に襲われながらも喜太郎がぎこちなく振り返ると、豊満な肉体の女中が眉を怒らせていた。

「お、おう、お猪ではないか。奇遇だなこんなところで。」

「奇遇などでは御座いませぬ。また若様が城を抜け出したと飛驒様が騒がれてましたから、どうせ勝手口から帰ってくると思つて待つておりました。」

「ははは、流石俺の女中だ。俺の考えなどお見通しだな。」

「何を呑気なことを。あまり飛驒様に苦労をお掛けなりませぬよう。あの御方も明智様がいなくなつてから苦心されておられるのですから。」

「ああ、分かつてる分かつてる。そうだ、爺様と戦になりかけた時、織田が使わせた交渉役は猿顔の小男だったそうだな。」

「…ええ、御殿様と直接お話しした所を見た方はそう仰られています。」

「それと、織田と同盟を結んだ時に爺様を説き伏せたのは相良という男だったと十兵衛が申しておったな。」

「確かにそのような話をされてましたが、どうして今そのようなお話を？」

「くくく、いやなに。なかなか面白いことになつてきたなと思つてな。」

そう言つて笑う喜太郎の目は細まり、どこか蛇を思わせる怪しい光を纏つていた。

「…若様、若様のご気性は我々もよく存じております。さりとしてどうか、ご自分の御立場というものを今一度自覚してくださいませ。貴方はこの一色家の御嫡男であらせられるのですから。それと…」

今まさに台所から廊下へと繋がる戸を開けようとした喜太郎の首根っこを、お猪はガツシリと捕まえた。

「話を逸らして逃げようとしてもそうはいきませんよ。さつ、広間に参りましょう。伊賀守様からお話を聞いて、御殿様たちが首を長くして待つています。良いですね、龍興様？」

「…はい。」

万事休す。もはや折檻は逃れられぬと察し、近江喜太郎こと一色龍興は力なく項垂れた。

今宵はこれまでに致しとう御座ります。

運命の名

「相良良晴と木下秀吉に御座いますか？」

「ああ、そうだ。明日お前に引き合わせようと思うのだが、どうだ、半兵衛？」

昼間に良晴達と出会い、竹中半兵衛と会わせる約束をした一色龍興は、その日の夕刻に菩提山城の離れにある半兵衛の庵に来ていた。

その頭には父のゲンコツによる大きなたん瘤が出来ており、時折痛みで顔を歪めている。

「…あの、龍興様、たぶんその二人と言うのは…」

「分かっている。間違いなく織田の人間だ。恐らく美濃への再侵攻に先駆け、調略にでも来たんだろう。」

「それが分かっているながら、なぜ？」

半兵衛と龍興は古い付き合い、それこそ幼少期からの既知の間柄である。

とある出来事により、家中では互いに嫌いあつてしていると噂される事もある二人であるが、実際には時折相手の居所に顔を出し、話をするくらいには良い関係を築いている。

とは言つても、大抵は諸事をほっぽり出して城を抜け出した龍興が避難所として半兵衛の庵に転がり込むのがほとんどであり、そのため幼馴染の御曹司が不仲説を放置している向きがあると半兵衛は見ている。

故にそろそろ夕餉でもと思つていた時間にたん瘤を拵えた龍興が上がりこみ、食事を共にするとの名目でちやっかりと自分の分の夕飯にあり付いたのも、また城で何かやらかして逃げてきたのかと思つていた所に先の会話である。

半兵衛からすれば、腑に落ちないと言つた心境である。

一色龍興という人間は、好き勝手に生きていて意外と機微に敏く、特に女性に対しては殊更気を使う気質である。

半兵衛に人並外れた対人恐怖症があるのも当然知っており、無理に出仕を迫る事が無いどころか、半兵衛など必要ないと公言し城から遠

ぎける配慮もするほどだ。(もつとも、そのせいで二人の不仲説が補強されるのだが。)

そのため、いきなり見知らぬ人間、それも敵対する国の間諜らしき人間と会うように言われても困惑が大きかった。

あまりにも龍興様らしくない。

そんな半兵衛の内心を予測してか、龍興は少しだけ身を乗り出すと真剣な目つきになった。

「実はな、そいつらお前の名を知ってたんだ。」

「私の名をですか?」

「ああ、先の織田との戦で織田軍を敗退せしめる策を練った軍師としてな。」

その瞬間、半兵衛の眼が俄かに見開かれる。そして口元を右の掌で覆うと、己の膝元に目を落としてブツブツと呟きながら思案に暮れだした。

時間にして十を数えた頃、半兵衛は龍興に目を戻すとゆっくりと口を開いた。

「龍興様、私が策を練っていたことは…」

「誰にも言ってねえ。あの策は親父が考案した事になってる策だ。お前がああ策を練った軍師であることを知ってるのはお前と親父、そしてお前から直接策を聞いた俺の三人だけだ。」

織田が美濃に侵攻してきた折、慌しくなった城内を抜け出した龍興はいつものように半兵衛の庵に上がり込んでいた。

呆れて苦言の一つでも言いたかった半兵衛であるが、自分も人の事を言える立場では無いため、諦めて溜め息一つ吐く他無い。

そんな半兵衛の心境を知ってか知らずか、龍興は思い立ったかの如く『お前だったらどうやって織田を迎え撃つ?』と話を向けた。

それに対し半兵衛が返した答えが、織田軍を霧の出やすい谷間に誘導し霧に乗じて先鋒を撃滅する策であった。

地図と駒を用いて説明を受けた龍興は瞬時に策の有用性を理解すると、詳細を詰めた策の内容を半兵衛に紙にしたためさせ、父である義龍に献策した。

その際、表舞台に立つことを嫌った半兵衛は自分の名を世に出さないことを懇願した。

もとより半兵衛の性格をよく知る龍興はこれを了承し、義龍にも同意させた。

これにより、織田軍を撤退に至らしめた策は義龍が考案し成したものであると美濃では周知されていた。

「にも拘らず、織田の人間が真の軍師は誰であるか見抜いていた。親父が口を滑らすとは思えねえ。」

「わ、私も誰にも話してません！」

「だよな。ならどうして良晴はあの策を講じたのが半兵衛だと知ったのか。気になって仕方がねえなあこりや。」

そう言つて不敵な笑みを浮かべる龍興に、半兵衛はようやくその真意を理解した。

「私にその者たちを見極めよと？」

「それが一つ、もう一つは勘だ。」

「勘？」

「そうだ。お前とあいつらを引き合わせたら、何か必ず面白いことが起きる。俺の勘がそう告げるんだ。」

「……あまり理に適っているとは言えませんね。」

「そりやそうだ。所詮ただの勘だからな。だが時として面白いということは、合理的であることよりも良い結果を生むこと事もあるんだぜ。」

その話しぶりから察するに、どうやら龍興の中では半兵衛と尾張からの間諜を引き合わせることは決定事項らしい。

とはいえ、半兵衛からしても自分の軍師としての姿を知っている者が他国にいるというのは、純粹に興味をそそられる事でもあった。

なにより、木下秀吉という名が無性に気になる。

「わかりました。明日、その方たちとお会いします。」

「ははっ、あんがとよ。けど意外だな。」

「意外ですか？」

「ああ、もう少しごねるもんかと思つてた。」

「……もしかすると、私にとって天命とも呼べる出会いがあるように思えましたので。」

「ああん？なんだそりゃ。」

奇妙な物言いに龍興が問いかけると、半兵衛は珍しく悪戯っぽい笑みを浮かべ答える。

「ただの勘です。」

伊吹山地の東端に位置する菩提山。この地の豪族であった岩手氏を滅ぼした竹中重元が菩提山の山頂に築いたのが、竹中氏の居城である菩提山城だ。

先の美濃国内の動乱において道三方についた重元は、義龍勢から城を攻められるも籠城の末これを退けている。

その後、道三が尾張に逃れてから間も無く、重元は義龍に降伏し隠居、それから暫くして病から此の世を去った。

家督を継いだ竹中半兵衛重治は、先代が主君へ槍を向けた禊として稲葉山城への参内を見合せると共に、居城ではなくそのすぐ近くに建てられた庵で生活している。

良晴と秀吉は、喜太郎に案内され庵へと続く山道を登っていた。

「はあはあ、おい喜太郎。まだ、着かないのか？」

「もうちよいだから確りしな。案外だらしねえんだな良晴。」

「うるせえ。ちよつと山道を歩き慣れてないだけだ！」

「へいへい、そうかい。おうい、秀吉は大丈夫か？」

「うむ、この程度であれば他愛なく。」

喜太郎からの問い掛けに答える秀吉。その表情は言葉通り涼しげで、良晴と違い山登りを苦にした様子は無い。

しかし、良晴はそんな秀吉に僅かな違和感を覚えた。

普段に比べれば言葉少なで、受け答えもどこか心非ずであった。

以前実家に里帰りした時とも似ているが、あの時醸し出していた後ろめたさとはまた違った様相である。

「秀吉さん、本当に大丈夫なのか？」

「うん、気遣い無用じゃ。」

心配する良晴の問い掛けにも何処と無く素っ気ない。

今日の秀吉は妙に人を遠ざけているようであった。

「見えてきたぞ。あれだ。」

そうこうしている内に、一行は山の中腹にある開けた場所に建てられた小さな庵にたどり着く。

素朴という言葉が似合う、喧騒とは無縁の空間であった。

「ここに竹中殿が？」

「ああ、中で待つてる筈だぜ。」

三人の先頭に立った喜太郎は、慣れた足取りで庵の玄関に向かい戸を開いた。

「よう半兵衛、俺だ。」

「…お待ちしておりました、近江様。お連れの方は？」

「後ろにいるぜ。さあ二人とも、入ってくれ。」

喜太郎に促され秀吉達は敷居を跨いで庵に入る。

そして、玄関の奥で正座をし、涼やかな笑みを浮かべる青年と相對した。

「御初にお目にかかります。竹中半兵衛重治に御座います。どうぞよしなに。」

「…木下と申します。」

「あっ、俺は相良良晴って言います。初めまして。」

言葉少なな秀吉と、少し緊張した様子の子の良晴と挨拶を交わした半兵衛は一行を奥の部屋へと案内する。

綺麗に片付けられた板張りの間へとたどり着くと、部屋には既に四人分の座布団が敷かれていた。

「いま茶を用意します。」

そう言つて一旦半兵衛は部屋を出る。

程なくして湯気の立った茶碗を載せた盆を持って帰ってくる。

「粗茶ですが。」

「…忝ない、頂戴致します。」

礼を言つて腕を口に運べば、程よい熱さが喉を通り、同時に爽やかな渋みと微かな甘さを含んだ苦味が鼻を抜けた。

「さて、お二方は私と話をしたいと聞いてますが。」

秀吉達が茶碗から口を離れたのを見計らい半兵衛が切り出すと、秀吉は「ふうむ」と顎を撫でた。

「確かに美濃にその人なりと噂される竹中殿と語り合いたいとは思っていましたが、こつとも都合良くお会い出来るとは思っておりませんでした故、いざ相對しますとどうも……」

「おや、そうでしたか。でしたら、改めて茶席でも用意いたしましたしよろか？」

「それも良きに御座いませうが、竹中殿は碁を嗜まれますかな？」

「碁、ですか？」

「はい。ほら、あそこに。」

秀吉が指し示した部屋の隅には、年代物の碁盤が鎮座している。

「……手慰み程度であります。木下様はお上手なですか？」

「いやいや、大したものでは。以前、とある御方に師事した事がある程度で。」

「なるほど。では、打ちませうか。」

「はい。打ちませう。」

そうして、竹中半兵衛と秀吉の碁が始まった。

庵にはパチリ、パチリという石が置かれる音のみが響き、居合わせた者達は黙つてその音に聞き入っていた。

程なく盤上が進み、白黒の模様が半分ほど埋めた頃合いに喜太郎が良晴の袖を引っ張つた。

「ん？どうしたんだ？」

「おい良晴、あいつはどこぞの良家の生まれか？」

「あいつつて秀吉さんか？いや、普通の農家出身だけど。」

「信じられぬ。これ程の打ち上手、美濃中を探してもそうは見つからぬぞ。」

「ええと、つまり秀吉さんが有利つて事なのか？」

囲碁のルールなど殆ど分からない良晴の問いに、喜太郎は大きく頷

いた。

「半兵衛に攻めさせた上で見事に捌いていやがる。まだ盤上の形は互角だが、先の展開を広げる道筋を幾つも作ってる。ほら、半兵衛の顔を見てみる。」

促されるままに良晴が半兵衛に目をやると、無表情を装っているが鼻の頭に汗をかき、耳の先は朱を帯び、今の半兵衛の心情を如実に表していた。

そうして終盤に差し掛かる頃には、対戦は指導碁の様相を呈していた。

秀吉の『これならどうする?』と問い掛けるような一手に、半兵衛が時間をかけて応えると、秀吉は更に問の一手を打って返す。

半兵衛も途中で投げ出す事をせず、一手一手粘り強く丁寧な答えを出す。

だがそれも、長くは続かない。

「……………参りました。」

半兵衛の口から出た言葉で対戦は終了した。

それを受け、秀吉は大きく息を吐いた。

「有り難う御座います、竹中殿。善き碁でした。」

「…いえ、私の方こそ。お強いのですね、木下様。」

「いやはや全くだ。お前さんともねえ爪隠してやがったな、この野郎。」

半兵衛と喜太郎が揃って賛辞をすると、秀吉は照れ臭そうに頭をか

く。
「はははっ、有難い御言葉です。さあ、それでは感想戦と参りましょう。ほれ、良晴も近こう寄れ。」

「えっ、俺も!?!」

「お主は石の置き方も知らんじやろ。儂らが教えよう。」

「お、おう。」

戸惑いながらも良晴が三人の輪に加われれば、検討会が始まった。

先ほどの対局の感想戦では「ここはこう置けば良かった。」「ここで悪手が次に繋がる展開に変わった。」などと経験者が盛んに意見を交

わし、次に未経験者の良晴に対する講義に移る。

初めは石の持ち方さえ覚え無い良晴であったが、熱を帯びた秀吉達の指導に当てられ、基本的なルールを覚えるに至り何となくではあるが囲碁の面白さに目覚め始めた。

そうして意外と筋が良いと褒められ調子に乗って喜太郎に挑んでみれば、赤子の如く捻られた。

悔しがる良晴を宥めつつまた検討をし、次は秀吉が喜太郎と打ち決着をつけてまた検討、それを繰り返していけば何時しか日は暮れ始め、翌日また何うと約束し、その日はそれで解散となる。

そうした碁盤を囲んだ若者達の語らいを、隠し戸の向こうで一人の少女が窺っていた。

「いやあ、初めて囲碁やってみただけど結構面白かったな。将棋と比べてもそこまでルールが複雑じゃねえし。」

「じゃろ？ 儂も最初は信長様の薦めで始めたんじやがすっかり嵌まってるう。本因坊にも習って本格的に碁を学んだんじや。」

菩提寺山からの帰り道、良晴と秀吉は宿を目指し歩きながら本日の会合について語り合っていた。

夕日が照らす二人の表情は実に晴れやかである。

秀吉にとっては今世に来て久しぶりに存分に碁を打った事の満足感、良晴は新たな娯楽に触れた事の新鮮味に満たされ、共に充実した高揚感に浸っていた。

「本因坊ってのは良く分かんねえけど、秀吉さんって碁が好きだったんだな。」

「まあ。ところで、四百年後でも碁は人気か？」

「うーん。あんまり普段は触れる機会が無いなあ。昔囲碁の漫画が流行ったけど最近はあるんだな。あつ、でも将棋だったら最近すごい天才が現れてブームになってるぜ。」

「ほう、未来では将棋のほうが人気か。儂も将棋は好きじやが、碁に比べるとどうも下手でのう。何とか勝てるよう色々工夫したのじや

が。」

「へえー、そうだったんだ。って、そうじゃねえだろ!？」

「うおっ、どうした突然!？」

思い出したかのように大声を上げる良晴に秀吉は驚き、どこか焦った様子の良晴に尋ねる。

「どうしたじゃねえよ! 結局今日一日暮をしてただけじゃんか! 調略の話はどうしたんだよ!？」

「……お主はアホか? 一色家の者が目の前にいて、どうして一色家の家臣を口説ける。」

「…あ。そういや喜太郎って一色の間人か。」

「まったく御主は。それに、あの男を調略する意味はない。」

そう言つて秀吉は少し不機嫌そうに鼻を鳴らした。

「竹中半兵衛があんなぬるい打ち方をするものか。」

その言葉に良晴は疑問符を浮かべるが、丁度その時二人の間に割つて入るように小さな人影が現れた。

「主よ、今戻りました。」

「うおっ!?! って、五右衛門かよ。」

現れたのは朝から姿の見えなかった五右衛門である。

どうしてこの場に彼女がいるのか問おうとした良晴であったが、それより早く秀吉が口を開く。

「首尾はどうじゃった?」

「はい。予想通り、裏手口とは別に屈んで入れるようにしてある小口が有りました。おしよらく、ありゆじたちがいちや部屋によ隣に隠しべひやがありゆのではなやいかと。」

五右衛門の報告に良晴の目が見開く。それと同時に先程の秀吉の言葉が頭の中で結び付いた。

「秀吉さんっ、もしかしてさつき会った半兵衛は!？」

「…お主の想像通りよ。まあ何、時間はたつぷり有ることじゃし、気長にいくかの。」

鳴かぬ相手を鳴かせるのは得意だが、時には鳴くまで待つのも悪くない、と秀吉は言う。

「元よりそう簡単に半兵衛と会えるとは思っておらぬわ。ここは一つ、内府殿に習うとするかのう。」

その翌日、秀吉達は昨日と同じように半兵衛の庵を訪れ、相も変わらず半兵衛と喜太郎と碁を楽しんだ。

次の日も同様だ。

思い思いに碁石を置き、時折盛んに意見を交わし、休憩時間には漢詩の訳しかたについて話したりもした。

それは、ある程度教養の有る者にとつては非常に心地好く、充実感に満ちた時間であろう。

そうした日々が五日ほど続いたある日、いつものように庵に着くと半兵衛と喜太郎以外にもう一人、色の白い小柄な少女がいた。

秀吉達にとつて初めて出会う、見知らぬ少女である。

しかし、秀吉だけは少女に対して妙にしつくりと来る感覚を覚えた。

「このおなごは半兵衛の親戚の子でな、秀吉達と碁に興じている話をしたら是非とも自分も参加したいと我が儘を言ってきたな。一つ相手をしてやってくれ。」

からかうように喜太郎が紹介すれば、少女はムスツと眉を寄せながらも美しい所作で頭を下げた。

「月と申します。よろしくお願いいたします。」

「…木下藤吉郎でございます。どうぞよろしく。」

それだけ言うと秀吉は黙って碁盤を準備する。心なしか急いでいる様子だ。

少女は虚を付かれた風に少し肩を跳ねさせるが、すぐに落ち着いて自分の分の石を用意する。

不思議な人だ。

少女は盤上から目線を外し、上目遣いで対面に座る男を見る。

木下秀吉は、いつになく真剣な表情で石を握っていた。

暫しその顔を眺めていた少女であったが、不意に秀吉の視線が動き慌てて盤上に眼を戻す。

ここ数日、少女は隠し部屋からずっと目の前の男を伺っていた。

それでまず思ったのは、木下秀吉という男は実にチグハグな人だという事だ。

身なりや言動から見て決して高貴な身分や歴史の有る家に仕える家人ではない。精々、地方武家の侍大将が良いところだ。

歳も見た目ほどとって無いだろう。一見四十を越えているようにも見えるが、声の張りや機敏な動作は若人のそれである。

にも関わらず、少女には家格とは縁も所縁も無きような小男が、宮中に巢食うの老練な公家と重なって見えた。

発言や所作には確かな教養と品位がある。それも取って付けたような急拵えの知識ではなく、実践の中で磨き上げられた本物の礼儀作法である。

いったいどこでどうやって身に付けた物なのか？

少女にとって興味を持たずにいられない疑問であった。

また、時折相手を見透かすような視線を投げ掛けたかと思うと、賑やかな笑顔と共に相手の懐に入り込み心を掴む人たらしっぷりは思わず舌を巻く程だ。

少女にとつての忠臣であり、今は半兵衛を名乗っている青年もいつの間にか秀吉の来訪を楽しみにするようになった。

龍興は一步下がった姿勢ではあるが、好感を抱いているのは間違いない。

二人とも初めて秀吉達がこの庵を訪れた日から、良晴を交えて実に

楽しそうに碁に興じ、文化を語り合っている。

……羨ましくない、と言ったら嘘ですね。

心中でそう呟けば、意地悪な笑みを浮かべる龍興が脳裏に現れる。少女は頭を振って幼なじみの残像を追い払い、別に我が儘は言っていないでしょう、と言いつくす。

秀吉達を見極めろと言ったのは龍興だ。

確かに四人の輪に加わってみたいと思ったのは事実だが、偽名を使い秀吉と相對したのは、あくまでもその人となりを見極めるためである。

そう結論付けて一旦盤上に意識を集中する。

戦況は互角か、やや少女が有利といった状況だが、一手でも下手打ちすれば一気に逆転され、そのまま押し切られる恐れもある。

これ程緊迫感のある碁は少女にとって久々であった。

隠し部屋から見ていて相当打てるとは思ってはいたが、実際対戦してみるとその実力に見誤りは無かった。

面白い。

心中で呟き思わず微笑んでしまった少女は、己自身に驚いた。

少女は自他共に認める対人恐怖症である。初対面の人と真面に話せた覚えは無い。

それが、この猿顔の小男に対しては殆ど人見知りが出ないのだ。

十数年に及ぶ己の人生を思い返しても、木下秀吉という人物と出会った記憶は微塵もない。

なのに、対面に座つても緊張しないどころか妙に居心地の良さを感じてしまう自分自身に、少女は戸惑いながらも嬉しく思っていた。

「……ううっ」

「えっ!?!」

不意に押し殺したような唸り声が聞こえた。

目線を上げると、秀吉が感極まった様相で涙を流している。

盤上から目を離さず、顔を震わせながらも万感に耐えようと、それでも耐えきれず溢れた涙の雫が手の甲に落ちていった。

「も、申し訳御座いませぬーいま暫く、暫く……」

拳に落ちる雫の感触に気付き、右手で目元を押さえ必死に堪えようとするが、一度流れ出した涙は途絶えること無く、秀吉の顔を濡らし続ける。

気付けば少女は身を乗りだし、秀吉の左手を己の両手で包んでいた。

「月殿!」

少女の行動に驚き、秀吉はその顔を見つめる。泣き腫らした真っ赤な眼に少女の姿が写った。

「木下…様…」

それ以上に少女の言葉が続かない。

今日初めて言葉を交わしたはずの男が涙を流す。何がこの男に涙を流させるのか分からないが、それがどうしようもなく心苦しかった。

この人にこんな顔をさせたくない。だが、その手を握り、名を呼ぶ事しか出来ない。

どうして泣いていらつしやるのですか？

どうしたら泣き止んで頂けますか？

胸中に疑問が沸き上がり、だけどそれが胸につつかえて言葉になら無い。

生まれて初めての感覚に混乱する。

もどかしい想いに苛まれ、少女の視界がじわりと滲んだ。

すると、秀吉のもう一方の手が少女の手に重なった。

「ありがとうございます、月殿。もう大丈夫、心配御無用です。」

穏やか言葉と共に微笑みかけ、秀吉は大きく深呼吸をした。

「失礼を致しました。続けましょう。」

そう言って手を離すと、秀吉は先程までと同じように石を置く。

パチリという音が、少女には矢鱈大きく聞こえた。

「参りました。本当にお強いですなあ。」

敗北を認める秀吉の言葉には晴れやかさすらあつた。

まるで負けたことが嬉しくて仕方無いと言つた風ですらある。

しかし、勝者であるはずの少女は胸の苦しさに耐えられなくなり、碁盤を挟んで平伏する。

「申し訳ありません木下様！私はっ…」

「月殿っ！」

秀吉は少女の仮の名を呼び、彼女の言葉を続けさせなかつた。

「大声を出して申し訳ありません。然れど、私は今日、月殿と碁を打て嬉しかった。今はそれで十分です。」

その言葉に少女は察する。

ああやはり、この方は既に気付いている。いつ頃気付いたのかは分からぬが、気付いた上で自分を慮っているのだ。

その気遣いを嬉しく思うと同時に、このまま月という少女であり続ける事の後ろめたさを感じる。

ただ今今は、秀吉の気遣いを有り難く受け取るべきだと、少女は小さく笑みを作つた。

「…分かりました。私も木下様と碁が打てて楽しかったです。願わくば、これからも時々で良いので…」

「私にとつても有り難きことっ！まだ暫く美濃には滞在する予定ですので、出来る限り会って頂ければ幸いで御座います！ところで、月殿に一つ御願ひしたき事があるのですが…」

「…はい、何なりと。」

少女の言葉を受け、秀吉は恐る恐る己の願ひを口にした。

「…私の事を『藤吉郎』とお呼び下さい。」

『藤吉郎』さま…」

小さく呟いてみると妙に口に馴染んだ。この方を呼ぶにはこれ以外に無い、と思わせる程に少女の中でしっくりと納まつた。

「分かりました。これから宜しくお願いします。藤吉郎様。」

そう呼び掛けられた時の秀吉の表情を、少女は生涯忘れる事は無いだろう。

至極の喜びというのはこの事を言うのだと確信できる程の大輪の
笑みが、そこにあつた。

ああ、なるほど。私はこの笑みのために……

この日、少女は知つた。己が運命を預けられる人がいる事を。

今宵はこれまでに致しとう御座ります。

戦支度

秀吉達が美濃に来て二月が経とうとしていた。

既に季節は秋が深まり、殆どの農家が稲刈りを終え、農村では収穫祝う祭りの真っ最中である。

そんな山の麓から聞こえる祭り囃子に耳を傾けつつ、暮れ泥む夕日が照らす縁側で、秀吉と月は今日も今日とて碁に興じていた。

「良くもまあ、飽きもせず毎日毎日続けられるもんだなあ。」

「ああ。まあでも、二人が楽しそうなら良いんじゃないね。」

「そりやそうだがな。」

そう言いながら鹿の干し肉を齧るのは、喜太郎と良晴である。二人は庵の奥から秀吉達を眺めながら、鹿肉を肴に酒を嗜んでいる。

「それにしても、もう二ヶ月か。なんかあつという間だったな。お前ら、明日には尾張に帰るんだよな。」

「おう、特に予定が変わらなければな。」

元々良晴達が信奈から命じられた調略の期間は二月。

その期間が目の前に迫り、二人は一旦尾張に帰らなければならなかった。

「でもほんと、色々良い経験が出来たな。ありがとな、喜太郎。」

「良いってことよ。でもな良晴、俺は一つだけ心残りがあるんだ。」

「心残り？ 一体何だよ？」

喜太郎らしからぬ憂いた表情に、良晴が不安になって尋ねると喜太郎は言った。

「良晴、俺はお前に童貞を捨てさせる事が出来なかった！」

「ちよ!? おまつー！」

心底無念そうदैて実質茶化している喜太郎に、良晴は慌てふためく。

「いやー、秀吉と一緒に『花宿』に連れていくまでは良かったが、まさか本番で緊張し過ぎて勃たなくなるとは思わなかったぞ。」

「声押さえろって！ 月に聞こえるだろ。」

「大丈夫大丈夫。あの通り、碁に集中してて気付いてねえよ。という

か、どうせ明日にやここを離れる訳だし、最後の思い出作りで今夜も一回挑戦しねえか？」

「……いや、やめとく。明日に影響したらいけねえからな。」

「そうか、お前がそう言うならやめとくか。」

暫し悩んだ末に良晴は喜太郎の申し出を断れば、喜太郎も特に気にした様子もなく了承する。

そうして束の間の沈黙が場に流れると、喜太郎は少しだけ真剣な面持ちで盃を置いた。

「…なあ、良晴。」

「ん？」

「お前ら、一色家に仕える気はないか？」

「えっ!？」

ついさつき色宿に誘った時と同じ軽い調子、されど内容の重みは全く違う誘いに良晴は目を白黒させ喜太郎を見つめる。

喜太郎の顔からは冗談の色は一切感じられない。

「どうしたんだよ急に?」

「いやな、前から考えてはいたんだ。お前達はちゃんとした教育を受けていて中々優秀だ。このまま在野に放しておくには惜しいだろう。それに…」

言葉を切り、喜太郎は縁側へと目線を向けた。

「あいつもお前らの事を気に入っている。滅多に無いんだぜ、あいつがここまで懐くのは。」

そう言つて微笑みを浮かべる喜太郎の姿は、妙に様になっている。佇まいに気品があるとも言えるだろう。

こうして勧誘を受ける事さえ名誉に感じ、思わず二つ返事で了承したくなる魅力があった。

だからこそ、良晴は居ずまいを正すと表情を引き締め頭を下げた。

「ありがとう。けど、悪い。その誘いは受けられねえ。」

「…そうか。一応理由を聞いても良いか？」

「…ほっとけない奴がいるんだよ。なんつうか、賢いけど破天荒で癩癩持ちで、その癖に人並みに傷付き易いつていう。ぶつちやけ相手に

すんのは面倒臭いけど、ほっとけなくてさ。だから、あいつを置いてお前の所には行けねえ、」

すまん、と言って頭を下げる良晴を暫し見つめた喜太郎は、再び盃を取ると酒を満たした。

その酒を一気に煽ると、にやついた笑みを浮かべた。

「なあ、良晴。お前、惚れた女がいるな?」

「んなつ!? ななな何言ってるんだよ急にっ!」

「くくくつ。誤魔化さなくても良い。そうか成る程、だから花宿では勃たなかったのだな。いざその時を前にして、気になる女の顔が浮かんだのだろうか?」

「ち、違えよっ! 俺にとってアイツはほっとけない奴で、まあ憧れみたいのはあるけど、だけど好きとかそういうのじゃっ!」

「おや、俺は好きな女がいるなど言っただけで、お前が先程申した奴が好きなんだなどは言っただけで無いが?」

「あつ、て、てめえ…」

悔しそうに喜太郎を睨み付けるが、当の本人は愉快そうに酒を飲むばかりである。

ぐぬぬ、と奥歯を噛み締める良晴であったが、やがて諦めたのか大きく息を吐き自分の盃に酒を注ぎ口にする。

「…確かに気になる奴ではあるけど、惚れたとかそんなんじゃないやねえぞ。これはマジだかな! 俺はただ、アイツの夢に惹かれたんだ。」

「ほう、そうか。まあ、そらならそれで良い。男に袖にされる理由としては上出来だ。気になる女の夢を叶えてやる。男として、この上無き誉れだろ。」

「…そう言うもんか?」

「そう言うもんだ。少なくとも、俺にとってはな。」

相変わらず愉しげに酒を嗜む喜太郎であったが、その目が不意に細間り、瞳に怪しげな光が灯った。

「それにしても、良晴が其処まで惚れ込む女か。どれほど良い女か、一度会ってみたいものだ。」

そう言っただけ唇を舐める妖艶な様に、良晴の背に言い表せぬ寒気が走

るのであった。

なお、売春宿に行つた下りはバツチリ聞かれており、後日喜太郎は父親から有難い説教を受ける羽目になるのだが、それはまた別の話である。

翌日、良晴と秀吉、それと五右衛門の三人は尾張へと下る船の上にいた。

朝イチに二月暮らした宿を引き払つた三人は、見送りに来た月と喜太郎に別れを済ませ、帰路へと付いている。

そうして南に向かい川を下る船の上で、良晴は小さくなつていく美濃の地を振り返つていた。

「なんかあつという間だったな。俺、ここに來れてすげえ良かったなつて思つてる。」

「そうか、それは良かった。」

「……秀吉さん、ごめん。無理やり付き合わせちゃつて。」

「…何を謝る?」

「秀吉さんはさ、半兵衛を調略したくなかつたんじゃないか?」

突然の謝罪、そして今回の美濃来訪の前提を覆しかねない問い掛けをされるも、秀吉は感心した様子で良晴に笑みを向ける。

「ほう、儂が一度も半兵衛を誘う素振りを見せなかつたから、そう思うたのか?」

「どちらかと言うと、初めてちゃんと顔合わせした時かな。あの時、秀吉さん凄く嬉しそうだったじゃんか。それで気づいたんだ。秀吉さんにとつて竹中半兵衛は、大切な部下じゃなくて、大切な友達だったんじゃないかって。」

少々弱気に、しかし確かな自信を持つて己の推論を語る良晴に、秀吉は目を細める。

やはりこの小童、人を見る目がある。

単に未来の知識を知るだけでなく、目の前の出来事から情報を組み

立て、その上で人の心情を推測し、結論にたどり着けるだけの知恵がある。

まあ、時々間の抜けた事も仕出かすが、それはそれで愛嬌があつて人の心を和ませる。これもまた、良晴という男の将器かもしれぬ。

そんな事を思いながら、秀吉は良晴に倣つて後方に視線を向け、その遠くに見える山を見据えた。

「…上に登っていくとな、友と呼べる者が少なくなるんじや。」

思い出すのは、かつて戦場を共に駆け抜けた者達の顔。

いずれは大きな手柄を立て、一国一城の主になるのだと。そう酒宴の席で言えば、おうやって見せよ藤吉郎、そう囃し立ててくれる友だった。

あの頃は酒は買えても宛を買う金が無く、夢話を肴に酒を飲むしかなかったが、それでも十分楽しかった。

「みな儂の事を藤吉郎と呼んだ。それがいつしか筑前守と呼ぶ者が増え、関白殿下と呼ばれる頃には藤吉郎と呼ぶ者はおらんくなった。」

弟や妻でさえ、いつしか殿下と呼ぶようになった。そう呼ばねばならなくなつた。

「半兵衛は、半兵衛だけは最後まで藤吉郎と呼んでくれた。」

もし、前世で半兵衛が生き続けていれば、二人の関係はどうなつていただろうか？

不思議と秀吉には、それまで通り友であり続けてくれるような気がした。

そこに己の願望が含まれていることは理解している。

だがそれでも、己の知る半兵衛ならば、困つたように笑いながらも楽しそうに他愛のない与太話に付き合ってくれる。そんな、奇妙な信頼があつた。

秀吉にとつて竹中半兵衛とは、二度と失いたくない大切な友であつた。

「月殿に戦場は似合わぬ。あのお方はあの地で健やかに過ごし、よき伴侶を得て、子を産み、長生きしてほしい。」

「……そうだな。」

秀吉の言葉に良晴が同意する。
すでに美濃の地は遠く見えなくなつた。
されど秀吉たちの胸中には、言い表せぬ満足感に満たされていた。

「それで結局、何一つ成せずにおめおめ帰ってきたという訳ね、馬鹿猿どもが。」

「いや何もやってこなかったわけじゃ…」

言い繕おうつした良晴に対し、信奈はピシヤリと扇子で床を叩いて言葉を止めさせる。

その額には青筋が走っており、言葉もいつも以上に刺々しい。

要するに、信奈は機嫌は殊更悪かった。

「言い訳無用！この二月、家中の者たちは先の敗戦を取り返さんと皆必死に働き成果を上げているわ。なのにあんた達二人は主命を授けられながらも満足な手柄を上げる事が出来ず、無為に時間と労力を消費した。情けないとは思わないのっ！」

美濃から帰還した秀吉たちの報告を聞いた信奈からのぐうの音も出ない叱責に、流石の良晴も黙るしかない。

今回美濃へ行った目的は、竹中半兵衛を調略すること。

主命を全う出来なかつた以上、それはまごう事無き失態である。

「ははあ、信奈様のお叱りはごもつとも。この秀吉、恐懼してお詫び申し上げます。」

「謝るだけなら猿でも出来る！あんた達分かつているでしょうね？主命を受け、施しを受けた以上、それに見合う成果を出すのは配下の義務よ。あんた達にも少なくない支度金を渡しているわ。それに見合うだけの責任は取らせねば、他の者たちのへの示しがつかないわね。」

「せ、切腹でもしろつてのわ？」

震える声で尋ねる良晴に、信奈は冷たい視線を向ける。

「ええそうね。それも一つの責任の取り方よ。私はあまり意味があるとは思わないけど、責任を取るという意味では一番わかりやすいわね。それで、どうするの？切腹するの？しないの？」

どうあっても責任は取らせるといふ信奈の剣幕に、流石の良晴も閉口し、助けを求めするように隣で首を垂れる秀吉を見る。

すると秀吉は、それまで床に向けていた視線をゆっくりと上げた。

「もし、信奈様より切腹せよと命ぜられれば、この木下藤吉郎秀吉、天武此方無き腹割きを以てその責を果たしましょう。」

「ちよ、秀吉さんっ!？」

「なれどただ腹を割いただけでは、責を取れど失態を取り返したとは言い難し。然らばこの木下、信奈様の主命失敗のお詫びとして、献上したき物が御座います。」

「……へえ、詫びの品をね。いったい何なのかしら？」

尚も厳しい表情を崩さず、されど少しばかりの興味を示しながら信奈が問えば、秀吉の瞳にギラリとした力強い光が灯った。

「美濃との国境、そこに城をこ用意いたしました！」

秀吉の言葉に信奈と良晴は固まる。いや、彼らだけではない。

小姓や侍女、たまたま居合わせた家臣たちまで、皆一様に呆気に取られていた。

その中で一番早く動き出したのは信奈であった。

「…聞き間違いかしら。秀猿、今あんた城を用意したとか言った？」

「はっ、間違いなく！場所は長良川の西岸の墨俣。元は斎藤為利が築き、今は廃城となった城が御座います。そこに我が家臣前野長康を詰めさせ、山賊に扮し部下達と共に城の修繕を取り仕切っております。」
「それってもしかして『墨俣一夜城』かっ!?!そーういや美濃に着いたから長康をずっと見てなかったけど、ずっとそっちに。どうして言ってくれなかったんだよ!！」

美濃での日々を思い返せば、行きの道中は一緒だったがその後は別行動だった前野長康。

それが秀吉の密命を受けて後世に名高き偉業『墨俣一夜城』に關わっていた事を知り、良晴は驚愕すると共に問い詰める。

「すまん。なにぶん敵地であるに何処に目や耳が有るか分からぬ故、迂闊に口には出来ぬでな。」

「うーん、そう言われればそうだけだよ。」

理由を聞かされれば納得できるが、自分の知らぬところ歴史のターニングポイントが過ぎ去った事に良晴の心情は複雑であった。

「ていうか、墨俣城って言ったたら川の上流から加工した材木を流して、ソツコーで組み立てることで一晩で作った城じゃなかったのかよ?」「はあ?一晩で城が建てれるわけが無かろう。さつきも言ったように廃城になった城を修繕しただけじゃ。材木も近場から取ってきたわ。」

まあ尤も、小田原では一晩で城を建てたように見せ掛けた事もあったが。と秀吉が内心で呟いたのも知らず、良晴は「歴史ロマンが…」などと嘆き始める。

「…………ヒヒッ」

不意に引き吊ったような甲高い音が聞こえる。

音の出所を探れば、顔を真っ赤にしてプルプルと震える信奈の顔があった。

後に『信奈公記』において太田牛一は、この時の事をこう記している。

『信奈公の御機嫌、甚だ良き』

「アハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハツ!!!」

狂った鳥のような甲高い笑い声を響かせ、信奈は腹を抱えて床を転げ回った。

「ヒイヒイ:ちよ、調略しに行つて:城を建ててくるとか:何よそれっ!面白すぎるでしょっ!?!ああ、もうダメツ!アハハハハハハツ!」

「ひ、姫様、その…」

信奈のあまりに狂乱する様に、小姓達も何と声を掛けて良いか分からぬ様子。

良晴をはじめとした家臣たちも、普段とは全く違う姿に目を丸くしている。

一方で秀吉は信奈が笑い転げる姿を懐かしそうに見ていた。

織田信長も笑いの沸点が独特であり、笑顔を作る事はあつても笑い声をあげる事は滅多に無かったが、ひと度ツボに入ると人目を憚らず笑い転げていた。

最後に見たのは松永久秀を成敗した時の戦功報告だったか。

泥塗れになった古田織部が、焼け焦げた鉄屑を袋に入れて現れ「殿が御所望の名器『平蜘蛛』。松永久秀より奪って来ました。」と宣った。それを聞いた信長は大爆笑し「忠心見事っ！おみあーは天下第一のひょうげものだきやー！褒美としてその平蜘蛛、おみやーにやるっ！」と、その功を讃えた。

その時の信長の姿が、目に涙を浮かべて床を叩いている今の信奈と重なって見えた。

「あー、お腹痛い。秀猿、城の規模は如何に！」

「修繕が済めば三千は詰めれるかと。十日も戴ければ、さらに五百は増やせましょう。」

「でかしたわ秀猿！失態を取り返して余りある武功よ！その功を以て、竹中半兵衛の調略失敗を不問とするわ。」

「ははっ！有り難き幸せに御座いますー！」

そう言つて頭を下げる秀吉に続き、良晴も慌てて頭を下げた。

なれど、その胸中には悔しさが渦巻いていた。

未来の知識を駆使し、竹中半兵衛を味方に付けようとしたがそれも叶わず。

その失態に己のみならず秀吉まで巻き込んだ挙げ句に、尻拭いまで押し付けてしまった。

その悔しさも然ることながら、先程と打つて変わって機嫌の良い信奈が秀吉にのみ笑顔を向けていることに、良晴に言い表せぬ苦しき感じていた。

「さて、猿達の報告も聞いたことだし今日はもう帰って休みなさい。ねねが寂しがってたわよ。」

「ははあ、承知いたしました。」

「その代わり、明日の評定には遅れず来ること。なんてたって、美濃攻

めの今後を占う大事があるんだから。」

「え、何があるっていうんだ？」

含みを持たせた信奈の言い方に良晴が疑問の声を上げると、信奈はニヤリとあくどい顔を作った。

「近江の浅井の使者が来るわ。そこで浅井と織田が同盟を結ぶか否かを決めるのよ。」

翌日の評定の席には、主だった織田家臣団がみな参列していた。

全員が揃ったのを確かめると、上座の信奈は背筋を伸ばし口を開いた。

「みな揃ったわね。それじゃあ評定を始めるけど、長く国を離れていた者もいるから軽く近況を話しようかしら。万千代。」

「はっ！まず初めに、三河では松平様が領地の掌握をほぼほぼ終わらせました。それに合わせ遠江方面の戦線も一旦停止、今川とは休戦し、三河へと撤退する運びとなりました。しかしながら松平様は一時浜松にまで勢力を伸ばす事となり、その影響力は西遠江にかなり及んだものと思われます。一方今川は一時遠江の半分を失いながらも、今川氏真を中心とした新体制を構築し、遠江全域を再統治するに至ります。また、甲斐との交易を活発に行い国力の回復に尽力しているようです。」

「たしか武田晴信の弟、義信の妻は今川の姫だったわね。」

甲斐、駿河、相模の三国が同盟を結んだ折り、お互いの国の姫を相手国に送る約束がされている。

それにより武田の『黄梅院』が北条氏政の義姉妹となり、北条の『早川殿』は今川氏真の妻に、そして今川の『嶺松院』は武田義信の妻となった。

しかし、桶狭間の戦いを経て、この三国同盟に暗雲が立ち込めていた。

「いくら国力の回復に尽力しようとも先の戦で負った損害は容易に補

填出来るモノでは御座いません。同盟を頼りに他国の助力を得ようとするのも自然な事。八十点はあげれます。しかし、ここにきて武田側にも不穏な動きがあります。」

「…聞いてるわ。上杉と大きな戦があつたとか。」

「はい。先の関東管領から役職を受け継ぎ、名を上杉謙信と改めた『長尾景虎』と武田晴信は、長きに渡り北信濃を巡って争っていました。それが桶狭間の戦いより程無く、川中島と呼ばれる地で大規模な戦になったそうです。双方とも己方の勝利を喧伝してますが、武田は晴信の妹である武田信繁をはじめ多くの臣を失うなど、かなり苦しい状況に陥つたようです。」

「そこまで聞く限りなら、今川と交易を活発化させる利は武田にも有るようだけど、武田はより手っ取り早く上杉との戦の損失を補おうとしてると?。」

「ええ。そもそも武田が北信濃を求めたのは、海を望むが故と言われてます。しかし、それを阻まんとする上杉の力は強大であり容易では非ず。そこに来て、今川が弱つてるとならば…。」

「同盟を破つてでも方針転換し、駿河を攻めるのが良しとする…デアルカ…。」

そう言うと言信奈はじつと目を瞑る。

自身を追い詰めた存在が、今は明日も知れぬ状況に有ることに信奈の胸中は複雑であつた。

「関東は暫く荒れるでしょうね。でも今の話を聞く限り、例の策は予定通り進んでいるようね?。」

「はい。九十点程度には。」

信奈の問いかけに万千代は声を小さくし答える。

松平、今川、そして北条をも巻き込んだ『虎囲いの計』は、人知れず着実に進行していた。

「続いて伊勢志摩方面についてですが、現在各方面に調略を掛け、二割ほどは此方に傾きつつあると報告が上がって来ています。此方の戦況次第では一気に土豪達を引き込めるとも。」

「つまり一益は、さっさと美濃を落とせと言ってるのね。美濃さえ落

とせばいつでも日和見共を味方に出来ると。」

尾張の隣国である伊勢の地は、幕府の名門にして伊勢神宮の宮司でもある北畠家が長年に渡って治めている。

しかし、近年は幕府の権威低下と国内の仏教勢力の攻勢により、豪族への求心力を著しく失いつつあった。

そこで織田家は美濃を攻める片手間にちよつかいを掛けているのだが、腐っても名家にして皇族との繋がりが深い北畠家であるが故に、直接的な軍事行動は控えていた。

現在はおつぱら、伊勢志摩の豪族と繋がりが有るといふ新参の滝川一益と、伊勢湾を拠点に活動する海賊の九鬼嘉隆に調略を任すに留めている。

「まあどちらにせよ美濃を落とさないとどうにもならないわね。六、兵の調練は終わったのよね？」

「はっ！万事抜かりなく。」

「万千代、兵糧は？」

「不足なく。」

「デアルカ。みんな戦の準備は万全のようね。だけど念には念を、もう一手詰めさせるわよ。地蔵、例の件を皆に。」

「ははあ。此度の美濃攻めを万端にすべく、新たな同盟の締結を進めておる次第に御座います。相手は北近江の浅井家。今日この後、浅井の使者殿との調整をする予定に御座います。」

「一色義龍の妻は浅井家の縁者だそうだけど、浅井が代替わりしてからは関係が悪化して小規模の戦も散発してるそうよ。浅井との同盟は、一色を挟み撃ちにして戦を有利に進めるためにも必要不可欠。」

信奈は立ち上がると、改めて集まった家臣たちを見回した。

「今日の会談が美濃攻めの成否を左右すると言っても過言ではないわ。必ずや会談を成功させ、同盟を締結するわよ。」

信奈の言葉に、家臣一同みな一斉に頭を垂れる。

その中であって一人、秀吉のみが苦虫を噛み潰したような表情で呻き声を押し殺していた。

浅井長政

それは前世において、ある意味で『明智光秀』以上に秀吉が嫌っている、忌まわしき男の名であった。
今宵はこれまでに致しとう御座ります。

浅井長政の苦難

浅井長政についてどう思うか？

そのように尋ねられたら秀吉はこう答えるだろう。

『全てにおいて気に食わぬ男である』と。

新興とはいえ北近江の大名の家に生まれ、容姿端麗な相貌は身分を問わず数多の娘を虜にし、恵まれた体軀は信長からも見事と誉め称えられ、一度戦場に出れば才気滂刺にして猛将に等しき槍働きで敵将すらも魅了する。

そのどれもが、秀吉が最初から持て無かったモノである。

当然嫉妬した。

同様の感情は明智光秀にも抱いた事があつたが、互いに外様という共通点も有り通じ合う部分もあつたし、本能寺での一件を除けば好ましい人物だった。

だが、長政は違う。いや、違い過ぎた。

長政は秀吉が望みながらも絶対に手に出来ないモノを生まれながらに手にし、それどころか信長の妹にして尾張一の美女と名高く、秀吉も心寄せていた『市姫』を娶るに至った。

これはまさしく信長が長政を大変気に入れており、心から信頼していた証左である。

生まれ、容姿、主君の信頼。そのどれもが秀吉を遥かに上回っていた。嫉妬するなと言う方が無理である。好感を抱けと言うのは更に不可能であった。

そのみならず、長政は一度として秀吉を見ていない。

視界に捉えながらも、義兄の数多くいる家臣の一人でしかなく、秀吉の胸中に渦巻く自身への感情に生涯気付かなかった。

長政にとって秀吉とは、その程度の間人だった。

拳句の果てに長政は信長を裏切った。

それにより信長は窮地に陥り、秀吉も死にかけた。

到底許せることではない。

もとより低かった長政への好感度は、そこに至って地の底に叩き落された。

だが同時に、秀吉にとっては我が子を産んだ女の父であるため、容易に滅ぼしてやろうとも言いがたい。

そんな所もまた気に食わぬ。それが秀吉にとっての浅井長政という男である。

その男が、今まさに秀吉の目の前に座り、己の主君と対面していた。

「まさか、当主本人が使者としてくるとは思わなかったわ。」

「確かに、少々正道とは言い難いやり方でしたね。ですが信奈殿はこういう遣り方がお気に召すかと思ひまして。」

そう言つて信奈の正面に正座した青年、浅井長政は気障っぽく笑つた。

「へえ、その言い方だと随分と私の事を調べたようね。」

「気になる異性を知りたいと思うことは、男として当然の事かと。」

「…なるほどね。でも、私が顔の良いキザったらしい男が好きじゃないつてのは知らなかったみたいね。」

「無論承知しています。然れど、偽りの自分を演じるのは不興をかうかと思ひまして。貴方は嘘偽りが何よりお嫌いだと聞いてます。」

「…ふふ。なかなか言うじやない。」

信奈の嫌みにも涼しげに返す長政に、信奈は初めて笑みを作る。

短いやり取りではあつたが、長政の頭の回転の早さが自分にも匹敵するものだと思ふことができた。

加えて僅か数名の供廻りだけを連れて他国に赴き、たった一人で会谈に臨む胆力は、長政の言う通り信奈好みの振る舞いである。

自然と信奈は長政に対し悪くない感情を抱き始めていた。

そんな信奈の様子を端から見ていた良晴の表情は、目に見えて不機嫌なものとなっている。

「さて、このまま貴方と歓談するのも悪くありませんが、そろそろ本題

に入りませんか？」

「ええ、そうしましょ。織田と浅井の同盟の件、わざわざ当主自ら出向いて来たからには前向きであると考えて良いかしら？」

「はい。我が浅井家は南近江の六角を倒し、北近江での支配を確固たるものとしたと考えています。その為には六角と同盟を組んで一色家への対処が必須。織田家が一色を攻めるのに合わせ南近江に侵攻出来れば、六角家打倒は格段にやり易くなるでしょう。」

「私たちにしても浅井家と連携していると喧伝出来れば、一色への牽制となつて美濃攻めがやり易くなるわ。織田家と浅井家、共に利のある関係を構築しましょう。」

「そう言つて頂けると有難い。ですが同盟を結ぶに当たつて、より一層両家の関係を確かにすべきと考え、一つお願いしたき事があります。」

「ん？なにかしら。」

疑問符を浮かべる信奈に、長政は微笑みを濃くする言い放つた。

「信奈殿、どうか私と結婚して下さい。」

「……………はっ。」

らしくない呆けた声が信奈から漏れる。

だがすぐに長政の言葉の意味を理解すると、渋い顔をした。

「なるほど、婚姻同盟を結びたいということね。」

浅井家は織田家との間に強固な同盟結ぶと共に、少なからず自分達の望み通りに織田家を利用したい。その為なら、婚姻同盟という形で織田家を取り込むのが最も手取り早い。

おそらく長政は自身の容貌すら武器にする事を厭わず、奇襲ぎみに結婚の申し込んだのだろうと、信奈は浅井家の思惑を読みきつた。

一方で、大した動揺も無く目論見を悟られた長政は、予想外の信奈の反応に僅かに表情が曇る。

その様子さえ、信奈は敏感に感じ取っていた。

「いきなり結婚を申し込めば私が慌てふためくとも思ってた？私について調べて、録に婚姻の噂が無いから行けるとでも考えたんですよ。」

「…いえ、そのような事は。」

「御生憎様。これでも私、結構もてるの。つい最近もどこぞの猿から面と向かって惚れたって言われたし。」

「おいっ、それはもう何カ月も前の事だろうが！ていうか、あれはお前の夢に惚れたってだけで女として惚れたとかは一言も…」

「あーもう煩いわね。犬千代、良しサルを黙らせて。」

「はい、姫様。」

言うが早いか、犬千代は良晴の口を両手で思いつきり塞いだ。

良晴は暴れ逃れようとするが、犬千代に敵う術は無し。

その様子に長政は目を丸くさせるが、織田の家臣たちには特に変わった処は無し。いい加減彼らもこの遣り取りに慣れてしまっていた。

「さて、話を戻しましょう。まず私が浅井に嫁入りするかどうかだけど、答えは否よ。確かに同盟をより強固にする意味はあるだろうけど、互いに別々の相手と戦線を抱える現状では大して意味はないわ。むしろ当主同士が婚姻を結んだ事による指示系統の混乱を考えれば害が大きすぎると思わない？」

「…確かにそうですね。少し浅慮だったかもしれませんが。」

無論その事は長政も承知している。

今回の婚姻の申し出は、信奈を動揺させ交渉の主導権を握るためのブラフ。最初から本気で信奈を娶ろうとは考えていなかった。

敢えて大きな要求を最初に突き付け、そこから譲歩を引き出すのは交渉事のテクニツクの一つ。

本来ならば強者が格下を相手にした時の常套句であるが、長政は自身の美貌と結婚の申し出を以て精神的優位性を取ろうとしていた。

しかし、事前情報では色恋沙汰には慣れていない生娘とされた信奈であったが、実物は思いのほか強かな姫大名であった。

「だけど美濃攻め以降を考えるなら、婚姻同盟自体は悪くないわ。勿

論、送り出すのは私じゃなくて織田の縁者になるけど構わないかしら？」

「…そうですね。それで十分かと。」

長政からすれば思惑は外れど、織田信奈の人となり確かめられただけで十分収穫があった。

浅井家の発展を目指す上で手を組むに不足無き相手。然れど少々扱いは難しい。

そう長政が内心で評価していると、信奈の口から爆弾が投げ込まれた。

「そうだ。こちらも嫁を出す立場上、近江の地を少しでも知っておかなくちゃいけないわね。予め何人か近江に住まわせて、迎え入れる準備をさせるわ。場所はそう、国友村なんてどうかしら？」

その瞬間、長政は全身から汗が流れ出る感覚に襲われた。

国友村。

そこは、表向きには琵琶湖の北東に位置する小さな村であるが、その実は堺、根来に並ぶ日本有数の鉄砲生産地であり、浅井家にとつての最重要軍事拠点である。

その存在自体が機密情報であり、それを態々口にした信奈の思惑に考えを巡らせながら、長政は慎重に口を開いた。

「国友村ですか。あそこは辺鄙な場所ですし、他国の使者を住まわせるには相応しくないと。」

「あら、そうかしら。琵琶湖の港も近く、物資の輸送にも困らない、なかなか発展している土地だと聞いてるけど。」

信奈の返答に長政は内心で舌打ちをする。そして、ようやく信奈の意図を悟った。

要するに信奈は『そっちが私について調べたように、こっちは北近江について調べてたわよ。』と言いたいのだ。

その上で、『こっちは人質として縁者を送るのだから、国友村で生産されている鉄砲の情報を寄越しなさい。』と要求している。

あくまでも対等。こっちが一方的に下手に出ることは無いという意思表示であった。

扱い難いどころではない。戦国大名として相手にするならば、並みの大名より遥かに厄介な武将である。

そのように評しながらも、長政は冷静に考えを巡らせた。

「なるほど。貴方は近江について良く勉強されてるようですね。ではどうでしょう、次に私が尾張を訪れる時、国友の名産品を土産にします。」

織田との関係が深まれば、遅かれ早かれ国友村の事は知られるのだ。

ならば初めから隠し立てすること無く、こちらが知られても致命的ではない情報を示していこうとする姿勢を長政は明らかにした。

「それは良いわね。出来ることなら定期的に貰えれば尚良しだけど。」
「無論織田と浅井の血が交わり、共にこの戦乱の世を乗り越えて行けるならば是非とも。」

此度の会談、奇襲的に織田に対する外交上の優位性を取ろうとした浅井の目論見は叶わなかったと言えるだろう。

しかしながら、共に倒すべき敵を持つもの同士、相互扶助を念頭に置いた同盟を結ぶことは大きな意味を持ち、両家の戦略を前進させる外交となった。

何より、たった一人で会談に臨み、衆目に晒されながらも見事に織田の当主と渡り合って魅せた浅井長政の姿は、信奈とその家臣に強烈な印象を与えるに至ったのだった。

ただ一人を除いては…

「失礼、少しよろしいですか？」

「ん？どうかしたの、秀サル。」

突如家臣団の中から手を挙げる秀吉に信奈が不審げに尋ねると、秀吉は正座のまま信奈の方を向いた。

「この木下藤吉郎秀吉、どうしても浅井長政殿にお願いしたき事が御座います。」

秀吉の申し出に家臣団からはざわめきが生まれ、信奈は端正な容貌

を歪ませた。

「控えなさい秀サル。いまだ正式に盟を結んで無いとはいえ、長政は他国の客人よ。侍大将無勢が初見で頼み事とは無礼が過ぎるわ。」

「ごもつとも！然れどこの秀サル、浅井と織田の永世に渡る友好を取り持つ為には是非とも成さねばならぬ事が…」

「くどいわよ！今すぐここから出て行き…」

「お待ちください信奈殿。」

秀吉に退場せよと命じようとした信奈を止めたのは、他ならぬ長政であった。

「この者の様子を見るに、私への頼み事とは余程の大事と見えます。しかもそれが織田と浅井の友好の為と言うならば、断る理由は御座いません。」

「…わかったわ。秀サル、手短に済ませなさい。」

「はっ！では長政様、立って頂いてよろしいでしょうか？」

「ん？…こうか。」

長政が立ち上がると、秀吉も立って長政の側に歩み寄る。

身長は長政の方が頭一つ高く、秀吉が近づくと自然と見上げる体勢になった。

「それで、私に頼みたい事とはいったい何かな？」

「…然らば、相撲を一番。」

「…は？」

「のこったあああっ!!!」

呆氣にとられたその隙に、秀吉は仕切りの言葉を叫んで長政に掴みかかった。

「うわあっ!!ちよつと、なにをつ!!」

「はあっ!!何やってんのよ秀サルっ!!」

「ひ、秀吉さんっ!!」

誰も彼もが秀吉の狂行に動揺し取り乱す間も、秀吉は長政の懐に潜り混んで体をまさぐる。

長政も必死に逃れようとするが、執拗なまでに密着してくる秀吉を引き離せずにいる。

あまりの蛮行に、信奈の顔が怒りに歪った。

「いい加減にしなさいっ！これ以上の無礼は私自ら手打ちに
「キヤアアツ!!」えっ!?!」

刀に手を掛けた信奈の耳に、甲高い女の悲鳴が届く。

悲鳴の出所を探れば、秀吉にまさぐられ着物の胸元をはだけさせた
長政がいた。

長政は両手で胸を隠そうとするが、その隙間からはほどけた白いサ
ラシ、そして溢れ落ちそうな双球が見え隠れしている。

「あっ!?!いえっ、これは違うんですっ!?!」

信奈の驚いた顔に気が付いた長政は、混乱しながらも必死に言い訳
をしようと思いを回転させる。

しかし、秀吉から意識が逸れたその一瞬、秀吉は身を屈ませると長
政の袴に手を掛けた。

そしてそのまま、勢い良く袴を下にずり下げる。

さて、以前も少し触れたが、この時代の人は基本的に下着を着けな
い。

ふんどしを日常的に着るようになったのは、もう少し時代を下って
からとされている。

即ち、長政もまたこの時代の慣例に従い袴の下には何も着けていな
かった訳で、秀吉に袴を引きずり下ろされた事で下半身を丸出しに晒
け出してしまったのだ。

あまりの事に脳が考える事を拒否し、動きが止まる信奈と織田家臣
団、そして長政。

そんな中であつて秀吉は、長政の股の間に手を入れ、そのまま上へ
と伸ばし長政の股間に当てがった。

「…ふむ、やはり付いてませんな。」

キチンと手入れの行き通った茂みを揉んだ秀吉は、ついだとばかり
に敏感な部分を指先で刺激した。

その刺激で我に帰った長政は、己の置かれた状況を理解する。

真っ赤だった顔は青白く、だが直ぐに先程以上に赤くした長政がど
うするか、もはや予想する必要も無いだろう。

「……いったい何に気付いたの？」

信奈達のみならず他の家臣達も秀吉の返答に注目する。

そんな中、秀吉はおもむろに答えを口にした。

「長政様が歩く時に揺れる尻。それに儂の金時様が反応いたしました。」

「……………はあ？」

はじめは秀吉の言葉が理解できなかった信奈をはじめとした姫武将達であったが、直ぐにその意味を理解し顔に朱を差す。

なおも秀吉は続ける。

「はじめは儂も驚きました。ああ遂に儂も男の尻に劣情を抱くようになってしまったかと。しかし、長政様の尻に注目すればするほど、それが女の尻にしか見えませんでした。何より、この儂が男の尻に興奮するはずが無い！ともすれば、長政殿は男の振りをした女であると思いついた次第に御座います。」

秀吉が語り終えると、広間にはなんとも言えぬ微妙な空気が流れた。

姫武将からは呆れたような、あるいは不潔なモノを見るかのような視線。

男衆からは羨むような、またはどこか尊敬するかのような視線が秀吉に注がれた。

「……はははははっ。」

すると乾いた笑い声が響く。長政であった。

「ははは、そうか。私が十年もの間必死に隠し続けた努力は、侍大将ごときの性欲に負けたのか！」

「な、長政……」

「ああなんたる無様っ！もう好きにしてくれっ！どうせホトを好き勝手弄くられたんだ。襲うなり何なりと好きにすれば良いではないかっ！」

「休憩っ！休憩にしましょう！万千代、長政は疲れてるみたいだから別室に連れてって！」

「は、はいっ！長政様、どうか此方へ。」

これでもかとはばかりに尊厳を破壊され発狂してしまった長政は、万
千代をはじめとした数人の家臣に運ばれるようにして別室に連れて
いかれる。

その様子を見送る織田の将達の視線は、一様に哀れむものであつ
た。

「なあ秀吉さん、秀吉さんって長政の事が嫌いなのか？」

「良晴よ、どうしたのだ急に？」

「いやさ、長政が女であることを証明するなら胸元をはだけさせるの
で十分だったんじゃないかと思つてさ。」

「……おおっ！言われてみればそうじゃのう。いやはや長政殿には悪
いことをした。まあ、向こうも性別を偽つて我らを騙そうとしたん
じゃ。これでお相子。怨みっこ無しとするのが良かろう。」

悪どい笑みでヒヒヒツと喉を鳴らすと、左手は空を揉み、右手は指
先で何か豆粒を摘まむような仕草を秀吉はする。

豊臣秀吉は天下を手にする過程で、時に信長以上にえげつない事を
躊躇無く行つた。

その一端を垣間見た良晴が、思わず顔を引き吊らしてしまうのも無
理が無い事だった。

今宵はこれまでに致しとう御座ります。

浅井家の現状と武士の本質

「やってくれたわね、うつけ猿。」

心底呆れ果てたとしてもいう表情で信奈が吐き捨てる。

そして正面に土下座する秀吉の頭を、手にした扇子でペチペチと何度も叩く。

一見大した力を入れてないように見えるが、芯の部分に鉄が通された扇子はいざという時に暗器としても用いられ、叩かれれば地味に痛い。

秀吉も痛みには耐えた様子で顔を歪ませる。

「ははあ、ごもつとも。少々やりすぎたと自省するばかりです。」

「本当よ。どこに他国の使者、しかも当主の袴をずり落として股を揉む奴がいるのよ。」

信奈は扇子で叩くのを止め、代わりに扇子の先端で秀吉の頭をズイと押しした。

「やるんだつたら袴を下ろすまでにしときなさい。」

「それはいいのかよー！」

良晴が思わず突っ込む。普通に考えれば、それだって常識外れの蛮行だ。

しかし、信奈は不機嫌そうに鼻を鳴らすと、きつめの視線を良晴に向ける。

「この私を騙そうとしたのよ。挙句にそれで婚姻同盟を結ぼうとしたのだから、織田家を舐めているとしか思えないわ。だったらこちらも相応の対応をするのが筋よ。」

嘘を嫌う信奈にとって、長政がやったことは敵対行動に他ならない。

同盟関係とは必ずしも互いの信頼関係の上に成り立つものとは断言できない。情勢の変化によっては一方的に破られることも少なくない。

しかし、今回の一件で浅井家がやろうとしたのはそれ以前の問題だ。

「婚姻外交は両家の血を交わす事に意味があるわ。嫁いだ姫は相手方の血筋を繋げる手助けをし、繋いだ血脈が生家の繁栄の糧となる。だからこそ、他国に嫁ぐ姫は相応の覚悟を決め、必ずや良き子を産むのだと誓うのよ。」

もし子供を産む事が出来なければ、その責任は石女を送ってきた実家にまで及ぶ。

故に、子供を中々授からない姫の心労を計り知れないものがあり、中には心を病んで床に伏せる者や自ら命を絶つ者すらいる。

「私だって、婚姻外交の重要性は解ってるわ。でも出来ることなら、送り出される娘達には幸せになって欲しいの。」

少し目を伏せながら話す信奈の脳裏に浮かぶのは、生前の父との会話だった。

信奈の父、信秀は多くの側室を抱えていた。

『吉、お前くらいにの娘に俺の妾と仲良くしろなんて言った所で無理だろうから言わねえけど、そいつらが産んだガキはお前と血の繋がった兄弟だ。仲良くしてやってくれ。』

そう言われた信奈は、妾の実家が安心するからか、と聞いた。

その頃の信奈には、父の側室の殆どは信秀の庇護を求める国人から送り出された娘達であり、信秀も側室達には気を遣っていた事も理解していた。

正室の娘として思うところが無い訳では無いが、明日をも知れぬ乱世を何とか生き抜こうとしている国人衆の気持ちも、実家のために役目を果たそうとする側室達の覚悟も、そして彼らを慮る父の心情も、信奈には十分理解出来た。

すると信秀は、信奈の頭を乱暴にワシヤワシヤと撫でると、口の端しを吊り上げた。

『そんな面倒臭えこと考えてんじやねえよ。俺はただ、俺のガキ達がバカやって騒いでるのが好きなだけさ。』

あれは恐らく、信秀の本心だったのだろう。

若き日々を親族との鬭争に費やし、器用な御仁として他国にもその名を轟かせた信秀は、当代の大名としては殊更子供を大事にする男で

あつた。

身内を重んじる信奈の気質は、そんな信秀から受け継いだものである。

故に浅井家がやろうとしたのは、信奈の逆鱗に触れるに等しい行いであつた。

「まったく、たった一人で会談に臨んで来た根性は良かったのに、とんでもない事をしてくれたわ！最初から盟約の不履行を前提として同盟を結ぼうとするなんて、浅井はいったい何を考えてるのかしら。」
「…ふうむ。なんとも得心出来かねますなあ。まさか浅井久政殿がまったく関知して無いとも思えませぬし。」

顎に手を当てながら首を捻るのは村井貞勝である。

織田家の外交部門を担い、今回の会談をセッティングするにあたり事前の交渉を引き受けていた貞勝からすれば、浅井の意図には計りかねるものがあつた。

そんな貞勝の疑問に、良晴は違和感を感じた。

「なあ、どうしてそこで久政の名前が出るんだ。久政つて言えば長政の父親だろ？たしか暗愚だったから長政に無理矢理隠居させられたつて聞いたことがあるけど。」

良晴が知る浅井久政と言えば、漫画やゲームに出てくるのが主だ。

大抵の場合は弱腰外交で家臣の信を失い長政に隠居させられたのにも関わらず、朝倉が織田に攻められた時に余計な茶々を入れて長政に信長の裏切らせ、浅井家滅亡の要因となった疫病神であつた。

そうした知識があつたから素直に口に出してみれば、返ってきたのは信奈と貞勝の怪訝な表情である。

「何を以て暗愚と呼ぶかは定かではありませぬが、仮に久政殿を暗愚と呼ぶなら、日ノ本の大抵の大名は暗愚と呼ばねばなりませんぞ。」

「そうね。久政の政治手腕は素晴らしいつて父上も言つてたわ。幾つかの政策は手本にもしてた筈よ。」

「ええっ!?そんなに凄い奴なのか!」

信奈と貞勝の久政評に良晴は驚愕する。

同時に、これ迄の知識とは真逆とも言える人物評は、浅井家そのも

のに対する興味へと繋がった。

そんな良晴の様子に気付いたのか、信奈は何か思い付いた様子で口許に笑みを作る。

「そうだ。良い機会だし、ここににいる者達で浅井家に関する知識を共有しときましよう。どうせ長政は暫く戻って来ないんだし。地蔵、やって頂戴。」

「はっー然らば皆さま、どうぞ前に。丹羽殿、地図とそれを貼れる板のご用意を。」

信奈の指示を受け、貞勝は織田の家臣団を前方に集め、万千代に教材の準備頼んだ。

間も無く道具が揃うと、貞勝は早速講義を開始した。

「時は今より二十年ほど前、北近江は荒れていました。というのも、北近江を守護する京極家は先代の死去を発端とする家督争いが続いており、民のみならず国人衆ですら疲弊していたからです。にも関わらず、京極家は国が衰退するのを省みずに朝廷への献金や、軍事にばかり国費を費やしていました。その負担は全て民への増税で賄われており、あまりの生き辛さに逃げ出す民があとを絶ちません。そうした状況を憂いた国人衆は、遂に京極家に対して謀反を決意します。その旗手となったのが浅井亮政、長政様の祖父にあたる方に御座います。亮政は北近江の有力国人を纏めると京極家を追放し、下克上を成し遂げたのです。」

「へえー、すごえな。一介の国人から大名に成り上がったのか。」

「竹千代の家が同じような流れで三河を治めるように成ったわね。うちも元々は守護代の分家から成り上がったから似たようなもんだわ。」

良晴が感想を述べると信奈が補足をする。

応仁の乱以降、こうしてそれまでの権力者を力で追い落として成り上がる下克上の体現者が多く現れた。

斎藤道三もこれに含まれる。

「こうして北近江を治める大名に成った浅井家でしたが、京極家も簡単には諦めません。彼らは名門の誼を通じ、他国の助けを借りて領地

奪還を狙います。その相手というのが六角、そして朝倉です。」

「えっ?!朝倉が浅井を攻めたのか!？」

「はい。正確には六角との連合軍にですが。如何に浅井亮政が優れた武人とはいえ、強国に挟み撃ちにされれば苦戦は必至。しかも朝倉軍の総大将は名将と名高き朝倉宗摺。亮政の奮闘も虚しく浅井は敗北し、小谷城は占領されてしまいました。」

「で、でも、浅井家は今も大名として残ってるんじゃない?？」

「亮政の降伏後、京極家は旧領復帰を望みましたが朝倉と六角は京極家の者が小谷城に入るのを拒否し、逆に亮政と和睦を結び小谷城を返還。結局京極家に戻ってきたのは、北近江の端の小さな土地のみでした。」

「まあ散々民に負担をかけた挙句に追放されたんだから、大名に復帰した所で一揆が頻発するのは目に見えてるわよね。」

「恐らくそれが理由の一つかと。しかし、それならばいつその事自分の領地に組み込んでしまっても良い筈。何故に六角と朝倉は、反乱の首謀者である亮政に北近江を任せる事にしたのか。相良殿、解りますかな?？」

「えっと…領民が亮政を支持していたから?？」

「脳みそを振り絞って答えを出した良晴だったが、貞勝は残念そうに首を横に振った。」

「それも御座いまいしょうが弱いですな。もっと直接的に六角、朝倉の利があつて両家は浅井を北近江の支配者としたのです。どなたか解りますか?？」

貞勝が家臣団に問い掛けると、勝家が真つ直ぐに手を上げた。

「浅井家を傀儡にするためではないか?？」

「流石柴田殿!その通りです。和睦後、浅井家は朝倉から姫を娶り、亮政の息子の久政殿の側室としています。それから間も無く、亮政は久政殿に家督を譲っており、恐らくは朝倉家からの働き掛けがあつたのでしょうか。」

「すげえな勝家。お前戦場以外でも頭回つたんだな。」

「誰が脳筋猪武者だつ!私も一応は領地持ちだぞ。多少の外交の心得

は会得してる。」

素直に良晴が感心してみせると、勝家はフンスと豊かな胸を張る。貞勝は咳払いを一つすると話を続ける。

「傀儡にする利点としましては、直接的に支配するよりも国人や領民の統制がしやすい事が挙げられます。また、北近江を浅井と六角の緩衝地帯とする意味でも、浅井家に北近江を任す利が有ったのでしよう。」

貞勝は板に貼られた地図の北近江の所に『浅井』と書かれた札を、その上と下に『朝倉』『六角』と書かれた札を貼っていく。

「ここで一つ重要なのは、浅井家と朝倉家の関係が単純な恩と信頼の上に成り立った訳ではないこと。朝倉は浅井を力で屈服させていますが、同時に浅井が大家家として北近江を治める正統性を認めています。六角も同様です。こうした複雑な外交の上に大家家としての浅井家は興った訳ですが、間も無くその土台を揺るがす出来事が起こります。それが…」

貞勝は朝倉の右上に新たな札を張る。

「加賀にゃんこう」揆衆です。」

「いやちよつと待った。」

良晴と秀吉の声が重なる。

他の家臣団や信奈は怪訝な顔をするが、二人にとってはどうしても聞き捨て成らぬ単語が聞こえたのだから仕方がない。

「村井殿、私の聞き間違いかも知れませぬが、いま『にゃんこう』揆衆などと申されましたか？」

「ええ。確かにそう申しましたが何か？」

「いや、どうにも聞き馴染みの無い言葉でしたので。有名なのですか？」

「有名も何も、日ノ本では今一番信仰されている宗教勢力の一つじゃない。尾張にも幾つか寺があつて、信徒達が『にやむあみだぶつ』つてお経を唱えてるわよ。」

「あれって真面目な宗教だったのか!?! てつきり猫好きの集会なのかと思つたぜ。」

「儂も新手の邪教かと思っておりました。」

たまに聞こえてくる怪しげな呪文の正体を知り、秀吉と良晴は愕然とする。

そんな二人を他の家臣団は不思議そうに見る。

『にゃんこう宗』といえ、摂津国は石山に総本山たる『本猫寺』を構え、全国各地に信徒を持つ国内最大の宗教組織である。

その組織力は下手な大名より遥かに優れており、全国の信徒からの布施による経済力は国内随一であったとされる。

「とはいえ、総本山たる本猫寺と加賀のにゃんこう宗との関わりはあまり無いとされています。加賀の守護を追い出し、百姓の治めたる国とした事も本猫寺の意向では無かったと。ただそれでも、加賀におけるにゃんこう宗の威光は絶大であり、信徒達は彼らの指導者の命令とあらば死すら恐れず臨みます。そのような輩に朝倉は攻め込まれたのです。」

数にして数十万とも言われる加賀にゃんこう一揆衆は、大挙して越前国に雪崩れ込んだ。

彼らは一心に「にやむあみだぶつ、にやむあみだぶつ」と唱えながら、イナゴの大軍が如く朝倉領を侵食した。

「これにより朝倉家は全力で以てにゃんこう宗に対応しなくてはならなくなり、北近江に手を出す余裕を無くします。その隙を見計らい、再び京極家が動きます。京極家は朝倉家の後ろ楯を失い動揺する国人衆や浅井家の専横に不満を持つ者達を調略し、反浅井家勢力を立ち上げ蜂起したのです。それに対し浅井家はどうしたのか？前田殿、解りますかな？」

「……………六角を頼った？」

「その通りで御座います。浅井久政殿は子息の猿夜叉丸、現在の浅井長政を人質として送り六角家に従属すると、六角家の支援を以て京極家に対抗し、最終的には反浅井家勢力を駆逐して京極家を北近江から排除しました。それと同時に齋藤家とも同盟を結び、妹の近江の方を齋藤義龍の妻としています。」

つまり浅井長政と義龍の息子の龍興は、血の繋がりのある従兄弟同

士ということになる。

「さて、国内の不安分子を排除し、周辺国と不可侵を結んだ浅井家は内政に力を入れます。手始めに河川の灌漑工事に取り組み、生産力を大幅に増量。それから間も無く全国的に飢饉が起こった際も、他国が軒並み飢餓に苦しむ中で北近江の被害は微小でした。また国内の寺社勢力と友好関係を築き、職人や商人の保護して城下を栄えさせ、国内の水争いにも積極的に介入し裁定を下し、国友村に代表されるような軍事産業にも着手し、北近江はこの頃から大いに繁栄します。これらは全て、久政殿の元で行われた事です。」

「マジか！ガチの名君じゃねえかつ！」

「そうして国力を順調に増していた浅井家ですが、中央では新たな動きが起きます。この頃、京の有力者として権勢を振るっていた細川晴元を、阿波国から上洛した三好長慶が追い落とすという事件が起こります。近江に逃れた晴元は旧知の仲であった六角家に長慶討伐の協力を要請、六角家はこれを了承します。盟友である朝倉も追従します。」

「六角家と朝倉家が細川晴元に協力したって事は浅井も…」

「それが浅井家は三好側に着くのです。」

「はあっ!?だって六角家は長政を人質に取ってたんだろ！なのに何で浅井は六角家の敵対勢力に…」

「これについては正直明確な理由は解りませぬ。しかし、どうやら三好に身を寄せていた京極高吉なる人物が三好と浅井の間を取り持ったとか。いずれにしろ六角家と敵対する事を選んだ浅井家は六角領に侵攻し、領地の一部を占領します。中央の争いも、三好家が細川・六角連合軍を退け実質的に京の実権を握るに至ったのです。」

「結果から言えば浅井家は領地を増やし、中央の有力者との繋がりがまです得れた訳か。でも浅井は長政を六角に人質に出してたよな。大丈夫だったのか？」

「はい。六角は中央での敗退後、領地を割譲した状態で浅井と和睦しております。これは敗戦の傷が癒えぬうちに浅井との全面戦争になれば、背後から三好に追撃を受けると考えたからでしょう。連合とし

ては敗北しましたが、この後も六角は三好と対峙し続けます。また、和睦の席で長政が元服した折りには六角家の養女と婚姻させるといふ盟約を結んでおります。」

貞勝は六角と書かれた札の左横に『三好』と書かれた札を並べる。ここまでの流れを簡単に纏めると、国人衆の代表として主家を追い落とした浅井家は、名門と呼ばれる強国に解らされたりしながら大名として独立し、地道に内政で国力を高め、遂には争乱を利用しながらも宗主国に対して強気に出られるまでに成長した。

そしていよいよ、講義は現在の浅井家に至る部分に差し掛かる。

「領地を奪われながらも引き続き長政を人質にしていた六角家は、南近江の有力者である平井氏の娘を養女とし、長政が元服したのに合わせて結婚させます。ところが、長政は結婚後間もなく一方的に嫁を離縁すると、浅井領に戻ってしまいます。これには六角家も大激怒し、遂に浅井家との対決姿勢を全面に打ち出します。」

「まあ、そりやそうなるよな。てか、長政の奴前にも似たような事やってんだな。」

「袖にされた娘が可愛そうよね。親の命で嫁いだ相手は実は女。しかも勝手に離縁され主家と敵対するなんて、家どころが国にすら居場所を無くし、世を夢んで死を選んでも仕方がないわ。」

「お劳しい限りですな。ともあれ、浅井家は六角家と敵対する道を選びます。それと同時に久政殿は長政に家督を譲りますが、国人達への書状などには久政殿の名が残されており、実権は久政殿が握っていることが伺えます。そして浅井家は六角家と戦をし、これに勝利して近江全土に軍事的存在感を確かなものとしませぬ。ですが、盟約を無視して宗主国に牙を向いた事で周辺国との関係は一気に悪化します。そして遂に、六角、一色、そして朝倉による三国同盟を結ばれるに至るのです。」

「ええっ!?今の浅井家って朝倉家と敵対してるのか!?てつきり古くからの盟友同士だと思ってたぜ。」

「まあ、繋がりが無かった訳では御座いませぬが、盟友と呼ぶには些か弱いかと。むしろ名目上は敵対していた期間が長いですな。」

現代での創作物では浅井家と朝倉家は盟友関係であり、それが浅井家が織田家を裏切る理由とされる事が多いが、それは後世の軍記物の内容が大元であり、当時の文献に浅井家と朝倉家の関係を深く掘り下げられる物はあまり存在しない。

「今の浅井家は三方を敵対する勢力に囲まれ、かなり苦しい状況にあると思われます。彼らの望みは一つでも敵対する勢力を少なくすること。我らが一色を脅かせば、六角や朝倉を相手にする余裕も生まれます。故に我らと同盟を組み、連携して敵と相對しようとしたはずなのですが…」

「…婚姻外交なんてちらつかせたせいで面倒な事になったわね。」

信奈が眉間に皺を寄せながら吐き捨てる。

理由はどうあれ、長政は自身の性別を偽り信奈との婚姻同盟を求めた。

かつて六角家に対して行った事を、今度は織田家に対して行おうとしたのだ。

いま、一部の者を除いた織田家中の浅井家への感情は一つだった。

「…足利尊氏の父親は、息子達にこう教えたそうよ。」

『武士の本質とは、舐められたら殺すだ。』

「ならば先人の教えに則り確かめさせて貰いましょう。浅井は同じ道を歩む盟友足るか、我らを舐め腐ったクソ共か。」

腰に差した刀に触れながら、剣呑な眼差しで信奈は配下の者達に告げた。

今宵はこれまでに致しとう御座ります。

汚れた掌で奪いし心

清洲城の評定の間で信奈と長政が相対する。

それだけ見れば一刻前と何ら変わらない情景だ。

しかし、彼らの表情は一刻前と大きく変わっていた。

「…体調は良くなったかしら、長政？」

「……お陰様で、なんとか。」

咎めるような厳しい視線を向ける信奈と、それを受けて恐縮した様子で顔を俯かせる長政。

長政を見る織田家の家臣団の視線も一様に厳しく、睨んでいると言っても過言ではない。

とても同盟の話をしに来たとは思えぬ空気が部屋に張り詰めていた。

その中であって、困惑した様子を見せる人影が二つ。長政の背中に視線を送っていた。

彼らは長政の御供として同行してきた浅井家の家臣である。

名を赤尾清綱と遠藤直経と言う。何れも長政の側で浅井家の政を支える忠臣である。

同盟の話をするに当たって長政の印象をより織田家中に刻み付けるため、会談中は別室で待機していた二人だったが、何故か急に会談の場呼び出され主君が針の筵にされている状況を目の当たりにしては戸惑うのも無理は無いだろう。

そんな二人には目も暮れず、信奈は長政に問いかける。

「…六角家の人質から脱したのなら男の振り続ける必要は無いわよね。どうして自分の性を偽り続けるの？」

その瞬間、赤尾と遠藤の肩が跳ね上がる。

長政が女であること。それは浅井家における最高機密である。

浅井家でも宿老クラスでなければ知ることの無い秘密を、他国の家中に、しかも会談中に知られてしまった。

考えられる限り最悪の展開である。

どうして知られてしまったのかは皆目見当は着かないが、織田家が

長政に敵意を向ける理由には合点がいった。

今回両家が結ぼうとした同盟は、血縁を交わす婚姻同盟である。

そこに浅井家は、婚姻を結ぶ当人の性別を偽ったのだ。

織田家からすれば浅井家の行いは詐欺に等しく、著しく信用を損なう裏切りである。

気付けば遠藤は信奈に対して土下座をしていた。

「申し訳御座いませぬっ！此度の同盟における発案、全てこの愚臣によるものっ！何卒この咎は私につ！」

遠藤としては何とかして責任が長政や主家に向かわぬように必死になつての言葉だった。

そんな遠藤に対し信奈は視線すら向けない。まるで遠藤の言葉すら聞こえて無いような素振りである。

それを見た遠藤が再び口を開こうとしたところで、信奈が長政に送る視線を強くした。

「長政。」

「…何でしょうか？」

「いま何か空耳のようなものが聞こえたけど、あなたにも聞こえた？」

「…いいえ、聞こえませぬ。」

「そうよね。まさか当主同士の話し合いの場で勝手に発言をするような無粋な家臣なんて、いるわけ無い筈よね。もしそんな奴がいたら、無礼討ちしたって文句無いわよね？」

要するに、部下に余計な口出しをさせるんじゃない殺すぞ、という意である。

「…はい。その様なこと決して許すべきでは無いと思います。」

その意思是正しく長政にも届いた。その後ろで遠藤と赤尾は項垂れる。

彼らは今、信奈の慈悲によつて生かされている。

騙そうとした上に無礼にも当主同士の会話に割り込もうとしたにも関わらず見逃され、警告を与えられるに止まった。

一命を与えられるに等しい救済である。

故に黙つてその慈悲を受け入れる他無い。

これ以上を望めば、己のみならず主君にも害を及ぼす事になるのを理解したからだ。

「それじゃあ答えてくれるかしら？なぜ、男だと偽り続けたの？」

「…幼少の頃に六角家へ人質に入った際、女のままでは貞操を脅かされる恐れがあったので性別を偽ったのは先に述べた通り。その後、京で政変が起こったのを期に六角家は細川方に付いたのに対し、我が家は敵対する三好方に付き六角領を侵しました。これにより六角と浅井は一食触発の状態になりましたが、京の情勢を重視した六角が譲歩する形で和睦を結びました。」

「その際六角が浅井に求めたのが、あんたと六角家の養女との婚姻だったと聞いてるわ。」

「ええ。六角家としては私と養女の間の子供ができ、その子が家督を継げば北近江への影響力を与えられると考えたのでしょう。しかし、この時既に我が父は六角との決別を決意していました。そこから先の事は御存じかと思いません。」

「前置きが長いっ！さっさと男の振りを続ける理由を答えなさい！」
「失礼いたしました！我が浅井領は六角家と縁が切れたとはいえ、その影響が無くなった訳ではなく。六角家では姫武將を軽んじる風潮が強く、浅井領内にもその傾向が強い地域があります。もし私が女だと知られれば反発する国人も現れ、家中を二分する事となり、他国の介入を招く恐れ間あると。それ故に、私は自ら望んで男で有り続けました。」

長政は緊張した面持ちのまま唾を飲み込む。

この頃の長政は名将としての未来を期待されど、幼少期からその殆どの人生を六角家で過ごしており、北近江の国人衆の中には資質を疑問視する者も少なくなかったとされる。

故に久政は早くから長政に家督を譲り、補佐をしつつも長政に為政者としての実績を作らせようとしていたという見方がある。

織田との同盟を急いだのも、その為だったとも言われている。

話を聞き終えた信奈は、右手で持った扇子を遊ばせながら、思案するように長政の顔を覗き込んだ。

「…ねえ、浅井家と織田家は婚姻同盟を結ぶ運びになりそうだったけど、事が済んだらまた同盟破棄しようとしたの？」

「その様なことはっ！例え六角家を打ち倒そうと、その後も織田家とは悠久の盟約の元に、この乱世を共に歩みたいと…」

「だとしても、女同士では子は生まれないわよね？あんたが女だと知らないまま、浅井家の世嗣ぎが出来ない事を我々が不審に思った時、浅井家はどうするつもりだったの？」

「そ、それは…」

長政が額に汗をかき、信奈の顔を仰ぎ見る。

冷たい殺意の込められた瞳が、長政を貫いていた。

織田信奈は嘘偽りを何より嫌う。

それを知る長政は、心の奥で父に詫び、己の心内を明らかにする覚悟を決めた。

「…私には政元という同腹の弟がいます。この弟を嫁いできた姫にあてがい、子を作り…ッ!？」

ダンツという床を強く叩いた音に驚き、長政は話を止める。

見れば信奈が立ち上がり、怒りの形相で長政を見下ろしていた。

「そう、よく解ったわ。つまり浅井家は我々を舐めているのね！」

そう言うと言信奈は自分の後ろにあった太刀を取り、鞘を外すと長政の前へと歩みを進める。

「若っ!？」

「動くなっ！」

赤尾と遠藤が慌てて二人の間に入ろうとするが、犬千代と久太郎が背後から刀を突き付け動きを止める。

一方で長政は動かない。むしろ激怒する信奈を前にし落ち着きを取り戻し、静かに座して目を伏せていた。

ああ、自分はここまでだったか。

心の中で長政は呟く。既に己の死を受け入れる心待ちにあった。

無念が無いとは言えない。

武将として、乱世に己の存在を示したいと思つた事もあつた。

女として、身を焦がすような恋に憧れた事もあつた。

姉として、残される姉弟を案じる気持ちもあった。娘として、父の期待に応えられない悔しさもあった。

だがそれでも、信奈が振り上げた刃から逃れようとは思えなかった。

舐めているつもりは無かったが、そう思われても仕方がない。

三方を敵方に囲まれ、窮した末に願い出た此度の同盟。

発案は久政だったが、長政を含めた重鎮たちもそれしか浅井が生き延びる術は無いと腹を括った。

あとはどれだけ織田に長政の秘密を隠し通せるかが問題だったが、まさか同盟を結ぶ前に明らかにされるとは思わなかった。

出来るなら猿顔の織田家臣には恨み言の一つも言ってやりたいが、今さら言っても仕方ない。

だがせめて、自分に付いてきた二人の忠臣は無事に近江に返して貰えないだろうかと口を開きかけたその時、長政と信奈の間に人影が割って入った。

「姉上、落ち着かれませ。」

鈴の鳴るような声だと長政は感じた。

目を開けると、自分と同年代くらいの色白な若武者が信奈の正面に立っている。

「邪魔をしないで勘十郎。私は織田家の当主として、我が家を足蹴にしようとした無礼な輩を成敗しないといけないわ。」

「姉上のお怒りはごもっとも。我が家を利用し粗末に扱おうとした者に報いを与えるは大事。しかし、今一度我らの大義を思い出して下さい。そうすれば今何をすべきか、聡明なる姉上なら自ずと解る筈です。」

信奈は怒りの形相のまま勘十郎を見るが、勘十郎はそれを真つ直ぐに受け止め姉の目を見つめる。

そうして暫し睨みあった二人だったが、先に折れたのは信奈だった。

舌打ちをして視線を外すと、床に捨てた鞘を拾って太刀を納める。

長政の後ろから安堵の溜め息が聞こえた。

「そこまで言うなら勘十郎、あんたの考えを述べなさい。我が織田家が何をすべきか。浅井家に対しどう振る舞うべきか。」

「はっ！然れば、姉上の御前にて我が腹案を述べさせて頂きます。」

そう言つて勘十郎は身を屈ませると信奈の正面からずれ、信奈と長政で正三角形を作る位置に座つた。

「まず織田と浅井の同盟についてですが、当初の予定通り結ぶが良いと思います。これは浅井家と結ぶ利が捨てがたい故に御座います。然れど婚姻同盟ではなく、義兄弟の同盟が良いかと。」

「義兄弟の同盟ねえ。つまり、長政が女であることは伏せ続けると？」

「如何にも。わざわざ同盟相手の領内を動揺させることも無いかと。」
「では誰を浅井の人間と義兄弟にするというの？」

「この僕です。僕が長政様と義兄弟となり、浅井への人質として北近江に行きます。」

「何ですってっ!?!」

勘十郎の放言に信奈が驚愕する。

それだけでは無い。織田家臣たちは勿論の事、長政やその従者たちも驚いた表情を見せる。

そんな中、勘十郎だけがどこか能天気そうな、穏やかな余裕のある笑みを浮かべていた。

それを見て、信奈は落ち着きを取り戻し弟の真意を知ろうとする。

「詳しく話さない。」

「はい。そもそも現状として、織田家は浅井家の弱みを二つ握っています。一つは長政様が実は女である事。もう一つは、それを隠し我が家と婚姻同盟を結ぼうとしたこと。この二つが外に漏れれば、北近江は大いに荒れる事が予想されます。それは天下を目指す姉上にとつて、望むべき事では在りませんまい。」

信奈が浅井家との同盟に前向きだった理由として、美濃進攻後に上洛を行う上で近江から京に上る道筋を確保しようとしていた背景がある。

浅井と協力して南近江の六角を倒せば、美濃から京への最短ルートを結ぶ事が出来る。

故に、信奈にとって京への進路上にある近江の地が情勢不穏になるのは避けるべき事であり、浅井家の秘密を隠し続ける理由となった。「じゃあ、あんたが長政の義兄弟として近江に行く理由は？」

「今のままでは織田に主導がありすぎます。従属では無い同盟を結ぶ上で、権勢が一方に傾き過ぎれば必ずや不和と成りましようや。然らば、誰かが質として浅井家に身を寄せるが永世の盟約の要と成ります。」

織田家が浅井家の弱みをちらつかせれば、確かに浅井家を好きに扱えるだろう。

しかし、不均等な同盟関係はいずれ浅井家内で反発を呼び、破綻を向かえるのを予想するのは容易だ。

だからこそ、織田も義兄弟という形で人質という弱みを浅井家に差し出すべきだと勘十郎は主張する。

「だけど、本当にそれでいいのでしょうか？」

恐縮しながらそう尋ねるのは長政である。

如何なる事情があれ、浅井が織田を騙そうとしたのは事実。

勘十郎の発案はそれを咎めるどころか、恩情をかけるに等しい提案であった。

「我らは貴女方を騙し、己の利ばかりを取ろうとしました。にも関わらず、この様な情けを頂くのは…」

「長政様、確かに浅井は織田を騙そうとしました。しかし、幸いにもそうはならなかった。だったら、改めて両家の得となる盟約を結べば良いだけです。それで良いではないですか。」

「しかし…」

「それに僕にとっても、北近江に行くのは悪くない話なんです。恥ずかしながら、僕は以前姉上に対して謀反をしてみました。寛大にも姉上には許して頂けましたが、尾張では中々肩身が狭くて。むしろ人質として姉上のお役に立てるなら、これ以上の喜びは御座いません。ねっ、姉上！」

「何が、ねっ！よ。はあ…」

純真無垢な勘十郎の笑みに、信奈は毒気を抜かれた様子で溜め息を

つく。

そうして頭を搔いてもう一度溜め息をつく、ギロリと長政を睨む。

「長政、津田信澄の提案、受け入れられる？」

「はい！この様な寛大なる申し出、受け入れざる理由は御座いませぬ！」

「デアルカ。ならば勘十郎、あんたに任すわ。」

「ありがとうございます御座います姉上っ！長政様、良かったですね。」

「あ、ああ。本当に有難い。」

急展開の結末に長政は戸惑いながらもホツと息をつく。

下半身を晒され女である事を明らかにされてから、この様な形で落ち着くとは思ひもなかった。

すると勘十郎は居ずまいを直し長政を正面に見る。

「長政様、少しそのまま。」

そう言うと勘十郎は長政の顔に向かって手を伸ばす。

「信澄殿、何をっ!？」

突然の事に長政は身を固くする。

その脳裏には、先ほど秀吉に体をまさぐられた記憶が甦っていた。

しかし、勘十郎は長政の目元に親指を当てると、目尻に沿って優しく撫でるのみだった。

「驚かせてしまって申し訳ありません。どうしても、目の雫が気になっちゃって。」

「…あつ。」

勘十郎の親指は濡れていた。

安堵によってか、長政は自分でも気付かぬ内に涙を流していたらしい。

それを勘十郎に拭われた事に長政が顔を紅くさせると、勘十郎はクスクスと笑った。

「な、なんだ？」

「いえ、長政様にも可愛いところが有るのだと。」

「か、可愛い!？」

同年代の男性から可愛いと言われ、長政の熱が一段高くなる。何か言い返せねばと口を開くが、言葉が纏まらず声に成らない。そんな長政に対し、勘十郎はこの日一番の満天の笑みを作った。

「これからよろしくお願いします長政様。不肖の義弟ですが、どうぞ可愛がって下さい。」

その笑みに、今度こそ長政は完全に言葉を失ってしまう。

目に写るのは端正に整った勘十郎の顔。

感じるのは更に増した体の熱と、早鐘を打つ心臓の鼓動のみであった。

そんな二人を見つめる信奈の顔は、名状し難き複雑な色で象られていた。

時は一刻前に遡る。

長政が別室で休憩している間、信奈と織田家臣団は今後の方針について改めて煮詰め直していた。

「天下を目指す上で浅井家との同盟は捨てがたいわ。だけどその前に、今回の浅井家のやらかしの落とし所を決めなきゃいけないわね。」

そう家臣たちに宣言するのは信奈。もとより、彼女に浅井との同盟をしないという選択肢は無かった。

故に問題は、浅井家にどう落とし前を着けさせるかどうかだった。

「落とし前を着けさせるにしても、あまりに我が有利に成りすぎるのは後々の禍根に成りかねます。むしろ、浅井家の弱みを握っている現状でも十分かと。」

そう分析するのは村井貞勝。

外交の専門家として、一方が利を得すぎる同盟関係の危うさを説いた。

「ですが今さら婚姻同盟を結ぶのは五点以下の下策です。やるならば姫様の縁者の方に長政様と義兄弟の契りを結んで頂き、浅井家の人質となつてもらおうのが良いですね。その上で、人質となつた方を通して

織田家の意向を浅井家に汲んで頂くように出来れば八十点はあげれますね。」

そう提案したのは万千代。

冷静に現状を見極め、主家の利となる盟約を模索した。

「然らば、人質になって頂くのは津田信澄様が良いでしょう。家督の相続権を失ったとはいえ、信奈様の同腹の弟君。人質として不足は無く、かといって織田家にとって必要不可欠な御方と言うには少々足りぬ。そう言う意味でも人質としては適役かと。」

過ぎた事をと謝りながらも、秀吉は人質役として勘十郎を推した。

一部で秀吉の言葉に眉をひそめる者もいたが、語る内容は理にかなっており、声に出して反対する者はいない。

こうして長政との会談を再開させる以前に、織田家中では既に勘十郎を人質として送りこむ事が決まりかけていた。

そんな中で、当の勘十郎は手を上げ姉に向かって発言する。

「姉上、会談を再開しましたら、一芝居打って頂いても宜しいですか。」
「芝居って、何をさせるつもりなの？」

「長政殿に対して刀を振り上げ怒って下さい。それこそ、切り殺さんばかりの迫力で。それを僕が止めますので、何か考えがあるのかとお尋ね下さい。そしたら僕は『自らが長政の義兄弟となり、浅井の人質となります。』と言います。」

「…解らないわね。そんなことをして、一体何が起きるといふの？」

「浅井に負い目を与えます。浅井がやろうとしたことは我らを舐めきったと言われても仕方の無い行為。それを許され、あまつさえ恩情をかけられた事を派手に演出します。即ち、狙うは浅井長政、そしてその側近達の心です。」

「…つまりあんたが、長政達を籠絡すると言うの。」

「如何にも。彼らに負い目と恩を此れでもかかと心に刻ませ、決して忘れ得ぬ情を覚えさせます。そして長政様には、僕を意識させます。これでも姉上に似て、顔には自信がありますし、女の子の扱い方も知っています。それに…」

勘十郎は笑う。信奈でさえ思わず背筋に寒気が走る様な、冷酷な笑

顔で。

「今の長政様は秀サル君のお陰で傷ついておられます。その傷を僕が優しく癒してあげれば、きっと僕の言うことをよく聞いてくれるようになるでしょう。」

勘十郎は傷跡の残る白い手を伸ばし、信奈の眼前で力強く空を握った。

「姉上、必ずや勘十郎は浅井長政の心を奪います。すべては姉上と、織田家の為に。」

その日、織田家と浅井家の間で義兄弟の契りを交わす盟約が結ばれた。

同時に一つ、新たな才気の芽が開いた。

『器用な御仁』として東海に名を轟かせた策謀家『織田信秀』。

その血を姉と分け、挫折の果てに過去の名を捨て、新たな己の在り方を定めんとした『津田信澄』は、今まさに策謀家として覚醒の時を迎えようとしていた。

その日の晩、信奈は自室に良晴と勝家を呼んだ。

部屋について早々、信奈は自ら二人に酒を振舞うと、自分の盃を満たしチビチビと嘗めるように飲み始める。

その様子を勝家は不思議に思う。

「珍しいですね。姫様が晩酌をされるなど。」

信奈は酒が苦手だ。

下戸だというものもあるが、初めて酒を口にした日に酔い潰れ、醜態を晒してしまうという黒歴史があるからだ。

以来、信奈は人前では酒を飲まないようにしている。

「……久々に酔ってみたくなったのよ。でも一人で飲むのも味気ないでしょ。」

「だから俺たちを呼んだのか？」

「…まあ、そんな所ね。」

普段に比べると大分歯切れの悪い受け答えをする信奈に良晴も違和感を感じる。

常に身に纏っている覇気は鳴りを潜め、代わりに何処かどんよりとした空気が信奈の周囲に流れていた。

その姿は、他人には言い難い悩みを抱えた人のそれである。

「…勘十郎は変わったわね。」

無言で盃を眺めていた信奈が唐突に漏らす。

ため息まじりのその言葉が、今日の会談での弟の事を指しているのは明白であった。

「確かに勘十郎様、信澄様は変わられました。きっかけは稲生での戦。決定的だったのは今川との戦で、手柄首を上げた事かと。」

勝家が思い出すのは桶狭間の戦い。

それは勘十郎にとって初めて戦場に出た戦であり、初めて自らの手で人を殺した戦であった。

「珍しい話では御座いませぬ。人を殺めたという経験は、なかなか悩ましい事です。ですが最終的には折り合いを着けなければならず、その過程で以前とは物の考え方が大きく変わる者も多くなります。私にも覚えが…」

「…そうね。あれで死生観が変わらない方が珍しいわね。勘十郎はどんな様子だったの？」

「数日程部屋に籠られたそうです。その後、いつの間にか部屋を出られた時には憑き物が落ちたような表情だったとか。」

「…デアルカ。珍しくは無いわね。ありきたりで普通な事…」

そう語る信奈の口調は、どこか自分に言い聞かせるようであった。それを見て、漸く良晴は察する。

信奈は弟の変わりように動揺しているのだ。

口では当たり前の事と言いながらも、女を追い詰め、それを意のままに操ろうとしている弟の姿に、姉として割り切れぬ思いに揺れている。

それを誰かに漏らしたかったのだろう。

「思えば父上も謀略に長けてたわ。案外あいつの方が私より父上に似てたのかも知れないわね。」

「とは言え信澄様は未だ経験は浅く、過信を過ぎるのは禁物かと。」

「そうね。近江に行く前に良く言い聞かせとかなきゃいけないわ。何れにせよ、先ずは美濃よ。良しサル、あんたを秀サルの部隊の与力に付けるわ。」

「俺が秀吉さんの部隊の与力に？」

「そう。秀サルは川並衆を配下に置いてるでしょう。美濃を攻めるにこれを遊ばせておく理由は無いわ。だけど今回の会談で、理由はどうあれ秀サルは他国の使者に恥をかかせた。その罰として秀サルには美濃攻めにおける部隊の指揮を禁ずる。代わりに奴の部隊を率いるのはアンタよ。」

「待ってくれよ!?俺は部隊を率いた事なんて…」

「兵糧を集める時に川並衆や五右衛門を上手く使ったそうじゃない。顔見知りなんだから他の部隊より扱い易いでしょ。」

「で、でもよ…」

「それに秀サルには部隊を率いるのを禁じるけど、従軍するのは禁じてないわ。アンタの補佐役くらいは出来るでしょうね。」

要するに、次の美濃攻めにおける秀吉の指揮官としての手柄は認められず、それらは全て名目の指揮官である良晴に還元される。

ただし、指揮官として以外で挙げた手柄に関しては相応に評価すると言うに等しい。

「なんか釈然としねえな。結局俺は秀吉さんの威を着て手柄だけ貰うようなもんじゃねえか。」

「どうせ二十人にも満たない小部隊でしょ。大した手柄は期待してないわ。それよりも、人を使う事を学びなさい。何れ自分の部隊を持ちたかったのならね。」

「…おう。」

「六、アンタもよ。今川との戦じゃ大した手柄は挙げられなかったでしょ。今度は必ず手柄を挙げるのよ。」

「はっ！お任せくださいっ！この柴田権六勝家、必ずや姫様が御満足して頂ける手柄を挙げて見せまする！」

「フフツ、励みなさい。」

勝家の宣言に信奈は楽しげに笑うと、手に持った杯を呷る。

その肌はほんのりと朱が差し、吐息には艶やかな熱が混もつていた。

「ふう、なんか熱くなってきたわね。脱ぐ。」

「姫様っ!？」

「ちよっ!?!なにやってんだよ信奈っ!？」

急に立ち上がったと思いきや、身に付けていた服を脱ぎだし半裸になった信奈を良晴と勝家は止めようとする。

だが信奈は据わった眼で二人を不機嫌そうに見る。

完全にアルコールで出来上がってしまった。

「あによ?はだかになってなにがわるいの!いぬちよ、いぬちよ!」

「解ったから取り敢えず座れ!もう怖くて仕方ねえよ!主に素面になった後の俺の処遇がっ!」

「良サル、姫様を見るなっ!部屋の外に出てろ!」

「あん?なにかってにかえろうとしてのよ。あたしがまだのんでるでしようが!」

「いやもう本当に止めとけて。絶対明日後悔するから。」

「よしっ、わかった!まうわよ。」

「舞うわよじゃねーよ!?!頼むから動かないでくれっ!？」

「姫様見えてますっ!見られちゃいけないところが見えてますっ!？」

その日、歴史書には残らない信奈の黒歴史が、また一つ増えたのだった。

今宵はこれまでに致しとう御座りまする。

龍の父子

懐かしい夢を見ている。

あれはそう、生まれて初めて稲葉山城に登城した日の事だ。

父に手を引かれて城門を潜り、通された部屋で最初に謁見したのは、当時まだ斎藤利政と名乗っていた道三だった。

「ほう、これが御主の娘子か、重元。中々可愛らしく、そして賢そうな息女じゃのう。」

その時半兵衛は人見知りから顔をうつ向け一言も発する事が出来なかったが、道三は僅かに見える半兵衛の瞳の奥に知性の輝きを見出だしていた。

「実は今日は孫を呼んでおつてな。儂に似て中々男前じゃ。歳も近い良き遊び相手となろう。おい、喜太郎。」

道三に呼ばれ、一人の少年が部屋に入ってきた。

同年代に比べれば頭一つ大柄で、日に焼けた焦げ茶色の素肌は少年の活発さを象徴している。

だが道三の言うように顔立ちは良く、歩いて座るまでの動作にも品位が見て取れた。

「儂の初孫の喜太郎じゃ。喜太郎、これは菩提山城の城主の竹中重元じゃ。」

「初めまして喜太郎様。竹中重元と申します。此方は娘の半兵衛に御座います。」

そう言つて重元が頭を下げると、半兵衛も慌てて父に続く。

そうして再び頭を上げた半兵衛が見たのは、好奇心を押さえきれぬ爛々とした瞳で半兵衛と視線を合わせる喜太郎だった。

そんな孫の様子を察した道三は、咳払いを一つすると孫の背を推す。

「喜太郎、半兵衛はここに来るのは初めてじゃ。案内をしてあげなさい。」

「わかった、じいちゃん！半兵衛、来い！」

言うが早いのか、喜太郎は半兵衛に駆け寄るとその手を引っ張り部屋

から飛び出した。

突然の事に半兵衛が目を白黒させるのもお構い無しに、喜太郎はズンズンと城の中を進んでいく。

「こっちに行く」と大広間。父上たちがよく話し合いをしてる。この階段を上ると物見の窓があつて、下の町がよく見えるぞ。ここを降りると炊事場に着く。忙しい時を狙えばつまみ食い出来るけど、バレたらおいのに怒られてしまうんだ。」

それはもう楽しそうに、喜太郎は城の隅々まで半兵衛をつれ回した。

半兵衛はそれに着いていくのに必死で縁に反応も返せなかったが、喜太郎は気にした素振りも見せず無邪気に城を駆け回った。

その途上で、半兵衛は尿意を催した。

下半身を締め付けるような感覚に半兵衛は焦りを覚えたが、男の子に尿意を訴える事の羞恥から厠の場所を聞けない。

そんな半兵衛の様子に喜太郎は気付かない。

逃げ出す訳にもいかず、尿意を訴える事も出来ず、半兵衛は顔を真っ青にして喜太郎に手を引かれた。

だがそれも長くは続かなかつた。

とうとう我慢の限界に達し、半兵衛は遂にその場に蹲ってしまう。

「…どうした、半兵衛?」

様子がおかしい事に漸く気付いた喜太郎が声をかけるが、半兵衛は答える事が出来ない。

「おい、腹でも痛いのか…?」

もう一度声をかけ、蹲る半兵衛の横で膝立ちになった喜太郎は、自分の足元を生暖かい水が濡らしているのに気が付いた。

その水溜まりは、半兵衛の足元から広がっている。

「ああ、いやあ…」

濡れた床にペタンと腰を落とし、半兵衛は恥ずかしさからポロポロと涙を溢し始める。

父が奉公する主君の城で、しかも同じ年頃の男の子の前で漏らしてしまう。

その絶望感は半兵衛の自尊心を酷く傷付けた。もう消えて無くなってしまうたい。

そんな思いを抱きながらも、どうする事も出来ず涙に暮れる半兵衛は、いつの間にか喜太郎がいなくなっている事に気付かなかった。それから暫くして、半兵衛は突然頭から水をひっかけられた。

「このノロマがつ!!」

頭から濡れネズミになって呆然とする半兵衛に怒鳴り付けるのは、水桶を持った喜太郎である。

泣く事も忘れて呆気に取りられる半兵衛を尻目に、喜太郎は近くの物陰に水桶を隠す。

すると程なく、怒鳴り声を聞き付けた城の者達が集まってきた。

一体何があったのだ。

そう尋ねる者達に、喜太郎は濡れた半兵衛を指差し騒ぎ立てた。

「こいつがあんまりにノロマ過ぎてムカついたからシヨンベン引っ掻けてやったんだ。いいきみだ!」

それからはもう大変だった。

喜太郎はどこかに連れてかれ、半兵衛は別室で着替えさせられそのまま帰宅。

結局その後喜太郎がどうなったかは解らなかつた。

ただ程なくして、美濃に一つの噂が流れた。

斎藤道三の孫、喜太郎が菩提山城城主、竹中重元の子に小便をかけたという。

重元は喜太郎の遊び相手にと我が子を喜太郎のもとに連れて行ったが、喜太郎は気に入らず馬鹿にした末の悪戯だったと。

それから数ヶ月経ち、半兵衛の記憶からあの日の恥辱も漸く薄れ始めた頃、離れの縁側で読書をしていた半兵衛の元に矢文が飛んできた。

矢文と言っても先端に矢じりは付いておらず、勢い弱くヒヨロヒヨ

口と風に煽られながら足元に落ちてきた。

飛んできた方向を見れば、草影がガサガサと動き、人が離れて行くのが分かる。

周りには他に人がおらず、自分に向けて射られたのは明らかだった。

少し不気味に思いながらも手紙を開いてみれば、中身は子供の字で書かれた丁寧な謝罪文である。

以前、あなたに水をかけた者である。

あの時は本当にすまなかった。

初めて同い年の子と会えてはしゃいでしまったんだ。

あんな目に合わせるつもりはなかった。

本当にごめん。

もう一度、ちゃんと会って謝りたい。

もし良ければ、明日も同じ時間にここにいてくれないか？

どうか、お願いします。

そんな内容が文には書いてあった。

手紙を読んだ半兵衛は困った。

半兵衛にとって、あの日の記憶は一日でも早く忘れ去りたいもの。

当事者である喜太郎にだって、出来れば会いたくない。

だけど、手紙の文章からは送り主の心からの謝意と誠意が感じられた。

いかに人見知りとはいえ、この切実なまでの願いを無視するのは忍びなかった。

どうしたら良いのか分からず、かといって誰かに相談することもできず、結局半兵衛は離れの中で指定された時間を待った。

そして、前日矢文が射られた同じ時間、喜太郎が庭に現れた。

供も付けず一人で庭の真ん中に立った喜太郎は、キョロキョロと辺りを見渡し自分以外に誰も居ないことを確認すると、少し残念そうに眉を下げるも黙ってその場に立ち続ける。

その様子を僅かに開いた襖の影から見ていた半兵衛は、意を決して縁側へと出た。

「おおつ、半兵衛！来てくれてありがとう！」

「お、お久しぶりです、喜太郎様。」

半兵衛の姿を認めて笑顔になった喜太郎に、半兵衛は緊張気味に挨拶をする。

それを見てホツとした様子の喜太郎だったが、すぐに表情を引き締めると半兵衛に向かって頭を下げた。

「手紙にも書いたけど、あの時はごめん。」

手紙と同じ、真摯な謝罪だった。

少なくとも半兵衛には、喜太郎が本気で謝っていることが伝わった。

だからこそ困った。

生まれつき人見知りな半兵衛には、人と接する機会が他人に比べ圧倒的に不足している。

城の外で同年代の子ども達が楽しそうに遊んでいるのを、城の中から眺めるばかりの生活をしていた。

父親が稲葉山城に連れて行って喜太郎と会わせたのも、そうした半兵衛の気質を心配した部分があった。

早い話、半兵衛は誰かと喧嘩したり、謝罪を受けた事がなかったのだ。

だから喜太郎から頭を下げられても、どうしたら良いか解らない。

脳内をぐるぐると本で読んだ知識が駆け巡るが、考えが纏まらず言葉が喉の奥から出てこない。

遂に涙目になり、雫が溢れ落ちそうになったその時、
ぐううううく

気の抜けたような低い音が辺りに響いた。

音の出所は喜太郎だった。

「…ははっ、すまん。朝から緊張して朝食が喉を通らなくてな。なんか腹へっちまってる。」

照れた様子でそう言うと、喜太郎は腹を押さえながら頭を掻いた。

「……………(ぎ)飯。」

「えっ?」

「ご飯、食べていかれますか？」

自然と半兵衛はそう尋ねる。

なんかも喜太郎の腹の音を聞いたら、あれこれ思い悩んで泣きそうになってた自分がバカらしくなっていた。

そんな半兵衛の心境を知ってか知らずか、喜太郎は嬉々として飛び上がった。

「マジかっ！うわっよっしやっ！実はこの山登って来る時もずっと腹ペコだったんだ。ありがとな、半兵衛！」

「は、はいっ！少々お待ちを。」

そうして半兵衛は喜太郎を離れの中に入れて、朝食の残りで簡単な食事を用意して喜太郎に食べさせた。

以来、時折喜太郎が訪ねて来る度に食事をたかるようになるが、なんだかんだ言いつつも半兵衛は喜太郎の食事を用意している。

「……………ん？」

紅葉を揺らす秋風が、半兵衛を微睡みから目覚めさせる。

膝の上には書物が置かれ、肩は縁側の柱に預けられていた。

どうやら読書をしていたら眠ってしまったらしい。

寝ぼけ眼を擦り伸びをしていると、パタパタと誰かが廊下を走って来る音が聞こえてくる。

現れたのは、半兵衛の側近である喜多村直吉である。

「重治様、稲葉山城より急報が。」

「…織田がまた攻めて来ましたか？」

「はっ！既に伊賀守様が稲葉山城に向かわれています。」

「…そうですか。叔父上が。」

叔父が出仕したという事は、他の西美濃三人衆も召集を掛けられているだろう。

即ち、前回同様に大規模な戦闘が行われる公算が高いと一色義龍は読んでいるのだろう。

「…それと、龍興様から言伝が。」

「喜太郎様から?」

「はっ。お前は体調が優れない事にしておくから寝てろ、との事です。」

「…なるほど。解りました。」

一色龍興という男は、殊更女性に気を遣い、その心情を慮る。

敵軍が攻めてくる状況であっても、その中に女友達が心を寄せている人が有るようならば、友が戦に関わらぬよう手を回すくらい平気でする。

半兵衛は、そんな心遣いが悔しくもあり、同時に有り難くもあつた。今も昔も…

稲葉山城の評定の間には、美濃国の重鎮達が集まっている。

議題は勿論、二度目の侵攻を開始した織田への対処である。

その中心にある一色義龍は、目の前で頭を下げる三人の宿老を睨んでいた。

「織田がまた攻めてきたようだが、何やら墨俣に拠点のような物を作っているそうだな。」

「ははあ、廃城になって久しい城を密かに改築していたようで御座います。」

そう答えるのは稲葉一鉄。

西美濃三人衆に数えられ、義龍の側近も務める美濃の有力国人である。

「その城、元は我らの城と言うではないか。廃城にしたとはいえ、それを見すみす怨敵に譲り渡し、今まさに我が国を侵す拠点とされるを見逃すは、許されざる失態と思わぬか?」

「…おっしゃる通りに御座います。全てはこの直元の不明の致すところ。御前にて謝辞奉りまする。」

そう義龍に謝罪するのは西美濃三人衆の一人にして一色家家臣団最大勢力を誇る氏家直元。

墨俣の地も彼の領地に含まれた。

「此度の失態、西美濃の守りを任された我ら三人に責あるは動かざる事実。然らば我ら西美濃三人衆、迫り来る敵軍を前線にて迎え撃ち、撃滅を以て御祓とする所存に御座います。」

最後そう願ひ出るのは安藤守就。

彼もまた西美濃三人衆の一人であり、美濃国において強い影響力を持つ国人である。

また、半兵衛にとつての母方の叔父に当たり、父を早くに亡くした半兵衛の後見人の立場にもあった。

そんな三人が頭を下げる様子を目の当たりにし、義龍は大きく鼻を鳴らした。

「儂が気に喰わぬ物の一つは、大した目算も無く大言を吐き、周りを引つ掻き回した挙げ句に余計に傷口を開く輩だ。」

「……………」

「一鉄、直元、守就。御主ら三人合力し、必ずや織田のうつけ共を討ち果たせると誓えるな?」

「「はっ!」」

「ならばやって見せよっ!お主らの働きを大いに期待するっ!」

三人に激励の言葉を送ると、義龍は勢いよく立ち上がり他の家臣たちを見渡す。

「よいか皆の衆!尾張のうつけ姫は性懲りも無く我らが子々孫々の故郷を侵さんとしておる。許しておくべきかっ!」

「「「否っ!!」」」

「ならば弓を取れ!槍を取れ!刀を取れ!そして教えてやれ!我らが故郷を土足で踏み荒らさんとする罪深さを、奴らの血を以てっ!」

「「「応っ!!」」」

義龍の激に美濃の益荒男達が勇ましく応える。

瞳に闘争心を爛々と燃え上がらせ、来るべき戦の支度をすべく足音高らかに部屋を出ていく。

その中であつて、今一つ周りの熱量に着いていけぬ者が一人いた。一色龍興である。

もとより荒事を苦手とし、何かと理由を付けて戦評定を抜け出していたのだが、今日ばかりは絶対に参加せよと義龍より厳命された為此の場にいた。

しかしながら、血気盛んな家臣団や父を尻目に特に発言する事も無く、ただ座っているだけで評定は終わってしまった。

やはり自分がいる意味は無かつたか。

内心で自嘲しながら苦笑を浮かべ、家臣達に続いて部屋を出ようとする。

「龍興、少し待て。」

立ち上がった龍興を引き留めたのは義龍だった。

立ち止まった龍興を手招きして側に寄らせると、家臣が全員部屋を出た事を確認して義龍は口を開く。

「龍興、半兵衛はどうしておる？」

「半兵衛？ああ、あいつなら風邪引いたとかで臥せってるよ。多分、暫くは使い物にはならないじゃねえかな。」

半兵衛の体あまり丈夫で無いことは義龍も知っている。

体調不良を言い訳にするのは、彼女を表舞台に立たせないとするには最適だった。

「そうか。また奴の献策があれば良きかと思つたのだがな。」

「まあ具合が悪いなら仕方ねえよな。」

「…そうだな。ただ、ここ最近是不審な輩が半兵衛の周りを彷徨っていたという話も聞く。少し注意をした方が良いとは思わぬか、龍興？」

「…へえ、そんな噂が流れてるのか。初耳だな。」

内心ドキリツとしながらも、龍興はヘラヘラとした表情を取り繕う。

義龍はそんな息子の様子をじつと見つめる。

居心地の悪さから龍興が目を逸らすと、義龍は呆れた様に溜め息を吐いた。

「龍興、お前はもう元服し、一色家の嫡男としての立場も明確にしている。お前が思っている以上にお前は周りから見られているのだ。それを肝に銘ぜねば、苦勞するのはお前自身ぞ。」

「…ああ、解ったよ。」

「うむ。然らば此度の戦、本陣で儂の側に居ろ。」

「えっ、俺が!？」

父の言葉に龍興は虚を突かれる。

一応元服した折に浅井家との小競り合いで初陣は済ませているが、本格的な戦に出た経験は龍興には無かった。

前回織田が攻めてきた時も、留守居として城に残されている。

「随分と急な話だな。というか、俺が本陣に居たところであまり意味は無いと思うけど。」

「戯け。お前は人から見られる立場の者だと言ったばかりではないか。前回の戦は織田が浮かれていたから楽だったが、此度はそうはならないだろう。間違いなく、前回よりも激戦になる。」

「なら余計俺がいても…」

「ああ、お前が戦を左右する働きをするなど儂も考えてはおらぬ。だが、一色家存亡を決する戦に後継者が戦場にいる意味は十分にある。」
「…つまり、俺が親父の後を継ぐ事を周りに示すためにも戦場に出ろって事か?」

「そう言うことだ。ついでに戦場の空気に慣れ、部隊の動かし方を見て勉強せよ。いくら書物を読んだ所で、ああいうのは実戦でなければ身に付かぬものだ。」

「はあ、解ったよ。今回は父上様を手本に勉強させてもらいます。」

「ふっ、そうしろ。よしっ、お前も戦の準備をしてこい。」

龍興の返答に頬を緩ませ、義龍は息子の背を叩いて立ち上がらせる。

そうして改めて部屋を出ようとした龍興だったが、不意に父との会話を違和感を覚えた。

「なあ、親父。」

「ん?どうした?」

「なんか具合が悪かったりするの？」

龍興の問いかけに、義龍は驚いた様子を見せる。

かくいう龍興もまた、思わず口から出た自分の言葉に驚いていた。

「…なぜ、その様に思った？」

「いや、なんとなく言うかさ。ほら、急に俺を後継者として示すとか言い出したから、なんか調子が悪いのかなって…」

慌てて言い繕った割には思いのほかそれっぽいな理由となった。

これまで義龍が表立って龍興を後継者にするという話をした事は無い。

急にそんな事を言い出したのも、健康不安があつての事ではないかと龍興は思ってしまった。

「ふんっ！考えすぎじゃ。尤も、元服したにも関わらず城下で遊び歩いてばかりの我が子を思つて憂鬱になる事はあるがな。」

「ええと、ごめん。」

「謝るくらいなら早く儂を安心させる。ほら、行け。」

口元に笑みを浮かべながら、義龍は龍興を急かして部屋から出す。

部屋から出た龍興は、暫しの間その場に留まった。

「…親父、なんかいつもより優しかったな。」

その優しさが、龍興の心に一抹の不安を覚えさせた。

先の敗北から早数ヶ月、織田信奈は道三の譲り状を根拠に美濃国への侵攻を開始した。

それに先立ち、東美濃との国境に小牧山城を建設すると共に、縁戚である東美濃の豪族、遠山氏と連携し東美濃へ圧力を掛けた。

これにより、一色家は東美濃へ兵を割く必要になり、国内の兵力を分散せざるを得なくなる。

そして織田軍は、墨俣城を中継地点として西美濃から一色家領へと侵攻した。

先の戦で手痛い敗北を喫した信奈は、今回の戦を負けられぬ戦であ

ると決し、万全の策を以て臨んでいた。

一方で一色義龍も西美濃の豪族だけでは織田の勢いを止めきれぬと判断し、早々に撤退を指示し本隊と合流させる。

それと同時に、物見の情報から小牧山城には攻め混むだけの兵力も物資も無いと判断し、僅かな見張りだけを残してこれもまた本隊に取り込んだ。

かくして、総力を結集した一色軍は稲葉山城へ向かって進軍する織田軍の進路上に陣を構える。

ここに至り信奈と義龍、双方の思惑が一致した。

即ち、決戦の時は来たり。

後世において「中濃の戦い」と称される、織田と一色の間で行われた最大の戦いにして、最後の戦いとなった戦いが、今まさに始まるうとされていた。

今宵はこれまでに致しよう御座りまする。

蛇を越えし龍

墨俣城で補給を済ませた織田軍は、翌日には敵本拠地である稲葉山城へ向けて出立した。

その途上には前回のような新設された砦は無く、戦闘行為も一切行われていない。

にも拘らず、進軍速度は前回に比べると格段に遅く、非常にゆったりとしたものだった。

これは前回の戦で望外の連勝から無闇矢鱈に進軍した結果兵を疲弊させ、警戒を怠った末に敵の奇襲を許した失態を二度とせんとする意気込みの現れであった。

「とは言え、一度くらいは仕掛けてくるかと思っていたけど。義龍はかなり慎重な性格のようね。」

その日の行軍を終えた信奈は、陣中で溜め息混じりにそう語る。その様子には少なからず疲労の色が見える。

如何に残存する体力を考慮し進軍速度を緩めたとしても、常に警戒をしながら敵地を進軍するのは体力的には兎も角、精神的な疲労は妨げ辛い。

「姫様、その言い方だとまるで奇襲をして来て欲しかった様に聞こえますけど。」

「まあ、そうね。同じやり口仕掛けてくるなら返り討ちにしてやろうと思っていたわ。」

万千代の言葉に、信奈は獰猛な笑みを溢しながら答える。ただし、目だけは笑っていない。

「人というのは一度上手く行ったやり方が、次も必ず上手く行くと無意識に思ってしまうものだわ。相手が対策をしてくるとは夢にも思わずにね。だけど義龍はそうはしなかった。それだけで義龍が一廉の武将であることが窺えるわ。流石ママシの子と言ったところかしらね。」

信奈は自分のすぐ横へと目を走らせる。そこに坐すのは信奈の義父であり、美濃国の先代領主の斎藤道三である。

「ママシ、この後義龍はどの様にして私たちを迎え撃つと思う?」

「……正直に申すとよく分からん。儂の知る義龍と今の義龍は、似て非なるものじゃ。」

「…具体的には?」

「昔の義龍は激しやすく視野狭窄な部分があった。一つの事を目に捕らえてしまうと他の事には向かず、それ故に搦め手に容易く掛かってしまう甘さじゃ。しかし、先の戦においては柔軟に策を巡らし敵を陥れ、此度に関して我らの対策を見越して前回の策に固執しない思慮深さがある。明らかに、以前の義龍とは別人じゃ。」

「…なるほどね。大名として今までの自分を改めたか。いや、むしろ大名としての立場が義龍を一つ上へと昇らせたのかもしれないわね。利治、あんたはどう思う?」

今度は傍らの小姓へと話を振る。

振られたのは久太郎と同じ年頃の可愛い顔をした少年である。

少年の名は斎藤利治。

帰蝶と共に尾張へ逃れてきた道三の末っ子であり、現在は信奈の小姓として側仕えしている。

義龍とは二十以上年の離れた腹違いの兄弟だ。

「はっ!義龍の兄上は自分にも他人にも厳しく、時には癩癩を起こすことありました。ですが、冷静であれば相手がたとえ下々の者の言葉だろうと耳を貸し、的を射ている思えば己の考えに組み込むお方です。」

「ふうん。元より他者の意見を聞き自分の物とする度量は有ったわけか。ママシ、どうやら義龍はあんたの後継者として不足は無かったようね。」

「だがそれは、あくまでも一大名としての器じゃ。義龍には天下を統べるだけの器も野心も無い。つまり、人に夢を見させるような人物では無いのじゃ。」

「故に天下を狙ったママシの後継者として相応しくないと。ふふ、随分と厳しい親ね。」

何かが独特の感性に引つ掛かったのか、信奈は道三の話に声を上げ

て嗤う。

しかし直ぐに顔を引き締めると、スクツと立ち上がって陣内の家臣達を見渡す。

「物見の報告によれば、明日にはこの先に陣を構えた敵と当たるわ。今宵は準備を怠らず、気を引き締めて明日に備えよ。いいわねっ！」
「「「はっ!!」」」

家臣達が一齐に頭を下げると、信奈は満足した様子で奥に下がろうとする。

その帰り際、勝家を呼ぶと耳を寄せさせる。

「六、明日の先鋒をあんたに任せるわ。掛かれ柴田の力、存分に見せつけてやりなさい。」

「っ!?!はっ、お任せ下さい! 必ずや、姫様にご満足いただける働きを致しましょう!」

「ふふっ、励みなさい。」

感激した様子の子の勝家を残し、信奈は今度こそ下がっていった。

陣内での評定が終わって暫くした頃、各隊はそれぞれの持ち場にて明日の戦に備えていた。

その中の一つ、陣の中心からやや外れた小規模な部隊が寄り集まっている所に相良隊はあった。

隊員の数は二十四人。

良晴や秀吉を抜くと大部分は五右衛門が率いる川並衆、それ以外は中村から呼び寄せた若い衆である。

「はあ、いよいよ明日かあ。」
その中心たる部隊長の良晴は、憂鬱な心境を隠せず何度も息を吐く。

既に初陣は済ませてるとはいえ、良晴にとっては初めて人を率いる戦。

一兵卒の時とはまた違った緊張感に苛まれていた。

「そう気負うで無い、と言っても流石に難しいかのう。じゃがこれも経験じゃ。この乱世で出世したいと願うならば、必ず向き合わねばならぬぞ。」

そう言つて良晴の横に座つた秀吉は、肩を叩いて良晴を励ます。

それを受け、少しだけ良晴は顔を上げた。

「まあ、そうだよな。信奈だつて俺達の命と夢を背負つてるんだ。俺も頼りにしてくれてる人達くらいは背負つてやらねえとな！」

「その意気じゃ！さつきよりマシな顔になつたぞ。」

「ありがたいな、秀吉さん。ところで一つ確認したいんだけど、俺達は稲葉山城に向かつて行つてるよな。順調に行けばこのまま城攻めになるのかな？」

「いや、そうはならんじやろ。最終目標こそ敵本城を落とすことじゃが、その前に美濃の中央部の城を落とすのに尽力するであろうな。」

「えーと、長期戦を見据えてか？」

「否じゃ。むしろ稲葉山城の南を押さえる事が、最も効率的に美濃を手に入れる事に繋がるんじやよ。」

いまいち要領を得ない様子の良晴に対し、秀吉は良晴にも解りやすいように地面に簡単な絵を描いた。

「よいか？美濃国は東西南北に繋がる交通の要所。じゃが、稲葉山城より北に行くのと険しい山々が連なつておつて少数なら兎も角纏まつた数の軍を通すの難しい。即ち、東西に軍を行き来させるには南部の街道を通る必要がある。逆を言えば、ここを我らが押さえてしまえば一色家の軍事行動を著しく制限する事が可能なのじゃ。」

「ええと、ちよつと待てよ。一色が自由に軍を自由に動かせなくなるよと……あつ！」

地面に描かれた略図と睨み合つていた良晴は唐突に閃いた様子を見せ、秀吉は笑みを濃くした。

「気付いたか、良晴？」

「中央を押さえて一色を動けなくしたら、浅井と協力して西美濃を囲める！」

「その通りじゃ！南部の街道を押さえ稲葉山城と西美濃の豪族達との

連携を分断すれば、西美濃は四面楚歌になる。あとは攻め放題、調略し放題と言う訳じゃな。」

織田が浅井と同盟した理由の一つがこれだ。

西美濃を囲んでその地の豪族達を各個撃破するには、浅井との連携が大きな助けとなる。

そもそも、美濃という地を大局的に見た場合、北部を飛驒山脈、東部を木曾山脈に囲まれ、耕作に適した土地は西部に集中している。

その為、西美濃三人衆に代表されるように有力な家臣も西部に多く、ここを切り崩す事で一色家の力を大きく削ぎ落とす事が出来る。

「無論それは一色方も承知しておる。故に、我らが中央を押さえようとするのを全力で撃退しようとしてくる筈じゃ。」

「でも一旦中央部を取らせておいて東と西、それと稲葉山城からの三方向から一斉攻撃してくるって可能性は無いのか？」

良晴は現代にいた頃に遊んでいた歴史戦略ゲームで、攻められた側が敵を撃退する時の代表的な攻略法を述べてみるが、秀吉は首を振って否定する。

「無きにしても非ずじゃが、現実的には難しいじやろな。さつきも言うたように、美濃の地は街道を外れると険しい山々が連なっておる。そこを通って伝令を送るのは一苦労じゃし、連携の遅延は回避じゃろ。よほど綿密に作戦を詰めねば成らぬし、少しの狂いで作戦そのものが崩壊しかねん。」

「そ、そうなのか。因みになんだけど、わざと防備を無くした城に敵を誘い込んで、周囲を囲んで袋叩きにするって策は…」

「そんなものさつきと城を出てしまえば良い。そもそも城を囲むというのは、兵を分散させるということじゃ。よほどの戦力差が無ければ各個撃破が怖すぎて出来んわい。」

戦略ゲームで言うところの『棺桶』という作戦を良晴は出してみることが、これも秀吉は即座に否定する。

野戦でなら兎も角、城攻めは相手を包囲しても攻める側の攻撃地点は限定される。

城壁や堀があれば、それは立派な防衛設備。

完全に防衛力を無くした棺桶にするなら、堀を埋め、城壁を壊し、城門の扉を外しておく位しなければ意味が無い。

当然そうなればそれはもう城では無く、入ろうとする者はまずいな
い。

仮に何かの間違いで城に入ってしまったとしても、兵力が拮抗している状況で相手が城の周りを囲んだならば、自分達は兵力を集めて一点突破。

その後は城を囲む為に分散した敵を各個撃破していけば良い。

即ち、秀吉から見れば『棺桶』戦法は机上の空論。

現実性は何一つ無い無意味な作戦であった。

「じゃが、発想自体は面白い。相手を戦略上は無価値の場所を取らせて無駄手を使わせる。上手く嵌まれば十分有効じゃ。」

「マジで！なんかちよつと自信が出て来たかも。でもこうして見ると戦って囲碁に似てるな。どこを占領すればより有効に陣地を広げられるか。まさしく陣取り合戦ってな感じで。」

「そうじゃのう。碁は戦略、将棋は戦術を競うものと半兵衛に教わった。彼奴はどちらも上手かった。」

不意に秀吉の目が遠くを見る。

前世において、半兵衛と碁を打ってる時はよく碁に絡めて戦の話をした。

大抵は秀吉が思い付いた作戦を口にし、半兵衛がそれについて淡々と問題点を指摘するのが常だったが、それでも秀吉は半兵衛の話を聞くのが楽しかった。

まるで、賢者の叡知を一人占めしている感覚を味わえた。

「…半べ、じゃなかった、月の奴、いまどこにいるんだろうな？」

「…わからぬ。願わくば、菩提寺山の庵にいて欲しいものじゃ。」

夜空に浮かぶ半月を見上げ、秀吉は静かに呟いた。

翌日の早朝、東西に伸びる街道の通る平野にて、織田と一色の軍が
相対した。

双方ともに陣を構え、如何なる号令にも応えんと、気力、体力を充実させている。

織田軍本陣中央では、マントを羽織った信奈がじっと瞼を閉じ、その時を待っていた。

そこに一人、甲冑を身に纏った万千代が近づくと。

「姫様、先鋒の柴田勝家様、準備が整ったとの事。」

「デアアルカ。」

瞼を上げて短く応えようと、信奈は眼前に広がる戦場を見据える。

「数の上では私達がやや有利といったところかしら？」

「ええ。我らが五千、相手が三千と八百といったところ。浅井が上手いこと西美濃に圧力を掛けているおかげで、東西に兵を分散させる事に成功しています。八十点です。」

「とはいえ、決定的な差とも言い難い。いずれにせよ、この決戦が全てを決めるわ。」

力強くその場に立ち上がると、遠くに見える一色家の旗を睨み付け、信奈は叫んだ。

「柴田勢前へ！尾張最強の力を見せつけよ！」

一方その頃、一色家の本陣からは勝家の軍勢が前進してくるのが確認され、俄に諸将の動きが慌ただしくなっていた。

義龍の元に稲葉一鉄が近づき、その旨を報告する。

「大殿、織田が動き出しました。」

「…先鋒は柴田か？」

「ええ。武勇においては織田随一という噂もありますれば妥当な人選ですな。」

一鉄の報告を受け、義龍は後ろに控える龍興の方を向いた。

「龍興、今の報告を聞いたな。何故、信奈は柴田を先鋒にしたのだと思っ？」

「えっ!? いや、そりゃ一鉄が言ったように柴田勝家が織田で一番の武勇があるから…」

「本当にそれだけか?」

義龍は改めて息子に問い掛ける。

それに龍興が考え込むと、僅かに頷き答えを口にする。

「柴田勝家は織田家で内紛が起きた時に信奈とは敵対した。許されはしたが、それ以降に目立った戦功はない。となれば家中での立場が怪しくなってくるから、信奈はそれを気に掛けて何とか手柄を立てさせようとしてるんじゃないかな?」

「うむ、よい着眼だ。儂もそう思う。あれは合理主義者などと口では言っているが、本質的に身内に甘い人情家だ。目に掛けた部下が肩身の狭い思いをしておるのを、何とかしたいと思っておるのだろう。」

義龍たちの予想通りである。

内紛を経て信奈の下に帰参した勝家の立場は、必ずしも良いとは言えない。

尾張兵の中にあつて武勇随一と言われる一方で、帰参後に目立った手柄を上げていないにも拘らず、筆頭家老の佐久間信盛や側近の万千代、政務筆頭の貞勝に続く地位にいる事に、家中では不満の声が上がり始めている。

それに気付いた信奈は、今回の戦を勝家の名誉挽回の機会としたい思いがあった。

「時に龍興よ、兵法の基本は相手の嫌がる事をする事だ。予測の外から殴り付け、目論見を潰し、後手に回らせる。それ即ち必勝への道筋なり。」

我が子へ戦の作法を説き、義龍は狙いを定めた。

その視線の先には、騎馬隊を率いて前進する勇壮な姫武者の姿がある。

「まずは一つ、先手を取らせて貰うとしよう。」

戦場から少し離れた小山の山道を、二人の若者が登っていく。先導するのは西美濃竹中家に仕える喜多村直吉。

それに続くのは彼の主君である竹中半兵衛重治であった。

「重治様、あと少しで頂上。もう一頑張りです。」

「はあはあ、はい。ありがとうございます。」

息も絶え絶えになりながらも必死に足を動かし半兵衛は直吉に着いて行く。

程なくして、山道の奥に青空が見えた。あの先が山の頂上である。齒を喰い縛って氣力を振り絞ると、半兵衛は落ち葉を踏み締める足に力を込めた。

「ああつ、見えましたよ重治様！ちょうど始まるころだったみたいです。」

先に到着した直吉の言葉に引つ張られ、半兵衛は横に並ぶ。

額の汗を拭いながら麓を見下ろせば、桔梗紋の旗を掲げた騎馬武者の集団が先陣を切って一色軍へ突撃している。

「迎え撃つのは、氏家様の軍ですか？」

「どうやらそのようです。騎馬隊が前に出ています。」

「騎馬隊が？」

直吉の言葉に半兵衛は眉間へ皺を寄せる。

だがすぐに、納得した様子で大きく頷いた。

「なるほど、義龍様は後の先を取るおつもりなのでしょうね。」

「後の先？氏家様の騎馬隊に何か仕掛けがあるのですか？」

「はい、恐らくは。事前に聞いていた話から考えると、新兵科を試すおつもりなのでしょう。」

眼前の戦場では、今まさに柴田の騎馬隊が氏家へ襲い掛かろうとしている。

だが、氏家の兵達は目の前に敵が迫ってきていても慌てる様子は無く、どこか余裕をもって柴田勢を迎え撃たんとしている。

その姿に、半兵衛は義龍が氏家に策を授けたことを確信する。

「不遜ながら私が思うに、謀に関しては義龍様は道三様に遠く及ばず。されど戦において、義龍様は既に道三様を超えるものをお持ちです。」

半兵衛は思う。

もし、織田信奈の胸中に義龍を甘く見る心が一分でもあるようならば、絶対に義龍に勝つことは無いだろうと。

それを証明するが如く、戦場を揺るがす轟音が鳴り響いた。

本陣を立った柴田勢は、問題なく一色勢へと迫っていた。

皆一様に闘志を滾らせ、今にも飛び出しかねん氣勢をもって勝家の合図を今や遅しと待ちわびている。

そんな彼女等の前に展開するのは、氏家直元率いる騎馬隊。横陣を敷き、勝家達を迎え撃たんとする構えである。

不足無し。

勝家は槍を振り上げると、その切っ先で天を指した。

「皆の者、尾張兵の力を見せつけよ！一斉に…」

攻め掛かれ、そう続けようとした勝家の背筋に言い様の無い寒気が走る。

戦人の勘とも言えるだろうか。

いずれにせよ、このまま進んだ先にある濃密な死の匂いを勝家は感じ取っていた。

「止まれっ!!」

そう叫んだ勝家に驚きながらも、配下の兵達は馬の手綱を引く。

それとほぼ同時に、氏家勢の騎馬武者が一斉に頭を垂れた。

その後ろから現れたのは、火縄銃を構えた鉄砲隊である。

「騎馬鉄砲だっ!?!」

悲鳴じみた叫びが柴田勢から上がるのに続き、無数の発砲音が鳴り響く。

僅かに制止が間に合わずに飛び出していた柴田勢が、バタバタと落馬する。

予期せぬ先制攻撃を受けた柴田勢は攻勢から一転、敵前にして混乱状態に陥ってしまった。

「いまだっ！かかれえっ!!」

これを見逃す馬鹿はいないとばかりに、鉄砲隊を下ろした氏家勢は猛然と勝家達に襲い掛かる。

足が止まった騎馬隊ほど狙いやすい的是無い。混乱して統制を失ったなら尚更である。

万事休す。

氏家勢の尖兵が、立ち往生する柴田勢の兵へと槍先を突き立てんとする。そして

「うおおおおおっつう!!!」

凄まじい怒声を上げる勝家に横合いから槍で殴られ、馬ごと吹き飛ばされた。

敵味方問わず、思わずその光景に呆気に取られる中、勝家は鬼の形相で味方を見る。銃弾が掠めたのか、頬に出来た切り傷から鮮血が流れ落ちている。

「尾張の兵が鉄砲ごときにビビるなあっ!!ブツ殺すぞ!!」

もはや泣く子を黙らすどころでは無い。鬼すらも黙らせる閻魔の一喝が戦場に響く。

だがそれが、配下の兵達の闘志を甦らせた。

勝家は閻魔の様相のまま敵軍を向くと、雄叫びを上げてその中心に飛び込んだ。

それに続かぬ者など、柴田勢にいる筈も無い。

勝家達が奮闘する様子は、織田本陣からも確認できた。

それを見ながら万千代は、隣の信奈へと声をかける。

「六さん、よくやってきてますね。一時はどうなる事かと思いましたが、見事に立て直しました。八十点ですっ!」

「六ならこのくらい当然よ!それとも、万千代は六がやらかすでも思ってたの?」

「…正直に言うると少し心配してました。ここ最近、六さんの周りが少し騒がしかったので。本人も気にしていましたし。」

「…まあ、そうね。それに関しては私も考えたのよ。今回あの娘を先

鋒に抜擢した理由の一つであることは間違いないわ。でもね…」

前線では柴田勢が猛烈な勢いのままに氏家勢を押し上げていた。それを見た信奈は笑みを濃くする。

「柴田勢こそ尾張で最強。これに勝る抜擢の理由は他に無いわ！」
勝家達の奮闘に織田軍全体が大いに士気を上げた。

然れど戦は、まだまだ始まったばかりである。

今宵はこれまでに致しよう御座りまする。

読み合い

「…少し敵方を甘く見ていたかもしれぬ。」

戦況を見守っていた義龍は不機嫌そうに呟いた。

騎馬鉄砲隊の初撃をもつて氣勢を制し、立て続けに騎馬突撃で敵先鋒を撃破する策は勝家の奮闘により防がれた。

だが、義龍の顔に焦りの色は無い。冷静に作戦失敗の原因を見極めんとしていた。

「いささか鉄砲の数が少なかったかもしれんな。もう五十丁ほど用意出来れば違つただろうに。」

「あとそれと、練度が少し不足してたようだぜ。もう少し引き付けてから撃つべきだった。まあ直元の奴も鉄砲隊を運用するのはこれが初めてだ。十兵衛のような働きを期待するのは高望みのし過ぎだな。」

龍興が横から口出しをする。

義龍は息子の方をチラリと見る。そして大きく息を吐く。

「いまここに居らぬ者の事を言ってもどうにもならぬ。もし奴を呼び戻したければ戦が終わってからにしろ。」

「えっ!? いいのか?」

父の言葉に龍興は驚く。

内紛の際に道三方に付いた明智一族は美濃を追放され、親類を頼つて越前へと逃れた。

噂では朝倉家に仕えたそうだが、何やら一悶着あつた末に暇乞いと越前から来た商人から聞いている。

そんな事よりも、龍興にとっては父が明智一族を許そうとしているのが意外だった。

「そこまで驚く必要は無い。奴らも義があつて道三に付いたに過ぎん。筋を通し帰参を願ひ出れば、無下にはせん。」

義龍の言う事は道理である。

追放されたとはいえ、明智一族は美濃に強い影響力を持った国人であり、中でも光秀は道三も認められた麒麟児である。帰参すれば必ずや一

色の力強い戦力となる。

ただ龍興の知る義龍は、敵対する者には非情であり、簡単に意見を变えない頑固者であった。

故に明智を排斥する事に一切の妥協はせず、他の国人の取り成しも撥ね付けた。

それがどうしてか、こうもあつさりと帰参を許すような発言をする。

周りの家臣達もざわつきを押さえきれずにいる。

「それよりも龍興、戦場を見よ。息を吹き替えた柴田が氏家を押し切ろうとしておるが、どうしたら良いと思う？」

「あ、ああ。やっぱり下手に留ませるよりも少し下げて援軍を送るべきじゃねえかな？多分あいっただけじゃ持ちこたえるのは難しい。」

勝家の勢い押される味方を前に龍興は提言するが、義龍は口許に僅かな笑みを浮かべ首を振る。

「儂も織田を見くびっておったが、お前は直元を甘く見すぎだ。あいつは柴田ごときに押しきられるような柔な男では無い。」

西美濃筆頭の実力はそんなものでは無いと義龍は断言する。

そこには、家臣に対する強い信頼があった。

「先ほども言ったが、此度の戦の先手は確実に取らせて貰う。」

柴田勢で最初に気付いたのは、勝家の側近を務める毛受勝照であった。

初撃の混乱を勝家の一喝で回復した柴田勢は攻勢に転じて氏家勢を押し込んでいたが、それにより陣形が少し間延びしていた。

縦に延びた軍勢は横槍の格好の獲物である。

勝照は手綱を操り、前線で槍を振るう勝家の元に素早く近づいた。「六様、少しお耳を。」

「どうした勝照！このまま一気に押し上げるぞ！」

「いえ、部隊が縦長になっています。このまま敵陣に迫るのは危ういかと。」

「なにっ!? いや、しかし…ムムム…」

勝照の具申に一瞬不服そうに眉を潜める勝家だったが、すぐに冷静さを取り戻すと勝照の進言を思案した。

戦においては攻め掛かる事を信条とする勝家であるが、状況に応じて柔軟に対応する器量も持ち合わせている。

時折熱くなり過ぎて思わぬ罠に掛かる事もあるが、基本的には部下の進言にも良く耳を傾ける良将だ。

「わかった。では一旦この場に留まり、後続が追い付いたのに合わせ再度…」

突撃を、と続けようとした勝家の耳に、後続の隊から響く悲鳴が突き刺さった。

驚いて振り向けば、いままさに配下の将へ敵の槍袵が襲い掛かっている。

「そんなんっ!? いつの間にも!!」

驚愕する勝照の言葉に対する答えを、勝家は持ち合わせていない。

その間にも、突如として現れた一色の長槍隊は縦に伸びた騎馬隊の横腹を抉り、後続の隊は大混乱に陥っていた。

これには勝家も顔を蒼くする。

ただそれでも、いま何をすれば良いかは瞬時に判断できた。

「後退するぞ。反転して味方を救出した後一旦本陣まで退却する。」

「し、しかしそれでは!」

「やむを得ん! 後続と分断されれば包囲殲滅もあり得る。まずはこの死地を抜け出すのが先決だ!」

勝家の言葉に勝照は唇を噛み締める。柴田勢の者達にも、己らの主君がどの様な立場にあるのかは理解している。

だからこそ、此度の戦こそはと意気込んでいたにも関わらず、十分な戦果を得られぬまま退却するのはあまりにも悔しい決断だった。

ただそれでも、勝家の指示に異を唱える者はいない。

なぜなら…

「…大丈夫だ。生きてさえいれば必ず挽回する機会は来る。生きてこそなんだ。」

誰よりも悔しげに顔を歪め、自分に言い聞かせるように生き残る意味を呟く勝家がいた。

強く握り締めた槍からはミシリツと音が鳴り、爪が食い込んだ手の平からは血が滴り落ちている。

間違いなくこの場で一番無念を感じながらも、それを無理やり押さえつけようと苦心する主君を前に、不満を口に出来る者などいる筈が無い。

彼らは黙って反転し、後続の味方を救うべく馬を走らせた。

後世において、織田家随一の猛将にして織田信奈の信頼も篤いとされる柴田勝家であるが、織田家中の後継争いで信奈と敵対したことが影響し、桶狭間の戦いから美濃攻略までに掛けての間は要職から外され、戦でも留守役に甘んじることもしなくなかったされている。

実際には重要な戦で武勇を期待され先鋒を任される事もあったのだが、その実力を十全に発揮したとは言い難い。

勝家が本領を發揮するのはもう少し後。

雌伏の時を過ごし、多くの苦渋を舐めた勝家であるが、この時期の挫折が後に戦国史に残る大手柄を挙げる事に繋がるとは、歴史を遡って来た者ですらまだ知らない。

戦場から少し離れた小山の頂上から竹中半兵衛と喜多村直吉は戦況を窺っていた。

彼らの目下では柴田勢を包囲しようとする氏家勢と、一点突破で状況を脱しようとする勝家達との攻防が繰り広げられていた。

現状は圧倒的に氏家勢が優勢だが、勝家の奮闘により完全な包囲には至っていない。

「それにしても、見事な横槍でしたね。あの兵達はいったい何処に潜んでいたんでしょう？」

「あれは騎馬隊の後ろに乗っていた鉄砲撃ちの人達です。鉄砲を撃つ

た後、馬から降りて自陣に引いたように見せ掛け、騎馬隊が注意を引いている間に密かに回り込んで機を狙っていたのでしよう。」

直吉の疑問に半兵衛は答える。

勝家の騎馬隊に対抗すべく出陣した氏家勢の騎馬隊は二百。その数は柴田勢とほぼ同数である。

「ですが音や煙の量から推測すると、実際に鉄砲を撃ったのは五十ほどですね。他の方は無手のまま騎手の後ろに隠れていたのでしょうか。騎馬鉄砲はあくまでも陽動。本命は突如として出現する長槍隊だったんです。」

「なるほど。槍は予め近くに隠していたのですね。柴田勝家からすれば完全に裏を掛かれましたね。」

「そうですね。ですが事後の対応は見事です。直前に横槍に気付いたのかもしれませんが、混乱した部隊を素早く落ち着かせ何とか死地は抜け出せそうです。並みの武将では間違いなく全滅しています。」

半兵衛の指摘通り、勝家は被害を出しながらも包囲を脱し、自軍に戻りつつある。

それを追撃する構えを見せた氏家勢だったが、織田本陣から出撃した救援の部隊を確認したからか、無理攻めの様子は無い。

「先手は大殿が取りましたか。」

「はい。こうなれば義龍様は必ずもう一手撃つはずです。」

奇襲がもつとも成功するのは、相手が奇襲を受けて浮き足だっている時。すなわち、奇襲は立て続けに行う事で最大の効力を発揮する。

「義龍様はそれを理解しています。ならばこうなる事を予想し、既に仕掛けを行っているでしょう。」

その部隊は、飛騨山脈に連なる山の集落に暮らす者達で構成された工作隊である。

山中故に稲作が出来る土地に限られるため、その殆どがマタギや木

こりとして生活している。故に彼らにとっては険しい山こそ生活の礎であり、急勾配の山道は何の苦では無い。だからこそ、彼らはその部隊に選ばれた。

一色家と織田家がぶつかる前夜、彼らは小さな舟に分乗し灯りもつけず長良川を下った。

船頭を務めたのは鵜飼い達。闇夜に舟を操る術に長けた者達だ。

月光を頼りに川を下った彼らは、船を降りると道無き山中を進み、織田本陣後方へと音も無く回り込んだ。

工作隊の狙いは後方に集められた荷駄、即ち織田軍の腹を満たす兵糧である。

遠征軍にとっての生命線である補給を焼きつくす事こそ、彼らの使命であった。

初戦を落とし、兵糧まで失えば織田軍の士気はドン底となり、もはや継戦は不可能となる。

正しく、戦の動静を決する役目を工作隊は担っていた。

動きやすいように装備は最小限にし、草葉で全身を擬装した一団は、足音を殺し森を進む。

やがて慌ただしい声や、鎧や武具のガチャガチャとした音が聞こえてくる。

織田本陣はまさに目の前。あとは、密かに近づき火を放つのみ。

しかし、ここに至って隊の長は待ったをかけた。

思いの外、荷駄場の警戒が強い。

既に戦は始まってほどなく、前線では柴田勢の敗退で織田軍全体に動揺が広がりつつある。

にも関わらず、荷駄場の警備番は気を取られる事無く集中し、万全の防備を構えていた。

その警備番の一人に見覚えがあった。斎藤道三の直属の兵だった者だ。他にも何人かチラホラと見知った顔がいる。

それらは皆、内紛時に道三側に付き美濃から出ていった者達である。

すなわち、いま織田軍の後方を守るのは道三を慕って出奔した旧齋

藤家の者達だ。

ここで工作隊長は思案する。

恐らく、あの守兵達を指揮するのは元美濃方の者。下手すれば道三本人の可能性もある。

当然奴らは山岳集落出身者による工作隊の存在は知っているし、そのやり口も熟知している。

とすれば、いまここで予定通り火付けに行つた所で警戒網に引つ掛かり失敗する可能性が高い。

ならば少し、作戦を変更するか。

工作隊長は僅かな間でそう決断し、部下達に指示を出した。

織田本陣にて戦況を見守っていた信奈達。

そこに少々慌てた様子の伝令が現れた。

「申し上げます、後方の荷駄場に向かつて火矢が射掛けられたとの事に御座います。」

「なんですつて?!被害はっ!」

「幸いすぐに消し止められたので一部の兵糧が焦げたのみとの事。それ以外に被害は御座いません。」

伝令の報告にその場にいた将達が揃ってホツと息を吐く。

信奈も額の汗を拭うと近くに控えた道三に視線を移す。

「マムシ、いまの報告をどう思う?」

「恐らく、工作隊の者達であろう。ただ報告を聞く限り、どうにも本気で荷駄を狙ったとは思えぬ。陽動、或いは我らを動揺させる嫌がらせかもしれぬ。」

「…追討するのは難しいかしら?」

「やめておいた方が良いでしょう。山は正しく奴らの庭。逆に土地勘の無い者にとっては簡単に殺し間になるぞ。」

事実、襲撃を受けた直後に一部の部隊が矢が飛んできた山林へ入って行つたが、誰一人として帰って来なかった。

山の熟練者を相手に素人が挑むのは、無謀を通り越して自殺行為と言つても過言ではない。

「いずれにせよ荷駄場の警備に人数を割かせるのが狙いじやろう。業腹じゃが少数故にとこれを無視するわけにはいかん。相良の小僧の部隊を追加で付けさせてはどうかの？」

「…わかったわ。配置についてはママシに一任する。だけど兵糧に被害が出るのだけは絶対に避けなきゃダメよ！」

今回の出兵は秋の収穫を待ってから行われた物であるが、実のところ織田軍は補給面であまり余裕は無かった。

というのも、ここ最近織田家は戦続き。特に直近の美濃侵攻に失敗した折りに大量の荷駄を放棄して逃げ帰ったために、清須の倉は一時的にスツカラカンになった程だ。

もし、兵糧が燃やされようなものなら、その瞬間織田軍の士気は崩壊しかねない。

それだけ織田軍はギリギリの線上にいた。

そもそも今回の出兵自体、本来は来年に行おうとしていたもの。それを無理に予定を前倒ししているのだ。無論、信奈も最初から無理な侵攻計画を実施しようとしたわけでは無い。

今回の出兵の理由には、美濃国の情勢の変化が大きな影響を及ぼしていた。

話は秀吉達が帰国する少し前まで巻き戻る。

当時はまだ、信奈をはじめとした織田家の重鎮達は翌年の再侵攻を見越して計画を練っていた。

そんな彼らの前に村井貞勝と丹羽長秀がとある報告書を携えて現れた。

「単刀直入に申し上げます。今のままでは当分は一色家を倒す事は出来ませぬ。」

「……………どういふ事よ、地蔵？」

一瞬にして剣呑な雰囲気帯びた信奈が貞勝に詰め寄ると、万千代が報告書を信奈の前に広げる。

「此方は商人を通じて集めた井ノ口の経済状況で御座います。見ての通り、一色の名を拜命して以降、美濃は大きな経済発展を遂げており、それを背景として一色家は軍事拡大に踏み切っている様子に御座います。」

「具体的には？」

「堺から鉄砲を百挺。来年には追加で三百との事。」

「さ、三百だどっ!？」

万千代の言葉に佐久間信盛が目を剥く。

三百という数は現在織田家が保有する鉄砲とほぼ同数であった。

「いきなり三百なんて、義龍も随分と思いつたことをしたわね。マムシ、美濃の財政はそんなに余裕があるの？」

「いや、流石にそれほどは…貞勝殿、その情報は本当なのか？」

「はっ、間違いなく。どうやら美濃の有力な商人たちが献銭を行ってしている様子です。義龍は国内の商店や行商を保護し、商人たちから篤い信頼を受けているとのこと。事実、ここ最近の井ノ口は大変賑わっているそうです。」

「何と…」

貞勝の説明を受け道三はショックを受ける。

美濃にいた頃に実施した樂市樂座の失敗により商人の信用を失った道三からすれば、自分を追放した息子が自分と真逆の経済政策により商業も盛り上がりさせ商人達の信用を勝ち取った事実は、我が事ながら動揺せざるを得なかった。

「…なるほど、このままでは美濃を落とせない。その理由が分かったわ。一色家は商人たちの助力を得て内政に勤しみ、経済を活性化させる。それで築いた富を元手に兵力を高め、治安を安定させる事で更なる商人の信頼を得ると言うわけね。富、武、そして人の信。これを一色が完全に手にした時、美濃は最早私たちが手を伸ばせる存在でなくなる。そういう事ね？」

「…まさしく、その通りに御座います。」

「…私はどうやら、一色義龍という男を甘く見すぎていたようね。古き時代に固執し、天下への野望も持てぬ矮小な男。そう思ってたわ。」

だけど実際には、古きを以て新しきを成し、天下を治めずとも民に慕われる理想の地方領主。それが、一色義龍という男の正体なのかもしれないわ。」

どこか楽し気に、尊敬すら混じった口調で信奈は語る。

「だからこそ、超えるべき相手に相応しい。」

それはまさしく、戦国に生きる武將の性であった。

打ち倒すならば、乗り越えるならば、討ち取られるならば、相手は勇壮な武士であるのが望ましい。

ある種の傲慢、あるいは乱世の宿命と呼ぶべき想いが、一色義龍に対する憧れを信奈に抱かせ始めていた。

「地蔵、来年になってから攻めても美濃は落とせない事は分かったわ。なら今すぐならどう？」

信奈の問い掛けに周囲はざわめく。

だが、貞勝は暫し目算したのち口を開いた。

「今年中であれば、美濃の防備が完全に整う前に攻め入る事は出来ましょう。無論、それで敵を打ち倒せる保証は無く、むしろ非常に厳しい戦いになるのは必須です。何より、もし攻勢に失敗すれば来年の政に影響を及ぼすのは避け難く、少なくとも大規模な軍事行動は当分不可能となるでしょう。」

貞勝の分析を聞き、信奈は目を閉じる。

仮に織田家と一色家が共に内政に専念したとしても、発展性の面では港を持つ織田が有利。いつかは美濃を落とせるだけの戦力を持つだろう。

だがしかし、それには長い年月がかかる。

「だいたい十年。どんなに急いでも七年といった処かしら。」

資料に軽く目を通してそう呟いた。

誤差はあるだろうが、そう離れてはいないだろう。

確実性を取るなら時間を掛けてでも国力を上げてから攻めるのが良いに決まっている。

「だけど天下を狙うなら…」

この時、信奈は不思議と迷いを感じなかった。

無論やけっぱちに成った訳でも、開き直った訳でも無い。
ただ自然と、己の中でそれを選ぶのが当然だと叫ぶ何かがあった。
誰もが見れぬ夢を見るならば、誰もが選ばぬ道を選ぶなら、誰もが
成せぬ事ぞ成すべき。

己の中のもう一人の信奈が、声高らかにそう叫んでいた。

「決めたわ。今年もう一戦、義龍に挑むわよ。」

その宣言に、家臣たちが息を呑む音が聞こえる。

しかし、それに否を唱える者は無し。

彼らもまた理解していた。

己等の主君が何者も成したことの無い夢を抱き、誰も辿った事の無い道歩まんとしている事を。

然らば、主君が決意に満ちた顔で瞳を輝かせた時、その先を共に歩まぬという選択肢は無かった。

「我らの命運次なる一戦にあり！絶対に義龍に勝つつ！！」

それから数か月、新たに予算を立て、城中の俵物庫の在庫を検め、一回の遠征に耐えうる物資を何とかかき集めた信奈達は、今こうして一色軍と相対している。

しかし、初戦を取られ戦況は芳しくなかった。

「姫様、六さん達が戻ってこられました。」

「…どんな様子だった？」

「六さんを含め、皆一様に戦意を高く保っています。今すぐもう一度突撃せよと命じても、喜んで攻め掛かってくれるでしょう。しかし…」

「分かってるわ。六は難しい先鋒の役割を十分に勤めてくれた。勝たせてやれなかったのは私の見通しの甘さのせいよ。今は休むように言うておいて。」

「承知いたしました。」

万千代が下がると、信奈は指揮棒で己の膝を叩く。手強い相手だとはわかっていた。油断するような余裕もなかった。だがそれは相手も同じだった。

義龍は織田信奈を侮る事の許されぬ強敵と認め、全力を以て織田軍を迎え撃つ。そこに一切の油断は無く、強かに策を弄して勝利を挽ぎ取ろうとしていた。

「あまり思い詰めてはならぬぞ、信奈ちゃん」

険しい表情の信奈に道三が語り掛ける。

「敵を甘く見るは愚なれど、敵を実態以上に大きく見るのもまた自らの手足を縛るに等しい行いじゃ。まずは現状をよく確かめ、最適な道を探すが良い。」

「…ええ、分かってるわ。」

そう答えて信奈は熟考する。

戦況は先手を取った一色が有利。しかし、全体的に見ればあくまでも局地戦で兵を引かせたに過ぎない。勝家の首も取り逃している。

兵数で言えばまだまだ織田軍の方が上回っていた。

「そう、だからこそ一色は後方に回した兵で兵糧を襲って一気に戦の流れを掴もうとした。だけどマムシが守備を強化していたおかげで攻めるのが難しいと考え、あえて自分たちの存在を示すことで後方の兵を釘付けにする方策に変更した。ここまですべてを事前に義龍が想定していたのだとしたら、義龍が次にとる策は……っ!？」

その考えに至った瞬間、信奈は勢いよく立ち上がると鋭い眼光を万千代に飛ばす。

「万千代っ！今すぐ前線の各将へ伝令を飛ばして！全軍戦闘の用意を。後方の警備番を除き、いつでも敵に当たれるようにと！」

「全軍にですか!？」

「ええそうよ。そもそも一色は私達より兵数に劣り、先手を取って掴んだ有利を何としても生かしたい筈。ならばこそ、後方の守備兵を動かし辛い状況を作った今、攻め掛からない理由は無いわ。」

本来であれば兵糧を焼いて混乱した所に攻め掛かる狙いであったのだろう。

しかし、それが未然に防がれたからと言って初戦に勝った勢いを失いたくない。

自分が義龍だったならば、と想像した信奈の思考はここに至って一色軍の次の動きを完全に読み切った。

「敵は大将を除いた全軍で攻勢に出るわ！……ここが勝負時よ！」

戦いはいよいよ佳境を迎えようとしていた。

今宵はこれまでに致しとう御座りまする。

愚将の生まれた日

一色軍の総攻撃を予期した信奈は、全軍に対して戦闘を想定した準備を通達した。

それにより慌ただしさを増した織田軍を前にして、後詰め部隊を率いる安藤守就は眉間に皺を寄せる。

「敵軍に動きがあるな。もしかすると、此方の動きを読まれたやもしれぬ。」

「ほう。では作戦を中止するか？」

独り言を呟く守就の隣から、どこか挑発的な色を持った提案を稲葉一鉄がする。

守就は不愉快そうに一鉄を睨み付けると頭をふる。

「誰がそんな事をするか！あくまでも気を引き締める為に言ったまでじゃっ！」

「そうか、では気張って行くでしょう。」

怒鳴られても飄々とした態度を崩すような事は無く、一鉄は澄ました顔で前方を向く。

その態度がますます守就を苛立たせるが、これ以上は味方の士気に関わりと考えグツと堪える。

安藤守就と稲葉一鉄。

共に一色義龍を主と仰ぎ、西美濃三人衆に名を連ね称される二人だが、その関係は決して良くない。

古くから美濃に土着した安藤一族と、祖父の代に伊予国より流れ着いて土豪となった稲葉一族。年も近く、領地も隣り合い、幼き頃から互いに意識してきた。これだけなら対等なライバル同士として見ることも出来るだろう。

しかしながらこの二人、どうにも相手の気性が気に食わなかった。それが顕著に現れたのが美濃における主代わりの時である。

土岐氏から道三。そして道三から義龍へと領主が入れ替わった美濃国だが、その際稲葉一鉄は周りに先んじる形で主替えをし、新たな主の覚えが良くなるように立ち振る舞った。

道三の時には土岐氏の側室であった姉を道三に譲るように取り計らい、それによつて産まれた義龍の叔父としての立場を手に入れた。そして義龍の時には敢えて国内の不穏分子である義龍の弟たちを唆し、彼らが反乱を企てた処で義龍に売り渡したという噂も有る。守就はそうした一鉄の策略を姑息として毛嫌いしていた。

一鉄もまた、そうした守就の反感を上手く立ち回れなかった事への僻みだと思なしているの、二人が相容れる事は決して無い。

とはいえ、そうした思惑を戦場にまで持ち出すかと言うとそうでは無い。

両者とも長きに渡り戦場に身を置いた古強者であり、此度の戦が美濃国の、強いては西美濃の豪族達の運命を左右する事は重々承知している。

なので軽く憎まれ口を叩く事はあつても、それで自軍の士気に影響を及ぼすような愚は犯さない。

「さて、出迎えのようだな。」

織田本陣を目指す守就達の前に重厚な陣を敷く兵団が現れる。その構えには見覚えがあつた。

「ほう、勝負どころで家中筆頭を差し向けるとは。うつけも多少は戦の心得が有るらしい。」

立ち塞がるは織田家筆頭家老、佐久間信盛。

守就達にとつて先代の頃より何度も槍を交えた馴染み深い相手である。

「…………伊賀守殿はここ最近戦場には出られてませんでしたなあ。先槍のお役目は少しお辛いのでは？」

「なんだと貴様っ!!たえ戦場で槍を振るう機会に恵まれずとも、この腕を錆び付かせてなどおらぬわっ!!」

「ふむ。では先槍のお役目をお願いしてもよろしいかな？」

「言われずとも!貴様は我が後塵を拝すが良い!」

そう叫ぶと守就は配下の軍勢を率いて信盛の軍団へと向かつて馬を駆けさせる。

それを冷めた目で見送った一鉄は、自身の側衆を近くに呼び寄せ

た。

「直元に伝令を。織田は中央の軍勢に隠れながら側面から我らの本陣を狙っている。我は左翼を押さえる故に、其方は右翼を潰してくれと。」

「承知いたしました！」

伝令の兵が駆け出すと、一鉄も軍勢を率いて左翼へと向かう。

これまでの織田の戦を見る限り、織田信奈という武将は大将でありながら前線にて指揮を執る事を好む。それが自軍の兵の士気を高くする秘訣でもあった。

しかしながら、中央の軍勢からは大将が前に出ているような異常な士気の高さは感じられない。

ともすれば、後ろに下がって戦況を見守っているとも考えられるが信奈の性格からしてそれは無い。

「然らば中央の大軍は陽動。本命は大将自ら精鋭を率いて我らの本陣を叩くつもりじゃな。」

果たしてそれが右からか、左からか？

あとは己と敵将の思惑が噛み合うか否かだ。

斯くして、中央部の激戦を尻目に左翼へと回った一鉄の目の前に現れた旗は…

「…ちっ。ハズレくじだったか。」

黒地に白の？印。その家紋の名は丹羽直達。それが示すは児玉惟行を祖とする児玉丹羽氏の軍勢である。

「長秀様、前方から此方に向かってくる軍勢があります。」

「…どうやら此方の狙いを見破られたようですね。相手は？」

「折敷に三文字の旗。稲葉良通の軍勢です！」

物見の報告に万千代は握った采配棒に力を込める。

稲葉一鉄こと稲葉良通の名は優将として織田家にも通っている。

相手にとって不足無いどころか、若年の万千代からすると些か荷が

重い相手である。

「…何を弱気に。もはやここに至って相手がどうこう言ってる場合じゃない。私は私で百点満点の働きをするだけです！」

己を叱咤し、力の宿った瞳で敵軍を睨み付ける万千代。

手にした指揮棒を振り上げると、勢い良く稲葉隊を指し示した。

「恐れること無く敵中を合い駆けよ！そしてそのまま一気に敵本陣を攻め落とします！」

力強い掛け声と共に、丹羽隊は臆すること無く稲葉隊へと突撃していった。

同じ頃、万千代の位置から対極の場所で信奈は馬を走らせていた。

一鉄の読どおり、信奈は部隊を二つに分け、中央の佐久間隊を隠れ蓑にし一色本陣を強襲する策を打っていた。

そして万千代と違い、信奈の部隊は然したる障害も無く戦場の側面を抜けようとしていた。

ここを抜ければ後は敵本陣を叩くのみ。

手綱を握り締める信奈の瞳に闘志が燃える。

その周囲を守る犬千代をはじめとした母衣衆も同じ目をしていた。

皆逸る気持ちを押さえながら、それでも溢れ出る戦意を纏いし戦国武将達は、ただひたすらに一色本陣を目指していた。

だが間も無く敵後方へと抜け出そうとしたその時、疾風のごとき影が信奈達の前に立ち塞がった。

「ふう、なんとか間に合ったか。その方、織田信奈殿とお見受けする。

一色家筆頭、氏家直元にござる。」

大急ぎで駆けつけたせいかわ、肩で息をし額の汗を拭いながら直元は信奈に話しかける。だが、瞳だけは決して信奈から目を離そうとしていない。

「氏家直元…確か西美濃三人衆の筆頭だったわね。」

「いやはや筆頭など畏れ多い。たまたま、父祖より実り多き土地を受け継いだだけに過ぎませぬ。それにしても、噂どおり御美しい姫様に御座りますなあ。しかも敵陣に合い駆ける度量もお持ちとは。」

「…お褒めの言葉ありがとう。称賛のついでに我が大義の為にそこを退いてくれると有難いのだけど?」

「ハハハツ!!侵略者風情が大義を語るとは!!………笑えませぬな。」
すつと直元の表情が消え、無機質な殺意しか感じられぬ武将の顔となる。

それに対し、信奈は獯猛な獣のごとき笑みを浮かべた。

「無駄とは思いますが一応言っておきましょう。降伏せよ。然らば武家の習いにて御命までは奪いませぬ。」

「笑止。ここまで来といて降伏なんてするわけ無いでしょ。」

「でしような。では殺るか。」

「ハハツ、殺れるもんなら殺ってみなさい。」

互いにブンツと槍を振り下ろし、指揮官自ら先陣を切つて敵勢に突撃する。

中濃の戦いにおける最激戦区の争いは、こうして始まった。

一方その頃、戦場中央部では安藤守就勢の猛攻を佐久間信盛が辛抱強く凌いでいる。

織田軍最古参にして筆頭家老の信盛は、その統率力と安定性から織田軍の最大戦力を与えられ、中央戦線の維持を信奈から命じられていた。

「しかし、儂も特別耐える戦が得意という訳でもないのじゃがなあ。」

戦況を眺めながらなんとも言えぬ表情で信盛は呟く。

近年出自問わず有能な人材を積極的に登用している織田軍であるが、それ故に手柄を挙げてやろうと攻める戦を好む者が多く、守勢になると脆さを見せる部分が大きい。

「まあそれで儂に守勢の御鉢が回つて来るのは構わんのじゃが、儂もどちらかという攻め戦の方が得意じゃからのう。」

後年、『引き佐久間』の異名で唄われ、殿役や撤退を得意としたと伝わる事も多い佐久間信盛であるが、史実において彼が撤退等の引き戦で大きな手柄を挙げたという功績は残されておらず、むしろ本人が言

うように攻め戦でこそ多大な成果を挙げている。

「とはいえ、折角姫様より賜ったお役目じや。ここは一つ戦線を維持しつつ、隙があれば攻めつ気を見せて見るのも良いかもしれぬのう。」
後世の評価から言えば、この『中濃の戦い』において信盛は大きな手柄を挙げられなかったとされている。

だが戦の中盤から終盤にかけて安藤守就の猛攻に曝されながら、目立った被害を出さずに戦線を維持し続けた功績は、影の功労者として存分に役目を果たしたと歴史学者等からは評価されている。

また、戦後も信奈は信盛を筆頭家老として重用している事から、中濃の戦いでの信盛の働きを信奈が十分に評価していたとされる。

こうして柴田勝家と氏家直元の激突で始まった戦は、両軍総力をあげた全面衝突へと移行する。

この勝負はほぼ互角。死力を尽くした両軍の将の奮闘により、がっぷり四つの均衡した状況に落ち着いた。

しかし、このとき既に戦の勝敗、あるいは歴史の分水嶺と言うべき『その時』は誰にも気付かれぬまま、すぐそこにまで迫っていた。

「…膠着してしまいましたね。」

「はい。こうなってくると織田は厳しいですね。」

戦場から少し離れた小山の上で、竹中半兵衛と側近の喜多村直吉は戦況を見守りながら思った事を口に出す。

「織田としては奇襲的に一色本陣へと攻めかかりたかった筈です。しかしそれを稲葉様と氏家様に止められ膠着状態に持ち込まれてしまいました。互角に見えますが状況的に苦しいのは間違いなく織田です。」

「それは大殿がまだ動いて無いからですか？」

直吉の質問に半兵衛は大きく頷く。普段は弱気で人見知りな半兵衛であるが、軍略に関しては絶対の自信を持っていた。

「はい。この状況、義龍様なら間違いなく動きます。自ら兵を率いて

各所に広がる織田軍を攻めれば、味方と連携して各個撃破が可能です。そうならない為に織田軍は早急に稲葉様達を突破したかった筈ですが、最早それも叶わないでしょう。」

「となれば、この戦ー!」

「ええ。ここからは織田がどれだけ被害を出さずに撤退出来るかの勝負になるでしょう。」

この時、戦場で戦っていた信奈も半兵衛と同じ考えに至っていた。

後年信奈は自身の子供達にこの戦について語り、どこで撤退を指示するかという処まで追い詰められていた、と話している。

一見互角に見えて戦略的にも戦術的にも一色有利となれば、ここま
ま一色が織田を押しきり、織田信奈の野望は立ち上がりから大きく躓
く事になる。

……………そうなる筈であった。

「あつー重治様、大殿の陣に動きが!」

「いよいよ出陣ですね。少し動き出しが遅いですが、このまま攻め
れば間違いなく一色が勝利……え?」

戦国史に残る希代の軍師、竹中半兵衛。

その知謀は若くして歴戦の猛者とも遜色無く、これまでに戦の推移
を予想し外した事は無い。

「そんな……どうして……。」

まさしく天より与えられし唯一無二の才能。

周囲の人間も皆一様にその才を認め、半兵衛自身も謙遜しつつ自身
の才に信を置いていた。だが……

「いったい何が起きてるんですかっ!?!」

その自信が根底から打ち砕かれるような光景に、半兵衛は心の底か
ら絶叫した。

時は暫し巻き戻る。

「よしっ！今が勝機。これより我らは敵中へ合い掛からん。」

信奈の突撃が直元に阻まれた直後、一色義龍は椅子から勢い良く立ち上がると周囲に向けて声を張り上げる。

「直元が信奈を惹き付けている今こそ、奴らを挟撃するにまたと無い好機。奴らが逃げ出す前に一気に叩くのだ！」

「「はっ!!」」

「龍興っ、御主も来いっ！我が勇姿しかと目に焼き付けよっ！」

「お、おうっ！」

高揚した様子で息子に命ずる義龍に、龍興は気圧されながらも返事を返す。

急いで兜の緒を締め脇差を確認する。それが終わると義龍の横に立った。

「親父、準備出来たぜ。」

「よしっ！では皆馬に乗れ！我が号令と共に一気に織田のうつ…ける…を……………」

「……………親父？」

不意に言葉を切つて無言になった義龍を不審に思い、龍興が声を掛けるが返事は無い。

「お、おい、どうしたんだよう？」

不安を覚えた龍興は、義龍の肩に手を掛け軽く揺する。

すると義龍は前後にフラフラと体を揺らし、そのまま顔から地面に倒れ伏した。

「……………親父っ!？」

「殿っ!？」

一瞬の間呆然と倒れた義龍を見下ろした龍興達だったが、すぐに大声を上げて義龍に駆け寄ると仰向けにして何度も呼び掛けた。

「おいっ、親父っ！しっかりしろっ!？親父っ！親父っ!？」

だが義龍は一切反応を返さない。

目蓋は閉ざされ、僅かに開いた口の端からは弱々しい呼吸音のみが

聞こえる。

「薬だっ！誰か気付けたの薬を持って参れっ!!」

「はっ、ただいまっ!」

龍興が悲鳴染みた指示を出すと、側近が散薬の入った薬入れを持ってくる。

龍興は無理矢理父の口を開かせ、匙で掬った粉薬をねじ込み、水を流し込んでなんとか薬を飲み込ませた。

しかし義龍が回復する気配は全く無く、その顔からは血の気が引き青白くなり始めていた。

「くそっ！どこかに医師はいねえのかっ!」

龍興が周りに問うが返事は帰ってこない。

ここは戦場。怪我や急病に対応するための簡易的な薬や道具は有れど、それはあくまでも応急措置用のみ。

本格的な治療をするなら城に戻るしかない。

絶望的な状況に頭を抱える龍興だったが、あることに気付いてハッ！と顔を上げる。

「そうだっ！一鉄だっ！あいつはたしか医療心得があつた筈！今すぐ一鉄を呼び戻せっ!」

「しかし若様、稲葉様は前線で指揮を取られています。急に戻って来いと言われてもすぐには…」

「なに言ってるんだ！自分達の主君が倒れたんだぞ。これを助けずにどうする!?兎に角さっさと一鉄を呼んでこい!」

「は、ははあっ!」

龍興から命じられた伝令は大慌てで馬を駆けさせ戦場へと赴く。

そして一鉄を見つけるとすぐに事の次第を報告した。

「なにっ!?!殿が倒れただど!」

「はっ！稲葉様にはすぐに本陣へ戻っていただき、殿を見るように、と若様は仰られています。」

伝令の話を聞いた一鉄はチラリと後方の本陣へと目をやると、次に前線の方へ目をやり重々しく口を開いた。

「…すぐには戻れぬ。そうお伝えしろ。」

「えっ!? よろしいのですか?」

「状況を考えろ。今は戦の正念場。殿が出陣出来ぬとなった以上、我らがここで持ちこたえるしか無い。ここを離れる訳にはいかんのだっ! それよりも…」

一鉄は周囲に目を配ると伝令を近くに寄せさせた。

「この事、まだ他には伝えておらぬな?」

「はっ! 稲葉様以外には…」

「では事の喧伝は厳に慎ませろ。下手に広まれば士気に関わる。若様にも、今は何もせずそこでじっとしておくよう言っておけ!」

「しよ、承知いたしました。」

伝令は陣へ戻ると、一鉄の言葉をそのまま龍興へ伝えた。

それを聞いた龍興は愕然とした表情で項垂れた。

「何もするなだど。何もしないまま親父が死んだらどうすんだっ!」

「落ち着かれませ若様! 稲葉様も今すぐには戻れぬと言っておられました。戦況が落ち着けば必ずや…」

「だけどよう。」

一鉄の言葉は正しい。

戦の真つ最中に前線の指揮官が本陣へ戻るなど、下手すれば戦線を崩壊させかねない愚行だ。

しかも医療の心得があるとはいえ専門家ではない一鉄が戻ったところで、義龍を回復させられる保証など何処にも無いのだ。

その様なこと、龍興も重々承知している。

だがそれでも、肉親の危篤を前にして納得しかねる思いが龍興の胸中で暴れていた。

「若様っ! 殿の意識が!」

「っ!? 親父っ、気が付いたのか!」

義龍を介抱していた側近の言葉に、龍興は弾かれたように義龍へ駆け寄る。

見ると、義龍の目蓋が僅かに開かれ、その奥には弱々しい光を宿す瞳があった。

「おい、親父! 大丈夫か?」

「……………う…ああ。」

龍興の呼び掛けに応じるように義龍の喉から唸り声が聞こえる。

そして、何か訴え掛けるような目で龍興を見つめた。

「うん？…どうした、親父？」

「…ううう……き……」

「き？」

「き……きたろお……」

「っ!？」

喜太郎。ハッキリとしない発音で、確かに義龍は息子へそう伝え
た。

それを最後に義龍の目は再び閉じられる。

果たしてこの時、義龍は何を思い長らく呼んでいなかった我が子の
幼名を口にしたのか？

それは最早、本人以外誰にも知るよしは無い。

だがしかし、義龍のこの言葉が、一人の若者に取り返しのつかない
決断をさせてしまう。

伝令を帰らせた後、一鉄は再び采配を振るって万千代の攻勢を凌い
でいた。

義龍が倒れた以上、本体の後詰めは絶望的。ならば今日のところは
無理に勝ちを急がず、日没まで敵の攻勢を躲す。

そして本陣へと戻って義龍の病状を確認し翌日以降に仕切り直す、
というのが一鉄が思い描いた青写真であった。

しかし、そうした一鉄の思惑は、戦場に響いた重厚な法螺貝の音色
により崩れ散った。

「なんだとっ!?この音色はっ!」

一鉄はこの音色の意味を知っている。

だが現実主義者の一鉄をして、その音色の意味を理解するのを脳が
拒絶し、愕然とその場で立ち竦む。

配下の兵達も同様だ。ほとんどの兵は混乱した様子で互いに顔を見合せ、聞こえてきた音についてざわめいた。

「なあ、今の音って…」

「ああ、だけど何でいま？」

「いったいどういうことだっ!? どうして…」

撤退の合図が掛かるんだ……………

多くの美濃兵が理解できぬ様子で呆ける中、心当たりの有る一鉄は顔を歪ませ本陣を振り返る。

視線の先では、潮が引くように本隊が後方へと下がって行っていた。

「…クソつたれ!! あの大馬鹿者があああつ!!!」

怒りの咆哮が戦場に木霊した。

一色軍の異変は即座に織田軍も知ることになる。

だが、織田もまた一色軍の行動に戸惑いを覚えていた。

「は? いったい彼奴らホントなにやってんの?」

信奈もまた、突如として動きが変わった一色軍に啞然としていた。

いずれも混乱した様子で緩慢となり、その場に留まろうとする部隊や後退しようとする部隊が入り混じり、意思統一を完全に欠いていた。

その奥の方へと目を向ければ、目指していた敵本陣が前線の味方を置き去りにして撤退を始めていた。

「どうして今ここで撤退を始めてるの!? 何かの罠? いや、前線の兵の様子からして少なくともここにいる兵たちはとって不測の事態なんだわ。という事は…」

敵本陣で撤退をせねばならない事情が発生した。

信奈は詳細は分からずとも、一色軍に起きた異変の理由に見当をつけた。

そしてそれは、敗北を覚悟した戦に勝機を見出す光であった。

「皆の者つ、敵は混乱し烏合の衆と化したわ！今が好機つ！敵の背に食らいつき散々に追い立てるわよっ！」

味方を鼓舞する号令をかけ、信奈は先頭に立って混乱する敵集へと槍を突き立てる。

母衣衆がその後ろに続く。

敵将の氏家直元は混乱する配下を何とか立て直そうとするが、大所帯の軍に広がった動揺を完全に抑えきる事が出来なかった。

この戦で最も大きな被害を受けたのが直元が率いた部隊であり、混乱の中織田軍に打ち取られたもの以外にも撤退しようとする兵とその場に留まろうとした兵同士がぶつかり密集状態になり、戦場の真ん中で圧死した兵も数多に上ったと言われている。

直元自身も顔に刀傷を受け重傷となるも、命からがら戦場を抜け出し本領へと離脱した。

中央の安藤隊も直元隊同様大いに混乱するが、相対した信盛は敵が追い詰められた結果死兵と化するのを懸案し、逃げ道を敢えて残しそこから逃げていった敵兵を程よく追撃するに留めたおかげで、守就をはじめとした重鎮は撤退に成功した。

稲葉一鉄の部隊は事態を把握するとすぐさま撤退を選択し、間諜付く兵を置き去りにして脱兎の如く戦場から離脱。それを見た配下達は兎に角この場から逃げ出さなければと理解し、自ら殿を志願した一部の兵たちを除いて多くの兵が撤退に成功し、三人衆の中では最も被害を少なくする事が出来た。

一色軍を蹴散らした織田軍は勢いに乗り、戦場周辺の砦や支城を攻めてこれを陥落させた。

これにより、織田軍は美濃南部から一色勢力を一掃し、ここに通る街道を押さえる事に成功する。その結果、織田軍は当初の目標通り美濃南部における勢力の確立、並びに中央と西部の一色勢力を分断させるに至り、美濃制圧に大きく前進することとなった。

一方で、大敗を喫した一色家は大きく戦力を低下させた。

本隊自体は大きな被害こそ無かったものの、有力豪族の多くが犠牲

となり、その一族からの信を失う羽目となる。何より街道を獲られた戦略的失地はあまりにも大きく、この戦以降一色家は美濃の豪族たちへの影響力を著しく落とす事となった。

そして、一戦にして御家を滅亡の淵にまで堕ちぶれる大失態を犯した一色龍興は、この中濃の戦いを以て後世でこう呼ばれるようになる。

戦国史に残る大敗北を招いた、戦国時代最低最悪の愚将、と…
今宵はこれまでに致しとう御座りまする。

夢でさえ見れぬ国

美濃南部を制圧後、信奈率いる織田軍は落とした砦に拠点を構え、部隊の再編に勤しんでいた。

戦に耐えられぬ怪我を負った者、また戦死した者の記録をまとめて再出撃に必要な人頭を算出し、それに沿って一部の部隊を解体し、その分の人員を各隊に割り振っていく。

それと平行して偵察や諜報の人員を放つて一色家の様子を探らせているが、それにより戦場で見せた不可解な撤退の原因についての情報を得るに至った。

「何ですって!? 義龍が倒れた。」

「はっ！ 井ノ口の街に潜ませた者曰く、一色義龍が戦場で急に倒れたのを見たと言う兵がいたとの事。城下では既にこの噂で持ちきりとの報告です。」

万千代から話を聞いた信奈は信じられぬといった形相で万千代の顔を見るが、その表情からは冗談の色は一切見えない。

むしろその聡明な頭脳は、いち早く義龍の危篤と一色軍の謎の撤退を結びつけた。

「なるほど。どうしてあんな不可解な行動をしたのか分かったわ。他に義龍についての情報は無い。」

「義龍の病状について、快方に向かっているとするものや、未だに意識を取り戻していないとするもの、中には既に死亡したという話もあり、情報が錯綜していて確証を得たものは今のところありません。ただ、いまだ一色軍が城に籠って動きを見せないところを見るに、義龍の病状は決して軽く無いと推察出来ます。」

「デ……アルカ。」

気が抜けたような生返事を万千代に返し、釈然としない様子で信奈は腕を組む。

一方で周囲の将兵達は一斉に喜色満面となる。

「これは僥倖っ！ 義龍が動けぬとなれば美濃攻略はますます捗りますなあ！」

「然り！しかもあの撤退を見るに一色家は相当混乱しておる様子。これは立ち直るまで時間が掛かりますぞ。」

「いやはや、田楽狭間に続き美濃でもこれ程の幸運を賜るとは。やはり姫様には天運が御座いますな！」

「……………何ですつて？」

喜ぶ家臣の言葉に信奈の眉が跳ね上げ低い声で問う。

ほんのそれだけで、一瞬にして陣中に緊張感が張りつめた。

「いま私には天運があるとか言った？それはつまり、此度の勝利は全て天の情けのお陰という事かしら？」

「姫様落ち着いて下さい。誰もその様なことは言ってません。」

「黙りなさい万千代。私は怒ってるんじゃないの。ただ敵の失態で拾った勝ちを、殊の外喜んでる精神が信じられないだけ。挙げ句に天運などと不確かな物で主君を誉めれば私が喜ぶとも思ったのかしら？前の敗戦で散々に反省したのに、望外の勝利で頭から抜け落ちた？だとしたらマムシの言う通り、勝利の余韻とはまさに毒酒ね。」

静かな、されど鋭利な刃物のように心に突き刺さる信奈の叱責に、先ほどまで喜びの声を上げていた家臣たちは皆一様に沈痛な面持ちで顔を伏せる。

その様子に、万千代は信奈の成長を実感した。

桶狭間同様に今回の戦も幸運に恵まれた勝利だったが、今日の信奈はそれに浮かれる事も無く、浮わつた配下の気持ちを瞬時に引き締めてみせた。

「良サル、あんたに美濃の豪族たちの調略を命じるわ。」

「えっ、俺がか？」

「二ヶ月もこの地にいたんだから土地勘ぐらいあるでしょ？もし不安なら秀サルと一緒にやれば良いわ。戦で苦労しなかった分も存分に励みなさい！」

「わ、分かった。」

「他の者達は攻め落とした砦の修繕を。もし損傷がひどいようなら打壊しておきなさい。祝宴なんてしてるヒマは無いわよ！ここでもう一働きして、一気に美濃を攻め獲るわよ。良いわねっ！」

「はっ！」

信奈の激に家臣たちは力強く声を上げた。

そんな中、良晴は一人複雑な表情で平伏している。

その脳裏には、二ヶ月もの間を共に過ごした親しき友の顔が浮かんでいた。

中濃の戦いから十日ほどたった頃。

その日、半兵衛の庵には珍しい訪問者が居た。

「そ、粗茶ですが。」

「うむ、頂こう。」

半兵衛のから茶碗を受け取ると訪問者は躊躇すること無く一気に呷る。

中身を飲みきり茶碗を畳に置くと訪問者、稲葉一鉄は感想も言わずに半兵衛を見据える。

その視線に思わず半兵衛は身を縮めるが、一鉄は気にした素振りも見せずに訪問した理由を告げる。

「単刀直入に申そう。我ら稲葉一族は織田方に付く事とした。氏家一族も同様だ。然らば安藤一族も織田に恭従を示し、西美濃の豪族衆の総意として織田へ降らんとしたい。」

「っ!? 待って下さい! それはつまり、義龍様達を裏切るという事ですか!？」

「…義龍様は今も床に臥せり回復の兆しは無い。後継たる龍興は意識の無い父親の側を離れず、政務をおさなりにしている。そうしている間にも、織田は調略を仕掛けてきている。こうなった以上、一色家の建て直しは不可能だ。我らが生き残るには早い内に織田へ鞍替えるしか無い。お主ならそれくらい分かるであろう。」

一鉄の言葉に半兵衛は反論できない。むしろ全面的に同意せざる

を得なかった。

中濃の戦い以降、織田軍は勝利の余韻に浸ること無く美濃南部での防衛線を構築し、勢力圏を確固たる物とした。

更には戦の翌日から周辺の豪族達へ調略を開始し、その手は早くも西美濃へと伸びようとしている。

その間、一色家は敗戦の混乱から抜け出せず有効な手立ては何一つ行えていない。

最早どう言い繕う事が出来ないほど、一色家は沈みゆく泥舟へと成り下がっていた。

「……一つお聞きします。なぜ直接叔父上には無く、私にこの話を持ってきたのですか？」

「…伊賀守は儂を嫌っておる。儂から直接話せば感情的に断るやもしれん。」

「それは………確かに………」

半兵衛にとっては優しく良い叔父の安藤守就であるが、少しでも気の合わない者に対しては徹底的に嫌悪するといった極端な気性がある。

一鉄の予想も十分あり得ると納得してしまった。

「本当なら直元に行かせたかったのだが、あいつはいま療養中だ。無理はさせられん。」

「…それで私ですか。」

要するに自分は叔父への説得役なのだ和理解し、半兵衛は憂鬱に顔を曇らせる。

半兵衛に甘い守就なら、キチンと理を以て話せば了承するのは間違い無い。

ただそれは、半兵衛が叔父に対して一色を裏切るよう唆す事でもある。

半兵衛の脳裏では、幼なじみの若武者がらしくもなく顔を曇らせていた。

「儂に言わせれば、先に裏切ったのは龍興だ。」

そんな半兵衛の心中を知ってか、一鉄は抑揚の無い声でそう告げ

た。

「儂は伝令を通じて確かに言った。いまここで戦線を下げる訳にはいかぬのでそこを動かすな。だが龍興は進言を無視し、あろうことか配下を置き去りにして城に逃げ帰った。このような真似をされ尚も一色を支えようとする者がどれ程居ようか。」

「ですがそれは病に倒れた義龍様を救うためです！」

「だとしてもだ、他にやりようはあった筈だ。龍興は選べる限りで最悪の手段を選んでしまった。また同じ事をやりかねんと思われた以上、美濃の人間で心から龍興に尽くそうとする者は居らぬ。」

そう言つて、一鉄はハッキリと龍興を身限つた。

それに半兵衛が反論しないのを確認すると、一鉄は腰を上げ戸口へと向かう。

「守就を説得したら連絡をくれ。直元が動けるようになったら連名で織田方の使いに書状を送る。」

「…一つよろしいですか。織田の使いの方の御名前はなんと？」

「ん？確か、相良某という者らしい。」

「…そうですか。では最後にもう一つ。事が成つた後、稲葉様は若様をどうされるおつもりで？」

「……事情はあれど、織田にとって我らは主君を裏切り、寝返つて来た者達だ。表向きはどうあれ心の底から我らを信用せん。」

そう言つと一鉄は半兵衛から顔を背ける。

「裏切り者が最初にやるべきは、寝返り先の信用を得れるように死力を尽くした働きを見せること。それしかない。」

吐き捨てるように言い残し、一鉄は庵から去つていった。

その後姿を見送つた半兵衛は、沈痛な面持ちで縁側の方へ顔を向ける。

そこはよく食事の後に龍興が酒をたしなむ場所であつた。

今はそこに誰もいない。冷たさを感じる秋風が赤く染まつた木の葉を運んでくる。

「裏切者がすべきことは、寝返り先の信用を得られるように死力を尽くす事。ですか…」

一鉄の言葉をそのまま汲むのであれば、恐らく稲葉山城攻めの先鋒を務める気でのるだろう。

城攻めで最も重要かつ割を食う役目に自ら志願することで、一鉄は信奈の歡心を得ようとしているのだと半兵衛は理解した。

「ですがそれは、義龍様や龍興様が…」

稲葉山城がどれ程堅牢な城であろうと、西美濃の豪族たちが揃って織田に寝返れば籠城も厳しい。

そもそも援軍の可能性がない籠城策に勝利の芽は無い。つまり、一色家の命運は西美濃豪族衆の心が離れた時点で詰みであった。

そして、城を落とされた城主の命運など古今東西どこを見ても碌なものではない。

「もはや大名としての一色家を残すのは不可能です。だけど…」

半兵衛の脳裏には一つの策があった。

それが成れば最も被害が少なく織田と一色の戦を終わらせる事が出来る。

美濃の民が傷つくこと無く、一族が責めを負うことも無く、幼馴染みを死なせることも無い。

そしてその代償は…

「私の人生…」

この策が成れば、半兵衛は否が応でも戦国の表舞台に立たざるを得ぬだろう。

それは静かで穏やかな日々を愛す半兵衛にとって、尊き日常を手放すことを意味している。

時間を気にせず書物を嗜み、四季の移ろいを漢詩に謳い、親しき友と碁石を並べる。

そんな日々とは縁遠くなるだろう。

その代わりに、国を傾かせる謀を成し、何千何万もの命を奪う策を練る。きつとそんな日々が待っている。

「……………ははっ。なんですかそれは…」

乾いた笑い声と共に半兵衛は顔を上げた。

その目は真っ赤に充血しながらも、知性の輝きが爛々と瞬いてい

る。

「その程度で救えるものがあるなら、私の道は決まっています。」

その顔は泣いているようであり、怒っているようであり、憑き物が落ちたかのように晴れやかでもあり、死に行くように悲壮でもあった。

或いはその表情は一言で表すなら、こう言う他ない。

竹中半兵衛は戦国武将の顔となっていた。

その日、良晴は秀吉と数人の供を連れ、美濃南部に建つ加治田城を訪れていた。

「じゃあ加治田城内の兵達は武器を捨てて城を出る。城代並びにその家族は城に残り、新たに来る織田家の人間の傘下に入る、つて条件で良いんだな？」

「ははあ。慎んでお受けいたします。」

そう言つて頭を下げる加治田城代の言葉に、良晴はホツと胸を撫で下ろす。

加治田城は美濃と飛騨を繋ぐ街道に位置する要所にして、その難攻不落さから『却敵城』の異名でも呼ばれる南美濃の要害であった。

しかし、加治田城の城主である佐藤氏が先の戦で戦死し、他の近親の一族も悉く討ち死にした為、残された家臣たちは取り敢えずの城代を置いて一色家の判断を仰いだ。

だが、一色家は『城の守りを堅めよ』と言つたきりで加治田城を放置した。

この扱いに城代以下の家臣たちは憤り、ちょうど良く良晴が調略に来た事もあり、素直に説得に応じ城を明け渡す約束をするに至る。

これにより、軍事的にも政治的にも織田は南美濃を完全掌握するに至った。

「まあ何はともあれ、これからは同じ織田の仲間だ。ついこの間まで戦をしていたから簡単には割り切れないかもしれないけど、よろしくな。」

「は、ははあ。有難きお言葉に御座います。」

良晴が人好きのする笑顔で告げると、城代は僅かばかり緊張が解れた様子でもう一度頭を下げる。

それを見た良晴は、やっぱり年上の人から頭下げられるのは慣れねえなあ…、などと内心で苦笑いを浮かべていた。

信奈の命を受け豪族たちの調略に勤しむ良晴だったが、その経過は順調そのものであった。

ほとんどの豪族たちは書状を送ればあっさりと面会を受け入れ、話してみれば進んで降伏を受け入れた。

念のため面会には秀吉と前野長康にも付いて来てもらっているが、話し合いはほぼ良晴のみで事が足りていた。

「齒ぐたえの無いというのはこの事だな。城主が討ち死にしたとて難攻不落と謳われた加治田城がこうもあっさり落ちるとは。」

「それだけ一色家への信頼が失われたという事じゃろ。このまま義理を通して城を守るよりも、織田に降った方が一族の命運を保てる。何も間違っちゃおらん。」

加治田城からの帰り道、長康と秀吉がそんな話をしていた。

長康にとっては美濃は生まれ故郷。そこで一度も落とされていな
いことに定評のあつた堅城が、自分の所属する陣営によりあっさり
落とされたことに少々な複雑な感情を抱いている様子である。

「一色なんざと割り切っていたが、こうなってくると少々心苦しくな
るもんだ。何だかんだ言つて、俺も美濃の人間だったって事だな。」

「…意外だな。長康もそんな風に思つたりするんだ。」

「なんだ良晴。俺をただ暴れたいだけの川族とでも思っていたか？」

「…………いや、そういう風に感傷的にも成るんだなっと思つてさ。」

ただの露摺魂野郎だと思つてた、という言葉を何とか飲み込み答えれば、長康は少しだけ遠い目をしていた。

「俺だつてそう言う時もあるさ。ガキの頃よく遊んだ馴染みが、首だけになってんのが見つけたりしたら尚更な。」

「あつ、ご、ゴメン。」

「謝らなつて。それも含めて割り切ろうとしてんだ。お前が謝る必要は無い。」

顔を曇らせる良晴の肩を叩き、長康は柔和な笑みを見せる。

そうして道中を歩いていると、前方の家屋の前で人だかりが出来ているのを見つけた。

「なんだありや?」

興味を引かれた良晴が近づいて見ると、薄汚れた着物の農民の女性が、娘とおぼしき少女を着流しの商人の前に立たせていた。

「それじゃあ、よろしくお願いします…」

「おう。ほれ嬢ちゃん、お別れだ。親に挨拶しとけ。」

商人に促され母親の方を向き直る娘。その相貌は涙で濡れていた。

「…おつかあ…あたし行きたくねえ…」

「…ツナ、堪忍してくれ…」

「っ?!イヤだっ!遊里になんて行きたくねえっ!助けてくれんっ、おつかあっ!」

「おいっ!それ以上親困らせんじゃねえ!」

商人の男は娘の頬を張ると、腕を引つ張つて部下に渡す。

張り手をされた娘は抵抗する気力を失い、母親は頭を下げたまま「堪忍して…堪忍して…」と何度も繰り返している。

「あれつて…」

「ああ、人買いじゃな。おおかた先の戦で男手が死んだんじやろ。残された者達が冬を乗り越える為に、娘を女郎に売ったところじやな。」

「なんだつて!?!」

秀吉の言葉に眼を剥くと、良晴は娘を連れていこうとする商人の元へと走りだそうとする。

しかし、その腕を長康に掴まれ引き留められる。

「余計な事をすんな。困るのはあの家族だ。」

「長康っ!?!だけどっ!」

「それに、あそこにお前が行って何をするつもりだ？金を出して娘を買い戻してやるか？そうすりゃきつと、お優しい織田の侍様は慈悲を縫れば惜しまず金を出してくれるって噂になるだろな。」

「良晴よ、あの様な一家は戦の後には珍しく無い。それをいちいち救い上げる事は出来ぬし、下手に救うべきでは無い。姫様まで困らせる。」

長康と秀吉の説得に良晴は唇を噛み締めるが、やがて力を抜くと頭を垂れた。

もう一度あの一家の方を見ると、商人達は既に居らず、母親のみが微動だもせずその場で泣いていた。

「……………秀吉さん、どうやったらあの人達を全員救えるようになるのかなあ？」

「…さあの。少なくとも天下人に成ったくらいでは、あの光景を無くす事は出来ないじやろ。」

どこか悔やむような、諦めたような溜め息混じりの秀吉の言葉が、良晴の耳にやけに残った。

「あつ、お頭！ちようど良いところに戻られました。」

良晴達が拠点としている砦に戻ると、川並衆の男が慌てた様子で長康に近づいて来る。

「おう、何かあったのか？」

「それが相良の旦那に客でさあ。」

「俺に？」

「へい。大層別嬪なお嬢さんです。旦那もなかなかやりますねえ。イテツ!？」

イヤらしい笑みで良晴をからかう部下に長康が拳骨を喰らわせる。

一方で良晴は首をかしげていた。

大層な別嬪と言える知り合いは、良晴がパツと思いつく限り織田の

姫武将ばかりである。だが織田の武将であれば、態々そんな遠回しな言い方はしないでだろうし、そもそも本隊との遣り取りは基本的に書状で行うようになっていいる。

とすれば、調略をした豪族からの使者だろうかと少し緊張しながらも、良晴は客人が待つ部屋に秀吉達と共に入る。

「お待たせ。俺が織田の交渉役の…って月?！」

部屋で待っていたのは菩提山の庵で毎日のように顔を合わせていた少女、月であった。

予想外の人物に驚きながらも、良晴は月の対面に腰を降ろした。

それに対し、月は恭しく頭を下げた。

「いったいどうしたんだよ月? お前一人でこんな所まで来るなんて。」

「…いいえ。私は月などと言う娘では御座いません。私は…」

そう言っつてゆつくりと顔を上げる少女の表情に良晴は息を呑んだ。

その顔を良晴はよく知っている。己が仕える主君がする顔ゆえに。

己が目標とする友がする顔ゆえに。

この子はいったい誰だ。

そんな言葉を思わず吐き出しそうになった。

戸惑う良晴を尻目に、少女は戦国武将の瞳で真っ直ぐに良晴を居抜く。

「私は西美濃豪族、安藤守就の姪にして菩提城主。桓武平氏の流れを祖とする鎌倉氏系竹中家の当主、竹中半兵衛重治に御座います! 此度は一族を代表し、相良様に献策したく馳せ参じました。」

「献策って…」

「…稲葉山城を一兵も損なうこと無く落とす策に御座います。これを以て西美濃豪族衆一同の織田家への恭従を示す事をお許しく下さい。」

その言葉に良晴は、思わず秀吉の方へと視線を向ける。

秀吉は少し哀しそうな眼差しで、友であり続けたいと望んだ少女を見ている。

稲葉山城の城主の間。

その主たる一色義龍は、戦場で倒れてから意識を戻さぬまま今も病床に臥している。

その傍らには思い詰めた表情で息子の龍興がじっと動かずにいる。そうしていると不意に襖が開き、神経質そうな細身の若者が顔を覗かせた。

「失礼いたします。斎藤飛騨、ただいま戻りました。」

「おう、お疲れ飛騨。」

疲れた様子の若者に龍興が労いの言葉を送る。

若者の名は斎藤飛騨。

元は美濃守護代の家系の斎藤氏の出自であるが、血筋的には道三達とは一切関係無い。

しかしながら、龍興にとって数少ない同年代である事と、家柄の面から側近に抜擢されていた。

「で、どうだった。越前の若殿の反応は？」

「…申し訳御座いません。色好い返事は…」

「…そうか。まあ仕方ねえよな、こればかりは。」

悔しそうに絞り出した飛騨の返答に、龍興は自虐の籠った溜め息を吐く。

「左衛門督曰く、越前はこれより本格的に雪が深くなるため美濃まで兵を送ることは出来ぬと。冬を超えたらもう一度、越前に赴き朝倉殿の御助力を願い出に…」

「いや、いい。おそろく越前の若殿にも見限られてる。同盟を結んだ建前上、適当な断り文句を言ってるだけだ。」

朝倉と一色は対浅井を念頭に置いた同盟関係にあった。だがこの時すでに、龍興の言うように朝倉は一色の命運が最早無いと見切っていたとされる。

敗戦後、城に籠った龍興だったが、その間何もしていなかった訳ではない。

医師の懸命な治療により義龍の病状がひとまず落ち着くと、配下の豪族達にはまずは防備を整えるように指示を出し、朝倉や六角のような近隣の友好国へと書状を送り助力を願い出た。この時はまだ、龍興も織田との勝負を投げてはいなかったのだ。

しかし、織田の攻勢は龍興の予想を遥かに越えていた。

速攻じみた調略により、龍興の指示が届くより早く城を明け渡す城主は数多に上り、防衛体制の構築は早々にして破綻。

そのような状況を見て他の豪族も立て続けに織田に降るといふ悪循環により、一色の勢力圏は短期間に激減した。

こうした状況では他国も一色を救援する価値を見出だせず、嘗ての同盟国は早々に美濃から手を引く。

どこからどう見ても、一色は詰んでいた。

「…こうなってくると、親父の言葉が胸に染みる。」

中濃の戦いで愚将としての評価を下された龍興だったが、それ以前からの悪評も豪族の離反を招いていた。

元服してからも城下を遊び歩き、女が絡まないと嫌なことから逃げ回りまともに政務をしない。

そんな龍興の姿を、豪族達は軟弱で怠惰な息子として見ていた。

『お前が思っている以上にお前は周りから見られているのだ。』

戦の前に義龍から言われた事が思い出される。

なるほど確かに自分は周りから見られていたのだな、と今更ながら龍興は己の過去の言動を悔いていた。

「あの、よろしいでしょうか?」

「ん? どうした。」

物思いに耽っていると、飛騨の後ろから小姓が声をかけてきた。

「たった今、竹中重治様が御来訪されています。何でも、大殿の御見舞いに参られたとのこと。」

「半兵衛が親父の見舞いに?」

小姓の言葉に眉間に皺を寄せる龍興だったが、程なくフツと顔を緩

ませる。

「そうか。じゃあ、そのまま通してくれ。」

「あつ、それでは腰のお召し物をお預かりし、従者の方には下で待つて貰って…」

「しなくていいよ、そんなこと。そのまま部屋に通してくれ。」

「いや、ですが…」

「大丈夫。半兵衛は知った仲だ。なんの気遣いも要らねえよ。」

龍興と半兵衛が不仲という噂を知ってか、小姓は龍興に配慮しようとするが、龍興はそれを留める。

どこか納得しかねる様子の小姓だったが、龍興に促され部屋から下がる。

程なくすると、小姓は半兵衛を先頭にした一団を連れてくる。

「……………」

「……………」

「…こうしてこの城で話をするのは、お前が廊下で小便を漏らした時以来だな。」

「いきなりその話を切り出しますかっ!？」

一言目からぶっこんだ龍興の発言に、半兵衛は顔を真っ赤にして大声を上げる。

半兵衛の従者の内何人かは「えっ、小便？」と半兵衛を見た。

その様子をケラケラと笑った龍興だったが、すぐに笑いを納めると真剣な表情で口を開く。

「冗談はさておき、親父の見舞いに来たと聞いているが、本当は違うんだろ。」

「……………はい。龍興様と義龍様。その御身を預かりに参りましたっ!」

半兵衛が答えた瞬間、控えていた従者達が一斉に刀を抜き飛驒や小姓達に突き付け動きを封じる。

その様子を龍興は微動だにせず眺めていた。

一方で、いきなり首元に刃を突き付けられた飛驒は息を呑むと、目を剥いて半兵衛を睨み付けた。

「っ!?!重治っ!貴様裏切ったかあつ!義龍様に刃を向け、それでも温

情を与えられながら恩を仇で返すとはっ！恥を知れっ！」

「落ち着け飛驒。どちらにしろ俺達は詰んでたんだ。にも関わらず、わざわざ城に乗り込んで来たのは、俺と親父の命を救うためか？」

どこまでも冷静で、悟りきったかのような龍興の問い掛けに半兵衛は唇を噛んで俯く。

その表情が何よりの答えだった。

「西美濃衆は既に離反すると決めている。だが織田方に着くにも信用を得るだけの手土産が必要だ。例えば、危険を顧みず少数名で敵本拠に乗り込み城主を捕縛するのかな。それだけの手柄であれば信用を得る手土産としては申し分なく、褒美として捕らえた者たちの助命を願えば、織田方としても無碍には出来ぬ。ってところか？」

どこか楽しげに、まるで唄でも吟じているかの如く龍興が語った内容は、半兵衛の狙いそのものだった。

半兵衛は知らぬ内に拳を固く握りしめていた。

「…良くぞ…そこまで。」

「まあな。これがお前以外だつたら分からなかつただろうな。お前が考えそうなことを想像したら、なんとなく分かった。」

その言葉に半兵衛は涙が出そうになった。だがその姿を隠すかのように、大きな背中が半兵衛の視界を遮った。

「そこまで分かっているなら大人しく降伏せよ。さすれば命ばかりは獲りません。」

「おおっ！誰かと思えば爺ちゃんじゃねえか。暗くて良く分からなかった。ん？後ろにいるのは良晴に秀吉か。これはまた随分と見知った顔が集まったもんだ。よしっ！ちよつと待っててくれ。」

そう言つて立ち上がると、龍興は部屋の隅の戸棚に向かう。

半兵衛の部下が止めようとするが、道三がそれを手で制した。しばらくすると、銚子と盃を持って戻ってきた。

「元々は親父が一人で楽しむ用にわざわざ蔵元から取り寄せていたものだが、せっかく顔見知りが集まったんだ。それに良い酒は一人で飲むより、気心が知れてる奴らと飲んだ方が楽しい。だろ？」

龍興は床に四つ盃を並べると、そこに酒を満たしていく。そして手

に持った自分の盃に酒を注ぐと、周囲から見えるように飲み干した。「どうだい、俺の誘い受けちやくれねえか？」

その問いの後、僅かな間静寂が部屋を包む。しかし、誘われた四人は不思議と顔を見合わせることも無く、ごく自然にそれぞれの盃の前に座り、静かに盃を明けた。

それを見て龍興は嬉しそうに笑う。

「…なぜだ。どうしてお前達は天下を望まなかった。その資格はあったらろうに…」

暫くの間、無言で酒を飲み交わしていたところに、不意に絞り出すように道三が呟く。

そこには嘗て天下を狙った戦国武将として、血を分け与えた子と孫に対するやるせない想いが込められていた。

祖父の言葉に龍興は苦笑いを浮かべる。

「そりゃ買い被りすぎだぜじいちゃん。親父は兎も角、俺は精々一地方領主が限界さ。それで十分満足出来る。じいちゃんとは同じ夢を見れねえ。」

無位無官の油売りから身を興し、己の智謀と腕っぷしで美濃の地を奪い取った道三。

美濃の地で生まれ育ち、所領を守る武士として育った義龍と龍興。

血の繋がった肉親とはいえ、彼らの境遇はあまりにも違っていた。見える景色は何もかも違っていた。

道三は己の力量で天下の頂を手にする事を夢とし、その理想を信奈に託した。

義龍と龍興は生まれ育った故郷の日常を愛し、現実として目の前にある営みを守らんとした。

長良川の戦いに始まり、中濃の戦いを経て今日まで繰り広げられた美濃を巡る一連の闘争は、そうした道三と息子たちの理想と現実のせめぎ合いと言えるかもしれない。

「なあ、俺からも聞かせてくれ。織田信奈はなぜ天下を求めた？」

今度は龍興が良晴たちの方を見て問いかける。その顔は真剣そのもの。ここでの問答が、この戦の結末を決めるものになると、良晴に

も理解できた。

良晴が秀吉に目配りすると、秀吉は頷き口を開いた。

「…信奈様は武を以て天下を治め、日ノ本の地より戦を無くされる。而して政を安定させた後、自ら国外へと渡つて各国と交易を行う。場合によっては海外にも領地を持ち、その地を豊かにされるだろう。」
「ほう。それは立派なことだ。だがそれはお前さんの主君が遣ろうとしている事だろ？俺が知りたいのは織田信奈という女が何をしたいか。天下を欲しているのかだ。」

「信奈様が何をしたいか、か…」

龍興の疑問を繰り返し、秀吉は思いを馳せる。

考えてみれば信長にしろ信奈にしろ、何がしたくて天下統一、さらにその先の国外進出を目指していたか、秀吉は知る機会がなかった。

朝鮮に侵攻したのも、それが信長が生前天下統一の先に計画していたからであつて、秀吉自身は何かをしたかつた訳ではない。改めて思い起こすと恥ずかしさで顔を埋めたくなるような所業だ。

「なあ、俺は思うんだ。幾多の国と家を滅ぼし、何千何万もの命を奪い、数多の恨み辛みを買つた末に天下を統一したとして、それに見合うものは手に入るのか？たとえ太平泰安の世を目指し、日ノ本の民の安寧を願う政をしようと、何か一つでも失態をしようものならば、多くの者から批判されるぜ。」

それはまさしく秀吉が生前経験した事だった。

結果としては信長の夢の後追いでしかなかったが、当時の秀吉は天下の為政者として戦乱の世を終わらせ、太平の世を築こうとする気概が有り、そのための政策もいくつも実行した。

だが、民というのは秀吉が想像するよりも遥かに傲慢で移り気であつた。

秀吉の事を天下一の出世男と称えたその口が、数か月後には所詮成り上がり者の種無し男と蔑み、大地震の原因までも秀吉の徳が無いからだと囁いた。

挙句に秀吉がこの世で最も愛した我が子までも貶められ、何のために天下を治めたのかと秀吉を苦悩させた。

龍興の予想は、そうした天下人の孤独の本質を捕らえていた。

「なあ、どうして皆そんなに天下を求めらるんだ。人々の為にと心血を注ぎ、その結果多く者からの憎しみを背負い、そうして手にした天下のその先に何があるっていうんだ？なんでそんな風になってまで、お前たちは修羅の道を進めるんだ？教えてくれ…」

静かに、されど切実に龍興は問う。

その問いに秀吉は答えられない。あの時手にした天下は仮初の夢、信長の目指した物ではない故に。

半兵衛にとつては天下に思いを馳せるなどという大それた事、想像すらしこなかった。

道三も答えられない。嘗ては天下を夢見たとはいえ、夢破れて他人に託した男に、天下の先など答えられる筈がなかった。

「…未来のため、じゃねえかなあ…」

答えたのは良晴であった。

まるで思わず口にしたかのように溢れ落ちた一言は、一瞬の静まりにあつた場に良く響く。

「未来のため、だと？」

「ああ。実はさ、オレこの前初めて人が買われるのを見たんだ。俺のいた国じゃ、そんな光景まず見る事は無い。それだけじゃねえぞ。水争いなんて起こらないし、普通に飲める水で毎日風呂に入れる。あと、どこに行っても真夜中でも商品を売ってる店があつて、食べ物から日用品まで何でも手に入る。警察、こつちでいう警邏の人達はみんな真面目に治安を維持してくれていて、夜でも女性や子供が安心して歩ける。戦争なんて七十年以上前の事で、それ以来一度も起きていない。」

良晴が語るのは現代日本の日常。されどそれは、戦国の世では絶対に手に入らないもの。

その内容に、秀吉でさえも圧倒された。

「犯罪さえ起こさなければ、どんな宗教や外国の人達だって受け入れる。大地震や大津波があつても暴動や略奪が起こらない。それどころか、災害が起こればすぐに国が救助隊を派遣して被災者を助けてく

れる。子供達はみんな学問を習う事が出来て、努力次第で商人にも学者にでも、政治家にだって成れる。政治家を批判してもよほど酷くなければ許されるし、政治家も批判ばつかされるけど、なんやかんやで今言った社会を何十年も維持できてる。」

「おい良晴、何言ってるんだ？そんな国あるわけが…」

「それがあるんだよ、龍興。俺はその国で生まれ育った。まあガキの俺から見ても全く問題が無いわけじゃないぞ。毎日のように悲惨な事件の報道はされてたし、さっき言った日常を得られない人たちも、全体から見れば少ないけど確実にいた。それでも、今のこの国と比べた時、俺の国の方が圧倒的に幸せで平和な国だったって断言するぜ。」

戦国の世に来て数ヶ月。まだまだ故郷の情景は色褪せないが、このまま時が経てば遠い過去の物と成るだろう。

それでも、最早帰る事すら叶わなくとも、龍興が否定した国こそ、良晴にとつての愛しく懐かしき故郷であった。

「だけどな、俺の国だって最初からそうだった訳じゃない。何度も戦争があつて、数えきれないような犠牲があつて、漸く大多数の人が平和だって言える国を作ったんだ。それが出来たのは、きっと未来を良くしたいって人の意志が有ったからだと思うんだ。この国から争いを無くしたい。苦しい思いをする人を少しでも無くしたい。例え武力によつて強制的に天下を統一したとしても、未来のためについて意志がなきゃ平和な国は作れない。きっとそういう人達が俺の故郷を作ったんだ。」

良晴は乱世の無情を知り、平和の尊さを知った。

また、これより四百年の歴史を知る者として、平和の尊さを訴えたところで乱世を終わらせられないと知っている。

ならば何をするか？

ここに至つて良晴は己の成すべき事を悟った。

「俺は平和で幸福な国を知っている。俺はこの国を、俺の故郷のようにしたい！もちろん俺が生きてる間に出来るとは思えねえけど、信奈の天下統一を助けて、この国の歴史を進めて、少しでもいいからこの国を発展させる。それで未来を良くするって考えを後世に伝えて、四

百年後のこの国が、いや、一年でも、一日でも早く、俺の故郷のような平和で幸福な国になっているようにしたい！それが、俺の戦国武将としての夢だっ！」

嘗て秀吉が今世での夢を語った時、良晴はその姿に憧れ、背中を追いかける事しか出来なかつた。

だが今まさに、良晴は己の夢を定めた。

その夢は、天下統一の先を目指すもの。

未来人としての知識を惜しみ無く使い、歴史の流れを進め、己の知らぬ未来を作ろうとする行為。

あまりにも壮大かつ傲慢な夢に、部屋にいた者達は言葉を失う。

良晴の夢に比べれば、信奈の夢さえ小さく見えた。

「うつけの臣下は…やはりうつけよなあ…」

低く、掠れた声が離れた場所から聞こえた。

それを聞いた龍興は、ハツと声のした方を振り向く。

そこには、横になったままうつつすらと眼を開いた義龍が微笑をしていた。

「親父っ!?!目が覚めたのか!」

「ああ、なにやら馬鹿げた話が聞こえてきたものでな。」

「な、なんだとっ!?!」

義龍の言い様に良晴は立ち上がる。だが、そんな反応にさえ義龍は楽しそうに笑った。

「小僧、俺にはお前の話が信じられん。民の大部分が平和で幸福な日々を過ごせているだど?そんなふざけた夢のような国…いや、そんな国は夢でさえ見る事が叶わぬ。」

義龍の言うことは事実だった。この場にいるすべての人間が、良晴から具体的な話を聞いても、その全容を想像する事も出来ないだろう。

四百年後の平和の世を想像するには、戦国の世はあまりにも無情だった。

「だが腹立たしい事に…俺はお前の話を聞いて、羨ましいと思うってしまった。それがどれ程はるか先の未来にあらうと、それを目指そうと

する小僧の気概に憧れてしまった。なあ…小僧…お前の言う国は…
確かにあるのだな？」

「……ああ、俺の故郷は確かにある。」

「………そうか……そうか…それは…いい夢だ…」

良晴の答えに満足そうに頷くと、義龍はその視線を我が子へと向けた。

「喜太郎よ…この戦…我らの負けよ…」

「…だな。ごめんつ、親父つ…俺が…不甲斐ないせいで…」

「…ふん。元はと言えば…戦中に倒れた俺の責任だ…だから泣くな…男であろう。」

義龍は顔を押しさえ睨り泣く龍興に震える手を伸ばすと、その頭を優しく撫でた。

それから今度は道三へと視線を向けた。

「父上…このような体で申し訳ありません。願わくば…信奈殿に言伝を…」

「…なんと伝えればよい？」

「…美濃の民を…尾張の民と同様に…愛して下さい。さすれば…美濃の民は…必ずやその心遣いに応えます。」

「…ああ、必ずや伝えよう。この儂の命を懸けて。」

「…ありがとうございます。」

体を横たえた我が子の弱弱い姿に言葉を詰まらせながらも約束した道三に、義龍は感謝の言葉を伝える。

その言葉に、美濃の蝮と恐れられた男の瞳から、一筋の雫が零れた。

「義龍よ、儂はお前を見誤っておった。お主は、真に良き領主である！我が自慢の息子だっ！」

「…そのお言葉つ…まことに有難くつ！夢のように…御座います…」

信奈公記によれば、竹中半兵衛の主導の元、天下の堅城と謳われた稲葉山城は僅か十四名の手勢により占拠された。

この時の手勢には木下秀吉、斎藤道三、そして相良良晴などが参加しており、彼らは城主の間で一色義龍、龍興親子と対面し、これ以上の戦は無益と説き、城の開城を認めさせたとされている。

一色義龍が息を引き取ったのは、その翌日の事だった。

享年三十五歳。織田信奈の生涯の宿敵と成り得た男の、早すぎる死であり、義龍の死を以て一色家は完全降伏。美濃一色家は大名としての歴史を終えた。

今宵はこれまでに致しとう御座ります。

天下布武

一色義龍が息を引き取ったその日の晩、信奈が拠点とする砦の一室で信奈と道三は対面していた。

信奈はそこで、道三から稲葉山城での顛末を聞いている。その周囲には、他に誰もいない。

「…尾張の民を愛すように、美濃の民を愛して欲しい、デアルカ…」

信奈は静かに言葉を紡いだ。

それは眼前で伏する道三から聞いたばかりの義龍の遺言であり、道三が二人つきりだという条件のもと伝えた内容だった。

「…マムシ、なぜ義龍は私にこの言葉を伝えたのかしら？」

「…思い当たるに二つ。一つは、真に美濃の民を想つてのこと。もう一つは、信奈ちゃんに儂の二の舞をさせぬ為じやろう。」

「マムシの二の舞？」

「…儂はもう信奈ちゃん、若き頃は本気で天下を獲ろうとしておった。その為に他人を陥れ、足蹴にし、美濃一国を手にした。だが、そうやって手にした美濃でさえ、儂にとっては天下を目指す為の踏み台だった。きつとそれが、義龍や家臣には透けておったのだろう。ふっ、追放されて当然の振る舞いじゃ。」

自虐的に笑う道三の雰囲気は、いつになく覇気に乏しかった。

よわい六十を越え堂々としていた佇まいも、今は小さく縮こまって見える。

まるで、一日にして急激に歳を取ったようであった。

「他人の心は解らぬもの。されど、振る舞いから想像は出来る。信奈ちゃんが美濃の民の心を掴めねば、再び美濃は戦乱に巻き込まれるじやろう。それで傷つくのは民じゃ。それを義龍は危惧していたのであろう。」

「…………デ、アルカ。よくわかったわ。義龍の言葉、重々肝に銘じるわ。」

「ありがとう、信奈ちゃん。それと、儂からもお願いじゃ。」

そう言う道三は、信奈に向かって深々と頭を下げた。

「本日を以て、暇乞いを致しとう御座る。」

道三の願いに、信奈は一瞬目を見開き動きを止める。

だが暫しの間、無言のまま頭を下げ続ける道三を見つめると、小さく溜め息を吐いて背中を向けた。

「一応、理由を聞いてもいいかしら？」

「……………此度の一件で今一度思い知った。儂に天下の器量など、最初から無かったのだと。信奈ちゃんに夢を託したつもりでおったが、とんだ勘違いじゃった。儂はただ、己の人生を正当化したかっただけじゃ。」

絞り出されるのは後悔の念。悪逆な人生を歩んできた己に対する羞恥が込められていた。

「儂は上ばかり目指し、足元の者を見ようとしなかった。愚劣を嫌い、怠惰を切り捨て、旧きを軽んじ、才無きを無価値と断じた。己が何よりも正しいと盲信し、天下を射止めて才を示さん等と驕り昂った。まこと救い難き愚か者じゃ。」

道三は己の人生を思い起こす。

京で北面武士を勤める武家に産まれるも、様々な事情により父の代で役目を解かれ、一家の生活の為に寺に入るしかなかった。

そこで早くから頭角を現したが、仏に祈るばかりでは救世は成らぬ、と若くして悟り寺を飛び出した。

還俗し油問屋の奈良屋に奉公すると、その主人に働きぶりを評価され、娘を娶り婿となった。

その後、各地を行商として行脚していくうちに、現世は力が物を言う世なのだと理解する。力さえあれば世を動かし、歴史に名を刻むことも可能であると。

ならば自分はどうなのかと。自らの力を試し、天下に名を轟かせる資格が有るのではないかと。

故に道三は武士になった。己の才を示さんが為に。

「儂は自分の夢が、いや、己の過去の所業が間違いであると、認めたくなかったのだ。今までの非道は全て、天下に繋げるに必要な悪だとしてたかった。信奈ちゃんに国を譲ろうとしたのもそうじゃ。儂の為に

た悪行は、間違いなく天下に繋がっていた。そう思いたかつたんじゃない。我が子や民がどのような思いを抱くかを考えもせず…」

「…ここを離れ、どこか行く当ては有るの?」

「…今はまだ。だが何処かの寺に入り、義龍の弔いを出来ればと思うておる。」

「…：デアルカ。好きにすれば。」

「…忝い。」

最後にもう一度深々と頭を下げると、道三は信奈に背を向ける。

だが、部屋を出る直前に足を止めると、もう一度信奈の方を向いた。

「信奈ちゃん、相良の小僧には、これからも役目を与え続けるが良いじゃろう。」

「良しサルに?」

「うむ。あの小僧は使えば使うほど伸びる奴じゃ。そして必ず、信奈ちゃんが時代を進める手助けをしてくれる筈じゃ。」

そう言い残すと、道三は今度こそ部屋を出ていった。

去り際の横顔は、僅かばかり晴れやかに成っているようにも見える。

一人きりになった部屋の中で、信奈はじつと想いに更ける。近くに人のいる気配は無い。

「…：時代を進めるなんて、軽々しく言ってくれるわね。本当に、男つて自分勝手…」

自分は一抜けしといて、と信奈は苦々しく呟く。ただ、その表情は明らかに寂しげであった。

「やってくれたな。」

稲葉一鉄の開口一番の一言に、半兵衛は腹の奥がキュウと絞れる感覚を覚えた。それでも何とか顔色が崩れぬように、表情筋に全力を込める。

場所はいつかと同じ半兵衛の庵。あの時と同じく、部屋にいるのは半兵衛と一鉄のみである。

「まさか御主が直接城に乗り込むとは思わなかったぞ。城攻めのどさくさに紛れて逃がすくらいはする、と思っておったがのう。」

「…稲葉様は、私が龍興様を生かそうとするのを分かっていながら、私に寝返りの話を聞かせたのですか?」

「ああ。御主が人目を忍んで龍興と親しくしておるのは知っておったからのう。必ず龍興を生かそうと思っておったわ。」

当たり前前の様に語る一鉄に、半兵衛は背中に寒気を感じる。

きつと一鉄は、密かに半兵衛を配下に見張らせていたに違いない。

もし仮に一鉄の言うように、城攻めのどさくさに紛れに龍興を逃がそうとしていけば、事は露見し半兵衛も龍興と引つ捕らえられて織田方の前に付き出されていてもおかしく無い。

「まあ、今となってはどうでも良い。結果としては城攻めの必要も無くなり、損失も抑えられた。西美濃衆の総意として織田の傘下に入れたのだから、これ以上は望むべきでは無い。」

「…あくまでも、西美濃の為ですか?」

「…ああ、俺はこの地に産まれ、この地に育てられた。美濃に仇成す者がいればそれを誅し、美濃に恵みを与える者がいれば受け入れよう。それが俺の土道だ。」

稲葉一鉄という武将はその後、織田に降ってからその才を發揮し、各地を転戦し多くの手柄を上げる。

しかし、一鉄は一度として加増や転封を望むことは無く、生涯を通して美濃の領主として在り続け、彼の地の発展に貢献した。

まさしく、美濃の為に生き、美濃に尽くした人生と言えよう。

半兵衛は一鉄の言葉に納得した。

この男は骨の髄まで美濃の国人なのだ。全ての理念が、美濃の安寧に繋がっている。

その点で言えば、一鉄は最も信頼できる武将の一人であった。

「ときに重治、御主に一つ聞いておきたい事がある。」

「…なんですか?」

「御主は龍興に惚れておったのか？」

「なっ!？」

意外過ぎた質問に半兵衛の顔は一瞬にして真っ赤になる。一方で一鉄の真剣な面持ちは変わらず、冗談やからかい類いでは無いと見えた。

半兵衛は一旦お茶を飲み呼吸を整えた。

「どうして今そんな質問を？」

「いや何、実は以前から御主を龍興の妻にという話はあつてだな。今更ながら御主が阿奴をどの様な感情を持っていたか、気になったのだ。」

「…あの、私と龍興様は仲が悪いと噂になっていたのでは…」

「ああ、御主が龍興から小便を引つ掛けられたというあの話か。あれは御主が漏らしたのを龍興が咄嗟に誤魔化したのだろう？新参は兎も角、当時仕えていた者たちは皆察しておる。」

所詮子供の浅知恵だな、と一鉄は小さく笑う。

「じゃ、じゃあまさか、龍興様が此処に来ていたことも…」

「家老職の者なら皆知っておったぞ。龍興は女好きだが、一人の女にこれほど執着するのは珍しかったからな。御主の父が道三に付かなければ、具体的な嫁入りの話もあつたであろう。で、御主自身はどう思っていたのだ？」

再び尋ねられ、半兵衛は今一度自分と龍興の関係に思いを巡らせる。

そうしてしばらく思索していたが、ほどなくスッキリとした表情で顔を上げた。

「私も武家の娘です。もし親や主君から嫁入りの話があれば、どのような相手であろうと喜んで相手の家に入るのが私の務めです。ですが稲葉様、貴方様が聞きたいのはこういう答えでは無いのでしょうか？」

その問い掛けに一鉄は黙ったまま言葉を返さない。故に半兵衛は言葉を続ける。

「私は喜太郎様を、お慕いしておりました。」

視線を逸らさず、ハッキリとした口調で半兵衛は告げる。未練など何一つ無いという、晴れやかささえあった。

「お慕いしていたか…」

「ええ。」

迷い無く答え、半兵衛は想う。

あれはきつと、初恋の成り損ないだったのだろう。

お互いにどこか遠慮していた。

大切な存在だったのは間違いない。

だけどあと一歩、互いに踏み出せなかった。気を遣い過ぎていたのかもしれない。

だけど、その距離感が心地よく、気が楽だった。或いはどちらかの立場が少しでも違っていれば、進展していたかもしれない。

だがそうは成らなかった。だから初恋の成り損ない。

愛情でも無く、友情とも少し違った微妙な距離感にある男女の絆。

それが半兵衛と喜太郎の間にあったものだ。

「…つまらない質問をしたな。そろそろ失礼しよう。」

「もうよろしいのですか?」

「ああ。もともと御主に恨み言を言いに来ただけだ。用件は済んだ。」

そう言って立ち上がると、一鉄は半兵衛に背を向け入り口の戸を開けた。

「おっと!」

「っ!?!これは失礼。」

戸の向こうかでは誰かが居たらしく、ちょうど一鉄と鉢合わせする形となっていた。

半兵衛が首を伸ばし確認すると、そこに居たのは…

「藤吉郎様っ!?!」

「お久しゅう御座います、竹中殿。御来客中のようで、出直して来ます。」

「いや、もう帰るところだ。ではな、半兵衛。」

秀吉を一瞥すると、一鉄は今度こそ庵をあとにする。

残された秀吉は一鉄に向かって軽く一礼すると、半兵衛に向き直つ

て戸を閉める。

「改めまして竹中殿、突然の訪問で申し訳ありません。いま、よろしいですか。」

「はい。どうぞ御上がり下さい。」

「忝ない。では、失礼いたします。」

半兵衛に促され、秀吉は庵に上がる。

お茶を出そうとする半兵衛だが、秀吉はそれを手で制した。

「此方から押し掛けておいて茶まで頂く訳にはまいりません。竹中殿、実は今日、姫様に御願いをして参りました。」

「信奈様にですか?」

「はっ。そのう、竹中殿の処遇について少し。」

そう話す秀吉の口調は普段に比べて妙に歯切れが悪い。

目線も世話しなく左右に揺れ、姿勢も少し前傾である。

短い付き合いの半兵衛でさえ、いつもと違う秀吉の態度に怪訝な表情を作る。

そうしていると、意を決したように秀吉は切り出す。

「竹中殿、ここから逃げ出す気はありましようや?」

「えっ?」

突然の申し出に半兵衛の口から呆けたような声が出る。だが、秀吉の表情はいつになく真剣だった。

「思うに、竹中殿は戦国の世に向いておりませぬ。勿論、その知謀に疑う余地は無く、此度の争乱でも存分に發揮されたのは周知の事実。されど、竹中殿の御気性は優しすぎます。」

僅かな兵で稲葉山城を占拠してみせた半兵衛の名は、既に織田家中にも響いている。多くの武将が興味を持ち、自軍に取り込めないかと機会を伺っていた。

だが、半兵衛の性格は戦国武将の生き方と、致命的に相性が悪かった。おまけに半兵衛の身体はあまり丈夫では無い。

このまま乱世に身を投じれば、遅かれ早かれ心身を疲弊することになるだろう。

「故に竹中殿が乱世から逃がれたいと思う事、拙者は当然と思ってお

ります。いざとなれば、竹中殿が御隠れになる手助けをする所存に御座います。」

「…藤吉郎様、どうして私にそこまで？」

「竹中殿が、私にとつて大切な存在であるが故に。」

秀吉は半兵衛の問いに迷いなくそう答えた。

胸中にあるのは、生涯の友と成り得た男を心半ばで失った後悔。同じ思いは二度と御免だった。

そんな秀吉の思いを完全には理解できなくとも、秀吉が心から半兵衛を気遣っていることを半兵衛は理解した。

故に、口元に笑みを浮かべながらも、半兵衛は申し訳なきように目を伏せる。

「藤吉郎様の御提案、誠に有難く。おっしゃる通り、私は外の世界が怖いです。だけどそれよりも恐ろしいのは、私自身の気質。私は知識を得る事に樂を感じ、それを活用することに喜びを感じます。たとえその結果、多くの命を奪うことになろうとも…」

半兵衛は争い事が嫌いだ。自分が傷つくのも、他人を傷つけるのも厭う。

だが一方で、古今の名将と呼ばれる者たちが駆使したという策を知る度に、胸の内に興奮を覚え、己ならどうするかを夢想する。そうして気づけば嬉々として敵を屠る策を練る己に、半兵衛は時折恐ろしさを感じ、自己嫌悪に陥るのだ。

「口では戦は嫌いだと言いながら、心の内では戦の勝ち筋を常に考え続けている。そのような人間は、世に出るべきではないとさえ考えていました。いえ、ただ単に自分の手を汚したくなかっただけです。ですが、そんな浅ましき心の変化がありました。」

「…それはもしか、良晴の夢によるものですか？」

「…はい。戦が無く、民の大部分が幸せに暮らせる国。もし、本当にそんな国があるならば、我が才により歴史を進める道を歩いてみたい。そんな風に思っていました。」

夢でさえ望むことさえ出来ぬ国に魅せられたのは義龍だけではない。むしろあの場にいたほとんどの者が良晴の話に魅力を感じてい

た。それは秀吉も同様であった。

「そうでございませうか。然らば、しようがありませんね。」

「申し訳ありません。お氣遣いいただいたのに……」

「いやいや、お氣になさいますな。お氣持ちは良く分かります。竹中殿の御決意、この藤吉郎が応援いたします。その上で、竹中殿に一つお願いしたいことがあります。」

「私にお願いですか？」

改まった様子で真つすぐに見つめてくる秀吉に、半兵衛は顔を緊張させ背筋を伸ばす。

そんな半兵衛に対し、秀吉は咳払いを一つしてから口を開いた。

「竹中殿。」

「はい。」

「ああ、いや……竹中重治殿。」

「はい……」

「……半兵衛殿。」

「っ!?……はい。」

「儂は産まれが卑しく、まだ此方では武士として駆け出しじゃ。それでも、此度の戦では少なからず手柄は立てたと思うし、信奈様は働きに対しては正当に評価して下さいる御方じゃ。とはいえ、既に城持ちの半兵衛殿に比べれば身分違いも甚だしいのじゃが……」

そこで言葉を切り、秀吉は伏し目がちに半兵衛の反応を伺った。

半兵衛は何も言わず、静かに微笑んで続きを促す。

それを見て、秀吉は覚悟を決めた。

「儂は半兵衛殿を側に置きたい。そう、姫様に御願いした。他に褒美は何も要らぬので、どうか半兵衛殿を儂の手許に置く許しを、と言ったところ、半兵衛殿が良しとすれば、という条件で御許し頂けた。なので、こうして貴方様の氣持ちを伺ったのじゃが……如何に？」

恐る恐るといった様子で弱気に尋ねてくる秀吉。それを見て、半兵衛は思わず吹き出してしまふ。

まるで下の者が上役に物をねだるが如くする様は、人によつては大変情けなく見えるだろう。

しかし、半兵衛にはそんな秀吉の振る舞いが『愛おしく』見えてしまった。

ああ、なるほど。これが…
笑いを抑えながら半兵衛は会得した。

目の前では秀吉が不安そうな面持ちで半兵衛を見ている。

半兵衛は目を細めると居すまいを正した。

「…私には弟がいますし、それを支えてくれる家臣もいます。私がここを離れても、上手くやってくれる筈です。」

「っ!?では!」

「だけど一つ、御願いが御座います。」

「おおっ、何だ?何でも申せっ!」

前のめりになる秀吉の姿に、思わず笑みが溢れる。

秀吉が喜ぶ様子を見ると、自然と己の心も高鳴ってくる。

ほんのちよつとした動作にさえ感情が揺さぶられる程、半兵衛は秀吉に完全に参ってしまった。

だから、絶対に譲れぬ願いを半兵衛は口にする。

「殿は要りません。私の事は半兵衛とお呼び下さい、藤吉郎様。」

「っ!?ああ、ああっ!!勿論じゃ半兵衛!半兵衛っ!!ああっ半兵衛!!」

「そ、そんな何度も呼ばなくとも。」

興奮した様子で何度も自分の名を呼ぶ秀吉に、流石に半兵衛も顔を紅くする。

だがそれでも、顔がにやけるのを抑える事が出来ない。

「忝い半兵衛っ!!本当に忝いっ!!これからは儂の側で、友として儂を支えてくれ!」

「えっ、と、友としてですか?」

「ああ勿論じゃ!儂にとつて半兵衛は唯一無二の友。たとえ周りがなると言おうと、それ以外にあり得ん!よろしく頼むぞ、半兵衛っ!」

屈託のない、日輪が差すかのような笑顔と共に秀吉は手を差し伸べる。

半兵衛は一瞬手を伸ばすのを躊躇しそうになったが、何とか笑顔を作ると秀吉の手を握る。

「はい、こちらへそよろしくお願いします。藤吉郎さま。」
これはこれで良いのだろう、と半兵衛は己を納得させる。
それに、友達から始まる関係も世間には数多くあるのだと聞いている。

稀代の軍師は秀吉の手の感触を確かめながら、胸中で小さな決意を固めた。

やけに空気が澄んでやがる。

馬上の龍興は半分の月を見上げながら、そう思った。

思えば既に秋の終わり。冬の足音はすぐ其処にまで近付いていた。

例年ならそろそろ年越しの準備を始める頃であるが、城主を失った城は喪に服し、闇夜を背負ってシンと静まり返っている。

「…なあ、本当に行くのか？」

下から龍興に問い掛ける声があった。龍興が目線を下げると、心配そうな視線を送る良晴がいる。

「もう一度、考えてみないか？ 信奈から家来に成るように言われたんだろ。そりゃ彼奴はムカつく事もあるけど、仕えてみたら案外話の分かる奴だしさ、喜太郎にだって悪いようにはしない筈だぜ。なんだったら、俺からも話をするからさ、もう一度…」

「ありがとな、良晴。けどな、俺の失態のせいで親族を失い、俺を恨んでる国人衆が沢山いる。これから新たな一步を踏み出そうとしている時に、家中の不和の芽を残すのは不味いだろ。それによ、もう決めたんだ。」

話を遮り断りを入れると、良晴は悲しそうな顔をする。

それに申し訳なさを感じながらも、龍興は己の決意を語る。

「良晴、お前の夢を親父は良い夢だと言ってたけど、俺も同じさ。想

像も出来ないくらいの幸せに満ちた未来を作る。きっと日ノ本じゃ、お前以外に思い付いた奴はいないだろうよ。ほんと、すげえ奴だよ、良晴は。」

「そんな、俺は別に…」

「謙遜するな。俺は悔しいんだ。このままじゃ戦にも負けて、夢でも圧倒されて、負けっぱなしだぜ、俺。まだまだ、終われねえよ。」

「……………なんだよそれ。武士の意地かよ。」

「ちげえよ。男の意地さ。」

我ながら何とも自分勝手だと龍興は思う。だが、心の内で荒ぶる衝動は抑えきれなかった。

あの日、龍興は産まれて初めて憧れを持った。しかも相手は同年代の友人である。

だがそれは同時に、言葉に出来ない敗北感と共にあった。

「今の俺には何も無い。武士としての実力も、誇れる夢も。だけどいつか、美濃兵にも負けない精強な一軍を率い、もう一度織田に挑む。そうして漸く、俺はお前と向き合えるんだ。だから今は、お前の誘いには応じられねえ。」

「……………そうか。なら、仕方ねえな。」

龍興の答えを聞いて、良晴は残念そうにしながらも納得した様子を見せる。

夢を追いかける誰かに憧れ、自らもそこに至りたいと望む気持ちは誰よりも理解できた。

「でも、行く宛はあるのか?」

「いやそれは何とも。そもそも俺は美濃の外に行つたことが無いしな。まあ、何とかなるだろ。」

「へえ、国を追われるつてのに随分と呑気なのね。」

不意に良晴と龍興の会話に女の声が割って入る。

声の出所に顔を向けると、腕を組んで口をへの字に曲げた美女がいた。

「つて、信奈じゃねえか! どうしてここに!?!」

「決まってるでしょ。あんな無様な負け戦をやらかした奴がどんな顔

をしてるのか見に来たのよ。」

そう言つて龍興の前に立つと、信奈は不機嫌な様を隠すこと無く龍興を睨み付ける。

「こうして顔を合わせるのは初めてね。織田三郎信奈よ。」

「おおつ、御初にお目にかかる。噂では美人と聞いていたが、実物は予想より遥かに別嬪だな。」

「どうも。あんたも思つてた以上にママシに似てるわね。私を袖にしたところなんか特に。」

不機嫌な様子で皮肉を言えば、龍興は愉快そうに笑つた。

良晴はハラハラと信奈の顔を伺うが、相変わらず口をへの字にしているが、その瞳から冷たい色は見受けられない。

「いやはや、敵大将自ら見送りに来ていただけるとは、感謝のしようも無い。時に信奈殿、一つ聞きたい事がある。」

「……何よ?」

「信奈殿は自らの夢が未来の平和に繋がると信じられておられるのか?」

「はあ?もしかしてそれ、良しサルの話の話を言ってるの?だったら私に言わせれば『知ったことか!』よ。」

腕を組み、馬上の龍興を見上げながら、信奈は傲慢不遜に言い放つ。「四百年も先の話でしょ。そんな私が死んだずっと後の事なんて、気にしたつてしようがないでしょ。面白い夢だとは思うから勝手にやつてれば良いんじゃない。」

己の夢は己の物。他人の夢は他人の物。

信奈は明確にそこを別けて考えていた。或いは、信奈は今という時だけを見つめて行動していたとも言える。

ただ己の夢の為に驀進し、それに続く者やその先を見据える者がいれば、自分の責任で自分の力で行え(ただし、問題が発生したら確実に報告しろ。)、というのが織田信奈のスタンスであった。

「…なんというか、思つてた以上に厳しいんだな織田家つて。けどだよ、どうして信奈殿はそこまで自分の夢に真つ直ぐに突き進めるんだ?何か原動力に成るものでもあるのか?」

「…私が子供の頃、南蛮の伴天連から昔話を聞いたわ。かつて南蛮には天より高い塔を建てようとして、神の怒りを買って塔を崩された王が居たそうよ。私はその話を聞いて、神に挑まんとする王の心意気に感動したわ。いつか私もこの世の誰も挑戦した事の無い覇業に挑んでみたいと。」

いや、その話は神に至ろうとした人間の愚かさを説く話であって、神に挑もうとした王の武勇伝では無いんじゃないの？という疑問を良晴は抱いたが、空気を読んで黙っておいた。

「私は今その挑戦途上にいる。そしていまだ、神罰を受けてないわ！ならば進み続けるのに躊躇する理由などない！」

「…ではもう一つ問おう。天下統一には、時に非情な決断も必要と思うか？」

「当然ね。武を以てして世を治めんとするならば。」

「日ノ本を治め次にするべきは？」

「決まってるわ。疲弊した国を立て直し近代化。海外にも進出できる富国強兵に繋げる。」

「ならば、その道中に背負いし業はどうする？生きる者すべての想い受け入れ、その責務に胸が潰されそうな時、どうやって顔を上げるんだっ!？」

「……阿呆が、そんなもん些細よ。」

信奈は髪を掻き上げると、凄惨にして冷たく、されどその奥に見る者を引き付ける圧倒的な生命力に滾った光を宿す瞳で龍興を射抜いた。

「是非に及ばず。」

其れこそ、織田信奈の生き方。そう言い切るが如く、短く言い切った。

「……なるほどなあ。これが織田信奈か。」

龍興は小さく呟くと視線を良晴へと向ける。

良晴もまた、龍興を見ていた。

二人は無言だが、不思議と互いに思う事は伝わった。

『恐ろしい。だけど間違いなく良い女だな。こりやお前が惚れるのも無理ないぜ。』

『だろ。喜太郎も今からでも仕えないか?』

『いんや。良い女だからこそ、ますます挑みたくなつちまつたよ。』

お互いに相手へ笑みを送り、ほぼ同時に視線を外した。それが、別れの合図だった。

『いい話を聞かせてもらった。ならば俺もいずれ信奈殿に負けぬ大望を抱き、信奈殿に挑戦しよう!』

「ふふ、どつからでも掛かつてきなさい。ギツタンギツタンにしてやるわ。」

最後に信奈と言葉を交わすと、龍興は手綱を操り背を見せる。

その背中に名残惜しさを感じながらも、良晴は黙って見送る。

友の門出を心の内で祝しながら。

「おいっ!良晴っ!」

背を向けたまま龍興が友の名を呼ぶ。

一瞬虚をつかれるも、良晴もその声に答えた。

「なんだ、喜太郎っ!」

「機会があれば、また一緒に女郎小屋に行こうなっ!」

「なっ!?おまつ!!」

「さらばだっ!」

そう言い残すと、龍興は馬を駆けさせあつという間に良晴の視界から消えた。

思わず追いかけてみようとした良晴だったが、その気概は瞬く間に失した。なぜなら…

「女く郎く小く屋く?何かしらそれはく?」

先程とはまた違った意味を持つ凄惨な笑みを浮かべた信奈が、良晴の肩にがっしりと爪を立てていた。

「え、ええとな、信奈さん。これは何というか…」

「ゆっくりで良いわよく。その代わり何から何まで全部話なさい。」

私達が必死に戦の準備をしている時に、美濃で何をしてたのか。」

あ、終わった。

肩に掛かる圧力からそう察した良晴は、闇中に消えた親友に向かって恨みの籠った決別の言葉を発した。

「てめえ喜太郎っ!!覚えてろよおおお!!」

良晴が信奈に城へと引き摺られている頃、龍興は二人の連れ合いと共に旅の道中にあつた。

「さてと、ほんじゃま行くとするか。」

「良かったんですか、龍興様?あの人、龍興様のご友人だったのでは。」

そう訪ねるのは斎藤飛騨。龍興の側近の一人である。

「ハハハ、どうにも最後に一杯食らわしたくなつてな。まあ、負け惜しみつてやつだ。」

「負け惜しみならもう少し遣り様があるでしょうに。本当に若様は…」

そう言つて溜息を吐くのは龍興の女中であるお猪。彼女もまた、龍興のすぐ近くで歩みを供にしていた。

「それよりも、お前から本当に良かったのか?こんな行く当てのない流浪人に付いて来るなんざ。」

「…私は龍興様の近衆です。加えて、側で龍興様をお支えせよとは亡き父の遺言でも御座います。流浪の身になつたくらいで、やめることなど出来ませぬ。」

「それに若様みたいな甘ちゃんが、一人で無難に旅路など出来るわけがありません。どこぞで野垂れ死にされて寝覚めが悪くなつたら適いませぬ故、せめて独り立ちできるようにするまでは付き纏わせていただきます。」

双方口ぶりは違っているが、結局のところ龍興が心配で付いてきたのに変わりはない。

そんな二人の従者の心遣いに、龍興の顔にも笑みが浮かぶ。

肉親を失い、家を失い、国さえも失つた身ではあるが、人心だけは

最後の最後に僅かに残っていたようだ。

その幸福を噛み締めると、龍興は心の内に誓う。必ずや、この忠臣たちが誇れるような戦国武将になると。

「ですが、いったいどこに向かわれてるのですか？」

「ん？ そうだな。やっぱり最初に行くなら都だ。京の都で新たな一歩を踏み出そうじゃねえか！」

「なるほど、京であれば人や情報も多く集まり、御家再興の手掛かりも掴めそうですね！」

「とかいって、ほんとは京女が目当てではないでしょうね、若様？」

国を追われた行く当ての無き旅路。されど、彼らの歩みに悲壮な色は無し。

どこか呑気に、だが胸中には天下の野望にも負けぬ希望の種を忍ばせ、三人の若者は行く。

彼らが再び夢でさえ見ることの出来ない国へと繋がる歴史の舞台上上がるのは、そう遠くない未来の事である。

年が明け、稲葉山城の大広間では年始の行事が行われようとしていた。

集まったのは織田家の主たる将達。そして、新たに傘下に加わった美濃の有力国人たちである。

彼らの視線の先には、新たなる美濃の支配者となった姫武将、織田信奈の姿があった。

信奈は一樣に自分を見上げる家臣たちの顔を見渡すと、暫し瞼を閉じ呼吸を整える。

時が止まったかのような静寂に包まれた大広間に、信奈の呼吸音だけが響き、やがて止まる。

静かに開かれた瞳が、全ての臣下を視界に捉えた。

「…去年は皆の衆の奮闘により、我が織田家は大きく飛躍する事が出来た。今年は新たに我が傘下に加わった者達とも、手を取り合つて更なる発展を築けるように願つてゐるわ。」

信奈は一旦言葉を止める。目の前では、家臣たちが次の言葉を今か今かと待ちわびていた。

それを確認すると、信奈は懐から二枚の用紙を取り出した。

「…私はここに、織田家の新たな門出を宣言する。その一環として、この稲葉山城の名を『岐阜城』と改めるわ。」

そう言うと、信奈は用紙の内の一味を広げ『岐阜』の字を家臣たちに知らしめた。そして、家臣らの騒めきが収まらぬ内に、もう一枚の用紙に手を掛けた。

「そして、この地より我らが始めるは武による天下の掌握。それにより日ノ本の政を変え、新たな法を全国に布告する。そう…我らが成すは時代の変革。即ち！」

信奈はその手で用紙を広げ、己の決心を高々と掲げた。

『天下布武』。これ以外に私の、この織田信奈の野望は無いわっ！」

誰もが息を呑んだ。

だが、誰一人としてその大言を疑う者はいなかった。

今まさに、自分たちは歴史の動く瞬間にいる。そう直感するほどの覇気が信奈からは感じられた。

「さあ、私の野望への道を共に来るか、否か。返答は如何に？」

答えなど決まっている。

そう言わんばかりに皆立ち上がり、思い思いに主君の名を叫んだ。

その日、一人の風雲児が明らかにした野望が、数多の運命を巻き込み動き始めた。

その行く先は夢でさえ見れぬ国か？或いはまた別の未来か？

四百年先の世を知る物でさえ、いまだ知る所ではない。

今宵はこれまでに致しとう御座ります。

美濃攻略編 完

閑話 犬と雲の子

時は八月。

蝉の鳴き声が騒々しく鳴り響く田園の畦道を、三人の人物が歩いていく。

秀吉、良晴、そして犬千代の三人だった。

背中に荷物を背負った犬千代を先頭に、照り付ける夏の日差しを受けながら、三人は黙々と歩を進めている。

「ふう、現代の猛暑に比べればマシだけど、夏の暑さがしんどいのは戦国時代も変わらねえな。犬千代、まだ歩くのか?」

「あと、もう少し。そろそろ見えてくるはず。」

額の汗を拭いながら良晴が尋ねると、犬千代は普段通りの抑揚の無い声色で返す。すると、犬千代はおもむろに後ろから付いてくる二人の方を振り向いた。

「良晴、藤吉郎。この一月の間犬千代に付き合ってくれて本当に助かった。だから、無理に着いてこようとしないで。」

「水臭いことを言うでない!むしろ此処まで付き合ったからこそ、物事の終結が気になるというもの。この一ヶ月の成果、しかとこの目に焼き付けねば気になって夜も眠れぬわ。」

「そうたぜ、犬千代。それに、お前の実家にも興味があったからな。俺達はただただ好奇心で付き添ってるだけだから、思う存分こき使ってくれよな。」

申し訳なさそうにする犬千代の言葉を遮り、良晴と秀吉の二人が慮る言葉を述べると、犬千代は恥ずかしげに、しかし嬉しそうにハニカミながら小さく「ありがとう。」と返事をした。

話は一月前に遡る。

「家に帰ろうと思う。」

その日、仕事終わりに相談があるから部屋に来てくれと犬千代から頼まれた秀吉と良晴は、着いて早々に犬千代から告げられた

「家に帰るって、犬千代の家ってここじゃんか。」

「違う。犬千代が帰ろうとしてるのは実家の方。」

「犬千代の実家と言うと、荒子城の事じゃな？」

「そう。犬千代は姫様から家を継ぐように命じられたけど、まだちゃんと引き継ぎが出来ていない。」

「ああ、そういうえば。確か、お前の兄貴を慕う家臣達の反対にあつてからって聞いたけど、本当なのか？」

良晴の質問に犬千代はコクリと頷いた。

「兄上は凄く優しい人。体は弱いけど、一生懸命領地のために働いてきた。みんな兄上の事を尊敬してる。」

そう語る犬千代の口元が少しだけ緩む。犬千代もまた、一領主として兄を尊敬していることが窺えた。

しかし、犬千代は「だけど」と呟き顔を引き締めた。

「兄上から正式に家督を頂こうと思ってる。」

「……その故は？」

「前田家が高みへ昇るため。」

端的に、然れど強い意志を持った言葉であつた。

その様相は良晴が思わず息を飲むほどの真剣味がある。

「今川との戦で姫様は天下に武威を示した。いまや織田家全体がこの勢いに乗り、更なる高みに昇らんとしている。だけど兄上が当主のままじゃ、前田家は今以上にお役にたてない。」

犬千代は拳を握りしめ、絞り出すように話す。それに秀吉達はじつと耳を傾けた。

「このままでは、前田家は織田家中から取り残されてしまう。そうならない為には武功を上げ、姫様のお役にたち続けるしかない。」

「…故に肉親と争つてでも、家督を篡奪すると？」

秀吉の問いに、犬千代はゆっくりと頷いた。

「それが、姫様と前田家の為だから。」

「……………」

犬千代の返答に秀吉達は黙する。犬千代の決断が、並々ならぬ葛藤の末に導き出した物だと理解出来たからだ。

以前、家督の件を家中の者に誹謗され激昂したように、犬千代に

とつて前田家の家督継承は非常にデリケートな話題である。

肉親への情と、尊敬する主君からの命に板挟みにあつた当時の犬千代が選んだのは、自ら生まれ育つた城を去るという、結論の先送りに等しい現状維持であつた。

だが、そうして問題から目を逸らし続けた結果が、敵方の挑発からの家中分断の計であつた。

今回犬千代が決意を固めたのには、こうした問題の先送りに対する信奈へのケジメという意味もあるのだつた。

「犬千代、御主がそう決断したのなら、儂等からは何も言うことは無い。そして友が助けを求めるなら、心配御無用。いくらでも手を貸す所存ぞ。」

「そうだぜ犬千代！俺達に任せとけて。つつても、いったい何を手伝えばいいんだ？」

「二人とも有り難う。犬千代が二人に頼みたいのは……」

そう言つて犬千代が口にした頼みに、良晴は目を丸くさせ、秀吉はニンマリと濃い笑みを浮かべたのであつた。

斯くして必要な準備に二十日、手紙で近々帰郷する旨を伺い、返事が届いたのが三日前、そして身具足を整え清須の城下を出て今日に至る。

こうして月日を数えると意外にも時間が掛かつたな、などと良晴が思つていると、遠くに見張り櫓が見えた。

近づいていくと周囲を堀で廻らし、その内は茶色い壁で敷地全体が囲まれている。

よく見ると厚みのある木の板に土を塗り付けた物のようだ。

後に良晴が知るところによると、火矢を射掛られた際に炎上を防ぐのと、虫食いを防ぐ為の工夫らしい。

門構えもそう大きな物ではなく、城と言うよりかは砦か少し大きめの屋敷だな、という感想を良晴は胸の内で呟く。

すると、三人が門前に辿り着いくのを待っていたように、外開きの門がゆっくり開く。

その先から現れたのは、大人のような子供であった。矛盾しているが、そうとしか表現できない。

背の高さは軽く秀吉を凌ぎ、現代人にして戦国の世の平均身長を大きく越える良晴に迫るほど。

しかし、その顔からは幼子特有のあどけなさが残っており、愛らしささえ感じる笑顔を三人に向けていた。

「よくぞお出でくださいました。本日は城主たる利久が病に臥せつてます故、拙者が荒子城の案内を勤めさせて頂きます。若輩者ならば、何卒ご容赦を。」

そう言つて恭しく頭を下げつつも、上目遣いの視線は好奇心の輝きが隠しきれてない。

しかし、ほんの一瞬であるが瞳の輝きの奥に猛獣の鋭さが宿り、良晴の背筋に寒気が走る。

こいつ只者じゃない。

そう悟ると同時に、良晴の脳裏に前田家から連想される一人の戦国武将の名がこの若侍と重なる。

そして、その予感はずしかった。

「申し遅れました。拙者は前田利久が嫡男、前田慶次郎利益に御座います。伯母上に置かれましてはお久しぶりに御座います。」

のちに、天下一の傾奇者と称される男の若かりし頃の姿であった。

慶次郎の案内で門をくぐった三人は、そのまま座敷へと通される。

そこで慶次郎は暫し待つよう三人に伝え、部屋を出ていった。

襖が閉じられると良晴は大きく息を吐く。

「ふう、緊張した。流石前田慶次郎、貫禄があるぜ。」

「なんじゃ良晴、信奈様の前でも緊張しない御主にしてはらしくないのお。」

「いや、だって前田慶次郎だぜ。天下御免の傾奇者って言えば、未来じゃ漫画やゲームで大人気なんだぜ。」

「ほう、あの慶次がのう…」

「…なんだか不思議な気持ち。慶次が有名人なんて。」

良晴の前田慶次郎評に秀吉と犬千代はそれぞれ違った反応を示す。前世で前田慶次郎の数々の武勇と奇行を見聞きした秀吉はさもある。なんと。

一方で今現在の慶次郎しか知らない犬千代からすれば、甥つ子が四百年後まで語り継がれる大人物になるとは、なかなか実感し難い話であった。

そうこうしている内に襖が開かれ、盆に黒光りする三つの茶碗を乗せた慶次郎が現れた。

「お待ちせ致しました。粗茶にございますが、どうぞこちらを。外は暑う御座いましたでしよう。」

そう言つて慶次郎は三人の前に茶碗を置く。細かな水滴が表面に着いた厚手の器に、新緑の茶が並々と満たされている。

「おっ、気が利くな。ずっと歩いて来たから喉がカラカラだったんだ。ありがとう。」

夏の日差しに参り気味だった良晴は笑顔を浮かべ慶次郎に礼を言う。己の前に置かれた茶碗を手を取った。

水滴の冷たい感触を覚えた良晴は、躊躇なく茶を口に運ぼうとする。

「それじゃ、いただき」

「まてっ！良晴！」

茶碗の縁に口を付けようとした良晴の手を、秀吉が鋭い一声と共に掴んで止める。

「えっ!? どうしたんだよ秀吉さん？」

「…利益殿、茶筌は御座いますか? あれば御借りしたく。」

「…少々お待ちを。」

秀吉の言葉に少し眉を跳ね上げさせた慶次郎であったが、腰を上げると部屋を出ていき、間もなく茶筌を手に戻ってくる。

「此方でよろしいでしょうか?」

「忝ない。」

慶次郎から茶筌を受け取った秀吉は自分の前に置かれた茶碗を手

に取ると、皆が見え易いように掲げ、茶筌を浸けて軽く一掻きする。すると：

「えっ!？」

「はあっ!?! いったいどうなってんだこりゃ!？」

犬千代と良晴の口から驚きの声上がる。

彼らの視線の先には、突如としてモクモクと湯気を上げ始めた茶碗があった。

「沸騰した湯で点てた茶を、直前まで冷水に浸けていた茶碗に注ぐ。黒土で作った厚手の茶碗は熱が伝わり難いからのお。短い間なら触っても熱湯が入っているとは解らぬわけよ。あとは茶の表面に油を滴して油膜で湯気が立たぬよう細工し、茶碗の表面に霧吹きで水滴を吹き掛けてやれば、見た目は涼しげな茶の出来上がりというわけじゃ。」

「ほう、そこまでお見通しでしたか。なるほど、信奈様も認めた知恵者という噂、偽りでは無かったようですねあ。」

秀吉から企みの全容を明らかにされながらも、慶次郎は誤魔化すどころか先程よりも楽しげに笑みを浮かべていた。

その様子は秀吉がよく知る前田慶次郎のそれと同じであり、安心感を覚えると同時に何とも言い難い渴いた笑いが込み上げて来るのを感じざるを得なかった。

秀吉の知る限り、前田慶次郎という男は普段は豪快にして細かい処は気にしないくせに、人をからかう事に関しては細かなところまで気を配る困った性質を持っている。

それこそ、叔父を真冬に水風呂に入れる為に妙に気合いの入った仕掛けを施したのは利家本人から聞いていた。

そんな男が人目につかぬ所で茶を用意してきたのだ。警戒せぬほうがどうかしている。

「おい、ちょっと待てくれ。つまりこいつは俺達を騙して熱々のお茶を飲ませようとしたって事か？」

「如何にも、その通りに御座います。」

「その通りですじゃねえよっ! 危うく火傷するところだっただろう

「がっ！ どういうつもりだ!？」

「どうもこうも、敵方を欺き陥れるは兵法の基本にて。」

慶次郎がそう口にした途端、部屋の襖が一斉に開かれる。

それと共に武装した兵が雪崩れ込むと、秀吉達を囲んで槍の穂先を向けた。

「なっ!？」

「っ！慶次、犬千代達は曲がりなりにも姫様の使者。武器を向けるのは反逆の意思有りで見られる。」

「無論承知の上。しかし、この地を長きに渡り治めたるは我が養父、利久に相異無く。これをただ主君のお気に入りというだけですげ替えるは到底納得出来るものでは無く、荒子勢一同これに抗議する所存にございます。」

「…前田家だけで召集出来る兵は多くて八十人くらい。姫様が一声掛ければ、少なくとも五百の兵がこの城を囲む事になる。」

「はっはっはっ、五百程度で我が城を落とせるとお考えか。せめてその十倍、いや百倍の兵を寄越したところで返り討ちにしてやりましょうぞ！」

豪快な笑い声と共に放たれた挑発に、強がりの色は一切見えない。

これが前田慶次郎。

あまりにも無謀、然れど『この男ならやりかねない』と思わせるだけの雰囲気は確かにあった。

実際に良晴は慶次郎の威容に言葉を失い飲み込まれつつある。

その一方で、前田慶次郎をよく知る秀吉と犬千代の二人は、臆気ながら慶次郎の狙いを察し始めていた。

「…皆が納得出来ないから犬千代が当主に成ることを認められない。だったら、どうすれば荒子の皆に犬千代が当主に着くことを納得して貰える?」

犬千代の問いかけに慶次郎は笑みを濃くする。

「そこはやはり、当主として相応しい器を示す以外に無いでしょうな。それこそ、この前田慶次郎利益を越える武威を見せつけるとか。」

「……………要するに何がしたいの?」

「叔母上、槍を交わしましょうぞ。」

それは明確な一騎討ちの申し出であった。

慶次郎の返答に犬千代は珍しく大きく溜め息を吐いた。

「最初からそれが目的だったんでしょ？こんな物々しくしなくてもよかつたのに。」

「いやあ、久々に叔母上と会えると思うと気持ちが高ぶってしまいいしてなあ。ここは一つ拙者なりの持て成しをするのが良いかと。」

「だからって、城の皆まで呼び寄せる必要は無かつたと思う。下手すれば本当に反逆と判断される。」

「いやいや、皆も久々に拙者と叔母上の立ち会いを見たがっておりましてので、全員で一芝居のが良いかと。それに今川を破った一軍と一戦交えるのも、それはそれで一興であります故。」

「………笑えない冗談はやめてほしい。」

「おっと、これは失敬。」

さして反省した様子もなく軽く返す慶次郎に、犬千代は再び大きく溜め息を吐いた。

「な、なあ秀吉さん。いったい何がどうなってるんだ？」

「何もどうにも見ての通り、遊んでおるのよ、こ奴らは。」

戦であろうと何であろうと、何処かに必ず遊び心を加える。それが前田慶次郎という男である。

今回もその一つ。

何やら久しく顔を見せてなかった親族が男連れで帰って来るのでからかつてやろう。家督の相続話はそのついでだ。

戦であろうが、遊びであろうが、全身全霊真剣にふざけて魅せる。

まさに乱世の傾奇者を体現した男なのだ。

秀吉はそれをよく知っている。

何せ前世において慶次郎は、太閤となった秀吉をはじめとした有力大名達の面前で猿真似踊りを披露した挙げ句、その場で秀吉を暗殺しようとした男なのだ。

しかも動機は、なんとなく面白そうだったから、と言うのだから開いた口が塞がらない。

にも拘らず、そんな慶次郎を秀吉は間違いない気に入っていた。理由は？と聞かれれば、こう言う他無い。

『見ても飽きない。』

これ程までに目が離せぬ男が二人と居ようか。

傾きも極めれば華と成る。正しくそれを体現した存在なのだ。

結局のところ、秀吉は好きなのだ。常識を屁とも思わず、伊達と酔狂に身を捧げ、己れの矜持を真っ直ぐに貫く輩が。

だからこそ、現世でも相変わらざる慶次郎の傾きっぷりに、秀吉は懐かしさと安心感を覚える。

「ささつ、叔母上、早く表に出ましょう。武具はちゃんと準備してあります。ほらつ、いざ、いざ。」

当の本人たる慶次郎はと言うと、今度は遊びたがりな子供の如く、犬千代の袖を引っ張って外に出ようとする。

そんな甥の誘いを、犬千代はやんわりと手で制す。

「慶次、犬千代達はあくまでも家督継承の話をしに来た。槍の相手はその後。まずは本題を片付けてから。」

「つれないですなあ、叔母上。しかし、武威を示さずして如何に我らを納得させてくれるのですかな？」

慶次郎は不服そうに口を尖らせ、挑発の言葉を投げ掛ける。

それを受け、犬千代は清須から背負ってきた風呂敷をほどく。

その中から現れたのは、膨大な数の紙の束だ。

「叔母上、これは？」

「清須城や近くの寺に保管されていた荒子周辺の土地に関する資料。秀吉と良晴に頼んで集めて貰った。」

そう答えると、犬千代は懐からおもむろに算盤を取り出した。

唐突だが、前田利家という戦国武将の最大の長所は何だろうか？

槍の又左の異名をとった武力か？

加藤清正が戦の手本にすべし、と説いた統率力か？

或いは、混迷を極めた乱世の中で、巧みに権力者の元を渡り歩き家名を後世に残した世渡り術か？

秀吉に言わせれば、そんなもの犬千代という武将を構成する一部分

に過ぎない。

乱世を共に駆け抜けた秀吉思う前田利家最大の長所、それは…

「それじゃあ、今から荒子城下の収支現状、並びに今後の発展性についての説明を始める。」

戦国随一の領地経営能力。それこそ前田利家最大の武器である。

「この資料の通り、前田領の石高は尾張の他領地と比較しても平均を越える収穫がある。その一方で、在庫管理が不十分なせいで、毎年一定数の兵糧がカビや虫食いで廃棄されてる。まずは兵糧小屋に納められてる兵糧を収穫時期毎に整理して、廃棄される兵糧を極力削減する。こうすることで、ほら、廃棄してた兵糧を売ることとこれだけの軍資金が見込める。」

資料を横目にパチパチと算盤を弾き、導き出した収益を示す犬千代の顔は実にイキイキとしている。

そんな犬千代の様子に前田家の家臣団はあんぐりと口を開けた。

「次に領内の灌漑工事についてだけど、現在田畑に引いてる水路の整備を田畑の規模や最後に整備した時期など参考にして、優先して整備する水路を改めたいと思う。また、工事にかかる人足についても規模や時期ごとに少しずつ調整していく。これについては姫様からも許可を得て、村井貞勝様の御助力を取り付けてあるから、皆の負担が大きくなる事は無いので安心して欲しい。むしろ効率的に人とモノを回せる様になるから、以前に比べれば余裕が出ると思う。」

サラリと領主にとって最大の義務ともいえる公共事業についての改善案を出し、上役への根回しまで済ませている手際の良さに、慶次郎でさえも刮目した。

「あと、ここ数年の人口増減について、前田領は他領に比べて大きく増加しているけど、人口の増加に比べて田畑の開発が追い付いていないから、このままだと飢饉の時の対応が難しくなるかもしれない。ただこれは、兄上が病気でここ数年一部の政務が滞っているのと、派兵が出来ないから一時的に戦死者が出なくなっただけが複合的に影響し

ているからだと思う。今後は新田の開発を再開するとともに、武器の新調が必要。」

そこまで言うとは一旦言葉を切り、犬千代は慶次郎の淹れたお茶で口を潤す。

熱々のお茶は、冷めて程よい温度になっていた。

その様子を見つめる秀吉は、流石犬千代じゃ、と笑みを濃くする。

一月前に犬千代が『家臣達を納得させる為の行政資料を作成したいから、参考文書集めを手伝って欲しい。』と言われた時、良晴は驚いた様子だったが、秀吉は今日の光景が現実になる事を既に予想していた。

何せ前世の前田利家は、戦乱により荒廃仕切った加賀国を僅か数年の内に復興させ、日ノ本有数の富める国へと立て直した希代の内政上手だったのだ。

その魂を引き継いだ犬千代が、総兵数八十人ばかりの小領地の運営に苦労するわけが無い。

「…あ、あのおう、利家様。正直、学の無い農らにはよう分かんところもあるんだぎゃあ、ようするに利家様は前田家を豊かにしようとしてんでしようか？」

「前田家だけじゃない。前田家に仕えるみんなが今よりも余裕を持って生活出来るようにして、姫様の信頼を得られる働きが出来るようにする。つまり、荒子の兵達をより強くする事が最終目標。」

「じゃ、じゃったらっ！うちの具足なんかも新しく買い換えられるかにやー？なにぶん爺様が落武者狩りでぶんどったもんそやから、とつくの昔にボロボロだきゃあ。」

「うん。具足に関しては将来的に統一した物を纏めて用意したいと思ってる。槍も長さを均一にして、集団戦に対応できるよう部隊を組織化する。」

犬千代の言葉に家臣団から『おおー！』というどよめきが生まれる。

彼らは皆、先祖代々前田家に仕えてきた地侍であるが、本職は専ら田畑を耕す百姓であり、用意できる武器も基本的には安く買った中古品や落武者狩りで得た略奪品ばかり。

武具の統一化など夢のまた夢であった。

だが、そんな彼らに犬千代は理を以て夢を見せた。

故に彼らは、ピカピカの鎧を身に纏い、整然と進軍する勇壮な自分達を夢想し胸を高鳴らせる。

家臣団が犬千代を見る目が、最初と明らかに変わっていた。

ただ一人、慶次郎だけが詰まらなそうに膝に肩肘を立て顎を乗せている。

「…伯母上、変わられましたなあ。まるで織田の姫様みたいじゃ。」

「うん。犬千代は姫様みたいになりたい。その為にたくさん勉強して、政についてもっと知りたい。そして犬千代は、大名になる。」

「大名、ですと!?!」

「そう。姫様の元で手柄を上げ、国一つを預かる領主となり、尾張にも負けぬ立派な国を作る。それが今の、犬千代の夢。」

真つすぐに慶次郎の目を見つめ、己の決意を弟と領民に聞かせる。

領民は誰も声を上げない。

誰もが次に慶次郎が何を言うかを待っていた。

だがその慶次郎でさえ犬千代の発言に戸惑った様子を見せ、何かを口にしようとするが上手く言葉に出来ず、らしくもなく視線を迷わせていた。

その姿には、年相応の少年らしさがあつた。

「そうか、よい夢を持ったな、犬千代。」

穏やかな、そよ風に似た声が部屋に流れる。

いつの間にか部屋の入口に、頭の半分が白髪になった痩せ気味の中
年男性が立っていた。

その口元に浮かべた笑みは、慶次郎の微笑とよく似ている。

「親父殿。」

「…兄上。」

慶次郎と犬千代がほぼ同時に口にする。

この男性こそ、慶次郎の養父にして犬千代の実兄、前田利久その人である。

利久は犬千代の前に静かに座ると視線を合わせる。

「…久しいな犬千代よ。良くぞ戻ってきた。元気そうぞで安心したぞ。」
「…はい。兄上も御元気そうぞ。」

「ああ、最近は調子が良いのだ。それにしても、あの小さかった犬千代がこれほどまでに立派になるとは。清州での活躍、噂に聞いているぞ。」

目を細め、嬉しそうに語る利久。

その言葉に犬千代はハッと息を呑むと、目を潤ませた。

「思えば犬千代には苦勞をさせた。儂が当主として不甲斐ないばかりに家を傾け、姫様の信認を失うは武門の恥。犬千代に家督を譲るのは当然の事だ。」

「そんな事は無い！兄上は荒子の為に頑張ってきた！ここに在る皆も、みんなよく知ってる！」

「ああ、ありがたいことだ。だが犬千代よ、いざという時槍を持って戦場に行けぬ武士に、何の価値があるうか。主君の窮地に命を張れぬ者に、誰が力を貸してくれようか。姫様がお主を前田家の家長にした事は、何も間違つてはおらぬ。」

そこだけは譲つてはならぬとばかりに利久は断言する。それは利久の武士としての矜持であり、同時に利久ではどうしようもない自身のコンプレックスの発露であった。

その言葉の内にある兄の苦しみを感じ、犬千代は膝に当てた掌をギョツと握りしめる。

「実を言うとな、口では姫様のご裁断に従うとしながらも、心の内に承服しきれぬ思いもあったのだ。いつそのこと姫様に逆らい、慶次郎に家督を譲ることも考えた。だが今日お主の話を聞いて心が決まった。皆は感謝してくれたが、儂は自領の体制を維持するのに必死で、領民の生活を豊かにし自領を発展させようなどと考えたことも無かった。犬千代、お前にはとても敵わぬ。」

利久はそう言うと、多くの家臣と息子のいる前で、犬千代に向かって手を着き頭を下げた。

「今日より、この前田利久、前田利家さまの傘下に降り、命ある限り御家の為に働きたい所存にあります。何卒、宜しくお願い致します。」

「っ!?!忠節、感謝いたす!どうぞ、これからも犬千代、いや、この利家にお力を!」

犬千代は己でも気づかぬ内に兄の両手を握っていた。両目からは止めどなく涙が溢れていた。

泣きじやくる妹に対し、利久は慈愛に満ちた優しい笑みを向ける。

そんな養父を、慶次郎はじつと表情を消して眺めていた。

その日の晩、荒子城では新たな城主を祝する宴が行われた。

犬千代の家督相続に反対していた者達も、犬千代へ詫びを入れると犬千代もそれを笑って許した。

それどころか、犬千代は長年に渡る利久への忠義を感謝し、今後も前田家への変わらぬ忠孝を願えば皆一様に忠誠を誓った。

そして始まった酒宴の席では、良晴と秀吉が稻生と桶狭間での犬千代の活躍を大いに語り前田家臣団を喜ばせた。

特に犬千代が顔に矢を受けながらも城を落とした話をするると、流石利家様と大きな歓声が上がった。

そんな中であって、宴を抜け出した者が一人。慶次郎である。

厠へ行く、と言って部屋を抜け出した慶次郎は、その足で馬小屋へと向かうと、予め用意していた旅装に着替え、槍を携え愛馬に股がり正門へと向かう。

夜空を見上げると、満月の下半分に雲が掛かっていた。

「…悪くない夜だ。」

「…どこが悪く無いの?」

慶次郎の独り言に、不意に問いが帰ってきた。

驚いて振り替えると、腕を組んだ小さな影があった。

「叔母上、どうしてここに?」

「……多分、そろそろ慶次が出ていくんじゃないかと思ってたから。」

「……止めようとは思わないのですか?」

「……慶次は雲の子。決して誰にも縛られず、自由に風に乗って、自

分の行きたい所で生きる事を望むから。」

犬千代の言葉に慶次郎は苦笑する。

なるほど、幼い頃から同じ屋敷で暮らしていただけに、この血の繋がらない叔母は実に自分の事を理解している。

同時に慶次郎もまた、この小さな叔母の事をよく理解していた。

「本当に、叔母上はズルい。いつも一足早く大人に成られる。」

「…犬千代は慶次のお姉さんなんだから、当然のこと。」

「だとしても、やっぱりズルい。俺は昔のように、叔母上と遊びたかったのに。共に行きませぬか、と誘っても無駄でしょうなあ。」

「…犬千代は姫様の家臣。姫様の元で仕える事を喜びとし、姫様のお役にたつ事に命を掛けたい。」

「はははっ、本格的に犬のようすなあ。」

「…うん。それで良い。犬千代は姫様の後ろに付き従う犬。それがきつと、犬千代の武士としての在り方だから。」

かつて秀吉は、信奈を笑わせる猿で在りたいと願った。

ならば犬千代は、主人に周りを駆け回る忠犬に成る事を望んだ。

だがその在り方は、自由を愛する風流人とは決して相容れない。それが分かるからこそ、犬千代は慶次郎を止めなかった。

「お互い、難儀な性格をしておりますな。」

「…そうかも知れない。だけど、これが自分で選んだ生き方だから。」

「…ですな。それでは叔母上、拙者はそろそろ。親父殿の事、宜しく願いましたます。」

手綱を操り、慶次郎は背を向ける。

その背中に向かって、犬千代は叫んだ。

「慶次っ！もし道中苦勞をし、どうしようも無く難儀した時は、遠慮無く犬千代を頼って！いつでも、臣として迎えるから！」

その叫びに馬が止まる。

暫くして慶次郎が振り返った時、犬千代の頬を爽やかな夜風が撫でた。

「この前田慶次郎利益、いずれ日ノ本の行脚を終える時、比類無き天下

無双の武人と成る所存！然らばこれを臣と迎えるは、並みの大名では非ず！少なくとも百万の石高を押さえる大大名こそ我が仕えし主と定めれば、利家殿にその御覚悟はお在りかあっ!!」

「っ!?成る！成って見せるっ!!姫様の元で手柄を上げ、百万石の大名に成って、いつか必ず慶次を迎え入れる！慶次に相応しい戦国武将に成って見せるっ!!」

「あいわかつたっ!ならばその誓い果たされるまで暫しの別れ。いざっ、さらばっ!!」

「慶次っ!!」

己の名を呼ぶ愛しき女の声を背に、前田慶次郎は月夜を行く。胸に秘した想いを抱き、若き傾奇者は旅立った。

月に掛かった雲は風に流され、いつの間にか闇夜に消えていった。今宵はこれまでに致しとう御座りまする。

閑話 今川の生きる術

一色家との激戦を制し、遂に美濃の国取りを完遂するに至った織田信奈。

年始には『天下布武』の野望を明らかにし、今まさに戦国時代の中で心地へと殴り込まんとしていた。

そして美濃平定から一月が経ち、稲葉山城改め岐阜城の執務室で、信奈は現在：

「もう無理。死ぬ。」

死にかけていた。

「姫様、すっかりしてください。寝てる暇なんてありませんよ。二十点です。」

「辛辣すぎないかしら、万千代。ていうかあんた、その調子だとまだ余裕ありそうね。」

「おほほほほほ、……これが余裕のある人間の顔に見えますか。」

「……ごめん、失言だったわ。」

らしくもない笑い声をあげた後、急に真顔になって聞いてきた万千代に、信奈も思わず謝罪の言葉を口にする。

そんな二人の目は血走り、その下には濃い隈が出来ており、髪の毛ボサボサで、体全体からくたびれた雰囲気が出されている。そしてその周りには、山高く積み上げられた書状があった。これらは全て、美濃国の政務に関する重要な資料である。

先の大戦により美濃を制圧するに至った信奈は、今後の天下に挑む戦いに備え主要な拠点を清州から岐阜に移し、家臣達にも岐阜へ転居するように布告した。

それに先立ち、美濃の国人に対して石高をはじめとした土地の情報を記載した資料を提出する旨を命じ、それを基にした新たな国割の作成に勤しんでいた。しかし、広大な美濃国の土地の関連資料は信奈たちの想定を遥かに超える量があり、しかもそこに国人たちからの所領安堵の陳述なども加わり、一月を経過した今も終わりの見えない作業が続いていた。

「正直舐めてたわ。自分の国ならともかく、他国の行政資料を纏めるのがこんなに変だったなんて。」

「ええ。そもそも枘の大きさや兵糧の集計の仕方が尾張と微妙に違うせいで、尾張の感覚で計算したら明らかに誤差が生まれるんですもの。しかも国人たちが提出してくる資料の書き方もまちまちですし。」

「まあ、マムシの代から守護を追い出していることから見ても、尾張に比べて国人たちの独立意識が強いみたいだしね。とはいえ、国人達にとつても先祖代々の土地を守れるかどうかの瀬戸際なんだし、なんとも遣り辛いわ。」

信奈は国人からの書状に目を通しながら吐き捨てる。

この時代、物の量を計ったりする基準や、物品の集計方法は国によつて違うことが多かった。

それらが統一されるのは、史実では秀吉が太閤検地を実施してからである。

また、敗れたからと言って美濃の国人達も大人しく土地を差し出すとは限らず、もし強引に土地を徴収しようならば間違いなくもう一波乱起こるため、信奈達も慎重な対応をせざるを得ない。

そのため、先ずは城に保管してある土地関連の資料を検め、国人衆が提出してきた陳述書と吟味し、配下を現地に送つて実地調査を行い、その報告を以て城の資料や陳述書の内容と齟齬があれば問いただし、その上で資料をすべて尾張式の集計方法に直すという、非常に手間の掛かる事務仕事が此処一月の信奈の業務である。

当然その作業には尾張残留組を除いた読み書き計算が可能な家臣は全て駆り出されており、秀吉や犬千代は勿論の事、勝家や良晴でさえ実地調査の為に連日美濃中を計具を背負つて駆け回っていた。

この作業が終わつたら久しぶりにのんびり相撲観戦でもしたいわね。などという事を考えながら信奈が花押を押ししていると、執務室の襖が開かれる。

「失礼します、堀秀政に御座います。」

「ん？どうしたの久太郎。また国人からの陳述でも届いたの？」

「いえ。良い知らせと悪い知らせが届いております。どちらからお聞き成されますか？」

「…聞きたくないけど、先に悪い知らせを教えてくださいようだい。」

「三河でにゃんこう宗による一揆が起りました。どうやら松平元康様が寺社町から強制的に年貢を徴収したことに対する反発によるこの事。」

「まったく。何やってんのよ竹千代は。」

「松平様は一揆勢の鎮圧に向け兵を出した模様。しかし、家中より離反者が続出し敗退。逆に岡崎城まで攻め入られています。」

「ほんと何やってんのよっ!？」

同盟国で起こったまさかの事態に信奈は仰天する。

この一揆こそ俗に言う『三河にゃんこう一揆』であった。

「ねえ、万千代。竹千代の奴、年始の挨拶で『今年の主役は私ですう。』的な調子こいた書状を送ってこなかったかしら？」

「はい。『東海地方に嵐を起こして見せます!』てな事も書いてありましたね。文字通り嵐を起こしてくれましたね。自領で。」

昨年、桶狭間の戦いの影響により独立を果たした三河松平家は、その後周辺の勢力を時には武を以て併合し、三河全土をほぼ掌握するに至った。祖父の代からの悲願を達成し、松平元康はまさに有頂天。正月には家臣達とキレキレの動きで『三河伝統海老すくいの舞』を踊っていた。

それがこの様である。付き合いの長い信奈からしても、流石に咄然としてしまう。

「ていうか、確か三河のにゃんこう宗には竹千代の父が守護使不介入の特権を与えてた筈よね?竹千代はそれを無視したって事?」

「はい。どうやら国政の資金が不足していた為、手っ取り早く寺から徴収しようとしたようです。」

「あのバカっ!きつと駿河にいた時の感覚で寺に介入したのね。」

「あのを、駿河と三河では寺との関わり方が違うのですか?」

秀政が信奈の言葉に疑問を覚えて口に出せば、信奈は大きく頷いた。

「ええ、大違いよ。そもそもとして駿河で大きく根を張るのは臨済宗の寺よ。そして駿河における臨済宗の最大拠点たる臨済寺の先代住職は、あの太原雪斎。今川家との距離が近く、その繋がりでも今川家は門徒たちを統制してたわ。」

臨済宗は鎌倉時代に発達した禅宗の宗派である。禅宗の教義は鎌倉武士の趣向に合ったこともあり、関東在野の武家に広く信仰されていた。

即ち、駿河では鎌倉時代からの名門武家である今川家と最大宗派の臨済宗の関係が深く、宗教勢力の手綱を取るのが容易であったという事である。

「だけど今の三河で強い勢力を持つのはにやんこう宗よ。で、ここが一番の問題点なんだけど、三河に来たばかりの竹千代は、にやんこう宗の者とまともに関係を結ばぬ内に先代の頃からの約定を破棄したの。恐らく、駿河では寺社勢力が今川家に良く仕えてたから、三河でも坊主は武士に従うのが当然とでも考えたんでしょね。」

「なるほど。寺からすれば領主に就任したばかりの若造が、いきなり喧嘩を仕掛けて来たようにしか見えませんね。それは一揆も起こりますよ。」

「それに、にやんこう宗は庶民向けに分かり易い教えを説いてるから、門徒には生活が苦しい者が多いと聞くわ。その辺りが家臣の離反に繋がってるんじゃないかしら?」

信奈の読み通りである。

三河兵に限らずこの頃の多くの足輕は、そのほとんどが普段は田畑を耕す兼業農兵である。專業兵が雇えるのは財政に余裕がある大名に限られ、今川家でさえ一部を除いて多くの足輕が普段は農業に勤んでいる。

その為、領民が決して豊かでは無い生活を強いられていた三河では多くの兵がにやんこう宗を信仰しており、家臣団の離反が続出したのだ。

日々の生活に苦心する者は、その救いを神に求める。

その心理を理解し切れなかった事こそ、元康の最大の失態であった。

た。

「はあ。尾張に残った地蔵に伝えて。いざという時のための援軍を用意するようにと。」

「承知いたしました。」

「はあ、竹千代め。今回の件、存分に反省してくれないと許さないわよ。」

一般的に宗教勢力に対して厳しいと思われがちな織田信奈であるが、敵対さえしなければ同時代の他大名に比べても寺社に対しては寛容だったと言われている。

先の桶狭間の戦い後、戦勝を祈願した熱田神宮には戦勝の礼として所謂『信奈塀』を奉納し、『南無妙法蓮華経』と書かれた軍旗を用いていたなど、織田信奈はごく普通の日本人的な信仰心を持っていたとされる。

また、この当時の寺社は冠婚葬祭は勿論、戸籍の管理や地域の教育という行政機関としての役割を担っており、現代よりも遥かに市井の民との繋がりが深い。

そのため、地域の宗教組織と上手く付き合うことは、その土地の領主にとって非常な重要なことでもあった。

閑話休題

「それで、もう一つの良い知らせってのは何？本当に良い知らせなんでしょうね？」

「…はい。武田信玄の弟、武田義信が謀反の疑いで蟄居され、その後蟄居先の屋敷で自害した模様。同時に傅役であった飯富虎昌をはじめとした親今川派の武将も連座して処断されました。」

「……デ、アルカ。」

秀政から知らせを聞き、信奈は筆を置く。そしてその手を組んで額を置くと、思案の面持ちで万千代に視線を送る。

「万千代、これはもう武田の駿河侵攻は時間の問題かしらね。」

「はい。義信の奥方は今川の姫。これを断ち切るのは三国同盟の破棄と同義です。北条の反発も必須でしょう。」

「それを受けてもなお、武田は今川を喰らおうとする。これってやっぱり、武田は余裕が無いわね。」

「恐らくそうかと。上杉との戦いでは重臣を失い、ここ数年は新たな領地を得られずにいます。ですが聞くところによると、軍備の拡張は辞められず、甲斐の灌漑工事にはかなりの銭を投じているとも。外面は取り繕っていますが、懐事情はあまりよろしくないのでは？」

「頼みの綱は甲斐の金山と信濃からの搾取か。信濃の民も気の毒ね。大分恨みが溜まってらんじゃないかしら？」

信濃国は現在武田家の占領下にあるが、かつては諏訪大社大祝の諏訪頼重が要所を押さえ大きな力を有していた。武田家の先代、武田信虎は複数回に渡り諏訪家を攻めたが攻略する事は適わず、信玄の姉である禰々を嫁に出し婚姻同盟を結んでいた。

ところが信玄が信虎を追放し当主に就くと、騙し討ち同然に頼重を攻め、これを討ち取った。

この時の心労で禰々は床に臥せり、ほどなく病死する。そして頼重と禰々の娘である四郎は、信濃豪族を押さえつける為の人質として甲斐に送られたのだった。

その後、信濃は武田家の軍資金の為に過酷な負担を担うことになり、領民たちは大いに苦しんでいる。その胸中は決して穏やかざるものであろう。

「武田にとっては負けられない戦いになるわね。今の武田家が纏まっているのは常勝の将、武田信玄が上に立っているからよ。もしここに敗北という傷が付いた時、武田はどうなるかしらね？」

「いずれにせよ、今川の動き次第です。今のところ国力の回復に力を入れてはいるようですが、果たして手負いの国同士どこまで対抗できるか。」

「武田と今川、もはやこの二か国が手を携える未来は無く、関東三軍師の尽力により締結された三国同盟はここに破綻。果たして生き残るのは武田か、今川か。まあ、こっちとしては虎囲いの第一段階は完了したのは喜ばしい事ね。」

甲斐武田を滅ぼさんとする『虎囲いの計』。その第一段階は武田と

今川の敵対を以て成った。

それと同時に、たとえこの策謀の成否に関わらず武田家は長く無いであろう事を信奈は察した。

「もしかして、いま私の話をしましたか。」

不意に場にそぐわぬ能天気な声が聞こえてきた。

声のした方に顔を向けると、秀政の後ろからひよっこりと首を出す女がいた。

その顔を見た信奈は苦々しく顔をしかめた。

「あんたの弟について話してたの。誰もあんたの事なんて呼んで無いわよ。」

「まあっ、龍王丸の事を！つまり今度産まれる御子についてですわね！私の所にもなんと名付けるべきか相談の手紙が来ましたわ。大切な甥っ子ですし、私も良い名を付けてあげねばと悩んでますの。でもそれ以上に大切なのは、如何にして私を叔母上様では無く、御姉様と呼んでくれるようにするかでして…」

突然乱入してきたかと思えば、何やら愉快な勘違いをしはじめたのは今川義元。以前は背中を隠すほどの長さを誇った美髪は今肩口の辺りで切り揃えてあるが、その高貴な雰囲気は嘗てと変わらず。

扇子で口元を隠してホホホと笑えば、信奈も頭に手をやり溜め息を吐く他無い。

桶狭間の戦いで捕縛され、その後の会談にて今川義元の身分は織田の客分、実質的には今川からの人質として落ち着いている。

敗軍の将とはいえ他国の姫。人質とはいえ粗末に扱うのは憚れる身分のため、当初から義元は清州の一面に屋敷を用意されるなど、手篤い持て成しを受けていた。無論、その周囲には警備の名目で常に監視の目は有るのだが。

そうした状況下で義元も最初の内は大人しくしていた。

しかし、一月もすると生来の気ままさを発揮するようになる。

警備の兵たちを巻き込んだ蹴鞠大会に始まり、商人たちを屋敷に招いて歌会に茶会、織田家の女房達に対する生け花の指導、さらには自身の舞踊の披露会など、とにかくやりたい放題やって織田家中に文化

の新風を吹き込んだ。

武将としては色々足りない部分が多い義元だが、こと芸事に関しては当代きつての文化人である。義元その強みを存分に振り、人質で在りながら文化の伝道者としての立場を短期間のうちに織田家中で確立したのだった。

また、義元は積極的に城下に繰り出し清州の民と交流した。

敵対した国の元大将とはいえ、見た目はまさしく目麗しい高貴な姫である。当初は警戒していた清州の民も、その容姿と高飛車なれど憎めぬ性格に惹かれるようになり、いつの間にか受け入れられるようになっていた。

しかもこれらの行動、義元に何か思惑があつて起こしたのではなく、単に自分がやりたい事をやった上での結果である。かの太原雪斎をして『周りに支えられる将』と称された才は、尾張にあつても健在だった。これには信奈も頭を抱えるしか無い。

「申し訳ありません、信奈殿。義元様、信奈殿は政務中です。邪魔をしてはなりませんよ。」

義元に続いて部屋に入り忠言するのは、今川軍本隊で指揮官を務めていた朝比奈泰朝である。

義元と共に捕らえられた泰朝は、戦で負った怪我が癒えた後も義元の元に残り、側近として日々の生活の世話をしていた。

「謝るんだつたらさつきとこの馬鹿姫を連れて帰って頂戴。本当に仕事の邪魔。」

「まあっ！失礼ですわね。せつかく名城と言われる稲葉山城に来たんですから、少しくらい中を見学してもいいじゃないですか。あら、それでもしかして石高表？」

「ええそうよ！お察しの通りこの国の石高について検めているところなの。だからあんたの相手をしている暇は…」

「信奈さん、たぶんそこに書かれてある石高、数が間違ってますわよ。」

「…は？」

唐突な義元からの指摘に、信奈は柄にもなく呆けてしまう。

義元が指さすのは、国人衆の一つから送られてきた石高表である。

信奈も一通り検め、特に内容に不備は無かったため花押を押そうとしていた所である。

だが義元の顔には冗談の色は無く、その口調は何気ない様でいて確信めいたものが込められていた。

「…ねえ、なんで石高が間違っていると思ったの?」

「何でって言われましても、その石高表の紙は随分と質の良い物ですよ。今川でも重要書類や他国へ書状を送る時に使う物で、そんなにそこらの国人がおいそれと普段使いする物ではありませんわ。にも拘らず、その書状に書かれてる石高の数が使われてる紙の質と全く釣り合ってなかったので変だなって思いましたの。なのでちよつと頭の中で計算してみたんですけど、やっぱり数が合ってませんでしたわ。多分その石高表を書いた人が、間違つて過少に書いてしまったのではなくて?」

「…：万千代、久太郎、ちよつと来て。計算し直すわよ。」

「は、はい。」

万千代と秀政を呼び寄せると、頭を突き合わせて再計算を始める。一つ一つ慎重に数を確認しながら、城にあった資料と比較していくと、ほどなくして信奈は大きく息を吐いた。

「本当だわ。よく見たら城に毎年納められてた年貢と、提出された資料の数が全然違うわ。万千代、この資料あれよね?」

「ええ。明らかに実態より過少に記載され、巧妙に数が誤魔化されています。間違いなく確信犯です。」

要するに、この資料を提出してきた国人は粉飾決済を行った資料を作成し提出したのだ。これは明確な裏金作りの証拠である。おそらく一色家時代、あるいはそれ以前から行われ常態化していたのか、一目では信奈達にも分からないほど巧妙で年季の入った改竄であった。「さすが義元様。この手の不正は主代わりの時によく行われます。駿河でも最初は大分苦労しました。」

そうしみじみ語り、義元を称賛するのは泰朝である。しかし、当の本人には自分が大事を行った自覚は無いのか、いまいち反応に薄い。「別に大騒ぎする事では在りませんわ。こういう書類を見るときは、

まず紙と墨に注目するように師匠から教えられました。別に注意深く読めば誰でも気づくことでしょくに。」

「いや、確かに最初から不正があると身構えていたら気づくでしょうけど。えっ、なに？あんた石高表の計算とかしてたの？」

「ええ、してましたわよ。師匠も太守なら最低限最後の確認くらいはしておくようにと教えていただきましたの。あまり面白い作業ではありませんでしたけど。」

今川義元は本人の気質もあり、師である雪斎をして武将としての才は無いと断じられ、軍事を含むおよそ戦国武将に必要なとされる教育はされなかった。

その一方で、大国の支配者、即ち大名として必要な教養は不足なく施され、特に内政分野や外交に必要な文化芸術における叡智はこれでもかと詰め込まれている。

何より義元は、最盛期には駿河、遠江、三河の三国を従えた大大名である。為政者としての実績と経験値はこの時点の信奈を大きく上回っていた。

「…ねえ、あんたいま客将の身分よね。一応我が家の将というのなら、手伝って欲しい事があるのだけど。」

「な、なんですの信奈さん？目が怖いんですけど。」

まるで『絶対に逃がさない。』とでも言う様にガツシリと義元の肩を掴んで怪しく微笑む信奈に、義元は恐怖に顔を引き攣らせる。だがもはや時すでに遅し。部屋の入口は万千代と秀政に抑えられ、逃げ場は完全に閉ざされていた。

その後、織田家は何とか美濃全土の検地を終えた。その際、いくつかの国人は石高の計算の不備を突かれ、その内容を検めざるを得なくなる。

また、資料検めをしていた者達がようやく事務仕事から解放された時、睡眠の幸せを噛み締めながら机に突っ伏す者たちの中に、今川の姫がいたのと言うまでもないことだ。

ここ最近、今川氏真は一人で夜を過ごしている。寢床を共にする妻が産み月であるならば、それも当然の事であった。なので寝る前に愛する妻の無事を祈るのが日課に成りつつあったのだが、今日ばかりは別の想いが胸中に渦巻いていた。

「……………武田…義信。」

口から呟かれたのは、先日自害した義理の兄弟の名。

氏真は義信と直接顔を合わせた事は無い。ただ駿河と甲斐の間で楽市楽座を行う際、文のやり取りをした仲である。氏真の手元には、その時の義信からの手紙があつた。

書かれている文字は少々乱雑で、言葉も決して教養に富んだものではないが、文章からは義信の実直な人柄と、姉である信玄への敬愛の情が感じられた。

「…すまぬな、義信。」

だからこそ、武田義信に狙いを定めた。最初から死なすつもりで友好を結んだ。

川中島の戦いで武田家は信玄の妹、信繁だけでなく甘利、板垣といった古参の重臣を失う大損害を被つた。その立て直しは急務であり、だからこそ今川との交易を活性化させるのにも同意した。

交易は実利を出し、両家とも完全には言わないが先の戦いの損害を回復する事が出来た。

ただし、それによって武田家中には不和が生じた。

駿河、甲斐の間で楽市楽座を行う上で、氏真と義信の間を取り持つたのは飯富家をはじめとした親今川派の豪族である。彼らの領地は駿河と近く、交易による利潤を直接的に受ける者達であつた。

一方で、駿河から離れた場所に領地を持つ豪族は交易による利を得られず、不満を募らせた。

彼らの多くは甲斐北部、即ち对上杉の最前線に領地を持つ者達であり、先の戦いの被害が大きかった者達である。

なぜ多くの血を流した我らにその対価が与えられ無いのか？

そんな声が甲斐で聞こえ始めるようになる。

それと同時に、今こそ今川を攻めるべき時と言う声も聞かれ始めるようになった。

これに焦ったのは親今川派である。

彼らは自分達の利権を守る為、今川家当主と義兄弟であり親しく手紙のやり取りをする義信を担ぎ出し、武田家次期当主の威光を以て反今川派に対抗しようとした。

こうして家中が二つに別れる中、信玄は義信に蟄居を命じ、寺に幽閉した。

真実を言うと、信玄はこの時点で早急に今川を攻めるつもりは無かった。仮に攻めるならば三国同盟破棄による影響を加味し、正当な大義名分を得て、何処からも文句が出ない磐石な状況を作ってから今川を攻めるつもりだった。

義信を幽閉したのも、家中が落ち着くまで表舞台から離し、急進派による暗殺から守る為の処置であった。事が成れば改めて義信を後継者に指名する予定ですらあったのだ。

しかし、信玄の思惑は義信の自害により消し飛んだ。

義信は信玄が優しさから自分を切り捨てられないのだと勘違いした。

そう勘違いするように仕向けられた。

「すまぬな義信。だが武田家を、姉君を想うなら、お前は死ぬべきではなかったぞ。」

義信には「信玄殿は性根の優しいお方。きっと事を丸く治めてくれる筈。」と囁くだけでよかった。予想通り義信は自分が姉の霸道の枷になっているのだと短慮し、姉の背を押してやらねばと勝手に判断して自害した。それが滅亡の淵へと繋がるものとは夢にも思わずに。

義信が自害した事により、信玄は親今川派の家臣達を肅清せねばならなくなり、今川領を早急に侵さねばならなくなった。

甲斐の虎は、身内によって追い立てられ、一步一步と致命の罠へ誘われている。

「すまぬな晴信の義姉上。これが今川が生きる術にて。」

自分は地獄に落ちるな、などと自嘲しつつも、氏真は手を緩めるつもりは一切無い。

それが、今川氏真という戦国武将が生きる意味である故に。

今宵はこれまでに致しとう御座りまする。

閑話 とある姫武将から見た天下人

最初の印象は、面白そうな方だな、だったと思います。

……いえ、正直に答えると、同じ立場であつた相良さんに比べると、あまり印象には残ってませんでした。

相良さんは服装も奇抜で、姫様への接し方も大胆で、下手すれば無礼打ちも已む無しの振る舞いでしたけど、不思議と不快感は無く、姫様が気に入るのも無理はないと思います。

対して木下さんは、良くも悪くも普通でした。格好は何処にでも居る雑兵。姫様との遣り取りも常識的。

それにその：言い方は悪いですが、相良さんに比べると木下さんの容姿はあまり優れているとは言い難く、完全に相良さんのオマケ程度にしか思えませんでした。

ただ、私達が名前を明かした時、不意に木下さんが無表情になつたんです。私はその顔を見て、言葉に出来ぬ寒気を感じました。でもそれも一瞬で、次の瞬間には木下さんは穏やかな笑みを浮かべていて、私もそれ以降寒気を感じる事は有りませんでした。だからその時は、何かの勘違いだと思つたんです。勘違いじゃないと気付いたのは、木下さんが今川と通じた裏切者たちを肅正した時です。

それは兎も角として、木下さんは優秀な方でした。

彼が最初に姫様から命じられたのは、城の石垣の修繕。相良さんが斎藤道三との会談への同行を命じられたのと比べると、やはりどうしても地味に見えてしまいます。勘の良い者ならば、既に姫様が相良さんと木下さんで扱いに差を作っていると思うかもしれません。事実、私自身がそうでした。

私は姫様が不在の間、それとなく木下さんの働きぶりに注意していました。木下さんは不貞腐れた様子もなく、時には石大工たちに交じって精力的に働いており、自分が相良様より重用されていないことを気にした素振りはありませんでした。もしかしたら、本当に気づいていないのでは、と思つたくらいです。

木下さんは姫様から定められた工期より早く、石垣の修繕を終えら

れました。こういった工事は、職人たちの士気を維持できないと予定通りに進める事は中々難しいものです。職人というのは気難しい人も多く、武家の威光で上から接すると機嫌を損ねる事も多く、刀を抜いて脅そうものならノミや金槌を振り上げ反発してくるというのも珍しい話ではありません。

しかし、木下さんはそんな気難しい石大工たちの心情を見事に掌握し、その能力を十全に発揮させて見せました。修繕作業に競争の要素を取り入れやる気を起こさせ、自ら作業場に飛び込み、時には滑稽な言動で職人たちを笑わせ作業場の士気を上げ、仕事終わりには頻繁に酒を奢って職人たちの心を鷲掴みにしました。

後になって聞いた話ですが、木下さんは朝誰よりも早く作業場に来て掃除や道具出しを済ませ、最後の職人が帰るまで作業場に残り、一人一人にその日一日の労をねぎらう言葉をかけていたそうです。これで木下さんを好きにならない職人はいませんでした。若い職人の中には、このまま木下さんの家来にさせて貰おうかと、本気で考えていた人もいたそうです。

こうして木下さんは、織田家中で徐々に頭角を現していきました。稲生の戦いを終える頃になると、木下さんを織田家の戦力として欠かせぬ方として認めるように成る人も多くなっていたと思います。もちろん私もです。

ですが同時に、この頃から木下さんに対して、言いえぬ恐ろしさを感じるようになったんです。切っ掛けは先ほども言った裏切り者の粛清でしたけど、それ以外にも時折『木下秀吉』という武将の底知れなさを感じるようになったんです。

あれはそう、今川との戦いを終えた後、織田家と松平家との同盟が結ばれ、その祝宴が行われている時です。お酒を飲んでいた六さんが、南近江の六角家では捕虜になった姫武将を慰み者として家臣への褒美としているという話を聞いて激怒しました。

「何と恥ずべきことだっ!!戦中の流れで姫武将を死なせるならいざ知らず、捕虜とした女を性欲の捌け口にするとはっ! 姫武将は必要以上に傷物にしてはならんとする武家の習いを知らないのかっ!」

周囲にいた他の姫武将も六さんに同調してました。男性の方々も六角家の話には眉を寄せ不快感を表しており、相良さんなど「捕まえた姫武将を性奴隷にするなんて！それなんてえろげ…じゃねえ、けしからん話許せねえぜ！」と声高に仰ってました。

だけど一人だけ、木下さんだけは妙に難しい顔をして首を傾げていました。それがどうにも気になったので、私は木下さんの隣に座って話をすることにしました。

「どうかしましたか木下さん？何だか思い詰めていらつしやるようですよけど。」

「ん？ああ、丹羽殿。いえ、決して思い詰めてるわけでは御座らんのじゃが…」

「ではどうして、そんな難しい顔をしてるんです？何か六さんの話で気になる所があったんですか？」

そう尋ねると、木下さんは「ううむ」と唸り、周りを気にするかのよう周囲を見渡しました。そして、声を抑えて私の問いに答えました。

「…丹羽殿、どうにも儂の感覚はここに居る者達と少し違うらしい。儂は姫武将が戦場で捕まり、勝者の慰み者になる事、当然とは思わずとも、仕方のない事だという風に思えてしまうのだ。」

その答えに、私は返事を返す事が出来ませんでした。

私の知る限り木下さんは、六さんの胸に視線を捕らえられるなど少々不純な部分は有れど、連れていかれそうになった寧々を身を挺して庇おうとする、女性には優しい方だと思っていました。

そんな方から、『捕まった女が男の慰み者にされるのは仕方がない』というような言葉が出た事に、私は少なからず衝撃を受けたんです。「そもそもこの話じゃが、戦場において捕虜を取ることは稀。名の通った武将ならまだしも、食い扶持や見張りの人手が必要になる捕虜など下手に取っても邪魔なだけじゃ。故に戦場においては捕虜など取らず、さっさと手柄首にしてしまうのが常道である。しかし、『姫武将は傷物にしない』という約定に則るならば、たとえ足軽であれど女であれば殺さずに捕虜にするのが正しい事でありましょっ。」

「…はい、木下さんの認識で間違いありません。」

事実、松平元康様の軍勢は織田の奇襲部隊を撃破した時、可能な限り姫武將を生かして捕らえ、今川から処刑するように命ぜられながらもこれに反発しています。

女であれば可能な限り殺さないというのが、戦場の常識です。

「つまり、捕虜としていた時点で姫武將は既に一命を助けられているわけで御座いましょう。ならば、その後慰み者にされようが子供を孕まされようが文句を言う資格は無いように思えましてのう。」

「そんなっ、いくら何でもあんまりですっ！女性の尊厳や誇りを何だと思ってるんですかっ!？」

「……………丹羽殿にとつて、女性の尊厳や誇りとは、ご自身の命よりも大切なもののですか？」

その言葉に、私は今度こそ言葉を失いました。

何とかして言い返したい。だけど、感情がぐちゃぐちゃになって、言葉が上手く纏まらない。

そんな私に対し、木下さんは無表情となり、決定的な一言を言いました。

「たとえ命を奪いに来られても、相手が姫武將ならば殺してはならぬし、捕虜にしたら姫の如く丁重に扱わねばならない。何とも、不条理ですなあ……………」

人を殺しに行つて生かされたのだ。死ぬより性奴隷がマシなら、伏して感謝を述べるべし。それが嫌なら自害するか、戦いの結果として静かに受け入れるべきであろう。」

サーと顔から血の気が引くのが分かりました。頭をぶん殴られたかのような衝撃に眩暈がし、手で支えねばそのまま倒れていたでしよう。

考えたことも無かった。想像すらしなかった。

戦で敗れても、よほど運が悪くなければ命は保証され、捕虜として丁重に扱われることを当然と思っていた。自分たちは人を殺しに戦場に出たのに。

「うっ!?」

「丹羽殿、御自愛なされよ。」

吐き気を覚えて口に手をやると、木下さんが近くにあった水の入った枡を渡してくれました。

私はそれを飲み干し、込み上げていた物を何とか腹の奥に押し込みました。だけど、臍には気持ちの悪さが残り、手足には力が入らず、指先は冷たく震えていました。

姫武将とは、乱世において男性顔負けに戦場を駆け、その秀麗な容姿で民草の希望を齎し、新たな時代の到来を告げる象徴たる者。そういうものだとは私は信じていません。

だけど私が思い描いていた姫武将像は、木下さんによって粉々に砕かれてしまっただけです。

『姫武将を必要以上に傷付けない』とする約定とは即ち、

『私たち姫武将は戦場で男を殺す。だけど男が姫武将を殺すのはダメで、捕虜にしたなら丁重に扱いなさい。』

と、強要しているのだ。

仮に私が男だったなら「舐めてるんですか?」と文句も言いたくなるでしょう。

だけど現実として、そんな戦場を舐め腐った約定が罷り通り、男女ともにそれに疑問を持つていない。

それが途轍もなく気持ち悪く、どうしようもなく歯痒く感じられてしまいました。

「どうしたら、良いんでしょうか…」

私はそんなことを呟いていました。なんてことに気付かせてくれたんだ、という八つ当たりもあったかもしれません。

木下さんは無表情のままじつとわたしを見つめ、暫くして手元にあった盃をグツと飲み干しました。

「まあ、なんだかんだ好き勝手言わせていただきましたが、そう難しく考える必要は御座いません。そもそもとして儂の知る世と、今生の世は似て非なるもの。この世界では、儂の方が異端で御座います。あんまり真に受けぬ方が良いかと。」

そう言う木下さんの顔からは無表情は消え去り、いつも通りのにこやかな笑みが浮かんでいました。

それが木下さんの本心なのか、それとも私を気遣ってなのか、私には判断できません。だけど、一つハッキリした事があります。

木下さんと私達では、育つてきた環境が、考えの前提となる常識が、明らかに異なっていたんです。

むしろ相良さんの方が、私達とは近しい感性を持っていると言って良いでしょう。

そう言わざるを得ないくらい、木下さんは異質な存在なのです。

「…因みにですが、捕虜にされ、慰み者とされた姫武将は、その運命を受け入れる他に生きる術は無いのでしょうか？」

「いやいや、そんなことは御座いませぬ。一旦傳いた風に見せ相手が心を許した隙を見計らい、寝首を掻いて逃げ出すのも手段の一つ。しかし、これを遣り過ぎると『あの家の姫武将は油断ならん』と言われるようになり、いずれ捕虜にされる前に殺されるようになるでしょう。なので儂としては、徹底的に下手に出て敵に気に入られるようにするのが、慰み者にされた者が主君を助ける役目になると思います。」

「敵に気に入られることが、主君の役に立つ？」

「はい。男というのは単純なもので、自分を慕ってくれる女には殊更弱いのでございます。自分の子を産んだ女となれば尚更です。なので、仮に丹羽様が敵に捕まり、不幸にも慰み者にされたならば、一度現状を受け入れ芯から媚びて御覧になると良いでしょう。そうすれば自然と待遇も良くなりましょう。そうして敵方の心が傾いたと思えば自然と涙でも浮かべて信奈様への慈悲を願ってみて下され。さすればきつと、敵方は心情的に攻め難くなり、我らが盛り返す隙も生まれましょう。」

「……………」

果たしてそういう未来が訪れた時、私は木下さんが言ったように、姫様の為に敵に媚びる事が出来るだろうか？その答えはまだ出ない。

木下秀吉という武将は優れた人物です。

そして同時に、深淵の如き底知れなさを持つ人です。

私は木下秀吉という人物が恐ろしい。

だけどこの人とは、この人だけでは争てはいけない。

織田家に牙を剥く、そんな未来が来ない限りは…

新たななる使命と新たななる出会い

春の息吹が山野を駆ける。日差しは暖かく、野原には色とりどりの花々が咲き誇り、雪解け水の清流を小魚が昇っていき、気の早い蛙の鳴き声が田畑の隅から聞こえていた。

春の陽気がそうさせるのか、道行く人々の表情も心なしか穏やかである。川沿いの農耕地からは、畑の土を興す農夫たちの掛け声に交じった子供達の明るい歓声が、街の人達の顔に自然と笑みを浮かべさせていた。

そんな、生命が春の到来を喜ぶ様子を全身に感じながら、相良良晴は感慨に深げに岐阜城下の道を歩く。

「そうか、もうすぐこの時代に来て一年が経つんだな。」

良晴はちょうど一年前の事を思い起こしながら、そう呟く。

現代社会で歴史好きの高校生として生活していた良晴は、ある日突然戦国時代へとタイムスリップしてしまった。そこで様々な苦難に会いながらも、持ち前の器用さと愛嬌、そして人との縁に恵まれた事で何とか乱世の武士社会で居場所を手に入れる事が出来た。望郷の念が無いわけではないが、今はこの戦国の世で名を高める事に喜びすら感じ始めている。

いずれ元の世界より、今いる世界こそ自分がいるべき世界と思う日が来るかもしれない。

そんな考えが脳裏をよぎるも、だからと言って歩みを止めるつもりは毛頭なかった。

いま自分はこの国の歴史にいる。そう思うと、心の底からワクワクとした感情が沸き上がるのを抑えきれず、もつとより高みを目指していきたいという、そんな若人特有の万能感と無遠慮さが鎌首を擡げていた。

「おはよう御座います、相良様。今日も何かお仕事が？」

「おう、おはよう。ちよつと信奈に呼ばれてな。」

気づけば目的地である岐阜城の門前へと辿り着き、門番兵と気軽に挨拶を交わしていた。織田家が美濃を攻略するにおいて美濃国人達

の調略という役割を果たした良晴は、桶狭間の頃からの手柄も相まつて織田家中でも秀吉に次ぐ出世頭として家中では看做されていた。

そのため、足軽や若い美濃兵からは「様」付けと敬称で呼ばれるようになってきている。最初はそれにむず痒さを感じた良晴も、一月もすると開き直つて自然と返事を返せるようになった。

すると門番の若い兵は、何が可笑しいのやら口元に苦笑を浮かべた。

「ん、なんで笑つてんだ？」

「いや、申し訳ありません。噂は本当だったのだなと思つてしまつて。」

「噂？」

「はい。織田家中にあつて、相良様のみ姫様を呼び捨てにすることを許してあると。」

門番の答えに良晴は「ああ、なるほど。」と納得した。

良晴の主人である織田信奈は、いまや尾張と美濃を治めし総領百二十万石以上の大大名である。それを気やすく呼び捨てにする者など良晴以外にいない。

最近配下に加わつた美濃の国人達は勿論の事、織田家当主となる以前からの旧い付き合いのある者達さえ「様」付けをする中、良晴だけが出会つた当初から呼び方も態度も一貫している。

それを問題視する者も少なくは無いが、当の信奈自身が良晴を咎めないため織田家中にあつては良晴の振舞は許されたものだと思つていた。

「別にそこまで気にする事でもないと思うけどな。あいつもそこまで気してみないだし、お前らだつて普通に呼び捨てにしたつて良いと思つぜ。」

「そんな恐れ多い！足軽風情が御当主様を呼び捨てなど、とてもとても……」

呼び捨てにした後の事を想像したのか、門番は身震いをして首を横に振る。

今度は逆に良晴が苦笑をすると、なるほどこれが秀吉さんが言つて

たことか、と以前同僚と交わした言葉を思い出した。

上に昇っていくと、友と呼べる者が少なくなっていく。

嘗て日本の頂点へと上り詰めた天下人は、昔のように自分の名が呼ばれなくなった事を、寂し気に良晴に話して聞かせてくれた。それを思うと、なんとなく信奈の事を敬って呼ぼうとするのを躊躇する己が良晴の心の中にいた。

「まっ、俺も無理に信奈の事を呼び捨てにしろなんて言わないさ。そんじゃ、またな。」

「はいっ、お気をつけてっ！」

威勢よく見送る門番に手を上げ、良晴は門を潜って城の中へと入る。

既に何度も登城しているので、道に迷うことなく謁見の間までたどり着く。部屋の前では堀秀政が頭を下げて良晴を出迎えた。

「ようこそお出で下さいました、相良様。姫様は中でお待ちです。姫様っ、相良様がお着きに成られました。」

『デアルカ。通してちょうだい。』

襖越しに返事が届くと、秀政は襖を横に滑らせる。

部屋の中では軽装の信奈が、膝を立てて何やら報告書に目を通して
いる。

「よっ、来たぜ。信奈。って、あれ？」

軽い調子で挨拶をし部屋に入った良晴は、そこで先客がいる事に気が付いた。

それは小柄で愛らしい少女だった。年の頃は犬千代と同じくらいか。パツチリとした大きな瞳が興味深げに良晴を見ていた。

「ああ、その娘は左近。滝川一益といって、あんた達が仕官する少し前に登用したんだけど、ずっと伊勢の方に行ってたから会うのは初めてよね？左近、こいつは良しサル。噂には聞いてるかしら？」

「うん、聞いておるのじゃー！一色義龍を口説き落としたり『織田の二猿』の片割れじゃろ。よろしく頼むぞ、よっしー！」

「よ、よっしー？」

突然某人気ゲームの主人公が乗る恐竜のような呼び方をされ、良晴

は目を白黒させる。その様子に一益は悪戯っぽい笑みを浮かべ、信奈も困ったかのような苦笑いをする。信奈には珍しい表情だ。

「さて、良しサルをからかうのは楽しけれど、顔合わせも終わった事だし本題に入るわね。良しサル、左近に協力して伊勢攻略の総仕上げをしなさい！」

「なっ!？」

「伊勢の攻略?」

信奈から言い渡された命令は完全に良晴の予想から外れたものだった。一益にとつても意中の外にあつたのか、笑顔が一転して表情を無くしている。

「伊勢を攻略するなんて随分急な話だな。美濃の検地は終わったのか?」

「心配ないわ。それなら数日前に終わってる。伊勢については美濃を攻める前から秘密裏に左近が国人衆の調略をやってくれたから、既に仕上げの段階なの。詳しい事は左近から聞いてちょうだい。左近、良しサルと協力して、伊勢の北畠家を屈服させなさい。」

「しよ、承知つかまつりましたなのじゃ。」

動揺が収まらない様子であるが、それでも何とか一益は頭を下げる。

そうして信奈から命を下され、良晴と一益は一旦部屋を退出する。

そして二人並んで岐阜城の中を歩きながら、良晴はどうしたものかと顎を撫でた。

「まったく信奈の奴は、いつも思い付きみたいな命令をしゃがって。で、一益ちゃん、実際伊勢の方はどんな感じなんだ?」

「……………」

「…一益ちゃん?」

呼びかけに反応が無い事を不審に思い、良晴が一益の方へ顔を向けると一益は立ち止まって俯いていた。

だがそれも一瞬の事であり、心配した良晴が再度声を掛けるより早く一益は天真爛漫の笑みを浮かべて顔を上げた。

「うん、心配は無いぞよっしー！伊勢の国人衆の調略はほぼ済んでおり、もうその殆どが織田方に付くように根回しは終わっておる。国司の伊勢北畠に付き従うのは親族くらいしか残ってないのじゃ。」

「おつ、そうなのか！ならあとやる事は本当に仕上げくらいなんだな。」

「その通り。北畠の味方はいないから、脅しちやえば簡単に従属してくれるのじゃ。だからよっしーは余計なこと…じゃなかった、何もしなくて大丈夫なのじゃ！」

「おお！なんだ急に手伝いをしろなんて言われたから身構えたけど、心配いらなかったな！全部一益ちゃんがやってくれてたじゃんか！」

「そうそう。何も心配要らないのじゃ！おつと、すまんよっしー。姫にはこのあと予定があるのじゃ…」

「へえ、そうなのか。じゃ、また今度。何か進展があつたら教えてくれ。」

「あい分かった！ではさらばじゃ、よっしー！」

こうして賑やかに別れを告げると、一益は良晴の元から去っていった。

その後、良晴は岐阜城下をプラプラと歩き、途中で適当なおかずを買って家に帰り、夕飯を食べ、風呂代わりに濡れた布巾で軽く体を拭いた。そして布団を敷いて寝る準備を済ませ、いつもと同じ時間に布団に入る。そうして微睡みに身を任せていると、良晴はハッと気が付いた。

「あれっ、もしかして一益ちゃん、俺の事厄介払いしてないか？」

「で、結局ここに来たわけだけど。」

翌日、良晴は自宅からほど近い屋敷の前にいた。この屋敷の主は秀

吉。信奈が岐阜城を新たな拠点と定め家臣たちを移住させたのに合わせて家族共々転居してきた秀吉は、これまでの功績や家来持ちである事を加味され良晴よりも広い屋敷を宛がわれていた。

今日ここに良晴が来た理由は、昨日の一益の態度と信奈からの主命について、秀吉に相談するためである。

「うーん、事前に連絡せずに来ちゃったけど秀吉さんいるかな？まあ、いなけりやまた来ればいいだけけど。そんじや、おじやましま…」
そう言つて門を潜ろうとした、その時であった。

「曲者おとおおおおおおおつ！」

「へ？つて、うわあああああああつ！」

何やら大声が聞こえてきたのでそちらに顔を向けると、良晴の頭を目掛けて槍が振り下ろされていた。間一髪、横つ飛びして必殺の一撃を避けた良晴が見上げれば、丸い鼻が特徴的な大柄な少年が、目を吊り上げて良晴を見下ろしていた。

「な、なにすんだよ！殺す気かっ!？」

「殺す気じゃっ！」

「はあああああああつ!？」

まさかの殺人未遂、そして殺害予告に良晴は仰天する。

「ここを誰の御屋敷と心得る？織田家の誇る『二猿』が一人、木下藤吉郎秀吉様の御屋形ぞ！そこに忍び込もうとするとは、貴様他国の間者じゃな！藤吉郎様を害そうとも、そうはいかん。この儂が成敗してくれるー！」

「いや待てっ！俺は間者じゃねえ！俺は…」

「問答無用っ！」

「聞けよっ!？」

「何をしておるか、権兵衛っ！」

有無を言わず槍を振り上げる男を、制止する声が掛かる。見れば、秀吉の弟の秀長が慌てた様子で駆け寄つて来ていた。

「あつ、小一郎様。見てください、間者です。屋敷に忍び込もうとしていたので成敗致します！」

「バカモンっ！このお方は相良良晴様、兄者の御友人じゃっ！」

「へっ？相良様と言うと、義龍様を口説き落としたと言うあのっ！どひゃああああっ、失礼いたしましたっ!!」

一転して顔を蒼くすると、男は槍を放り投げて弾かれたように地にひれ伏した。その体勢は、思わず惚れ惚れとしてしまうような見事な土下座である。

そんな男に溜め息を吐きつつも、小一郎は申し訳無さそうに良晴の方を向く。

「家来が大変な失礼を致しました。相良様、お怪我は御座いませんか？」

「うん、大丈夫。ええと小一郎、こいつは？」

「仙石秀久と言います。岐阜を拠点にするに際し、大姫様より兄者に付けられた新参者です。ほれ権兵衛、相良様に謝罪せえ。」

「はっ！仙石権兵衛秀久と申します。相良様、先ほどは本当に申し訳ありませんでした！」

そう言うのと権兵衛は再び深々と頭を下げた。改めて見ても、土下座姿が妙に様になっている。

「ところで相良様、今日は兄者にご用でしょうか？」

「ああ、そうなんだ。ちよつと秀吉さんに相談したい事があつてさ。」

「左様で御座いますか。しかし申し訳ありません。現在兄者は来客の対応中でして…」

「大丈夫ですよ小一郎様っ！相良様と言えば藤吉郎様の大友人として有名！そんな御方の相談事を藤吉郎様が断る筈がありませんっ！ささっ、こちらです！」

「い、いや待て権兵衛っ！」

慌てて止めようとする小一郎を尻目に、権兵衛は良晴の手を引いて庭先を横切つて行った。

「おい、本当に大丈夫なのか？先客がいるって小一郎が言つてたけど。」

「大丈夫ですって。門の所でチラリと見ましたけど、来てたのは商家の女中の身なりの女でした。多分どこぞ商人の使いでしょう。相良様に比べれば大した相手では御座いません。」

自信満々に言いながら、権兵衛は秀吉が客の対応をしているという奥の座敷の前に辿り着いた。

一旦息を整えるため、権兵衛は小さく咳払いをする。

「ゴホンッ。藤吉郎様、相良良晴様がいらっしやいました。部屋に入っても良いでしょうか？」

少々抑え気味ではあるが、障子越しにも十分聞こえる音量で権兵衛が尋ねる。しかし、秀吉の返事は返って来ない。

「あれ、おかしいな？藤吉郎様、いらっしやいますか？！」

先ほどより音量を上げて再度問い掛けるが、返事は相変わらず返って来ない。

「おい、権兵衛。本当に秀吉さんはここに居んのか？」

「は、はい。間違いありません。確かにここに……」

戸惑いながらも自信をもって権兵衛が答えると、部屋の中から『バシンッ』という叩き付けたかのような音、それに続いて『うくん、うくん』と言う秀吉の呻き声が聴こえてきた。

「な、なんだ!?中で何が起きてるんだっ!」

「はっ!もしかや先ほどの女、刺客じゃったか!?いかんっ、藤吉郎様いまお助けにっ!」

そう言って権兵衛は障子を勢いよく開いた。

その先で良晴達が見たものは……

全裸で仰向けになった秀吉と、同じく全裸となって秀吉の腰の上で膝立ちになり、豊満な尻を「パンツ、パンツ」と一心不乱に打ち付ける美女であった。

「……………は?」

その様子に呆然となる良晴と権兵衛。一方で秀吉は、前屈みになった女の巨乳に顔を埋め「うくん」と声を漏らしていた。

「あく気持ちええのう。もう我慢出来んわい!」

「藤吉郎様っ!私も、もうっ!」

「おうっ!では共に行くぞっ!うっ!!」

ぶるりっ、と秀吉が腰を震わすと、女も体を弓なりにしならせ嬌声

を上げる。

女は糸が切れた人形のように秀吉にもたれ掛かると、秀吉は事後の余韻を楽しむように女の尻に手を這わせた。

だが、程なく良晴達の視線に気付いたのか、開けっ放しになった障子の方に顔を向ける。

「ん？何見とるんじゃ御主ら？」

「お、お邪魔しましたあああ!!!」

覗き魔二人は慌てて障子を閉めた。

「本当に申し訳ありませんでしたっ!!」

仙石秀久、本日二度目の土下座である。その正面では秀吉が気だるげに煙管を吹かしていた。

場所は奥座敷から移し、本来来客に対応する居間である。

「まったく御主は！そそっかしいたらありやせんわ！」

そう目を怒らせ叱責するのは秀長である。良晴はその横で気まぐげに視線を迷わせていた。

というのも良晴の目の前には、秀吉の隣に座り澄まし顔でお茶を啜る美女がいたからだ。先ほど秀吉の上で腰を振っていた女である。

「小竹、もうその辺でエエじやる。権兵衛、お前はもう少し考えてから行動せえ。」

「ははあ！承知致しました!!」

「良晴、うちの家来が迷惑かけたな。反省しとるようじゃし許しちくれ。」

「別に構わねえよ。て言うより、そっちの人は…」

「ん？ああ、雲雀といつてのう、前に美濃に滞在してた時に御主や喜太郎と遊里に行ったじやる。雲雀はそこで儂が鼻屑にしていた女じゃ。儂が引越してきたことをどこぞで聞いて、久しぶりに買ってはくれぬかと、わざわざ訪ねてきてくれたのう。早速、相手をして貰っ

たんじや。」

「初めまして相良様。雲雀です。お噂はかねがね。」

「あつ、俺の事知ってんだな。」

「はい、うちの店では有名ですよ。あれだけ鼻息を荒くしていたのに、本番前に萎びてしまつて。気の毒なほど気落ちしていたので、次に来られた時には精一杯御奉仕して本懐を遂げさせて差し上げようと店の者達も張り切っています。またいつでも来てください。」

「なんつう覚え方されてんだっ!! 恥ずかしくて二度と行けねえよっ!」

頭を抱えて絶叫する良晴に、秀吉は大口を開いてケラケラと笑い、雲雀も口元を隠して微笑を浮かべる。小一郎や権兵衛でさえ、客人に失礼が無いように堪えているのか、俯きながらも肩を震わせていた。「ていうか秀吉さん、寧々はどうしたんだよ? あんなどこ見られたらヤバいだろ。」

「大丈夫じゃ大丈夫! 寧々は半兵衛と連れ立って外に出ておる。夕方までは帰つてこん。」

「にしたつて: はあ、なんつうかここまで女好きだと逆に尊敬しちまうぜ。」

「ケケケツ。まあ、その話はエエとして、今日はいったい何用があつて来たんじや、良晴?」

「ああ、実はちよつと仕事の事で相談があるんだけど…」

そう言いつつも雲雀の方に視線を向ければ、事情を察したのかそそくさと帰り支度を始める。

「それでは木下様、私はこれで。また御贔屓に。」

「おうっ! 権兵衛、裏口に案内しちやってくれ。」

「かしこまりました。」

そう言うのと権兵衛は雲雀を連れ立って裏口に向かい、部屋には良晴、秀吉、小一郎の三人が残された。

秀吉は煙管を大きく吸うと、口から白煙を出し良晴を見据えた。そして、その表情を一瞬にして戦国武将のものに変える。

「仕事つちゆうと、なんぞ信奈様から厄介な御役目でも仰せつかった

か？」

「っ!? ああ。ただ、厄介というよりは、いまいち腑に落ちない所があるんだ。」

良晴はこれまでの経緯について二人に話した。信奈から滝川一益と共に伊勢攻略の総仕上げをせよと命じられたこと。一益からは、何もなくて良い、と言われたこと。

良晴が話し終えると、秀吉は煙管から灰を落とし、その手を顎に当てた。

「なるほどのう。大体の事情は分かった。小竹、御主はどう思う？」

「はっ、姫様が何を思って相良様に滝川様への助力を命じたかは分かりかねます。しかし、滝川様が『何もしなくて良い』といった理由はおおよそ…」

「えっ、まじで!? 小一郎は分かるのか?」

驚いた様子で良晴が尋ねれば、小一郎は細目を僅かに見開いた。

「恐らく滝川様は、相良様を警戒しているのです。」

「一益ちゃんが俺を警戒? なんでだよ!」

「滝川様は織田家では比較的新参の方です。そして、伊勢攻略は滝川様にとって織田家の一員になって初めての大事な仕事。ここでの成果が今後の滝川様の織田家での立場を左右すると言っても過言ではなく、まさに人生を掛けた一大事なんです。」

「じゃあつまり、一益ちゃんは自分の仕事が俺のせいで台無しにされなくなかったから、俺に何もするなって言っただけで事か?」

「いや、むしろ相良様のお陰で上手くいく事を嫌ったのでしよう。」

「はあ? どう言う事だよ!」

「考えてもみて下さい。相良様も滝川様と同じ新参。しかも直近で大きな手柄を上げ、家中でも特に注目を浴びるお方。滝川様から見れば、出世を争う競争相手なんです。そんな御方が、完遂間近の仕事に出張ってくる。手柄を取られるのでは、と警戒するのも無理ないかと。」

小一郎の説明を受け、良晴の脳裏に謁見の間での一益の様子が思い起こされた。

主命を告げられた時、一益は明らかに動揺していた。

「そうか。俺が伊勢攻略に貢献したら、これまで一益ちゃんが苦勞してやってきた事も俺の手柄にされてしまう。一益ちゃんはそう考えただんだな。」

「そんな所じやろ。なんせ御主は、主君を呼び捨てにしても許される、信奈様の覚え目出度き男じや。無理が道理となる理由は、傍から見ても大いに有る。」

秀吉の言葉に、良晴は複雑な表情を浮かべる。

意中の異性から特別扱いされるのは決して気分の悪いことでは無い。しかしながら、それによって周囲にやっかむ者が増える事は、あまり望ましくは無い。

良晴とて、人を妬み僻む感情は大いに理解できる。しかし、自分がその対象になる事には慣れておらず、何とも言い難い心苦しさを覚えていた。

「なんつうか、めんどくさい事に成っちゃったなあ。ていうか、こんな事になるなら信奈も最初から最後まで一益ちゃんに任せとけば良かったじゃねえか!」

「まさにそこよ! 滝川殿一人に任せていても、伊勢攻略は不足なく行えた筈。にも拘らず、信奈様は最終段階になって御主に滝川殿の手伝いを命じた。その意は何と考える?」

「:俺に手柄を上げさせたかったから?」

「果たして本当にそうか? 信奈様はそれほどまでに御主に優しいか?」

それは絶対に違う、と良晴は即答した。信奈は割と身内には甘く、寵愛する部下を臍脛する傾向にはあれど、だからと言って楽に手柄を与えようとするようなことは絶対にしない。むしろ気に入っている者ほど厄介な仕事を割り振るのが、武将としての信奈の質であった。「気まぐれに俺に仕事を与えようとしている感じでもなかった。つまり、あいつには何か考えがあって俺に一益ちゃんの手伝いをさせようとしてるって事か。」

「間違いない。信奈様は無意味な差配は行わぬ。恐らく信奈様は、御

主に…」

「し、失礼しますっ！」

秀吉が何か言いかけた時、権兵衛が部屋に飛び込んできた。

「なんじや権兵衛、騒々しいぞ。」

「も、申し訳ありません！しかし、火急の要件が…」

「火急の要件じゃと？」

「寧々さまが、帰ってこられました。」

その瞬間、秀吉の顔が凍り付いた。一気に部屋の緊張感が高まり、さながら戦前の陣中の空気感が周囲を包み込んだ。

「権兵衛、雲雀が家から出ていくところは見られておらぬよな？」

「は、はい！そこは大丈夫かと。」

「よし！小竹、布団の片づけは？」

「抜かり無くつ。人目に付かぬところに押し込み、部屋の掃除も済ませています。」

「でかしたっ！というわけで、今日は良晴以外に誰も来ておらぬ。そういう事でよろしく頼むぞ、良晴！」

「お、おう。」

その場の空気に流され、良晴も思わず頷いてしまう。

それから程なくして、居間の襖が開かれ、顔を赤くしてご機嫌な様子の寧々が入ってきた。

「ただいま帰ったわよお前様。ちよっとお酒飲んできちやったく。」

「おお、よう帰って来た寧々！しかし、今日はもう少し遅く帰る予定ではなかったか？」

「す、すみません。寧々さまが私の体調を気遣って下さってこんなに早く…」

「気にしなくて良いわよ半兵衛ちゃん。あらっ、相良様来てたのっ!？」

「あ、ああ。お邪魔してます。」

「もう、そんな畏まらなくても良いですよ！あつ、そうだ、権兵衛。これ、お土産の御饅頭。余分に買ってきたから相良様にも出して差し上げて。」

「は、ははあ！承知致しました！」

「それじゃあ、私と半兵衛ちゃんは着替えて来ますので、ちよつと失礼します。」

上機嫌にそう言うと、寧々は半兵衛を伴って奥へと下がった。それを見送ると、秀吉達はホツと胸を撫で下ろす。

「ふう、何とかなったのう。で、なんじやったか？ああ、何故信奈様は良晴に滝川殿の手伝いを命じたかじゃが、儂が思うに信奈様は御主だからこそ、滝川殿の手伝いを命じたのじゃろう。」

「俺だからこそ一益ちゃんの手伝いを命じた？つまり、俺にしか出来ない役割があるから、仕事を振ったって訳か？」

「まさにそれよ。信奈様は単なる手伝い以上の事を御主に期待しておる。これ以上の事を信奈様が口にしていないのなら、儂からは言わん方がエエじやろ。何をすべきかは己で考えてみるんじやな。」

秀吉は全てを答えはしない。それでも良晴には、目の前に一筋の光明が見えたように感じられた。

「ありがとよ、秀吉さん。なんとなく、何をすべきか分かった気がする。」

「カカカツ、それは僥倖！まあ、あまり焦らず、己の思うままに遣つてみるとエエ。」

そうしていると、権兵衛が良晴の前に饅頭が置いた。

良晴がそれに手に取り、軽く頭を下げて口に運ぼうとした時、襖が開かれ軽装に着替えた寧々が現れた。

「すいませんね、相良様。ロクなもてなしも出来ませんで。」

「いやいや十分だつて。あつ、饅頭頂くぜ。」

「はい、どうぞ召し上がれ。ところで相良様、今日は御一人で？」

「え？まあ、そうだけど。」

「…うちに来られた時、女の人など来ていませんでしたか？」

「「「っ!?!」」」

空気が凍った。身を凍えさせる冷気が寧々を中心に広がり、なのにダラダラと汗が流れる感覚に男衆は襲われる。

「ど、ど、どうだったかなあ?!?俺は何も見てなかったけど。」

「そ、そ、そうじゃとも！何を可笑しな事を言つとるんじや寧々っ!!」

「…………裏口に続く廊下に、見慣れぬ髪の毛が落ちていましたよ。ほれ、こんなに長い。間違い無く女の髪ですけど、私や半兵衛の物とは違いますねえ。」

寧々が摘まんで見せたのは、やや赤みがかった長い髪の毛。雲雀の頭髮と同じ色をしていた。

「お、おう。実はさっき庭先から赤毛の猫が入って来てのう。多分そいつの毛ではないか？」

秀吉は何とか誤魔化そうと適当な嘘を吐く。

しかし、寧々の追及の手は緩まない。

「あとそれと奥座敷に行ったんですけど、妙に甘ったるい匂いがするんです。多分白粉の匂いだと思いますけど、私は最近使ってませんよ。」

「ハ、ハハハ、にゃんかの勘違いじゃにゃーか？」

寧々の追及に動揺を隠せず、にゃんこ言葉を口にする秀吉。それでもまだ、決定的な証拠が無いのでシラを切ろうとしている。

良晴達は居心地の悪さから体を小さくし、視線を下に向けていた。

「あら？お前様、煙管を吸われたのですか？」

「お、おう。ちいと吸いたくなってな。」

寧々が秀吉の膝元に置かれた煙管と吸殻に気付いて問い掛ければ、秀吉も戸惑いながらも答える。

すると、寧々は目元の笑みを濃くする。

「へえ、そうですね。そう言えば、お前様はある事をするって決まって煙管を吹かしますねえ。まさか、私がない間にしちゃったんですか？」

「わ、儂が何をしたって言うんじや？」

「ホホホ。おなごの口から言わせますか？」

途端に笑みを消し、寧々の顔は能面のような無表情になった。心なしか、その背後には煉獄を思わせる真っ赤な炎が見えるようであった。

「あつ、なんかちよつと腹痛くなってきたからもう帰るわ。うん、秀吉さん、今日はありがとな！それじゃ、またっ！」

「あつ、良晴待てっ!!」

秀吉が引き留めようと声を上げるが、良晴は聞こえなかつた振りをして饅頭を皿に戻すと、そそくさと玄関に向かう。

「兄者、私は倉庫の整理が終わっておりませぬのでこれで。」

「あつ、儂もそろそろ槍の鍛練をしなければ!」

小一郎と権兵衛も、最早これまでとばかりに逃げの一手を打つ。残されたのは秀吉ただ一人、絶望的な状況に顔を青くするが、視界の端に救いの光明を見つけた。

「は、半兵衛っ! 何とかしちやくれんか?」

「え、ええと…」

全く予想外の形で主君から助けを求められた半兵衛は、チラリと寧々に視線を向ける。それに対して寧々がニコリと笑みを作ると、半兵衛は意を決したように口を開いた。

「や、やっぱり、悪い事をしたと思ったのなら、素直に謝った方が良いと思いますう。」

「……………じゃよなあ。」

希代の軍師の提案に、秀吉の頭は力無く垂れ落ちた。

今宵はこれまでに致しとう御座ります。

伊勢の攻略法

「伊勢の大名についてですか？」

「うん。ちよっと、地蔵のおっちゃんに教えて欲しくてさ。」

良晴は秀吉の屋敷を訪ねた翌日、今度は村井貞勝の元を訪れていた。

貞勝は織田家が本拠地としての機能を清洲城から岐阜城へと移管している間、清洲城に残って引き継ぎの監督をしていた。

そして岐阜城への本拠地移転が完全に行われたのを機に、人事異動で岐阜に転居してきていた。

突然の良晴からの申し出に貞勝は面食らった様子であったが、やがて納得したように頷いた。

「そう言えば相良殿は、姫様に滝川殿の手伝いを命じられたのでしたな。」

「ああ、他国の事なら外交を担当してた地蔵のおっちゃんが一番詳しいだろ？だから、伊勢の内情についても知ってるんじゃないかと思つて。」

「そういう事でしたら、滝川殿に直接お聞きした方が良いのでは？」

「いや、なんつうか、一益ちゃんには聞きづらくて…」

流石に一益に警戒されてる旨を伝えるのは憚られ、齒切れの悪い濁した言い方になってしまう。

だが、貞勝はその様子から事情を察し苦笑いを浮かべた。

「なるほど。分かりました、それでは私の知る限りの事を、相良殿にお教えいたしましょう。」

「おおっ、助かるぜー！ありがとなー！地蔵のおっちゃん。」

貞勝はお茶と地図を用意すると、腰を据えて解説を始めた。

「まず最初にお聞きします。相良殿は伊勢を治める大名を御存じですか？..」

「ええと、確か北畠って大名じゃなかったっけ？あんまり目立つ大名じゃないからよく知らないけど。」

良晴の歴史ゲーム知識で知る伊勢北畠家といえ、織田家と隣接す

るが特に優秀な武将もいない為、大抵は桶狭間でイベント後にサツクリと織田家に滅ぼされる弱小大名という印象が強かった。

「そもそも伊勢北畠家の興りは鎌倉幕府末期まで遡ります。その頃より幕府は勿論、御所とも深い関係を築き、伊勢国司を二百五十年に渡って務めるなど、家格で言えば織田家を遥かに凌ぎ、積み重ねた歴史の重みは日ノ本でも屈指の名門です。」

「でもいくら名門でも、今は衰退しちまったんだろ。」

「それがそうとも言えないのです。応仁の乱以降、幕府の権威低下に伴い北畠家も一時衰退の一途を辿りました。しかし、先代当主北畠晴具は文武に優れた武将と知られ、伊勢の国人衆をほぼ掌握する一方で、御所との文化交流を活発に行い従四位下・参議の官位を授与するに至ったのです。」

「へえー、先代は優秀だったんだな。じゃ、いまの当主は？」

「現北畠家当主は北畠晴具の息子の具教です。そしてこの御方は、先代を超える傑物と言われています。先代から家督を相続後、具教は先代の頃からの御所との協調路線を継続し、当主となった一年後には二十五歳の若さにして父を超える従三位・権中納言の官位を授かります。更には長年対立してきた北伊勢の長野氏との抗争を、自身の親族を養子として送り込むことで終結させ、実質的に従属化させる事に成功しています。」

「…確かに、かなりのやり手って感じだな。他に何か具教の特徴みたいなところってある？」

「そうですね。先代に似て、文武に優れた方と言えます。歌や茶、それに蹴鞠の催し事で何度も御所に招かれていると聞きます。また、剣術では剣豪と名高き塚原卜伝殿に師事し、秘技を伝授されたとも。そして何より、それらの実績に裏打ちされた気高さをお持ちの御方ですよ。」

「気高さ？」

「はい。家格、官位、芸事、武威、あらゆる方面で高い素養を示し、結果を残された御方です。当然ながら、それに裏打ちされた相応の誇りや自信をお持ちでしょう。彼らから見れば、織田家など運良く時世の

波に乗れただけの成り上がり者でしかないでしょう。」

「なるほどな。てか、そんな優秀な奴に謀略戦を仕掛けて、ほぼほぼ調略を済ませちゃった一益ちゃんって、実は滅茶苦茶すげえ事やってんじゃないかね?」

「ええ。何でも元々伊勢方面には伝手があつたそうですが、それを加味しても途轍もない功績です。特に滝川殿に関しては、姫様から大きな支援を受けられない中、ほとんど独力で伊勢勢力を切り崩したのですから。それを完遂するまでの労力を考えると、頭の下がる思いです。」

そう語る貞勝の顔からは、滝川一益という武将に対しての確かな敬意が感じられた。

次に良晴が向かったのは、清州商人の店である。そこは嘗て、信奈の命で兵糧を集めた時に交易用の品を何かと融通してくれた店でもあつた。

「はあ、伊勢についてですか?」

「ああ、ちよつと情報を仕入れたくてな。何か耳寄りな情報を知らないか?」

馴染みの番頭にそう尋ねると、相手は顔を顰め腕組みをする。

「ううむ、知らない事は無いですがねえ。情報というのは我ら商人の武器です。いくら相良様とはいえ、そう簡単に教えるというのも…」
「そこを何とか頼むつて!織田が伊勢を勢力圏に置く事が出来たら、お前らだつてより手広く商売が出来るように成るだろ。ほらっ、この通り!」

手を合わせて頭を下げる良晴を見ながら、番頭は頭の中で良晴に情報を渡す事による損得を計算する。やがて、口元をフツと緩めた。

「分かりました。織田様には昔から良くして頂いていますし、今回は相良様に投資させて戴きます。」

「おおっ！ありがとな。」

「いえいえ此方こそ。さて、伊勢の方でしたな。実を言いますと、我ら清州商人はそちらの方にはあまり手が延ばせていないのですよ。」

「それってやっぱり、北畠家の勢力下だからか？」

「それもありますよ、より厄介なのが志摩の湾で活動している海賊なんです。」

「海賊だって!？」

「ええ。伊勢の南、志摩の地では熊野から移り住んだ九鬼氏が勢力を拡大しつつありました。しかし、九鬼氏の躍進に警戒感を抱いた北畠様は他の志摩の豪族たちを取り纏め、九鬼氏を攻めてその勢力を壊滅させます。ですが九鬼氏もタダでは転ばず、生き残った一族は伊勢湾に点在する島を拠点に北畠家へ抵抗活動を行い、そのうちの一つである九鬼嘉隆の軍勢は『女海賊団』を結成して北畠家の勢力下で暴れ回っているのです。」

「お、女海賊団!?なんだその妙に響きがエロい集団は!?!もしかして、船員は全員女なのか？」

「ええ、その通りです。ただ、興奮されるのは良いですが、商人にとっては厄介極まりない輩です。商品を運んでいる時に捕まろうものなら、やれ積み荷を寄越せ、食料を寄越せ、男を寄越せ、さもなければ船を沈めるぞなどと。なので最近、海路で伊勢に商売に行く商人もめっきり減ったんですよ。一応は北畠家の領内の勢力なので、織田様を御頼りする訳にもいきませぬからなあ。」

そう言つて溜息を吐くと、番頭は期待を込めた視線を良晴に向ける。

「もし、伊勢を攻め獲る機会があれば、件の海賊共の処置を何卒よろしくお願いいたします。その時は我々も協力しますゆえ。」

商人から粗方情報を得ると、良晴は近くの茶屋で一息ついていた。

看板娘が運んできた団子に舌鼓を打ち、これまでに集めた情報を紙に纏めていく。

「うーん、だいたい伊勢の情勢については見えてきたな。それと、現北畠家当主の北畠具教…これが中々の難物そうなのがなあ…多分一益ちゃんはこいつを…」

悩ましげに眉を寄せつつ、空いた皿に団子の串を置く。

良晴は決して頭が回る方では無い。

だがそれでも、これまで集めた情報を繋ぎ合わせ、歴史知識を必死に絞り出し、そこから今後の展開を考えに考え抜いた結果、信奈が何をさせようとしているのか何となく分かり始めていた。

しかしそれを実行するために必要なピースが、今一つ揃いきつてなかった。

いったいどうすれば良いってんだよ。

胸中でその様に愚痴っていると、良晴の前で足を止める者達があった。

「あつ、よしさるだつ！」

「ほんとだつ！よしさるかえってきたの？」

「ん？ああ、お前達か。久しぶりだな。元気にしてたか？」

現れたのは、うごぎ長屋の子供達である。

長屋に住む足軽の子弟である彼らにとつて、良晴は良い遊び仲間であった。

ノリが良く、子供であろうとキチンと目線を合わせ、根が善良で明るい良晴は、子供達から大変人気があった。

岐阜に移ってから久しく会う機会は無かったが、子供達は以前と変わらず笑顔で良晴に纏わり付いた。

「よしさるっ、どっじぼおるしようぜー！」

「えーっ！さんかくべえすのほうがいいよー！」

「よしさるっ！とるのはなしのつづきかせて！あと、まじよのたぐはいびんのはなしもっ！」

良晴が子供達にウケた理由の一つに、未来の遊びや物語を教えたものもある。

現代の子供達を夢中にさせる娯楽は、この時代でも大いに通用した。

「はいはい、ちよつと待てよ。順番に遊んでやるから、落ち…着いて…」

その時、良晴の脳裏に閃くものがあつた。

もしこの思惑が上手くいけば、伊勢の情勢は大いに好転する。

考えれば考えるほどメリツトのある作戦に、良晴の口元が大きく吊り上げる。

「どうしたの、よしやるっ!」

「ありがとな、お前ら。良い考えが思い付いたぜっ!」

不思議そうに見上げてくる子供達に、良晴は力強く言い放つた。

それから更に数日の間、良晴は思い付きを実現させるべく案分の作成に没頭した。

何度も何度も試行錯誤し、仮案が出来ると貞勝に確認してもらい、そしてそれをまた修正する。

寝る間も惜しんでの作業ではあつたが、良晴は熱に浮かされたかのような高揚感すら感じながら仕事に向き合つた。

そして遂に、草案を完成させると息つく暇も無く伊勢へと向かつた。

「どうしたのじゃ、よっしー?急に姫に会いたいなどと。」

「よう、一益ちゃん。どうしても、会つて話さなきゃいけない事があるんだ。」

二人が相對するのは船の一室。

その船は、志摩を中心に活動する九鬼水軍の物である。

「しかし驚いたな。伊勢で海賊団が暴れ回つてるのは聞いてたけど、まさか一益ちゃんの協力者に成つてたなんて。」

「くすくす。九鬼一族は北畠家に恨みがあるからのう。敵の敵は味方じゃ。それに、海の上ならば暗殺の危険性も少ない。なので、九鬼水軍の船を拠点として利用させてもらつてるのじゃ。のう、くつきー

？」

「おうよっ！北畠の野郎は九鬼水軍にとって憎き仇！しかもこんな可愛い姫様に『いっしょにやる！』なんて誘われたら、断れるわけないだろっ！」

そういつて豊かな胸を突き出すのは、『九鬼水軍女海賊団』の船長である九鬼嘉隆である。

こんがりと健康的に日に焼けた肌と、それに纏う南国のビーチを連想させる色鮮やかなビキニは、間違っても戦国時代にはとても似つかわしく無い代物であるが、何故か誰一人として不思議に思っている様子は無い。

なお、良晴は鼻の下を伸ばしてデレデレと嘉隆の胸部を眺めている。

「くすくす。どうやらよっしーはくつきーに欲情しておるようじゃのう。いっその事よっしーに貰われたらどうじゃ？」

「冗談はよして下さい姫様。あたしにだって選ぶ権利があります。婿に取るならこんな助平な猿顔の男じゃなくて、中性的で色白で小柄な年下の男の子が良いです！」

「……いや、そうは言うてもくつきーはもう二十七歳じゃろ？しかもこれまでまともに男と付き合った事が無いのじゃし、いい加減夢を見るのは諦めたほうが良いぞ。」

「年の事は言わないで下さい！」

因みに戦国時代の女性の平均結婚年齢は十五歳前後。二十七歳で孫を持つのも珍しい事ではなく、むしろ二十七歳まで処女の方が圧倒的にヤバいと見られる御時世である。九鬼嘉隆、色々とギリギリではあるが、それでも夢を諦めきれない哀れな婚活海賊である。

「して、よっしー、話とは何ぞな？」

「…一益ちゃん、伊勢の調略の事なんだけど、少し気になる事があるんだ。」

「……ほう。」

良晴の言葉に一益は笑みを浮かべる。しかし、目だけは笑っていない。

「確かよっしーには、伊勢の豪族たちへの調略は殆ど終わっているから、何も心配ないと伝えたはずじゃがのう。」

「…あれから俺なりに調べてみたんだ。一益ちゃん、確か一益ちゃんの調略は上手くいってる。きつと今すぐにも北畠家に降伏を促したら、余程馬鹿でない限り戦力差を正しく理解して降伏するだろうさ。」

「くすくす。ならば何も問題ないのでは?」

「問題なのは降伏した後さ。北畠家当主、北畠具教は優秀な大名だ。破れかぶれになって戦をするなんて馬鹿な真似はしない。だけど、具教は気高い男だ。一旦は降伏はするだろうが、そのまま大人しくしているような奴じゃない。」

伊勢の名門としての看板、それに名前負けしない実績と、そこに裏打ちされた矜持。一度や二度の敗北で表舞台から降りようとする者では、決して手に入れない物だ。

況してや、北畠家は織田家に実戦で負けたわけでは無い。

剣術家としても一流の具教にとって、謀略戦のみでの敗北は、決して認められるものでは無いだろう。

「だから必ず、北畠具教は反旗を翻す。織田家に従属したように装いながら、自勢力を立て直し、隙を見て再独立を企む筈さ。今のままじゃ、伊勢の支配は不十分なんだ。」

「……なるほどのう。思っていたよりも、ほんの少し頭が回る様なので感心したぞ、よっしー。」

「ありがとよ。でだけど、具教に反乱させないためにも…」

「だけどやはり余計な心配じゃ。具教は殺す予定じゃからのう。」

「ごく自然に、まるで休日の予定でも告げるかのように、一益は具教の殺害を宣言する。」

その視線に冗談の色は一切存在しない。

「姫が具教の反発を予想していないと思うたか、よっしー? 当然予想しておるわ。むしろ最初から反乱を込みで此度の策は計画しているのじゃ。」

「…詳しく教えてくれないか?」

「くすくす。良いとも。姫は伊勢の国盗りをするうえで、あえて調略のみで具教を追い詰めた。御所の要職に就きながら根っ子は武人の具教にとつて、決して認められぬ負け方じゃ。ましてや相手は尾張の成り上がり者。頭を垂れ続けるなど奴には出来ん。いずれ国人衆に決起を促し、謀反を起こすじやろう。姫達はその時を待てば良い。反乱の証拠を掴み、それを大義とし、具教と奴に与した者どもを皆殺しにする。そうして開いた席にのぶなちゃん親族を座らせれば、伊勢の国盗りは完了じゃ。」

「……………」

「初めに言ったじやろ、よっしー。伊勢の調略は既に完了しておると。もはや他に策を組み込む余地は無い。じゃからよっしーは、余計なこととはせず、黙って見ておくがいい。」

優しい気に、されどどこか嘲るような声色で一益は良晴に囁く。

それに一瞬良晴は呼吸を忘れるが、我に返ると目を瞑り、静かに深呼吸をする。

そうして心を落ち着けると、目を開いて言った。

「何だやっばそうなのか。なんとなく、そうなんじゃないかと思っただけだよ。」

あっけからんと、事無げもなく明るく言い放つ。

これには一益や嘉隆も呆気に取られてしまう。

「…なんじゃよっしー、姫が具教を殺そうとするのを予想していたというのか?」

「まあな。俺でも気づくような反乱の可能性を、一益ちゃんが気付かない訳が無いと思っただけだから。そうすると、手っ取り早く伊勢を安定させるには旧支配者層を殺してしまうのが一番だしな。だけど、その上で言わせてもらおうぜ。」

良晴は足を組むと背筋を伸ばして胸を張る。頭に思い描くのは目標とする戦国武将。自信満々に『心配御無用!』と告げるその姿であった。

「一益ちゃんの策、今のままだと精々及第点だけ。万千代風に採点するなら、六十点ってとこだな。」

その瞬間、船内から音が消えた。
だがすぐに嘉隆の怒号が響いた。

「おいコラ助平猿っ！姫様の策が六十点だと？ふざけるのも大概にしろっ！」

「ふざけてなんかいないぜ。どう大きく見積もっても六十点が限界だ。きつと、信奈も同意見だろうな。」

「このっ！」

「待つんじゃない、くつきー！」

刀に手を伸ばそうとした嘉隆を止めたのは一益である。

だがその額には青筋が浮かび、口元はヒクヒクと痙攣しており、怒りの色を隠せずにいる。

一益は殺意さえ籠った視線で良晴を見据える。

「…教えてはくれませぬか？何を以て姫の策が及第点というのか。キチンとした根拠があつて言ってるのであろうなあ。相良良晴殿お？」

適当なこと抜かしたらマジで殺すぞという雰囲気さえ醸し出しながら問い掛けてくる一益に、良晴も流石に背中に汗を流す。だが腹に力を込めると、しっかりと相手の目を正面から見据えた。

「最初に行つとくけど、俺は一益ちゃんの手が間違いとは思っていない。手っ取り早く伊勢を治めるなら上策だとさえ思う。だけど、それじゃあダメなんだ。」

「…何がダメだというのじゃ？」

「…勿体無いんだよ。」

「勿体無い？」

「ああ、こんなところで北畠具教を殺すなんて、勿体無いに決まってるだろ！」

「な、なんじゃと!？」

全く持つて予想外の答えに、一益の目が点となる。嘉隆も同様だ。開いた口が塞がらないでいる。

「だってそうだろ！御所とも繋がりの深い伊勢を長年に渡って治め続けた名門！しかも本人はガチの剣豪で、公家からの信頼も篤い。これから織田家が中央に打って出ようって時に、喉から手が出るほど欲し

い人材だぜ！殺すなんて勿体ない！」

熱の籠った声で強弁する良晴。

だがそれを聞いてるうちに一益は落ち着きを取り戻し、手を上げて良晴を制する。

「何を言うかと思えば。確かに具教は有能な人材じゃ。織田家の傘下に組み込む事が出来れば、のぶなちゃんの助けと成ろう。だがそれは無理じゃ。さつきよっしーも言ったじやろ。具教は気高い男。容易に織田家の風下に立つ訳が無い。」

「諦めるのは早いと思うぜ。信奈も言ってたじやねえか。北畠家を屈服させろって。あれはつまり、北畠家を滅亡させるんじゃないかと、従属させるって意味なんじゃないか？」

「確かにそうかもしれないが……やはり無理じゃ。具教が織田家に臣従するとは思えん。」

家格、剣術、文化芸能。あらゆる分野で具教は当代きつての人物である。その自負がある限り、具教が心から織田に降る事は無いと、一益には思えた。

「確かに具教は凄い奴かもしれない。けどな、具教が誇りとしているものの内で一つでも上回る事が出来れば、奴を屈服させることが出来ると思えないか？」

人は自分が得意とする事で自分より優れた結果を残す者に尊敬の念を抱く。そしてそれは、気高くあろうとする者ほど強い傾向にある。

具教が織田家に反感を持つのは搦め手により自身の強みを発揮できなかつた為。織田家が真の意味で強者であると認められなかつた為である。

「だったら認めさせてやればいいのさ。織田家には北畠家を上回るものが有るって事を。北畠家の上に立つ者として相応しい存在であるってことをっ！そうして北畠を味方にするんだ！」

敵であったものを味方にする。それは一益の中から抜け落ちていた考えであった。

それを良晴は簡単に導きだし、敵を滅ぼす事しか考えてなかつた一

益の前で示して見せた。薄暗い船内に光が差したかのように錯覚した。

「…なあ、一益ちゃん、知ってるか？信奈って、笑い転げる事があるんだぜ。」

「の、のぶなちゃんが笑い転げるじゃと!?そんな、信じられぬ!」

「それが本当なんだって。あいつはな、自分が想像していたよりも上に行く結果を家来が出した時、声を上げて笑うんだ。俺は一度見た事があるぜ。」

良晴は秀吉が墨俣城について信奈に報告した時の事を思い出しながら話す。

あの時良晴は、信奈の笑い声に何一つ自分が関わっていない事を悔しく思い、唇を噛み締める事しか出来なかった。

いつか信奈を笑わせてやりたい。それが良晴の目標となった。

「一益ちゃん、どうせやるんだったら手っ取り早く済ませられる策じゃなくて、信奈を爆笑させる策をやってみないか。きっと、面白い事が起こるはずだぜ!」

「……………勝算はあるのじゃな?」

真剣実を帯びた視線で問い掛ける一益に、良晴は日輪を思わせる笑顔で答えた。

「もちろんさっ!そのために俺は来たんだ!」

そう言って良晴は懐から書状を取り出した。

その表紙にはこう書かれていた。

『伊勢志摩大文化祭 ? 計画書』

今宵はここまでに致しとう御座りまする。

伊勢志摩大文化祭

良晴と一益が会談をして早数週間、良晴は志摩南部、英慮湾を望みし横山の地へと来ていた。

周囲は草木の少ない開けた地となっており、作業員たちが汗を流して働いている。

そんな中であつて、良晴は九鬼嘉隆と並んで高台から海を見下ろしていた。

「すつげえ景色だな。こんな風景見たこと無いぜ。」

「だろ？こんなに入り組んだ湾は早々無い。あたしらにとっての最高の隠れ家さ。」

感嘆の言葉を漏らす良晴に、嘉隆が自慢げに笑みを浮かべた。

大小様々な島々と、複雑に海岸線が入り組んだりアス式海岸が織りなす英慮湾の情景は、古くから多くの人々を引き付けてきた。

特に横山から見下ろす景色は現代でも絶景観光地として有名であり、宮城の松島以上と讃えられることもある。

「うん、海風に湿り気が無いし波が穏やかだ。明日は晴れるだろうよ。」

「おおっ！そりやよかつた。ここまで準備をして雨でおじやんなんて勘弁だからな。嘉隆もありがとな。ここまで手伝ってくれて。」

「いいって事よ。あたしは姫様の為に遣っただけだしな。正直言うと北畠の奴らをもてなすつてのには、複雑な気持ちだがな。」

嘉隆の父は嘉隆が元服する前に北畠家と戦い討死している。即ち、嘉隆にとって北畠具教は肉親の仇に当たるのだ。

「…やっぱり恨みは捨てきれないか？」

「…そうだな。わざわざ捨てに行くものでもないと思うしな。あたしらだって北畠の一族や家臣を何人も殺してきた。お互い恨み恨まれの関係だ。それを腹に収めて手を結ぶことにも意味はあると思ってる。織田と松平も同じだろ？」

今でこそ同盟を結んだ関係であるが、尾張の織田家と三河の松平家は長年に渡る宿敵同士であった。

だが現松平家当主の元康は、父祖の仇の娘である信奈に恨みを持ちながらもその手を握った。全ては三河に生きる民の為であり、戦国武将として松平家を生き残らせるためであった。

「だったらあたしらだって同じ事が出来るさ。北畠家の人間は殺してやりたいほど憎いが、奴らを生かす事が姫や志摩の為になるなら喜んで抱擁を交わしてやるさ。それが、上に立つ者の役目ってやつだろ？」

「…そうだな。この土地の人達の為にも、絶対に明日は成功させてやろうぜ！」

「くすくす。何を二人で盛り上がっておるのやら。明日の主催はこの姫ぞ。」

良晴たちの前に現れたのは一益である。

今回一益は、この横山にて大規模な茶会を行うと伊勢中に布告し各豪族たちに対しても参加を促している。そしてその主賓となるのが、他ならぬ北畠具教だ。

敵方からの茶会の誘いに具教が乗ってこないのではという一抹の不安はあったが、具教は一益の申し出を快く了承した。

「まあ、開催地は名目上ははまだ北畠家の領地となっている志摩じゃ。無視すれば北畠家の影響力が最早志摩には届かぬと看做されるじやろうし、兵を率いて茶会を台無しにするというのは風流人の武人である具教には取りがたい。故に具教は姫らの誘いに乗り、それでもって自分の存在を誇示して豪族たちに釘を刺さんとするであろう。後の反逆への布石としてな。」

「ああ。だけどそんなことはさせねえ。信奈だって会談を通じてママシのおっさんに認められたんだ。明日必ず、具教をアツと言わせて見せようぜ。」

今回の茶会、『伊勢志摩大文化祭』の目的は具教を文化的要素で圧倒して織田への臣従を誓わせる事。その為に、ここ数週間良晴たちは寝る間も惜しんで準備に取り組んだ。

その成果が試される場を前に、良晴たちは文化祭の成功を強く心に誓ったのであった。

そして文化祭当日。会場となった横山は大変な人出となった。

招待された豪族だけではない。出店を出す商人や近隣の住民は勿論の事、都から戦火を逃れて避難してきた公家、伊勢神宮の神官たちや寺の坊主とその関係者、中には南蛮人の姿も見える。

これらは全て、一益が伊勢を調略する際に築いた交友関係を通して招いた者たちであった。

彼らは思い思いに出店を立ち寄り、時に設置された野点の茶席に座ってお茶を楽しんでいる。

そんな中、とある一団が会場に現れた事で周囲の注目が集まる。

護衛に誘導され先頭に立つのは、すらりと背の高い優男である。ゆったりとした公家風の礼服に身を包み、薄く顔に白粉を塗り、唇には鮮やかな朱を差している。

年齢はわからない。少年のあどけなさを残した容貌は二十代にも見えるし、武人らしく油断の無い冷徹な視線で周囲を見渡す様は歴戦の老武将にも見える。

その立ち振る舞いを優雅そのもの。まさしく京の貴公子とはかく有らんと示すようであり、会場にいる者の視線を独り占めした。

「国司殿。」

官職を呼ぶ声に男は振り向く。振り向いた先には一益と良晴、そして護衛の嘉隆がいた。

「…本日は御越しいただき誠に有り難う御座いますなのじゃ。祭りの主宰を務める、滝川一益じゃ。」

「…此方こそ、お招き頂き感謝申し上げます。伊勢国司の北畠具教です。」

穏やかだが張りのある声だった。

「…文化祭、でしたか？このような催しは歴史ある伊勢でも例が無く、滝川殿の発想には驚かされるばかりです。今日はじっくりと楽しませて頂きましょう。」

「くすくす、それは僥倖。姫達も国司殿に楽しんで頂けるように心を尽くしたのじゃ。きつと、国司殿も気に入ってくれる筈じゃ。」

一見すれば一益と具教の対面は友好的に見える。しかし、僅かな会話の中にも互いを値踏みするような牽制が込められ、改めて二人が伊勢を巡って覇を競う者同士である事を周囲は理解した。

形は違えど、今日の文化祭は紛れもなくある種の戦であった。

「父上、何やら良い匂いがしますっ！見てきても良いですか？」

すると突然、張り詰めた空気を弛緩させる気の抜けた声が聞こえてきた。

一瞬にして苦虫を噛み潰したような表情に変わった具教の後ろから現れたのは、丸々と太った色白な少年である。

「具房よ、我らはこれより滝川殿の歓待を受けるのだぞ。まずは其方を優先せよ。」

「でも父上、具房はお腹が空きました！匂いの元はあの浜焼屋みたいです。早く行かないと売り切れてしまうかもしれません！」

「具房よ……」

何とか穏やかな表情を維持しながらも、こめかみに青筋を立てながら具教は息子の方を向く。しかし悲しいかな、具房は口元から涎を垂らし出店を眺めるばかりで、父親の様子に気付く素振りはない。

「くすくす。安心して良いぞ具房殿よ。店主に言つて後から具房殿の分を持って来させよう。それに食べ物なら此方でも用意しておるのじゃ。浜焼より美味しいものもあるぞ。」

「本当ですか!?父上、早く行きましょう!!」

言うが早いか、具房は自分の従者を連れてズンズンと前を進んでいく。

口元を引き吊らせながらそれを見送った具教は、ぎこちない動きで一益の方に向き直り頭を下げた。

「…愚息が失礼致しました。後で私から強く言い含めておきます。」

「くすくす。気にせんでも良いぞ。愉快的倅殿じゃ。あれくらい良い反応をしてくれた方が、もてなし甲斐があると言うものじゃ。」

「……配慮、感謝いたします。」

僅かに表情を歪ませながらと、具教はもう一度頭を下げた。

一益が具教達を案内したのは、昨日良晴と嘉隆が話していた場所である。

英慮湾の絶景が一望出来る高台の上に、大きな赤い日傘が広げられ、その下には唐風の円卓と椅子が並べられていた。

「折角伊勢国司をもてなすのじゃから、普通の茶席を用意するのは詰まらんじやろ。それに我が主は国際派じや。今日は織田流のもてなしを楽しんでたもれ。」

そう言つて一益が椅子に座るように促すと、具教は大人しくそれに従う。

すると、具教の視界に英慮湾を背景とする木製の舞台が映った。

「滝川殿、あれはいつたい?」

「ああ、あれは後で催し事に使うのじや。何をするかは、その時までのお楽しみじや。」

ニヤリと含みのある笑みを浮かべる一益。その横から、皿を持った良晴が進み出ると、卓の上に大皿を置いた。

「茶席の前に懐石料理を用意したのじや。まずは此方を食べてください。」

現代において懐石料理と言うと、料亭などで食べる高級和食というイメージがあるが、元を正せば茶席の前に腹に入れる料理という意味がある。

日本の食文化には大陸から輸入された『医食同源』という考え方があがあるが、同じく薬として大陸から伝わったお茶には正にそれを体現する考え方があった。

具体的には、腹を空かせた状態でお茶を飲むのは体に悪いので、茶席の前には軽い食事を取るのが良いとするものである。

なので、この当時の茶席の前には小腹を満たす食事が振る舞われるのが常であり、それを坊主が腹を温める懐炉石になぞらえ『懐石料理』と呼ぶようになったと言われている。

「それじゃあ先ずは此方から。『かまぼこの刺身』だ。召し上がれ！」
そう良晴が料理の説明をすると、具教は「ほう」と息を漏らす。
白い練り物には切れ目が入られ、その間には緑色のペーストが挟まっていた。

「おおっ！蒲鉾ですよ父上っ！私の大好物ですっ！」
「ふむ、蒲鉾と言えば串に刺して焼いた輪つか状の物が一般的ですが、これは細長く整形したのを蒸したのですかな？そして、この間に挟まった緑の物は山葵ですか。刺身の薬味としては一般的ですが、蒲鉾を刺身にするとは。」

蒲鉾は平安時代の文献に既に存在しているが、この時代では大変な高級品であり、主に贈答品として製造されていた。

そしてこの時代の蒲鉾は、具教の言うような現代で云うところの竹輪に近い形をしており、現代に近い形の蒲鉾は一部の地域でのみ作られていた。

「しかも白身魚だけしか使って無い物は特上品。わざわざ調味料を付ける必要は無い気もしますが。」

「まあまあ、試しにコイツを着けて食べてみてくれよ。」

「これは…酢では無いようですが、いったい…」

良晴が黒っぽい液体が入った小皿を具教に差し出すと、具教は訝しげに小皿を取る。

「そいつは醤油モドキ。味噌を作る時に出来る上澄みの液体に、酒や味醂を入れて煮立て塩と砂糖で味を整えたんだ。」

史実において、醤油が作られるようになったのは1580年頃と言われ、それが庶民にまで広く使われるようになったのは江戸時代からとされている。

良晴は『現代の料理人が戦国時代にタイムスリップして信長の元で料理を作る』というドラマの中で、味噌から醤油を造る場面があったのを思い出し、試行錯誤の末に醤油モドキを完成させた。

味は現代の醤油には遠く及ばないが、風味や口当たりは良晴の知る物に近く、戦国の世では未知の味であると良晴は考えていた。

そんな良晴の期待とは裏腹に、具教は醤油モドキに蒲鉾を着け口に

入れると、少し落胆したかのように小さく息を漏らす。

「なるほど、『たまり』ですか。」

「た、たまり?」

「味噌の上澄みを酒で割って造る調味料、味噌の代用品ですが知らないのですか? まあ、以前味わったたまりに比べると手間はかかっているようですが、味は大して変わりませんね。」

醤油の原型の一つたされる『たまり』は、鎌倉時代には既に関東の庶民の間では広まっていたとされる。

ただし、あくまでも味噌の代用品であり、味噌を買えない庶民が使う物とされてきた。

尾張では調味料と言えば味噌が基本だったので良晴は知らなかったが、具教からすれば会談の席で自信満々に庶民の味を出されたようなもの。

現代で例えるなら、カップ麺のスープを出され「これに此方の高級フランスパンを着けて食べてみて下さい。美味しいですよ。」と言われたようなものだ。ガツカリするのも当然である。

初めて食べる醤油の味に具教が感激する事を想定していた良晴は、「こんなものか」とでも言うような具教の態度に愕然とする。

すると横から一益がちよいちよいと横腹を小突き、具教に聞こえないように小声で囁く。

「何をやっとするじゃ、よっしー! 具教の奴、明らかに姫等を見下げてるぞー!」

「く、くそー、醤油を出せば気に入ってくれると思っただけだなあ。考えが甘かった! あっ、でも具房の方はじっくりと味わってくれてるぞ。」

「(そんな事はどうでも良い! 次は必ず具教をアツと言わせる物を出すのじゃ!)」

「(お、おうっ!)」

尻を蹴飛ばされたように一旦その場から退散した良晴は、程なくして蓋が乗った茶碗を運んでくる。

面前に茶碗を置かれた具教が蓋を取ると、湯気と共に芳香が鼻を擽

る。

「これは、味噌汁ですか。」

茶碗の中身は赤みの濃い茶色の汁物。日本食の定番たる味噌汁であった。

具教は先ずは一口汁を啜った。するとピクリと眉を跳ねさせ、箸で汁の中から白い団子状の物体を掴み上げると口に運んだ。

「…なるほど、伊勢海老の真薯ですか。察するに、出汁は海老の殻から取り、真薯には海老味噌を練り込んでいるのですね。まさに一杯の茶碗に伊勢の海の恵みを丸ごと閉じ込めたような味噌汁です。」

肯定的に聞こえる具教の言葉に良晴と一益の表情が明るくなる。

しかし、具教自身は澄ました表情の下でこう思っていた。

ありきたりである、と。

正直なところを言うと、具教は此度の文化祭というものを少なからず期待していた。

伊勢では過去に前例のない催し事というのものもあるが、自家を追い詰めた織田家がどの程度に文化というものを解しているか、具教は気にしていた。

時に公家被れとも評されこともある具教であるが、その本質は根っからの武人である。

剣聖と称される塚原卜伝より免許皆伝を許され、戦場に立てば自ら刀を振る事も厭わない。並みの武士ではとても敵わない武威と気質を持ち、それでいて京の公家にも負けぬ文化的教養を持つ希代の才人、それが北畠具教という戦国武将である。

だからこそ、調略のみで北畠家を切り崩して見せた織田家の遣り方には憤怒する思いがあった。なぜ自分達と正面を切って戦える力を有しながら、搦め手に終始するのかと。

だがその一方で、戦国武将としての現実主義者の部分では、短期間

で伊勢の国人達の人心を掌握し、殆ど損害無しに国取りをして見せた手腕を称賛する気持ちもあった。

或いは、天下に飛び立ち名を全国に轟かせようとする織田家を相手取り、名門の存滅を掛けた一戦を以て幕府の名門たる北畠家の矜持を示したいとする、そんな乱世の武人らしい想いを具教は抱えていた。

だからこそ、文化祭は織田家の本質を計るに良い機会だった。

織田信奈が天下を望むのであれば、京の伏魔殿に潜みし魑魅魍魎共を相手にするのは必定。

木曾義仲、判官九郎義経、楠木正成。いずれも歴史に残る優れた武人であったが、最後は宮中の闇に飲み込まれ悲劇的な最後を遂げた。近年で言えば三好家がそうだ。

京の都はまさしく魔境。そこでは力を持った者ほど闇に体を蝕まれる。

果たして織田家には、その闇に打ち勝てるだけの物があるのか？

具教はそれが知りたかった。

それさえ知れば、己の矮小の矜持など捨て去り、愛する故郷を任せる事も出来るかもしれない。そんな風に具教は考えていた。

だが残念ながら今のところ一益と良晴は、具教の関心を得るだけの持て成しは出来ていなかった。

酢では無く、改良したたまりを刺身に着けるのは新鮮であった。

しかし、そこから先の工夫が無い。どうせだったら、あなたまりを味付けの主とした別の料理にした方が良かっただろう。わざわざ蒲鉾を刺身にする必要性も感じられない。

そして伊勢海老の味噌汁であるが、具教にとっては散々味わい尽くした物である。その土地の食材を使うのは持て成しの基本ではあるが、伊勢国司に対して伊勢の名産を出すのは些か安直過ぎるであろう。

所詮、成り上がり者の考える事であったか。

表情を取り繕いながらも内心では落胆していると、隣に座る具房が難しい顔で味噌汁を見詰めていた。

「…どうしたんだ、そんな味噌汁を覗んで？」

具房の様子を不審に思った良晴がそう尋ねると、具房はもう一度味噌汁に口を着けて良晴の方を向いた。

「この味噌汁、八丁味噌に米味噌を合わせているのではありませんか？」

「え？あ、ああそうだけ。八丁味噌だけで作ると味が濃くなりすぎて海老の風味が消えちまうから美濃の米味噌と合わせてみたんだだけ。」

「ああ、やっぱり美濃の味噌でしたか！美濃は米所ですからなあ。以前美濃の商人が酒と一緒に持ってきたのは口にしたのですが、美味しかったので覚えてたんです。後で少し分けて下され。それにしても……」

具房は大皿に残った蒲鉾の刺身に目をやると、感心した様子で頷いた。

「織田様は随分と手広くされてますなあ。各地の名産をこうも集めるとは。」

「……各地の名産だと？」

「はい、父上。さつき食べた蒸し蒲鉾は小田原の商店が作っている物。で、間に挟まった山葵は察するに駿河の物。あの鼻を突く爽やかな香りは駿河の山葵の特徴です。」

「すげえ、よく分かったな。確かに今日用意した食材は東海通商海路を通じて集めたものだけ。」

「東海通商海路？」

聞きなれない単語を具教が聞き返すと、待つてましたとばかりに一益が口角を上げる。

「信奈ちゃん発案の商業経済域の事じゃ。東海の外に面した国々で海運に関する税を一部免除し、船の往来を活発にし交易を促す。その旨を大名間で文書にしたためたのじゃ。」

「俺たちは北畠家にもこの経済域に加わって欲しいと思ってる。概算だけど、仮に伊勢国がこの経済域に加入した場合の土地への経済効果を計算してみたんだ。読んでくれ。」

良晴は書状を取り出すと具教の前に出す。

戸惑いがちに書状を受け取った具教だったが、熱心に見詰めてくる良晴と一益に負け、ゆつくりと書状の内容を確かめていく。

すると程なく、具教の目が信じられないとでも言うように見開かれた。書状には交易に得られる利益として、途轍もない額が記載されていた。

「…これは、適当な数字を並べているだけでは…」

「そんなわけ無いだろうっ！何度も確認して計算したんだ。多少の誤差はあるだろうけど、余程の事が無い限り大きく外れ無い筈だぜ。」

荒子城の経済状態の試算や美濃での検地など、良晴はこの時代に来てから少なからず帳簿を付ける機会を経験しており、その時の経験を生かし今回の試算表を作成していた。

「国司殿よ、尾張の津島の港がどれ程栄えているか、聞いた事くらいあるであろう。信奈ちゃんはそれを全国に広げようとしておるのじゃ。戦乱を治め、長きに渡る乱世で傷付いたこの日ノ本を、銭と商いの力で回復させる。そして更なる一手で日ノ本自体を国としてより高みへと導くつもりなのじゃ。」

「更なる一手ですか？それはいつたい？」

「くすくす。それに答える前に、先ずはお茶を飲んでたもれ。」

一益がそう言うと、給士が具教と具房の前に小さめの茶碗が置かれる。茶碗には蓋がしてあり、給士がそれを取ると具教の目が見開かれた。

「これはっ、澄茶ですかっ!？」

茶碗に注がれているのは一般的に茶席で飲まれるような味の濃い抹茶では無く、澄んだ緑色の澄茶、現代で云うところの煎茶であった。「ほう、流石国司殿。澄茶の事をご存じでしたか。やはり明風の卓で茶席を用意するのですから、飲み物も明風が良いからのお。」

この時代、まだ日本では煎茶は一般的では無い。

しかし明国では既に煎茶が流行しており、客人を持って成すなら煎茶というのが当たり前に成りつつあった。

史実で煎茶が日本人に一般的に成るのは江戸時代になってから。国産の急須が造られるようになってからである。

即ち、古来より大陸から最新の文化を学んできた日本人にとって、煎茶は戦国時代における世界的流行の最先端であった。

具教自身、話には聞いたことはあったが、本物の煎茶は見るのも初めてであった。

まさかそれが織田との茶席で出されるとは夢にも思わなかった。

「それと茶菓子はこちらを用意したのじゃ。」

一益の言葉と共に茶碗の横に置かれたのは、細長い茶色の菓子である。

「これは…」

『ちよろす』と言う、南蛮の菓子じゃ。遭難して志摩の無人島に流れ着いた南蛮船があつてのう。色々と難儀していたので助けたのじやが、礼として此度の祭りに協力してくれたのじや。これは彼奴等の故郷でよく食べられる物らしい。澄茶に良く合う。」

イスパニアから日本に渡つて来たというその難破船は、最初は塚を目指したが嵐に巻き込まれ志摩の無人島に漂着。近くの村に救助を求めようとしたが、見慣れぬ南蛮人の姿を村人は鬼と誤認し騒動となった。

村人と友好的な交流を得られなかったイスパニア人達はやむを得ず力づくで食料を確保するしかなかったが、丁度その時良晴と一益が来訪し、事態を收拾させ彼らを保護したのであった。

閑話休題

一益は自分の前に置かれた茶を啜ると、ちよろすを手を持ち美味しく口に齧った。

「父上っ！この菓子すごく美味しいですっ!!お茶とも良く合いますっ！今までのお茶は私には苦すぎてあまり好きではないのですが、この茶ならいくらでも飲めます！」

いつの間にか具教に先んじて茶と菓子を口にした具房も、煎茶とちよろすの味に感動し絶賛する。

それを見て、具教もゆっくりとちよろすを口に運ぶ。

じつくりと味わうように咀嚼し、お茶を飲んで小さく息を漏らした。

「……大変、美味しゅう御座います。」

「くすくす。国司殿が気に入ってくれて嬉しいのじゃ。」

「…滝川殿、先ほどの御話とこの茶菓子から察するに、織田は明国や南蛮との交易を進めるのが、更なる一手ですか？」

「…確かにそれも一つの手じゃ。じゃが、恐らく信奈ちゃんは今までは通りの南蛮交易をするつもりは無いのじゃ。」

一益は僅かに顔を陰らせながら静かに答える。

その予想が立てられたのは、良晴から信奈の野望について教えられたから。

良晴がいなければ気づけなかった、信奈が考える天下の行く末を自分の言葉として具教に伝える事に、一益は心苦しさを感じながらも、決して表には出さぬように努めていた。

「今の南蛮との貿易は、南蛮の商品を日本の金や銀で買うばかりなのじゃ。このまま一方的に日ノ本が買手な状況が続けば国内の金銀が海外に流出し、日ノ本は貧しくなってしまうのじゃ。」

「ちよ、ちよつと待って下され。日ノ本の金銀が南蛮に流れ、日ノ本が貧しくなるなど、そんな話……」

そのような話聞いた事も無いと言おうとするが、具教は言葉を止める。

南蛮の技術が日ノ本を席卷している事は、具教も良く知っている。その優れた技術を求め、各地の大名が大金を叩いている事も。

だがそれにより日ノ本の金銀が少なくなってしまうなど、想像したことも無かった。

しかし、可能性としては有り得なくも無い。むしろ理論としては当然の成り行きであると思いついてしまった。

「皆が気付いてからは遅いのじゃ。誰かが気付いた時、すぐに行動を起こさねば手遅れになる。」

「…それを起こすのが信奈殿だと？」

「他に誰がおるのじゃ？」

毅然と、さも当然の如く一益は断言する。

そこには、主君に対する確固たる信頼が存在した。

「……南蛮への売り物は茶ですか？」

「察しが良いのう。そのつもりじゃ。先ほど話したイスパニア人にもこの澄茶を飲んでもらったが、評判は良かったのじゃ。きっと本国でも売れるであろうと。」

「茶だけじゃないぜ。焼物や漆塗りみたいな工芸品も、海外では珍しいから珍重されるぜ。日本にだって海外に負けない製品が造れるんだ！」

一益の横から良晴が身を乗り出して熱弁する。

未来知識として、日本の伝統工芸品や食品が海外で人気であることを知っているもあり、良晴は日本製品の輸出に関して成功の自信があった。それでも、この時代の日本人からすれば自分たちの国の物が、地球の反対側で人気になるなど、とても想像できることでは無い。

だが、力強い眼差しと共に力説する良晴に、具教は心惹かれるものが有った。

「今の日ノ本には大海を渡って南蛮に行くだけの船は無いかもしれない。だけど南蛮の造船技術と曳航技術を学べば、日本から海外に向けて輸出を出来るようになる。そうすりゃ、日本は豊かになって平和で幸せな国にする事も出来るんだ！」

「無論その為には今の乱世を治めなければならんのじゃ。国司殿にはそれに協力して欲しい。国家繁栄と民の安寧を願う為政者として。」

二人から真剣な表情で見つめられ、具教は静かに瞳を閉じる。

少なくとも、良晴が本心からこの国を良くしようとしているのは、言葉に籠った熱から感じられた。

平和と幸福をもたらしたい。言葉にするのは簡単だが、それを本気で行おうとする人間がこの世に何人いるだろうか？

そのような大望、現実の見えていない絵空事と切り捨てるのが普通である。

だがどうしてであろうか、具教は己の心の内が高鳴ってしまうのを抑えきれなかった。

伊勢を統一するために戦いに明け暮れ、宮中の暗闘を潜り抜け官位を得て、この戦国の世の醜愚をいくつも目の当たりにしてきたにも拘

らず、具教は良晴の希望に満ちた未来に夢を抱きつつあった。

そんな具教の変化に気が付いた一益は、肩の力を抜き表用を柔らかくすると、口元に小さく笑みを浮かべた。

「ふむ。せっかくの茶会なのに少し小難しい話をしすぎてしまったのお。よっしー、そろそろ例の出し物を始めてはどうかの？」

「ん？ああ、そうだな。じゃあちよつと準備してくる。」

そう言っつて良晴は軽やかな足取りでその場を後にする。

その後姿を具房は興味深げに見送った。

「滝川殿、相良殿は準備をしに行くとおっしゃりましたが、何をされるおつもりなのです？」

「くすくす。それは観てからのお楽しみというものじゃ。まあ、なかなか愉快的な試みなので、退屈はせぬと思うぞ。」

含みが籠った笑みを一益がすると、海を背景にした舞台の壇上に幕が広げられる。

そして部隊の端には良晴が立ち、数度咳払いをすると声を張り上げた。

「それではただいまよりっ、伊勢志摩演劇団による舞台劇を開演しますっ！この演目は、南蛮で作られた物語を独自に演劇化したもので、日ノ本では今回が初公演になりますっ！演目名は『獅子の王』。どうぞみんなっ、存分に楽しんでくれっ!!」

今宵はこれまでに致しとう御座いまする。

獅子の王と良晴の野望

良晴がこの戦国時代に来た時、自分が周りに比べて優れていると自覚した知識が二つあった。

一つは戦国時代の未来知識。歴史漫画や歴史ゲームをメインに蓄えられた知識であるが、命の価値が軽い乱世における行動の指針の一つとして良晴にはなくてはならないものである。

とはいえ、実際に一度戦国時代を生き抜き、この世の頂点にまで至った経験を持つ秀吉に比べれば、情報の精度は著しく劣ると言わざるを得ない。

だがもう一つ、これに関しては秀吉はもとより、この世界の日ノ本では誰一人として良晴には勝てないのではないかと思える知識が良晴にはあった。

それは、創作物の知識である。

現代社会は創作物に溢れている。それこそ、漫画、小説、ゲーム、アニメ、映画、ドラマ。学校教育でさえ、授業には有名な小説が必ず使われている。普通に生活していれば誰しもが物語に触れる機会に恵まれており、お気に入りの作品や、ソラで内容を語る作品は誰しも一つくらいは持っているものだ。

良晴もまた、週刊少年雑誌の最新号を毎週楽しみにし、人気のドラマはとりあえず流してみたり、休日には友達と一緒に話題の映画を見に行ったりと、人並み以上に現代の創作物を楽しみ、それに関する知識を蓄えてきた。

一方で戦国時代の人々はどういうと、そもそもとしての識字率が現代より圧倒的に低く、書物自体も一般庶民には軽く手を伸ばせる代物ではないため、在野の人々にとって物語とは脈々と口伝により語り継がれる物が主である。大衆が演劇に触れる機会は、近世に成り人形浄瑠璃や歌舞伎が誕生するのを待たねばならない。

武士や公家などの知識階級にある人々は書物を通じて物語に触れる機会はあるが、印刷技術が未発達の時代において世に広まる創作物など数が知れている。

つまるところ、いわゆるエンターテイメントと呼ばれるジャンルにおいて、戦国時代に良晴の持つ膨大な物語に関する知識で勝れる者は先ずいないと言って良かった。

そしてその知識が、『伊勢志摩大文化祭』という外交の舞台で、大きく寄与する事となっていた。

「父の亡骸の前で涙を流す新葉に須賀亜は言った。『このままここに居たら、皆お前が王を死なせたと怒るだろう。』と。新葉は涙ながらに尋ねた。『僕はどうすればいいの?』と。すると須賀亜は『逃げろ。そして二度と戻るな。』と答える。それを聞いた新葉は絶望に項垂れながらも、黙ってその場を後にします。そんな新葉の後姿を見送った須賀亜の脇から三人の刺客が現れた。須賀亜は彼らに命じました。『殺せ。』と。」

舞台上では良晴の口上をなぞる様に役者が動く。役者は一言もセリフを言わず、代わりに舞台袖の良晴が物語の解説と、演者のセリフを代弁している。

いつの間にか集まって来た観客たちは、興奮した様子で舞台に向かって声を上げた。

「何て野郎だっ！実の兄を殺したばかりか、その罪を幼い甥にかぶせようとはっ！」

「逃げろ新葉っ！本当の事を皆に話せっ！」

興奮気味に観客たちが口々に囁し立てる。そこには、観劇中は御静かに、という現代の常識は通用しない。

しかしながら、こうして夢中に声を上げるのも物語に没入しているからである。その証拠に、誰一人として舞台上から目線を離していない。

話とはある国の王家の跡取り問題を描いたものである。その国には賢王と讃えられる奴破佐という王がおり、その王の息子の新葉が後継者と見られていた。

しかし、奴破佐の弟の須加亜はそれを良しとせず、陰謀の末に奴破佐を暗殺すると、新葉を騙して国から追放し王座を篡奪した。

失意に暮れる新葉だったが、在野において任客者の二人に助けられ生来の活発さを取り戻し大人へと成長する。そうした最中、かつての婚約者であった姫が来訪し故国が須加亜により荒廃してしまい、このままでは国が減んでしまうと教えられる。最初は自分には国に帰る資格などないと固辞した新葉だったが、奴破佐に仕えたという仙人と出会い、仙人の助けで亡き父と魂の邂逅を果たした末に国への帰還を決意する。

そうして帰郷した新葉は、変わり果てた故郷を目の当たりにし、仲間たちと共に己の宿命に蹴りをつけるべく須加亜と相對するのであった。

察しの通り、本作は世界的なアニメーション会社が製作し、ミュージカル化もされ世界的な大ヒットとなったアニメ映画を、戦国時代の人にも解り易く、ミュージカル部分を廃するなどアレンジした作品である。

良晴も子供の頃に親から見せてもらった作品で、勧善懲悪の単純明快ながら重厚なストーリーは戦国時代でも受ける自信があった。

しかし、それを舞台劇化しようとする演技力の問題がある。

今回舞台上に上がっているのは、嘉隆麾下の女海賊たち。運動神経抜群で戦闘場面の殺陣の演技は問題ないが、台詞回しはド素人である。そのため、良晴は早々に舞台上でセリフの掛け合いをさせる事を諦め、代わりに自分が活弁士となり、状況説明やセリフ読みをすることにした。

これは実際に良晴の学校の文化祭で他クラスの生徒たちが行っていた物で、云わば朗読と演劇を合わせたようなものだ。

これにより役者は殺陣などの動作にのみ集中すれば良くなったが、その分良晴の負担は大きくなった。

それでも良晴は持ち前の口回りの上手さと感情の籠った熱演により、舞台を盛り上げる事に成功する。

一方で、クライマックスを前に歓声を上げる観客達の中であって具

教は、冷静に劇その物を分析していた。

この様な演目、多くの文化を修めた具教をして目にした事が無い。

物語は言ってしまうばかりきたりな敵討ちの話であるが、登場人物達は主役級は元より悪役の手下というチョイ役にまで個性が出ており、これは単なる書物では到底出せない魅力である。

何より、汗だくになりながらも息を切らさず、必死になって物語を紡ぐ良晴の熱い語りが、観客達をより物語に夢中にさせた。

なるほど。これが若き熱量と言うものか。

具教は心中でそう呟いた。

良晴達の演劇は、決して洗練されたモノでは無い。

しかしながら、慣れないながらも面白い作品を演じようとする心意気は節々から溢れ、その感情が観客達を惹き付け、物語に熱を持たせている。

或いは、新たな文化が生まれようとしている予感が、演者と観客を結びつけているのかも知れない。

具教にはそれが、ひどく羨ましく思えた。

具教にも嘗て、剣術の世界に新たな息吹を吹込み、文化の時代を進まさんと夢中になった日々があった。

しかし、修行の果てに身に付けた剣術はいつしか戦の道具となり、修めた文化は外交の術になった。

勿論そうした事に未練は無い。歴史ある伊勢の国司として正しい道を歩むためには、優先順位を着け、そのために必要なものの取捨選択を間違えてはならない。

しかし、隣で夢中になって物語の登場人物に歓声を上げる我が子を見ると、ほんの少し惜しいことをした気になる。

「…世界を創るは我にあり、か。」

新たな歴史を紡ごうとする者は、こうも眩いものであったか。

具教は自分でも気付かぬ内に、前のめりになっていた。

その視線の先には良晴がいる。

己の主君を具教に認めさせようと、知恵を絞り、新しきを試し、生き生きと働く良晴の姿は、具教の心に言葉に出来ぬ熱き想いを込み上

げさせた。

そして、物語は遂に終局を迎える。

激戦の末に須加亜を打ち倒した新葉は、城の天守に登り勝鬨を上げる。

「こうして新葉は新たななる国の盟主となりました。そして彼の国は新葉の親政の元、未永き発展を遂げたのでした。これにて獅子の王の物語は完結っ！御観覧ありがとうございました。」

息も絶え絶えになりながらも良晴がそう叫ぶと、観客席からはワツ！と歓声が起こり人々は立ち上がって良晴たちを称賛した。まさに大盛況である。

良晴はその光景に観劇した様子で大きく息を吸い込むと、深く観客たちに向かつて頭を下げた。

そうしてゆっくりと頭を上げると、舞台を降りて具教たちの元へとやってくる。

「はあはあ、どうだった、俺たちの演劇。なかなか良かっただろう？」
「……そうですなあ。」

頬を紅潮させ尋ねてくる良晴に、具教は笑みを抑えきれなかった。

舞台上での猛々しさと打って変わって、親に褒めてもらおうとする幼子の可愛らしさがある。或いは未熟さともいえるかもしれないが、具教からすれば決して不快では無かった。

「面白い物語でした。このような出し物、これまでの人生で見た事がありません。ただ……」

「ただ？」

「…あのように、めでたしめでたしで終わる様な話は、現実では滅多にある物では御座いません。相良殿。」

具教の顔から笑みが消えた。

「先ほど話された、この国を平和で幸福な国にするという話、あれは信奈殿の語ったものでは無く、貴公の理想ではないですか？」

「っ!?……ああ、そうだ。」

「…その理想を成すは、獅子の王が歩みし道より困難であることは分かっただけか？」

「…勿論分かってる。だけど。」

「それが俺の野望だ。」

それ以外に我が道は無し、とばかりに良晴は断言した。

その真つすぐ過ぎる眼差しをジツと見つめていた具教であったが、フツと表情を柔らかくすると良晴に向かって頭を下げた。

「現実を直視し、それでもなお己の理想を貫かんとする相良殿のご意志、この具教感服仕りました。願わくばその理想を胸に邁進し、大願が成就すること切にお祈り申し上げます。滝川殿。」

具教は顔を上げると一益の方を向く。

「此度の文化祭。誠に良き催しでした。これに招いて頂いた分は、いずれ信奈殿の元に侍りて返礼したきと存じます。」

「まことかつ!？」

大名が他の大名の元に自ら出向いて礼をする事は、一般的に相手に対して臣従を誓うに等しき行いである。即ち、具教の言葉は降伏を宣言するのと同義と取る事が出来るのである。

「はい。滝川殿と相良殿が慕いし御方、ぜひともご尊顔を拝してみたいと思います。然らば滝川殿、日程の調整をお願いしても?」

「うむつ、勿論じゃ!すぐにでも信奈ちゃんの承諾を得てみせるぞ!」

「ありがとうございます。それと、相良殿にお願いが…」

「ん?なんだ?」

急な申し出に驚きながらも良晴が確認すると、具教は近くに居た具房をグツと引き寄せ良晴の前に出す。

「我が愚息、相良様の元で鍛えて頂きたいのです。」

「…え?」

押しやられた方と押し付けられた方、揃って呆けた返答をした。

「くくくくつ、そ、それで、結局よしサルは奴はどうしたの?」

岐阜城の一室で、事の顛末を聞いて一頻り笑った信奈がそう尋ねると、一益は口元を袖で隠しながら答える。

「最初は断ろうといていたのじやが、伊勢国司直々に頭を下げられ結局受けるしかなかったのじや。一応側仕えとして家に置いておるそうじやが、よく食べ物をつまみ食いするから苦勞をしているのだと。まっ、料理の知識と腕は確かなので、微妙に怒り難いそうじや。」

「はははっ、なにそれ!?!伊勢国司の嫡男を家来にしておいて料理番をさせてるのっ!?!面白すぎでしょっ!?!」

なお、具房本人は元から美味しいものを食べるのも作るのも好んでいるため、父親の監視の目が無くなり自由に料理に勤しめるようになった環境に満足しており、それもまた良晴の頭を悩ます種となっていた。

「あーおかし。よしサルにも近々家来を付けてやらないといけないとは思ってたけど、まさかの人選よね。とはいえ、伊勢国司と太い繋がりが出来たんだから、あいつにとつてはかなり良い結果なんだけど。」

「…信奈ちゃん、一つ聞いて良いかのう?」

「ん?なに?」

「…信奈ちゃんは、最初からこうなると思ってよっしーを姫の元に送ったのか?」

一益の疑問に、信奈は口元に笑みを作る。

「そうねえ…私としては予想外の事が起こって欲しかったわ。」

「それはつまり、具教を殺す以外の方法で伊勢を掌握して欲しいと思っていたという事…」

「うーん、それとも微妙に違うわね。極端なことを言うと、私は伊勢を手にする事が出来るなら、余程でもない限り左近達がどんな手段を使おうが気にしないわ。私が口出ししなくても、左近なら万事上手く

やってくれるって信じてたし。」

「ならば何故、よっしーをつっ!？」

「それについては御免なさい。もう少し左近の心情を考えるべきだったわ。だけどどうしても抑えきれなかったのよ。」

信奈は申し訳なさそうでいて、困ったような表情を作る。それは一益が初めて見る顔だった。

「面白くなるかも、って思っちゃったの。」

「面白くなるかも…」

「そう。あいつらは時々、私が予想もつかない結末を作っちゃうの。それが面白くてね。ついつい今回も、あいつの事を試したくなっちゃったの。一益には苦労を掛けたわね。」

織田信奈という姫武将には、時々損得を無視して思い付きで行動を起こすという性分があった。

それが結果としてよい効果を出すときもあれば、時には悪い結果を招くこともある。いずれにしろ、織田信奈という女は常に冷静で先々を見据えるばかりの人物とは言い難く、その場のテンションで後先を考えずに行動に起こしてしまうという、危うくもどこか魅力的に見えるてしまう人間らしい欠点を持つ人物だったと言われてる。

「いや、その…結果としては姫の作戦より良い結果が出たので良かったのじゃ。姫も今回の事は色々勉強できた。そういう意味でなら、よっしーが来てくれたのは本当に助かったのじゃ。」

「フフっ、そう言ってくれるとこちらも助かるわ。とはいえ、左近に苦労を掛けたのは変わりないわ。その苦労に報いたいから、褒美をあげる。何か欲しいものある?」

「…ならば、茶器が欲しいのじゃ。」

「…へー、茶器ねえ。もしかして茶の湯に興味がわいた?」

「そんな所なのじゃ。変則的にはいえ、よっしーは文化の力を用いて具教の心を攻め落とした。」

一益の目がスツと細まり、武器を手にした戦国武将のものに変わる。

「然らば姫もその力をものにしたい。我が身を高みに昇らせんがために。」

「……いいわ。近いうちに適当な茶器を一式揃えてあげるわ。今後はそれを用い、文化の力を己のものとしなさい！」

「はっ！承知仕りましたなのじゃっ！」

「フッフ、励みなさい。」

満足そうに信奈は微笑む。

すると襖が開き、小姓の堀秀政が入って来た。

「姫様、岡崎より急報に御座いまする。」

「岡崎：竹千代に何かあったの？」

「いえ。武田が動き出したとの事。」

その知らせに、信奈の瞳がギリリと光った。

それが意味するは、戦が始まるという事。そしてそれは、一年前、桶狭間に勝利した時から始まった『虎囲いの計』が、いよいよ発動することを意味していた。

今宵はこれまでに致しとう御座りまする。

伊勢攻略編 終幕

次章 虎殺し編 開幕

虎の侵軍

時は少し遡る。

良晴たちが伊勢志摩大文化祭の準備に追われている頃、三河の国のほぼ中央、岡崎城からもほど近い土呂の地に焼け落ちた寺院がある。この寺の名は本宗寺。三河にゃんこう一揆で一揆勢が拠点とした寺院である。

三河にゃんこう宗の総本山として百年以上に渡って地域に根差した歴史ある仏閣であるが、それも今や黒く焼け焦げた柱が辛うじて形を保つのみであった。

そんな廃墟の中心地で、松平元康は膝を着いて煤の中から何かを探していた。見つけ出したのは小さな木仏。元康はそれを悲しげに見つめると、黙って自分の懐に入れた。

「ここに居られましたか姫様。」

「あつ、与七郎。」

元康に声を掛けたのは、近習を務める背の高い強面の男、石川数正であった。家中においては主に外交を担当し、酒井忠次と共に松平家の重鎮として烈腕を振るう忠臣である。

元康にとつては物心ついた頃から側で仕え、人質時代も一番近くで辛い時期を励まし助けてくれた年上の数正を深く信頼し、実の兄のよう慕っている。

「姫様、方は付いたとはいえ残党が何処に潜んでいるかも分かりませぬ。努々、お一人になることは避けられますよう御願ひ申し上げます。」

「ご、ごめんなさい。ちょっと感慨に耽りたくなってしまつて。」

「……そうですね。これで今度こそ、三河も纏まりましたよう。」

厳しさを含んだ声色から一転し、数正は優しい口調で元康を労う。

不入特権の侵害に端を発する三河にゃんこう一揆は、一時岡崎城を一揆勢が攻め立てるなど松平家が押される展開もあったが、一揆が長引き始めると一揆勢内部で厭戦気分が漂い始め、次第に松平家が優勢

となった。

やがて戦線が膠着すると、松平家と一揆勢の双方から和睦の使者が立てられ、数度の話し合いの末に和睦が成立した。

一揆勢の首謀者であるにやんこう宗の僧侶達は拠点に籠った領民の武装を放棄させ、彼らを元の土地に返し今後は正当な理由なく領民を招集しない事を松平家に約束した。

松平家はにやんこう宗の寺に対する不入特権を認め、今回の騒乱で焼け落ちた仏社の修繕を僧侶達に約束した。

こうした形で戦が終わると、松平家は早速寺の修繕を開始する。程なく修繕が終わると、真新しい寺には僧侶が入り、以前と同じように地域の行政機関としての役割を開始した。

ただし、この時寺に入ったのは松平家と縁の深い宗派の僧侶であり、にやんこう宗には一切声が掛からなかった。

焦ったにやんこう宗側は松平家に抗議をするも、「約束したのは寺の修繕のみ。そこに何処の宗派の僧侶を住まわせるかについて、約束した覚えはない。」と突き返された。

怒ったにやんこう宗の僧侶たちは、本宗寺に集まり門徒たちに再び一揆を起こすよう促した。ところが、前回から一転してにやんこう宗の呼びかけに応じた領民は驚くほど少なかった。

というのも、最初から一揆に積極的に参加しようとする三河の領民達など極少数に限られるのだ。

元々一揆自体が寺と松平家のいざこざであり、一揆側が勝ったとしても領民達への見返りは殆ど無い。日頃世話になる寺からの御願いなので仕方なく参加したというのが大部分であったのだ。前回の一揆で早々に厭戦気分が蔓延したのもそういう理由からであった。

そもそも三河の領民は松平家への敬愛の念が強い。一揆勢の中には、強引な手法で寺から年貢を獲ろうとした若き元康を諫めるために参加した者もいた。一度義理を果たした以上、領民達にこれ以上にやんこう宗へ与する理由は無い。

なにより、領民達ににやんこう宗とそれ以外の宗派の違いを明確に判断できるものなどほんの僅かである。彼らからすれば、きちんと念

仏を上げてくれるなら坊主など誰でも良いのだ。

なので領民達にはんこう宗の招集を拒否し、これから本格的に田植えの季節になるのに面倒な事に巻き込むな、とにべも無く追い返したのだ。

こうした領民の反応に僧侶達が狼狽える中、待つてましたとばかりに松平家は動いた。

にゃんこう宗が『正当な理由もなく領民を招集しない。』とする約定を破棄したとして兵を集めると本宗寺を焼き討ちし、にゃんこう宗の僧侶たちを国外に追放。その上で国内でにゃんこう宗を信仰するのを禁止する触れを出し、三河国内のにゃんこう宗勢力を駆逐したのであった。

「長かったですね、きつと天国の御父上も御喜びに成られるでしょうな。」

「はい。吉姉さまへの面目も何とか立ちましたし、本当に良かったです。」

元康の言葉に数正は「織田方を気にし過ぎでは？」と口に出しそうになったが、それは止めた。

元康と信奈が幼少の頃に交友を深めたの三河独立の大きな助けになったのは認めるが、先代より前は何度も争った宿敵同士である。数正自身も本心を言えば、信奈の顔色を窺うような元康の態度は改めて欲しいと願うのだが、今は黙って主君の成長を見守るよう努めている。それは、元康が信奈に勝るとも劣らぬ才気を秘めていると信じているからであった。

「…失礼、よろしいでしょうか？」

「っ!?!半蔵か?」

背後からの声に驚きながらも数正が問うと、柱の陰から忍び装束の服部半蔵が現れた。

「先ほど陣中に武田からの使者が参られました。どうやら、姫様に要件がある様子。」

「…分かりました。与七郎、行きましよう。」

「はっ!」

元康が陣中に戻ると、その中心には一人の姫武将がいた。

背が高く、瞳に知性の輝きを宿す、優しげな雰囲気の女である。女は元康の姿を認めると、ゆっくりと頭を下げた。

「…お初に御目にかかります…馬場…信房に…御座います。」

ところどころ言葉を区切り、のんびりとした様子で女は名乗った。

しかし、その名を聞いた元康達の顔に緊張が走る。

「馬場信房っ！もしかして、不死身の鬼美濃と呼ばれる、あのっ!？」

「…はい…そう呼ばれる…事もあります。」

馬場信房。武田四天王の一人に数えられ、七十もの戦に参加しながら掠り傷一つ負わなかったと事から『不死身の鬼美濃』と称された信玄の片腕である。

その器量は後世において「一国の太守に相当する」と評され、深志城や牧之島城など数々の城の普請を務めたとされる築城の名人でもあった。

また信玄の深い信頼の元、他国に対する外交の窓口になる事もあったとされている。

「…まさか勇名高き美濃守殿直々に参られるとは。武田家は随分と我が姫を評価しているのですね。」

武田家の意図を探るべく、教正はあえて警戒心を隠すことなく固い声で問い掛ける。

しかし、信房の顔に目に見える変化は現れず、こくりと首を縦に振るのみであった。

「…うん…御屋形様は…元康殿を将来有望だと言っている…：…間違はなく…大事を成せる…大器である。」

「へっ!?!信玄さんが私の事をそんなに!？」

「姫様、簡単に口説かれないで下さい。」

戦国最強ともいわれる武田信玄から評価されていると聞き、元康の顔に喜色が浮かぶが数正はそれを窺める。普段あまり褒められる事

が無く屈折した感情を溜め込みがちな元康は、煽てられると弱いところがあった。

「…御屋形様は…そんな有望な元康殿と…手を組みたいと…言っている…私はその言葉を…伝えに来た。」

「…信玄さんは、何を望まれてるのですか？」

「…駿河侵攻。」

「っ!？」

信房の言葉に元康と数正の顔が驚愕に染まる。

「武田は今川と同盟を結んでいた筈。それを破って今川を攻め滅ぼすおつもりですか!？」

「…今川との盟約は…武田義信の死によって…既に破綻している…姉を捕らわれながら…これを取り返そうとしない氏真に…戦国大名としての…資質は無い。」

相変わらずのんびりとした口調で、信房は今川を攻める理を語る。その瞳の奥には、先程まで見られなかった戦意の炎が滾っていた。

「…それと…御屋形様は…この言葉を…元康殿に伝えて欲しいと。」

「…なんですか？」

「『大名にとって弱きは罪。』」

「…」

「『大名が弱いと苦勞するのは民である。然らば、弱き大名などいつそ滅ぶべし。』…と。」

「……」

「…我らは東から…元康殿たちは…西から切り取られると良い。」

信房はそう言って立ち上がると、陣の出入口へと向かう。

しかし、陣を出る間際に立ち止まると元康の方を振り向いた。

「…強くなって下さい…元康殿。」

そう言い残し、信房は去って行った。

陣中は暫しの間重苦しい沈黙が流れる。それを断ち切ったのは元康の深い溜め息であった。

「本当に、恐ろしいです。まさかこれ程までにとは。」

「…同感です。こうなってくると最早乗らぬ道は有り得ません。」

元康と数正は心底肝を潰したとでも言うように瞳に畏れの色を滲ませている。

しかし、それは信房にでも、信玄に対してでも無かった。

「全て織田方の言う通りになりましたな。信玄が駿河を攻める時、必ず姫様に声が掛かるといふ。」

「はい。正直半信半疑でしたけど、これで松平の進むべき道は決まりました。与七郎?」

「はっ!」

「戦の準備を。遠江を切り取ります。」

「承知仕奉りました。」

元康の命を受け、数正は慌ただしく陣を出ていく。

それを見送った元康は、知らず知らずの内に懐の木仏を握っていた。

巨星動く。

伊勢志摩大文化祭が行われたその直後、武田信玄は弟の武田義信の死後に今川が行った甲斐への塩留めを理由に、駿河への進攻を開始した。その数は約二万五千。富士川に沿って南下し、途上の砦や村を焼きながら東から駿河を攻め立てた。

今川氏真はこれに対応し、三万五千の兵を集めると、庵原郡の秋葉山に布陣し信玄を待ち構えた。更には、北条家に対して東から武田領に圧力を掛けるよう要請し、上杉へも出兵を促す書状を出した。

しかし、松平元康が挙兵したと伝わり状況が一変した。

元康は一万の兵を率いて岡崎城を出ると、西遠江の今川領を攻め立てた。その勢いは凄まじく、僅かな内に西遠江の大部分を占領し、天竜川の西岸にある曳馬城に入城する。

この動きに対して氏真は三万五千の内から一万の兵を西遠江に送り、天竜川を挟んで松平への睨みを利かせなければ成らなくなった。

一方で、相模の北条家は今川と武田のどちらに肩入れするかで会議が紛糾し、結局武田領に掛ける圧力は中途半端なものとなり、信玄の進軍を阻むに至らなかった。

上杉の方も、御家芸と化した越後豪族達の反乱に上杉謙信は掛かりきりとなり、武田領への出兵は叶わない。

こうして今川と武田は兵数はほぼ同数のもと、平野を舞台に相対する事となる。

この戦こそ、後に戦国時代の転換期ともされる『庵原の戦い』であった。

不安を抱えて戦をするなど、いつ以来だろうか？

武田信玄は馬上にて思い耽る。

信玄は常勝の武将である。情報を集め、内容を精査し、最も適した策を考え、万全の状態で行う。

戦をしてから勝つのでは無い。勝ってから戦するのが勝者なのだ。

その信念の元、信玄は数多の戦場を勝ち抜き、武田軍を戦国最強の戦闘集団に押し上げたのだ。

しかし、此度の戦いだけは少し様相が異なる。

確かに桶狭間の戦いで今川義元が織田に捕らえられて以降、信玄の胸中には今川を滅ぼし駿河を我が物にする計画は常に存在した。

だが、仮にも今川は同盟相手。これを切り捨てるのはリスクが高く、遣るならば慎重に事を進めなければ成らなかった。

本心を言えば、今川との同盟を継続する道が有ればそれも良いとすら願っていたのだ。

しかし、その願いは脆くも崩れ去る。

川中島の戦いの被害の補填、そして後継者たる義信の権威付けの為に実施を許した甲斐―駿河間の楽市楽座であったが、これにより国内

の豪族間に経済格差が生まれ家中が分裂。最終的には義信の自害に至り、それに伴い親今川派の豪族達も連座し処断せねばならなくなつた。

そうになると、駿河攻めを求める豪族達の声を止める術は無い。

折しも今川家が義信の処断に対する抗議として甲斐への塩の輸出を禁止すると、甲斐豪族達は今川討つべしの一色に染まり、信玄は最低限の裏工作しか出来ないまま出兵を余儀なくされた。

「ねえ、これ見て！さっきの村で手に入れたんだけど。」

「あらっ！可愛い着物じゃない。良いもの見つけたわね。」

「でしょう！妹に良い土産が出来たわ。」

「あつ、でもこれ血が着いてない？」

「そうなのよ。大人しく着ている服を寄越せって言ったのに嫌がるから、ムカついて殺しちゃったの。帰ったら洗って縫わないと。」

「勿体ない。若い女だったら奴隷にして売っちゃえば良かったのに。」

姫武将達が纏まった隊列から、笑い声混じりにそんな話が聞こえてくる。

武田軍の外征には敵地での略奪が付き物だった。道中の村を襲い、物を盗み、食料を奪い、女子供を拐う。貧しい甲斐の民にとって、親兄弟が持ち帰る略奪品は貴重な収入源であり、数少ない娯楽の一つであった。姫武将達も兵ですらない村人を殺し奪う事になんの躊躇は無い。強き者が弱き者から奪い虐げる事は、彼ら彼女らにとって当たり前の摂理であった。

すると、隊列の横に一人の騎馬武者が馬を並ばせ、槍で地面を叩いて一喝する。

「おい貴様らっ！戦の前に浮かれすぎだあつ！無駄話をせず黙って歩けっ！」

「は、はいっ！すいません山県様あー！」

空気を振るわれる大喝に、先ほどまでお喋りをしていた者達も肝を冷やす。そうして整然とした進軍が再開したのを確認すると、騎馬武者は信玄の横に馬を付けて頭を下げる。

「申し訳ありません、御屋形さま。お見苦しいところを御見せしまし

た。」

「いや、むしろ良くやった昌景。これで少しは気が引き締まるだろう。」

騎馬武者の名は山県昌景。戦国最強と名高い武田軍にあって、その最精鋭部隊である「赤備え騎馬隊」を率いる姫武将だ。

元々は飯富姓を名乗り、姉には武田義信の守役を務めた飯富虎昌を持つ彼女だが、虎昌が義信に連座し処断されると、周囲からの風評を考慮し信玄より途絶えていた山県姓を継ぐように命じられ今に至っている。

背丈は低く、長身の信玄に並ぶと胸元にかろうじて頭が届く程度であるが、姉譲りの武勇と騎馬隊を巧みに操る用兵術は信玄をして虎昌以上と称され、武田四天王の筆頭に挙げられる武田家最強の武将である。

そんな昌景であるが、彼女の顔には信玄同様心配の色が見えた。

「どうにも兵の士気が乱れているように思えます。先ほどの村でも、乱取りに夢中になって集合に遅れる者が少なからずいたようです。いっその事、何人か見せしめにした方が良いかもしれません。」

「そうだな。戦の前に気は進まないが、これ以上に士気が乱れると戦以前の問題だ。昌景、次に同様な事があればお前の裁量で処罰せよ。」
「はっ！」

威勢良く昌景が応えるが、信玄の表情は尚も固い。

ここ数年の間、武田家は先代からの古参武将が相次いで鬼籍に入っていた。

板垣信方、甘利虎泰、横田備中、諸角虎定、多田満頼、小島虎盛。

加えて川中島の戦いでは武田信繁が、義信事件では武田義信と飯富虎昌が死去し、武田家の家臣団の顔触れは大きく様変わりしている。

信玄は山県昌景、馬場信房、高坂昌信、内藤昌豊ら直属の家臣の家老職に引き上げ、川中島の戦いで生き残った軍師、山本勘助と共に鍛え上げ新生武田四天王とし、空席となった臣下の穴を埋めようとしているのだが、その下の者たちはまでは少々教育が行き届いていない。

その者たちは、信玄の下で常勝軍団となった武田軍のみを見て育つ

た世代であり、武田軍こそ戦国最強と信じて疑っていない。

信玄はそこに、『誇り』が『驕り』に変わりつつあるのを色濃く感じていた。

事実彼らは、自分達が今川に負けるなどと微塵も考えておらず、既に駿河城下での略奪について思いを馳せる始末であった。

今回の戦、多少苦戦した方が武田家の将来の為には良いかもしれない。

信玄は溜息を抑えながら、そんなことを考えてしまっていた。

「御屋形様、よろしいでしょうか？」

「おう、勘助か。どうした？」

信玄の下に隻眼の老人が馬を寄せる。

この男こそ、武田の軍師にして信玄の懐刀、数々の策略を駆使して武田家を戦国最強の軍団に押し上げ、太原雪斎と北条幻庵に並んで『関東三軍師』と称される内の一人、山本勘助である。

勘助は川中島の戦いにおいて、上杉謙信を屠る必勝の策として「啄木鳥の計」を献策し信玄と共に実行するも、謙信に策を見破られ逆に自軍に大きな損害を与えた責を取るために、決死を期して敵中に臨まんとするも信玄に止められ、命ある限り信玄の軍師として在り続けるのを命じられていた。

「前方の小山に今川の陣が見えました。先行した物見の報告の通り、敵兵は一万減って二万五千ほど。どうやら同数にて平原で我らに決戦を挑まんとしているようです。」

「そうか…勘助、お前は今川の動きをどう見る。」

「…些か不可解に思えます。今川氏真はこれまで大きな戦に従軍した経験はなく、音に聞こえし武勇もありません。むしろ性格は公家文化を好む軟弱な気質であると言われており、我が軍を相手に正面から挑もうとする姿勢には違和感があります。」

「と、するなら、何か小細工を用意してるな。」

「その可能性が高いかと。」

「ふむ。勘助、一旦陣を敷くぞ。その後主だった将を集め軍議を行う。」

「ははあつー」

「…氏真よ、いったいお前はどうか我らに挑むつもりだ？」

例え如何なる不安を抱えていようと、武田信玄は敵を屠り、そのすべてを奪うことを生業とする戦国武将。

その本能が激戦の予感を感じ取り、信玄の頬を自然と吊り上げさせた。

手早く陣を構えた武田軍は、その中心に天幕を張ると有力な武将を集めて軍議を開始した。

上座に座るのは当然信玄。その左右は軍師の山本勘助と、小姓の高坂正信が固めている。

「さて、敵方は既に戦準備を終え、今か今かと我らが攻め掛かるのを待っているようだ。素直にこれに攻め掛かるべきか否か、各々の意見を聞こうと思う。」

低く、厚みのある声で信玄が問いかければ、待つてましたとばかりに山県昌景が手を上げた。

「恐れながら申し上げます。今川勢は我らが拳兵して間も無く兵を集めると、今いる場所に陣を構えた様子。恐らく、当初の予定では数の有利を以て我らを迎え撃たんとしていたのでしょう。しかし遠江を松平に攻められ兵を割く事になるも、当初の予定を変更することも叶わずあの地に留まり続けているのではないのでしょうか？」

「つまり昌景は、今川は仕方なく同数で我らを迎え撃とうとしている、と考えているのだな。」

「…仮に太原雪斎が存命であれば、何かしらの策があると思えましょう。しかしながら、既に雪斎はこの世に居らず、代わりとなる様な軍師の噂も聞いたことがありません。今川氏真も経験が浅く才も凡庸とされる程度であり、戦況を変えるだけの謀は無理かと。」

「…なるほどな。弾正、お前はどうか思う？」

昌景の具申に頷いた信玄は、次に顎髭を生やした細身の老臣に話を

振った。

弾正とはこの老臣の綽名である『攻め弾正』を縮めたもの。

そしてその本名は『真田幸綱』。信濃小県郡は真田本城を拠点とする真田一族の当主である。

「私としては、少々慎重に事を進めるべきだと愚考いたします。」

「…ほう、その意は？」

「確かに氏真は実績に乏しく、優れた武威があるという噂も聞きませぬが、世に名将と名を轟かせる者が、初めは凡人と評され侮られていた例はごまんと在ります。それこそ、御屋形様自身がそうであるように。」

「はははっ、いうではないか！だが確かにその通りだ。氏真に隠された将器が無いとも言い切れん。」

「仮にそうではなかったとしても、今川には経験豊かな家臣も少なからず居ります。あの落ち着いた陣容を見る限り、彼の者達も勝機があると見て陣を動いていないのでしょうか。」

「確かにそうだな。敵陣には岡部元信もいるそうだ。あの戦巧者が自軍の無策を許すとは考え辛いな。」

「然らばまずは乱破を放ち、敵の思惑を探ってから攻めるのが良いと申し上げます。」

信玄は幸綱の意見に「なるほど」と大きく頷いた。

すると、幸綱の対面にいた壮年の武将が幸綱に向かって掌を突き出した。雄牛のような巨軀の男である。

「待った待った弾正殿。慎重になるのは良いが、あまり悠長は出来ぬぞ。道中の村で兵糧は補給したとはいえ、時間を掛け過ぎると食い物が無くなってしまふ。」

そう言っつてポンツと大きな腹を叩くのは、『猛牛』の異名で知られる秋山虎繁。幸綱の慎重策に理解を示しながらも、大軍の遠征による物資の消費について懸念を伝えた。

「…ならばどうでしょう……部隊を半分に分け……片方を先行させ秋葉山の敵軍を無視して駿河の町を目指す……慌てて敵軍が先行した部隊を追い掛けてきたら……後続の部隊が敵軍の背後から襲い掛かり……」

反転した先行隊と挟み撃ちにするのは？」

そう口にしたのは馬場信房。相変わらず気の抜けたのんびりとした口調で発案する。

「いやそれは不味くないか？敵の目の前で兵を分けるのは些か危険すぎるのでは。此方の思惑を悟られる危険性も高く、なにより各個撃破の恐れがあります。」

信房の意見に反対するのは内藤正豊。四天王の中では影が薄く、なかなか目立たない姫武将であるが、精一杯に自分の考えを主張する。

その後も各将からは様々な意見が出るが、信玄は黙ってそれらの意見に耳を傾ける。場の雰囲気としては「今川は何か策を用意している可能性があるが、こちらから仕掛けて今川の動きを見るべきである」とする意見が多数派であった。

「…御屋形様、如何に致すべきでしょうか？」

あらかた意見を出し尽くしたところで、勘助が信玄に向かって問い掛ける。

信玄は静かに瞼を閉じると、数瞬の間思案した。そして再び目を開く時、その奥には獯猛な肉食獣に似た輝きがあった。

「皆の考え良く分かった。敵方は何か策を労していると想定するのが良いだろう。だが、これを警戒し過ぎて攻め手を鈍らすのは惜しい。攻めの有利を手放し、無為に時間を浪費すればそれこそ敵方の思う壺だ。故に先ずは先遣隊を組織し、相手の出方を窺おうと思う。」

「先遣隊にごさいますか？」

「ああ。先遣隊がぶつかり、何も無ければそのまま一気に全軍で攻め掛かる。敵方が策を用いてきたら先遣隊は退却し、残りは先遣隊の退却を全力で支援するんだ。」

「然らば先遣隊のお役目、この平八郎にお任せ下され！」

そう声を上げ立ち上がったのは、幼さを残した顔立ちの若い将である。

この男の名は土屋平八郎昌統。信玄の側近を務め、先の川中島の戦いで初陣を終えたばかりの新米武将である。

「ふむ、平八郎か。張り切るのは良いが、先遣隊は良く言えば一番槍、

悪く言えば捨て石と成る役目と知つての自推か？」

「捨て石上等！この平八郎、御屋形さまの役に立つとならば、如何なる御役目であろうと全力で遣り切る所存！無論、親より授かつた命を無駄に使おうという気は御座いませんが。」

「ハツハツハツ、よく言つた！先遣隊の長の役目、お前に任せる。五百の兵を率いて参れ！」

「はっ、ありがたき幸せっ！」

「他の者達もいつでも出陣出来る体勢は整えておけ。敵方の対応次第では全軍突撃もあり得るぞ！」

「「おうっ!!」」

勇ましい掛け声と共に、武田家臣団は威勢よく立ち上がった。

土屋昌統は元は信玄の側衆の一人であつた。

信玄に対する忠誠心が高く、そして若いながらも確かな武勇を持ち、それに裏打ちされた強い自信を身に纏っている。

その一方で常に周りに目を配り、言動とは裏腹に冷静で引くべきところで引く事が出来るので今回の先遣隊長も信玄は任せたのであつた。

「さあ、もう間もなくぶつかるとぞ！皆気張れえい！」

先頭で馬を走らせながら、昌統は後続の部下を激励する。彼らは皆士気旺盛。自分達だけで今川軍を蹴散らしてやろうと、血気盛んな若武者たちである。自分たちが場合によつては捨て石になる事など、何も気にしていない。

前方の今川軍は、昌統たちの接近に俄かに慌しい様相を見せている。

だがその時、俄かに風向きが変わつて昌統たちが風下となつた。その瞬間、昌統の鼻に嗅ぎ慣れない匂いが漂つてきた。

「この匂い、まさかっ!？」

不吉な予感に昌統が目を見開くが時すでに遅し。乾いた轟音が戦場に木霊し、昌統隊から悲鳴が上がった。

「おのれッ、種子島かっ!?!」

今川が使用したのは火縄銃。それも一つや二つではない。百、いや二百かそれ以上の大量の火縄銃による一斉射撃が昌統隊を襲ったのであった。

とは言え、この一斉射撃自体による損害は大したものでは無かった。全体から見れば直接銃撃の被害を受けて倒れたのは精々十騎ばかり。この時代の銃器は威力は兎も角、命中率や射程に難があり、狙いをつけるのは至難の業であった。

しかし、二百以上の一斉射撃の轟音を間近で聞いたことにより、馬たちは恐慌状態となり戦場のど真ん中で完全に立ち往生してしまった。

「まずい！退却だ！」

昌統は即座に退避を命ずる。

だが、その耳は遠くから聞こえる弓鳴りの音を捕らえていた。

「くそっ！今川の奴らめ、贅沢な戦をしゃがる。」

戦国時代で最も人を殺傷した兵器、それは刀や槍でも、況してや火縄銃でも無く、弓矢である。

今川家はこの弓矢に大量の人員を動員している。

熟練した弓兵に大量の矢を与え、惜しむこと無く連射させ敵を殲滅する。豊富な資源と経済力を背景としたこの戦法で武田や北条と渡り合い、今川は東海の覇者となったのだ。まさに『東海一の弓取り』の異名に相応しき戦い方である。

雨あられが如く降り注ぐ矢を掻い潜り、昌統達は何とか自軍への退却を成功させる。

今川軍は追撃の姿勢を見せるが、武田軍の後続が側面を狙う動きを見せると無理攻めせずに陣形を固めた。

この初戦による今川の被害は皆無。武田は五十数騎の騎馬隊を失い、結果だけ見れば今川の完勝と相成った。

「いやあ、申し訳ありません御屋形さま。今川にしてやられてしまいました。」

命からがら撤退した昌統は、傷だらけの風体で信玄の前に現れ敗戦を謝罪する。しかし、その顔に敗者の悲哀の色は一切無く、むしろ今すぐにでももう一戦やりたいとでも言うような闘気に満ちていた。

それを見て信玄も思わず苦笑いを浮かべてしまう。

「構わん。もとより昌統には苦しい役目を与えたのだ。お前は十分役目を果たした。今は傷を癒し、次の一戦に備えておけ。」

「ははあっ!!」

「勘助、お前は今川の戦法をどう見る?」

「なかなか厄介な手を使ってきましたな。あの轟音を受けては、馬は驚き足を止めてしまいます。動かない騎馬は良い的です。そこを狙い射つのが、敵方の策かと。」

馬は元来臆病な生き物だ。訓練をして慣らさない限り、鉄砲の轟音に怯えて機動力を発揮出来なくなってしまう。

「近づけば鉄砲で足止めされ、そこを弓で射られるか。なるほど、今川にしては良く考えられた策だ。鉄砲に慣れていない我が騎馬隊ではどうしようも無いな。しかしあれ程大量の種子島、いったい何処から入手したのやら。」

「そんな悠長に構えてどうするんですか!? 武田の騎馬隊が通用しないんですよ!」

そう悲壮な叫びを上げたのは、信玄の小姓を務める高坂昌信である。元は甲斐の農民の娘だったが、才気とヒマワリのように明るい可愛らしさを信玄に気に入られ、直属の家臣となった姫武将だ。

「馬を発砲音に慣れさせるのも容易じゃありません! あの種子島が有る限り、完全に手詰まりです! 逃げまじょうっ!」

涙目になりながら撤退を進言する昌信に、他の家臣たちからは「またか!」という呆れを含んだ言葉が漏れる。

武田四天王に数えられ、信玄も認める武才に恵まれた昌信だが、本

質的には気弱で臆病な少女である。何かあればすぐに撤退策を口にする悪癖があった。

いつもの事だと周囲は昌信の言葉を無視する。しかし、信玄だけは昌信の方を見ると大きく頷いた。

「うん。確かにそうだな。一旦引こう。」

「「は？」」

勘助を除いた家臣たちは皆信玄の言葉に啞然とする。

昌信でさえ自分で提案しておきながら信じられないといった様子で目を丸くしていた。

「おい、なんだその顔は？撤退しようと言ったのはお前だろ。」

「えっ!?いや、はい、確かに逃げた方が良いんじゃないかな、つては思いましたけど……御屋形さま、本気なんですか?」

「ああ、勿論本気だ。あんな飛び道具、まともに相手をする方が馬鹿らしい。」

確かに現状で今川の鉄砲隊を攻略する術は見当たらない。しかし、本当に引いて大丈夫なのか、と家臣たちは不安になる。

そんな家臣たちを安心させるように、信玄は余裕を持った笑みを浮かべた。

「大丈夫。今は時期が悪いだけだ。三、四日もすれば、きっと攻め時が来るはずだ。」

信玄は確信している様子で、そう断言した。

それから武田軍は戦線を僅かに後退させると、陣を構えて今川軍と対峙した。

しかし、それ以降は一切動かず、不気味な静寂を保ち続けた。その様子はまさに『静かなること、林の如く』。侵攻してきているとは思えぬ様相である。

一方で今川軍も動かない。

元より武田軍の侵攻を迎え撃つ立場であり、武田の動きを警戒しな

がらも自分達から攻める気配は無い。

そうした状況が三日続いた。

だが、開戦から四日目の朝、遂に盤上が動く。

その日の早朝、寝所から起き上がった信玄は空を見上げると、獲物を前にした虎が如く歯を剥き出しにした。

「さあ、攻め時だ。」

天から落ちる一粒の雫が、信玄の頬でピチャリと跳ねた。

今宵はこれまでに御座りまする。

生きるため

戦場に雨が降る。

明朝より降り出した雨は一刻もすると本降りとなり、風を纏って横殴りに人馬の体を叩いた。

秋葉山の山頂に築かれた今川軍の陣、その中心にて今川氏真は物憂げに眼下の光景を見下ろしている。

「……流石、晴信の義姉上。戦のやり方をよくご存じだ。」

武田軍は深紅の波となって今川軍に迫りつつあった。

騎馬の機動力を生かした神速の突撃、されどその隊列は整然とし、足並みに一切の乱れは無い。並の軍隊では止める事は適わないどころか、容易に蹴散らされてしまうだろう。

「なあ、元信、この天気で鉄砲は使えるかな？」

「恐らく無理でしょう。こうも風雨が強いと、火縄が湿気て火が着きません。」

氏真の質問に、駿河先方衆の一人、岡部元信は無慈悲に答える。

元信は若手なれど幾多もの戦に身を置き、手柄を上げてきた男である。軍事に関して憶測や希望的観測を交える事はなく、現実として目の前にある事実のみを主君に伝えた。

その答えを聞いて氏真は大きくため息を吐く。

「…そうか、分かった。鉄砲隊には後方に下がるように伝えよ。ここから先は我らで対応すると。」

「承知しました。そのまま、私は前線の指揮に就いても？」

「ああ、宜しく頼む。」

氏真が許しを出すと、元信は頭を下げ氏真の言葉を伝えるべく天幕の外へ出る。

残された氏真は恨めしそうに曇天を見下げた。

「……分かつてはいたさ。戦において晴信の義姉上は容赦をしない。苦しい戦になるに決まっている。」

だが分かつてはいても、目を逸らしたい現実は存在する。

戦国最強と恐れられ、天下に名を轟かせる武田軍が氏真の首を狙っ

ていた。

「…本当に、どうしてこんな事になっちゃったんだ。大名なんて、俺の器じゃないのに。」

氏真は、望まずして名門今川家の当主となった。姉の義元さえ健在ならば、その弟として悠々自適な日々が送れただろう。例え軟弱と馬鹿にされようと、大名として何十万もの領民の命に責任を負う立場に比べればずっとマシである。

今この瞬間も、氏真は迫り来る武田軍に背を向け、逃げ出したくて仕方無かった。

だがしかし、氏真は逃げ出すわけにはいかなかった。

「…父親に成ったんだ。俺の後ろには、女房と産まれたばかりの姫がいるんだ。下々の者達を見捨てて逃げる姿なんて見せられないだろ。」

為政者としての誇り、そして人の親としての矜持が、氏真を戦場に踏み留まらせた。

「御武運を」と言って送り出してくれた妻の顔。そして自身の小指を握った、娘の小さな手の感触を思いだし、氏真は迫り来る武田軍を睨んだ。

「…掛かってこい、武田信玄。今川と、父親の意地つてもものを見せつけてやる！」

これは厳しい戦になるな。

武田軍の先駆けを務める山県昌景は、今川軍の様子を確認すると心中で呟いた。

今川軍の士気が高く、陣形も守りを重視した重厚な構え。同数で攻めるには少なからず味方の損害を覚悟せねばならぬだろう。

「だが、ここで引く訳にはいかない。駿河を奪わなければ、武田はこの

先生き残れない。」

昌景の胸中には悲壮な覚悟があった。

今回の戦、武田は多大な悪名を背負っている。血の同盟を結んだ相手を裏切り、一方的に難癖をつけ侵略を行った。如何に力がモノを言う乱世であつたとしても、人道を大きく外れた行為と言う他無い。

事実、武田家中にあつても今回の侵攻には疑問を覚える者も多い。だがそれでも、武田家は盟約を破つて覇道を進む道しか選べなかつた。そうしなければ甲斐の民を養えなかつた。

甲斐の国には海が無く、周りは山に囲まれ、農耕に適した土地はほんの僅か。冬に成れば雪が降り積もり、一部の土地には原因不明の奇病が蔓延している。毎年、数えきれないほどの程の幼子が飢餓に苦しみ、多くが物心つく前に命を失つていった。

信玄は、そんな厳しい運命を強いられる甲斐の民の生活を変えようとした。

金の鉱脈を掘り、堤を建設し農地を増やし、戦を仕掛けて他国を併合し、三国同盟を結んで安定した商業路を確保した。

だが、それでも甲斐の民を救うだけの富は得られない。いまだ多くの民は飢え、明日をも知れない生活の中にいた。

足りない分は、他から奪わねばならない。

それが、武田軍の正当なる義。民を喰わせるのが甲斐武田家の大名としての責務であつた。

「……………前線を守るのは、岡部元信か。」

今川の前衛に難敵を認めた昌景は、思考を中断して手綱を握る手に力を籠める。

相手は腐つても名門、東海の覇者たる今川家。それを強く意識し、頭を目の前の戦に切り替えた。

例えどれ程悪逆無道と罵られようと、戦に勝ちさえすれば空気は変わる。

御屋形さまが背負う悪名も、幾分か軽くなる。

昌景はそう信じて槍を振るう。そう信じる他無いのだから。

「敵方の先駆け、左翼に展開しています！」

「孕石の部隊を向かわせろっ！決して後方に廻らせるな！」

「中央に敵方の増援！鬼美濃です！」

「此方も増援を向かわせる。それまで踏み留まれ！」

「畜生っ！風が強すぎて矢の狙いがさだまらねえっ!？」

「だったら代わりに石でも投げつけてやれっ！」

武田軍の猛攻を受ける今川軍の最前線で、岡部元信は必死に指揮を取っていた。

戦線は膠着。或いは、やや武田軍が優勢である。

騎馬隊の機動力を駆使した突撃と、縦横無尽に陣形を変え立て続けに攻め手に変化を与える用兵術に、今川軍は着いて行くだけでも一杯一杯だった。

守りに専念する事で何とか戦線を保っているが、何かの拍子に一気に陣形を崩されてもおかしくない。

「何とか、士気だけは持ちそうだが…」

今川軍は武田軍の恐ろしさをよく知っている。

武田軍の蹂躪を受けた村や街がどの様な惨状になるのか、父祖の代で武田家と戦ってきた先達から教わっているからだ。

だからこそ、今川の者達は武田軍を恐れながらも、決してこの場を通す訳にはいかなかった。守るべき者達の為に。

「ん？」

そうして元信が檄を飛ばしていると、一騎の騎馬武者が元信目掛けて疾走してくる。

「ハッハァー!!てめえが岡部元信だなっ!?!奥近習六人衆が一人、土屋昌統だっ!!勝負っ!!」

そう言うが否や、昌統は元信に向かって槍の一撃を撃ち込む。

「くっ!?!」

元信は勢いに乗った昌統の刺突を何とか自身の槍で受けて逸らす

と、衝撃を逃がす為に後ろに飛んで距離を開けた。

「…此方に名乗り返しもしさせずに首を狙うとは、些か無粋が過ぎるのではないか？」

「ハハハハッ！そう言ってくれるな。今川の武の要として名高い丹羽守を相手にすると思うと気持ちが悪くてしまったんだ。許せ。しかし、俺の一撃をこうも簡単に捌いて見せるとはなあ。よしっ！」

昌続はポンツと手を叩くと、元信に向かって期待を籠めた視線を向ける。

「元信、お前武田の家臣になれ。」

「…何を言うかと思えば、どういう了見だ？」

「お前ほどの猛将を死なせるは惜しいっ！お前の武才は武田家でもかなり上に入るぜ。それに、御屋形さまは心の広い御方だ。敵将であれば、実力があれば召し上げて下さる。今川氏真なんて軟弱者の下より、よほどお前に手柄を挙げさせて下さる筈さっ！！」

「……一応、誉められたと思っておこう。だが、やはり御主は無粋だ。戦場のど真ん中、それも部下達が大勢いる前です話じゃ無いだろうに。」

「ありや、ダメだったか？」

「当たり前だろ。もう少し調略について学んでこい。それと…」

元信は昌続から目線を逸らさぬまま、後ろに向かって槍を振るうと、元信を背後から切りつけようとしていた足軽の首をへし折った。「俺に不意打ちを食らわせたかったら、もう少し遣り方を考え直してこい。刺客から殺気が漏れてるぞ。」

「……ご忠告痛み入る。しかし、本気で御前を勧誘したくなってきたな。一応聞いておくが、どうだ？」

「そういう事は勝ってから言え、だ。」

槍を握り直すと、今度は元信から走り仕掛けた。

戦場は動き続ける。多くの人間の思惑を孕んで。

ある者は領民の為。

ある者は主君の為。

ある者は我欲の為。

ある者は誇りの為。

そこに善悪は無い。殺し合いに正と邪は無い。

有るべきは勝者と敗者のみ。それによってもたらされる結果のみである。

だが、史実における今川の滅亡を正史とするならば、正義は武田にあつた筈だ。今川の大名としての命運は、ここで途絶える筈だった。

それは、姫武将が罷り通る歴史においても同じであつた。正史と同じく、今川は武田に滅ぼされる運命にあつた。

違いがあるとすれば、一人のイレギュラーの存在。

正史においては関係なく、織田信奈の本来の運命では既に死没した人間が、何の因果か前世の記憶を持って謀を成した。

その結果、正史とも、姫武将の歴史とも違う運命が動き始める。

今まさに、歴史が動くその時が訪れようとしていた。

戦闘が始まって一刻が経ち、武田信玄はいまだ陣中を動かない。

その視線は前線へと向けられ、真剣な眼差しで戦況を見守つてい

る。「…思いの外、今川が粘り強いな。」

「はっ。將兵共に戦意が高く、よく鍛えられています。」

信玄の呟きに山本勘助が素早く答える。感嘆する口調には、素直に今川の兵を称賛する様子が見て取れた。

「一方此方は、少し動きが固いな。雨でぬかるんでいるのもあるが、將の命令に対する騎馬隊の反応が遅い。」

「此度の戦が初陣の者も少なく無いので、それも仕方無いかと。」

いずれにしろ、戦後に訓練をし直す必要が有りますな。」

武田騎馬隊の全盛期を知る者からすれば、今の騎馬隊の錬度は物足りない。

速やきこと、風の如く

静かなること、林の如く

侵略すること、火の如く

動かざること、山の如し

『風林火山』の名を体現し、幾多の戦場で猛威を奮ってきた武田騎馬隊は、川中島の戦いと義信事件を経て現在再構築の途上にある。

今はまだ不十分な箇所も多い。だが、今後実戦を重ねて経験を積み、以前の騎馬隊を越える真の最強軍団と成り得る。

それを考えれば、今回の戦で少なからず苦戦を強いられているのは悪くない経験である。

「…氏真の奴も、中々やるな。」

信玄は口元に小さく笑みを作りながら、そう呟く。

姉に似た軟弱者という評もあつた氏真であるが、実際に戦つてみると良く配下を纏め上げ、堅実な策を以て真正面から武田を相手にして見せた。

このまま行けば武田が押し切るであろうが、劣勢に成ろうとも本陣に立ち続け、逃げる様子を見せない姿勢は信玄にとって好ましい。

出来ることなら、配下として取り立てたいものだ。

信玄は既に氏真の事を気に入っており、胸中には死なせたく無いという想いが芽生えていた。

或いは、不本意ながら死なせてしまった義信の残像を、義理の弟である氏真と重ね合わせてしまっていたのかもしれない。

「至急っ！至急ですっ!!」

「なんじゃ騒がしいっ!」

唐突に、信玄の陣に伝令の兵が慌てた様子で転がり込んでくる。

あまりの狂騒に勘助が一喝するが、伝令は尚も顔を青くしたまま信玄の前に平伏する。

「後方より兵団が近づいて来ています！旗の家紋から、今川の兵で

すっ!」

「なにっ!?!」

伝令の報告を聞き、信玄の視線が一気に鋭くなり、同時に口角がニツと吊り上がった。

「ここに至って伏兵を使うか。ふんっ、氏真の奴め、最期まで徹底的に武田とやり合うつもりだな。」

ああ、氏真よ。やはりお前は軟弱者などでは無い。この武田信玄に真っ向から立ち合い、あらゆる策を以て勝利を掴もうとするは紛れもなく戦国大名の在り方だ。願わくばもつと早くお前と出会いたかった!

感激と郷愁の両方に心の内を乱しながらも、信玄は威厳ある態度で伝令に聞く。

「それで、伏兵の数は? 五百か? 千か?」

「そ、それが…」

信玄の問いに伝令は言い淀むが、ゴクリと唾を飲み込むと答えを口にする。

「い、一万です。」

「………すまん、聞き漏らしたようだ。後方から向かって来る敵兵は何人くらいだ?」

「約一万に御座いますっ! 後方より一万の大軍が、此方に向かって来ていますっ!!」

「っ!?! 馬鹿なっ!!」

伝令の言葉に血相を変えた信玄は、周囲が愕然とするのを他所に天幕から出る。

そのまま後方へと向かい、物見が良い場所に登ると富士川方面を注視する。そこで信玄が見たものは…

「なんとということだ………」

伝令の報告は正しかった。

風雨をもものともせず突き進むは、『今川赤鳥紋』を旗にする約一万の軍団。

その大軍が、秋葉山を攻め立てる武田軍の背中に、猛然と喰らい付

こうとしていた。

「何故だ？何故これ程までの大軍が我らの後ろにいるんだ!?誰も気が付かなかったのかっ!?」

信玄の問いに答える者はいない。

誰も現実を直視出来ていない、いや、現実を認めたくなかったのだ。後方の敵が進むのは武田が侵攻路上。即ち、武田軍は退路を断たれ、挟み撃ちにされた袋の鼠となってしまっていた。まさしく、絶対絶命の危機である。

どうして背後を取られたのか？

いや、そもそもあれ程の大軍を今川はいつの間にも用意したのか？

今川は西にも戦線を抱え、この戦には既に東西合わせて三万五千の兵を動員している。

ここに更に一万を追加招集するのは、いかに今川が裕福とはいえない可能だ。

仮に招集をかけたとしても、侵攻に合わせて駿河に忍ばせた乱波達が気が付かない訳が無い。

絶対に有り得ない筈の絶望的な状況を前に、信玄ですらも言葉を亡くしてしまっていた。

「そんな……まさか……やりよったのか……」

そんな中、信玄に追い付いた勘助は、目の前の状況を確かめると呆然と天を見上げる。

そして両手で頭に手をやると、低い唸り声をあげて頭を掻きむしつた。

「おのれ、おのれ、おのれええええっ!!!クソッ!なんて事をしてくれたんじゃない!!」

「おい、勘助っ!いったい何が起きているんだ!!何故このような状況になっちゃったんだ!?!」

何かに気付いて悪態を吐く勘助に、信玄が絶叫めいた問いをすれば、勘助は血走った目を向け答えを出す。

「御屋形さま、我々は嵌められたのです。あのタヌキ娘は、最初から今川と繋がっていたので御座いますっ!」

ところ変わって、西遠江は天竜川の西岸側に面する『曳馬城』。

その一室で、松平元康は紙に字を書いていた。

「よしっ、できました。曳馬城の新たな名前は『浜松城』です。今日からこの城は、浜松城に改名します。」

「誠に良い名かと！やはり曳馬ですと、『馬を引く』、即ち退却を連想してしまい縁起が良くないですからなあ。」

そう言つて手を叩くのは、元康の家臣の酒井忠次。

松平家では筆頭家老として、文武万能の働きを見せる重臣である。

元康にとっては産まれた時から側で仕えている、育ての親と言つても良い存在だ。

「城の名前も決まりましたし、今度は三河守としての名前を考えなければなりませんね。やはり無難に源氏の流れを汲む名字が良いと思いますから、ここは我が家系図にある徳川というのが……」

「失礼、よろしいでしょうか？」

元康が新たな家名に想いを馳せていると、石川数正が姿を表せる。

「ん？どうしました、与七郎？」

「西遠江の国人達が催促に来ています。そろそろ川を渡つて東遠江に行つてはどうかと。」

「うーん、兵が疲れているから当然無理だと伝えて下さい。」

松平軍は三河で挙兵すると、猛然と西遠江へと侵攻した。

その途上にある井伊家をはじめとした西遠江の国人達は、あっさり松平に対して従順を示し、その戦列に加わった。

そうして勢力を増しながら天竜川にたどり着くと、対岸の今川軍を認め侵攻を一旦停止。陣形を整えてから即時開戦するものと思われていた。

ところが、松平と今川は睨み合ったまま一切動かない。それどころ

か、翌日には今川軍は松平軍に背を向けると撤退を開始したのだ。

まさに追撃の絶好の好機。にも拘らず、松平軍はまったく動こうとせず、黙って今川軍の撤退を見送った。

「それにしても、西遠江の国人達も節操が無いですな。仮にも今川の家臣であつただろうに、それを攻めるように進言するとは。」

「まあまあ、忠次さん。小領主が乱世を生き残るのは大変なんですから。それに、主家を見限った事を私達がとやかく言う立場にはありませんよ。」

「…はつ、失礼いたしました。」

「とはいえず、少し国人さん達の動きが気になりますね。何だか私達に早く遠江を支配して欲しそうにしてるんですよ。」

「その予想、間違いではありませんぞ。」

そう言つてヌツと襖の陰から現れたのは服部半蔵である。半蔵は懐から書状を取り出すと、皆の前に放り投げる。

「半蔵さん、これは？」

「西遠江の国人達が武田とやり取りしていた証拠です。どうやら国人達は、武田軍から調略を受けていたらしい。松平が侵攻を開始したら、下手な抵抗はせずに松平に付けと。そして、武田が松平と戦をする際に武田に付けば、所領安堵の上に武田での地位を約束するとな。」

「あやつら武田と繋がっていたのかっ!？」

半蔵の報告に数正は激怒する。

武田は初めから駿河だけでなく、遠江までを支配下に治める事を目論んでいたのだ。駿河の侵攻に合わせて松平に遠江へ侵攻するように唆す一方で、後々の松平との戦を見越して遠江の国人達に唾を付けていたのである。

「…やつぱり、信玄さんは信用できませんね。吉姉さまの提案を受けておいて正解でした。」

「…今頃、今川の兵は駿河に着いているでしょうかな?」

「多分もう着いてるんじゃないですか。氏真さんは世間で言われるほど暗愚ではありませんから、きつと上手くやってくれるはずですよ。」

そう言った元康の瞳に、不意に黒い陰が帯びる。

「……聞いた話によれば、武田の支配を受ける信濃の民は、武田の圧政に大変な苦勞をしているとのことでしたね。」

「……はっ、武田は他国を攻めるために、甲斐以外の領国から搾取の限りを尽くしていると。」

「可哀そうですね、助けてあげたいですね。」

のんびりと、されど何処か腹黒さを感じさせる言葉を紡ぎながら、元康の視線は既に北を向いていた。

「……信玄は撤退を選んだようだな。」

今川軍の本陣で、戦況を見つめていた氏真は静かに呟いた。

「我ら今川本隊の兵力は二万五千。別動隊の兵力は一万。此方がガチガチに守りを固めているから、このまま無理に本隊を攻めても、攻め切るには時間が掛かり、その間に別動隊から挟み撃ちにされる。それならば全軍を一気に反転させ、別動隊を打ち破って撤退するのが被害は少ないと判断したか？」

「恐らくそんな所でしょうなあ。こういった判断を即座に出来るのは、武田信玄が名将である証左で御座います。」

氏真の分析を、隣に立つ猿顔の小男が肯定する。

この小男は今川の間人ではない。この戦に際し、とある筋から氏真が雇った鉄砲隊の隊長、とされている男である。開戦初日に武田の先遣隊を撃退する働きを見せるも、それ以降は特に目立った動きは無く、今日に至っては雨で鉄砲が使い物にならなくなったので、氏真の命を受け後方に下がっていた。

そんな小男に対し、氏真は呆れたような視線を向ける

「…その名将を手玉に取る策を講じた者が言う、皮肉にしか聞こえんがな。」

氏真は薄々感づいている。今川を武田に勝たせる策を、いったい誰が考えたのかを。

この戦で今川は前もって、松平と密約を結んでいた。

その内容とは『松平が西遠江に侵攻するのを見逃す代わりに、天竜川以東の地域には手を出さず曳馬城に駐留する』というものである。

これにより西の戦線に兵を割く必要が無くなった今川軍の別動隊は、松平軍が曳馬城に入城したのを確認すると港に向かい、船に乗って駿河湾を横断。富士川沿いの港で下船すると、武田軍の侵攻路を通って武田本隊の背後に現れたのであった。

この作戦は、一年前に臨濟寺で行われた会談で既に話されており、武田が駿河侵攻に松平を巻き込む事を見越して練られたものである。「武田信玄は海を知りませぬ。故に海上輸送の輸送能力を知らない。このようにして背後を取られるのは理解の範疇外にあったでしょうな。」

「初日に鉄砲隊の存在を示して容易に攻め入れぬようにし、時間を稼いで遠江から駿河に別動隊を輸送し背後を取る。鉄砲に海上輸送。どちらも信玄がよく知らない物だった。信玄にとって未知の存在を使う事で、この状況を作る事が出来た。それにしても、武田軍の動きが急に悪くなった気がするんだが。」

氏真が指摘した通り、反転撤退の指令が出た直後から、それまで整然としていた武田軍の動きが急に緩慢になっていた。

まるで命令の内容が理解できていないように、ぎこちなく、バラバラに、どこか戸惑った様子で陣形を変形させており、結果として陣形が歪になり一向に撤退が進まない。

「予想通りでありますな。集めた情報によれば、武田軍は現在再建途上。経験の浅い兵が多く、即座の対応が難しいのでしよう。そして何より、武田信玄が常勝の大名であった事。それが足を引っ張っておりますな。」

「常勝であることが足を引っ張っているだど？」

「信玄は常なる勝利を目指し、慎重に戦準備を進め、万全を期して戦に臨む者。故に武田軍は常勝を極め、最強の軍団と成り得たのでしよう。しかし、それは言い換えるなら敗北の経験に乏しいという事。負けた事が無いというのは、勝った事がない事より遥かに悪しき事です。りまする。」

武田信玄は常勝の将であるが、決して無敗の将というわけでは無い。

父親から家督を篡奪する以前、まだ大名として経験の浅かった頃、武田晴信と名乗っていた時には少なからず敗北というのを経験している。

幾多の勝利と敗北を積み重ね、その経験を糧にして出来上がったのが武田信玄という名将なのだ。

しかし、その下に付く者は違う。

彼らの多くは、常勝となった武田軍しか知らない世代であった。

敗北を知るのは、家督篡奪前後の苦しい時期を生き抜いた古参の兵のみ。地獄のような撤退戦を経験しているとすると、更に少なくなつた。

故に、武田軍は戸惑うばかりで一向に撤退できない。或いは、目の前に迫った敗戦という現実を受け入れられないでいるのかもしれない。

そんな敗者たちを、猿顔の小男は虫けらでも見るような冷たい表情で見下ろし背を向けた。

「さて大勢は決しましたので、儂はこれで失礼します。駿河での後始末、滞りなきよう願います。」

「…ああ、大丈夫だ。すでに配下を向かわせている。」

「それは良きかと。ああ、儂の配下の忍びは残しておきます。彼の者には甲斐への工作も命じておりますので、そちらに要件があればどうぞお申し付けください。少々舌足らずな所は有りますが、優秀な女子です。」

「…そうか、助かる。」

猿顔の小男に氏真は短く答える。その顔にはどこか苦悩めいたも

のが見えた。

「…氏真さま。」

そんな氏真に、小男は無表情になって告げる。

「戦国大名に、成られよ。」

それだけ言うと、小男は陣から出ていった。

氏真は暫し無言のまま、じつと戦場を見下ろす。

だが暫くして大きく息を吐くと、スツと力を込めて顔を上げる。

そして、味方全員に聞こえるように声を張った。

「皆のものつ、あれなるは我らが駿河の地を踏み荒らさんとする侵略者であるっ！我らが親兄弟を殺し、子孫を拐わし、女どもを犯し、財を奪い、先祖が積み上げてきた誇りと歴史を穢し尽くさんとする悪鬼が如き輩共だっ!!」

氏真は顔に力を籠める。

瞳に怒りを宿し、口元を侮蔑に歪ませ、顔色を紅潮させ、己の全ての憎悪と憎しみをただ一心に一人の女へと向けた。

「信玄許すまじ。」

氏真は願った。この憎悪が、将兵達に伝播することを。将兵達が、修羅と成つてくれることを。この憎悪が、本心であつてくれることを。

「殺せ、殺せつ、殺し尽くせつ！憎き武田のクソ共を一人たりとも生きて駿河から返すなっ!!さあつ—」

東海の、新たな覇者の采が振るわれた。

「いざ皆の衆、前へ。」

庵原の戦いの顛末について、後年記された『今川家略記』において、

次のように記されている。

氏真公、武田を散々に打ち払いこれを退散す
信玄の将兵数多討ち取られ姫武将共捕えらる
之を以て今川大勝す

今宵はこれまでに致しとう御座りまする。

囲まれた虎

「そんなわけがあるかあああつ?!?!」

駿河某所にある屋敷にて、一人の老父が憤怒の咆哮を上げる。

目は血走り、顔を真っ赤に染め上げ、怒髪天を衝く様相はさながら狂虎のようであった。

武田軍敗北

その報を老父に伝えた男は、激高する老父の威容を恐れ、顔を下げて震えるばかりである。

「太郎が負けただと。有り得ぬっ！氏真はまともに戦に出たことも無い未熟者だぞ！そんな奴に太郎が負けるはずが…」

「ですが、市内では既に今川軍が勝利の凱旋をしていると。武田の将は悉く討ち取られ、信玄公も生死不明との事です。」

「馬鹿な…太郎が……」

老父はフラフラとよろめき、力が抜けた様子で腰を落とす。

この老父の名は武田信虎。

武田信玄の父にして、武田家の先代当主である。

娘の信玄に家督を篡奪され国を追放された信虎だったが、信玄による武田家の躍進を見て娘を認めるようになり、陰ながら武田家を手助けするべく暗躍していた。

今回の駿河攻めでも、開戦前に駿河の内情を秘密裏に甲斐に流すなどの間諜働きしている。

その後、決戦を前に住み慣れた屋敷を離れて駿河郊外に隠れ、武田軍の吉報を待っていた信虎であったが、無情にも流れてきたのは武田軍大敗北の悲報であった。

「何れにせよ、此処に居てはまずいです！武田が勝ち、駿河が混乱しているならばまだしも、今川が勝ったとならば信虎様の御身を探すは必定！すぐにでも、駿河を離れましょう！」

「う、うむ。そうだな。せめて六郎だけでも…」

いまだシヨックから立ち直れずとも、配下から促され信虎は思うように動かぬ体に活を入れ、何とか立ち上がった。

しかし、それとほぼ同時に部屋の襖が勢いよく開かれた。

「失礼仕るっ！武田信虎殿、我が主の命により、その身捕らえさせていただく！」

「くっ!? 貴様っ、関口かつ!?」

現れたのは、今川家家臣の関口氏広。庵原の戦いでは留守役として今川館に留まっていた男である。

その後ろからは、装備を固めた兵が続々と部屋に雪崩れ込み、信虎たちを囲んでいく。

「信虎殿、神妙になされよ。敵方に与したとはいえ、貴公は我が主の親族。手荒な真似は致したくない。大人しく下れば、命は保証しよう。」

「ぐぐっ、おのれえ!!」

「それと、六郎様は隣の部屋か?」

「下郎めがつ！真の狙いは六郎かつ!?!」

氏広の問いに信虎は再び激昂する。

近くにあった刀を抜くと、その切っ先を氏広に向けた。

「氏真に伝えよ。我は甲斐源氏第十八代当主武田信虎っ！我に拝謁したくば自ら出向いて来いとっ！」

「……やむを得ぬ。やれ。」

氏広のその言葉と共に、鎧武者たちが一斉に信虎に切り掛かった。

それからどれほどの時間が経っただろうか。

部屋からは虎の咆哮が如き叫び声と、刀が打ち合う金属音、そして悲壮な末期の悲鳴が暫し続いていた。

だがそれもやがて静まり、部屋には鮮血を浴びた氏広達今川の兵と、物言わぬ二つの軀があった。

氏広は配下が差し出した手拭いで血を拭い、息を整えると隣の部屋に続く襖を開ける。

その先では、三人の侍女達が何かを隠すように部屋の隅で固まっていた。

「……どけ。お主たちの主に話がある。」

氏広がそう侍女に言葉を掛けると、侍女の一人が短刀を抜いて氏広

に向ける。

一瞬氏広の視線に冷たい殺気が宿るも、短刀を持つ手が震えているのを認めると、ゆっくりと近づいて短刀を持つ手に己の手を重ねる。

「ひっ!?!」

侍女は氏広の手を振り払おうとするが、どれほど力を込めても掴まれた手は全く動かない。

氏広は侍女の指を一本一本短刀から離していくと、短刀を奪い取って遠くへ投げる。床に刃が刺さった音に、侍女が小さな悲鳴を上げた。

「…安心せよ。我らが用があるのはそちらの御方だ。」

氏広は出来るだけゆっくりと、優しく声を掛ける。

侍女たちが隠していたのは一人の女性であった。質の良い着物を纏った姫である。

そしてその姫もまた、怯えながらも身を挺して氏広から何かを隠そうとしていた。

「…大丈夫です。貴方の身も、六郎様の御身も、決して傷付けたいとお約束します。我々はあなた方を御迎えに参ったのです。」

姫が抱きかかえていたのは幼子である。母である姫にしがみ付き、口を一文字に結んで潤んだ瞳で氏広を見ている。

「…さあ、共に参りましょう。貴方様を、武田家当主にして差し上げます。」

氏広は、そう言って手を幼子に向けて差し出した。

幼子は、武田信虎の息子『武田六郎信友』は、恐る恐るとその手を握った。

岐阜城の広間、そこで信奈は秀吉からの報告書を読んでいた。近くには良晴もいる。

報告書を読み終わった信奈は、疲れた様子で目を揉むと小さく息を

吐いた。

「今川が武田に勝ったわ。信玄は討ち取られたって噂もあったみたいだけど、何とか甲斐に逃れたみたいね。どうやら妹の信廉が影武者として身代わりになったそうよ。家臣団も山本勘助、三枝守友、真田信綱、真田信輝、原昌胤らが討ち死。山県昌景、馬場信春、内藤昌豊、土屋昌統らが捕らえられ、武田騎馬隊は壊滅状態。これ以上に無い大惨敗ね。」

「や、やべえな、おい。今川が武田に勝っちゃったよ。しかもそんな圧倒的に。」

武田の被害状況を聞いて、良晴は顔を引き攣らせる。

某人気歴史シミュレーションゲームを愛好していた良晴からすれば、この時期の武田家に義元亡き後の今川家が勝つのがどれ程難しい事か想像すらできない。

況してや、現代でも有名な武田家武将の被害状態を聞く限り、史実における『長篠の戦い』と同じか、それ以上に悲惨な状態である。

これを成すのに裏で糸を引いていたのが秀吉だったと信奈から聞いて、良晴は改めて豊臣秀吉という天下人の恐ろしさを実感したのであった。

何より恐ろしいのは、これで完全に歴史の流れが変わってしまった事であろう。

本来であれば武田家は今川家を滅ぼし、その後徳川家、そして織田家と戦うことになる。

しかし駿河侵攻が失敗に終わった事により、今後武田家と織田家が戦う可能性はかなり低くなったと言わざるを得ない。

これは即ち、良晴の持つ未来知識が、また一つ使い物にならなくなったことを意味していた。

「ていうかこれ、よく考えたら武田家はかなりヤバい状況じゃないか？」

「よく考えなくてもヤバいわよ。同盟破りをした上でこのザマよ。武田信玄の名声は地に落ちたと言っつていいわ。国人達の動揺も凄まじいでしょうね。」

「あつ、そついや聞いたことがあるな。甲斐は武田家が盟主となつて
いるけど、実態は複数の国人達による寄り合い所帯で、武田家は歴史
と国力が他の国人よりも大きいから中心になつていただけだつて。
だから、国人達も独立意識が高くて、一旦崩れ始めると一気にバラバ
ラになつてしまふんだつてな。NOKの番組で言つてたぜ。」

「何よ得鶴一系つて。でも間違つては無いわね。武田信玄が家督の篡
奪を成しえたのも、家臣である国人達の支持を集められたからよ。先
代の信虎が国人達への求心力を失つたから、信玄は武田家の当主に成
れた。逆を言えば、国人達からの支持を失うと、信玄も容易に家督を
奪われる。それが甲斐国の実情なのかもね。」

本来家督の継承とは、先代が次代に家督を譲ることを内外に示すこ
とで成しえるものである。

信玄が家督の篡奪を成しえたのは、他ならぬ国人達の支持があつた
からだ。

信虎より信玄の方が我らが盟主に相応しい。そうした国人達の意
向が反映された結果なのだ。

武家社会という絶対権力者を頂点にする構造にありながら、どこか
民主的な政治構造を内包した組織。

それが武田家という武家の内情であつた。

「とにかく、こうなつたら秀サル以案に乗るしかないわね。正直実現
する可能性は高くないと思つてたけど、今川が武田に勝利した以上や
るしかないわ。良しサル、付いて来てつ！」

「お、おう。でもどういふ？」

そう尋ねる良晴に、信奈はニヤリと笑つて行き先を告げた。

「兄貴のところよ。」

尾張国には那古屋城と鳴海城の丁度間に、古渡城という城がある。
良晴を伴つて古渡城に到着した信奈は、取り次ぎもそこそこに門を

くぐる。そうして勝手知る様子でズンズンと城内を進んでいくと、大広間に当たる場所に着く。

そこには、口髭を生やした精悍な顔つきの男が待っていた。

「久しぶりだな、信奈よ。お前の噂は聞き及んでいる。何でも、美濃を上手く統治しているようだな。父上を散々に苦しめたマムシの国が、今や織田の領地に成ろうとは。父上が生きていればきつと「口上が長いつー!」痛っあー!?!」

長々と一人語りを続ける男に、信奈は持っていた扇子を投げつける。扇子は男のどこにクリーンヒット。男は痛みのみあまり叫び声を上げた。

「おい、何すんだ吉っ?!いきなり人に向かって扇子を投げつける奴があるかっ!!」

「知らないわよ。兄貴の口上に長々と付き合う時間は無いの。」

「ぐぬぬ、相変わらず兄への敬意が無い妹だ。だが吉、話をするのは構わんが、この男は?」

「ああ、コイツは私の家来の良しサル。良しサル、これは私の腹違いの兄貴の信広よ。知ってる?」

「信広ってあれか?小豆坂の戦いで今川の罠に嵌って生け捕りにされて、竹千代と人質交換されたっていう。」

「ぐはあっ!!」

良晴が信広について知っていることを語っていると、当の本人は胸元を抑えて膝を附いた。

「こ、このガキツ、人が気にしていることを容赦なく抉りやがって…」「事実なんだからしようがないでしょ。っていうか、何年前の話よ。何時まで引きずってんだか。」

「うるせえ。ていうか、良しサル?ああ、これが一色義龍や北畠具教を口説き落としたとか言う相良良晴か。ほう、コイツがか…ふーん…へー…。」

信奈から良晴を紹介された信広は、興味深げに良晴の顔を覗き込むと、ニヤニヤとした笑みを浮かべた。

「な、何だよ?」

「いや。兄として、妹の好みというのは以前から興味があったが、なるほどこういうのが吉の…痛つてえっ!？」

「くだらない話するんじゃないわよ。さつ、本題に入るわよ。」

信広の足を踏みつけた信奈は、不機嫌な様子でドカリと腰を落とした。

「今川が武田に戦で勝った事、兄貴も知ってるわよね。」

「…ああ、既に尾張中、いや、東海地方はその話で持ちきりだろうな。」

「そうね。武田は強大だった分、周辺諸国への影響力も半端ないわ。中部、北陸、関東、東海。そして日ノ本の中枢たる近畿も、おのずと荒れるでしょうね。」

「まったく面倒な事だ。で、お前はそんな荒れ狂った坩堝に、手を突っ込もうとしていると?」

「そうよ。前に手紙で伝えたでしょ。兄貴にも協力して貰うつて。」

「あれやっぱり本気だったのか…:…はあ…:…」

信広は肩を下ろし、ガシガシと頭を搔く。

そして、表情を一変させ剣呑な視線を信奈に向けた。

「吉、返答をする前に一つ腹を割って話をしよう。俺はな、吉、親父の跡目を本気で狙っていた。」

信広の告白に良晴は目を見開くが、信奈は神妙な表情のまま無言を貫く。

それを見た信広は、小さく笑った。

「知つての通り、俺の母は身分が低い。親父が正室を得る前に、女の扱いを勉強出来るように宛がわれた侍女の一人で、唯一父の子を孕んだのが俺の母だ。だから俺は生まれた時から継承権を持たぬ庶子で、最初から妹弟の家来になることが定められていた。」

信広は、信奈よりも五歳年上である。だが、正室である土田御前が産んだ信奈や信澄に比べると、家中での扱いは大きな差があったと言われている。

「丁度、物心がついた頃だったな。それまで俺の側にいた者たちが、目に見えてお前や勘十郎をチャホヤし始め、俺の側から離れていった。今じゃあれも家中に示しを付ける為に必要な事だと理解できるが、当

時は結構きつかったぞ。毎日のように癩癩を起こしてな。」

「…それで、家督を継ごうと思ったのか？自分を認めさせようと思つて。」

思わず良晴が尋ねると、信広は声を出して笑った。

「まあその通りなわけなんだがな。俺に家督を継承を促したのは、親父だったんだ。」

「お、親父って、信奈達のかっ!？」

「ああ、そうさっ！ある日フラツと俺の前に現れてな。『除け者にされていじけるくらいなら、手柄を立てれるように鍛えておけ。いつその事、三郎五郎こそ織田家を継ぐに相応しい、と言われるくらいになつてみせろ。』ってな。」

その日の事を思い出しか、信広は楽し気な口調で父の言葉を諳んじて見せた。

「多分、親父は親父なりに俺の事を気に掛けていたんだろう。腐つてる息子に活力を入れてやりたかったのかもな。ともあれ、俺は親父の言葉を本気にした。抜群の手柄を上げて周りに認められ、織田家の家督を継ぐ。それが俺の夢になったんだ。」

そうして信広は織田家の当主に相応しい武将となるべく、日々鍛錬に打ち込んだ。

コツコツと努力するのを苦にはせず、勤勉に調練や勉強に励む姿勢は次第に家臣たちの間で評判になった。

元服して初陣を飾ると、周囲の助けもあり中々に目覚ましい戦果も挙げられた。

また、上に立つ者として下の者たちへの振舞にも気を使い、妹や弟たちにも良い兄として接するように心掛けた。

根が真面目な性格であったのだろう。

こうして、大名の後継者はかくと在らんという姿を磨き続けた結果、信広は織田家の後継者として少なからず支持を集めるように成れたのである。

「だが、小豆坂の戦いで全てが変わった。俺は今川の策略に嵌り、無様にも生け捕りにされた。そして親父は俺を助けるため、竹千代との人

質交換に応じたんだ。」

竹千代、当時の松平元康を手放したことにより、信奈達の父親、織田信秀の東海に商業航路を作るといふ夢は潰えた。まさに織田家の拡大戦略の転換期になる出来事であった。

「俺は挽回せねばと思つた。失敗を取り返し、親父の夢を取り戻さなければとな。だが、結局挽回の機会は訪れず、親父は死んじまつた。そしてお前が織田家の当主となった。」

不意に信広の視線に強い感情が籠り、良晴は信奈の前に出ようとした。だが信奈は手を横に伸ばすと、良晴の動きを制した。

「……まあ、親父なら吉を選ぶだろうな、とは思つてたがな。それでも、俺は自分の気持ちに蹴りを付けたくてな。一度だけ、家督の篡奪を試みた。」

信広は、信奈が出兵した時を狙つて兵を起こし、援軍の名目で清州城に入り、そのまま城を乗っ取ろうとしたことがあつた。

「しかし城の門番は俺を城に入れようとしなかつた。つまり俺を信頼していなかつたんだ。いや、信用していなかつたんだろう。どちらにせよ、結局俺は城に入る事すら叶わず、スゴスゴと撤退するしかなかつた。そこでようやく得心したのさ。俺の夢は、今川の人質となつた時に、終わつていたんだつてな。」

話を終え、信奈から目線を外した信広の瞳の奥には、疲れと達観の色が見えた。

それに気づいた良晴は、いつの間にか肩の力を抜いていた。

「まつ、長々と語つたが、今ここに居るのは己の力量も分ならず誇大な妄想を抱き、そして盛大に失敗しちまつた男の成れの果てだ。今更重大な役目を背負わされたところで、荷が重すぎる。それが俺の偽らざる本心だよ。」

「……私にとって最大の敵は、兄貴だと思つてたわ。」

「はあ。」

思わぬ信奈の言葉に、信広は啞然とする。

信奈は相変わらず鋭い視線を兄に送りながらも、口元に小さな笑みを湛えていた。

「兄貴がき、子供の頃から努力していたこと、私も知ってるわ。正直言うと、内心馬鹿にしていた。どうせ家督が欲しくてやってるだろうって。今思うと、兄貴の事を警戒していたんだと思うの。だから兄貴が今川に捕まった時も、ほれ見た事か、化けの皮が？がれた、って思ってたくらいよ。ああもう本当に、とんだ自惚れね！」

その時の事を思い出したのか、信奈は恥ずかし気に顔に手をやる。「父上の跡目を継いだ時、凄い苦勞をしたわ。ほら、私って兄貴や勘十郎と違って、よく勉強の時抜け出してたじゃない。だから、知識が足りない部分が多くて、万千代や平手の爺やがいないと出来ない事も多かったわ。その時ようやく悟ったの。兄貴みたいに、真面目に勉強してたらよかった、って。その時初めて、私は兄貴に対して敬意と、畏れを感じたの。」

その言葉に、信広は目を丸くする。

傍若無人、天上天下唯我独尊を地で行く信奈が、自分に対してそのような感情を抱いているとは思ひもしなかったであろう。

「庶子の身分で家督を継ぐ。その一心で自分を鍛え続けるなんて、なかなか出来る事じゃないわ。普通はどこかで諦め、保身の為に正室の子に媚びを売るわ。だけど兄貴は一度たりとも私達に遜ろうとしなかった。ただ只管、織田家の当主として相応しい姿を求め続け、良い兄であろうと私たちに接し続けたわ。だから私は、兄貴だけは油断できないと思ってた。もし私が不在の間に兄貴が来ても、絶対に城の門は開けちゃダメだって家臣には言ってたわ。もし、私以外に織田家のかじ取りが出来る人間がいるとすれば、それは間違いなく兄貴だから。」

生まれた時から継承権を持たぬ庶子が、己の才覚のみで家督を得るに至った例は決して多くは無い。

しかし、少ない例の中でそれを成した者たちは、例外なく時代を動かすに相応しい英雄の気質を持つ者たちである。

確かに、織田信広は英雄になることは出来なかった。

それでも、己の生まれを悲観することなく、謀略や暗闘に頼ることなく、自分の力を高めて周囲に認められる形で当主に成らんとしたそ

の精神は、英雄と呼ばれた者たちに決して劣るものではない。

「兄貴が腹を割って話してくれたなら、私も本心を曝け出すわ。私には兄貴の力が必要よ。私が夢を叶えるために、織田家が天下を取るために、兄貴の力を貸して欲しいの。御願いつ！」

真つすぐに信広の目を見つめ、信奈は力強く頭を下げた。

息を呑んで体を震わした信広は、気持ちを落ち着かせるべく大きく深呼吸をし、照れた様子で頭を掻いた

「まったく、我儘な妹様だ。そんな風に言われちゃ、断れないじゃないか。」

憎まれ口を叩きながらも、心底嬉しそうに信広は笑う。

だが次の瞬間、笑みを引つ込めると居住まいを正す。

「吉、お前の策に乗るにあたり、一つ条件がある。妹としてではなく、主として俺に命を下してくれ。」

「兄貴、それって…」

「分かってるだろ。俺はお前の兄貴だが、お前は俺の主。そこは徹底するんだ。天下を目指すんならな。」

信広の言葉に信奈は一瞬固まる。

だがすぐに顔を引き締めると、背筋を伸ばし威厳を出した。

「分かったわ。織田家当主として、織田信広に命ずる。」

そうして信奈は、『虎囲いの計』の要となる命令を、信広に対して下したのであった。

今川に大敗した武田信玄は、命からがら甲斐に帰還していた。

最強と言われた騎馬隊が壊滅し、軍師である山本勘助を失い、自ら取り立てた新生武田四天王の内の三人を捕らえられる大損害を出し

ながらの敗走である。胸内の失意は計り知れないものであった。

それでも、信玄は嘆く事すら許されない。甲斐の国人達を纏める、武田家当主という立場であるが故に。

今川の逆侵攻に備えるため、軍を再建するため、とにかく先ずは時間を稼がねばならなかった。

そこで北条に書状を送り今川との仲介を依頼すると共に、国人達へは安堵状を配って領内の動揺を抑えようとした。

しかし、そんな信玄の奮闘を嘲笑うかのように凶報が舞い込んだ。

「御屋形様、また商人から問い合わせが来てます。武田家が製造している小判の、金の含有量が減らされているという噂は本当かと。」

「そんな事実は一切ないと答えておけ。それと、その噂の出どころはまだ分からないのか？」

「それが、最初は行商人の間で広がったというのは分かっていますが、大元となった商人は他国の者らしく、その足取りは分かっていますん。」

「大方今川が送り込んだ間者だろうな。クソっ！厄介な真似をしてくれる！」

ここ最近甲斐では、甲府金山の金の採掘量が減り、武田家が製造している金の小判の質が落ちているという噂が広がっている。

無論信玄の言う通り、小判製造時における金の含有量を減らしているという事実はない。

しかし、金山の採掘量が著しく減少しているというのは、まぎれもない真実であった。

「いったい何処から漏れたんだ。金山の内情については家中でも極秘中の極秘だったのに……」

信玄は苦悶の表情で頭を抱える。

庵原での敗戦は、国人衆のみならず甲斐の領民や行商人たちにも大きな衝撃をもたらした。

そこに今回の貨幣不安である。武田家に物資を下ろしていた商人たちは、潮が引くように武田家から離れていった。

軍の再建が急務の武田家にとってはあまりにも痛すぎる。

そんな時、慌てた様子で伝令の兵が部屋に入って来た。

「御屋形様っ、駿河から知らせがっ！先代様が、今川に討たれたと！」
「っ!?そんな、父上が…」

部下からの報告に、信玄の顔が悲壮に歪む。

武田軍の駿河侵攻を支援すべく、信虎が駿河の内情を武田に流していたことは信玄も知っている。

信虎は信玄と対立した末に甲斐を追放されたが、当主だった頃から変わらず甲斐の国と武田の家族を愛していた。

勘助という師父、そして信虎という実父を立て続けに失い、信玄の心は大きく傷ついている。

が、無情なる運命は尚も信玄に残酷だった。

「大変ですっ！信濃の国人達が兵を起こし、代官の館を襲撃したとの事っ！周辺の砦も次々と落とされていますっ！」

「なんだとっ!?!」

信玄の口から悲鳴が漏れる。

信濃国は武田家に占領されて以降、一部の国人を除いて武田家の圧政を受けており、領民達は武田に対する憎しみを募らせていた。

それでもこれまで大規模な反乱が起きてこなかったのは、武田軍が最強の名を馳せていたこと、そして武田家に滅ぼされた諏訪家の遺児である『諏訪勝頼』が武田家の人質になっていたのが大きい。

いつか自分達の主である勝頼が帰ってくることを希望にし、信濃の民は圧政に耐え続けてきていたのだ。

ところが『義信事件』の後、信玄は自分の後継者に勝頼を指名した。

信玄は勝頼に自身を超える武将としての才を見出しており、その可愛らしい容姿も相まって勝頼を溺愛していた。勘助が勝頼を強く敬愛していた事も、彼女が後継者になる事を強く後押ししたのだ。

そうして『諏訪勝頼』は『武田勝頼』と改名し、正式に信玄の後継者に納まったのであるが、この事実は勝頼の帰還を待ち望んでいた信濃の民を失望させた。

何より信濃の民が落胆したのは、勝頼が自分の父母の仇である信玄

を深く敬愛しているという事実である。信濃の民からすれば、苦しい生活をする自分たちを見捨てるに等しい行いである。

結果、信濃国の領民達は更なる憎悪を武田家、信玄、そして勝頼に向けるようになった。そして、武田家の大敗北を切っ掛けに、ついに溜まりに溜まった憎しみは爆発し、今回の蜂起に繋がったのであった。

「真田に、幸綱様に鎮圧してもらうのはどうでしょうか？」

「いや、真田は嫡子と次女が戦死し、幸綱も大怪我をしている。とてもではないが兵を起こせる状況ではない。」

配下の提案を退けながら、信玄は状況の悪さに歯噛みする。

真田は武田に降った経緯から、信濃の中でも特に武田家に近い国人であり、信玄からの信頼も篤い一族である。信濃の動乱を座視することとは出来ないが、此処で真田に無理を強いては更なる離反を招きかねない。

信玄は必死に思案し、何とか鎮圧部隊の兵を捻出する算段を立てようとする。

しかし、そこに顔を真っ青にした高坂昌信が現れた事で、信玄は思考を一旦止めた。

「おい、どうしたんだ？」

「…御屋形様、やられました。」

昌信は声を震わせながら言う。その続きを信玄が促そうとすると、昌信の瞳から一滴の涙が零れる。

「今川と松平が、織田の仲介で和睦を結びました。そして、織田と今川は婚姻同盟を締結。」

「は？婚姻同盟だと？」

「はいっ！織田信奈の兄、織田信広と、今川家前当主、今川義元の婚約が発表されました！」

「なっ!？」

昌信の言葉に信玄は目を見開く。

そんなことあり得ない！嘘に決まっている！

そう口から発したいのに、衝撃のあまり喉を鳴らす事しか出来ない

でいた。

「さらに信奈は義元を旗頭にして上洛を行い、義元に將軍宣下を行うと発表！松平、浅井、北畠、そして北条がこれを支持しており、既に京の公家にも根回し済み。準備が出来次第上洛の兵を、御屋形様つ！？」

信玄の耳に、昌信の声が遠く聞こえた。

ああそうか。織田信奈。お前が糸を引いていたのだな。

真なる敵の存在にようやく気付き、体が崩れていく感覚を感じながら、信玄の意識は急速に闇の中に落ちていった。

駿河から尾張へと向かう船の上。そこに猿顔の小男がいた。

「…人は城、人は石垣、人は堀、じゃったかな？なるほどよく言ったものじゃな。結局人を守るものは人でしかない。じゃからこそ崩す方は無限にあり、やり方次第で容易に崩せるといふものよ。」

男は武田の滅びを一度見ている。だからそれをなぞってやればいだけだった。

「それに儂は城攻めが大の得意。武田の城は、落とすのが楽な方であるしろう。」

男は、秀吉は機嫌よさげに鼻歌を歌う。その眼は既に西を見ていた。

今宵はこれまでに致しとう御座りまする。

真田家と徳川家の場合

信濃国小県郡真田郷松尾城。

この城は、真田幸綱を当主とする真田一族の発祥の地とされ、別名真田本城とも呼ばれている。

だが、現在その松尾城は揺れていた。

庵原の戦いにおいて、真田家は当主の幸綱、嫡子の信綱、そして次女の昌輝が出陣。武田軍本隊の中核を成していた。

しかし、武田軍は今川の策略に嵌まり惨敗。

幸綱は大怪我を負って療養することになり、信綱と昌輝に至っては無念の戦死を遂げてしまったのである。

突然当主が戦線離脱し、後継者と後継二位が相次いで戦死するとう悲劇に見舞われた真田家は、今まさに存亡の危機に立たされているのであった。

「というわけで、武藤家に養子に入っていたこの武藤喜兵衛が実家に戻りし、真田家を継ぐことになりました。名前も真田昌幸と改めますので、どうぞよろしく。」

「ええと、これは一応おめでとうございます、で良いのかな？」

「良いんじゃないの？良く分かんけど。」

松尾城の奥では、三人の姫武将が話し合いをしていた。

新たな真田家当主への就任を宣言したのは、幸綱の三女の昌幸。

元は喜兵衛と名乗っていた彼女は、その優れた才を信玄に認められ、断絶していた武田家に連なる名家である武藤家の名跡を継ぎ、武藤喜兵衛と名を改めた。

が、実家を襲った苦難に対応すべく、姓を真田に戻して当主に就任する事になったのである。

そして、不安げに当主就任の祝辞を述べるべきか否かを悩んでいるのは四女の信之。

何も考えていない様子で適当に返事を返すのは五女の幸村である。

なお幸村は本来、信玄の妹にあやかり『信繁』と名乗っていたのだが、頭の出来があまり良くなりなく画数の多い漢字を書けないたため、勝手に

に『幸村』に改名したのであった。それで良いのか真田家…

「しかし姉上、武田はどうなってしまうのでしょうか？信玄公は健在とは言え、武田騎馬隊は壊滅。多くの将が討ち死にするか捕虜となり、甲斐の国は大混乱となっていると聞きますが。」

「案ずる必要はありません、源三郎。武田家の要は信玄公。そこが健在なら、いくらでも立て直しは出来ます。武田家は歴史ある名家。浅間の山が火でも噴かない限り、武田家が滅びる事はありません！」

「おおっ!!」

「……つて、言えたら良かったんですけどねえ。多分武田は滅びますね。」

「ええええええっ?!?!」

「…そりゃ火くらい噴くでしょ。火山なんだから。」

あつさりと武田の滅びを予言した昌幸と、それに驚愕する信之。そして幸村はどこかズレた感想を口にしていた。

「そんな驚く事でもないですよ。さつき源三郎が言ったじゃないですか。武田騎馬隊は壊滅、将の大損失、国人達からの信頼失墜。何より先日発表された織田と今川の婚姻同盟。あれに賛同した大名の名を見るに、完全に武田包囲網ですよ。」

「つまり、数か国が完全に武田を潰しに来ていると?」

「まあそうですね。正直どこまで武田を追い込もうとしているかは分かりません。そもそも、今回の包囲網の盟主が何処にあるのか？北条が此処まで大胆な策を打ってくるとは考え難いですし、恐らく今川か織田のどちらかですかね。で、そんな事よりも我が家に対応しなければならぬ直近の問題は、諏訪で起きている一揆です。」

武田家への不満に端を発する信濃の一揆は、旧諏訪領の国人達を中心に瞬く間に広まり、未だ収まる気配を見せていない。

敗戦のダメージが大きい武田家はこれを鎮圧する部隊を出せず、反乱軍は次々に武田の代官や親武田の国人達の城を落としていく。

「幸いうちの本拠は一揆が起きてる場所から離れてるので、今のところ目立った影響は出ていません。しかし武田が今回の一揆に対応しきれない様子を見る限り、この動乱はしばらく続きます。そうす

ると、今後間違いないく他国からの干渉が有るでしょう。」

「その予想、間違っていないですぞ。」

不意に若い男の声が部屋に響く。

現れたのは昌幸とよく似た顔立ちの少年。昌幸の弟であり、信之たちの兄である真田信伊である。

「あれ？信伊の兄上じゃん。居たんだ。」

「今帰って来たところだ、源次郎。人を影が薄いみたいな言い方をするな。姉上、信濃の国境の調査を完了しました。」

「ご苦労様、信伊。で、首尾は？」

「やはり松平が国境付近に兵を集めている様子。織田と今川は特に動きなし。北条は上野方面に兵を動かしているという噂が。で、上杉は何と言いますか…。」

「上杉が何か？」

「国人達は今こそ武田を攻めるべきと声高に叫んでいるのですが、上杉謙信は「今の武田を攻めるは義に反する。」とごねているようです。」

「…相変わらずですね。越後の軍神様は。」

傷付いた者を攻めるのを良しとしない謙信の行動に、昌幸は呆れ半分にホッと息を吐く。

「正直助かりました。この状況で上杉に攻められたくはなかったですからね。しかし松平の行動が早いですね。今川と和睦してから大して時間を空けず、今度は南信濃へ侵攻の構えを見せるとは。これは大分前から計画してたんでしょうね。」

「今川はどうして動かないのでしょうか？今ならば武田領に一気に攻め入る好機でしょうに。」

「ああ、それはですね、今川も少なくない被害を受けているからです。確かに武田騎馬隊は壊滅しましたけど、山県昌景様が決死の突撃で活路を作り、馬場信房様が殿役の務めを果たし、追撃してくる今川軍に損害を与える事に成功したんです。ついでに私も、追撃部隊に対して何回か突撃を敢行してますから、十分役目は果たしてますよ。」

「何の自慢ですか…でも理解出来ました。今川は武田に勝利したけ

ど、損害が大きくすぐに行動に移せない。織田が動かないのは、今川との婚姻と上洛の準備ですか？」

「多分そうですね。恐らく織田は、武田の始末は松平と今川、そして北条に任せるつもりなんでしょう。武田が潰れば、背後を気にする必要がなくなり、西に集中出来ます。」

「と、するならば、真田はいったいどのような動きでしようか？」
信之が姉の顔色を窺いながら尋ねると、昌幸は顎に手を当て地図を広げた。

「まず、前提として武田家は頼りにならないと考えておきましょう。ですが一揆衆への対応としては、真田家単独では正直厳しいですね。」
庵原での損害が痛すぎます、と昌幸は嘆く。

「では、他の小県衆と連合を組むというのはどうでしょう？」
「それならば何とかなるかも知れないけれど、室賀辺りが「なんで真田が連合の盟主のような振る舞いをするのか！」って、文句言っ来そうなんですよねえ。纏まりを欠いた連合なんて、率いたくありません。」

「ああ、確かにあの御仁なら言っ来そうですね。」
室賀家は真田家と同じく小県郡に属する小領主であるが、領地が近いせいから昔から両家の間では小さな諍いが頻発していた。

特に現当主の室賀正毅は、昌幸の同世代で幼い頃から昌幸の事を激しくライバル視しているのである。

「ならば、武田に代わる新たな後ろ楯を得る必要がありますな。北条ですか？」

「そうですね、信伊。今川とは縁が切れましたけど、一応まだ武田と北条の同盟関係は続いています。そこを上手く利用して、北条に近づいてみましょうか。」

「では早速、北条氏康に臣下に加えて欲しいと書状をつ！」
「焦っちゃ駄目ですよ、源三郎。そんな事をしたら、真田家は簡単に主家を見限る薄情者って見られちゃうじゃ無いですか。北条に対しては、武田家の名代として一揆鎮圧の助力を乞う形で接触しましょう。その際、信伊が集めた一揆衆の状況や他国の動きを然り気無く伝えて

下さい。そうすれば、信濃を治めるのに真田は使えると、北条に思わせる事が出来ます。」

「あの、姉上、武田の名代とするならば、信玄公へ伺いは…」

「そんなもん取らなくて良いです。どうせ武田はそれどころでは無いでしょうし。何か言ってきたても、御家の危機を救うためだって、誤魔化しましょう。」

あつさりと言いきった昌幸に、信伊と信之は「ああ、姉上は本気で武田を見限ったんだな。」と理解した。

「兎に角、事は慎重に、然れど迅速に動きますよ。信伊、源三郎と協力して北条への書状を造って下さい。北条に降るにしても、こちらから進んで傘下になるのではなく、あくまでも北条からの調略を受けて仕方なく北条に降ったという形にしなければなりません。なのでなるべく、向こうが真田に興味を持つような内容で。」

「はっ！」

「源次郎は一揆勢への対処を。子飼いの忍達を使って、一揆勢が真田郷に来るのを遅らせて下さい。」

「分かった！松平が攻めて来るぞって、噂を流しまくれば良いかな？」

「はい、それが良いですね。面倒な相手は、よそ者に任せましょう。」

昌幸は幸村の提案を快く了承する。

すると信之が、何か思い出したように手を上げる。

「姉上、松平が侵攻を開始し、それを武田が阻めない公算が高いなら、北条と同様に松平にも接触するというのは如何でしょう？決して損は無いかと思います。」

松平からすれば、侵攻先の現地協力者というのは絶対に必要な筈である。ならばいつそのこと、松平とも縁を繋いでおくのも悪くないと思ひ、信之は提案した。

しかし、信之の予想に反して昌幸は酷く渋い表情を作った。

「ああ、松平ですかあ…」

「あ、姉上、何か私の案に不味い点がありましたでしょうか？」

「いや、不味くはありません。松平が来るのが分かっているのなら、敵対するか協力するか判断するためにも、早い内に接触する必要があり

ますねえ。」

「でしたら何故、そんな渋い表情を？」

「…松平元康って、なんか私と相性が悪い気がするんですよえ…」

「…は、相性？」

思わぬ姉の返答に、信之はポカンとしてしまう。

「ええと、姉上って松平元康と会った事ってありましたっけ？」

「ありません。でも、松平家って胡散臭いじゃないですか。先祖が狸だったなんて、そんなわけ無いでしょ。なのに当主は狸耳と尻尾を着なければならぬとか、意味が分かりません。あと噂じゃ松平元康は、苦勞人で誠実な穏やかな姫武将って聞きますけど、絶対に本性は腹黒いですよ。とても信用できる人間じゃありません。」

「二（いやそれ姉上が言いますかっ!?!）」

自分達が知る限り最も胡散臭く腹黒い人物による元康評に、三人の心が一つになった。

もしかして同族嫌悪か？とも思っていた。

「まあ、取り敢えず優先するのは北条です。松平はその後って事で、良いですね？」

「二「あつ、はい。」」

「うんっ！それじゃあ皆、ここからが正念場ですよ。真田家の存亡を掛けた、大博打の始まりですっ！」

どこか高揚した様子で、真田昌幸は弟妹達へ宣言する。

斯くして、戦乱の世を大いに引っ掻き回す、一隻の船が出港した。彼の船が如何なる旅路を辿り、どの様な結末を迎えるのか、今はまだ誰にも分からない。

遠江国引佐郡、現在の静岡県浜松市北区引佐町に井伊谷という場所がある。

この地を治めるのは、藤原北家の後裔を名乗る井伊氏。

井伊氏は平安時代の遠江守藤原共資の養子である井伊共保を始祖

とし、五百年以上にも渡って井伊谷の領主として統治してきた歴史ある家である。

しかしながら、近年は今川家の圧力を受け膝を屈し、さらに今川家に従って桶狭間の戦いに参戦したところ、当主を含めた一族が多く戦死するなど混乱が続いている。

そうした中で新たな当主として井伊家を率いるのは、先代当主井伊直盛の甥にあたる、井伊直親である。

文武両道、眉目秀麗と称される若当主である直親は、難事多き井伊家を救いし才人として、一族から多大な期待を受けていた。

しかし、そんな直親は現在、絶体絶命に危機に瀕していた。

「……………」

「…………さて、申し開きを聞きましょうか、直親殿？」

浜松城の応接間に、石川数正の冷たい声が響く。

それを受けた直親の顔は蒼褪め、額からは汗をダラダラと流している。

直親は思わずゴクリと唾を飲み込むと、伏せていた視線をチラリと上に向けた。

その先には、上座に座った松平元康が、感情の読めぬ顔でじつと直親を見つめている。

「どうしました？聞こえなかつたのですかな？申し開きを聞きましょう、と言ったのです。」

数正はそう言うと、直親の前にズイと書状を押し出す。

それは、直盛の名で武田宛に出したもの。武田が松平を攻めた際には、武田側に寝返る事を了承する旨を告げるものであった。

「予め言っておきますが、言い逃れは出来ませぬぞ。貴様らが最初から武田に繋がっていた証拠は、全て揃っている。やはり謀反人の血は争えぬものだな！」

数正は怒気と蔑みを込めながら直親を追求する。

直親は何も言えず、顔を伏せて震える他無かった。

直親の父である井伊直満は直親が子供の頃、当時今川と対立していた北条を駿河国に誘致し、その混乱の際に井伊家を独立させようと企

てた。

しかし、この企みは家臣の密告により今川の知る所となり、直満は謀反人として処断された。

直親もまた、謀反人の子として命を狙われたが、一族の手により信濃に逃がされ命拾いをした。

その後、三国同盟が締結されると恩赦が出され直親は井伊谷に帰郷するのだが、逃亡中の直親を匿っていたのが他ならぬ武田家臣の家。即ち、直親と武田家には元から深い繋がりがあったのである。

「どうした、何か申す事は無いのかっ!？」

一言も喋らず顔を俯けるばかりの直親の態度に痺れを切らし、教正も珍しく怒声を飛ばす。

すると直親は、どこか覚悟を決めた表情を作ると、手を床に着き元康に向かって頭を下げた。

「申し開きようも御座いません。全てはこの直親の浅慮によるもの。然らばどうか、我が首を以て謝罪と致しとう御座りまする。」

ここに至つて直親も腹を決めた。

裏切りの証拠が元康に握られている以上、血を流さずに事を治める術などない。

ならば一族の出血を最小限に抑えるため、最も価値のある首を最初に出さねばならぬ。

そう考え、すぐに実行出来るくらいには、井伊直親も戦国の小領主の気概を持ち得ていた。

そんな直親に元康は無言で近づくと、膝を附いて直親の方に優しく手を置いた。

「…そう思いつめないで下さい、直親さん。直親さん達のお気持ちは良く理解できます。当主たるもの、第一に考えねばならぬのは御家の存続。直親さんは必死に井伊家を生き延びさせる方法を考え、実行に移しました。それを否定する事は、同じ当主として出来ません。」

「っ!?元康様っ!!」

直親がハッと顔を上げると、元康が慈愛に満ちた表情で微笑んでいた。

しかし、そこに待ったをかける声が上がる。

「しかし姫様、この者が裏切りを画策していたのは事実。これを御咎め無しとすれば家臣に示しが着きませぬぞ。」

「だからと言つて殺せばいいと言うものでもありません。裏切ったのであれば、その裏切りを覆すだけの忠節を示せば良いのです。直親さん、これから我らには多くの戦場が待ち構えています。そこで忠義の証を立てる覚悟はありますか？」

「ははあつ!!願つても無い事に御座いますっ!これよりこの井伊直親、いやっ、井伊一族一同、松平様こそ唯一の主と定め、天地ある限り誠の忠義を捧げ続ける事を誓いまするっ!!」

「わあつ!!ありがとう御座います、直親さんっ!これから共に手を携え、一緒にこの家を盛り立てていきましょう!」

直親の宣誓に感激した元康は、その手を握つて感謝の意を述べる。

これには直親も感激せざるを得ない。薄汚い裏切り者として首を切られるのを覚悟していたのに、一命を助けられるどころか、忠義を示す機会さえ与えられたのだ。武士としてこれ以上に無い褒美とさえ言えた。もはや直親の心に、一点の曇りも無くなっていた。

「うん、それじゃあ直親さん、直親さんの御子さんは我々で預かりますね!」

「……………え?」

「確か虎松君でしたっけ?大変利発で元気な子だと聞いていますよ。きっと将来は父親に似て良い武将になるだろうとも。」

「あ、あの、元康様。虎松はまだ小さく、家から出すのはその…」

「…あれ、もしかして嫌でした?」

直親の言葉に、元康は困惑した様子で首を傾げる。

その瞬間、直親は不安そうにする元康の瞳の奥に殺気を感じ、息を呑んだ。

同時に理解する。自分は既に試されているのだと。

「…松平様のところであれば、虎松を安心して預けられます。どうぞ、我が最愛の愚息、存分に鍛えて下され。」

「はいっ、勿論です!直親さんの御子息は、御父上を超える立派な武士

に育てて見せますので、安心して下さいね。」
「…ははあ。」

満足そうな元康の言葉に、直親は静かに頭を下げる他無かった。すると部屋の襖が開き、戦装束の酒井忠次が元康の元で膝を附いた。

「姫様、飯尾家を攻める準備、万事完了いたしました。」

「ああ、そうですか。ならば私も早く準備しなければなりませんね。」

「ちよ、ちよつと待って下さい！飯尾家を攻めるなど、そんな、なぜ!?!」

元康たちのやり取りを聞いた直親は、慌てた様子で問い掛ける。

飯尾家は西遠江の南を治める国人衆であり、井伊家とも関わりの深い小領主である。

そして、直親と同じく武田家の調略を受けた国人の一人でもあった。

「実はですね、飯尾家にも申し開きの場を用意しようと呼び出しをしてたんですけど、直親さんと違って無視されちゃったんですよ。もしかしたら、呼び出されてそのまま殺されるんじゃないかって思っちゃったのかもしれないですねえ。」

元康は心底残念という風に頭を横に振る。

そうして不意に、直親の目を真っすぐに見つめた。

「そんな風にされたら、もう潰すしかないじゃないですか。井伊家は忠節を誓ったのに、それすらしない飯尾を赦したら、流石に示しが着きません。直親さん、早速ですけど城に戻って戦支度を。飯尾家攻めの先鋒、貴方達に任せます。」

感情の計り難い表情で命ずる元康に、直親は米神から汗を流す。

自分たちは本当にギリギリのところまで生存を許されたのだと、改めて理解できた。松平元康がただ優しいだけの姫武将ではない事も。

彼女もまた、織田信奈と同じく戦乱の世を男顔負けに逞しく、そして強かに生き抜かんとする戦国大名であった。

「ああ、そうだ。直親さんに一つお伝えすることが。この度私は朝廷への忠節が認められ、三河守の官位を送られる事となりました。そこで松平の家名を『徳川』と改め、元康の名を『家康』に改めました。な

ので今後は、『徳川家康』って呼んでくださいね。」

「…はっ、承知仕りました。家康さま。」

直親はこの時初めて、真の意味で『徳川家康』に平伏したのであった。

その後、軍を編成した徳川家康は、井伊家を先鋒として飯尾家の城を強襲。

飯尾家は果敢に抵抗するが、この時周囲の国人達は殆ど徳川に膝を屈し、頼りにしていた武田の援軍は敗戦の影響で期待できず。何とか仲裁をしてもらおうと、恥を忍んで旧主の今川氏真に手紙を送るが、氏真はこれを黙殺した。

万事休した飯尾家の当主は、『松平元康』に対して降伏の使者を出す
が、松平元康なる者はここにいないと突っぱねられる。

そしてその直後、城に対して一斉攻撃が行われた。当主のみならず一族の者は悉く討ち取られ、飯尾家の名は西遠江から消え去ったのであった。

「お疲れさまでした皆さん。これで西遠江はひとまず安泰です
ね。」

その日の晩、家康は部屋に家臣たちを集めて戦の労をねぎらっ
た。

集められたのは忠次や数正といった近しい家臣達ばかりであ
ったが、その中に一人、徳川家臣ではない陰気な男がいた。

「小野さんも本当にご苦勞様でした。貴方が半蔵さんに例の書類
届けてくれたおかげで、武田に内通していた国人達が手早く見
つけ出せましたから。」

「…勿体無きお言葉です。」

「だからこそ、小野さんには何か褒美の品を送りたいんですけど、何が良いですか？」

「…主家を残していただいた以上、某に望むべく事は無く、お気持ちだけ有難く頂戴いたします。」

「…ふふふ、井伊家は本当に良い家臣を持ちましたね。」

褒美を受け取り拒否されたのにも関わらず、表面上は家康も機嫌よさげに振舞う。

その視線上にいる小野という男は、目の前に出された酒には一切手を付けず、家康に向かって小さく頭を下げるのみであった。

この小野という男、名を政次と言い、井伊家で家老職を長年務めてきた小野家の現当主である。

直親と同世代でもある政次は、浜松城まで進軍しながらその後一切の動きを見せない家康の動きに不穏な物を感じ、今川に潜らせていた自分の家臣から今川の動きを報告させ、家康と氏真が裏で繋がっていることを直感した。そしてすぐに服部半蔵に接触すると、井伊家をはじめとした西遠江の国人達が武田と繋がっている証拠を渡したのであった。

「でも驚きましたね。自分が主人を殺しても構わないから、主家の存続だけは認めて欲しいっていう家臣がいるだなんて。」

「……………」

「安心してください。貴方がいる限り、徳川は井伊家を信頼することが出来ます。幸い直親さんも、必要な場で必要な決断を下せるくらいには情勢を見極められるみたいですね。今後とも、いいお付き合いをしていきましょう。」

「…はっ、篤く御礼申し上げます。某は、家中の統制がありますのでこれで。」

「はい、直親さんにはよろしくお伝えください。」

「…失礼仕る。」

政次は表情を崩さぬまま、家康に頭を下げると部屋を出ていった。

その後姿に厳しい視線を送っていた忠次は、渋面になり舌打ちをする。

「チツ、腹の底が知れぬ男だ。姫様、くれぐれも政次の事、信用為さりませぬよう。」

「はい、分かってますよ。あの人は何だかんだで井伊家第一の人みたいですからね。ただ、井伊一族の大半が反今川だった中、親今川を貫いた人でもありますからね。家中では大分煙たがれているみたいですね。」

「何でも現当主の直親の父を今川に売ったのは、政次の父であったそう。親子二代に渡って主君を売るとは不忠の極みと言いたいところですが、当時の情勢を推し量るに主家存続を第一に考えた末の行動と言えるかもしれませぬ。此度と同様に。」

井伊家の歴史を思い出しながら数正が話せば、他の家臣団は何とも言い難い表情となる。

犬のように忠実と言われる三河武士であるが、家康の父と祖父の間に行き違いを抱えた末に、それを信奈の父親の信秀に利用される形で主君殺しを成してしまっている。

主君を殺してでも家を残さんとする政次の行動には、共感と反発の両方を覚えてしまうのであった。

「今後は氏真さんとも仲良くしていかないといけませんね。吉姉さまは武田領の切り取りは私達に任せてくれますから、準備が出来次第信濃の切り取りを始めましょう。皆さん、期待していますよ。」

「はっ!!」
家臣たちの勇ましい返事に満足し、家康は徳川家の未来を想像し満ち足りて頷くのであった。

今宵はこれまでに致しとう御座ります。

浅井家と北条家の場合

「そうか、信奈殿の兄上と今川義元が婚姻を。そして、その今川義元を神輿にして上洛すると…」

「はっ、近いうちに上洛の軍を起こすとのこと。我らにも準備をしておくようにと仰つてました。」

信奈の使者からの言伝を家臣の遠藤直経から伝え聞いた浅井長政は、神妙な表情で顎を擦る。

場所は近江の国は北に位置する小谷城の長政の私室。部屋にいるのは長政と直経の二人だけである。

「義姉上も思い切った事をされる。いくら公方様が戦乱により明国へ追われたとはいえ、その隙を突くような形で將軍を立てれば一悶着は必須だろうに。」

「しかしながら、此処で今川家と結べたのは大きな意味がありますぞ。今川は足利宗家とも連枝なる名家です。仮に義元が新たなる公方様と成らば、信奈殿は將軍の妹。子供でも生まれれば、次期將軍の叔母という地位を得られます。」

「そしてここに我ら浅井も加わることが出来れば、浅井家は晴れて將軍の縁戚と成れるか…」

浅井家が京極家の臣下だった事を思えば、それは破格の出世と言つて良い。

さらに言えば、織田が上洛の兵を起こす事は、その道中にある大名家を従属させていく事も意味する。

伊勢の北畠家は既に従属済み。北近江の浅井家とは義兄弟の契りを交わした同盟関係にある。

とするならば、織田家の本拠である岐阜城から京の都の間で、上洛の障害と成り得る大名と言えば…

「我が宿敵、六角家のみか…」

南近江の観音寺城を本拠とする近江源氏佐々木氏嫡流、六角義治とその一族である。

六角氏は先々代の六角定頼の代に、室町幕府の管領職を代々務める

細川家の御家騒動、「両細川の乱」の終結に寄与し、12代將軍足利義晴の擁立に貢献した事で管領代に任命されるなど、足利將軍家の後ろ盾として中央政界に介入。さらに、浅井家の独立後情勢が不安定となった北近江にも食指を伸ばし、浅井家を従属させると、隣国の伊賀国四郡の内三郡を間接統治するなど、六角家の最盛期を築いた。

定頼の後を継いだ義賢も、父親の路線を継承し細川家と協力して13代將軍足利義輝を擁立する。

しかし、丁度この頃から細川家の家臣であった姫武將の三好長慶が家中で権力を握り、ついに主君である細川家に反抗を開始した。

義賢は当然ながら細川家を助けるために京へ出兵するも、長慶とその姉弟の奮闘、そして三好家の家宰である松永久秀の巧みな策略により細川・六角連合軍は敗退。

しかも義賢が出兵の隙について挙兵した浅井久政に領土の一部を奪われてしまう。

この一件で六角家は中央政界から追われ、浅井に奪われた領土はそのまま浅井のものとなった。

それでも、京から逃れてきた足利義輝の仲介もあり、浅井家の嫡子である長政を人質にし、将来的には一族の娘を嫁がせることを約束し、六角と浅井両家の面子を立てる盟約が結ばれた。

これにより漸く落ち着いたと思ったら、婚姻直後に長政は一方的に離縁を告げると、勝手に小谷城へと帰還してしまう。

顔に泥を塗られるどころではない長政の振る舞いに義賢は大激怒。すぐさま兵を率いて浅井領へ侵攻し、世にいう『野良田の戦い』が勃発。

この戦、兵力に勝る六角が有利と見られていたが、長政の決死の突撃と浅井兵たちの奮闘、そして国友村で製造された鉄砲により六角の陣形が崩され、浅井家の大逆転勝利と相成った。

これ以降、六角家の近江での影響力は目に見えて落ち、義賢は意気消沈し、家督を息子の義治に譲ると隠居する。

ところが、年若な義治は家臣達から侮られ、思うように家政を進める事が出来なかった。

そうした中で、義治は筆頭家老であった後藤賢豊を観音寺城内で無礼打ちを理由に斬殺。『観音寺崩れ』という事件が起きる。

この事件の原因として、筆頭家老として人望に篤く、奉行人として六角氏の当主代理と同等に政務を執行できる権力を有した賢豊を廃し、当主として執行権を取り戻そうとした義治の思惑があったとされる。

しかし、この事件により賢豊を慕っていた多くの家臣が六角家から距離を取るようになり、中には浅井家へ寝返る者も現れた。

遂には一部家臣団が決起し、義治と義賢を観音寺城から追い出す事態にまで発展した。

最終的には有力国人の蒲生氏と三雲氏の取り成しで復帰することは出来たが、この事件で六角家の斜陽は決定的なものとなり、近江国は新たな局面を迎えようとしていた。

「しかし、いくら勢力は落ちたとはいえ、奴らが籠る観音寺城は堅城。とてもではないですが、我らのみで落とすには兵が足りませぬ。」

「ああ。だが義姉上が上洛の兵を挙げてくれれば、協力して六角を攻める事が可能だ。いくら観音寺城が堅城といえど、数万の兵で囲まれればそう長くは保てまい。漸く我らが悲願を達成できるのだ。」

大名として独立し、近江国を統一する。それは浅井家当主が受け継いできた夢であった。

それが遂に目前となり長政の顔に喜色が浮かぶが、対照的に直経の顔には影が掛かった。

長政はそんな家臣の変化に目敏く気が付いた。

「どうした直経。何か気がかりでもあるのか？」

「…いえ、信奈様は我らをどの様に思っているのだろうかと考えてしまっています。」

「義姉上が？」

「はい。何分信奈様は殿の秘密をご存じです。この事を持ち出し、浅井家を意のままに操ろうとお考えになられるという事も…」

直経の言葉に、長政の顔が一瞬して強張った。

「やめろ、直経。義姉上は自分を騙そうとした我らを赦すばかりか、肉

親を質にしてまで我らに信を持つてくれたのだ。我らが信を失うは、あまりにも道理が外れている。」

「分かっております。分かっておりますが、我らは織田方から恩を受けすぎている。織田方がこの恩と殿の秘密を盾にしてくる事も有り得ると御考えを…」

「直経、お前の心配も尤もだ。だが起きてもない事を邪推してどうする？少なくとも今は浅井と織田は協調している。織田の飛躍は浅井にとつても追い風だ。それで納得出来ないか？」

「……いえ。出過ぎた真似をしました。申し訳御座いません。」

恭しく直経は頭を下げるが、その顔には不安げな色が残る。

長政もそれに気付いているが、これ以上追及すると余計に拗れると判断し口を閉じた。

同時に直経の懸念が、彼だけのものではない事も察する。

浅井家内部で長政が女であることを知る者たちの間では、長政の性別が信奈にバレた事は共有されている。彼らからすれば、いくら同盟相手とは言え浅井家の致命的秘密を握られている状況は気が気ではない。

直経が態々それを口にしたのは、そうした声に出てない家臣の気持ちを代弁する意味もあつたのだろう。

家中を纏めることの難しさに、思わず長政の口からため息が漏れる。

すると廊下から賑やかな足音が聞こえ、部屋の襖が開かれる。

「やあつ！長政の義兄上、これを見てくれ！立派な野菜だろう。さつき畑から採ってきたんだ。」

「おい、勘十郎っ！何自分一人でやったみたいに言ってるんだ。ちゃんと俺もやったと言え。」

「ハハハ、すまないな政元君。うん、政元君もよく働いてくれて、僕も大変助かったよ！」

「それじゃあ俺がお前の家来みたいじゃないか！」

籠に沢山の茄子や胡瓜を載せて現れたのは、浅井長政の義兄弟として浅井家の人質になった津田信澄。

そしてもう一人は、長政の実弟である浅井政元であった。

騒がしくも仲の良い二人のやり取りに、長政の顔にも自然と笑みが浮かんだ。

「おいおい、そう喧嘩をするな。この野菜、二人が育てたのか？」

「はいそうです、兄上。勘十郎が来たばかりの頃に種を蒔いたんです。近江で採れる旨い野菜を食べさせてやろうと思って。毎日一緒に水をやって、肥料を撒いて、お陰でこんなに立派な野菜が育ちました。」

「政元様、信澄様の事を気遣われるのは結構ですが、百姓の真似事をさせるのを如何なものかと…」

嬉しそうに長政へ成果を報告する政元に、直経は眉を寄せる。

仮にも信澄は織田からの客人にして長政の義兄弟。そんな客人に農作業をやらせたと織田家に知られば、下手すれば苦情を入れかねないと直経は心配する。

しかし、当の信澄は朗らかに笑って顔の前で手を振った。

「いやいや、民百姓の営みを知るのは大切な事だよ。政元君には近江の地について教えてもらってとても助かってるよ。他の人達も皆良くしてくれるしね。」

人質として浅井家に来た信澄に対する浅井家中の印象は、実のところかなり良い。

これはひとえに長政や政元が積極的に信澄を受け入れようとする姿勢を見せているのもあるが、それ以上に信澄自身の人柄によるものが大きい。

人当たりが良く、明るく、優しく、穏やかで礼儀正しい信澄の気性は織田家でも認められていたが、それは浅井家でも同様であった。

もとより顔立ちが良く貴公子然とした立ち振舞いは、同じく美形の長政や政元に勝るとも劣らず、三人が親しく並ぶ姿は画になり、一部の女中達からは熱烈な支持を集めている。

「浅井家の人達には感謝してもしきれないよ。ずっとこうして皆で仲良く暮らしたいものだなあ。」

「…ああ、そうだな。信澄殿がこの近江を愛し、そして近江の人々に愛される。そんな日々が続けばどれ程良い事か。」

感慨深げな信澄の言葉に、長政も同意を示す。そこには、切実なまでの願いが込められていた。

乱世に生まれた大名の子として、長政は人々の願いを多くを背負い、そして自身の願いを多く捨てた。だが、捨てたと思っていた想いの一つ、胸の奥に残されていた。

その想いを自覚し、長政は眩しく笑う信澄を見る。

ああ、どうか、こんな日常が一日でも長く続きますように。そう、思いながら。

だが、残酷なまでの乱世の試練は、少しずつ、然れど着実に浅井家の若人たちへ向かって近づいて来ていた。

彼らが大切な人達の、そして国の命運を左右する決断を迫られる日は、そう遠くない未来である。

相模の国は小田原の地に、天下に名を轟かす巨城が聳えている。

その名も『小田原城』。伊勢新九郎こと北条早雲を始祖とする、後北条氏の居城である。

そして小田原城の現在の城主こそ、後北条氏三代目当主、北条氏康である。

氏康もまた、信奈や信玄と同じく昨今活躍目覚ましい姫武将だ。

祖父早雲が家名を興し、父氏綱が発展させた相模の地で、氏康は見事な政治手腕で父祖を越える繁栄を築いている。

更には戦でも甲斐武田や駿河今川と互角以上の戦働きを見せ武威を示すと共に、房総の里見家を攻めて領地の多くを切り取り、関東に一大勢力圏を築きつつあった。

そんな氏康は、現在小田原城の執務室で書状を確認している。その書状は、昨日真田昌幸から送られてきた物である。

書状を読み終えると、氏康は鼻をならして紙を放り投げた。

「真田安房守め、信玄の名代として信濃小県衆の庇護を求めてきたわ。信玄からは同盟関係の維持を求める文書がきているというのに、わざわざ一地方領の庇護に名代を立てるなんて不思議な話よね。そう思わない、幻庵？」

主君から問われ、北条家の軍師、北条幻庵は目元の皺を深くする。「ふえふえふえ、まあ間違いなく信玄の名代というのは大嘘ですな。しかし問題なのは信玄の名を騙った事ではなく、当主に成ったばかりの国人に軽んじられるほど、信玄の信用が武田領内で低下している事。安房守の手紙はそれを我らに知らせ、いつでも調略に応じる準備が出来ていると伝えんとするものでしょう。」

「つまり、真田は私達が嘘を看破すると分かった上で、自分達を利用しろと要求しているのね。本当に小賢しいったらないわね。」

不愉快そうに床に落ちた書状を睨み付け、氏康はそう吐き捨てる。しかし、その瞳の奥には利を見極めんとする確かな知性の光が輝いていた。

「まあでも、信濃に手を伸ばせるならそれに越した事は無いわ。安房守も性根はともかく中々使えそうな奴みたいだし。取り敢えずは『いざとなれば北条は小県衆を救援する』とでも手紙に書けば良いかしら？」

「それが妥当かと。恐らく安房守の目的は、我らの力を背景として小県衆を纏める事。それさえ出来れば一揆勢などどうにも出来る、とでも考えているのでしょうか。」

「ふん。本当に小賢しいわね。まあ良いわ。『つな』が上野の制圧を終えたら、次は信濃よ。」

「畏まりました。時に姫様、織田家の上洛の件についてですが…」

「…そうねえ、それについても考えなければならぬのだけど。」

氏康は腕を組むと、それまで以上に神妙な面持ちとなり幻庵と視線を交わした。

「確定とは言わないけれど、本来三国同盟を以て成す筈だった目的が、まさか織田の手を借りて成就しようとは思わなかったわね。」

「…はい。此ればかりは本当に。今川義元を征夷大將軍に担ぎ、それを武田と北条が両脇から支えるというのが、三国同盟の真意だったんですがねえ…」

氏康の愚痴に呼応し、溜め息混じりに幻庵が呟く。

東海・関東の三巨頭が手を結んで各々の背後の憂いを無くす甲駿相三国同盟。

その真の目的は、今川が上洛を果たした暁に、武田・北条の両家が幕臣として中央政界に食い込む事にあつたのだ。

「そもその話、征夷大將軍に成つて幕府を開くなら、源氏の血筋である武田家は勿論、北条の名跡を名乗っている私達でも出来ない事は無いのよね。」

「ただその場合、既存の幕府を潰さねばなりません。將軍が明へ逃れたとはいえ、名目上は足利幕府は健在。これを蔑ろにしたとなれば、我が家と敵対する家は勿論の事、日ノ本中の武家に北条を責める大義名分を与える事に成ります。」

権勢が衰えて久しく、三好家によつて国外に追放されてなお、権威の上では足利家は今でも將軍家、全国の武家の棟梁なのだ。

いくら將軍が不在だからと勝手に幕府を開こうものなら、当然ながら足利幕府との対立は必至。全国の武家を敵に回す覚悟をせねばならぬ。

実際に將軍を追放した三好家は内外に多くの敵を作つてグダグダとなり、史実の信長も足利義昭と敵対した末に包囲網を作られ普通なら滅亡してもおかしくない状況に成つてしまった。

將軍家と敵対するとは、それだけリスクな行いなのだ。

「だけど今川は正当なる足利家の連枝。現行の幕府を滅ぼさずとも將軍職を継げる数少ない名家よ。」

「まさしく『足利が倒れば吉良が継ぎ、吉良が倒れば今川が継ぐ』で御座いますな。」

元を辿れば今川家は足利家から別れた分家の一つであり、幕府創設時から現在まで幕臣として貢献し、今なお強国として力を有している。

しかも義元自身は京文化に明るく、朝廷に対しての多額の資金援助に加え、戦乱で焼け出された公家を駿河で保護してきた事により、朝廷での受けがすこぶる良い。

文字通り今川家こそ天下に最も近い家であり、今川義元こそ將軍追放以降最も將軍に相応しい人物とさえ言われていたのだ。

「だからこそ私達は今川と手を組んだ。義元が將軍になったら、私達は將軍家の縁戚。中央政界に入ることも出来るし、上杉への対処もやり易くなるわ。」

目下北条にとつて最大の悩みは、山内上杉家から関東管領職を継いだ上杉謙信の存在である。

関東に一大勢力圏の確立を目指し関東諸国への侵攻を行う北条であるが、弱者の救済を義とし、関東管領職を大義名分として横槍を入れてくる謙信には度々煮え湯を飲まされてきた。

力こそ物を言う戦国の世にあつて、『義』を行動の指針とする異質の將であるにも関わらず、上杉謙信はとにかく戦に強い。北条はその神憑りのな強さの前に小田原まで攻め入れられ、城を囲まれる羽目にもなつた事すらある。

「だけど義元が將軍になれば、謙信を抑え込む事が出来る。謙信は義輝公と対面した際に、幕府への忠義を宣誓したわ。義輝公の嫡流で無いとはいえ、正当な方法で將軍になつた義元に逆らえば、幕府に誓つた忠義を翻した事になるわよね。」

「如何にも。特に上杉謙信はこれまで義人であろうと努め、それを為してきました。物事は清ければ清い程、僅かな汚点がより目立つと言うもの。謙信は誠実な幕臣であつたが為に、一度の翻意がそれまでの忠義を見せ掛けにしてしまうでしょう。」

「義を尊び続けたからこそ、己の義に縛られるか。ふっ、皮肉なものね。まさに私達や信玄にとつても絶対に欲しかった状況ね。」

当然ながら、上杉謙信の動きを縛るといふ事は、上杉と北信濃を巡つて争う武田にとつて多大な益となる。

將軍となつた今川義元が北条や武田にとつて有利な裁定を下し、仮に上杉がそれを不服とすれば、これまで義人として為してきた謙信の

行動を、結局利益目的の偽善であったと糾合し、謙信の名声を落とす事が出来る。

そうすれば元から国人達の力が強く、謙信のカリスマ性で保っていた越後の情勢を不安定化させ、謙信の権力基盤を大いに揺るがす事も出来るだろう。

すると信玄の事に話が及んだからか、氏康の脳裏に武田家の事情が思い浮かんだ。

「多分だけど、義元が上洛を果たし、將軍になった暁には、信玄は隠居しようとしてたんじやないかしら？」

「恐らくそうでしょう。三国同盟締結後、出家し名を信玄に改めていることから考えるに。」

本来出家とは、俗世との関わりを断つ事である。無論中には出家後も権力を握り続ける例もあるが、一般的には出家後に家督を譲るのが通例である。北条家では後北条家初代の『盛時』が出家し『早雲』と名を改めた後に家督を息子に譲っており、斎藤家でも道三が出家し家督を息子の義龍に譲っている。

それらの先例からすれば、武田家も当主の『晴信』が出家し名前を『信玄』に改めている事から、本来であれば遠からず家督の継承が行われるはずだった。

「信玄が家督の継承を急いだ理由、それはきつと武田家の悪名を払拭する為だわ。武田は信玄が家督を継いでから、勢力を拡大するために多くの悪行を成してきたわ。父親の追放に始まり、数々の盟約破り、諏訪の神官の殺害、占領地での圧政に略奪。これらによる悪名を次代に継承させない為に、信玄は全ての悪名を自分が背負い、義信に跡を継がせようとした。」

「武田義信は義元の妹を娶っていました。恐らく信玄は、義信に家督を相続させた後に、信繁や四天王を随行させ義信を京に上らせるつもりだったのでしよう。新たな当主を迎えた新生武田軍が今川政権下で武の象徴となり、幕臣として忠勤に励むことにより『信用が成らない』という武田家の悪評を払拭。悪名を信玄の一代限りにするつもりだったのでしよう。」

「そうして隠居した後は、悠々自適に婿探しでもして、裏方から武田家に貢献するのを夢見ていたのかもね。まっ、その夢は一步目からしくじるんだけど。」

氏康の表情が苦々しいもの変わる。

最初のしくじりにして最大のしくじり。言わずもがな、桶狭間の戦いである。

「どうして三方に迫る大軍が三千の敵に負けるのかしらねえ。不運な事故にも程があるでしょ。」

「あれは予想せよという方が難しいですから。信玄にとつても余程予想外の結果だったのでしよう。直後に信玄は、明らかな失策を成しています。」

桶狭間の戦いからほどなくして起きた、武田軍と上杉軍による『第四次川中島の戦い』。

この戦いで、信玄は珍しく強攻策をとっている。普段であれば勝率が高い安全策を取ることの多い信玄が、この時ばかりは賭けに近いハイリスクハイリターンな策を採用したのだ。

もしかすると予想外の今川大敗に際し、信玄の胸中に焦りが生まれてしまっていたのかもしれない。

「結果として、謙信と雌雄を決するどころか、義信の補佐役をさせるつもりだった副将の信繁まで失ってしまいましたからな。あれにより、義信への家督継承も事実上延期になってしまいました。」

「そうしているうちに今度は今川氏真と織田信奈に嵌められて、四面楚歌に成ってしまったと。これはもう、信玄が武田家当主を続けるのは不可能よね？」

「無理ですな。おまけに今川の発表によると、駿河にいた武田信虎は武田側に今川の内情を密告していた咎で屋敷を囲まれた際、我が子を今川に託すと切腹して果てたとの事。あのクソ爺が大人しく切腹するタマとは思えませぬが、結果として信玄は実の父を死に至らしめてしまったと言っても良いです。最早信玄が武田家当主であり続けるのを許される状況ではありませんぬ。」

この時代、親に対する忠孝は大変重視されていた。

武田信虎は我が子である信玄から国を追われるも、信玄を助けるために危険を冒し、それにより死に至った。

真相はどうあれ、子供の敗北により父親が切腹した事実は、その死の原因である子供の責任問題となる。即ち「父親が切腹したのに、お前は何も責任を取らないのか？」と、内外から責められるのだ。

「今川の手元には信虎が駿河で作った子供、そして捕虜となった大量の姫武将がおります。わざわざ甲斐の山奥まで進攻せずとも、これらを人質として武田家を牛耳る事も出来るでしょうな。」

「信虎の子供、確か信友だったかしら？元服はしているはずだけど、まだ十にも満たない子供だったわね。暫くは今川で養育されるでしょうけど、これ完全に三河を支配してた時と同じやり方ね。」

「如何にもその通りかと。甲斐は事実上、今川の属国となりましたよなあ。他の領地は周辺諸国の切り取り次第ですが。」

「そういえば、信玄が後継者に指名してた武田勝頼。あれってまだ、甲斐にいたわよね？」

「恐らくは。しかしながら、信玄の権威が失墜した今、勝頼が武田家当主に就任することは先ず在り得ませぬ。しかも信濃の一揆の動向を見るに、かつての故郷に帰っても勝頼が受け入れられる事は無いでしょう。」

「とはいえ、勝頼が諏訪家の血筋を引いていることは間違いないわ。一応風魔に命じて居場所を調べときましよう。場合によっては、信濃を支配する良い駒に成ってくれるかもしれないわ。」

「承知しました。」

そう言つて頭を下げる幻庵に満足したのか、氏康は大きく背伸びをすると肩を鳴らした。

「やれやれ、考える事が多いと疲れるわね。あつ、織田の上洛に同行する人間も決めないと。」

「…それについてですが、織田に送る軍勢を率いるは、氏直さまが適任かと存じ上げます。」

「氏直？あの子で大丈夫なの？」

幻庵の進言に、氏康は珍しく不安そうな顔をする。

氏直は氏康の末の弟であるが、少々気性が特殊であるが故に家中でも評価が分かれる人物なのだ。

「姫様のご心配も尤も。しかしながら、北条家の今後を考える上で、氏直様たちを始めとした若手の将に経験を積ませ、人脈を繋げさせることも大事。それに恐らくですが、氏直様の御気性は案外信奈殿と相性が良いかもしれませぬ。」

「…分かったわ。氏直を織田に送りましょう。すぐに織田宛に手紙を送るわよ。」

そうして筆と墨を用意させると、紙を広げて氏康は書状を書き始めた。

それから一月後、武田信玄が隠居を宣言。後任として今川家が保護した武田信友が武田家当主に就任する事が発表され、その三日後には織田信奈が上洛の軍を発した。

今宵はこれまでに致しとう御座りまする。

野望を継ぐもの

暗い部屋の中で、二人の人物が対面している。その間は木の格子で遮られていた。

格子の外に立つのは、駿河今川家当主、今川氏真。

口元に力が籠め、自身の感情が表情に現れないように努めている。

一方格子の中にいるのは、甲斐武田家前当主、武田信玄。

悠然とした表情で正座をし、じつと氏真の目を見つめている。

その身には法衣が纏われ、短く刈った頭には頭巾を被っている。

暫し無言のまま見つめあう二人だったが、不意に信玄が口元に笑みを作った。

「初めまして、今川氏真殿。前武田家当主の武田信玄だ。」

「…今川氏真だ。」

信玄は穏やかな声色で、氏真は固い口調で挨拶を交わす。

緊張している氏真の様子が面白かったのか、信玄は小さく笑い声を漏らした。

「そう緊張するな。見ての通り私は捕らわれの身だ。お前に害を為すことなど、到底叶わない。」

「…檻に入れられようと、虎は虎。迂闊に手を伸ばさうものなら、喰い千切られてしまうだろ。」

「ハハッ、分かっているじゃないか！」

氏真の返答に、信玄は歯を剥き出しにして笑う。それを見る氏真の額には汗が浮かんでいた。

「…さてと、色々言いたい事はあったのだがな。何かから話したのか…」

「…なんだ、恨み言でも言うつもりだったのか？」

「当たり前だ。」

たった一言、それだけで部屋の温度が急速に落ちる感覚に氏真は捕らわれた。

そこにはもう、機嫌良く笑っている尼僧の姿は無い。

ギラギラとした野心の炎を燃やしながらも、冷徹な殺意を宿した戦

国大名の瞳が氏真を見ている。

呼吸さえ忘れそうになる圧迫感に襲われ、氏真は後退りをしそうになった。

「この私からすべてを奪ったのだぞ。父を追放してまで手にした家名。手塩をかけて育てた家臣団。少しでも民が良い生活を送れるようにと開発した甲斐の地。そして…」

怨嗟と憤怒に染まった呪詛の言葉を、信玄は口にする。

「我が弟、武田家の未来となる筈だった義信を、お前達は私から奪ったんだ。恨まずにいられようか。」

「……………そうだな。それも当然だ。」

しかし、氏真は呪いの言葉を静かに受け入れた。

顔には相変わらず強張っているものの、どこか安心したような、納得した様子が感じられた。

「乱世だからな。恨まれる事も、疎まれるのも当然だ。俺達はそれら受け止めて、ただ生きていかなければならない。戦国大名で在らんとするならば。」

実際氏真は、少し安心していた。

自分より遥かに多くの修羅場を経験し、負けて尚乱世の強者の風格を損なわぬ戦国最強の一角でも、人を恨み憎しむ感情が有る事に、人間らしさを見出だしていた。

故に冷静さを取り戻し、己の思う戦国大名の在り方を説くことが出来た。

そんな氏真に、信玄は目を丸くするが、程なく氏真から視線を外すと苦々しげに頭を掻いた。

「その様子からして誰かの言いなりのままに、といった訳では無いようだな。まったく忌々しい。」

「なんだ、俺が誰かの操り人形じゃないのが不都合だったか？」

「まあな。もしそうなら、私の傀儡にする術もいくらかあったのだがな、ままならない物だ。」

悪びれる様子も無く嘯く信玄に、氏真は何とも言い難い感情を抱く。

そんな氏真の表情を、信玄は興味深げに眺めていた。

「お前は本当に、姉と似ていないな。」

「それは誉めているのか？」

「どちらでも無い。あの女は、良くも悪くも戦国大名らしく無い女だった。」

そう語る信玄の口調には、どこか羨望に似た感情が込められていた。

「乱世を生き抜こうと思うと、多かれ少なかれ清濁併せ呑む時がある。だが不思議な物でな、正と邪ともに等しく為していても、自然とその者が纏う雰囲気には濁の方が強く残るんだ。このあたし自身のような。」

「……………」

「だが、あの女は、今川義元はどこまでも太陽のような姫武将だった。能天気で、明るくて、愛くるしくて、乱世を生きる戦国大名とは対極に在るような人柄だった。だからこそだったのかもな。皆が義元に手を貸した。」

血で血を洗う乱世において、今川義元という姫武将は異質だった。

武将としての才は無いに等しく、常に自分本意で空気を読むという事を知らず、自らの命を掛けるどころか泥を被る事さえ惜しむような、我が儘で育ちの良いお姫様そのものである。

とてもではないが、一人で乱世を生けていく事など不可能だ。

だがそんな人物で在ればこそ、今川義元は多くの人から手を差しのべられたのかもしれない。

「手の掛かる子供こそ構いたくなる、というのとはまた違うのかもしれないが、義元には自然と人々が集まってくる光があった。或いはそれを『徳』と呼ぶのかもしれないな。あれを見てるとな、私のような人間は後ろめたさと、羨ましさを感じてしまうんだ。」

「……………だから、姉上に天下を取らせようと思ったのか？」

「ああ。私だけではなく、北条氏康も同じ気持ちだったと思うぞ。そうするのが、乱世を終焉させるのに最も効果的だと思ったのだから。」

「乱世の終焉…」

戦乱の申し子とも言える信玄の口から出てきた予想外の言葉に、今度は氏真が目丸くする。

「応仁の乱から既に百年、この日ノ本で争いが途絶える事は無かった。民は皆疲れ切り、大名もまた終わる事の無き闘争の日々に心を消耗し、遂には私達のような女まで戦場に出なくてはいけなくなった。これは日ノ本の歴史を見る限り明らかに異常な状態。私達は、それを終わらせたかった。」

「そのために姉上を…」

「ああ。今川を頂点とし、その権威を以て国内の武家を従わせる。従わない者は將軍の勅命により仕置きする。その為の政治工作や内務の統括は北条が、実行部隊は武田が務める。朝廷との折り合いは、今川の仕事だ。」

「なるほど。考えられる限りで盤石の布陣という訳か。今川の上洛が成功していればな。」

「まったくだ。結局貧乏くじを引いたのは武田だけだとはな。完全に織田にとって代わられてしまった。全てはお前の事を甘く見過ぎてしまったからか。」

信玄の視線が真つすぐに氏真を射抜く。

そこにあるのは、果たしてどのような感情だったのか。氏真には窺い知れなかった。

「どうやら私は、お前を義信や義元に重ね合わせてしまっていたらしい。まさか私に近しい人間とは思っても見なかった。」

「…どうだろうな。本当であれば、俺も姉上と同じように在りたかった。心に鬼など、飼いたくなくなかったよ。」

「誰だつてそうだ。好き好んで修羅に飛び込むイカレなんて、そうそう居るものではない。誰しもが自分の命より大切なものを背負うとき、心に鬼を住まわせるのだ。」

「生きる為にか？」

「いいや、生き残るためだ。」

生き残るため、其の為に戦国大名は奔走する。

人の命が吹けば消し飛ぶ塵のように軽い乱世において、血筋を残すのがどれ程難しく、どれ程尊い事か、この時代を生きる戦国武将たちは重々に承知していた。

そして生き残るといふ行為の陰で、数多の悪逆が為されている事も。

「松殿、嶺松院殿はどうしている。」

「……………松の姉上は、嶺松院は駿河に帰ってきて間も無く、夫と子供がいる楽土へと旅立たれた。」

「っ!? そうか…」

氏真の返答に信玄の目が見開かれ、そして力なく頭が下を向く。

氏真もまた、何かに耐えるように唇を噛んだ。

「……………彼女には本当に悪い事をした。彼女はただ、今川と武田の縁を取り持ちたかっただけなのに。」

「…姉上は甲斐でどのようになっ？」

「夫婦仲は良かったぞ。義信には想い人がいたのだが、松殿の事を愛そうとしていた。きつと松殿も、そんな義信の胸中を知っていたのだろうが、それでも気にした素振りを見せず、義信の事を愛してくれた。子供が生まれた時は、二人とも本当に嬉しそうだった…」

「…子供だけでも助けてやることは出来なかつたのか？」

「駄目だ。諏訪の時とは違い、今川が健在である以上、残しておけば争いの種になる。あの子は、武田にとって生きてはいけな命だった。」

「っ!? 貴様っ、よくもそのようになっ!!」

あまりの言い様に思わず格子に手を掛けそうになる氏真だったが、寸での所で動きを止めると、苦渋に満ちた表情で信玄を睨みつけた。

そんな氏真の様子に、信玄は哀しみを帯びた笑みを浮かべた。

「心に鬼を飼うとはそういうものだ。吐き気のするような邪悪を飲み込み、心にもない事をさも当然の如く宣い、心を殺して罪なき命を奪わねばならない。それを素面の内にやり遂げる者が、この乱世を生き残れるのだ。なあ、氏真…」

信玄は慈愛に満ちた眼差しで、幼い弟を諭すかのように優しく語り

掛けた。

「今ならまだ、間に合うぞ。」

その言葉の意味を、氏真はどう捉えたのか。

顔を下に向けた氏真の表情を、信玄は知ることを出来ない。

ただ、血が出らんばかりに強く握りしめた拳が、心の内の葛藤を物語っていた。

「……………俺はもう、戦国大名だ。」

長きに渡る沈黙の後、氏真は絞り出すようにそう口にした。

独り言のように呟かれた言葉だったが、そこには確かな決意が込められている。

そう感じさせる一言だった。

「……………そうか。なら良い。存分に生きよ。」

氏真の言葉に、信玄は静かに答えた。その表情はどこか安心したようであった。

だがすぐに背筋を伸ばすと、戦国武将としての顔に変わって氏真を見つめた。

「今川氏真、甲斐源氏武田氏第十九代当主として命ずる。乱世を終わらせよ。」

「っ!?!何を……………」

「この私から全てを奪ったのだぞ。だったらついでに、我が野望も引き継げ。中途半端は許さぬからな。思うがままに生き、乱世の終焉に必要なことは全て為せ。そうしたら全部キャラにしてやる。」

それは、名門武家としての矜持だったのか。或いは誇りある敗者としての姿を貫こうとしたからなのか。

武田信玄は尊大に、然れど何処か気品と剛健さを感じさせる声色で、今川氏真に命じた。

その姿はまさに『甲斐の虎』。戦国時代、貧しく持たざる国であった甲斐国で、戦国最強の団を築き上げた稀代の名将がそこにいた。

信玄の言葉に氏真は固まる。

己より遥かに高みにある人物が、己への恨み辛みを赦す条件として、この世で最も難解な使命を告げたのだ。

このような馬鹿げた難題、無視した所で何一つ問題ない。

そもそも氏真は勝者であり、信玄は敗者なのだ。敗者が勝者に命ずることこそ、道理に合わない。

だが氏真は、その場に膝を付き、手を前に着くと武田信玄に向けて頭を下げ告げた。

「心得た。」

その後、武田信玄と今川氏真が再び顔を合わせる機会は、二度と訪れなかったという。

後年氏真は、次のような歌を詠んでいる。

「なかなか 世をも人も 恨むまじ 時にあはぬを 身の科（とが）にして」

今宵はこれまでに致しとう御座りまする。

湘南から来た男

月明かりの無い新月の夜。

京の街並みが闇夜に包まれる中、とある屋敷で二人の人物が密談をしていた。

一人は如何にも貴族とでも言うような姿格好で、白粉に紅を差した男。

もう一人は、格好こそ男性の貴人であるものの、どこか女性的な妖艶さを感じさせる中性的な人物である。

「しかし、よもや今川義元が再び上洛の軍を起こすとはこのう。以前の
上洛の際は折角準備しておったのに全部無駄になったでおじやる。
今度は前回のようにはならんで欲しいでおじやるな。まあ所詮織田
の神輿でござやろうが。」

「ハハハ、前久様にはうちの従姉が御迷惑をおかけします。あれで礼
儀作法はしっかりと身に付けてはいてはるさかい、どうかご容赦を。」
「言継殿、言葉が崩れておじやるぞ。そなたも内蔵頭でおじやる。言
葉遣いに気を配るでおじやる。」

「いやあ、申し訳あらしまへん。何分下賤な生まれでして。こうして
心赦せる相手と酒席を共にすると、どないしても素の言葉ちゆうのが
出てまいります。従姉共々、ご容赦を。」

そう言うと、山科言継は近衛前久に酌をする。前久も苦笑いを浮か
べながらも注がれた酒を舌の上で転がした。

近衛前久は、日ノ本における政の中心たる『やまと御所』において、
象徴たる『姫巫女』に仕える最上級職に当たる『関白』を務める公家
の頂点。

そして山科言継は、朝廷の財政を掌る内蔵頭。

まさしく、京の都における最高権力者とも言える二人が、この日は
頭を揃えて酒宴をしていた。

「麻呂が言える事ではないでおじやるが、本当に言継殿は公家らしく
ない公家でおじやるなあ。」

「ハハハ、うちなんて元は運よう家名を継げただけに過ぎしまへんさ

かい。子供の頃は半ばほったらかしどした。普通やったら他の家に養子に行くか、下野して薬売りにでもなるのが関の山どす。」

製菓業を家業とする山科家に生まれた言継だったが、母親は正室ではなく、宮中に仕える女官の中でも特に身分の低い女嬬（掃除等の雑事をこなす下級女官）であった。

その為、子供は母方の実家で養育するというのが習わし有るの公家にあつて、言継は宮中よりも市井に近い場所で養育された。当然ながら、後継ぎからは完全に外されていた。

ところが、山科家には家名を継ぐに相応しい後継ぎが中々現れず、先代当主で言継の父の山科言綱は自身の後継者に大いに頭を悩ませることになる。

そんな中、元服した言継は宮中に出仕するようになると、製菓のみならず有職故実や楽器の演奏、和歌や蹴鞠など多彩な才能を発揮し出来人として知られるようになった。

その噂を聞いて言綱の後継者に言継を推挙したのは、他ならぬ言綱の正室の黒木の方である。

今川義元の母、寿桂尼の姉でもある黒木の方の推薦を受け、言綱も言継への家督継承を決心し、晴れて言継は山科家の家長になったのであった。

家長就任後、宮中の財政を統括する役職に就くと、逼迫した朝廷の財政を改善するべく言継は資金の捻出に奔走する。その際最大の資金源としたのは、各地の大名からの献金である。

市井に近い場所で育ったお陰か、言継には公家に有りがちな尊大な態度が無く、むしろ気さくで好奇心旺盛な性格で多くの武家を訪問し、各家から献金を募る事に成功していた。

「しかし紆余曲折あつたとはいえ、こうして京の都に今川義元を迎え入れる事になるとは。何とも数奇な運命でおじやるな。」

「そうどすな。まあ、元を正せば義輝はんがやらかしてくれはつた事が今日まで響いたとも言えますし、素直に喜んでええのか悩ましいですけど。」

「ああ、まったくでおじやる。義輝の奴め。異国でさつさとくたばつ

てしまえば良いでおじやる。」

前將軍足利義輝に話題が移った途端、前久と言継の口から辛辣な言葉が出る。

前久や言継にとって、前將軍・足利義輝は浅からぬ因縁のある人物である。

応仁の乱以降、幕府の権威は大いに衰退し、細川家の専横や三好家による下克上を許すなど、京の情勢は混迷を極めていた。

そうした状況下で前久を始めとした公家達も何もしていなかった訳では無い。

自分達にとって最大の武器である権威と正統性を以て、何とか京の動乱を治める事の出来る人物を招致しようと奮闘したのだ。

その結果、上杉謙信の上洛など一定の効果を上げたものもあったが、根本的な改善に至る事は出来なかった。

そうした中で、十二代將軍・足利義晴から將軍職を引き継いだのが義輝である。

朝廷の公家達は、当初若い將軍に少なからず期待していた。

義輝の父、義晴は時の権力者である細川晴元と対立し、何度も京を追放されながらも朝廷と親密な関係を築く事で廃位を免れ復権を目指した強かな人物であった。

そんな父から將軍職を継いだ義輝もまた、足利將軍家の権威復興に気概を見せており、武勇においても塚原卜伝から指導を受け直弟子である。足利幕府を立て直すのに相応しい人物だと、この時は思われていた。

しかし、義輝はその期待を悪い意味で裏切ってしまう。

確かに義輝は幕府の復興に意欲的な人物だった。

だが、それ以外には余りにも無頓着で浅慮が過ぎた。

將軍に就任した義輝は先ず、これまで長きに渡り父、義晴と敵対していた細川晴元と対決姿勢を見せていたが、晴元の家臣である三好長慶が台頭し、遂には晴元に対して反旗を翻して京の莊園を次々に占領すると、義輝は晴元と和睦し長慶と敵対した。

義輝は晴元の他に六角氏からの支援も受けて三好を攻撃するが、四

万の大軍勢を前に敢え無く敗退してしまふ。

因みにこの時、六角氏は連合軍の敗退を予測した浅井家により領地の一部を奪われている。

三好の力を目の当たりにした義輝は、この後何度も刺客を送って長慶を暗殺しようとするが、松永久秀を始めとした三好家臣団の奮闘によりいずれも失敗に終わる。

そうした状況を鑑み、晴元を重用して長慶と敵対しても益が無いと判断し、義輝は長慶と急速に和平を結んだ。見捨てられた晴元は若狭に逃れる他無かった。

ようやく情勢が安定するかと思つたが、この頃から義輝は幕府復興により先鋭的な動きを見せ始めた。

手始めに、鉄砲の火薬となる硝石を南蛮人から輸入しやすくするために、京でのキリスト教の布教活動を許可した。

しかしこれは、大名がキリスト教に改宗した地域でキリスト教徒により神社や寺が打ち壊されている噂を知り、「都でのキリスト教の布教活動は慎んで欲しい」とした姫巫女の意向を完全に無視する物であり、朝廷の顔に泥を塗る様なものであった。

さらには、幕府の資金獲得の為に山科言継を始めとした公家の家領を強引に占拠するという事件を起こした。これには言継も激高し、前久と共に姫巫女に訴え出て義輝の命令を撤回させる事態に至った。

こうした朝廷軽視の義輝の行動は公家たちからの評価を著しく下げると至り、長慶の死後に三好三人衆によって国を追われた際には、「当然の結果」と断じる者もいた。

後年、織田信奈も朝廷を蔑ろにする義輝の姿勢には苦言を呈していた事が『信奈公記』に記されている。

「義輝には長期的な戦略眼というのが欠けていたでおじやる。或いは、將軍の言葉には誰も逆らえぬという驕りがあったのかもしれないでおじやるなあ。」

「要は調停者としての將軍の役割をちゃんと理解してへんかった訳ですなあ。ふん。ざまああらへん。そやけど、あの後の一悶着も大変ど

したなあ。」

「うむ。三好の奴らは直ぐに自分たちの手元にいた足利義栄を傀儡の將軍にするべく朝廷に迫って来たでおじやる。義輝の朝廷での評価は兎も角、將軍を追放した三好の遣り口には批判的な公家も多かったでおじやる。だからこそ、今川義元の上洛は渡りに船だったでおじやる。」

「ほんまどすね。今川はんは足利將軍家の正当な連枝。しかも三国同盟により両翼を武田と北条に支えられてる状況どしたさかい、なんぼ三好でもこれに対抗することは出来へんかったやろうな。」

今川義元の上洛、これに心を踊らされていたのは三国同盟の関係者だけではない。

將軍を追放したことにより朝廷や全国の武家だけでなく、世間一般からも悪感情を持たれるようになった三好家。それが天下を掌握し続ける事を良しとしない風評が京に蔓延していた。

そこに現れた義元上洛の知らせは、状況を一気に打破する希望となっていた。

義元の親縁でもある言継は、親しい前久に働きかけて上洛後の準備を推し進めた。

前久も乗り気になり、姫巫女に申し出て上洛後速やかに義元を將軍とする宣下の約束を取り付けた。

「からの桶狭間でおじやる。いったいどうしてあんなったでおじやるか……」

「あの時ばっかりは、開いた口塞がらしまへんどしたなあ」

この件に関して何より前久たちにとって致命的だったのは、三好家に対して付け入る隙を与えてしまった事である。

三好もまた、義元が上洛するという情報を聞きつけると警戒して一時京から後退したが、桶狭間の戦いを知るとすぐさま京に上つて前久達に義栄の將軍就任をより強く主張した。

前久はこれを撥ねつける事が出来ず、足利義栄の將軍宣下を取りなす他無かったのだ。

「義栄の將軍就任を後押しした以上、義元が上洛を成功させれば麻呂

の立場は危うくなるでおじやる。とはいえ、後方の徳川と今川、更には北条を味方に付け、武田という後憂を排した織田の進軍を止めるのは難儀するでおじやる。故に、麻呂は暫く京を離れようと思うでおじやる。言継殿、麻呂がいない間の諸事は任せたでおじやるよ。」

「はい、任せとおくれやす。前久様がいつ戻られてもいけるように、諸問題については片づけておきます。」

「ほほほっ！頼もしいでおじやるなあ。そういえば、言継殿は以前織田家にも行っておったでおじやるか？」

「ええ。楽奉行として、和歌や蹴鞠の指導に行きました。当時はまだ、信秀殿御存命でしたなあ。あの時は姫巫女様の即位式の献金をたんまりと戴けましたわあ。」

「ほう。ではその時、織田信奈とは会ったでおじやるか？」

「信奈殿どすか？」

「此度の上洛、絵図を描いたのは間違いなく織田信奈でおじやる。今の内から少しでも情報を集め、備えておくのが賢明でおじやる。」

前久の瞳には、歴戦の戦国武将にも負けず劣らずの鋭い眼光が宿っていた。

前久という男は五摂家筆頭という名門中の名門に生まれ、当代屈指の文化人でありながら、朝廷の権威復興の為に身を投じ、日本各地の大名家を歴訪した活動家でもある。

混沌とした乱世から日ノ本の象徴たる『姫巫女』を救う為には武家の力が必要だと判断すると、馬術や鷹狩りなどの武芸を極め、それを経て大名家との縁を繋ぎ、これまでに多くの大名と協力関係を築いてきた。

その前久が、織田信奈は果たして朝廷の為になるかを問うている。それを受けた言継は盃を置き、表情を消して前久を見た。

「正直に申しまして、うちは織田信奈ちゆう人物とはそない多う接してまへん。ただ、僅かながらに接した印象と、これまでに彼女為した事から鑑みるに、織田信奈ちゆう姫武将は劇薬どす。」

「劇薬…でおじやるか…」

「薬ちゆうものは用法容量を誤ったら容易に毒になります。特に効き

目のええ薬ほど、転じた時は致命的な毒となります。あらそないな類の姫どす。ただ…」

言継は一瞬だけ目を伏せると、身を乗り出して前久の目を真つすぐに見返した。

「都が乱世もいう病を抱えてもう百年近う。治すんやつたら、ええ加減思い切った薬を処方するべきかと。たとえそれに、多少の毒が有ったかて。」

言継の話に聞き入った前久は、無表情のまま思案する。

やがて手にした盃を一気に呷ると、腹の底から大きく息を吐いた。

「織田信奈、薬となるか、毒となるか、使い手次第という訳でおじやるな。」

静かに前久はそう呟いた。遠く、闇夜の向こうから、獣の遠吠えが長く続いていた。

織田と今川の婚姻同盟、そして今川義元の上洛が宣言されてから早一月。

関東では武田家の同盟破りに端を発した一連の動乱が、武田信玄の隠居を以て一段落し、今川と北条を中心として新たな秩序体制が築かれようとしていた。

一方織田家でも、先に宣告された上洛と婚姻の準備に上と下も大騒ぎであった。

上洛については言わずもがな、動員する兵力とそれに伴う兵糧や各物質に係る予算の計上に始まり、行軍予定の作成に道中の大名家への布告、参加人員の選出や荷駄役の手配等、事前準備だけでもとんでもない数の仕事がある。

加えて婚姻に関しても、織田家と今川家の親密な関係を広く知らしめる為に、婚儀は京の都で執り行う事が決まったのであるが、そのた

めの場所の選定や、公家やら京商人への根回し等、外向きの諸事が山ほど有る。

それでも織田家臣団は、ここが踏ん張り所と奮起し、膨大な諸事を気合いと根性で乗りきった。幸いにも美濃を治める為に連日連夜書類作業に立ち向かった経験が、この時ばかりは大いに生きた形になったのだ。

そうしていよいよ上洛の軍を立ち上げようとしている最中、相良良晴は織田家本拠、岐阜城の台所にいた。

無論、決して上洛準備から外されたという訳ではなく、本日岐阜城に到着する客人を接待する役目を信奈から仰せつかったからであった。

「おーい、具房。料理の準備は出来てるか？」

「はいっ、良晴様！先ほど味見しましたけど、最高に美味しかったです！きつと御客人も満足してくれるでしょう。あつ、でももう少し工夫したら更に美味しくなるかも。もう一度味見して…」

「こらこらこらっ！味見し過ぎて折角の料理が無くなるなんてのは勘弁しろよな。」

よだれを垂らす具房を、良晴は苦笑混じりに嗜める。

この具房という男、生まれは伊勢を長きに渡り支配してきた伊勢北畠家であり、父親は伊勢国司の北畠具教という正真正銘の日ノ本随一の名家の御曹司である。

それがどういう因果か、伊勢国司たつての希望で良晴の家来に成り、今では台所番として毎日料理に腕を振るっている。

正直良晴もそれはどうなのかと、思わず首を傾げてしまうのだが、当の本人は元から食べることも作ることも好きな料理道楽であり、周囲を気にせず大手を振って趣味を仕事に出来る現状に大変満足している。

最近では、良晴から聞いた未来の料理を何とか再現出来ないかと奮闘しており、良晴もそれで戦国時代の食料事情が少しでも改善できればと、認めるようになっていた。

そうして良晴が具房の作った料理を確認していると、台所の戸が開

いて逆立てた特徴的な口髭を生やした丸顔の男が現れた。

「あややつ！此処に居られましたか主殿！もう間も無く御客人が来られますぞ。」

「おつ、もうそんな時間なのか？」

「はい。ささつ、早く此方に。お召し物をお着替え下さい。」

「えー。別にこれでも良くないか？」

そう言い両手を横に伸ばして着ていた学生服を広げて見せるが、男は溜め息を吐いて首を横に振った。

「なりません。確かにその着物も仕立ては良いですが、大切な御客人を御迎えするには不似合いです。そこはちゃんと場に合った服装をなさいませ。」

「うーん、まあ確かにそれはそうだよな。分かった、重然。お前が用意してくれた服を着るよ。」

「はい。この古田重然にお任せ下さい。主殿には要らぬ恥を搔かせませぬ。」

この古田重然という男も、つい最近良晴の家来になった男である。

元は美濃の国人の生まれというれっきとした武家人であったが、仕えていた主人が主家に差し出す年貢の量をちよろまかしていた事が発覚し、それを信奈に詰められて処分された事で重然自身も暇を出されてしまった。

しかし、重然は「これもまた良い機会だ」と気持ち切り替えると、再就職先を探しつつ、自身の趣味である茶の湯の道を洗練するため周辺諸国を見聞する旅に出た。

そうした最中、なにやら伊勢で大規模な茶会があると聞きつけ行ってみると、そこで重然は伊勢国司に唐風の茶を振る舞う良晴を目撃して衝撃を受けた。

そして茶会の主催者についてを調べ回り、最近織田家で働き目覚ましい新参家臣である良晴が大きく関わっている事を突き止めると、良晴の屋敷を訪ねて士官を申し出たのであった。

良晴も突然の申し出に驚きこそしたが、わざわざ自分に直接家来にしてくれと言ってきた者を袖にするのは忍びなく、具房に続いて家来

にしたのであった。

閑話休題

重然に台所から連れ出された良晴は、別室に移動すると言われるが
ままに用意された着物に袖を通した。

そうして下を向いて自分の姿を確認したのだが、良晴は何とも言え
ない表情になっていた。

「なあ、本当にこれで行くのか？」

「はい。とてもお似合いです、何か？」

「いや、ちよつと張り切り過ぎじゃねえかな？ちよつと派手過ぎると
いうか…」

良晴が着るのは若草色の生地に金色の流川の意趣が施された礼服
である。しかも頭には折烏帽子を被ったその様は、正真正銘武士の礼
装である。

現代ですら厳かな場に出た事が無い良晴にとって、この格好は何と
も着心地の悪く気恥ずかしさを感じる物であった。

「何をおっしゃいますか！仮にも主殿は織田家の重臣。それが公式の
場で他国の方をお出迎えするなら、多少格式張った着付けをするのが
作法で御座います。」

「けどなあ、正直あまり似合って無い気がするんだよなあ。」

「ご心配せずとも大丈夫です。その装束は職人に依頼し特別に用意し
たもの。主殿は顔立ちはそこそこですが、背丈は中々に立派。それに
合わせて作らせた物ですから、大変お似合いです。」

「その言い方、素直に喜べねえんだけど。」

少々毒の混じった重然の言葉に良晴がジト目になると、重然は「ゲ
ヒヒ」と品の無い笑いをする。

重然も具房も生まれ育ちが武家のお陰で、良晴に欠けている礼儀作
法の造詣が深い。

まだまだ家臣と呼べる者が少ない良晴にとっては共に有難い人材
ではあるのだが、主君に対する敬意が微妙な所が珠に傷であった。

「遅いわよよしサル！主君を待たせるなんて良い度胸ね。」

着替えを終えた良晴が待ち合わせ場所に向かうと、腕組みをした信奈が待ち構えていた。

その服装は、以前斎藤道三と会談をした時と同じ艶やかな姫装束。その可憐な様に良晴は思わず見惚れてしまっていた。

「ちよつと！返事くらいしたらどうなのっ！」

「わ、わりい！その服、すっげえ似合ってる綺麗だぜっ！」

「っ！な、なに言ってるの！私が綺麗だなんて…あ、当たり前じゃないっ！！遅れた事を先に謝りなさいよっ！」

「お、おう。すまん。こういう服を着るのに慣れてなくてな。思ったより時間が掛かっちゃった。」

「ふーん。ま、まあ似合ってるんじゃない。よしサルにしては。」

顔をいまだに紅くしたまま、信奈は視線を外して良晴の服装を褒める。

何とも言えない気持ちになった良晴も視線を逸らすと、視界の端で重然が「ゲヒヒ」と下卑た笑いをしていた。無性に殴りたくなった。

「それよりも！準備が出来たならさっさと北条の出迎えに行くわよ。」

「あ、ああ。確か、北条からは氏康の弟が来るんだっつたよな？」

「そうよ。北条氏直だったからしら。まだ元服したばかりで実績は無いけれど、氏康の後継者候補にも挙げられているそうよ。」

「北条氏直か…。何というか、北条の中だと影が薄い奴だよなあ。」

北条氏直に対する良晴の印象と言えば、小田原征伐の時の北条家当主としてのものだ。

だがそれにしたって最後は切腹した父親の氏政の方が印象が強く、氏直はその後すぐに若くして病死したという事くらいしか知らない。

良晴の中での氏直像は、どこか気弱で病弱な青年といったものであった。

良晴達が待ち合わせ場所である城の門前に着くと、出迎えに出ていた村井貞勝が二人の元に来る。

「姫様、北条の方々、間もなくに御到着されています。」

「デアルカ。盛大に迎えてやろうじゃない。」

「はあ、それは問題無いと思いますが、何というか…」

「ん？なんか煮え切らないわね。ハッキリ言いなさい！」

「ははあつ！えー、北条の使者である氏直様なんです、少々個性的な方でして。」

「個性的？」

「はい。決して悪い方では無いと思いますが、面食らうかもしれないので御覚悟を。」

何とも不穏な事を言う貞勝に、良晴と信奈は顔を見合わせる。

そうしていると間もなく、北条家の家紋である『北条鱗』があしらわれた旗を靡かせた一団が現れる。

「ん？」

馬に乗って近づいて来る一団を見た良晴は、違和感を感じた。

馬上の者達の服装の色合いは統一されておらず、皆好き勝手に派手な装いをしている。

しかも中には矢鱈ゴテゴテとした飾りつけを馬に施した者もあり、騎馬団全体が妙な威圧感をもたらす異様な集団と化していた。

そして、その集団を先頭で率いるのは、真っ白な特攻服風の上着を羽織った少年である。

側頭部に剃り込みを入れ、眉毛を細く剃り、髪をリーゼント風に頭の前方で固めた風貌は紛れもなくヤンキー。

その後ろに並んだ家来達も、明らかにガラの悪い容姿をしており、良晴に暴走族の集団暴走を想起させた。

異様な集団に対して良晴が良くない脂汗を滲ませていると、特攻服の男は信奈の前で馬を止める。

そうして後ろの者達に合図を送って共に下馬すると、後ろで手を組んで胸を仰げ反らせた。

「…相模獅子王愚連隊総長、北条新九郎氏直おっ!!今日は北条の使者として織田尾張守に会いに来たあ!!スツゲえ大切な仕事にメチャクチャ気合い入ってるんで夜露死苦うっ!!」

「！！！！夜露死苦っ！！！！」

氏直の掛け声に背後の家来達が一斉に声を上げる。

その威容に良晴だけでなく他の織田家臣たちも呆然としてしまう。果たしてどうやってこれを予想しろと言うのか。

戦国時代に現れた80年代スタイルの不良集団に、誰もが戸惑いを隠せないでいた。

「ちよつと、何なのよ、それ……」

ただ一人、信奈のみが困惑する家臣たちを尻目にズンズンと氏直に向かつて歩いて行く。

「お、おい、信奈っ。」

その尋常ならない信奈の様子に不安を覚えた良晴が呼び止めようとするが、信奈はそれを無視して氏直に近づくと、氏直の肩をガツシリと掴んだ。

「ねえ、あんた……」

「な、なんすか？」

「……………めっちゃイカしてるじゃないっ!!」

歓喜を爆発させるかのような絶叫を上げ、信奈は氏直の肩を揺さぶった。

その目はキラツキラツに輝いており、顔はこれ以上の財宝は見た事無いとでも言うように紅潮している。

「えええ、何この上着。背中に金の糸で獅子の刺繍がされてるのねっ!! あっ！服の内側にも刺繍がされてるわ！えーと、相模…愛…羅…武勇？これどういう意味？」

「あつ、相模はオレラの地元で、愛羅武勇つてのは南蛮言葉で『大好き』って意味っス！それを服の内側に刺繍して、オレラの心の中にはいつも地元を愛する気持ちを持っているってことを表現してるっス！」

「あはははっ！面白いこと考えるじゃない！私も同じやつ仕立てようかしらっ？」

「あつ！それなら俺の方からこの服作つた商人に話付けるツスよ。その倅とオレがマブなんで、すぐに注文を受けてくれる筈っス。」

「デアアルカ！それなら早速お願いするわっ！まったく、北条氏康みたいな籠城ばかりしている陰気な奴の弟ってどんな風かと思っただけど、なかなかやるじゃない！氏直っ、あんたを私の義弟にしてあげるわっ！」

「マジっすか!?あざっす!!それじゃあ今後は、信奈の姉御って呼ばせていただくっす！良いかお前らっ！この人がオレラの姉御になる御方だっ！挨拶しやがれ!!」

「!!「うっす!!よろしくお願いします、信奈の姉御っ!!」!!」

氏直の号令に従い、家来一同が威勢よく頭を下げ野太い挨拶をする。

見る者を圧倒する光景であるが、信奈は笑みを濃くすると満足げに領いた。

「うん、よく家来を躡けてるじゃない。氏直、あんたを歓迎するわ！」
そう言うとき信奈は上機嫌に氏直達を引き連れて、良晴達を置いてけぼりにして城の中へと入っていった。

予想外の展開に良晴が呆然となっていると、重然が悔しげな表情で近づいて来る。

「くうう、やられましたな。まさかあの様な格好を信奈様が好まれるとは。主殿、ここは一つ同じものを仕立ててみては？」

「……いや、あれは特殊すぎるだろ。さすがに真似出来ねえよ。」

一瞬特攻服を着た自分を想像した良晴だったが、あまりの似合わないさに首を振った。

今宵はこれまでに御座ります。

城攻めの極意

今川義元の上洛に同行するために北条氏康から従者として送られてきた北条氏直とその家来たち。

岐阜城では、彼らを歓待する宴が行われていた。

「いやあ、マジで美味いっスね、この潰し肉！反婆具でしたっけ？うちじゃあまり獣肉は喰わないんで新鮮っスよ！」

「へええ。確か小田原は海に面していたわよね。てことは、やっぱり海産物が豊富なのかしら？」

「はいっス！魚に海老に貝に海藻、なんでも取れるっス！そいつらを使った練り物は最高っスよ！実は土産に小田原で採れた白身魚のみで作った蒲鉾を持ってきたんで、姉御たちにも是非とも味わって欲しいっス！」

「それは楽しみね！小田原の蒲鉾は朝廷にも献上される一級品だと聞いているわ。これは返礼が大変ね。」

信奈と氏直はすっかり打ち解け、家臣たちも交えた宴会は和やかな進んでいった。

信奈は氏直の一般的な傾奇とも一味違った装いを殊の外気に入り、自分から氏直の隣に座ると服装や髪型についてアレコレ聞く。

「ところで、その髪型だけど、一体どうやって固めてるの？」

「ああ、これは獣脂で固めてるっス。結構匂いも強いし固めるのには時間が掛かって面倒っスけど、自分の美学を表現するにはこの髪型が一番っスから！」

「いいわね、そういうこだわり！周りからどう言われようが、自分が良いと思うものを貫く事こそ大切よね。家来たちにもそうさせてるの？」

「そうっスね。最初は俺の格好をマネしてる奴ばかりでしたけど、少しずつ自分なりの粹って奴を見つけて着飾ってるっス。」

「なるほど。今日連れてきたのは百人くらいだったわね。全員、戦場に出しても問題ないかしら？」

不意に眼光を鋭くさせて問う信奈に、氏直の表情が瞬時に真顔にな

る。

和やかな宴席が一瞬にして戦国武将同士の会談の場になった。

「…オレらは皆、そのつもりで来たっすよ。信奈の姉御と共に京に上る。その前に立ち塞がる障害は、全て薙ぎ倒す。呑気に宴会だけ顔を出す気は無いつス。」

先程までの陽気さは失せ、信奈の眼光にも負けぬ強い眼差しを返しながら、氏直は低く答える。

「もし姉御が、『北条は籠城しか取り柄が無い』なんて思っているなら、見くびらないで欲しいっス。確かに北条家の元は公方様に仕える作法伝送役っスけど、今のウチを支えるのは鎌倉殿をお守りした御家人衆たる坂東武者の末裔達っス。ナメるのは結構っスけど、どうなるかは保証しないっスよ。」

どこか殺気を滲ませながら、氏直は剣呑な言葉を信奈に向ける。

いつの間にか氏直の配下達は膳の上に箸を置き、じっと主君の方へ視線を向けていた。

それはまるで、命令さえあれば何時でもこの場を血で汚す事も厭わぬでも言うような佇まいであった。

北条方の異様な雰囲気、織田家臣団も俄に殺気立つ。

「やめなさい。」

だがそれは、信奈の一言で静まった。

「…北条をナメたつもりは全く無かったのだけど。なるほど、これが真の板東武者って奴ね。十分な戦働きが期待出来そうだわ。」

「…………失礼したっス。この詫びは、敵将の首を以て取り返すっス。」

「デアルカ。利治っ、来なさい!」

「はいっ、義姉上!」

信奈に呼ばれて側に侍ったのは、斎藤道三の末子で信奈の義弟に当たる、斎藤利治である。

「氏直、これは私の義弟で加治田城主の斎藤利治よ。今回の上洛では一千の兵を率いるから、あんた達はその下に入りなさい。」

「よろしくお願いいたします、氏直殿。」

「…うっス。夜露死苦っス。」

「他の者達も気合い入れていきなさい。この上洛、絶対に成功させるわよ。」

「「「おうっ!!」」」

勇ましい家臣団の掛け声に、信奈は戦意を爛々と滾らせた瞳を宿し、凄惨な笑みを浮かべるのだった。

六月中旬、東海地方の梅雨が明けたと同時に、今川義元を上洛させるべく織田軍約二万五千が京に向けて西進を開始した。

中核を成すのは織田軍主力の美濃兵と尾張兵。

そこに北畠より派遣された神戸具盛率いるの伊勢兵三千。

徳川からは、家康の親族である松平信一に率いられた三河兵一千。

そして北条から派遣された北条氏直直下百人の兵は、信奈の義弟である斎藤利治率いる千人部隊に組み込まれ、今川義元の周辺警護に当てられた。

総勢約三万に膨れ上がった上洛軍は、信奈直属の軍勢を先頭にし、ゆっくりとしたペースで京を目指す。

本来神速の行軍を良しとする信奈がなぜこのような行軍をしたかについては、二つの理由がある。

一つは先の今川による上洛の際、警戒網の穴から奇襲を許して大敗の憂き目を見た今川義元の二の舞を演じぬよう、殊の外慎重に斥候を送っていたからである。

もう一つは、御輿に乗った今川義元のペースに合わせたからである。

一見合理主義者の信奈にしては不可解な行動に見えるが、そもそも御輿に乗って行軍を行える武士とは、將軍家から正当な許可を得た極限られた者しかいない。

今川家はそれを許された限られた武家の一つであり、これを誇示することでその権威を示すと共に、そんな義元の上洛を護衛することで織田家の行軍に正当性を持たせる狙いがあった。

こうしてゆつくりとした進軍を行っていた織田軍であったが、数日後には近江との国境に差し掛かった。

そこで待つていたのは、浅井長政率いる近江兵約一万である。

その姿を確認した織田軍が歩みを止めると、近江兵たちの先頭にいた長政が馬を走らせ信奈の元に近づいた。

「お久しぶりです、信奈殿。此処から先、近江での先導は我ら浅井が務めさせていただきます。道中の安全は確かめておりますので、どうぞご安心を。」

「…デアルカ。」

長政の申し出に、信奈はやや硬い表情で短く答える。その瞳の奥には警戒の色が僅かに見受けられた。

それを肌で感じたからか、長政が再び口を開こうとしたところ、その横から長政の前に躍り出る影があった。

「お久しぶりです姉上っ！お会いできて勘十郎はとても嬉しいです！あつ、でもお土産にいろいろがあればもっと嬉しいですよっ！」

「ちよつと、久々に会った姉にいきなり土産を強請ろうなんて、浅井に行つてから図々しくなつたんじゃないの？これは少し、教育が必要かもしれないわね。」

「ひいひい〜ごめんなさい姉上！」

「まったく…いろいろならちゃんど持つてきてるから、あとで万千代が渡しに行くわ。」

「本当ですかっ!?ありがとう御座います、姉上！」

喜色満面に礼を言う弟の姿に、信奈の表情も俄かに綻んだ。少なくとも、先程まで見えていた警戒の色は殆ど見られなくなっていた。

「長政、うちの弟が迷惑をかけているわね。」

「い、いえ、そのような事は。むしろ我らの方が信澄殿にはご不便をかけているのではないかと…」

「ふんっ、こいつは呑気なようできて結構繊細なの。もし近江での生活に不満があれば、わかりやすく気落ちしてるわ。こんなに騒々しいのは、近江での生活を十分に謳歌している証拠よ。」

「そうです姉上っ！ぼかあこれでも、枕が変わっただけで眠れなくな

るくらい繊細なんです。」

「胸を張る事じゃないでしょうが。まあ、そういう訳だから、勘十郎が能天気でいられるのは浅井家の気遣いがあつてのものだと思つてる。だからそこは感謝するわ、長政。」

「…勿体無きお言葉です。」

僅かに口元に笑みを浮かべて感謝の言葉を述べる信奈に、長政もホツとした様子で謙遜する。

少々特殊な事情があつて結ばれた織田家と浅井家の同盟は、双方にとって非常に重要な同盟である一方で、一步間違えれば一気に破綻しかねない危うさを孕んでいた。

特に織田家にとっては、今回の上洛の成功に浅井家の協力が得られるか否かに掛かっている部分もあり、かなり気を使いながらも浅井家に対する警戒を解いていない。

一方で浅井家も、最大の敵である六角氏が健在の状況下で織田との同盟が破綻するのは滅亡の道を歩む恐れがあるため、織田家に対しては相当な気を使っていた。

そうした中で、織田と浅井の橋渡し役として機能していたのが、浅井長政の義弟として浅井家に人質になった津田信澄である。

故に信澄が浅井家の人間と友好な関係を築き、親織田派の人間を増やす事は両家にとつて大変大きな意味があつた。

当主同士の間合わせを終えた織田軍は、浅井軍の先導のにより近江国に入る。

そのまま淡海の海（琵琶湖）の南を通る街道を進むと、その道中にある豪族たちを迎合しながら六角領に侵攻した。

その日の晩、総兵数五万を超えたともされる織田連合軍は、六角家本城の観音寺城の支城に当たる和田山城にほど近い平野に陣を立て、今後の動きを議論することとなった。

「さて、今回の上洛に当たつて六角家にも上洛に協力するよう文を送っていたのだけど、六角義治は一切返事を寄越さなかつたわ。こうなつた以上、戦は必定。明日より観音寺城に籠る敵を攻めるわ。万千代。」

「はっ。観音寺城には約一万二千の兵が籠っていると物見から報告が上がっています。そのうち六千は、既に和田山城に入城しているとの事。恐らく和田山城で我らの足止めをしつつ、残りの兵や他の支城からの援軍で我らの背後を脅かすつもりなのでしょう。」

「和田山城は攻め口こそ多いですが、一つ一つは細い道ばかりで、大軍を展開するのは難しい立地にあります。出来る事なら敵が兵を入れる前に取り付きたかったのですが、こうなった以上腰を据えて対応する他ありません。」

万千代の説明に長政が補足する。

野良田の戦い以降、六角家に対して優位を取っていた浅井家であるが、単独で攻め切るには至っていなかった。その要因は、観音寺城を囲むように建てられた支城にある。

「観音寺城の周りには、十八の支城が立てられています。いずれの支城も天然の要害を誇る堅城ばかりです。しかも各城の間隔も近く、どこか一つの城が攻められれば他の城から援軍を出し攻め手の背後を強襲する態勢が取られています。これらの支城が完成して以降、観音寺城は七十年間一度も攻められた事が無いんです。」

「リアルカ。これは岐阜城を攻めるよりも難しいかもしれないわねえ。さて、どうしたものかしら…」

長政から観音寺城の難攻不落さを聞かされた信奈は、眉を寄せて眼下の地図を見る。

観音寺城を中心とした凶面からも、十八の支城による鉄壁の構えが見て取れた。

何れの城も数の優位が生かしくい急峻な土地に建てられ、僅かな守兵でも守りやすく、なおかつ近隣の支城との連携が取りやすい配置になっている。

こうなった以上長期戦を覚悟するか、いまから船を手配し近江の海から攻めるかと信奈が思索していると、家臣団の中から手が上がった。

「恐れながら、その城攻め、この木下藤吉郎秀吉にお任せして頂きとう御座いますっ！」

激んだ空気を一新するような晴れやかな声に、軍議に参加した諸將の視線が集まる。

そこには、自信満々といった風にピンと背筋を伸ばした秀吉がいた。

「出過ぎよ秀サル。でも、そんなに自信ありげに名乗り出るのだから、何か妙案でもあるのでしょうか?」

「如何にもっ…この秀サル、天下に名を轟かせる観音寺城を、短期間で落とす策を考案いたしましたっ!」

「短期間って、実際どれくらいなの?」

「…およそ、三日もあれば可能かと。」

「三日ですって!?!」

秀吉の言葉に、流石の信奈も仰天する。他の将達も同様だ。

七十年間攻め寄せる事すら出来た者がいない城を、たった三日で落とすなど、あまりにも現実離れた申し出だ。

しかし当の秀吉はというと、自身の策に絶対の成功を信じている様子で、頬を紅潮させ大きな瞳を爛々と輝かせていた。

そんな秀吉の姿に冷静さを取り戻した信奈は、じつとその瞳を見つめるとその真意を推し量ろうとしていた。

「…それほどまでに自身があるというのなら、いいわ、やってみなさい。ただし、三日を超えて落とせなかった時はどうなるか、覚悟は出ているでしょうか?」

「…心配御無用。この藤吉郎、信奈様に嘘偽りは一切申し上げません。」

「…ふんっ。よく言ったわ。ならばやって見なさい秀サル。その妙案というのを使って、観音寺城を三日以内に落としなさい!」

「ははああっ!!承知仕りましたっ!!」

「他の者達も、秀サルから求められたら可能な限り手助けしてあげなさい。今日の軍議はこれで終わるわ。解散っ!」

その一言で、軍議は終わった。

信奈が自分の陣屋に戻ったあと、その場に残った者達は盛んに信奈

と秀吉のやり取りについて意見を交わした。

果たして秀吉はどんな策を用いるのかと、好奇心から本人に尋ねる者もいたが、秀吉は「明日のお楽しみじゃ。」と軽く受け流す。

そう言つて意気揚々と陣屋を出ていく秀吉の後ろ姿を、長政をはじめとした何人かの姫武将が苦々しい表情で睨み付けていた。

陣に戻つた秀吉の元に、訪ねて来る者がいた。良晴である。

良晴の後ろには重然と具房が、二人がかりで大きな釜を持って着いてきていた。

「よつ、秀吉さん。明日先鋒を務めるつて聞いたから、景気づけの飯を持ってきたぜ。みんなで食べよう。」

「おおつ！忝ないのう良晴。小竹う、皆を呼んできちよくれ。良晴が飯を持ってきたぞ。」

秀吉は弟の秀長に頼んで家来達を呼び集めると、用意した茶碗に良晴達が持つてきた釜の中の飯を善そう。

すると周囲に香ばしい匂いが広がった。

「あああ、ええ匂いじやのう！良晴、この飯はいつたい何と云う？」

「これはチャーハン。焼き飯とも言うけど、炊いた御飯を冷ましてから、油を引いた鉄板の上で細かく切つた野菜や肉と一緒に炒めた料理さ。」

「いためる？鉄板の上で火にかけるのをそう云うのか？」

聞き慣れない言葉に秀吉は疑問符を浮かべる。

戦国時代、日本にはまだ中華鍋やフライパンのような鉄製の料理器具は入つてきておらず、炒めるといふ料理技法は未知の存在であった。

良晴は現代の食事を再現するにあつて料理器具の開発を鍛冶屋に依頼し、それを具房に使わせてハンバーグや炒飯等の再現に成功していた。

「まあチャーハンやハンバーグは親の手伝いで何度か作つた事はあつ

たしな。カレーも作ってみたかったけど、流石に材料が手に入らねえんだよなあ。まあ手に入っても香辛料の調合なんかは流石に無理だけど。」

「ううん？良晴、この飯箸で掴みにくいのじゃが。」

「ああ、それは箸よりも匙の方が食べやすいぜ。ほら、これを使ってくれ。」

「おおつ、忝い。」

良晴から匙を手渡された秀吉は、勢いよくチャーハンを掻き込んだ。

次の瞬間、秀吉の目が見開かれた。

「うみやーでねえーかああつ?!?!なんじゃこの香ばしきはっ！米のパラパラとした触感と、小さく切った野菜や肉との相性もええのう。それに、口の中に広がる爽やかな酸味は梅干しか?」

「そのとおり！潰した梅干しを炒めるときに入れてあるんだ。その酸味が、今日みたいに蒸し暑くて食欲が落ちるときには最適なのさっ！それに梅干しには、塩分補給や疲労回復の効果があるから夏バテにも良いんだぜ。」

「ほう、左様か。おいっ！皆も食え食え。この焼き飯は絶品ぞっ！」

秀吉から促され、家来たちもチャーハンを食べ始める。

その反応は一樣に良く、皆良晴の差し入れを絶賛し、心遣いに感謝を示した。

そうして自分の茶碗が空になると、すぐさま御代りに殺到し、大釜の中身は瞬く間に完食された。

「いやー食った食った。ねねやおつかあ以外が作った飯で、あれほど旨い飯は初めてじゃ。半兵衛、お前も食えたかえ?」

「はい。季節柄どうしても食欲が落ちていましたけど、今日のご飯はすごく美味しくて御代わりまでしちやいました。相良様、本当にありがとうございます。どう御座います。」

「別にいいさ。秀吉さん達は明日から城攻めだろ。その前に英気を養っておかなくちやな。」

半兵衛の謝礼を受けてにこやかに答える良晴だったが、不意に声を

潜めると秀吉の方に顔を寄せた。

「ぶつちやけたところ本当に大丈夫なのか、秀吉さん。明日の城攻め、噂を聞く限りかなり厳しそうだけど。」

「うん？噂というのは、観音寺城が七十年間攻め寄せることさえ出来ぬ城。それを三日で落とすなど不可能だ、という噂か。」

「いや、まあ、そうだけど。」

秀吉の言葉に良晴は気不味げに頷いた。

さらに尾ひれを付けるなら、三日以内に城が落とせなければ秀吉は切腹を命じられるというのもあった。

そうして不安げな様子を見せる良晴の肩を、秀吉は勢いよく叩いた。

「いつてえ！なにすんだよ！」

「心配御無用じや良晴！この儂を誰だと思うちおる？」

「いや誰って…」

質問の意図が分からず戸惑う良晴に、秀吉は日輪の輝きを思わせる笑顔を向けて答えた。

「儂あのおう、良晴、こと城攻めに関しては三千世界で一等賞の自信がある。儂の城攻めの妙技は、後世に伝わっておらぬか？」

その問い掛けに良晴はハツとする。

戦国三英傑に挙げられる戦国武将の中で、とりわけ秀吉が他の二人よりも秀でているとされるのが、城攻めの才である。

鳥取城、備中高松城、そして小田原城。いずれも世に堅城の名を響かせる要塞であったが、秀吉はこれらの城を全て違った方法で落としている。

名将として知られる戦国武将は数多くいるが、これほどまでに城攻めの逸話が豊富な武将は秀吉以外にいない。

まさしく秀吉こそ、日本史上最高の城攻めの達人と言えるのだ。

そのことを思い出した良晴の胸中からは不安は消え、代わりに秀吉は今回の城攻めでどの様な策を駆使するのか、という期待感が満ち始めていた。

「まずは一つ前提を変えるかのう。七十年間攻め寄せる事すら出来ぬ

城というが、言い換えれば観音寺城自体は七十年間一度も防衛拠点としての役割を果たしておらぬという事。此処がまず攻略の糸口じゃ。そして、城攻めをする上で心得ておかねばならぬことがある。」

「城攻めの心得？それはいつたい…」

「…城攻めは城を攻めるべからず。心を攻めるべし。」

「心…つまり城を守る人間を狙うって事か？」

「如何にもっ！どんなに堅い城であれ、人が入らねば意味は無し。即ち、城主こそ城の心臓であり、城兵こそ城の血なり。然らば、これらを不調にさせ、城の機能を落とす事こそ落城の近道じゃ。故に、城攻めは先ず城に籠った者たちの心を折るべきなのじゃ。」

「な、なるほど。流石秀吉さんだぜ。だけど観音寺城は滅茶苦茶デカイ城なんだろ。しかも支城の防備体制が万全となると、一体どんな手を使えばいいんだ…」

「…相良様、実は観音寺城は過去に二度落城した事があるんです。」

「ええっ!? そうなのか？」

問い返す良晴に、半兵衛はコクリと頷いた。

「はい。応仁の乱が勃発して以降、六角氏は二度に渡って敵方に城を奪われ、後に奪い返すというのを繰り返しています。つまり、観音寺城そのものの防衛能力はそこまで高くないと見積もれます。」

「となると、やっぱり厄介なのは周囲を囲う支城か。」

「はい。逆に言えば、支城さえどうにかしてしまえば本城はどうにでも出来るという事。即ち、戦の本番は支城攻めです。そして私と藤吉郎様で策を考え、支城を落とすに足る策を考案しました。」

「秀吉さんと半兵衛が考えた策か」

稀代の城攻めの達人と戦国最高の軍師が考案した策と聞いて、良晴の期待はいやがおうにも高まった。

「ただし、この策を完遂するにはどうしても必要なものが有ります。」
「どうしても必要なもの…いつたい何なんだ!？」

戦国の賢人達が編み出した策に絶対に必要なものとは何なのか？

好奇心を大いに刺激された良晴は、前のめりになって半兵衛に問かける。

それに対して半兵衛は、口元に小さく笑みを作ると作戦の肝を口に
した。

「気合と根性です。」

知性もへったくれもない要素だった。

今宵はこれまでに致しとう御座ります。

箕作城の戦い

「三好の援軍はまだ来ないのかっ!？」

観音寺城の大広間で、目を吊り上げた若武者の怒声が響く。

若武者の名は現六角家当主、六角義治。

信奈達と同じく若くして武家の当主となった人物であるが、父の義賢から家督を継いだ時点で六角家は斜陽を迎えていた。

しかも義賢は家督は譲ったものの実権は握り続け、義治の元には自身が信頼する功臣の後藤賢豊を奉行として側に付かせた。

このように先代当主が、家督を継承したばかりの若い当主が一人前になるまで実権を握り続けること自体珍しくはない。

六角家にとって不幸だったのは、重臣として破格の権力を与えられた賢豊が増長し専横に走った事。

そして、義治が傀儡の身に甘んじるほど大人しい気性では無かった事である。

己が賢豊を始めとした家臣達から軽く見られている事を肌で感じていた義治は、日増しに家中での影響力を増す賢豊を排除し、父親の影響下から脱しようと画策した。

また、家中の権力を自身に一極集中させる事により、戦国大名としての新たな支配体制を築こうとする狙いもあった。

斯くして勃発したのが『観音寺崩れ』と呼ばれる騒動である。

この出来事により後藤賢豊とその息子が誅殺されるまでは義治の計画通りであったが、義治が思っていた以上に家中の反発は強く、義治は一時城を追い出されてしまう。

最終的には有力国人である蒲生氏の仲介もあり何とか城に戻ることは出来たが、家臣達は義治に新たな国分法を制定することを求め、その中で当主の権限を制限する内容が盛り込まれるに至った。

この一連の出来事は戦国大名としての六角家の衰退を如実に表すものと知られ、六角義治という武将の株を大きく下落させていた。

「使いの者曰く、三好軍は現在京で迎撃態勢を整えているとの事。それが完了すれば、近江に向けて出発するとの事です。」

「何を呑気な。織田は既に我が領内に入っているのだぞ！」

家来の報告に義治は苛立たしく足を踏み鳴らす。

今川の上洛に際し、義治は初めから織田軍と一戦交える覚悟にあった。

義治から見れば織田信奈は京から離れた田舎の成り上がり者。しかも自分と同年代で異性の相手と成れば、おいそれと膝を屈するわけにはいかなかった。

故に仇敵でもある三好とも手を結び、信奈からの上洛への協力の申し出を無視することで対決姿勢を鮮明にしていた。

「殿っ！織田が我が城への攻撃を開始した知らせに御座いますっ！」

「っ!?くそっ、言ったそばから。こうなれば致し方ない。三好の援軍が来るまで、我らだけで迎撃する！織田が攻めているのは和田山だなっ!！」

「いや、それが、織田軍は五千の兵を以て箕作城を攻めているとの事。」「なにつ!?箕作城だっ!！」

箕作城は和田山城の隣接する山城である。

和田山城が六千人を収容できるだけの城に対し、箕作城は非常時でも千人ほどしか人が入れない小規模な城であるが、急峻な地形と城の周りを大木の障害で囲んだ堅城であり、僅かな手勢で守り易い事を極めた山城である。

戦端は織田本陣が目の前に構える和田山城で始まると予想していた義治からすれば、完全に予想を外された形であった。

「本隊ではなく別動隊を先に動かしてきただど?しかも目の前の和田山城ではなく、その裏の箕作城を狙うとは…」

「如何なさいますか?すぐにでも箕作城に援軍を…」

「…:…箕作城を攻める隊はどの様な様子だったか分かるか?」

「はっ、まさに総がかりとでもいうような風であったと。兵共の士気は旺盛で、一心不乱に城に取り付こうとしている様子だそうです。」「和田山の前にいる本隊はどうだ?」

「それが、一切動きが無く、城側と睨み合いが続いているとの事です。」「…:…そうか。となるとやはり、罠の可能性が高いな。」「

「罨に御座いますか!？」

「ああ、本隊が動いていないのがその証左だ。恐らく織田の狙いは、箕作城に向かった援軍を叩く事であろう。五千の敵を叩くなら、城側と合わせてせめて同数の兵を出さねばならん。」

現在観音寺城に籠る兵は和田山城と同じく六千。箕作城へ兵を送った場合、城の半数以上を出す事になる。

「そうして我らが援軍を送ったのを確認すると、また別の部隊を送って城攻めしている隊と挟み撃ちが可能だ。つまり織田は箕作城を囲とし、我らを釣り上げるつもりなのだ。」

「で、では、援軍は送らないと?」

「ああ。そもそも守りを固めた箕作城は、五千程度の兵ではとても落とせん。城主の吉田出雲守も若いが優秀な男だ。此方の意図も、敵方の意図も、きちんと推し測れるはずだ。」

義治は努めて冷静に考えると、そう結論付けた。

義治は己の短慮が六角家の没落を加速させたことを重々に理解している。

目先の事ばかりに気を取られ、周囲をよく確認せずに行動したばかりに義治は家臣達の信を失ってしまった。

今更それを後悔しても仕方ないが、せめて同じ過ちは起こさないようにと心に決めている。

激しやすい己の気性を熟知し、常に大きく呼吸することを心掛け、頭に血が上らないように気を付け、事を起こす前には周囲を見渡しよく考えてから行動する。

大きな失態を糧にして、己の成長に繋げられるだけの将器を義治は持っていた。

「六角は簡単には負けぬぞ。思い上がった女共にも、名門の意地を見せつけてやろう。」

或いは、織田信奈に対する強烈な対抗心が、六角義治という若武者を奮起させているのかもしれない。

織田軍別動隊からの猛攻に晒される箕作城。

城内の広間に作られた陣内では、観音寺城の伝令が城主の吉田出雲守の前に跪いていた。

「申し上げますっ！観音寺城より箕作城への援軍は出せぬとの由。出雲守様には城兵のみで城を守って頂きたいとの事。」

「そうかつーよしっ、よくぞご決断されたっ！」

出雲守は膝を叩いて義治の決断を褒め称える。

主君と同年代のこの若将もまた、義治と同じく自城に取り付く敵方の兵を囷だと考えていた。

もし義治が至急援軍を送るとも言ってきたならば、援軍は不要と突っぱねなければならなかった。

「若様、いや、御屋形様は本当に成長成されておる。」

出雲守はしみじみと呟く。

観音寺騒動で多くの人心を失った義治だったが、それでも若き当主を支えんとする忠臣は少なくない。

義治には若者特有の浅慮さはあったが、決して怠惰で傲慢な主君ではなく、家と領民を守らんとする気概の持ち主だった。

それを知る出雲守は義治の成長に感激しながらも、そんな主君の期待に応えるべく気合いを入れる。

「皆の者っ、御屋形様は我らを信じこの城を任せて頂いた！この期待に応えねば武士の名折れぞっ！」

出雲守の激に城兵達は「おうっ！」と応える。

その時、激しい戦鬪の続く城門の方から乾いた破裂音が聞こえた。

「むっ!?あれは種子島か?それも一丁や二丁では無いな。誰ぞ門を攻めたるが何者か分かるか?」

「はっ！旗印を見るに門を攻める敵方の部隊は二つ。一つは織田信奈が側近の丹羽長秀。もう一つは、おそらく木下秀吉の部隊と見受けられます。」

質問に答えた家来の言葉に、出雲守は「ふむ」と顎を撫でた。

「木下某と言うと、確か竹中半兵衛と共に稲葉山城を占領したという

将であつたか？」

「はい。織田家中では新参の武将で、同じく新参の相良良晴と共に調略で功を上げた者との噂です。」

「なるほど。新参で武功が無いが故に別動隊に回されたか。いや、一緒に攻めるは信奈の側近であつたな。であるなら、戦においても一廉の人物と見なければならぬ。」

出雲守は若い将がしがちな浅慮はしない。相手の力量を己の目で確かめ、定石に則つた堅実な策を好む。

およそ若将らしくない戦を得意とし、それを見込まれて小さいながらも要塞を任せられていた。

「おそらく主君から囿としての役目を与えられつつ、可能であれば落として良いと指示されているのだろう。皆の者、囿だからと油断はするなっ！隙あらば喉元に噛みついて来ると心得よ。」

改めて家来達の気持ちを引き締めさせると、出雲守は自ら前線へと向かい指揮を取る。

城主が姿を見せた事により、城兵達の士気は大きく上がり、城に取り付こうとする木下隊の猛攻を跳ね返した。

それでも木下隊は諦める事無く城を攻め続けるも、自然の要害を擁する箕作城を攻略するに至らず、結局朝から夕方までの戦闘の間、城門を破る事は出来なかつた。

そうして山の縁に日が落ちるようとした頃、漸く撤退の法螺貝が鳴り、その日の攻城戦は終了した。

夕陽に焼ける箕作城の姿を、遠く眺める小男がいる。秀吉だ。

その表情から感情を推し量る事は難しい。

嘗て秀吉が初めて仕えた今川の将、松下氏は秀吉の顔についてこう述べた。

『藤吉郎、皆はお主を見るに堪えない醜顔というが、儂は嫌いでは無いぞ。見ようによつては愛嬌がある。タダな、時折お主が考え事をしてゐる時の無表情がな、途轍もなく恐ろしく見える時があるのじゃ。何

か儂では考えが及ばぬような、恐ろしいたくらみをしているように感じて不安になってしまふ。無論お主にそんな気は無いのは知っているが、どうもあの顔だけは苦手なのじゃ。』

だから儂の前ではあまり考え事をするな、と念を押された時の事を思い出し、秀吉は自分の顎をツルリと撫でる。

あの時以来、秀吉は他人の前で自分がどんな表情をしているのかを、努めて意識するようになった。

「藤吉郎様。被害状況の確認が終わりました。戦死者を含めて早期の部隊復帰が難しい者は二百前後になる見込みです。」

「そうか。ご苦勞であつた、半兵衛。小竹。」

「はっ！ここに。」

「動けない者は後方に送り、そうでない者は身体を休めるよう伝えちくれ。但し、休む時は体を横たえず、出来る限り立ったままで休むようにとな。」

「承知致しました。」

弟の小一郎がその場を去ると、秀吉は少し心配げな様子で半兵衛の顔を覗いた。

「半兵衛、体調は悪くないか？今日は少々日差しがきつかったからのう。無理をせず、夜はしっかり休んでくれ。」

「大丈夫ですよ藤吉郎様。今はむしろ体調は良好なくらいです。お氣遣い有難う御座います。」

部下に対する氣遣いとしては少々過剰なくらいの秀吉に半兵衛は苦笑を漏らす。

これではまるで病弱な娘と過保護な父親のようだと思いつながらも、そんな秀吉の配慮を嬉しく思う半兵衛の心中は中々に複雑だった。

「そうか。まあ、半兵衛の調子がエエならそれに越した事は無い。時に半兵衛よ、城側の守りをどう見る？」

「至極真つ当だと思えます。城主の吉田出雲守は若年なれど、籠城というのを良く学ばれていますね。無理をせず、城兵の士気に気を配り、地形を生かした守りをする。山城の守戦としてはお手本通り言つて良いでしょう。」

「なるほど。お手本通り、か。即ち、最もやり易い相手という訳じゃない？」

「…はい。これで我らが策は、より一層成功する可能性が高くなったと思われませう。」

「…：良し。ならば儂達も暫し休むとするかのう。半兵衛、お主は先に戻って飯でも食つちよつてくれ。儂もすぐに行く。」

「はい。」

秀吉に頭を下げ、半兵衛はその場から離れる。

それをニコニコと機嫌よく見送った秀吉だったが、半兵衛の姿が見えなくなるとその表情は一瞬にして『無』に戻る。

その胸中に渦巻くものは何なのか？

それを知る者は秀吉以外、誰もいない。

現代で言えば、そろそろ日付が変わろうとしている頃。

昼間の喧騒とはうって変わり、箕作城の周辺は静寂が支配していた。

薄い月明かりが捉えるのは、城門の上で欠伸を噛み殺す兵くらいである。

「はああ、ねみい…」

「おう、お疲れ。交代だ。」

「おおっ！丁度よかった。もう眠くてたまらんのじゃ。」

「ハハッ、朝までゆつくり休め。暫くは休む時間が貴重になるぞ。」

「やはり吉田様は、この戦は長くなるかと？」

「どうもそのようじゃ。まったく、まだ田植えも終わったばかりというのになあ。ほれ、お前も早く休め。ここで駄弁っていると、寝る時間が短くなるぞ。」

「ああ、そんじゃ後はよろし『ドスッ』」

さつきまで欠伸をしていた城兵の言葉が不意に止まる。

その側頭部には火矢が深々と刺さり、炎が目を見開いた城兵の顔を

爛々と照らしていた。

そのままバタリと倒れた城兵を呆然と見ていた交代の兵だったが、我に帰ると慌てて城の外に目を向ける。

すると、暗闇の中に次々と灯りが点り、やがて夜空に弧を描いて襲い掛かってきた。

「て、敵襲っ!? 敵襲ううううっ!!!」

血相を変えて城に向かって大声で叫ぶ守兵の背中に、赤く燃え盛った矢が吸い込まれていった。

「殿っ!? お目覚め下さいっ!!」

「んっ!? ど、どうした?」

「夜襲に御座います! 敵方が攻めて参りましたっ!」

「はああっ!? 夜襲だと!! 戦が始まって一日も経っていないぞっ!」

更に言えば、秀吉軍は日の出から日没近くまで猛攻を仕掛けている。

その僅か数時間後に夜襲を仕掛けなど、兵の疲労を考えれば攻城戦の定石からは外れている。

だが、現実として秀吉軍は暗闇に紛れて城に近づき、城側の隙を突いて城門に取り付く事に成功していた。

「敵は既に城門への攻撃を行っております! このままでは…」

言い終わるより早く、爆発にも似た衝突音と、鬨の声と悲鳴が入り交じった音が門の方角から聞こえてきた。

「よっしやあああっ!!! 仙石久秀一番乗りいっ!! 誰でも良いから手柄首寄越せえ!!!」

威勢は有りながらも知性には乏しい雄叫びが城に響く。

だがその叫びこそ箕作城の落城が決定的である事を知らしめるものであり、吉田出雲守を絶望に叩き落とす音色であった。

斯くして箕作城は、秀吉軍の夜襲により一刻(二時間)の内に落城した。

「藤吉郎様、城内の制圧が終了したそうです。我が軍の損害は極軽微。城方の兵、百あまりを討ち取ったとの事。」

「よしっ、上出来じゃ！城主は如何した？」

「数名の供廻りと城を脱出し和田山城へと向かった模様です。二百ほど兵がそれに続いて撤退し、他はバラバラに逃げています。」

「ニシシシッ。すなわち、作戦成功と謂うわけじゃな。そんじゃ予定どおり、もう一手詰めにいくかのう。」

半兵衛の報告に手を叩いて喜ぶ秀吉の脳裏には、以前箕作城を攻めた時の情景が浮かんでいた。

その時も今日と同様に、初日の夜に夜襲を仕掛けて城を落としたが、成果としては今回の方が良いと言える。

何分あの頃は秀吉も経験が浅く、作戦を実行するだけで一杯一杯であった。それに比べれば、二度目の箕作城攻めという事も有り今回はかなり余裕を持って臨むことが出来ていた。

「藤吉郎様、見て下さいっ！城兵の首を三つ取りました！」

そう言つて三つの生首を抱えながら嬉々として秀吉の前に現れるのは、権兵衛こと仙谷久秀である。

人懐っこい笑顔はどこか現代で言うところの大型犬に似ていたが、返り血もそのままに生首を振り回しながら駆け寄つて来る様には半兵衛も顔を引き吊らせてしまう。

「ほう、やるでねえか権兵衛！城内への一番乗りも果たしたそうじゃし、儂も鼻が高いぞ！」

「はいっ！次もまた、大手柄を上げて見せます！」

「そうか！じゃあ早速行つてみるかの。」

疲れを見せない権兵衛の様子を確認すると、秀吉は目をギラリと鋭く光らせた。

「先手は取つた。ならば次に打つべきは、先手で開いた突破口を一気に広げて致命傷を与えること。この戦、此処から勝負の為所よ。」

和田山城主の横山修里が小姓に起こされたのは、まだ夜空が白む前であった。

火急の報せが届いたというので身を起こせば、箕作城が落ちたというではないか。

すぐさま身成を整えて情報の真偽を確かめるよう指示を出した所、別の小姓が吉田出雲守をはじめとした箕作城を落ち延びた者達が続々と辿り着いていると報せてきた。

修里は直ぐに出雲守を通すように指示し、事の次第を確かめることにした。

「吉田殿、一体何があった？」

「……申し訳ない。油断していたのだ。まさか戦の初日から夜襲をしてくるとは思わず。」

出雲守は恥辱に身を震わせながらも秀吉軍が攻めて来た時の様子を事細かに話す。

修里は敢えて言葉を挟まず黙って話を聞き入った。

どれ程時間が経っただろうか。出雲守が和田山城に辿り着いた時の事に話が及んだ頃には、東からの日差しが山際から覗いていた。

「…大変な難儀をしたようだな。今は身体を休ませられよ。」

「忝ない。だが私は、御屋形様になんとお詫びすれば良いのだ。いつそのまま腹を切って死んでしまいたい。」

「戯け。腹を切って詫びるなら、城を取り戻すくらいの手柄を上げてからにしろ！」

年長者である修里は、項垂れ落ち込む出雲守を叱咤する。

その一方で、敵方が夜襲を仕掛けてまで箕作城を落とした理由を思案した。

「何故だ。確かに初日に夜襲を仕掛けるのは意表を突く妙手だ。だが何故それを箕作城に対して行う？」

箕作城は自然の要害を利用した堅城である。

だがしかし、城自体の規模は小さく戦略的価値も高くない。

確かに取られれば支城間の連携に穴が生じるが、他の城で補強出来

ない事は無いし、全体としては然したる影響は無い。

無駄とは言わないが、乾坤一擲の策を労してまで得るべき城ではないのだ。にも関わらず、敵将は箕作城を攻め落とす事に全力を投じてきた。そこに修里は不穏なものを感じていた。

「単に目先の城を欲した訳ではあるまい。何か狙いがあつて箕作城を落とした筈だ。それはいつたい……」

眉間に皺を寄せ悩む修里。

するとそこに、失礼、という挨拶と共に小姓が現れる。

「殿、台所番より『箕作城の兵達の分の朝食も用意した方が良いか?』と伺いがありますが、如何なさいましょう。」

「直ぐにでも用意せよと伝えよ。皆夜通し戦つて落ち延びてきたのだ。気落ちしているのであろうから、せめて活力の出る食事でも……」

「ご馳走してやれ。そう続けるつもりであつた修里の脳裏に一つの考えが過つた。

その考えに至つた瞬間、修里は目を見開くと物凄い勢いで小姓へ詰りめよつた。

「おいっ!!箕作城から逃げて来た者達は今何処にいるっ!!」

「は、はいっ!!確か、二の丸内の演練場に集めて……」

「直ぐに兵を集め其奴らの身辺を洗えっ!!それと搜索隊を編成し、城内に不審な者がいればひつ捕らえよ!!」

「お、お待ちください殿っ!!急にそのような招集をしても、すぐには……」

「無理にでもするのだっ!さもないと……」

その時、修里の声を遮る爆発音が城全体を震わせた。

臣下達や出雲守が胆を潰して腰砕けになる中、修里は素早く覗き窓に駆け寄ると、轟音がしてきた方を見る。

正門の方から、濛々と黒煙が上がっていた。

「くそっ、手遅れであつたか!」

修里の悪態に呼応するが如く、正門前に布陣した織田軍本隊から闘いの声が上がった。

和田山城内で起きた爆発音は織田軍本隊にも届いていた。

それを聞いた瞬間、戦装束の信奈はスツと立ち上がると鋭い眼光を将兵達に向けた。

「秀サルの合図ね。これより和田山城への総攻撃をかけるわ。城内の兵共は混乱しているはずだから、一気に攻め落とすわよ。」

静かではあるが端的に現状と攻略目標を告げる主君の言葉に、配下の兵共は勇ましく返事をするそれぞれの持ち場へと散っていく。

それを見送って小さく息を漏らした信奈は、隣に立つ浅井長政へと目を向ける。

「長政、あんたもこれから自軍に戻って城攻めを指揮するわよね？うちの先駆けは六、柴田勝家が務めるから、上手く合わせて正門を攻めてちょうだい。」

「承知しました。しかしこうも鮮やかに策が嵌るとは。」

「そうね。私もここまで上手くいくとは思ってなかったわ。箕作城を夜襲で攻め落とし、その敗走兵に紛れて忍を和田山城に侵入させ、内部で爆発を起こし城内が混乱している隙に総攻撃を掛ける。六角攻めに当たって秀サルが竹中半兵衛とずっと温めていた策なんですって。」

「なるほど。あの竹中半兵衛が関わってましたか。ならば納得です。これほど華麗な策を立案できるのは、世が広しと言えどそう居ませんから。」

そう話す長政に、信奈は引つかかるものが有った。

そして自分の中にある疑念をはっきりするべく、一つの問いを投げかける事にした。

「……ねえ、長政。」

「はい？」

「あんた秀サルの事嫌いよね？」

唐突な問いに長政は答えられなかった。

一瞬頭が真っ白になり、次に何故そのような質問を信奈がしてきたのかに考えが向いてしまう。

その空白が何よりの答えだった。

「まあ、初対面の時にあんな事されたら仕方ないわよね。あたしだったら、その場で切り捨ててるわ。」

「……あれは、織田方を騙そうとした私に不義がありました。手段は兎も角、木下殿のやった事は間違いでは無いかと。」

「嫌いである事は否定しないのね。」

「……………」

長政は再び押し黙ってしまう。

それを敢えて咎める事を信奈はしない。

その代わりに、少々面倒臭そうな表情を作った。

「あんたが私の家臣をどう思おうがあんたの勝手だけど、己の好き嫌いで相手の力量を判断するのは危ういわよ。味方ならまだしも、それが敵方だった場合には足元を掬われる危険がある事を知りなさい。」

「…はっ。貴重なご助言、心より感謝申し上げます。」

その内心は兎も角、長政は信奈の言葉に頭を下げて礼を述べる。

ただその奥底では、秀吉に対する蟠りが残っていることを信奈は察した。

こればかりは秀吉が長政にした暴挙が尾を引いていると理解しながらも、信奈は言葉を続ける事にした。

「秀サルは使えるわ。並みの武将よりも遥かに深い知識があり、発想も豊か。武力こそ他には劣るかもしれないけど、私の為に命を掛ける胆力も有るわ。たった一年と少しで、織田家には欠かせない人物になったわ。」

「…恐ろしい程に有能ですね。木下殿は農民の出、という噂も聞きましたが本当ですか？」

「本当よ。正真正銘片田舎の農民の子。ただ、私に仕える前に他の武家に奉公してたみたいね。」

不意に信奈の瞳が細くなる。

「その内の一人に、織田信長という男がいたそうよ。」

「織田信長？織田家の縁者の方ですか？」

「さあ？よく知らないわ。でも私と似たような夢を持っていたそうよ。夢半ばで命を落としたそうだけど。」

そう言うと、信奈は長政から顔を背けた。その表情は長政から伺うことは出来ない。

「信長が死んだ後、あいつはいったいどんな人生を歩んだのかしらね。」

開戦二日目。織田軍は夜明けとともに和田山城への総攻撃を開始した。

和田山城主、横山修里は懸命に指揮を執るも、城内で発生した火災により指揮系統に混乱が起き、城側は後手を踏む事となった。

更には、箕作城を落とした秀吉と万千代の別動隊が、勢いそのままに和田山城攻めに加勢し、手薄になった搦め手門側を突破する事に成功する。

これに至って修里は城の陥落が決定的になったと悟り、出雲守に城を脱出し観音寺城へ撤退するよう命ずると、自ら織田軍を引き付ける役目を担い、最後は城を枕に討ち死にした。

斯くして、日が中天に昇りきる前に織田軍は和田山城の制圧に成功する。

それにより、織田軍は六角家にとって防衛の要所となる重要な支城の二つを、僅か一日半で落すという大戦果を得るに至ったのであった。

今宵はこれまでに致しとう御座います。

上洛前夜

和田山城を制圧した織田軍は、城内に陣を引くとその日の侵攻を停止した。

各将は其々が割り当てられた区画で兵を休ませ、翌日からの進軍に備えていた。

秀吉が率いる木下軍もそうした中に混じっている。

他と違うのは兵達が皆疲れ果て、ぐったりと横になる者達ばかりという事だ。

昨日の朝からほぼ丸一日徹夜で戦い続けたのだから無理もない。

戦中は戦意と興奮で張り詰めていた緊張の糸は、和田山城の陥落を以て出された戦闘停止の号令でプツリと切れてしまっていた。

普段はやたら喧しい仙石久秀でさえ、木の切り株に背中を預け、うつらうつらと船を漕いでいる。

そんな中であって、木下小一郎秀長は評定に参加している兄の帰還を眠気眼を擦りながら待っていた。

既に秀吉が「信奈様の元へ行く。」と言って一刻(二時間)が経っている。

欠伸を噛みしめながらもソワソワと辺りを見渡していた秀長だったが、遠くに少女を引き連れた小柄な人影を見つけると顔を綻ばせ大きく手を振った。

「兄者っ、お帰りなさいませ！半兵衛殿もお疲れ様です。」

「おうっ！小一郎、出迎えご苦労。みな大事ないか？」

「はい。御覧の通りすっかり疲れ果てていますが、負傷した者も大していません。」

「それは重畳。そんなじゃまあ、今後どのような動きになるかも踏まえて少し話すかのう。疲れておると思うがもう少し辛抱してくれ。」

秀吉達は場所を移すと腰を据えて話し合いを始めた。

「まず織田家としての方針じゃが、明日より六角家の本城である観音寺城へ侵攻する。ただし、我ら木下隊及び丹羽隊は和田山城で待機とのお達しじゃ。」

「それは我らの疲労を考慮しての命ですか？」

「うむ。信奈様は疲れ果てた兵など戦場では足手まといにしかならぬとの御考えであろう。まあ、これに関しては想定通りではあるがのう。」

「はあ。しかし大丈夫なので御座いますか？ 兄者は先の軍議にて、観音寺城を三日以内に落とす、と仰られています。昨日と今日で既に二日。この間に二つの城を落とすは破格の手柄と言えますが、このままでは姫様との約束が守れませぬぞ。」

流石にこれだけの手柄を挙げた将を約束を守れなかつただけで処罰するとは思えないが、少しでも心象を良くするために動ける者だけでも観音寺城攻めに参加するべきではないか、と秀長は進言する。

すると、秀吉の隣で静かに座っていた半兵衛が遠慮がちに手を挙げた。

「あ、あの、恐らくその心配はしなくても良いかと。本格的な戦は今日を以て終わっても同然かと。」

「なに!? どういう事ですか半兵衛殿?」

「ひゃっ、ひゃっい!? え、ええとですね、その…」

元より人見知りな所がある半兵衛は、秀長から問い掛けられると肩を跳ね上げて顔を赤面させる。

そのまま顔を俯けるとゴニョゴニョと聞き取れない小声で何かを言っている。

これには秀長も困り果てた様子で兄の顔を窺い、秀吉は苦笑まじりに半兵衛の肩を叩く。

「そうビクつく事など無いぞ半兵衛。小一郎は何も御主に文句を言いたい訳では無い。自分が思うがままに、己の考えを述べてみると良い。」

「す、すみません。ええと、つまり何が言いたいかというと、和田山城と箕作城が落ちた時点で、六角の防衛網には大きな穴が出来てしまっているんです。この状況で観音寺城への攻撃を止める術は、今の六角家にはないと思われます。」

「しかし肝心の観音寺城は未だ無傷で健在ではないか？ 六角の者達が

これに籠り、三好の援軍を待つというのも…」

「いえ、それはありません。」

秀長の懸念を半兵衛はキツパリと否定する。

そこには先程前オドオドとしていた少女の姿はない。

そこにいるのは、己の策に絶対の自信と根拠を持った軍師である。

「観音寺城には、防衛上に致命的な弱点があります。その弱点がある限り、観音寺城を防衛するのは不可能です。恐らく、六角の人達も気付いています。」

だから攻城戦は今日で終わりだと、半兵衛は断言した。

観音寺城に激震走る。

織田の侵攻に対する防衛の要となる筈だった支城による防衛線は、和田山城と箕作城の陥落により破綻した。

しかもたった一昼夜の間である。

織田軍は現在、和田山城で軍団を再編し、明日にでも観音寺城に向けて進軍する構えだという。

その報告を聞いた六角家当主、六角義治は顔色を失くし喉を引き吊らせた。

「嘘じゃ…敵の虚報であろうっ!!まだ戦が始まって一日しか経っておらぬのだぞ!!なのに城が落とされるなど…」

「心中お察しします。然れど紛れもない事実には御座います!和田山城から逃げて来た味方の兵達によれば、箕作城も和田山城も、既に敵の手に落ちたとの事。」

「っ!?!おのれえええっ!!出雲守も修里も、いったい何をしているのだっ!!」

義治は激情のままに持っていた軍配を床に叩き付ける。

そして荒い息のまま周囲の家臣達に目を配るが、主君の怒りを受けたく無いのか誰も視線を上げようとはしない。

それが益々、義治を苛立たせる。

「おい、誰か策は無いか？織田を止める策はっ!?」

プライドも何も投げ捨てて問い掛けるが、それに答える声は無し。

ここに至って遂に義治の堪忍袋の尾が切れた。

「よう解った。もはや織田信奈を止める術は無いと言うのだな。ならば仕方なし。この六角右衛門督自ら決死隊を率い、尾張のうつけ姫に六角の矜持を見せつけん！」

「お、お待ち下さい若様！早まっては成りませぬ！三好は援軍を送るとの事。然らば、このまま籠城を…!？」

家臣はそれ以上言葉を続けられなかった。

その首元には刃が当てられ、刀を握った義治が据わった目で家臣を睨み付けていた。

「お前はそれでも六角の重臣なのか？本気でこの観音寺城で籠城が出来ると思っているのか？」

義治の刀を持つ手に力が籠る。

「どうやってこの城を守ると言うのだ。無駄に大きいばかりに兵が足らず、防備も不十分なこの城をどうやって守りきるというのだっ!？」

観音寺城には明確な弱点があった。

それは、城の規模が大き過ぎる事だ。

自然の山をそのまま要塞化したような形の観音寺城は、その規模で言えば当代随一の巨城である。

しかし、規模が大きいというのは即ち、守るべき範囲が広くなるという事であり、守備に必要な人員も大量になる。

六角家が全盛の頃であればまだ何とか成ったであろう。

しかし、権勢が落ちた今の六角家では観音寺城の守りを万全に出来るだけの守兵を用意する事が出来ないのだ。

更に言えば、広大であるが故に城壁など補修が必要な箇所も自然と多くなる。

それらの費用は莫大な物となり、近年の苦境から満足な修繕が出来

ず防備上の大きな穴と成っていた。

六角家が支城を防衛戦の要とした理由がここにある。

観音寺城自体の守りを強化するよりも、費用対効果が遥かに優れていたからだ。

しかし、隣り合う二つの支城が落とされた以上、織田軍に対してその効果を期待する事は出来ない。

かといって、防衛能力に大きな問題を抱える観音寺城で籠城戦を行うのも現実的ではない。

もはや和田山城を落とされた時点で、六角家は詰んでいた言っても過言では無いのだ。

「そうだ。織田信奈も今川の大軍を寡兵で打ち倒したのだ。ならば我らに同じことが出来ぬ道理は無い！敵が城を落として勝った気でいる今こそ、その油断を突いて奇襲を仕掛ける好機ではないか！」

どこか熱に浮かされたように顔を上気させ、義治は口許に笑みを作る。

家臣達はタガが外れてしまったかのような主君の様子に、掛ける言葉を見つけられずにいた。

そんな中、義治に向かって進み出る人影があった。

「また短慮をするつもりか、義治？」

「……父上。」

戦意をメラメラと燃やしていた義治の瞳が、一瞬にして苦々しく歪む。

その視線の先にいるのは、義治を父であり前六角家当主の六角義賢であった。

「父上、余計な口出しは無用です。六角家の当主はこの私。貴方方も、当主ではない。」

「無論だ。儂も身の振り方というのは心得ておる。先代として家政にしゃしゃり出るようなことはせん。」

「ならばっ！」

「だが親としてっ！我が子が犬死に行こうとするのは止めねばならぬ！」

「…私が犬死すると?」

「確かに織田信奈は寡兵にて今川の大軍を打ち破った。だがあれは幾重もの幸運が重なった上での偶然の産物でしかない。お前はそんな望み薄な策に、配下の者達を付き合わせるのか?」

「っ!」

父から指摘され、義治は思わず集まった家臣達の方を見る。

皆、義治が幼少期から知る顔である。そんな者たちが、義治に乞うような視線を向けていた。

「…ではどうしろというのですか? 防衛網が崩されたうえで、どうやって織田と戦えばよいのですか?」

「……お前はもう、気づいている筈だ。」

その言葉に義治の顔が苦渋に染まる。

そんな我が子の事を、義賢は申し訳なさそうに見ていた。

義賢は実の父から受け継いだ中央政界での地位を維持出来ず、更には対浅井の外交上の失敗と敗戦により当主の座から降りなければならなかった。

結果として斜陽の家を義治に託さねばならず、それが後藤賢豊の専横を赦し『観音寺崩れ』を招いた原因は全て自分にあると義賢は考えていた。

自分の不手際が我が子に苦勞を与えている。

それは親にとって、なによりも心苦しい事であった。

それでも、義賢は信じていた。

義治は短気故に浅慮を犯す事があるが、根は大変真面目で物事を深く考える事が出来、時間さえ与えれば大器を成せると。

その為には、一時の泥を嚼る覚悟を持てる事を。

「……父上、私は負けたのですね?」

「…お主一人が負けたのではない。」

「…いつか、信奈に勝てるようになれるでしょうか?」

「…分からね。だが、生きてさえいれば強くなれる。そう在らんとする意志さえあれば。」

その言葉が最後の後押しとなった。

義治は大きく息を吸い込み呼吸を整えると、覚悟を決めた様子で配下達の方を見た。

「我らはこれより伊賀に逃れる。彼の地にて態勢を整えた後、敵方の虚を突きこの地を再び取り戻す。その時が来るまで、臥薪嘗胆の覚悟を以て力を蓄えん！良いなっ!!」

「「「っ!!はっ!!」」」

「…待っておれよ、織田信奈！我らは必ずやこの地に舞い戻り、貴様の喉元に矢を穿ってやろうっ！」

義治は素早く軍を纏めると城を出立し南下。伊賀の国に入って建て直しを図る事になる。

これと同時に、観音寺城を囲っていた残りの支城もそのほとんどで城主が退去し無力化した。

斯くして秀吉の宣言通り、観音寺城は三日の内に陥落した。

織田軍は城主無き観音寺城に悠々と入城すると、安全確保の為に周辺の街道や集落に部隊を派遣し、六角軍が既に伊賀へ逃れている事を確認する。

そして、観音寺城陥落から二日後、秀吉は信奈の呼び出しを受け観音寺城の評定の間へと来ていた。

「でかしたわ秀サルっ！約束通り三日でこの城を落とした事、誉めてあげるわ！見事な戦働きよっ！」

「ははあっ！有り難き御言葉に御座いまするっ！」

他の諸将達が見守る中、信奈は眼前で頭を垂れる秀吉を大いに褒め称える。

先の戦評定の時には秀吉に懐疑的な視線を向けていた者達も、今回の大手柄は認める他ない。

だがそんな彼らからしても、次に信奈が口にした言葉には驚愕する事になる。

「秀サル、あんたには褒美としてこの観音寺城をやるわ！これであるとも一国一城の主よ！」

どよめきが広間に響く。

ほんの一年前まで足軽だった男が歴史ある巨城を授かるなど、古今東西を探してみても見つからぬ偉業だ。

この格別な褒美を前にして、秀吉は笑みを濃くすると頭をさらに深く下げた。

「謹んで、辞退致しまする。」

「なんですってっ!？」

まさか褒美を断られるとは思っていなかった信奈は、配下の将達を前に驚きの声をあげる。

しかしすぐに目を吊り上げると、眉間に皺を寄せ秀吉を睨み付けた。

「どういう事よ秀サル。私の褒美が気に食わないとでもいうの?」

「いやいや、左に非ず。むしろこれほどまでに我が働きを評価していただき身に余る光栄に御座います。されど、このような大きな城をいただいても、数少なき我が家臣団では到底管理できるものではありません。せぬ。」

「…あ。」

秀吉の指摘に信奈は「しまった。」とでも言う様に顔を顰める。

木下家は元々百姓の出身であり固有の家臣団というのを持っていない。現在秀吉の家臣と呼べるのは、弟の秀長、元川並衆の石川五右衛門と前野長康、新参の仙石権兵衛、それと与力の竹中半兵衛くらいである。とてもではないが、国内有数の巨城である観音寺城の管理など出来ない。

そもそも今回の褒美自体、信奈の思い付きによるものなのだ。

秀吉の挙げた見事な手柄に興奮し、太っ腹な主君の姿を見せようとして突発的に行ったものだった。

普段はケチな癖に、その場のテンションで過分な褒美を与えようとするのは、信奈の悪い癖の一つである。

広間に気まずい空気が流れる中、信奈は気を取り直すかのように咳払いをする。

「ゴホン。そ、そこまで言うなら仕方ないわね。分かったわ。城を与

えるのは今度にするわ。あとでやっぱり下さいなんて言ってもダメだからね！」

「ですが、これだけの大手柄を挙げておいて何も無しというのは、主君としての器量が問われますよ。姫様。」

「うっ！万千代…」

取り繕う信奈に対し、咎めるような視線と共に万千代が投げかけた言葉に信奈は言葉を詰まらせる。

考えなしに過分な褒美を与えようとした主君の失態を、万千代は見逃すつもりは無かった。

他家の人間もいる評定の場で、またあとでというのも体裁が悪い。

果たしてどうしたものかと信奈が頭を悩ませていると、平伏している秀吉がズイと前ににじり寄る。

「恐れながら、此度の戦の手柄を頂けるといふのなら、姫様に是非ともお願いしたき物が御座いまする。」

秀吉の申し出に信奈の顔が明るくなる。

「主君に褒美を催促するなんて出過ぎよ、と言いたいところだけど、良いわ。参考までにあんたが欲しい物を言ってみなさい。」

「ははあつ、有難き幸せ！然らば、この木下藤吉郎が欲するは…」

「という訳で、姫様より新たに『羽柴』という家名を頂いた。今後儂は『羽柴秀吉』と名乗る。小一郎、お主も今後は『羽柴秀長』と名乗るのじや。」

「いや、兄者。どうしてまたそのような事に…」

帰還した秀吉に評定での事を情報共有すると集められ、急に名字が変わったことを知らされた秀長は困惑する。

「だから言ったじゃろ。此度の戦で観音寺城を陥落した褒美じゃ。」

「いやそれは聞いたが、こういう戦の褒美は普通領地や銭、あるいは宝物とかじゃないか!?なんでわざわざ名字など…」

普段あまり物欲を口にしない秀長であるが、敵本城を攻略する上で最大功績を挙げた兄の手柄に対する褒美には、少なからず期待するものが有った。

それが蓋を開けてみれば聞きなれぬ『名字』だけというのは、流石に不満の一つも口に出るといふものである。

「まあ待て。これには深いわけがあるのじゃ。今後我らが織田家で上手く立ち回るには、ここで過分な褒美を受けるわけにはいかん。」

「ん?どういう事じゃ。」

「自分で言うのもなんじやが、儂は良くも悪くも織田家中では目立つ存在じゃ。良晴や又坐のように好いてくれる者もおる一方で、逆に妬ましく思ったり疎ましく思う者も少なくない。時に謙虚な姿勢を見せる事も、武家の生まれでない我らが武家社会で生きていく上で必要な事じゃ。分かってくれ。」

「…なるほど故に『羽柴』という名なのですな。」

黙って秀吉たちのやり取りを見守っていた半兵衛が不意にそう呟くと、秀吉は嬉しそうに手を叩いた。

「さすが半兵衛!羽柴という名字の意味に気付いたか!」

「はい。要するに織田家の重鎮である『丹羽』様から『羽』の字を、『柴田』様から『柴』の字を頂いて『羽柴』としたのですな。どちらも信奈様の側近にして姫武将、家中の女性の方からは強い支持を集めるお二人です。」

「その通り!どうにも儂は姫武将からの評判があまり良くないようでのう。その姫武将から篤い信頼を受ける御二人にあやかり、それぞれの家名から一字ずつ名を貰いより一層の忠孝に励みたいと諸将の前で言ってみたのじやが、中々に良い反応だったわい。」

華の京の都は上京と呼ばれる地区に、現在でも残る花街がある。俗に言う『上七軒』だ。

戦乱により焼失した北野天満宮の再建の際、余った機材を使って建てられた七軒の茶屋を由来とするこの花街は、西陣との結びつきで大いに繁栄している。

そんな上七軒の数ある宿の一室で、ちようど一戦交えたばかりの遊女が客である男に枝垂れ、火照った体の熱を分け合っていた。

「あんさんええわあ。こんなに気持ちよくしてもらったの、あんさんが初めてやわあ。」

「ははっ、その言葉、俺以外の客にも言ってるんだろ？」

「まあひどい。これでも、うちはおもんない？はつかしまへん。ほらこの通り。確かめておくれやす。」

遊女は男の手を取ると、自分の秘所へと導く。

男の指が触れた瞬間、遊女の喉奥から湿感を伴った艶やかな声が漏れる。

先程男の精を受けたばかりのそこからは、熱を宿した新たな蜜がトクリと溢れ出していた。

「んっ。ほら、分かるやろ。あんさんのが良すぎて、うちのここ、こなくなってもうとるんどす。ねえ、もういっぺん…」

「…しようがねえなあ。女にここまでされて袖にしちやあ、男が廃れるってもんだ。」

男は遊女に覆い被さり己の愚息を女の秘所にあてがう。

若き猛りを宿したそれは、既に一度出したとは思えぬ程の熱と硬さを保っていた。

遊女はうっとりとした表情で、己を貫かんとする槍を優しく撫で

た。

「あかん。うちほんまにあんさんに嵌まってしまいそうやわあ。」

「ほう、ならいつその事、俺専用の女にならねえか？」

「身請けしてくれるって事お？そやけどうち、そないに安うあらへんよ。」

「構うもんか。いざとなつたら拐っちまうさ。」

「まあ、悪い人。せやったら今だけは、あんさんだけの…」

もはや我慢出来ないとばかりに、遊女は腰をくねらせ入り口の部分で男の愚息を刺激する。

男は遊女の腰を捕まえると、己の槍の先をゆっくりと沈めて…

「失礼しますわ。」

勢いよく襖を開く音と共に、色気を纏った女の声が響く。

褐色の肌に銀の輝きを持った白髪の女が、交わろうとする男女を見下ろしていた。

「きやつ!?なんなんあんた!？」

「お仕事中すみません。少しその殿方に要件があるので、今日は店仕舞いして貰えなくて?。」

「なんだ、弾正か。折角良いところだったのに。もう少し風情に気を遣ってくれよ。」

「弾正?まさか、松永弾正?!？」

京に住む人間が弾正と聞いて思い浮かべる当代の人物と云えば一人しかない。

その名も松永弾正こと、松永久秀。

畿内を席卷した三好家にあつて当主である三好長慶を補佐し、長慶を天下人にした立役者。

その一方で、長慶亡き後三好家を牛耳ると共に、当時三好家に反発していた東大寺を焼き討ちし、更には將軍である足利義輝を襲撃し国外に追放した戦国随一の大悪人である。

そんな人物が突然現れた事に、遊女は自分の熱が急速に失われていくのを実感する。

すると男が、遊女と久秀の間に入って久秀の視線に女が映らないよ

うにした。

「たくつ、怯えちまったじゃないか。安心しろ。この熟女、敵にも味方にもしなければ多少はマシだから。」

「あら、ひどい言い様ですわね。それよりも龍興さん、せめて腰にぶら下げた物くらい隠したらいかがですか？」

「おっと此れは失敬。」

久秀から指摘され男、一色龍興は近くにあった布を腰に巻く。

そして遊女を促し服を着させると、部屋に出るように言う。

その際、遊女の手にならずに少なからず銭を握らせた。遊女は久秀の方を気にしつつ、そそくさと部屋を後にした。

「…短い時間で随分と手懐けましたわね。あれ、下手に振ったら刺されますよ。」

「この街の遊女達と懇ろになれ。そうすりや京の有力者や国人達の情報を集め易くなる、って教えたのは弾正だろ。俺はあんたの教えを忠実に守っただけなんだがな。」

「限度というものがあります。まったく、そんな処まであの人に似なくてもよいのに…」

久秀にしては珍しく、頭の痛みに耐えるように手を額にやる。

久秀が龍興の面倒を見るようになったのは半年程前。

ある日突然、斎藤道三の孫を名乗る龍興が、従者たちを連れて祖父から聞いた話を頼りにして久秀の前に現れた。

久秀はそんな彼らを自分の屋敷に住まわせ、世話をしつつ時折戦国武将としての手解きを施していた。

大悪人としての久秀の評判を知る人が聞けば耳を疑う事であろう。

或いは、何か恐ろしい企みがあるのではと疑うかもしれない。

しかし、久秀が龍興の面倒を見るのには、それらとはまた違った理由があった。

(本当に、無駄に良く似ている…)

久秀は龍興の顔をまじまじと見つめ、内心で呟く。

龍興の容姿は若き頃に久秀が想いを寄せ、情を交わし、そして去って行った若かりし頃の道三と非常に良く似ていた。

愛憎入り混じる感情を抱く男と同じ顔をした若武者を前に、久秀は心を乱してしまったのだ。

気付けば同じ屋根の下で暮らし、乱世を生きる術を教え、師弟のよくな関係を結んでいた。

そしてこの状況を少なからず愉快に思っている自分自身に、久秀は戸惑いながらも受け入れていた。

「それよりも、弾正がわざわざこんな所まで来たって事は、織田が六角を倒したか？」

「…ええ。織田軍はたった三日で観音寺城を占領しましたわ。六角は伊賀に逃れ態勢を立て直そうとしているようです。」

「ほう、三日か。六角じゃ相手にならねえとは思っていたが、予想よりも大分早いな。三人衆の奴らは今頃大慌てなんじゃねえか？」

「お察しの通り。過去の遺恨を流し速やかに六角を救援するべきでしたね。今更になって軍を起こしましたようですが、あの調子じゃ早々に負けますわね。」

「かつての副将軍家がざまあねえなあ。で、弾正殿はこの後どうするおつもりで？」

龍興の尋ねられ、久秀は笑みを浮かべると胸の間から一枚の書状を取り出した。

「既に手を打ってありますわ。三人衆は大和を通って織田軍の横腹を狙うつもり。その情報を織田に伝えます。」

「お？三人衆を織田に売るのか？」

「ええ。その手柄を以て、織田信奈に取り入るつもりですわ。」

「なるほどな。けど、それで終わりじゃないんだろ？」

松永弾正の策がこれで終わりの筈が無い。

そう確信めいた龍興の問いかけに、久秀は笑みを浮かべたまま答えない。それから先はお楽しみという訳である。

「まっ、弾正は弾正で好きにすればいいさ。俺は俺で、そろそろ動き出さなくっちゃな。」

「あら、あなたも出かけるんですか？」

「まあな。弾正には世話になったし、此処は一つ俺なりに恩返しをさ

せて貰うぜ。とりあえずは、久々の里帰りだな。」

龍興は立ち上がると、久秀の横を通つて廊下に出て小窓から空を仰ぎ見た。

闇夜には、昨年美濃を旅立つた時と同じように半分の月が昇つていた。

「待つてろよ良晴、そして信奈。ちいっとばかり、驚かしてもらうぜ。」

半月を映し龍興の眼が、毒蛇の如く妖しく光った。

そしてもう一人、織田軍の上洛を待ちわびる者がいた。

彼女はとある古びた公家の館で、一枚の書状に目を通している。

「漸く、また会えますね。」

世話になつている公家から齎された織田軍上洛の報せは、彼女の心に小さくない高揚感を与えていた。

そしてその脳裏には、これから巻き起こるであろう動乱と、それに対処し織田信奈を天下に導くための策謀が止めどなくあふれ出ようとしていた。

「お待ちしていますよ、信奈様。この明智十兵衛が、貴方を天下人にして差し上げます。」

今宵はこれまでに致しとう御座りまする。

閑話 毛利家の日常

ほんの少し前まで、織田信奈の名は尾張とその周辺国の狭い地域にのみ知られるものであった。

それも好意的なものは少なく、専ら奇行に伴う「うつけ姫」という蔑称が主だったものである。

風向きが変わったのは桶狭間で今川義元を破ってから。

『東海一の弓取』と称され、幕府の名跡に連なる義元の名は他国においても轟いており、それを撃ち破った信奈の名は驚きを以て語られるようになった。

さらに隣国美濃に侵攻し、一色家を直接対決で破って国取りを完遂するに至り、織田家が治める領地は百二十万石に上り、名実共に大名の仲間入りを果たした。

ここまで来ると単に運が良かったで片付けるには難しく、日ノ本各地の大名は織田信奈の名を語る時、そこには称賛と警戒の色が含まれるようになる。

それは尾張国から西に遠く離れた安芸国でも同様であった。

安芸国は吉田郡山城、その一室で一人の少女が黙々と書を詠み進めている。

彼女の名は小早川隆景。一介の国人から中国地方の覇者へと成り上がった毛利元就を父に持ち、その元就をして「謀略の才は自分を越える」と語ったとされる安芸国の賢人である。

彼女が読み進めるのは、尼子より奪った石見銀山の収支報告。毛利家は数カ月前に月山富田城を陥落させ、長年の宿敵であった尼子家を滅亡させる。その後、奪い取った領地や利権、特に西日本最大の採掘量を誇るとされる石見銀山の経営について、本家の内政方を受け持つ隆景が中心となって毛利の財源に組み込まんとしていた。

そうして静かに隆景が報告書を読んでいると、唐突に廊下をドタドタと駆けてくる足音がした。

その音に眉を潜めた隆景が報告書を閉じたのとほぼ同時に、勢いよく襖が開かれ隆景とよく似た顔の少女が鍛練用の槍を片手に部屋に

入ってきた。

「おいつ、聞いたか隆景っ！織田信奈が美濃を獲つたらしいぞ?!」

「ええ、聞いてますよ。それよりも、もう少し声を抑え下さい。騒がしくてかありません。」

「なんじやつれないのお。しかし今川義元を捕らえた時は流石に運が良かったと思つたんじゃが、こうも鮮やかに国取りを成したとなると考えを変えんといかんのお。そう思わんか、隆景?」

一切声を抑える事なく尋ねてくる少女に、隆景も疲れた様子で溜め息を吐く。

このやたら騒がしい少女こそ、元就の娘にして隆景の双子の姉、吉川元春である。その武才は元就をして「武ではとても敵わぬ」と評した毛利家における武の象徴であり、十一才で父親の反対を押しきり初陣を果たして以降、主だった戦には常に従軍し功を上げてきた猛将である。

元春と隆景、元就の娘である二人はそれぞれ有力国人である吉川家と小早川家に養子に入り、毛利本家を支える『毛利両川』として才を振るい、その勇名を周辺諸国に響かせていた。

「桶狭間は兎も角として、他国を切り取るのは単に戦が強いただけだとか、運が良かったというだけでは成し得ないですから、織田信奈の力量がうつけと侮っていた者達の予想を大きく上回っていたのは間違いないでしょう。ですが、詳細については分からぬ部分も多いので、その人成や実力を計るのは早計です。」

この時代、情報伝達の手段は手紙か人伝に聞く事に限られた。

織田家と直接的な関わりが無い毛利家にとって、遠く離れた尾張国の情報を得るには東国から来訪する人から聞く他無い。ただそうすると、どうしても人を介して話を聞かねばならない故に話しに恣意的な要素が入り込み、正確な情報とは呼べなくなっていた。

内政方として、そして策謀家として何よりも正確な情報に重きを置く隆景にとって、僅かな噂話だけで織田信奈という人物を推し量るのは避けるべき愚行である。

「相変わらず堅苦しいのお、隆景。折角日ノ本に新たなる英雄が産ま

れたのかも知れんじやぞ。ちつとは血を沸かさんか。」

「…生憎、こういう性分なので。それにしても、織田信奈の事、相当評価しているのですね。」

「まあ。小領主でありながら大国を退け、遂には日ノ本有数の大名となる。はんっ！どつかで聞いたような話じやのお。そう思うたら一度槍を交わしてみたいと思うわ武人の性じゃっ！」

そう言つて元春は手にいた槍をブンツと振る。鍛練用に短くされた獲物にも拘らず、その風圧は書物を舞い上げ、襖を揺らした。

さすがにこれには隆景も、獲物を振るなら外に出ろ、と言おうとしたがそれよりも早く元春を諫める声が響き渡った。

「何をやってるんですか次郎っ！」

「げっ!？」

「…また面倒な。」

突如現れた第三者に元春は顔を青くし、隆景は頭を抱えた。そうしている、少々派手目の着物を着飾った老齡の婦人が、形の良い眉を吊り上げ部屋に入ってきた。

「まったく部屋の中でそんな物騒なものを振り回すなんて、はしたないったらありやしませんわっ！これだから私はこの娘たちを姫武将にするのに反対だったんです。」

「い、いやあ、すまんのお、スギ婆あ。」

「私を婆さん呼ばわりするのはおやめなさい!!」

先程とは一転して弱った様子で謝罪をする元春に対し、槍を振り回したのを叱った時より大声で叱責をした婦人は、厳しい視線を隆景にも向けた。

「次郎も徳寿も、姫としての自覚が足りません！今日という今日は私自ら武家の姫の心得を教えて差し上げます。二人ともそこに座りなさい。」

「いや、私はまだ政務が…」

「お黙りっ！ほら、早く正座なさい。」

有無を言わせぬ婦人の言葉に、隆景も観念する他無い。しぶしぶと婦人に正対して座り直すと、横では元春が申し訳なさそうに手を合わ

せていた。

「…さて、次郎、徳寿、今は乱世。例え如何なる名門名家であろうと、一寸先は盛者必衰の罷り通る下剋上の世です。そんな世において、女子が必ず心に持っておかねばならない物があります。次郎、分かりますか？」

「ええと、度胸？」

「違います、愛嬌です！」

元春の返答を、婦人は食い気味に訂正した。

「良いですか？女の武器は顔です。口頃から良く手入れをし、化粧を施し、着物を着飾り、最後につこりと愛想を振りまけば、大抵の殿方は皆自然と心を和らげ、気に掛けて下さるようになるもの。そう、乱世の女の役割とは、外で命を懸けて働かれる殿方を、家で存分に癒して差し上げる事なのです！私も嘗ては弘元様に良く尽くし、大変可愛がっていただきましたわ。弘元様とは短い夫婦生活でしたが、弘元様は常に優しく私はとても幸せな日々を…」

「ああ、始まつちまったのお。」

「こうなると中々終わらないわよ。杉様は。」

うつとりと過去話に花を咲かせる婦人、杉の方に姉妹は揃って嘆息する。

毛利両川と杉の方の関係。それを説明するならば、毛利元就の事について話さねばならない。

毛利家の先祖は、あの源頼朝に仕えた政治官僚にして政所の初代別当となった大江弘元であり、その血筋は紛れもない名門中の名門である。

しかし、宝治合戦で大江氏そのものが没落した事を切っ掛けに、毛利家は戦国時代には安芸の小領主にまで落ちぶれていた。

そんな状況下で、元就は毛利家当主毛利弘元の次男として産まれた。物心がついた頃に母を無くすが、その頃はまだ当主の息子として大切に育てられていたと言われている。

しかし父弘元が酒を原因に体を壊し、そのまま亡くなると立場は一転した。跡を継いだ兄の興元は当時従属していた大内氏に付いて京

に上っており、元就は家臣の井上元盛の元で養育されることになったのだが、この元盛という男、元就の事を舐め切っていた。

もともと毛利領では元就の祖父の代から家臣たちの専横が目立ち、内部が腐敗しきっていたのだが、当主不在という事態に至り家臣達は毛利家を支えるどころか、以前にも増して不正に手を染めるようになったのだった。

その挙句に、元盛は元就を城から追い出すという暴挙にまで及んだ。そのため元就は領主の息子でありながら十歳にして城下のあばら屋で生活せねばならなくなり、家臣領民達からは『乞食若殿』と嗤われる羽目となった。

母を失い、父を失い、兄は遠く離れ、頼れる者はいない。元就の幼少期は、そんな孤独と共にあった。

だが、そんな元就に救いの手を差し伸べる者がいた。それが、弘元の側室であった杉の方である。

安芸国と石見の境にある豪族の娘として弘元に嫁いだ杉の方であるが、弘元が死んだ時点で十代半ば。子はおらず、実家からは新しい夫を見繕ってやるから帰ってくるように言われ、他にも元就を追い出した家臣達から妻になるように求められるが、これらを全て拒否した。

「私が生涯愛すると誓ったのは弘元様ただ一人！その弘元様の御子を粗末に扱う者に誰が嫁いでやるものですかっ！」

そう啖呵を切った杉の方は引き留める者の手を振り払い、たった一人で元就の住むあばら屋に移り住むと、幼い元就の面倒を見るようになった。

それまで武家の姫として愛でられる生活をしてきた杉の方は、織物より重い物を持った事の無かった手で田畑を耕し、慣れない手つきで掃除、洗濯、食事の準備を必死に行い、幼い元就を懸命に養育した。

またある時は旅の僧侶が近くに來ていると聞き、元就の手を引いて僧侶の元へ行くと「この方が将来立派な武士に成れるよう、知見を深められる話を聞かせてあげて下さい。」と、地に頭をつけ僅かばかりの銭を差し出すことすらあったという。

そんな杉の方の姿は、当初はあらゆる物を失い荒んでいた元就の心を解きほぐし、やがて実の母のように慕うようになった。

こんな話がある。

ある日、元就が弓の鍛錬を終え帰宅していると、一人の農夫が元就を呼び止めた。

この時の元就の服は穴も開いたヨレヨレの古着であり、領主の息子がそのような服装をしなければならぬ事を哀れんだ農夫は、元就に畑で採れた大根を差し出したのであった。

これを喜んで受け取った元就は、大根を持ち帰ると笑顔で杉の方にこの事を報告した。

すると杉の方は、元就の頬を張り涙ながらに叱責した。

「この愚か者っ！領主たるものが領民の憐れみを受け喜ぶとは何たることですか！あなたが心まで乞食に落ちぶれさせてしまったては、私は天の国におられる弘元様に合わせる顔がありません！」

その言葉に元就はハツとすると、己の浅ましさを恥じ入った。杉の方に謝罪すると、元就は大根を返してこようとする。すると杉の方は元就は止めてこう言った。

「ともあれ、施しではなく献上品として受け取るのであれば何ら問題は御座いませぬ。丁度夕食に一品欲しかったところです。この大根は煮物にしましょう。」

そうしてまな板に大根を置くと、皮を？いて輪切りにしていった。

その姿に唾然とする元就に、杉の方は包丁片手に微笑みを送る。

「要は心の持ちようの問題です。あるいは自分がどう見るか、他人からどう見られるかです。よくよく覚えておきなさい。」

ともかくとして、こうした杉の方の養育は元就の人格形成に大きく影響することになる。

その後、元服した元就は徐々に家臣から実権を取り戻し、毛利家の内情を正常なものに戻していった。

そして様々な思惑と陰謀の末に毛利家の当主となると、毛利家を大いに飛躍させ中国地方にその名を轟かせるようになる。

その過程において元就は安芸国の国人、吉川国経から美伊の方を娶

り妻としてゐるが、美伊の方は隆元、元春、隆景、可愛の四人の子を産んだ後、若くして病没してしまう。そして残された四人の子供たちの養育を受け持ったのが、他ならぬ杉の方である。文字通り、親子二代に渡る育ての母となったのだ。

かくして、杉の方の声望は毛利家中において当主元就に勝るとも劣らぬものとなっている。

本人が政に関わる事を嫌がっているため表舞台に出ることは滅多にないが、元就が最も苦しかった時代を支えた事は家臣のみならず領民達にも知れ、安芸国では知らぬ者が無い程の尊敬を集めている。

元春と隆景も育てて貰った事以上に敬愛の情を抱いているが、ただ一つ姫武将としての働きについては考えが合わなかった。

「弘元様はよく仰いました。杉、お前はよく儂に尽くしてくれて本当にありがたい。家臣達もお前のように尽くしてくれたらどんなに楽か、と。そうした愚痴を聞き、慰めて差し上げたら、それは喜んでいただいで……」

「のお、爺様の話はもう良いんじゃないかのお？」

「あらまつ。私としたことが、ついつい昔話をし過ぎてしまいましたわ。ようするに私が言いたいの、あなた方はいつまでも男の真似事をするのではなく、早く婿を取って子供を産むべきなんです。」

杉の方は、女の幸せは家庭に入る事だと信じて疑わない。

故に元春が戦場に出ることは勿論、隆景が知略を練る事も女子が遣るべきでは無いと強く反対し、二人に対して姫武将を辞めるように何度も諭していた。

或いは、自身が女としての幸せを捨てたからこそ、元就の娘には自分の分まで幸せになって欲しいと願っているのかもしれない。

二人も義理の母とも祖母とも呼べる杉の方を深く慕っているが、これだけではどうしても相容れない。無論、杉の方が自分達の事を思っ言ってくれてるのは理解している。

この時代の女性の平均結婚年齢は十五歳前後。十八を過ぎれば行き遅れと囁かれ、二十を越えれば訳有りの売れ残りと後ろ指を指されるような時代である。

杉の方が娘同然の二人の未来を想い、焦るのも無理はない。

特に最近では、末娘の『可愛』が長年敵対してきた穴戸家との和平の為に嫁いだ事もあり、次はどちらを嫁に出すのかと元就に催促する姿をよく目にする。

「おーい、次郎。つと、ここに居ったか。」

「あつ、親父。」

するとそこに、白髭を蓄えた長身瘦肉の老父が現れた。

この老父こそ、小領主の身から日ノ本屈指の大国へと毛利を成長させ、その謀略によって近隣諸国を震え上がらせた下剋上の体現者、毛利元就その人である。

「次郎よ、幸鶴と何か約束しておったであろう？ 幸鶴がお主がなかなか来ないとぐずっておったぞ。」

そう言う元就の足元では元就の孫である幸鶴丸、後の毛利輝元が玩具の弓を片手にプクーと頬を膨らませていた。

「ああ、そうじゃった。幸鶴の弓を見てやると約束しとるんじやった。すまんのう幸鶴。忘れとった。」

「まったく。たとえ身内が相手であろうと、不義理は家中の不和となるぞ。反省せよ、次郎。それよりも、こんなところに集まって何をしとるんじや。」

「ちようど良いところに来ましたね松寿丸！ 貴方からも良い加減姫武将など辞めろと二人に言って下さいな。少しでも早く本格的な花嫁修行をしなくては、嫁の貰い手が失くなりますよ！」

「…なんだ、またその話か。」

杉の方からの頼みに、元就は珍しくうんざりとした表情を見せる。その態度に杉の方の目尻が上がる。

「なんだじゃありません！ 次郎も徳寿も、大切な姫ですよ！ いつまで戦場なんて危ない場所に行かせるつもりですか!!」

「そうは言うがな、隆元が死んでまだ日が浅い。尼子は滅ぼしたが残党どもは未だ再起を狙っておるし、国衆共も油断ならん。二人の働きは毛利家にとって不可欠じゃ。」

「ですが…」

「何より二人が御家の役に立ちたいとしておるなら、無碍にする訳にもいかぬだろう。」

「そうじゃそうじゃ。こちらは御家の為に戦場に行くんじや!」

「はい。他家に嫁に行くのも、武将として功を挙げるのも、毛利家の為という点では同じです。そこに貴賤はありません。」

説教から抜け出す好機と判断し、元春と隆景は元就の言葉に便乗する。

杉の方も武家の生まれであるが故に、姫武将として元春たちが実績を上げていること自体は認めざるを得ず「ぐぬぬ」と歯噛みする。

しかし、次に元就が発した一言でその様相は一変する。

「だいたい花嫁修業などそんな大した事などせぬのだろう?そんな張り切つてやるもんじやあるまいし、嫁入りが決まってから適当に…」
『ぶちいっ!』

何か引き千切られるかのような幻聴を元就たちは聞いた。

音の出どころに目を剥ければ、無表情になった杉の方がいる。

その時、元就、元春、隆景の心が一つになった。

『あつ、ヤバい。虎の尾踏んだ。』と。

「……………そうですね。御家の外で命がけで戦われている殿方たちからすれば、女房の仕事など大した事の無い些事なんでしょうね。」

「ああ、いや杉、そういう訳では…」

「しかしながら花嫁修業で教えたるは、何も家の諸事だけではありません。御家の世継ぎを作る術、即ち男女の睦言の作法も伝授いたしません。なにしろ、新妻と初めて枕を共にする時になって、怖気づいて寝所から逃げ出す殿方もいるのですから。」

「っ!?!」

杉の方の言葉に、元就は目に見えて狼狽する。

「本当に不憫な事ですわね。心を決め、身を清め、この方の子を産むのだと覚悟したにも拘らず、一人で寝なければ成らなくなった奥方の心を思いますれば。しかも殿方が逃げ出した理由が『恥ずかしくなっ

た』などとまあ女々しき事。普段は外で胸を張られる人ほど、男女の仲では奥手なものなのかもしれないね。そんな奥手な殿方をその気にさせる術も、花嫁修業では教えるのですよ。そう例えば、普段酒を飲まれぬ方の為に料理に……」

「ああそうだなっ!!花嫁修業も大切な事だ!次郎、徳寿、今日は杉に色々教えて貰いなさい!幸鶴、弓の稽古はじいじが見てやろう。ほら、行こう。」

そう言つて孫娘を抱え上げると、元就は逃げるようにその場を後にした。

それを見送り鼻をふんと鳴らした杉の方は、その視線を毛利両川へと向ける。

「さて松寿丸の赦しも出ましたので、二人には今から武家の女房の作法というものを学んでいただきますよ。」

「……なあ、スギ婆。さっきの話、もしかして親父とお袋の……」

「ふふんっ、それはまあ、御想像にお任せいたしますわ。さっ、二人とも此方に。今日は存分に姫とは何たるかを教えて差し上げますわ。」

機嫌よさげに二人に目配せする杉の方に、元春と隆景の二人は諦めて溜息を漏らす他無かった。

中国地方を席卷する大国毛利家。しかしその内情は、意外なほどアツトホームで穏やかであった。

そんな毛利家が織田家と相對するのはもう少し先の話。

そしてその時、毛利両川、特に元春は痛感することになる。

もつと真面目に、杉の方の教えを受けておけば良かったと。

今宵はこれまでに致しとう御座りまする。

眞の合理主義者

秀吉が家名を『羽柴』と改めた丁度その頃、相良良晴は本隊を離れ、近江と伊賀の国境にある近江南部蒲生郡日野城にいた。

ここは観音寺城の防衛網を形成する支城の一つであり、本城陥落後も武装を解いていない数少ない城の一つである。

良晴は信奈に命じられ、日野城の降伏勧告の使者としてこの地を訪れていた。

「分かりました。ではすぐにでも兵達の武装を解かせ、今後は織田家の家臣として信奈様に仕えまする。」

日野城主、蒲生賢秀は良晴の降伏勧告にあっさりと従った。これには良晴も目を丸くする。

「如何なさいましたか？何か不足でも。」

「ああ、いや。思ってたより素直にに応じてくれるんだなって思ってた。」

良晴は降伏勧告をするに当たって、ある程度日野城主である賢秀について調べてきた。

それにより判明したのは、蒲生家が六角家に古くから仕える名家である事。

そして、六角義治等が伊賀に撤退する際には、近くを立ち寄った六角家の一同を歓待し、伊賀との国境付近まで護衛したという事だった。

以上の事から、蒲生家は六角家への忠義が深く、降らせるのは難しいだろうと考えていた良晴にとって、賢秀の対応は拍子抜けする物だった。

「…織田家の方が我らを信用できぬは当然の事。我らは長い事、六角家と縁深くありました。」

良晴の戸惑いを察し、賢秀は落ち着いた口調で語る。

「我が蒲生家は六角家の隆盛を支え、その庇護下で安寧を保ってまいりました。たとえ主家が没落しようと、それに追従するが武家として誇りある形と言えましょう。しかしながら、今の織田様を相手にするのは分が悪すぎます。多くの家臣を持つ身としては、配下とその家族

を路頭に迷わせるのは憊びなく、織田様の慈悲に絶する決断を致しました。この事は旧主にも伝えた次第に御座います。」

「えっ!?降伏するって正直に六角家に話したって事か!!」

驚き叫ぶ良晴に、賢秀は恭しく頷く。

「離反するならば最低限のケジメと思慮する故に。もしそれで斬られるならば、それもまた宿命で御座いましょう。幸い我が旧主は蒲生家積年の功勞を認め、織田様に膝を屈する事を了承して頂きました。おいつ、鶴千代!」

「はいっ!」

賢秀の呼びかけに対し、部屋の外から威勢の良い女兒の声が聞こえる。

襖が開けられ現れたのは、利発そうな顔立ちに才氣の輝きを宿した瞳の十歳前後の少女であった。

「鶴千代、挨拶を。」

「お初に御目にかかりますっ!蒲生賢秀が息、鶴千代に御座いますっ!どうぞよしなに。」

「お、おう。初めまして。」

元気よく礼を取る鶴千代に、良晴はやや困惑気味に返答する。

すると、賢秀の瞳が僅かに細くなった。

「相良様、この愚息を人質として織田様にお預けしたいとお願い申し上げます。どうか。」

「ひ、人質っ!?!いやいや、急に言われても困るって!んな事しなくても信用するから!」

慌てて良晴が断ろうとするが、賢秀は静かに首を振る。

「そうはいきませぬ。我らは元は敵同士。我が蒲生家に至っては墮ち行く六角を見限った薄情者。そう思われても仕方のない立場にあります。然らば少しでも織田家の信用を得られるよう立ち振る舞うは当然の礼儀。旧主家に最低限のケジメを示したならば、新たなる主家に同等以上のケジメを示すが必定と存じ上げます。」

そう一気に語ると、賢秀は手を床に付いて頭を下げた。

その姿に良晴は息を呑んだ。

戦国の世に来てから、良晴はこれまでに様々な人物と接する機会に恵まれた。

されどこれほどまでに義理堅く、誠意ある振る舞いを出来た人間は初めてである。

良晴は自身の心が大きく高鳴るのを感じていた。

「分かった、賢秀さん。あんたの娘、俺が責任もって信奈の元に連れていく。蒲生家の事は決して悪いようにしない。そう信奈に言つてやるぞ。」

「恐悦至極に御座います。我ら蒲生家、誠心誠意織田家に使えます事を誓います。」

頭を下げたまま感謝の言葉を述べる賢秀。

その横では、鶴千代がジツと良晴の表情を伺っていた。

その後、良晴の手引きも有り賢秀は信奈に拝謁した。

信奈は良晴から意見を聞き、蒲生家の所領安堵を約束すると共に、鶴千代を人質として預かる事を了承する。

斯くして、蒲生家は織田家傘下に納まり、織田信奈による近江制圧は完遂したのであった。

その日の晩、良晴は秀吉の陣を訪れ、小さな祝宴を行っていた。

「どうなる事かと思っただけど、賢秀さんが織田に付いてくれて本当に良かった。あんな義理堅い戦国武将、俺初めて見たぜ！」

「ほう。良晴には蒲生殿が義理堅い武将に見えたか。まあ、そう見えるのも無理はないかのう。」

賢秀の人柄を褒める良晴に対し、秀吉は苦笑いを浮かべつつ酒を煽る。

その様子に良晴は引つかかる物を覚え眉を顰める。

「何だよ秀吉さん。何か気になる事でもあるのか？」

「…良晴よ。これはあくまでも儂の印象ではあるが、蒲生賢秀殿は相当計算高い御仁であるぞ。」

「えっ!?、どうして?」

思わぬ物言いに良晴が驚き秀吉に顔を近づけると、秀吉は周囲を見

渡し人がいない事を確認すると、良晴の耳元に口を寄せた。

「お主は今日、日野城まで行ってきたそうだな。どのような城であった？」

「えーとそうだな。俺から見ても相当険しい場所にある城だなと思っただな。攻め落とそうとするとかなり難しそうだったぜ。」

「そうじゃな。儂であつてもあの城を落とすのは容易ではない。しかも守るのは数多くの戦を経験しておる蒲生家の精鋭共じゃ。六角の小僧共とは訳が違う。仮に奴らが本気で守りを固めたら数か月の長期戦を覚悟せねばならぬじゃろう。」

「マジかよ…ん？なあ、秀吉さん。何か月も足止めされていたとするなら、その間に六角の奴らが伊賀で態勢を立て直す事も…」

「十分可能じゃ。それに気付いたなら、何を以て儂が賢秀を計算高い御仁と言うか解るじゃろ。」

「……………」

もし本当に蒲生賢秀に六角家への忠義があれば、死力を尽くして織田に徹底抗戦し、六角が再起する時間を稼ぐ事も出来た筈。

それをせずに織田に降つた理由は…

「自分達を高く売るため…」

「そういう事じゃろ。まあ勿論、領地や領民にいらぬ被害を与えぬ為というのもあるが、六角に対する忠義というのは微妙じゃのう。」

「で、でも!!賢秀さんは六角家にケジメを着けてから降つてくれたんだぜ!下手すりゃ殺されてもおかしくない状況だったのに!」

「そんなもん、最初から殺される心配が無かったからに決まつてるじゃろ。」

「なっ!?!」

「考えてもみよ。六角家は織田家に敗れ、伊賀の地で再起を掛けねばならぬ。そうなると当然、現地の者達の協力は不可欠じゃ。だがもしそこで、長年の功労者である蒲生家を直前に処断したと知られればどうなる?」

そんなことに成れば現地民が六角家を警戒するのは目に見えてい

さらに言えば、賢秀は六角義治を城に招き入れ歓待した。

「国を失った領主に対してこれほどまでに誠意を示したのじゃ。これを斬れば間違いなく悪評となる。そしてその悪評は、再起を願う六角家にとっては致命的じゃ。」

だからこそ六角家は蒲生家の離反をみすみす見逃さねばならない、と秀吉は言う。

「…どうしてそんな回りくどい事を？」

「決まつとるじゃろ。落ち目の主君を見限つて新進気鋭の主君に鞍替えした不忠儀者という誹りを受けぬ為じゃ。そうしたほうが織田に移つてからも風当たりが良いからのう。我が子を進んで人質に出したのもその一環じゃな。全ては信奈様に気に入られ、蒲生家の立ち位置を良くするための事よ。」

秀吉が語る事は決して予測不能なことでは無い。

蒲生家を取り巻く環境や、彼らの行動を俯瞰的に見れば容易に思い至る事が出来る。

実際に信奈も蒲生家の思惑には勘付きつつも、織田家にとってデメリットが無かったので彼らを身内に引き込んだのだ。

しかしながら、秀吉から説明を受けた良晴は思いつめた表情で俯いている。

それを気付いた秀吉は、不意に表情を消すと真剣な面持ちで良晴を見据えた。

「…良晴よ。御主いま、『信じたのに裏切られた』気になっておるな？」

「えっ!? そ、そりゃあまあ…少し…」

「…別に蒲生殿は御主を騙そうとしていた訳では無いと思うが、その上で一つ御主に教えておこう。『信じる』という行為は『未確定な事を決めつける行い』じゃ。嫌な言い方をすれば『良く分からない事を自分にとって都合の良い方に解釈する事』とも言える。」

「自分にとって都合の良い方…」

『勝てるか分からないけど、仲間たちを信じる』

『どういう意図があるか分からないが、主君が命じた事だから信じて行うのみ』

『長年の付き合いがあるから、信じてお金を貸す』

『実際に見た事は無いけど、神の存在を信じている』

一概にすべて同様とは言えないが、『信じる』という行為は自分にとって都合の良い方向、そうであった方が自分にとって『気持ちの良い結果』になつて欲しいという個人の願望や感情があるのだと、秀吉は良晴に説いた。

「無論人の本音など他人には分らぬ物。それを全て疑つておつたら人間関係は勿論、組織にも支障が出る。故に人々は『信用』と『信頼』を積み重ね、その上に相手を『信じる』事で営みを構築しておる。つまり人の営みから『信じる』事は切り離せぬ。じゃがのう…」

秀吉は声を低くし、剣呑な視線を良晴に送った。

「世の中には『信じていたのに裏切られた』では済まされぬ話が往々に有るぞ。自分が信じた事ばかりを信じ、信じたくない現実から目を逸らした挙句、家どころか国すら亡ぼした愚か者の話は山ほど有る。だからこそ相応の立場にある人間は、現状を把握し、物事の正誤を見極め、正しく『判断』するよう努めねばならぬ。でなければ、死ななくて良い者を殺すことになる。」

そう言う秀吉は良晴に近づき、その肩に手を置いた。

良晴は動くことが出来ない。

「良晴、御主はもう家来を持つ身だ。『信じる』だけでは足らぬぞ。」

肩にかかる手がやたら重く感じた。

伊賀方面の安全を確保した織田軍は、いよいよ上洛の最終段階へと到達した。

途中、大和国にて三好軍の強襲を受けるも、事前に得た情報から襲撃を予測していた織田軍はこれを迎撃。三好軍に大きな被害を与える事に成功した。

これ以降、三好軍は組織的な反抗行が叶わず、散発的な抵抗は

行方もその度に織田軍に蹴散らされ、最終的に都からも撤退した。

そして遂に、織田軍は敵影無き京の都へと進軍。

京に住む者達に今川義元の上洛を高らかに示したのであった。

そうして京の街中を行く軍列の中に良晴の姿もあった。

一応は配下を引き連れた将という立場もあり馬に乗って参列しているが、背中を丸め妙に縮こまっている。

その顔は気落ちした様子を隠すことが出来ず、時折思い出したかのように口からは溜め息が漏れていた。

「主殿、もう少し顔を上げて下さいませ。京の民に見られておりますぞ。」

「ん？ああ、すまねえ重然。ちよつと考え事しててな。」

しよぼくれた様子の主君を見かねた古田重然が注言すると、良晴は言われるがままに顔を上げる。

その様子に重然は小さく嘆息する。

「主殿、羽柴様の小言を気にするのは解りますが、いい加減切り替えなさいませ。そんないつまでも引きずるものではありませんぞ。」

「そうは言うけどさ、なんか自分ってまだまだ甘かったんだなあ、つて思うとさ。家来を持つ身になって浮かれてたんだろな。」

こんな調子では平和な国を作るなどと、ただの夢に終わってしまう。

そのような思いが良晴の心に押し掛かり、なかなか背筋を伸ばせずにいた。

そんな主君に、重然は呆れたような表情を向ける。

「主殿がどれだけの高みを目指されているかは分かりかねますが、普通の人間は出世すれば浮かれるものでございましょう。それに木下様：ではなかった。羽柴様も蒲生家を味方に付けた事は間違いとは言っておらぬのです。要は物事の裏にまで気を回せと言っておられるのでございましょう。」

「ん？まあ、確かにそういう事なんだろうけど。」

「はい。主殿は少々お人がよろし過ぎる所があります。羽柴様はそれを心配しているのではないでしょうか？取り敢えずは、物事の状

況というのを見極める事に尽力されては如何でしょう。一つ意識を
変えるだけでも、物事の見え方は大きく変わるといふものです。」

「…そうだな。よっし！いつまでも落ち込んでても仕方がないし、切
り替えていくか！って、思うは良いけど…」

スツキリとした表情で顔を上げた良晴だったが、周囲を見渡すと再
び表情を曇らせた。

「京の都が荒れてるとは聞いてたけど、まさかここまでとはな。」

「…ええ。これならば美濃の裏路地の方が幾分かマシですなあ。」

応仁の乱から始まった戦乱の日々は、日ノ本の政の中心であるはず
の京の都に深い爪痕を残している。

直近でも三好家と将軍家の戦で多くの家屋が焼け落ち、道端には浮
浪者が溢れかえっていた。

更にその奥の裏路地の方へと目を向ければ、野良犬が人間の腕のよ
うな物を啜えている。

その光景に良晴は顔を顰める。

戦国の世に来てから、良晴も少なからず人の死というものに触れ、
ある程度耐性というものも出来てきた。

比較的豊かな清州の町でさえ少し裏路地に入れば打ち捨てられた
浮浪者など多少はあるし、城の前に打ち首にされた重罪人の首が並べ
られているのも珍しくない。

戦に出ればそこかしこから断末魔の悲鳴は聞こえるし、死んだ方が
マシというような状況になっても息のある重傷者を目にした事も一
度や二度では無い。

そうした経験を経て、良くも悪くも人の死に慣れた良晴であった
が、京の街に蔓延する死の雰囲気は此れまでに経験した物とは少し
違っていた。

「生きた目をしている奴がいねえ。どいつもこいつも俯いていやが
る。」

「そうですね。応仁の乱から始まりし争乱。その全てはこの京の都
から起こり、そして常に中心であり続けた。百年あまりその状況が続
けば、あのような顔になるのも仕方ありませんなあ。」

「…先ずは手の届く範囲から、少しずつ変えていくのが肝心か。」

荒廃した都の姿を目に焼き付けた良晴は、己の野望を胸にしつつ改めて日ノ本を変える決意を固めるのであった。

都に到着した信奈達は、洛中上京にある妙覚寺という寺に宿泊した。

妙覚寺はかつて僧籍であった斎藤道三が修行した寺であり、住職の十九世日蝕は道三の息子であり信奈にとっては義兄にあたる人物であった。

後に信奈は生涯二十回以上に渡って京に滞在するが、その殆どで妙覚寺に宿泊しており大変この寺を気に入っていた事が窺える。

無論、最終的には七万にまで膨れ上がった大軍を一ヶ所に集めるのは不可能なため、部隊ごとに別の滞在先に分かれている。

そうして滞在先にて荷解きをした翌日、早速信奈達の元を訪ねて来る人物がいた。

「おこしやす。この度はよう来なはったなあ。公家を代表して義元はん、ほいで信奈はんを歓迎いたしますわあ。」

どこか気安さを感じる京言葉で話すのは、御所における財政の長である内蔵頭を務める山科言継である。

公卿でありながら各地の大名と交友を結び、逼迫した御所財政の建て直しを計った過程で織田家とも関わりのある言継は、このたび姫巫女直々に御所と織田家との接具役を任されていた。

「おほほほ！お久しぶりですわね言継さん。叔父上様と叔母上様は元気ですか？」

「ええ、おかげさまで。二人とも楽隠居を楽しんでいますわ。」

言継の義母と義元の母は姉妹であり、言継と義元は血の繋がらない従兄弟同士である。

その縁もあってか、二人の関係性も非常に和やかなものであった。「ところで義元はん、なんでも征夷大將軍の役職を継ぐおつもりと聞

いとるんやけど、ほんまどすか？」

「その通りですわ！ 混迷する京の都をまとめ上げ、日ノ本の政を正道に戻す。その為に私達は上洛したのです！」

「…せやなあ。義輝はんが三好はんはんに日ノ本を追い出されてから、都は荒廃する一方どす。なんや三好はんから推されて義栄はんはんに將軍になつてもらつたんやけど、病にかかったとかで淡路島を出られへんと。」

「あら、それは大変ですわね。日ノ本の武士をまとめ上げるべき將軍が、日ノ本の中心たる都にいないというのは。」

「ええ。おまけに三好はんは三好はんで身内同士で喧嘩しとるし、もうどうしようもあらしまへん。うちら公卿も懐が寂しうあまり塩すら切り詰めて、この薄味が都流のはんなりとした味付けどす、つて見得を張るくらいしか出来やしまへん。」

言繼の軽口に義元も口元を扇子で隠し笑い声をあげる。

すると、義元の横からゴホンと咳払いがする者がいた。信奈である。

「雑談も良いけど、そろそろ本題に入りましょう。言繼、義元様が將軍に就任する障害は義栄の存在くらいなの？」

「…ええ。ただその義栄はんも、思いのほか病が重いらしゆうて。なんでも、既に今日明日の命やら。」

相変わらずこの娘は堪え性があらへんなあ。一応義元はんの事は立ててるけど、うちへの敬称は忘れてるし。

内心そのような事を考えつつも、言繼は信奈に返す。

「そう。だつたら話が早いわ。義栄が死んだら速やかに義元へ將軍宣下が出来るように取り計らつて。」

「…そらかまへんけど、義元はんは足利姓を継がれるおつもりどすか？」

「そうよ。駿河足利家は既に今川氏真が継いで以上、義元様には足利家に養子入りして足利義元と名乗ってもらうわ。細かい調整は私の家臣である村井貞勝を通じて行うけど。」

そういうと、信奈の近に並んで座っていた貞勝が小さく頭を下げ

る。

それを視界の端で捉えた言継は、口元に小さく笑みを浮かべた。「なるほど。あんたらは現行の幕府を存続させる方向で考えてつたら？」

「ええ。幕府を潰すなんて、日ノ本中の武家を敵に回す馬鹿はしないわ。」

信奈と言継、二人の視線が強く交わる。

時間にしてわずか数秒。しかし、見ている者達にとっては時間の流れを忘れさせる濃密で重い数秒であった。

「……………」

「……………」

「…まあ、ええやろう。都の安定、それが姫巫女様とうちらが第一に望む事です。それが可能であるやったら、義元はんは勿論、信奈はんにも是非お力を貸して欲しおすさかい。」

「まかせなさい。すぐにでも兵を放ち、都に掬う不逞な輩を取り締まってやるわ。あんた達公家が安心して生活が出来るようにね。」

「そら頼もしい。よろしゅうおたのもうします。」

どこか含みを持たせた会話であったが、こうして信奈達は都の有力公家の協力を取り付けるに至ったのであった。

これにより、義元の將軍就任へ大きく前進する事になり、信奈自身も公家社会に対しての影響力を得るに至った。

「そうや。信奈はんに会いたい言う人がおったさかい連れて来たんや。会うてくれる?」

「私に?…いったい誰よ?」

信奈がそう問いかけると、言継は入口の障子に向かって目配せする。

そうして障子が開き奥から現れたのは、黒く長い髪を後ろに流し、白く輝く額を顕にした聡明なる瞳を宿した少女だった。

奇麗な姿勢で正座をするその少女が誰なのかを察した者達は、みんな目を丸くした。

「…お久しぶりです。信奈様。」

「十兵衛っ!?!あんた京に来てたの!!」

その少女は、かつて斎藤道三の薫陶を受け美濃斎藤家に仕え、長良川の合戦で道三の救出に信奈達と協力した美濃国人、明智十兵衛光秀であった。

「はい。織田家の方々のご配慮により一族一同越前へと逃れる事が出来ましたが、諸事情により役目を辞し、都へと流れ着いた次第です。信奈様に置かれましては、折角の御厚意を無碍にした事を伏してお詫び申し上げます。」

「それくらいいいわよ。それよりも十兵衛、あんた今どこかに仕えてるの?。」

「はい。現在は食客の立場で長岡藤孝様の元にいます。藤孝様は管領細川京兆家に連なる御方。都の現状を憂い、政を正道に戻す事を願う義元様に同調しています。然らば、織田家と縁のあるこの明智十兵衛を使いとし、義元様並びに信奈様に助力したいと願う次第に御座います。」

「デ、アルカ。」

光秀の話聞いた信奈は、暫し思案するように瞼を閉じる。

そして静かに目を開くと、広間の外に座る光秀の元まで歩いて行き視線を交わした。

「…少し、寝れたかしら。」

「…僅かばかり、難儀を致しました。」

「そう。苦労したようね。十兵衛、あんたに聞きたい事があるわ。此れより天下を一つにまとめ上げる上で、私に足りないものがあれば言ってみなさい。」

「信奈様に、足りないものですか?」

「そうよ。遠慮は必要ないわ。あんたの思うがままを、私の欠点を言いなさい。」

十兵衛を試す物言いにより、場に緊張感が流れる。

その中心にある光秀は、信奈から目を離さずに唾を飲み込むと、息を一つ吐き口を開いた。

「僭越ながら、信奈様は常日頃『自分は合理主義者である』と称される

とお聞きします。」

「ん？そうね。私は普段から合理的に物事を行うのが大事だと思ってるし、そのように振る舞っているわよ。」

「…真の合理主義者は、合理主義者じみた振る舞いはいたしません。」その瞬間、周囲の人間は部屋の温度が一気に下がったように感じた。

「合理的とは、情に流されず、理に基づいて物事を行い、時として人を物として扱う事も厭わぬ冷徹さを必要とします。されどそれは、行つた者の人間味を失わせ、周囲の人間に警戒心と猜疑心を芽生えさせます。その行きつく先は、高転びです。」

「……………」

「…真に合理的である者は、完璧で冷徹でありながらも人の前では豪快かつ気前よく振舞い、笑って済まされる欠点を敢えて曝け出し、いざと成れば頼りがいのある人物であると周囲に思わせ、多少の失敗をしても許される雰囲気を作り出せる人物。即ち、合理的に配下を統制しやすい人物像を計算して演じることの出来る者です。」

光秀は瞳がギラリと光り、その視線が信奈を射抜く。

「合理主義者を名乗る者は合理主義者に非ず。ただの合理主義者気取りです。」

明らかに侮蔑を含んだ光秀の物言いにざわめきが生まれる。

しかし、

「…くくく、あははははははっ！言うじゃにゃーか十兵衛っ！！やっぱおみゃー面白いわっ！！」

信奈は屈みこむと光秀の額に己の額を付けるようにして視線を合わせる、獲物を前にした時の様な凄惨な笑みを浮かべた。

「長岡藤孝に言つときゃあ。助力の件、あい仕った。なお取次には必ず十兵衛を使わせるように、と。」

「わ、私をですか？」

「そうだぎゃあ!!おみゃーは私が存分に使つてあげるでよ。」

上機嫌な様子で光秀にそう告げると、信奈は軽い足取りで自分の席に戻って行つた。

そんな主君の様子に呆気にとられる家臣団の中で、秀吉は苦々しい表情を浮かべていた。

その横にいる良晴は、秀吉と光秀の交互に目を向けながら思っていた。

光秀の語る真の合理主義者。

それはまるで、現代に伝わる秀吉の人物像のようであったと。

今宵はこれまでに致しとう御座ります。